に影響する所が多く、「代匠記」を生み出す一の契機ともなつた所にある。「代匠記」の初稿本を見ると本書の影響の跡を著しく見られるのである。契沖のみならず、荷田春滿の「萬葉僻案抄」（別項）にも影響してゐる。

【參考】萬葉集管見 武田祐吉（長流全集）〇下河邊長流の萬葉集管見 橋本進吉（國學院雜誌一八ノ五・六）〇萬葉集管見と萬葉僻案抄との關係 大石新（國語と國文學四ノ一）　〔久松〕

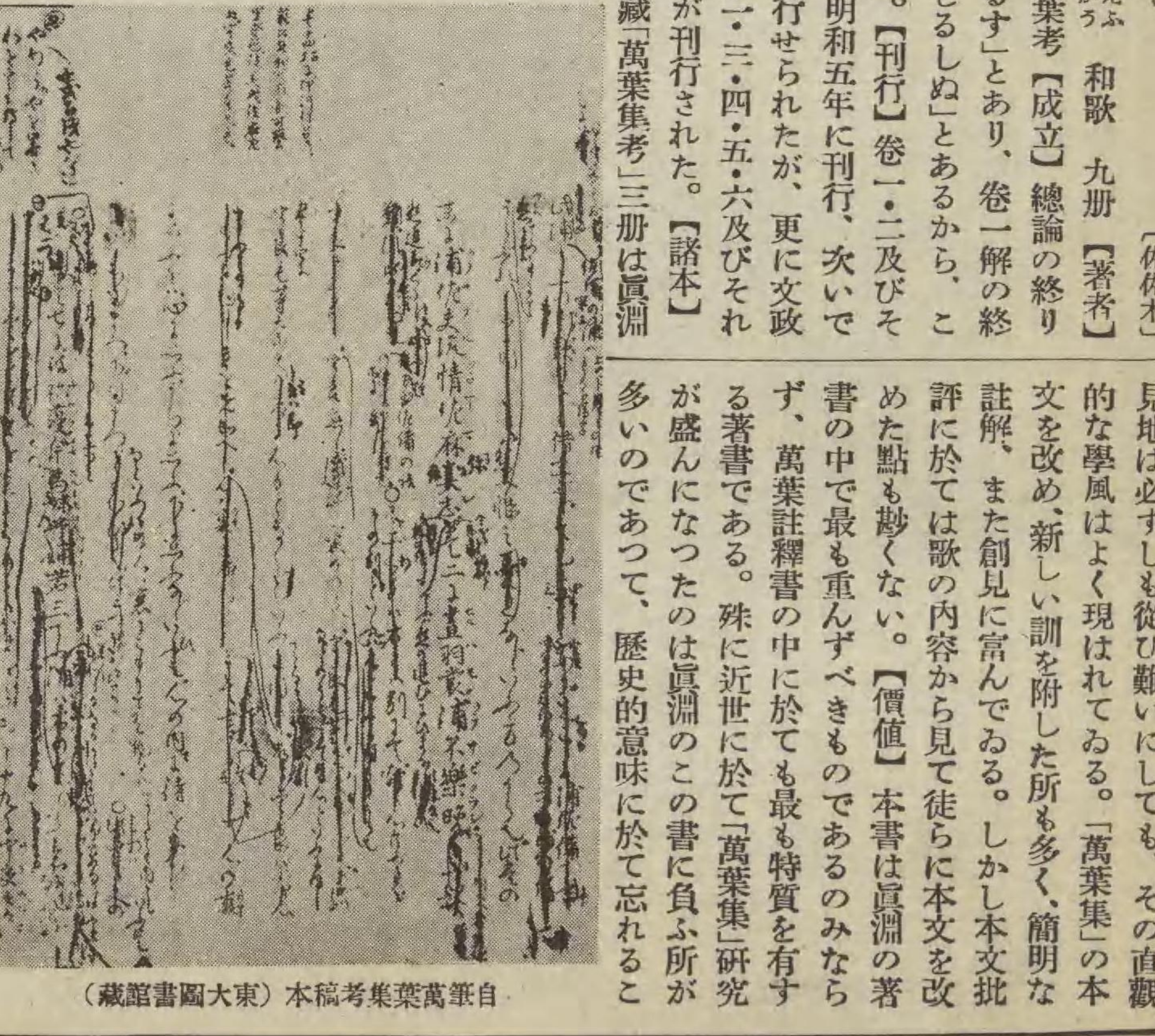
萬葉集捃解 まんえふしふきんかい　和歌　一冊　寫　【著者】香川景樹【成立】文政二年以前、恐らく文化の末に作られたであらう。本書と景樹の「柿本朝臣人麻呂歌師説」（文政二年夏成）とを比較すると、「人麻呂歌師説」より前になつたことが分る。【諸本】松波家藏本と、その傳寫本である井上通泰氏藏本及び竹柏園所藏の景樹の門人の寫した本とがあるが、松波家本は表紙には「萬葉集愚案自一四之上迄」とあり、松波遊山がその藏本の袋に、「萬葉集捃解未全故憚他見」と書いてゐる。【内容】本書は、「萬葉集」の卷一から卷四の「世間之女爾思有者」の歌に至る難歌難句を抄出して解釋したものであるが、景樹は歌人として調を重んじただけあつて、歌の格調の上から卓説を出した點が所々見える。「捃解」に「如此許戀乍不有者」の「あらずは」を「アランヨリハ」と解した宣長の説を否定し、「コハ戀ツ、アラス、高山ノト云ハカリノ詞ニテ、者ハ例ノ輕ク見ルノ也」とした如き、その理由を擧げてはないが、歌全體をよく味はつた上で立てた卓説とする事が出來る。しかしこの説は、直好云とあつて景樹自身も「コノ不有者ノ詞ヲアランヨリハト云言也ト云ルハアラス、サテハ不ノ字ノ意聞エス」と言つてゐるが、恐らく直好の説によつてであらうと思はれる。しかしこの外に、景樹自身の説で調の上から解した説は多く、たとへば、「由久遊久登戀痛吾弟云々」に對して「コレヲ戀タキトヨムハ、ユクユクトトアルニ詞ヨカラス。ナホ戀タムトヨムベシ」とある如き、調の上から來たのである。景樹の説の悉くがすべて是であるとは言はれないけれども、格調を基礎として一首の歌全體から見た態度は、十分注意すべき價値がある。なほ本書には直好の説を多く引き、また眞淵・宣長・久老、及び關谷潜・木下幸文等の説をも引用してゐる。景樹は眞淵とは種々の點に於て反對の意見をもつてゐたが、訓の上では眞淵の説に從つてゐる所もある。【價値】要するに、本書は零細なものであつて、萬葉註釋史上に特に優れたものといふ事は出來ず、景樹の著書の中でも「古今集正義」の如きに比べれば、重んずることは出來ないが、調を重んじた歌人及び歌論家として「萬葉集」の歌に向つても獨特の方法を以て註釋を試みたことを認めるべきである。

【參考】萬葉集註釋書の研究（校本萬葉集首卷下）　〔久松〕

萬葉集訓義辨證 まんえふしふくんぎべんしよう　研究書　二卷一冊【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【解説】萬葉三辨證の一。安政二年二月の自序及び凡例がある。集中の用字の疑はしきものに就き、和漢の典籍によつてその文字の訓義を論じ、從來の諸説の誤れる事、説き洩らした事を證したるもの、又正字・俗字・略字等の別に論及した所がある。用字の校異を諸寫本によつて示した。上卷は丈夫（ますらを）より斑（まだら）に至る四十四項、下卷は決（かけ）より榜・棹・梶の字の訓に至る五十四項及び榛字訓義附説を收めた。　〔佐佐木〕

萬葉集考 まんえふしふかう　和歌　九冊【著者】賀茂眞淵【別名】萬葉考【成立】總論の終りに「寶曆十年七月しるす」とあり、卷一解の終りに「寶曆十年三月しるしぬ」とあるから、この頃成つたのである。【刊行】卷一・二及びその別記合せて三冊は明和五年に刊行、次いで同年になつて求板梓行せられたが、更に文政七年になつて卷一・二・三・四・五・六及びそれ等の別記合して九冊が刊行された。【諸本】東京帝國大學圖書館藏「萬葉集考」三冊は眞淵自筆で總論一冊、卷一の註釋一冊、別記一冊から成つてゐたが今は燒失した。外にも、「萬葉集考」の一部分の眞淵自筆本が藏せられてゐる。刊本には明和刊本（一・二及び別記）と文政刊本（一より六まで）とがある。六卷以外の十四卷は眞淵の草稿に門人の狛諸成が手を入れたものであらうが、寫本として傳へられてゐる。眞淵全集本は諸成本の十四卷を併せて二十卷として收めてある。【内容】總論に於て「萬葉集」の文學批評的研究をなし、「萬葉集」の時代を歌の發達の上から五期に分ち、それぞれの特質を述べてゐる。人麿・赤人・憶良・旅人・家持等の批評も簡にして要を盡してゐる。本文は現在の「萬葉集」二十卷のうち卷一・二・十一・十二・十三・十四を古い部分とし、この六卷を撰んで註釋を施したのである。この大膽な本文批評の見地は必ずしも從ひ難いにしても、その直觀的な學風はよく現はれてゐる。「萬葉集」の本文を改め、新しい訓を附した所も多く、簡明な註解、また創見に富んでゐる。しかし本文批評に於ては歌の内容から見て徒らに本文を改めた點も尠くない。【價値】本書は眞淵の著書の中で最も重んずべきものであるのみならず、萬葉註釋書の中に於ても最も特質を有する著書である。殊に近世に於て「萬葉集」研究が盛んになつたのは眞淵のこの書に負ふ所が多いのであつて、歷史的意味に於て忘れることが出來ない。さうして總論は近世に於ける最も優れた「萬葉集」の批評であらう。　〔久松〕

【參考】校本萬葉集首卷下〇萬葉考の書史學的考察 彌富破摩雄（國語國文の研究、昭和四ノ四）



自筆萬葉集考稿本（東大圖書館藏）

萬葉集講義 まんえふしふかうぎ　註釋書【著者】山田孝雄【刊行】昭和三年第一卷、昭和七年第二卷刊、以下續刊の豫定。【成立】大正十年四月、故萩之家門下の山本まち子氏の懇請により、萩之家同人のために「萬葉集」卷一より講じ始め、卷二の半ばに至つて講義一時絶え、大正十二年の大震災によつて全く絶えてしま

つた。然るに大正十二年に著者は東北帝大で「萬葉」を講ずる事となり、この兩者の講義をとりまとめて出版したもの。【内容】「萬葉集」卷一・二の詳細な註釋書である。卷三以下續刊の筈である。全體の組織は、最初に「卷第一卷第二の通説」として、「萬葉集」の卷一及び卷二の性質を解説してゐる。次に註釋の部がある。註釋の部は、最初に原文をあげ、その歌

居る事を示す。その結果、既決語・未決語の境界線をはつきりと引くことが出來る。この界線を引くことが、今後の研究の出發點となるものであると云ふ意見で、これは、從來の學者の何人も未だ考へ及ばなかつた重要な試みである。　〔森本〕

萬葉集攷證 まんえふしふかうしよう　註釋書　十五册【著者】岸本由豆流【成立】文政十一年。

し、その依據を明かにしてゐる。他の説を何の書によるとも記さずして、自説の如く述べてゐる書が多い中にあつて、本書のこの態度は、前人に對して忠實であると共に、讀者や研究者に對して親切である。またその新説は概ね妥當且つ明快で、取るべき説多く、而も人の氣のつかない卓拔な説も見える。すべて自説を建てるにも、多く例證を引いて述べる

二年四月二十二日迄に二十卷の再考を終り、それからまた七八年を隔てて天保十年に重案を加へた事が分る。而して卷二・十三上・十四下の如きは、その翌天保十一年に更に改寫し校合を加へたものであらう。又總考は本文を改寫し再考を終つた後、天保六年五月に起筆して同月中に終へ、天保九年に再考を加へて居り、又天保十一年に再案を終つてゐる。雅

つた。然るに大正十二年に著者は東北帝大で「萬葉」を講ずる事となり、この兩者の講義をとりまとめて出版したもの。【内容】「萬葉集」巻一・二の詳細な註釋書である。巻三以下續刊の筈である。全體の組織は、最初に「巻第一巻第二の通説」として、「萬葉集」の巻一及び巻二の性質を解説してゐる。次に註釋の部がある。註釋の部は、最初に原文をあげ、その歌の題詞作者を解説し、次にその歌の語釋、最後に、「一首の大意」としてその歌の鑑賞評言の類を記してある。以上が本文である。最後に附錄として「萬葉問題集巻一」及び「索引」を附してある。前者は未だ何人も試みなかつた所で、「萬葉集」巻一中、未だ定解の立つてゐない五十二語を拔き出し、私解のあるものはその私解を記してある。【價値】「萬葉集」二十巻中、巻一・二は註釋研究の書が最も多い。その類書中本書は最も正確な書である。これは一つは著者の博識が自然に本書の註解を正確な信頼すべきものたらしめたによるが、一つには著者の態度が確實な證憑のあるものでなければ説を立てない。然らざるものは其附錄の問題集の中に擧げて未解語として扱ひ、確定未定の界をはつきり區切つて解説してあるのによる。第二に、語句の解釋が的確で詳しい。これは、文法國語の學者たる著者の特色がここに發揮された結果である。第三に、引用する證例が該博である。和漢の書から廣く求め、殊に本邦の書では、「新撰字鏡」「類聚名義抄」の如き稀書の活用が目に立つ。第四に、巻一附錄の問題集である。こゝに未定解の五十二語を擧げた著者の意向は、この未解決の語をすべて集め擧げておく事によつて、遂にこれ以外の語は、本書中にすべて解明せられ居る事を示す。その結果、既決語・未決語の境界線をはつきりと引くことが出來る。この界線を引くことが、今後の研究の出發點となるものであると云ふ意見で、これは、從來の學者の何人も未だ考へ及ばなかつた重要な試みである。〔森本〕

萬葉集攷證（まんえふしふかうしよう）　註釋書　十五册【著者】岸本由豆流【成立】文政十一年。巻一の註解二册を初め、文政六年十月十九日より筆を取り始めて以來、巻六の註解二册を文政十一年十月十二日に完成。その間火災に二度類燒し、また家の新築、「萬葉集類字」（後出）の編纂、その他人事關係で筆を休めた期間があつて、五年を費して六巻十五册が出來上つたが、それ以後の續稿はない。【諸本】稿本は帝國圖書館に藏せられる。傳本尠く岩崎文庫に木村正辭博士舊藏本がある。萬葉集叢書第五輯に七册に收めて刊行。【内容】初めに部類分・題詞を記し、割註式に註解を附し、訓の必要なるものには、右傍に片假字で訓を附し、本文は歌詞を一句毎に出して、割註の形式で註釋を施した。その形式は「萬葉考」に似てゐる。從來の諸説を多くあげてこれを批判檢討し、その據るべきものは何の註釋書に從ふべきかを言ひ、また自家の新説をも出してゐる。その新説には注意すべきものや從ふべき説が多い。諸説の引用は精確で、その批評にも見るべきものがある。引用書には、「萬葉考」「代匠記」「略解」の説多く、春滿の「僻案抄」や宣長の説も所々にあげてゐる。【價値】本書は江戸時代に作られた註釋書のうち、最も優れたものの一つである。從來の説を引用してこれを批評したる如き、ただ舊説の列擧に止まらず、一家の見識を以てこれを取捨選擇し、その依據を明かにしてゐる。他の説を何の書によるとも記さずして、自説の如く述べてゐる書が多い中にあつて、本書のこの態度は、前人に對して忠實であると共に、讀者や研究者に對して親切である。またその新説は概ね妥當且つ明快で、取るべき説多く、而も人の氣のつかない卓拔な説も見える。すべて自説を建てるにも、多く例證を引いて述べるところ、よくその考證的態度が現はれてゐる。かうして全巻の註釋を終へたならば、その價値は「古義」以上で、比類の少い良書が出來上つたであらうが、中途で終つてゐるのは遺憾である。木村正辭博士の「萬葉集美夫君志」（別項）は、本書に學んだ所が多い。以てその價値を觀るべきである。

【附記】「萬葉集類語」二十九册、松井簡治博士所藏。考證巻四上の奥書に、「三の巻を考證しをはりつる文政八年九月九日をきのふといふ日より、本集一部を類字することにかゝりてしばらく筆を置つるが、ことし文政九年八月朔日に類字終りつれば云々」と見える類字はこの書であらう。歌句を五十音順に分つて巻數丁數を示したもの。由豆流の著書には考證と名づける註釋書と共に、類字索引の書が他にもあつて、その學風の一斑がこの點にも窺はれる。

【參考】校本萬葉集首巻（諸本輯影）　〔佐佐木〕

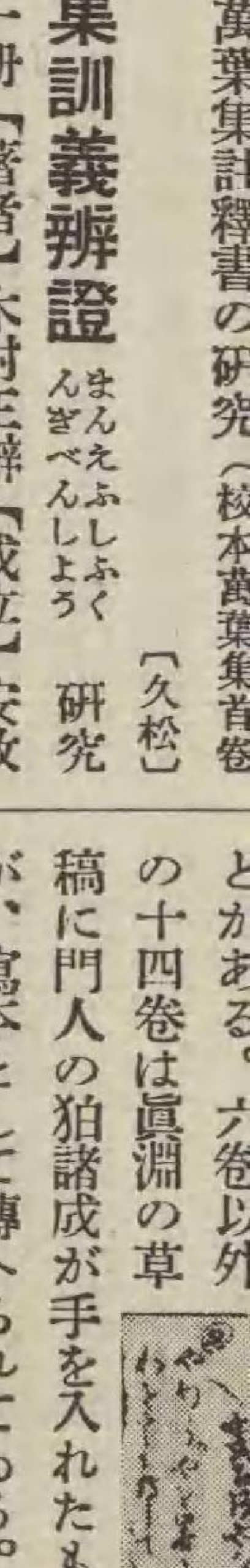
萬葉集古義（まんえふしふこぎ）　註釋書　百四十一册【著者】鹿持雅澄【成立】稿本の奥書によると、本文の解釋は文政十年より數年前に終つてその後改訂を加へ、文政十年から改寫を始め、文政十一年（戊子）の六月十七日には全部を改寫し、更に文政十三年二月より以前恐らくは文政十二年より再考にかゝり、天保二年四月二十二日迄に二十巻の再考を終り、それからまた七八年を隔てて天保十年に重案を加へた事が分る。而して巻二・十三上・十四下の如きは、その翌天保十一年に更に改寫し校合を加へたものであらう。又總考は本文を改寫し再考を終つた後、天保六年五月に起筆して同月中に終へ、天保九年に再考を加へて居り、又天保十一年に再案を終つてゐる。雅澄は安政五年六十八歳で歿してゐるから文政十一年は三十八歳で、天保十一年は五十歳である。故に雅澄が「萬葉集」の本文の解釋を一通り終つたのは三十七歳（文政十年）前であり、三十八歳（文政十一年）の時までに改寫し、四十一歳（天保二年）の時再考を終り、總考を四十五歳（天保六年）の頃稿し、五十歳（天保十一年）の頃本文の全部もしくは一部分を更に改寫し、又總考の再案を終つたと思はれる。而してその後もなほ改訂を加へていつたのである。更に本文の註釋及び總論の外の巻で成立年月の明かなものを見ると、「品物解」は文政六年から七年にかけて初稿を終り、文政十年に再稿してゐる。「枕詞解」は文政五年三十二歳の時に成り、「萬葉集名處考」（一名坐知佳境）は天保十二年辛丑六月八日、「坐知佳境附錄」は天保十二年辛丑九月二十六日、「萬葉集名所國分」は天保十三年壬寅七月二十三日に成つてゐる。また萬葉辭書ともいふべき「古言譯通」は天保四年癸巳六月六日の序と天保八年丁酉八月十四日の跋があるから、この間に出來たものであらう。かくて「萬葉集古義」の註釋を初めとしてその他「古義」に附屬する「萬葉集」研究書の成稿年月の分つてゐるものを見ると、天保十三年（五十一歳）の頃までには成つてゐたやうである。即ち五十歳までに成つて五十歳以

であるが、景樹は歌人として調を重んじただけあつて、歌の格調の上から卓説を出した點が所々見える。「掲解」に「如此許戀乍不有者」の「あらずは」を「アランヨリハ」と解した宣長の説を否定し、「コハ戀ツヽアラス、高山ノト云ハカリノ詞ニテ、者ハ例ノ輕ク見ルノ也」とした如き、その理由を擧げてはないが、歌全體をよく味はつた上で立てた卓説とする事が出來る。しかしこの説は、直好云とあつて景樹自身も「コノ不有者ノ詞ヲアランヨリハト云言也ト云ルハアラス、サテハ不ノ字ノ意聞エス」と言つてゐるが、恐らく直好の説によつ

【參考】萬葉集註釋書の研究（校本萬葉集首巻下）〔久松〕

萬葉集訓義辨證（まんえふしふくんぎべんしよう）　研究書　二巻一册【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【解説】萬葉三辨證の一。安政二年二月の自序及び凡例がある。集中の用字の疑はしきものに就き、和漢の典籍によつてその文字の訓義を論じ、從來の諸説の誤れる事、説き洩らした事を證したるもの、又正字・俗字・略字等の別に論及した所がある。用字の校異を諸寫本によつて示した。上巻は丈夫（ますらを）より斑（まだら）に至る四十四項、下巻は決（かけ）より榜・棹・梶の字の訓に至る五十四項及び榛

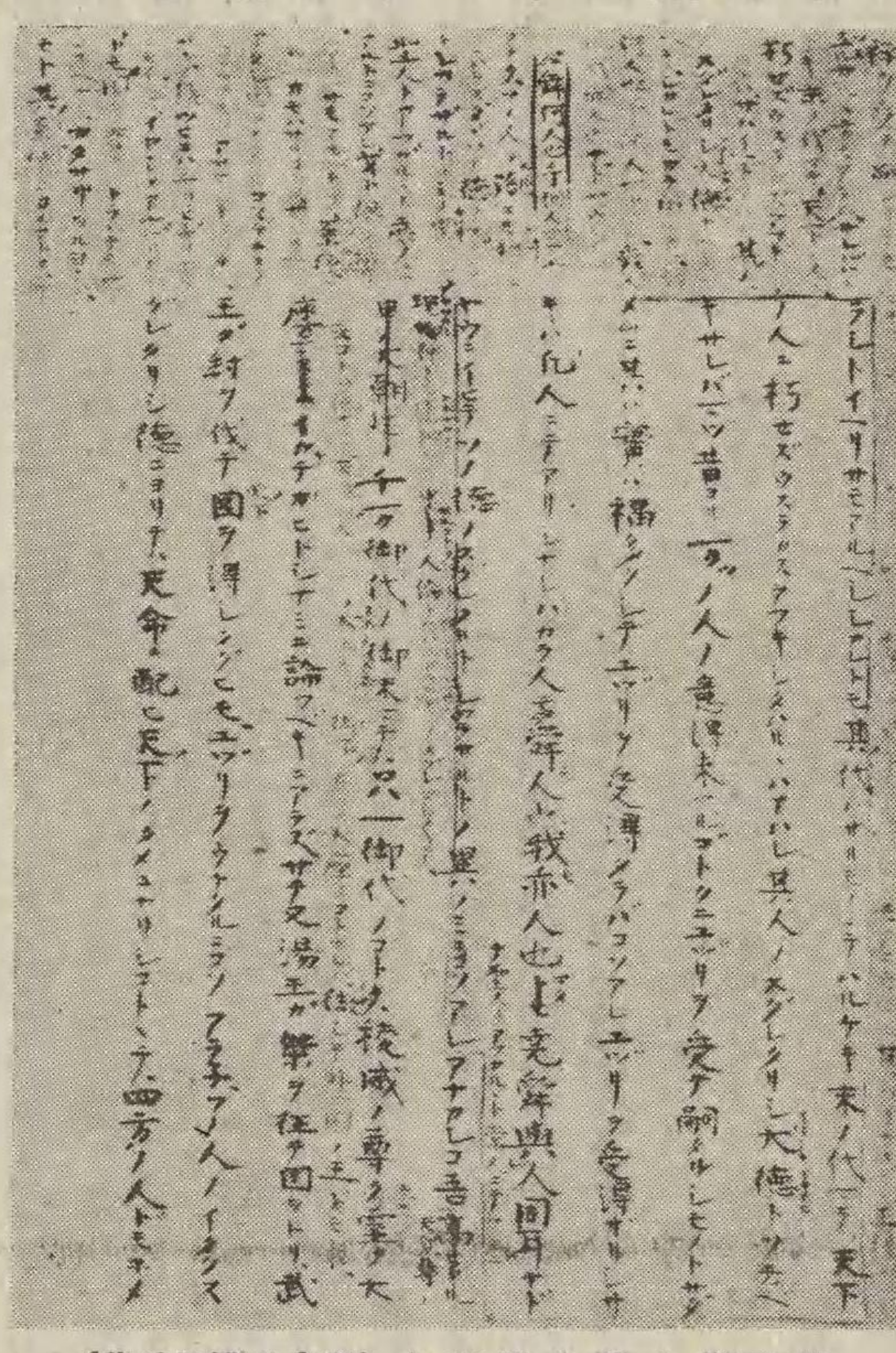
とがある。六巻以外の十四巻は眞淵の草稿に門人の狛諸成が手を入れたものであらうが、寫本として傳へられてゐる。眞淵全集本は諸成本の十四巻を併せて二十巻として收めてある。【内容】總論に於て「萬葉集」の文學批評的研究をなし、「萬葉集」の時代を歌の發達の上から五期に分ち、それぞれの特質を述べてゐる。人麿・赤人・憶良・旅人・家持等の批評も簡にして要を盡してゐる。本文は現在の「萬葉集」二十巻のうち巻一・二・十一・十二・十三・十四を古い部分とし、この六巻を撰んで註釋を施したのである。この大膽な本文批評の



とが出來ない。さうして總論は近世に於ける最も優れた「萬葉集」の批評であらう。〔久松〕

【參考】校本萬葉集首巻下○萬葉考の書史學的考察彌富破摩雄（國語國文の研究、昭和四ノ四）

萬葉集講義（まんえふしふかうぎ）　註釋書【著者】山田孝雄【刊行】昭和三年第一巻、昭和七年第二巻刊、以下續刊の豫定。【成立】大正十年四月、故萩之家門下の山本まち子氏の懇請により、萩之家同人のために「萬葉集」巻一より講じ始め、巻二の半ばに至つて講義一時絶え、大正十二年の大震災によつて全く絶えてしま



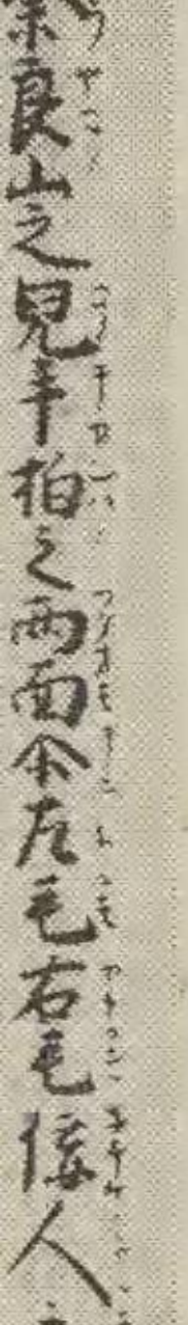
萬葉集古義自筆稿本（飛鳥井雅四氏藏）

後歿年の六十歳までは、それまでに成つたものの增補を主とし、その他斷片的な小研究をなしたものと思はれる。【諸本】稿本としては飛鳥井雅古氏藏のは「總考」二冊、「註釋」三十二冊、「品物解」四冊があつたが、これ等は關東大震災の時燒失した。次に飛鳥井雅四氏藏の「萬葉集古義總考」二冊、「萬葉集記聞」一冊、「萬葉集考證」一冊、及び大島雅太郎氏藏の「萬葉集品物解」三冊がある。この中「古義總考」二冊は「總考」の三と四とに當る部分で雅古氏藏の「總考」二冊と合せて「總考」四冊の稿本が揃つてゐる。大島氏藏の「品物解」は飛鳥井氏藏の「品物解」（一冊を除く）が初稿本であるに對して、これは再稿本である事は年附によつて明かである。又「萬葉集品物圖繪」の寫本が帝國圖書館に藏せられてゐる。古義稿本の中、註釋の部分は各卷を上中下又は上下に分けてゐるが、更にこれを天地に分ける考であつたか、所々に附紙をして「天トナルハズ」といふやうに斷つてある。これ等は恐らく雅澄にこの書を版行する志があつて、その時にここで分冊にする意志があつたのであらう。かくの如き稿本の外に、版本としては明治十一年に宮內省で上梓されることになり、爾後十三年を經て明治二十三年に完成された版本がある。この版本の底本となつた本に就いては古義の初めにある明治十二年八月の福羽美靜の序に、「この書もと雅澄が生涯の力をつくし世を去るに至るまで校正してやまず。また卷帙甚だ多きがゆゑに正本に乏し。雅澄が門派高知縣士族福岡孝廉が藏本ひとり全本たるのみ、その他雅澄の嗣子飛鳥井雅慶の家に藏する所といへども完全ならず」とあり、更に「本篇百卷は福岡孝廉が奉れる所、附錄二十餘卷は飛鳥井雅慶の奉れる所なり」とある。古義を上梓するに當つてはその費用は明治天皇の御手許金から出たといふ事であり、上梓するに際しては雅澄の門下である井野邊嚴水氏・羽生氏、外に某氏との三人が或は版下をかき、或は校正したとの事である。この宮內省本は本文二十卷、註釋九十五冊、總論四冊、枕詞解五冊、萬葉集人物傳三冊、萬葉集品物解四冊、萬葉集品物解目錄一冊、萬葉集名所國分一冊、萬葉集名所考六冊、坐知佳境附錄一冊、玉蜻考一冊、古言譯通目次一冊、古言譯通四冊、雅言成法二冊、鍼囊（一名歌詞三格例）二冊、永言格三冊、結詞例一冊、舒言三轉例一冊、用言變格例一冊、言靈德用一冊。外に門人の松本弘蔭の編んだ萬葉註釋目錄四冊、全部で百四十一冊である。更に活版本は以上のうち、玉蜻考までを刊行したのであつて外に、半紙判活版本では松本弘蔭の註釋目錄一冊を加へて三十一冊とし、洋裝活版本は註釋目錄の代りに圖書刊行會で編した萬葉集古義索引を附して十卷としてある。

【內容】本書は「萬葉集」本文の解釋を中心として枕詞・人物傳・品物・地名、その他「萬葉」に關する各方面の研究を完成したものである。而して中心をなす註釋を初め、その他の部分に於ても、極めて精緻に從來の研究を綜合してゐる。また一面に於て雅澄の創說も見られるのであるが、創說に於ては多少牽强のそしりを免れないものが多い。たとへば「古義」に於て歌の順序を變へてゐる點の如きも、餘り確實な根據もないやうであり、また語の解釋、殊に枕詞の解に於て餘りに自然のまゝの解釋を忘れて無理に解釋した觀がある。「ひさかたの」を「捉勝間之」の意であるとし、「神風の」の一說を「神下瀨之」とした如きによつて一般を察し得る。その他歌の解釋にしても歌そのものの情趣、表現を無視した解釋のある事を否む事は出來ない。これは雅澄が歌に對する銳敏なる鑑賞を缺いてゐた爲めであるともいはれるが、一面に於て雅澄は歌を純粹なる藝術であると見るよりは、歌によつて古道もしくは國家的意識を知る事を目的としてゐた點もあらうと思はれる。總論の中の「古學」といふ項に、「余が萬葉集をよく〱よみあぢはひて一には皇神の道義をあきらめ、一には言靈の風雅をしたへと常にいふはことに所見ありていふことなれば今くはしくわきまへむ」といふ所を以て見れば、第一には古道研究の手段としてであり、第二には言辭の風雅をしたふといふこの考をもつてゐたやうに思はれる。而も雅澄の終局の目的は矢張り古道研究であつて、その古道を研究するには先づ古代言語を明かにする必要があり、その古代言語を知るには、「萬葉」が最もいゝとしてゐるのである。而も眞淵のやうに「萬葉」から「古事記」に進まうとせずに、どこまでも「萬葉」に據り、「萬葉」に據つて古道までも理解しようとしたのである。【史的地位】本書は萬葉研究史の上で、偉大なる綜合である所に優れた地位がある。仙覺によつて開かれ、契沖によつて新しい意義のもとに研究されて以來、近世に於て隆盛になつた萬葉研究は、本書に於て完全に綜合された。「古義」以後の萬葉研究は、「古義」に於て綜合された萬葉研究の上に立つて新しい分析を初めたとも言へる。要するに萬葉研究史に占める本書の地位は極めて大なるものがある。【價値】本書は啻にすぐれた歷史的地位を占めるのみならず、價値から言つても偉大なるものがある。文字をみだりに改定した如きは多少の缺點であるが、一生を「萬葉集」に沒頭しただけに、微細な點にまで研究的意識を見られるのは閑却することが出來ない。さうしてその價値の上から言つても、それ以前の萬葉研究の一大綜合であつたことが最も著しい點である。

【末書】雅澄の「萬葉集」研究は、その弟子によつて祖述され、從つて「古義」の末書をも出した。卽ち太田滿穗は師の「古義」を摘錄した「萬葉集講錄」四十八冊を著はし、京都北野神社の文庫に藏せられてゐる。又葛目弘守と別府信榮とが師なる雅澄の「古義」の說によつて流布印本の歌の順序をかへ、訓をも改めた「訂正萬葉集」二十冊もある。それ等は、雅澄より以前ではあるが、同じく土佐の今村樂・横田美水の無點の活字本「古萬葉集」、雅澄の師宮地仲枝の「萬葉集私考」十冊と共に、「萬葉集古義」をめぐる土佐の萬葉研究の成果である。

【參考】土佐に於ける萬葉學の源流 佐佐木信綱（史學雜誌二八ノ六）○萬葉集古義上梓の次第 林縫之助（心の花一九ノ三）○萬葉集註釋書の研究 久松潛一（校本萬葉集）〔久松〕



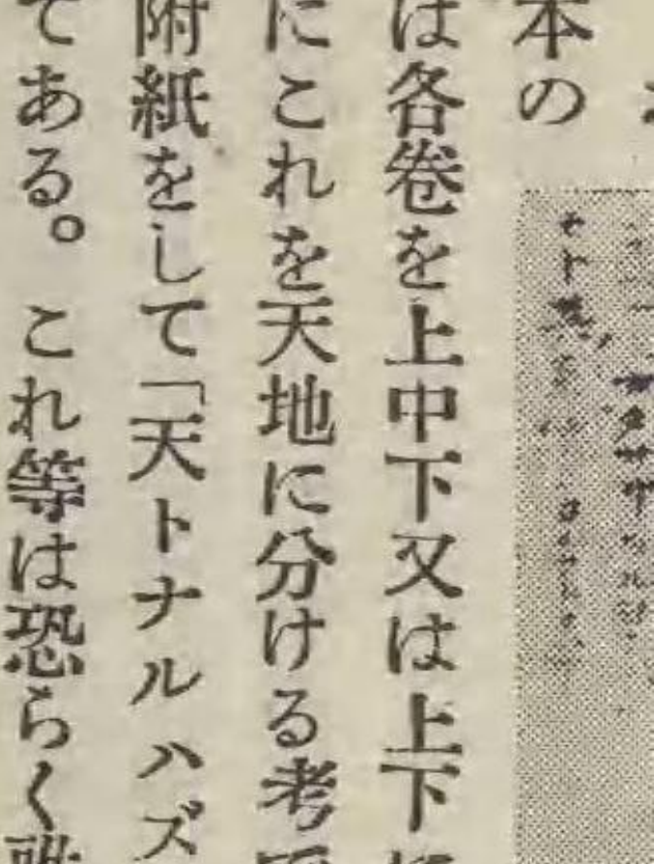
奈良山之兒手柏之両面尓左毛右毛佞人之友

あることは明かである。【諸本】宮內省圖書寮藏の寫本が知られてゐる唯一のものであつて、大形の楮紙四十七葉から成つてゐる。書寫年代は近世の初めである。この書は大正年代「祕府本萬葉集抄」と名づけ、玻璃版として複製された。【解說】短歌百六十九首、長歌三首、旋頭歌一首を註してある。歌の本文を出

龜より前の文明の奥書がある。更に彰考館藏の「萬葉集爲廣私注」には流布本と同じ奥書があつて、而も文龜二年云々のところが「文明十八年三月日 右衛門督藤原爲廣判」となつてゐる。又岩崎文庫藏の「宗祇抄」にも、「一校畢明應元年十月二十八日」とあつて、文龜以前の奥書がある。故に恐らく文龜二年以前に、すでに抄出されてゐたであらうことが知られる。從つて

明かであるが、この「異本宗祇抄」にも流布本にある「私云借用誌本云々」の跋があるのであつて、これによると、流布本の原形であるらしきこの「異本宗祇抄」も亦拔抄本であらねばならぬ。刊本としては國文註釋全書並に萬葉學叢刊に收められてゐる。【解說】本書は「萬葉集」の中から、各卷數首づつを解釋したものであつて、極めて簡單な註釋である。仙覺や由阿の說の影響を承けて居り、創見は多くない。

てゐる。古義稿本の中、註釋の部分は各卷を上中下又は上下に分けてゐるが、更にこれを天地に分ける考であつたか、所々に附紙をして「天トナルハズ」といふやうに斷つてある。これ等は恐らく雅澄にこの書を版行する志があつて、その時にここで分冊にする意志があつたのであらう。かくの如き稿本の外に、版本としては明治十一年に宮內省で上梓されることになり、爾後十三年を經て明治二十三年に完成された版本がある。この版本の底本となつた本に就いては古義の初めにある明治十二年八月の福羽美靜



するに際しては雅澄の門下である井野邊嚴水氏・羽生氏、外に某氏との三人が或は版下をかき、或は校正したとの事である。この宮內省本は本文二十卷、註釋九十五冊、總論四冊、枕詞解五冊、萬葉集人物傳三冊、萬葉集品物解目錄一冊、萬葉集品物解四冊、萬葉集名所國分一冊、萬葉集名所考六冊、坐知佳境附錄一冊、玉蜻考一冊、古言譯通目次一冊、古言譯通四冊、雅言成法二冊、鍼嚢（一名歌詞三格例）二冊、永言格三冊、結詞例一冊、舒言三轉例一冊、用言變格例一冊、言靈德用一冊。外に門

のの情趣、表現を無視した解釋のある事を否む事は出來ない。これは雅澄が歌に對する鋭敏なる鑑賞を缺いてゐた爲めであるともいはれるが、一面に於て雅澄は歌を純粹なる藝術であると見るよりは、歌によつて古道もしくは國家的意識を知る事を目的としてゐた點もあらうと思はれる。總論の中の「古學」といふ項に、「余が萬葉集をよく〳〵よみあぢはひて一には皇神の道義をあきらめ、一には言靈の風雅をしたへと常にいふはことに所見ありていふことなれば今くはしくわきまへむ」といふ所を以て見れば、第一には古道研究の手段

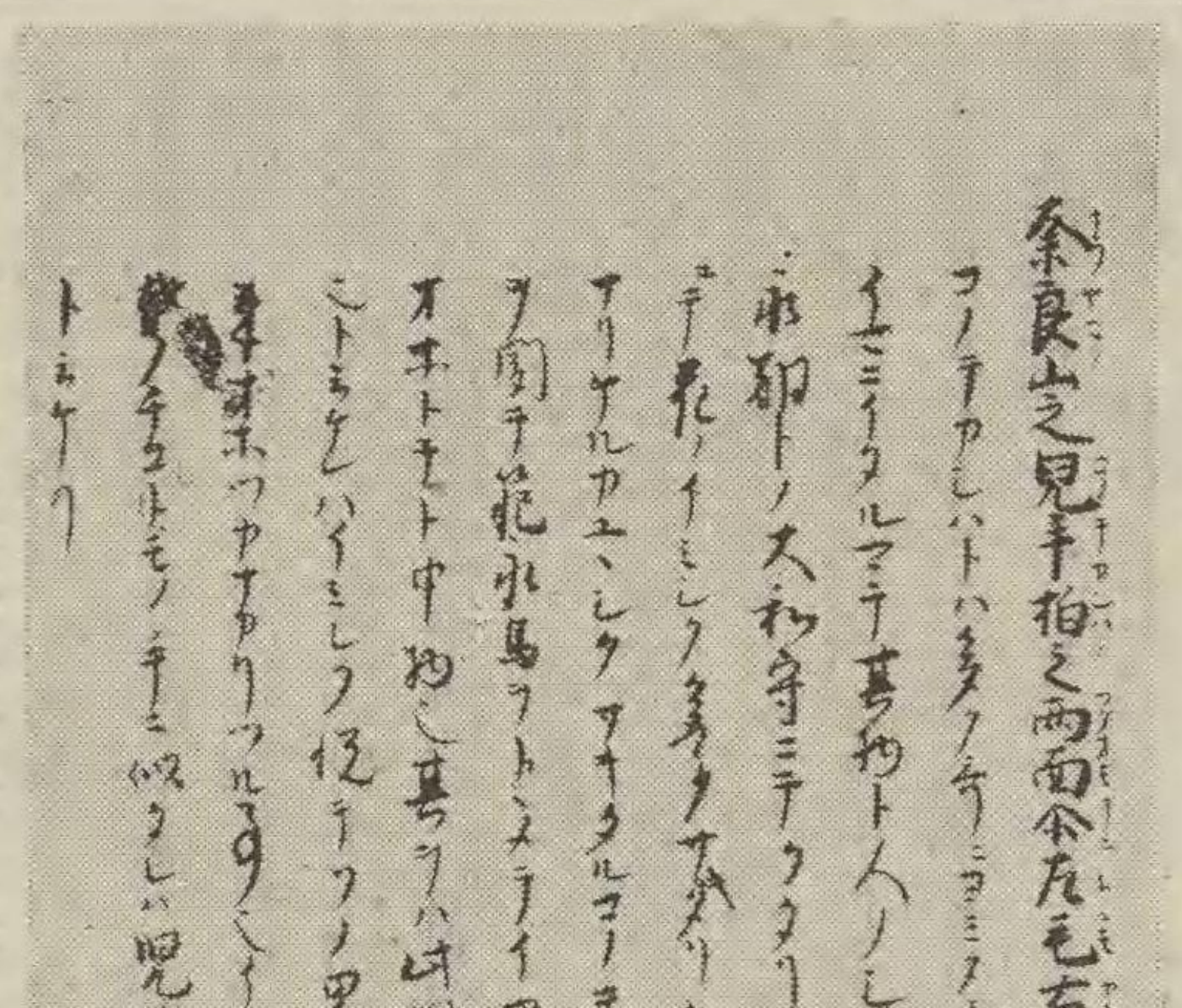
葉集」に沒頭しただけに、微細な點にまで研究的意識を見られるのは閑却することが出來ない。さうしてその價値の上から言つても、それ以前の萬葉研究の一大綜合であつたことが最も著しい點である。

【末書】雅澄の「萬葉集」研究は、その弟子によつて祖述され、從つて「古義」の末書をも出した。卽ち太田滿穗は師の「古義」を摘錄した「萬葉集講錄」四十八冊を著はし、京都北野神社の文庫に藏せられてゐる。又葛目弘守と別府信榮とが師なる雅澄の「古義」の說によつて流布印本の歌の順序をかへ、訓をも改めた「訂正萬葉集」二十冊もある。それ等は、雅澄より以前ではあるが、同じく土佐の今村樂・横田美水の無點の活字本「古萬葉集」、雅澄の師宮地仲枝の「萬葉集私考」十冊と共に、「萬葉集古義」をめぐる土佐の萬葉研究の成果である。

【參考】土佐に於ける萬葉學の源流 佐佐木信綱（史學雜誌二八ノ六）○萬葉集古義上梓の次第 林縫之助（心の花一九ノ三）○萬葉集註釋書の研究 久松潛一（校本萬葉集） 〔久松〕

萬葉集字音辨證（まんえふしふじおんべんしよう） 研究書 二卷一冊【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【解說】萬葉三辨證の一。安政二年八月の著者の序及び凡例がある。集中の字の發音の疑はしきもの、普通の字音と異なるものに就き、古書の用例、悉曇・韻鏡等によつて、その發音の正しき所以を考證したるものである。初めに總論があり、「玉勝間」「古事記傳」「萬葉考」等を引く。上卷は「彌音メ」より「宇于音ヲ」に至る二十六項、下卷は「倍音ハ又ヒ又ホ」より「僧音シ」に至る二十四項を收め、附錄に吉閑（きふな）・高山（かぐやま）・牛留鳥（くろどり）の三項がある。 〔佐佐木〕

萬葉集抄（まんえふしふせう） 註釋書 一卷【著者】卷尾に撰者範永朝臣とあるが、更に別に「永仁六年五月十五日書寫了本不審多定狼藉事歟 抑此抄範永朝臣撰之由傳聞又奧載彼名字然者雖不可有疑今抄兒手柏之尺範永朝臣任大和國司之時過奈良坂云々件朝臣爲自抄者何可載朝臣之字哉今案若範永以後之人撰之歟以證本可尋校也 藤原資經」とあつて、範永たる事を疑つてゐる。而してこの書は從來諸書に見えて實物を見る事を得なかつた藤原盛方の抄ではなからうかといふ說があるが、確證はない。【成立】未詳であるが、仙覺以前の著であることは明かである。【諸本】宮內省圖書寮藏の寫本が知られてゐる唯一のものであつて、大形の楮紙四十七葉から成つてゐる。書寫年代は近世の初めである。この書は大正年代「祕府本萬葉集抄」と名づけ、玻璃版として複製された。【解說】短歌百六十九首、長歌三首、旋頭歌一首を註してある。歌の本文を出して訓を附し、片假字で簡單な註が施してある。註にはさしてとるべき所もないが、本文及び訓は仙覺以前の本文及び訓の狀態を見る上に資料を與へる。


萬葉集抄卷十六（圖書寮藏）

【參考】最も古き萬葉註釋書の發見 佐佐木信綱（和歌史の研究）○校本萬葉集○祕府本萬葉集抄 〔久松〕

萬葉集抄（まんえふしふせう） 「萬葉集註釋」を見よ。

萬葉集抄（まんえふしふせう） 註釋書 二卷二冊【著者】宗祇【名稱】「宗祇抄」ともいふ。【成立】流布本の跋に、「文龜二年二月五日於越後國府中旅窓寫畢」とあるが、この跋は「宗祇抄」を拔出した人の筆である。而して水戸彰考館藏の「宗祇抄」一本には、下卷尾に「本云文明十四年二月二十四日夜於灯下寫畢 宗誕」と、文龜より前の文明の奧書がある。更に彰考館藏の「萬葉集爲廣私注」には流布本と同じ奧書があつて、而も文龜二年云々のところが「文明十八年三月日 右衞門督藤原爲廣判」となつてゐる。又岩崎文庫藏の「宗祇抄」にも、「一校畢 明應元年十月二十八日」とあつて、文龜以前の奧書がある。故に恐らく文龜二年以前に、すでに抄出されてゐたであらうことが知られる。從つて宗祇が「萬葉集抄」の原本を書いたのは、尠くとも文明十四年以前である。【諸本】流布本系統に屬するものには、前述の水戸彰考館藏の「宗祇抄一本」（寫二冊）「萬葉集爲廣私注」（寫二冊）、岩崎文庫藏の「宗祇抄」などがあり、書名・奧書は異なつてゐるが本文は同一である。この外に「異本宗祇抄」とすべきものに竹柏園所藏の「宗祇抄」があり、これに類似したものに早川幾忠氏藏の「宗祇抄」がある。竹柏園本は卷子本二卷で流布本に比して分量が多い。たとへば卷一だけでも、流布本になくてこの古寫本にあるのが「わたつみの」「冬こもり」「うまさかの」「そまかたの」「あかねさす」を初め、他に註はないが、歌だけあるのが四首ある。かくの如く歌數が多いのみでなく、一首の歌の註も詳しいのであつて、奧には流布本にある「私云借用註本……くはへ給へき者なり」の奧書があるが、その次に「文龜二年二月云々」とあるのがなくて、「以或人本早卒染筆宗祇法師抄之云々 雀輕子」とある點が違つてゐる。元來「宗祇抄」の流布本は、拔抄本であることは明かであるが、この「異本宗祇抄」にも流布本にある「私云借用註本云々」の跋があるのであつて、これによると、流布本の原形であらしきこの「異本宗祇抄」も亦拔抄本であらねばならぬ。刊本としては國文註釋全書並に萬葉學叢刊に收められてゐる。【解說】本書は「萬葉集」の中から、各卷數首づつを解釋したものであつて、極めて簡單な註釋である。仙覺や由阿の說の影響を承けて居り、創見は多くない。從つて仙覺の「萬葉集抄」（別項）のやうな劃期的なものではないが、一體に「萬葉集」の研究が衰へて、すぐれた研究も現はれなかつた室町時代に於て作られた點から見て、由阿の註釋とならんで、「萬葉集」註釋史の上では注意すべきものである。 〔久松〕

【參考】校本萬葉集○萬葉學叢刊 佐佐木信綱編

萬葉集書志（まんえふしよし） 一冊【著者】武田祐吉【刊行】昭和三年三月、古今書院。【內容】本書は、「萬葉集」が後世如何樣にして傳はり、また如何なる研究がこれに施されたかと云ふ二點を研究した學書である。從つて「萬葉集」その物の研究や、「萬葉」の文學書としての後世への影響等は最初から問題の外に置いてある。而して右の如き內容を解說するのに、本書は三部に分けて說いてゐる。第一部「萬葉集傳來史」では、「萬葉集」に古來如何なる訓や解釋等が行はれたかと云ふ歷史を詳記するもので、「萬葉集」の名の見える最古の文書から謂はゆる古點次點時代を經て仙覺契沖から現代の研究者に亙る系列が手際よく說明されてゐる。第二部「萬葉集通行本の研究」は通行本・流布本等と稱せられる寬永年間の版本の研究で、この版本が「萬葉」の古傳本中どんな系統に屬する本か、この版本の錯簡・目

【價値】本書は、我が國に於ける第五番目の萬葉全釋書で、獨創能く前人未踏の解を立てた個所が多い。卷一藤原役民の長歌の解等殊に傑出してゐる。また集中の漢文（題詞・左註等の漢文）の解に於て、從來のどの註釋書よりも精到である個所が少くない。但し私刊本は「略解」と「古義」との外、一切の前人の註書を見ないで解釋したと記してある如く、先人の研究に對して無關心な嫌ひがある。公刊本でもこ

はすべてこゝに入る）・僧・尼・庶人（第九卷に名の見える水江浦島子（みづのえのうらしまのこ）と第十五卷に名の見える筑紫の白水郎荒雄（あまあらを）の二人をこゝに入る）。以上二十六部に分つ。引用書は、「古事記」「書紀」「續日本紀」「延喜式」が最も多く、また「書紀」と「續日本紀」は就中目立つて多い。ついで「神皇正統記」「皇代紀」「如是院年代紀」等の名も見える。【價値】本書が採用してゐる身分による分類法は甚だ不便で、一々その作者の「[illegible]」を知つ

葉集」は、本書の組織及び訓法によつて編まれた書である。　〔森本〕

萬葉拾穗抄（まんえふしふすゐせう）　註釋書　二十卷三十册【著者】北村季吟【成立】季吟の師貞德は、幽齋の敎を受けた頃より萬葉註釋の志があつて、諸本を集め諸抄を見合せたが、その暇なく、季吟に託して共々に考へ記し、二年の間に卷一・二の兩卷は出來上つたが、完成せずして貞德は歿し、それ以後、季吟が獨力

目安」等を常に引き、これ等を取捨して頭註に附し、今案を加へたところもある。その體裁は、他の季吟の古典の註釋書と同一である。初めに總論があり、歌の員數の事、撰者は諸兄公と家持卿とに決する事、撰者の傳、題號の事、點和の事、仙覺所校の本、書樣の事、古註どもの事、古人の説用捨の事等に就いて説いてゐる。刊本の卷首には貞享四年六月の

錄・歌數は、どう考ふべきものであるか等を述べてあつて、著者の創見が少くない。第三部「萬葉集仙覺本の研究」は、本書の半ばを占め、著者の創見も多く、量質共に本書の中心をなす部で、序・前編・後編の三つに分れる。序では仙覺本を研究する事が如何に必要な事であるか、前編では、仙覺の「萬葉集」校勘の由來や、如何なる證本を仙覺が使用して何年と何年とに校合し、それが後世にはどのやうにして傳はつていつたかを解説する。後編では、かくして出來た仙覺本が如何なる價値を持つか、兩度に校合したその二本の性質は如何？等を説くので、前編の細部を詳説したとも云へる。附錄として「萬葉集仙覺本研究資料」を載せる。【價値】「萬葉集」と云ふ貴重な書が、如何にして今日まで傳はつたか、殊にその傳來に、仙覺及び仙覺の事業が如何ほど重要な立場に在るものかを、一讀して知らしめる點で重要な書である。各所に見える著者の創見には尊敬すべき意見が少くない。　〔森本〕

萬葉集書目（まんえふしふしよもく）　一册【著者】木村正辭（まさこと）【成立】著者の門人篠崎節之の勸めによつて、初學者のために編纂されたもの。【刊行】慶應三年卯年三月刻。本書の源をなした「萬葉集書目提要」（別項）がまだ公けにならぬうち、草稿本から本書は作られ、原本よりも二十數年も前に出版された。【內容】「萬葉集」關係の書籍を解説した書であつて序二枚、本文十五枚の小册子である。その組織は、全體を正文部・註釋部・附錄・外錄」の四部に分つて居り、「正文部」は、「萬葉集」の古寫本及び版本の名、五十七本二十一種をあげ、所々に小字二行に割註の形式でその本の解題を述べてある。「註釋部」は、八部に分れてゐる全註ー十五部を解説してゐる。摘要ー拔萃して註釋した書をあげる部で六部を擧げる。釋言ー言葉のみを解釋した書で五部。類纂ー歌を部類によつて集めた書名をあげる部で七部をあげてゐる。纂言ー五部。撰歌ー十部。雜攷ー八部。雜説ー十部。以上である。なほ註釋部の最初に、「●印ヲ附タルハ、既刊行セルモノナリ」「△印ヲ附タルハ、未ダ刊行セサルナリ」とあつて、各本の上に「●」又は「△」の印がある。「附錄」は、木村博士のまだ見てゐない書をあげてゐるが、最初に「其書予未ㇾ見、タダ書目ノミモノニ見エテ、提要ノ知カタキ類ヲココニ集ム」とあつて、三十六の書名をあげてゐる。次に外錄は、木村博士の著書十八部の名をあげてゐる。これは、序文及び跋にことわつてある所によると、篠崎節之が、博士の著書名の本書に洩れるのを惜しんで、博士に無斷で附け加へたものの由が知られる。【價値】萬葉關係の書籍が、今日のやうに容易に手に入らなかつた當時に於ては、一通り關係書の知識を得るにも、甚だ困難を感じた。だから、本書のやうな、書名を分類しただけの本でも甚だ貴重だつたに違ひない。完備した萬葉書目の解題書の數種をたやすく見得る今日から見れば、內に收められてゐる書數も少いし、中には誤謬なども發見出來るが、今から七十年の昔には、貴重且つ便利な本であつたらうと思はれる。　〔森本〕

萬葉集書目提要（まんえふしふしよもくていえう）　書目解題　二卷一册【著者】木村正辭【成立】慶應二年【刊行】明治二十一年【內容】慶應二年二月十日の自序があり、後明治二十年九月に補正したもの。上卷は「萬葉集」の諸本を解説し、仙覺の校合に用ひたる諸本をあげて、仙覺校正本の系統表を揭げ、諸寫本の書法に三種の別あることを説明した。上卷附錄に、古點・次點・新點の事、古訓一樣ならざりし事、撰者の事、歌數の事、略本萬葉集・古萬葉集の稱、妄説の諸項に亙つて古書に見えるところを引用列擧した。下卷は「萬葉集」の學書の解説で、全註・摘要・釋書・類纂・纂言・撰歌・雜攷・雜説に分つ。下卷附錄に、諸書に書名のみ見えてその書の見難きものを擧げた。下卷追加は明治二十年八月に、その後に見得た書に就き解題して追加したものである。【價値】「萬葉集」の諸本及び學書の書目解題書として、最初に出でたものであり、解題・考證は詳しく、加ふるに諸典籍より「萬葉集」とその學書に關する事項を引用列擧すること豐富で、萬葉學研究史の考究に不朽の價値を有する。その蒐集の書は未だ少く、解題にも誤があるけれども、それ等はこの書の價値を多く損じない。【附記】本書は、同じ著者の「萬葉集書目」に載せた書の解題をなしたるものである。佐佐木信綱氏の「萬葉集選釋」の附錄に出した「萬葉集研究書目解題」は、その後發見された多くの本及び學書に就いてほぼ解題を加へたから、本書を補足するものとして併せ見れば得る所がある。又「國書解題」の「萬葉集」の學書の解題も參考するに足る。　〔佐佐木〕

萬葉集新考（まんえふしふしんかう）　註釋書　二十六册【著者】安藤野雁【成立】安政四年【解説】卷一から卷十三までの註釋。首卷は總論となつてゐる。總論は「代匠記」を多く拔書してゐる。註釋には歌人としての野雁の、直覺的な卓見が閃いてゐる。安政四年清書した由が序に見える。註釋としては極めて粗なものであるが、歌人の註釋書として香川景樹の「萬葉集捃解（きんかい）」（別項）や、熊谷直好の「萬葉集抄釋」と共に注意すべく、殊に本書は秀歌の拔萃でなく、全部の歌の註釋を志した所に價値がある。著者は窮乏の間に處して、本書の完成に志したが、遂に未完に終つたとおぼしいのは遺憾である。自筆稿本のうち、卷一だけの草稿は無窮會に藏せられ、多くの改訂が施してある。竹柏園には第一册より第十二册までと第二十四册より第二十六册までの十五册が藏せられ、これは清書本で、所々改訂もあるが、美はしく清書せられてゐる。著者が本書の完成に刻苦辛勞したあとが見える。
【參考】安藤野雁とその萬葉集新考　佐佐木信綱（萬葉漫筆）　〔佐佐木〕

萬葉集新考（まんえふしふしんかう）　註釋書　和本三十八册、洋本八册【著者】井上通泰【刊行】著者の所謂私刊本（和本）は、大正四年五月から昭和二年六月に至る。公刊本（洋本）は昭和三年三月から昭和四年一月に至る。【內容】「萬葉」二十卷全部の註釋書である。「私刊本」では初めに假名まじりに書き改めた原歌を擧げ、次に語釋を施す。「公刊本」では最初に假名まじりの原歌、次に原字のまゝの原歌、次に語釋を記す。又別記とも稱すべき附錄が或る卷の終りに載せてある（私刊本・公刊本共通）。その卷數と目次は、卷二下、橋本進吉氏のガテヌ、ガテマシの考。卷五、萬葉集卷第五の筆錄者・山上臣憶良年齡考。卷七上、連體格の代に終止格をつかひたる。卷十下、倒置の枕辭。卷十二下、佛足石歌新考。卷十四下、轉訛例一斑。卷二十下、防人歌轉訛例一斑（以上のうち「上」「下」は私刊本のみにありて公刊本に上・下の別なし）。なほ公刊本第七册の最後には、「萬葉雜攷」として、第六册までの説を增補してある。

によつて、初學者のために編纂されたもの。【刊行】慶應三年卯年三月刻。本書の源をなした「萬葉集書目提要」（別項）がまだ公けにならぬうち、草稿本から本書は作られ、原本よりも二十數年も前に出版された。【內容】「萬葉集」關係の書籍を解說した書であつて序二枚、本文十五枚の小册子である。その組織は、全體を正文部・註釋部・附錄・外錄の四部に分つて居り、「正文部」は、「萬葉集」の古寫本及び版本の名、五十七本二十一種をあげ、所々に小字二行に割註の形式でその本の解題を述べてある。「註釋部」は、八部に分れてゐる全註一

本書のやうな、書名を分類しただけの本でも甚だ貴重だつたに違ひない。完備した萬葉書目の解題書の數種をたやすく見得る今日から見れば、內に收められてゐる書數も少いし、中には誤謬なども發見出來るが、今から七十年の昔には、貴重且つ便利な本であつたらうと思はれる。〔森本〕

萬葉集書目提要（まんえふしふしよもくていえう）

書目解題　二卷一册【著者】木村正辭【成立】慶應二年【刊行】明治二十一年【內容】慶應二年二月十日の自序があり、後明治二十年九月に補正したもの。上卷は「萬葉集」の諸本を解說し、仙覺の校合に用ひたる諸本をあげて、

集研究書目解題」は、その後發見された多くの本及び學書に就いてほぼ解題を加へたから、本書を補足するものとして併せ見れば得る所がある。又「國書解題」の「萬葉集」の學書の解題も參考するに足る。〔佐佐木〕

萬葉集新考（まんえふしふしんかう）

註釋書　二十六册【著者】安藤野雁【成立】安政四年【解說】卷一から卷十三までの註釋。首卷は總論となつてゐる。總論は「代匠記」を多く拔書してゐる。註釋には歌人としての野雁の、直覺的な卓見が閃いてゐる。安政四年淸書した由が序に見える。註釋としては極めて粗なものであるが、歌人の註釋書として香川景樹の「萬

次に語釋を施す。「公刊本」では最初に假名まじりの原歌、次に原字のまゝの原歌、次に語釋を記す。又別記とも稱すべき附錄が或る卷の終りに載せてある（私刊本・公刊本共通）。その卷數と目次は、卷二下、橋本進吉氏のガテヌ、ガテマシの考。卷五、萬葉集卷第五の筆錄者・山上臣憶良年齡考。卷七上、連體格の代に終止格をつかひたる。卷十下、倒置の枕辭。卷十二下、佛足石歌新考。卷十四下、轉訛例一斑。卷二十下、防人歌轉訛例一斑（以上のうち「上」「下」は私刊本のみにありて公刊本に上・下の別なし）。なほ公刊本第七册の最後には、「萬葉雜攷」として、第六册までの說を增補してある。

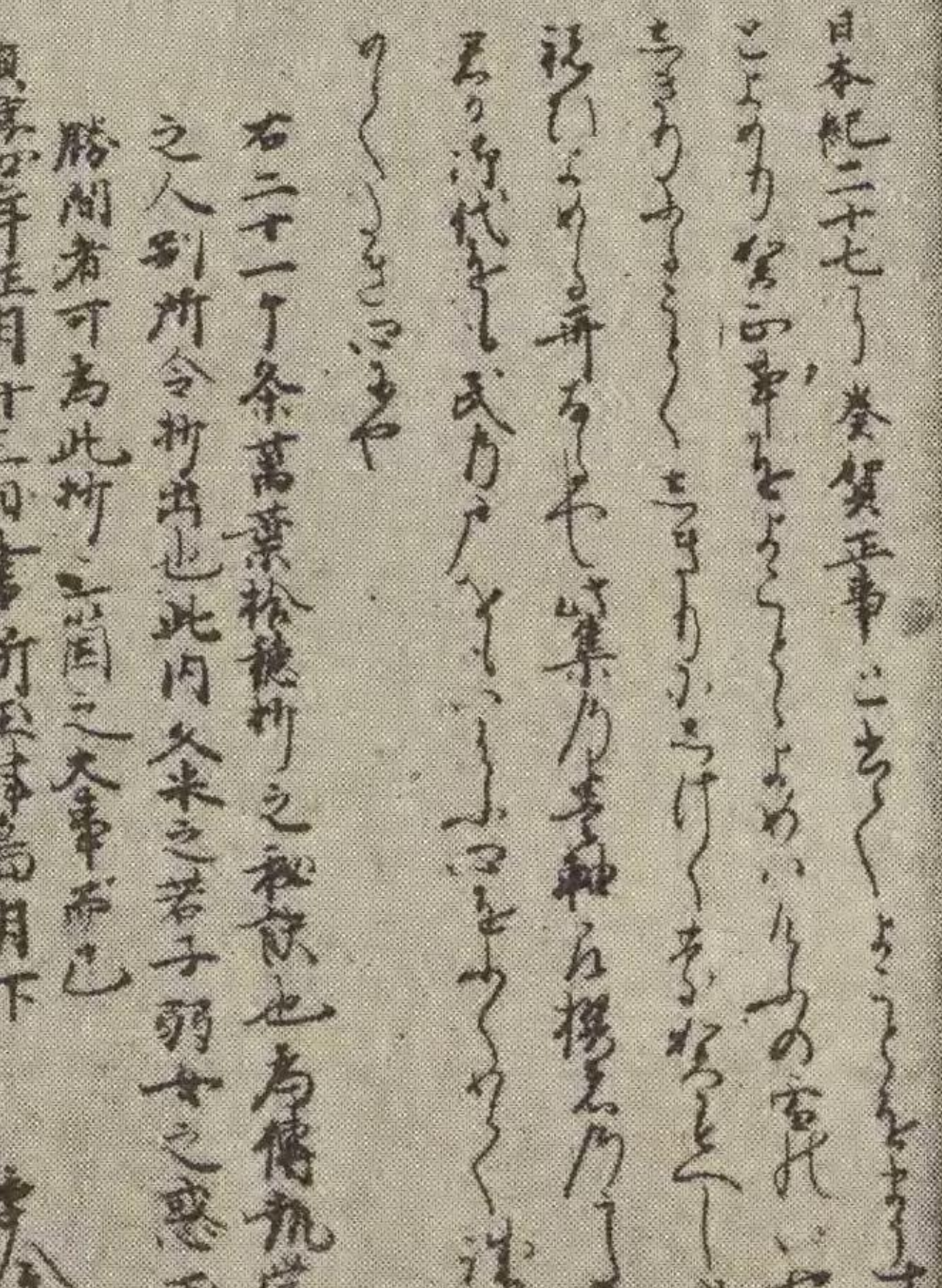
【價値】本書は、我が國に於ける第五番目の萬葉全釋書で、獨創能く前人未踏の解を立てた個所が多い。卷一藤原役民の長歌の解等殊に傑出してゐる。また集中の漢文（題詞・左註等の漢文）の解に於て、從來のどの註釋書よりも精到である個所が少くない。但し私刊本は「略解」と「古義」との外、一切の前人の註書を見ないで解釋したと記してある如く、先人の研究に對して無關心な嫌ひがある。公刊本でもこの弊は著しいが私刊本では一層多い。次に獨創は本書の長所をなしてゐるが、その弊として獨斷に流れた個所もまゝある。殊に著者一個の意見から、本文の文字を誤字と見て變更してある個所の多い點は、本書の重大な缺陷である。〔森本〕

萬葉集人物傳（まんえふしふじんぶつでん）

三册【著者】鹿持雅澄【刊行】本書は、著者の死後久しくその子孫及び門人の家に傳はつて刊行の期を得なかつたが、明治二十四年宮內省から「萬葉集古義」の一部として刊行。後、國書刊行會の手で廣く一般に廣められた。【內容】「萬葉集」の作者を身分によつて分ち、その傳記を記した書である。その身分の排列順は、（1）高きより卑きに及ぶ。（臣下では骨（かばね）の高卑の順による）（2）同じ身分では、その作者名の始めて見えた卷數・丁數の順に並べる。（3）男女に於て男を先に女を後にするとの三つの法則に從つてゐるやうである。最初に帝王、次に太子（日並皇子・高市皇子・上宮聖德皇子・宇治若郎子皇子・皇太子の御五方）・皇后・皇子・皇女・諸王・女王。次に臣下に移つて朝臣（あそみ）・眞人（まひと）・宿禰（すくね）・連（むらじ）・君（きみ）・首（おびと）・忌寸（いみき）・臣（おみ）・造（みやつこ）・村主（すくり）・使主（おみ）・史（ふみひと）・直（あたへ）・倉人（くらひと）・諸臣（しよしん）（第五卷梅花宴の作者中の傳不明のもの、及び第二十卷の防人（さきもり）の作者は此處に入る）・女（臣下の女性はすべてこゝに入る）・僧・尼・庶人（第九卷に名の見える水江浦島子（みづのえのうらしまのこ）と第十五卷に名の見える筑紫の白水郎（あま）荒雄（あらを）の二人をこゝに入る）。以上二十六部に分つ。引用書は、「古事記」「書紀」「續日本紀」「延喜式」が最も多く、また「書紀」と「續日本紀」は就中目立つて多い。ついで「神皇正統記」「皇代紀」「如是院年代紀」等の名も見える。【價値】本書が採用してゐる身分による分類法は甚だ不便で、一々その作者の「骨」を知らなければ探り得ない。殊に「萬葉」には作者の「骨」を略して記してある場合や氏（うぢ）や名（な）だけしか記してない場合も少くないのである。よし「骨」は分つてゐても同じ「骨」の作者が數十人ゐるので檢出に甚だ困難である。この分類法は早く海北若沖が「萬葉集作主履歷」で採用してゐる所で、雅澄は或は若沖のを眞似たのかも知れない。第二に傳記は分るが、その作者の歌は分らないといふ不便もある。又本書には「萬葉」中に名だけ見えて作品のない人の傳記も記してゐるが、作品のある作家との間に區別も立てず、傳記だけを記してある。この點、上記の若沖の著が作品の所在と傳記とを併記してゐるのに比べて、本書の價値の遙かに落ちる所以である。第三に作家の考察に著者の創見がない。本書は「書紀」「續日本紀」等（就中後者）の拔き書きであつて、全體を通じてそれ以上に擢んでて著者の卓見の見られるものは殆ど皆無である。故に「續日本紀」等に傳記の見えぬ山部赤人・笠金村・高橋蟲麿等は、著名な作家でありながら殆ど記すところがない。この點からすれば、本書は謂はゆる歌人傳の資料書に近いといへるが、資料としては近世の後に出ただけに、集成の功は認めらるべきである。【影響】土岐哀果氏著「作者別萬葉集」は、本書の組織及び訓法によつて編まれた書である。〔森本〕

萬葉拾穗抄（まんえふしふすゐせう）

註釋書　二十卷三十册【著者】北村季吟【成立】季吟の師貞德は、幽齋の教を受けた頃より萬葉註釋の志があつて、諸本を集め諸抄を見合せたが、その暇なく、季吟に託して共々に考へ記し、二年の間に卷一・二の兩卷は出來上つたが、完成せずして貞德は歿し、それ以後、季吟が獨力にて筆を取つて完成したものである。自筆稿本によれば、卷一は天和二年十月一日起筆して十八日に註釋を終り、二卷は同じく十八日に始めて十一月六日に終つてゐる。また卷九の如きは、天和二年二月十六日に染筆、二十七日に註解を終り、着手の順序は前後してゐるが、かくの如く迅速に進捗して、天和二三年頃は既に出來上つたものと思はれる。その後、貞享元年五月より、同三年八月にかけて淸書し、更に同年十二月に、再考の功を了へた。【刊行】元祿三年【內容】二十卷のうち、一・二・三・四・七・八・十・十一・十二・二十の十卷が上下二册、合計三十册。本文の歌は假字書に書き下し、その右傍行間に小さく原本の眞字が記してある。この形式は本書の一特色であるが、これは貞德が敦隆の「類聚萬葉」（類聚古集の抄出本）を得て、その體裁にならつたものであると云ふ。藤原惺窩の校正本を得てこれを底本とし、「類聚萬葉」の訓を用ひて本書の本文とした。註釋は仙覺・由阿・宗祇の說を用ひ、また「八雲御抄」「袖中抄」「萬葉集目安」等を常に引き、これ等を取捨して頭註に附し、今案を加へたところもある。その體裁は、他の季吟の古典の註釋書と同一である。初めに總論があり、歌の員數の事、撰者は諸兄公と家持卿とに決する事、撰者の傳、題號の事、點和の事、仙覺所校の本、書樣の事、古註どもの事、古人の說用捨の事等に就いて說いてゐる。刊本の卷首には貞享四年六月の長春院法印武靜信處の序、元祿三年十二月の林鼇直民甫の序、貞享五年四月の冷泉亭人の序がある。刊本は自筆稿本と較べてみると若干の相違があり、自筆稿本を更に訂正して淨書した本を刊行（季吟の版下）したものである。【價値】本書は「萬葉集」全部の註釋書としては最初のもの。而して舊註の集成と云ふところに、季吟の他の註釋書と同樣の目的を持つてゐるが、他の物語草紙の如く、舊註時代に既に多大の發達を遂げたものは兎に角、「萬葉」の如きは、從來多く研究せられなかつたので、本書の完成も、他の古典の註釋書完成後、最も遲れて出來上つた。しかも迅速に成つたのであるから、この點から見ても多くの評價は與



季吟自筆萬葉集秘訣（竹柏園藏）

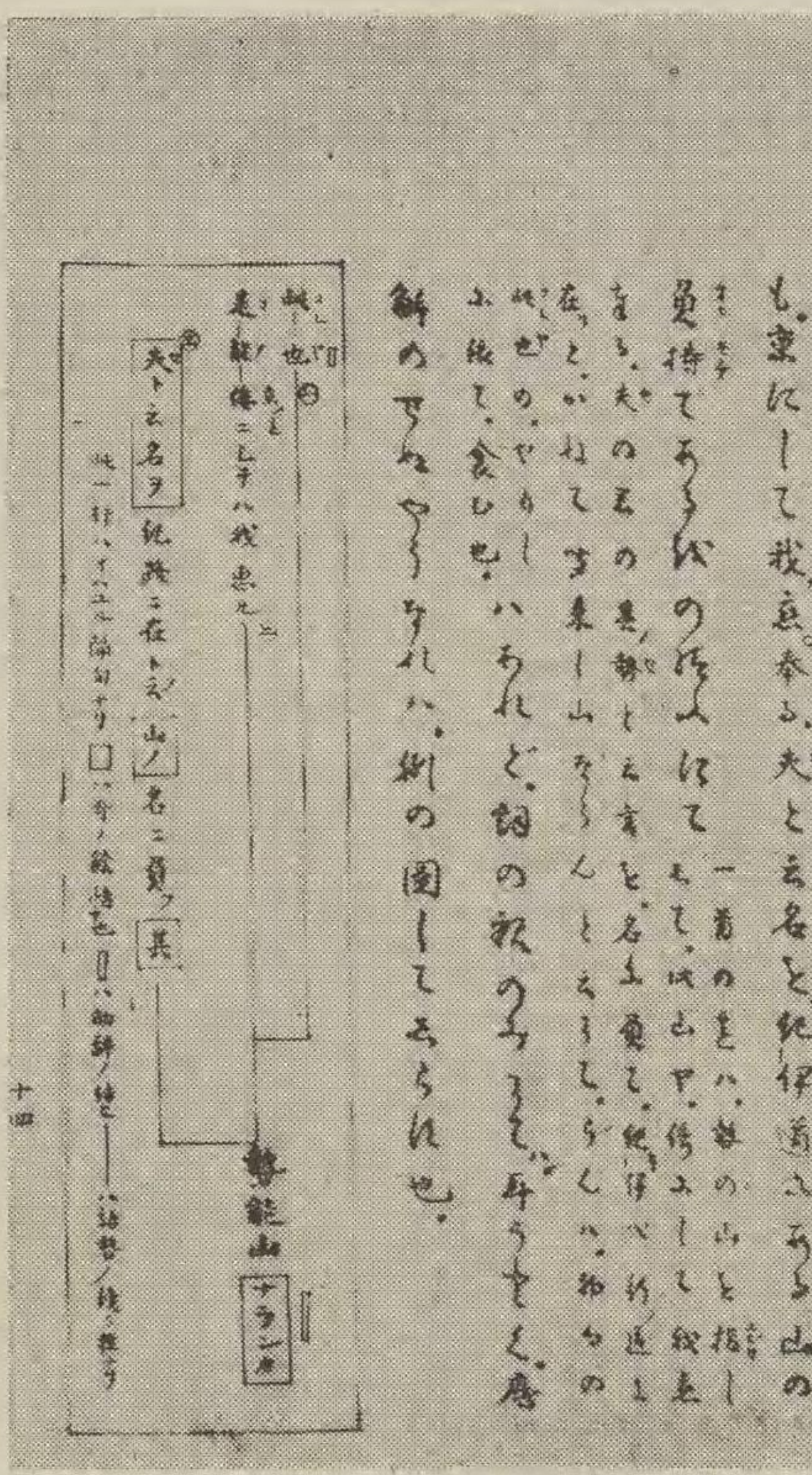
へられない。併し若干の特色はある。「類聚萬葉」を、本書の引書の一として參考に供し、またその體裁を襲つた事、その本文が從來の本とは全く異なる系統の本、即ち妙壽院本を用ひてゐる事、註釋は舊註の集成であると共に、長流の管見抄の如き新しい註釋書をも取り用ひた事、歌の解釋に歌の味をよくあらはした事等である。

【附記】「萬葉集祕訣」一卷。貞享四年正月成。「萬葉集」中より要所二十一箇條を拔いて註解意見を加へたもので、「右二十一箇條萬葉拾穗抄之祕訣也」とある如く、「拾穗抄」の附錄とすべきである。二十一箇條中、更に三箇條の大事を撰んで、古今三箇大事に擬してゐる。自筆稿本は竹柏園に藏せられる。かくの如く、季吟は飽くまでも舊來の傳授思想を墨守してゐたのである。

【參考】萬葉集書目提要木村正辭○校本萬葉集首卷（諸本輯影）　〔佐佐木〕

萬葉集墨繩 まんえふしふすみなは 註釋書　八卷

【著者】橘守部【成立】天保十二三年【諸本】從來刊本がなかつたが、自筆稿本によつて橘守部全集に收む。【內容】總論一册と卷一の卷首から「山川母因而奉流」の歌までの註釋七册より成る。卷一の總論には「墨繩」と題したが、卷二以下の註釋の部分には「檜杺」と題してゐる。總論は萬葉是古學要の項に始まり、題號・撰者・本文・部類・目錄・端詞・左註・卷次第・古訓新訓・異本・古鈔、以下諸註釋書・研究書の解說に及び、終りに墨繩の凡例を記した。卷一の目錄を載せ、「代匠記」の說をも掲げてゐる。註釋は「代匠記」「考」の說を掲げて次にその說を評し、自說を述べてゐる。その他「略解」や「玉の小琴」（各別項）等よりの引用文が多い。一句づつかくの如く詳說した外に、一首の大意を說き、長歌の歌格を圖示した所がある。地理の考證が詳しい。【價値】諸說を多く引いたがために尨大なる書となつたが、自說の部分は割合に少い。併し卓見に富む著者の筆であるから、諸說を許する事が明快で、新說を出した所もあり、「萬葉集」研究上缺くべからざる書である。就中歌格の圖を示せる如きは、さすがに歌格論者たる著者の面目を見る事が出來る。ただ紙數の割に、註釋せる部分が卷一の中途までで僅少なることを遺憾とする。　〔佐佐木〕



萬葉集墨繩自筆稿本（橘純一氏藏）

萬葉集叢書 まんえふしふそうしよ 十六册

【編纂者】島木赤彦・折口信夫・武田祐吉・佐佐木信綱等。【刊行】大正十一年―昭和三年、古今書院。【解說】「萬葉集」の註釋書のうち重要な地位を占めるもの又は寫本のみで傳へられたもの等を撰んだ叢書で次の如くである。

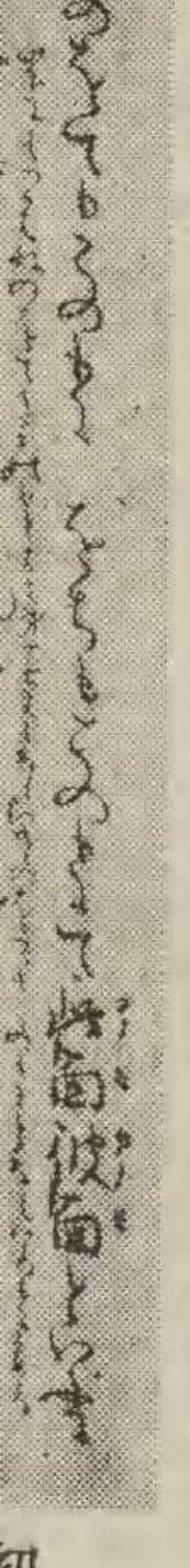
〔第一輯〕富士谷御杖「萬葉集燈」島木赤彥校〔第二輯〕荷田春滿「萬葉集僻案抄」島木赤彥校〔第三輯〕橘守部「萬葉集檜嬬手」折口信夫校〔第四輯〕荒木田久老「萬葉考槻落葉」島木赤彥校〔第五輯〕岸本由豆流「萬葉集攷證」七册、武田祐吉校〔第六輯〕下河邊長流「萬葉集管見」武田祐吉校〔第七輯〕池永秦良著・上田秋成補「萬葉集目安補正」武田祐吉校〔第八輯〕仙覺律師「仙覺全集」佐佐木信綱校〔第九輯〕佐佐木信綱解說「祕府本萬葉集抄」〔第十輯〕佐佐木信綱編「萬葉學叢刊中世篇」（萬葉集目錄・萬葉集佳詞・詞林采葉抄・青葉員花抄・萬葉抄一名宗祇抄・萬葉集之歌百首聞書・萬葉目安を收載）。　〔土井〕

萬葉集代匠記 まんえふしふだいしやうき

【著者】契沖【名稱】「萬葉代匠記」とも。【由來】水戶德川光圀の命によつて着手したもの。光圀は「萬葉」の註釋を志して淸水宗川・山本春正等に命じたが、餘り事業が捗らなかつたので、若き時「萬葉集管見」（別項）などを作つて、造詣深き浪華の下河邊長流に依囑した。長流は必ずしも恪勤の性でなかつた上に病身だつたので、長流の友で萬葉研究に深き契沖に註釋を乞うたのである。恐らく長流が辭して契沖を推擧したのであらう。契沖は極めて篤實な學者であつて二十卷全部の註を完成して獻上したところ、これを流布本にのみよつたので、本文の校勘上に不十分であつたから水戶で延寶年間萬葉集膽寫した中院本等を貸して再度の稿を乞うた。契沖は更にそれ等の異本によつて先づ本文の相違を校讎し、それによつて更に編んで獻つたのである。前者を初稿本といひ、後者を精撰本と稱する。【成立】着手したのは「釋萬紀原」寶永三年の文に二十四年以前とあり、又契沖が元祿十年に著はした「和字正濫通妨抄」に「予十四五年來、右の古書ども見るに云々」とある句から推定して、天和三年頃とするのが妥當である。而して初稿本の成稿した年は、「代匠記」の和文の序と漢文序、安藤爲章の「年山紀聞」、元祿二年の契沖の「萬葉集校本」等によつて初稿本を上つたのは、元祿元年の頃と思はれるので、初稿本の完成したのは貞享の末か、遲くも元祿元年である。次に精撰本に着手した年は漢文の序等によつて見ると、元祿二年であるらしく、成稿した年は「精撰本代匠記」に見える六ケ所の奧書によると、最後の奧書のある卷十三下は元祿三年仲夏二十六日に完成してゐる。二十卷全部を終つたのは元祿三年の終り頃であらう。以上の如く、「代匠記」は天和三年頃に、始めて元祿三年「精撰本」を完成するまで八九年の星霜を費してゐる。而して「精撰本」の稿を了つた後も說を得る每にこれを水戶に書き送つたのであつて、それ等は契沖書翰として三帖及び十三軸が彰考館に所藏せられて居り（契沖全集に契沖雜考として所收）、また現在の「精撰本代匠記」寫本に朱や墨の書入、また「精撰本」の註釋の本文を削つた所などの多くあるのは元祿三年後のものと思はれる。かく考へる時には「代匠記」は契沖の死によつて完成したとも言はれる。【諸本】初稿本と精撰本とのあることは前にも記したが、初稿本にも更に書入の有るものと無いもの、脫落のあるものと無いものなど種々の異同が有るのであつて複雜を極めてゐる。先づ初稿本に就いて見ると、主なる系統として四

種に分れる。第一は彰考館にある契沖自筆本であり、第二は似閑本系統の初稿本であつて、これに屬する善本としては京都賀茂別雷神社所藏の「似閑本代匠記」と橘純一氏藏で守部の「墨繩」にも引かれてゐる一本と東京帝國大學國語研究室藏の一本の如きがある（このうち後の二本は關東大震災の時燒失した）。第三は流布本系統の初稿本であつて、これは最も多く流布され多くの文

全集本があり、初稿本も契沖全集本がある。【內容】「萬葉集」の全部の歌にわたつて詳密な註を加へたものであるが、初めに總論があつて、「萬葉集」の題號撰者、用字等一般的性質及び枕詞の註釋がある。この中撰者に就いては從來の說を排して大伴家持私撰說を精細な旁證を擧げて論じてある。而して初稿本と



初

を更に多くの例證を以て確實にし、また說を進めていつた。以上の如く精撰本に至つて發達の跡が見られるが、初稿本に於ける特質としては、精撰本に比して契沖の自由な直觀から得た批評の多いことであり、稀れに初稿本の方に、却つてよき說がある點である。【史的地位】本書は近世の萬葉研究の最初のすぐれた成果であつて、本書によつて萬葉研究が確實な基礎を築かれたと言へる。それ以後の萬

匠記」によつて、辭書的に語彙を分類したものである。　〔久松〕

【參考】萬葉集書目提要木村正辭○萬葉集註釋書の研究 校本萬葉集）久松潜一○契沖全集

萬葉集玉の小琴 まんえふしふたまのをごと 二册

【著者】本居宣長【成立】木版本に安永八年己亥十一月五日の宣長の自序がある。【刊行】藤原彥麿の序によれば、天保九年三月頃か。【諸本】安永八年十一月五日の宣長の序のあ

守部全集に收む。【内容】總論一册と卷一の卷首から「山川母因而奉流」の歌までの註釋七册より成る。卷一の總論には「墨繩」と題したが、卷二以下の註釋の部分には「檜杮」と題してゐる。總論は萬葉是古學要の項に始まり、題號・撰者・本文・部類・目錄・端詞・左註・卷次第・古訓新訓・異本・古鈔、以下諸註釋書・研究書の解說に及び、終りに墨繩の凡例を記した。卷一の目錄を載せ、「代匠記」の說をも掲げてゐる。註釋は「代匠記」「考」の說を掲げて次にその說を評し、自說を述べてゐる。その他「略解」や「玉の小琴」（各別項）等よりの引用文が多

如きは　さすがに歌格論者たる著者の面目を見る事が出來る。ただ紙數の割に、註釋せる部分が卷一の中途までで僅少なることを遺憾とする。〔佐佐木〕

萬葉集叢書 まんえふしふそうしよ 十六册

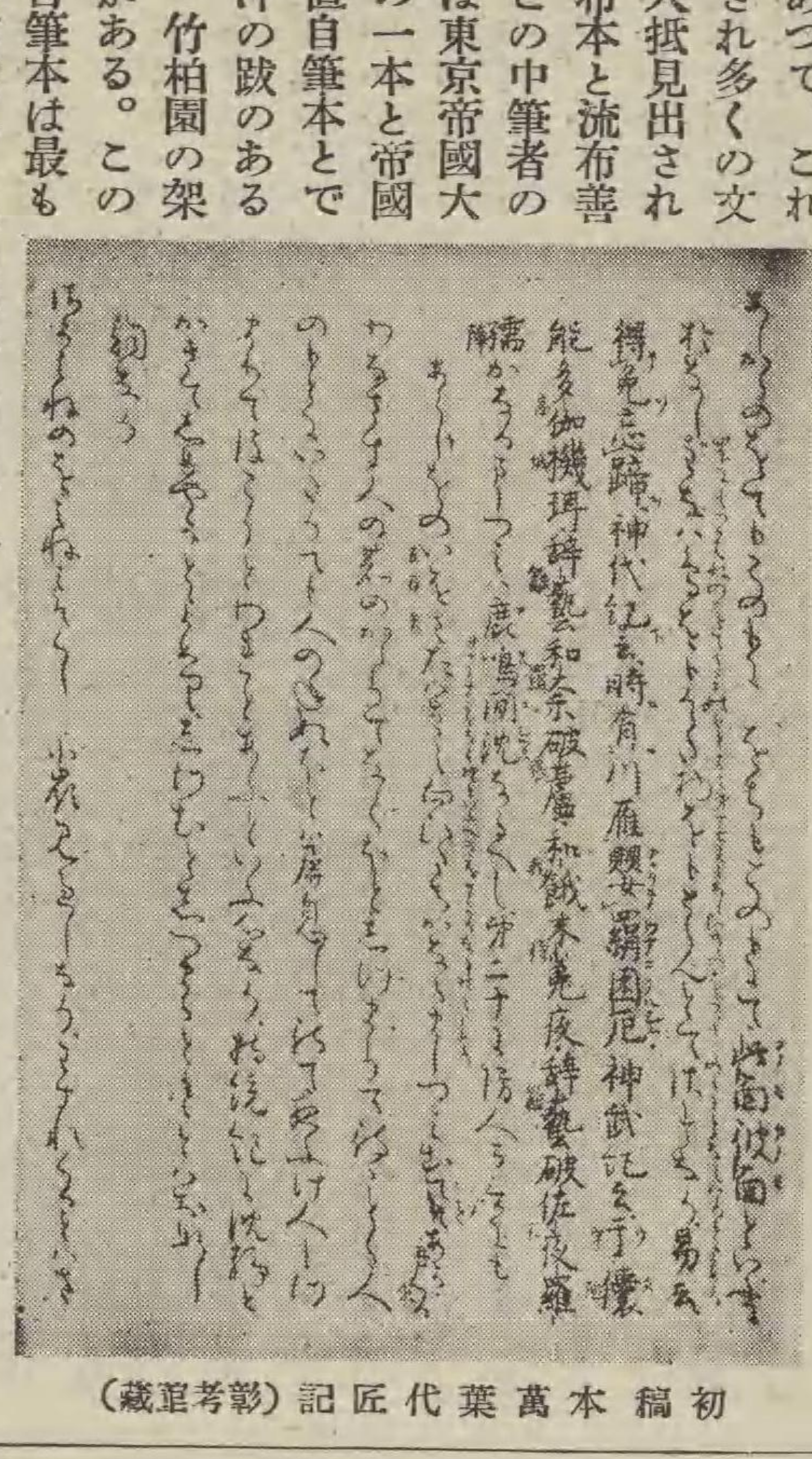
【編纂者】島木赤彥・折口信夫・武田祐吉・佐佐木信綱等。【刊行】大正十一年—昭和三年、古今書院。【解說】「萬葉集」の註釋書のうち重要な地位を占めるもの又は寫本のみで傳へられたものの等を撰んだ叢書で次の如くである。

〔第一輯〕富士谷御杖「萬葉集燈」島木赤彥校〔第二輯〕荷田春滿「萬葉集僻案抄」島木赤彥校〔第三輯〕橘守部「萬葉集檜嬬手」折口信夫校〔第四輯〕

管見」（別項）などを作つて、造詣深き浪華の下河邊長流に依囑した。長流は必ずしも恪勤の性でなかつた上に病身だつたので、長流の友で萬葉研究に深き契沖に註釋を乞うたのである。恐らく長流が辭して契沖を推擧したのであらう。契沖は極めて篤實な學者であつて二十卷全部の註を完成して獻上したところ、これを流布本にのみよつたので、本文の校勘上に不十分であつたから水戸で延寶年間萬葉集謄寫した中院本等を貸して再度の稿を乞うた。契沖は更にそれ等の異本によつて先づ本文の相違を校讎し、それによつて更に編んで獻つ

等は契沖書翰として三帖及び十三軸が彰考館に所藏せられて居り（契沖全集に契沖雜考として所收）、また現在の「精撰本代匠記」寫本に朱や墨の書入、また「精撰本」の註釋の本文を削つた所などの多くあるのは元祿三年後のものと思はれる。かく考へる時には「代匠記」は契沖の死によつて完成したとも言はれる。【諸本】初稿本と精撰本とのあることは前にも記したが、初稿本にも更に書入の有るものと無いもの、脫落のあるものと無いものなど種々の異同が有るのであつて複雜を極めてゐる。先づ初稿本に就いて見ると、主なる系統として四

種に分れる。第一は彰考館にある契沖自筆本であり、第二は似閑本系統の初稿本であつて、これに屬する善本としては京都賀茂別雷神社所藏の「似閑本代匠記」と橘純一氏藏で守部の「墨繩」にも引かれてゐる一本と東京帝國大學國語研究室藏の一本の如きがある（このうち後の二本は關東大震災の時燒失した）。第三は流布本系統の初稿本であつて、これは最も多く流布され多くの文庫や圖書館には大抵見出される。これにも流布本と流布善本とに分れる。この中筆者の注意して見たのは東京帝國大學國語研究室藏の一本と帝國圖書館藏の橘枝直自筆本とである。第四は若沖の跋のある初稿本であつて、竹柏園の架藏にかゝる一本がある。この中彰考館にある自筆本は最も信ずべきであるが、現存するのは卷一・四・五・六・七・八・九・十上下・十一上下・十二・十三・十四・十五・十七・十八・十九の十八册であるが、卷十六は竹柏園の所藏であり、その外卷二の斷片が散在してゐる。兎に角闕本となつてゐるのは殘念である。傳本の中では似閑本が最も善本であり、流布本は全體として脫落の多い惡本である。若沖本は異本とすべく、或は初稿本の原形であらう。次に「精撰本代匠記」には、水戸德川侯爵家藏に契沖自筆本があり、その他、東大圖書館藏の精撰本（和學講談所舊藏本であるが大震災の時燒失した）、及び水戸彰考館藏本（但しこれには闕本がある）、木村正辭舊藏本等がある。而して刊本としては、「精撰本代匠記」は木村正辭博士が校訂した刊本及び契沖全集本があり、初稿本も契沖全集本がある。



初稿本萬葉代匠記（彰考館藏）

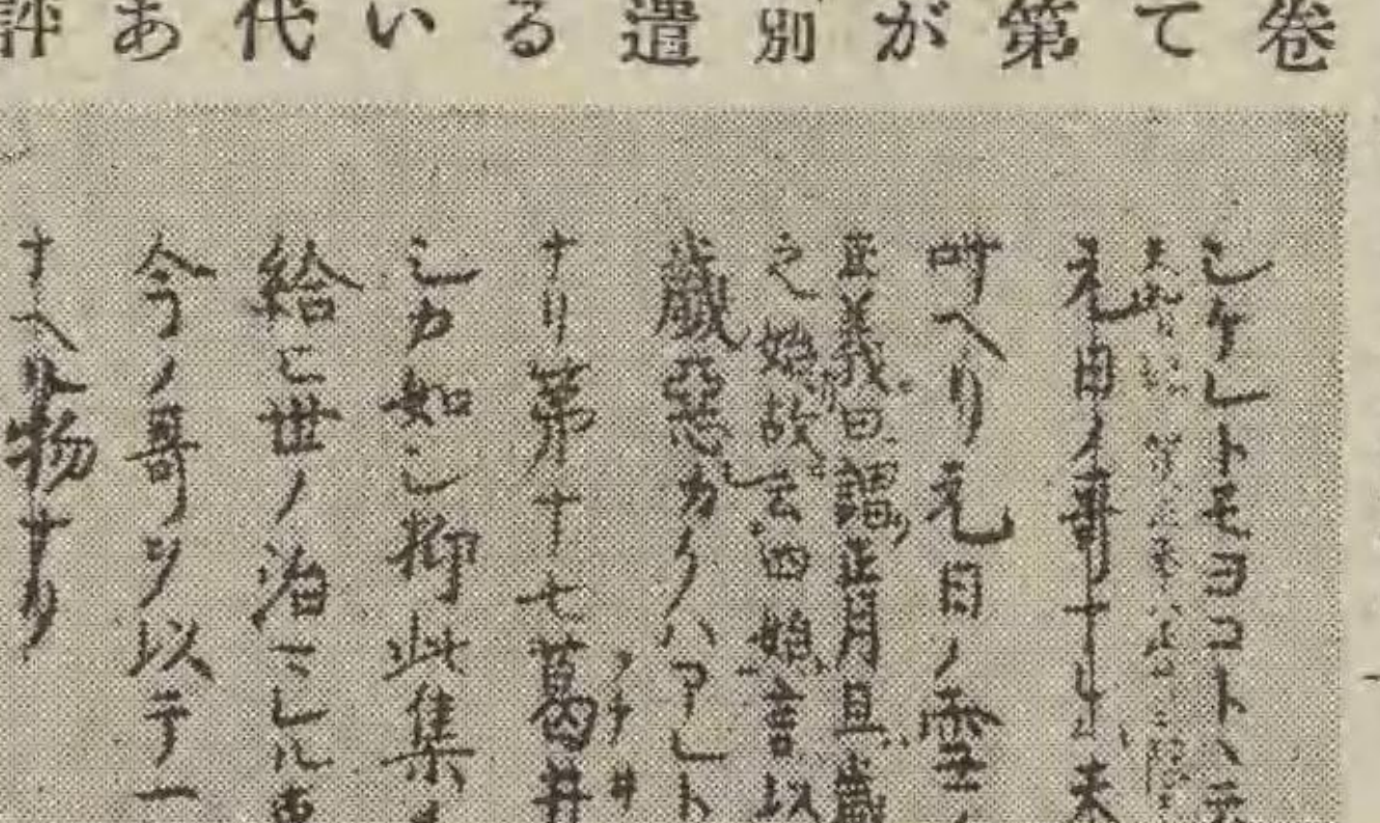
【内容】「萬葉集」の全部の歌にわたつて詳密な註を加へたものであるが、初めに總論があつて、「萬葉集」の題號撰者、用字等一般的性質及び枕詞の註釋がある。この中撰者に就いては從來の說を排して大伴家持私撰說を精細な旁證を擧げて論じてある。而して初稿本と精撰本とを比較すると種々の相違點がある。第一、態度に於て初稿本が長流の說を引用することの非常に多いのに比して、精撰本では長流の名を削り、契沖獨自の文獻的考證的態度が鋭くなつてゐる。第二に本文批評に於て初稿本は異本との對校がなかつた爲めに、內證に基づいたものが多かつたに比して、精撰本には校本（飛鳥井本）・別校本（校合本）・官本（中院本）・幽齋本（阿野本）・紀州本等との對校をなしてゐる點に本文批評が確實になり、且つ新說が多くなつた。第三に訓や解釋の上にも說を出すことが多くなり、卷一の「籠」や「莫囂圓隣之」の訓を初め、精撰本に至つて初めて出された說が尠からずある。第四に「萬葉集」の成立の年月や撰者說等に關して初稿本の說を更に多くの例證を以て確實にし、また說を進めていつた。以上の如く精撰本に至つて發達の跡が見られるが、初稿本に於ける特質としては、精撰本に比して契沖の自由な直觀から得た批評の多いことであり、稀れに初稿本の方に、却つてよき說がある點である。【史的地位】本書は近世の萬葉研究の最初のすぐれた成果であつて、本書によつて萬葉研究が確實な基礎を築かれたと言へる。それ以後の萬葉研究は、春滿・眞淵を初め、すべて本書の恩惠を蒙つてゐるのである。その意味で仙覺の「萬葉集抄」（別項）と同樣な史的地位を有するものである。【價値】絕對的價値に於ても、最も卓越してゐる。第一に契沖は科學的文獻的な方法を以て說を立ててゐる。第二に契沖は漢學・佛學に明るく、悉曇にも通じてゐた爲めに、最も博引精細である。卷五の解釋の如き、契沖に於て初めてなし得たと言へる。第三に確實な基礎による新見が多い。第四に「和字正濫鈔」（別項）に說かれた歷史的假字遣說も既に本書に於て見られるのである。その他長所は多いのであるが、比較的早き年代に成つた爲めに語釋が主であつた點、文章法的解釋や、批評の方に十分開拓しなかつた點などは、その缺點とすべきであらう。

【末書】本書を基として多少增補したと見るべきものに、水戸家で編まれた「釋萬葉集」があり、また海北若沖の「萬葉師說」も契沖の講義によつたものであるが、大體本書と內容は等しい。また若沖の「萬葉集類林」も、大體「代匠記」によつて、辭書的に語彙を分類したものである。〔久松〕

【參考】萬葉集書目提要木村正辭〇萬葉集註釋書の研究（校本萬葉集）久松潛一〇契沖全集

萬葉集玉の小琴 まんえふしふたまのをごと 二册

【著者】本居宣長 【成立】木版本に安永八年己亥十一月五日の宣長の自序がある。【刊行】藤原彥麿の序によれば、天保九年三月頃か。【諸本】安永八年十一月五日の宣長の序のある刊本二册の外に、刊行以前の形を有する寫本も世間に流布してゐる。竹柏園所藏の「玉の小琴」一册は田中大秀の手澤本であつて、卷一から卷四まで版本と同じであるが、卷一・二・三は本文と別記とが別々になつてゐる。且つこの書には流布の版本にない二條が附加されてゐる。これに對して、終りに「文化元甲子年臘月十九日　教子　田中大秀」として、「右二條流布の本になし。鈴屋元本をうつし入」とある。東大文學部國語研究室にも「玉の小琴」の寫本が二部と追考の寫本が二部ある。寫本二部とも追考と本文とが別々になつてゐるのである。追考は卷一・二・三・四までであるが、卷四の追考は「玉の小琴」の本文と同一である。



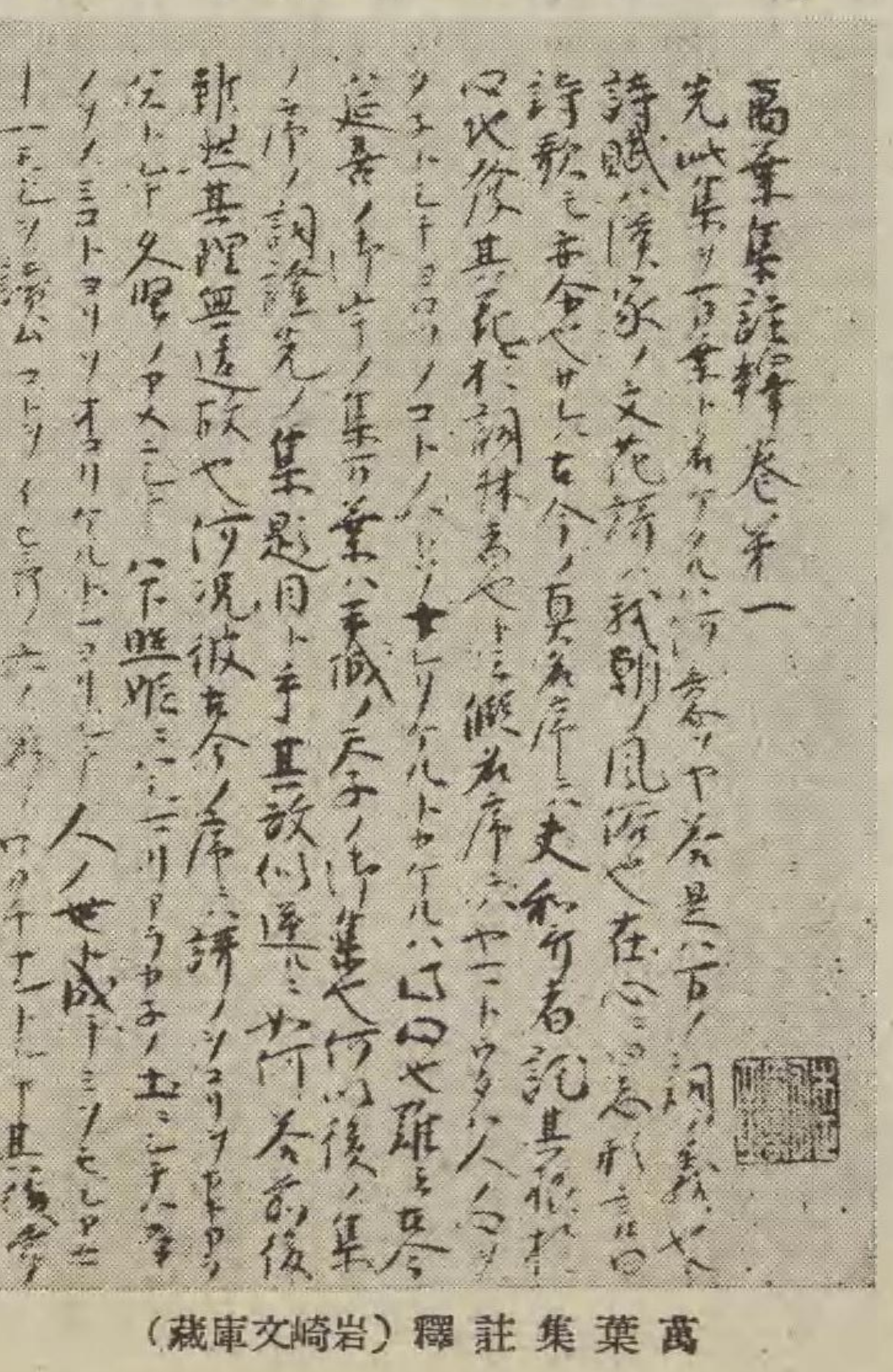
精撰本萬葉代匠記（德川侯爵家藏）

追考の一本は久米幹文の舊藏である。一本は刊行されたより以前の系統の寫本であるが、本文の文字及び說の異同は版本と寫本との間に見えない。【內容】本書は眞淵の「萬葉考」の補說として見るべきものである。版本は乾坤の二册になつて居り、上卷は「萬葉集」の卷一と卷二とのうちで、師の眞淵の「萬葉考」（別項）に對する異見を擧げたものであつて、上卷の終りに、「右一二卷ノ中ニ考ノ說ノ宜シカラヌ事ハ猶是彼アレトモ、オノレモ未タ思得ヌ事ハ皆漏シツ、今ヨリ後又考得タラムマニマニ書ツキテム」とある。下卷は卷三と卷四との摘註であるが、初めに「一二ノ卷ハ師ノ考有テ世ニ廣マレヽハイト明カ也。此三ノ卷ヨリ下ツカタハ其書未タ出ネバ、世ノ人師ノ說ヲシラス。オノレハタ千里ヲ隔テヽ在シカハ、毎々ニハ得キヽ明ラメズテヤミニキ。去ト文モテ二十卷見ナガラ二カヘリマテ疑ハシキ事ドモ問聞ツレバ、今其趣ヲ揚テワロキハワロシトコトワリ、又聞漏シツル事トモハオノカ考ヲ出シヌ。其カ中ニモ早ク師ノ云レツル事モ必有ナメド、知ラヌヲハイカヾハセム」とある。二かへりまで問ひきいたといふのは疑條奉問の事であらう。かういふ組織を有してゐる本書は宣長が全力をそゝいだものではなく、ただ極めて簡單な摘註に過ぎないが卓說に富んでゐる。卷一の雄略天皇の御歌の「菜摘須兒」を宣長以前は「ナツムスコ」と訓じ、「スコ」はいやしき子であると曲解してゐたのを、宣長が「ナツマスコ」と訓じた如きもその一である。【價値】本書は宣長の「萬葉集」研究としては、決して精細ではなく、その「萬葉集」に關する所說は「古事記傳」（別項）の中に散見するそれによつて、より多く知り得るのであるが、なほ本書は宣長がその穩健にして創見の多い學風によつて「萬葉集」を專一の對象として扱つてゐる意味で、萬葉研究史上、重要なる位置と價値とを有するものである。【參考】萬葉集書目提要木村正辭○萬葉集註釋書の研究（校本萬葉集）久松潛一○萬葉釋文索引（記傳之部）生田耕一　〔久松〕

萬葉集註釋 まんえふしふちゆうしやく

註釋書　二十卷十册　【著者】釋仙覺　【名稱】「萬葉集抄」「仙覺抄」ともいふ。【成立】卷一の終りに「文永六年二月二十四日記之訖　仙覺（在判）」とあり、卷二に、「文永六年沽洗二日於武藏國比企北方麻師宇鄉書寫畢」とあり、更に卷六には文永六年三月十三日、卷八には文永六年三月十六日、卷十に文永六年三月十八日、卷十三に文永六年三月廿一日、卷十五に文永六年三月廿九日、卷十八に文永六年孟夏朔日とあり、最後に卷二十終りに、「文永六年孟夏二日於武藏國比企郡北方麻師宇鄉政所注之了、權律師仙覺（在判）」といふ順序で成立の年月が記してある。これによつて仙覺の「萬葉集抄」の成つたのは、文永六年である事が分るが、卷一より卷二十に至るまでの間を見ると二月より四月に至る僅かに三月ばかりの間に成つた事になり、卷七・八の如き二卷を三四日で註した事になつてゐる。この十卷から成る註釋を僅かの日數で完成した事は、一見不思議に思はれるのであつて、この年附は草稿があつてそれを淨書した時を示したとも思はれる。尠くとも文永六年までに大體の草稿は作られて、この短日月の間にそれを整理し增訂して完成したと見ても差支ないと思ふ。故に完成した日を文永六年孟夏二日と見る事は可能であつても、その着手の日は遙かなる前にさかのぼるべきであらう。【諸本】現存の諸本は、すべて仙覺の弟子玄覺の書寫書入本の系統本である。奥書によると玄覺が建治元年の十一月より十二月にかけて仙覺の自筆本を人をして寫さしめたもので、且つ玄覺は弘安三年から弘安十年にかけて數度書入を加へ押紙を付けてゐる。而して我々の目にふれた中で最も注意すべき古寫本は、東京帝國大學附屬圖書館所藏の寫本と、竹柏園所藏の寫本とである。東大圖書館本は書體は片假名で、大和綴十册から成つてゐる。題簽には「萬葉集註釋」とあり、前述した玄覺の建治及び弘安の奥書もあり、更に卷二十の奥に十佛の奥書があるのである。「萬葉集書目提要」に、溫故堂藏本として引用せられたのも恐らくこの系統の本であらう。竹柏園所藏の「仙覺抄」寫本は東大本よりやゝ古いと思はれるが、同じく片假名本であり、十册から成つてゐる。この本には十佛の奥書はない。東大本と比すると多少書寫の上に異同があり、兩者相俟つて正すべき點がある。この外仙覺の「萬葉集抄」の寫本は多く存してゐるが、餘り善本はなく、未だ前二本を補ふべき古寫本を見ることを得ない。岩崎文庫藏の「萬葉集註釋」は現存する中で最も古いものであるが、僅かに總論しかない。而して「仙覺抄」の木版本は二十册で、題簽に「仙覺萬葉集抄」とある平假字本であるが、誤字も極めて多い惡本である。明治以後に於て國文註釋全書及び仙覺全集の中に收められた。

【解說】「萬葉集抄」は初めに總論として「萬葉集」の概觀、且つ研究の態度に就いて述べてある。第一に「萬葉集」の書名の意義に就いて、萬の言葉と萬世の二說があるのであるが、仙覺は「よろづのことの葉」の意味に解してゐる。また「萬葉集」の撰定に關して「古今集」にいはゆる「ならのみかど」とあるのを聖武天皇として「萬葉集」は聖武の御世に撰ばれたとし、撰者も、橘諸兄・大伴家持兩人をそれに擬してゐる。「萬葉集」撰定に關しては、今日に至るまで論議の多い部分であるが、仙覺の說には傾聽すべきものが少くないのである。彼はこれ等の說をただ想像的に提出したのでなく、道理と文證、卽ち論理的と文獻的との二つの立場から出發して立ててゐる所に學問的に尊ぶべき點がある。次に本文に入つて「萬葉集」の各卷に就いて、難歌を擇んで解釋を下してゐる。全註ではないが難歌に就いて可なり精細な解釋を施してゐる。【史的地位】本書の史的地位は萬葉註釋史の上に於てその最初に出たすぐれた註釋書である所に、獨自の地位を有するものである。「萬葉集」の註釋書は數多



萬葉集註釋（岩崎文庫藏）

くあるが、本書はその先驅的な著である點から言つて、それ以後の萬葉集註釋書はすべて本書の影響をうけてゐる。【價值】註釋書としての價值を擧げると、第一に卷一・二の如きに精細である事は多くの註釋書と同一であるが、更に卷十四の東歌や卷二十の防人の歌を詳しく註してゐるのは注意せられる。これは仙覺が東國常陸に生れて東歌を解釋する上に

に「寺町通二條下ル丁　西田庄兵衞板行」とあるものである。初めには序文を附し、最後には「下河邊氏某撰」と記して、祖冲の跋文がある。跋の終りには、「萬治己亥秋八月下旬　雲水祖冲跋」とあるが、萬治己亥は卽ち萬治二年であつて、この書の原稿の出來たのもその頃であらう（祖冲は、長流の弟子で、「林葉累塵集」の中にその名が見える）。この本は、長流の自筆を

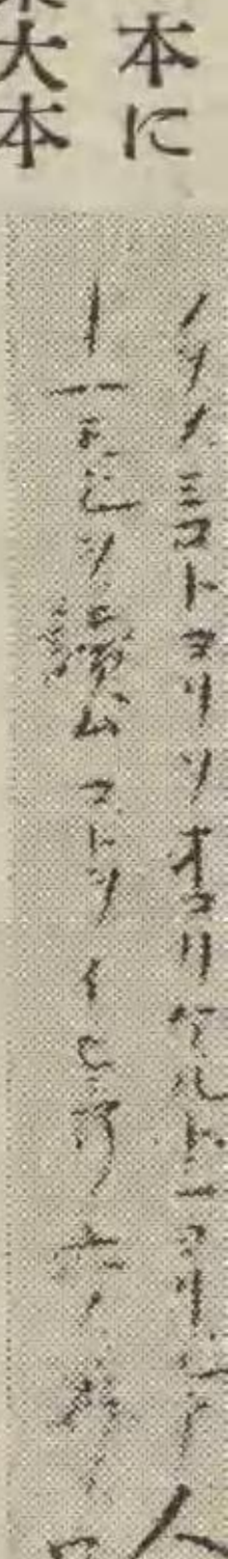
名研究書とまでは行かず、單に地理分類書といふ域に止まつてゐる。【價值】單に分類書といふにとどまり、而もその分類は、かなり不完全なものである。洩れてゐる地名も甚だ多く、所屬を誤つてゐる地名も多い。又地名でないものを地名と誤つて例にあげてゐる。大和の部の青垣山・東野、相模の部の百津島、上總國の阿取波神等の如きである。地名のよみ方も

文學」と、「記紀の歌謠より萬葉集への展開」の二項は、「萬葉」以前に如何なる歌謠が行はれてゐたか、それから如何にして「萬葉集」の歌が生れて來たかと云ふ事情の解說。二、「萬葉集を取扱ふ態度と成立の歷史」の項は、「萬葉集」の書籍としての各性質を說明したもので、萬葉各卷の內容・用字法・編纂・撰者等を解說してゐる。四―十二の九項は、作家の研究で、

モ必有ナメド、知ラヌヲハイカヾハセム」とある。二かへりまで問ひきいたといふのは疑條奉問の事であらう。かういふ組織を有してゐる本書は宣長が全力をそゝいだものではなく、ただ極めて簡單な摘註に過ぎないが卓説に富んでゐる。卷一の雄略天皇の御歌の「菜摘須兒」を宣長以前は「ナツムスコ」と訓じ、「スコ」はいやしき子であると曲解してゐたのを、宣長が「ナツマスコ」と訓じた如きもその一である。【價値】本書は宣長の「萬葉集」研究としては、決して精細ではなく、その「萬葉集」に關する所説は「古事記傳」（別項）の中に散見するそれによつて、より多く知り得るので

永六年である事が分るが、卷一より卷二十に至るまでの間を見ると二月より四月に至る僅かに三月ばかりの間に成つた事になり、卷七・八の如き二卷を三四日で註した事になつてゐる。この十卷から成る註釋を僅かの日數で完成した事は、一見不思議に思はれるのであつて、この年附は草稿があつてそれを淨書した時を示したとも思はれる。尠くとも文永六年までに大體の草稿は作られて、この短日月の間にそれを整理し增訂して完成したと見ても差支ないと思ふ。故に完成した日を文永六年孟夏二日と見る事は可能であつても、その着手の日は遙かなる前にさかのぼるべきであら

册から成つてゐる。この本には十佛の奧書はない。東大本と比すると多少書寫の上に異同があり、兩者相俟つて正すべき點がある。この外仙覺の「萬葉集抄」の寫本は多く存してゐるが、餘り善本はなく、未だ前二本を補ふべき古寫本を見ることを得ない。岩崎文庫藏の「萬葉集註釋」は現存する中で最も古いものであるが、僅かに總論しかない。而して「仙覺抄」の木版本は二十册で、題簽に「仙覺萬葉集抄」とある平假字本であるが、誤字も極めて多い惡本である。明治以後に於て國文註釋全書及び仙覺全集の中に收められた。



聽すべきものが少くないのである。彼はこれ等の説をただ想像的に提出したのでなく、道理と文證、即ち論理的と文獻的との二つの立場から出發して立ててゐる所に學問的に尊ぶべき點がある。次に本文に入つて「萬葉集」の各卷に就いて、難歌を擇んで解釋を下してゐる。全註ではないが難歌に就いて可なり精細な解釋を施してゐる。【史的地位】本書の史的地位は萬葉註釋史の上に於てその最初に出たすぐれた註釋書である所に、獨自の地位を有するものである。「萬葉集」の註釋書は數多

くあるが、本書はその先驅的な著である點から言つて、それ以後の萬葉集註釋書はすべて本書の影響をうけてゐる。【價値】註釋書としての價値を擧げると、第一に卷一・二の如きに精細である事は多くの註釋書と同一であるが、更に卷十四の東歌や卷二十の防人の歌を詳しく註してゐるのは注意せられる。これは仙覺が東國常陸に生れて東歌を解釋する上に便宜の多かつた爲めでもあらうが、從來の多くの註釋書が東歌などを閑却しがちであるのに比して、大なる特質である。第二に「萬葉集抄」は自己の訓點を多く載せてゐるとともに、所謂古點を多く擧げてゐることが注意せられる。これは多くの異本を校合した仙覺にして初めて可能とするところであらう。第三に仙覺は僧侶であつた爲めに、定家の如く單なる歌學上の知識の外に種々の方面の素養があつた事は、彼の研究方法を極めて清新な且つ獨創的なものたらしめてゐる。これは近世の初めに於ける契沖の萬葉研究の方法論と同樣である。仙覺が總論に於て道理と文證とを提示した如きもそれであるが、註釋の上に於て語學的の知識を應用した例、又悉曇學に就いても多少の素養のあつた事が見えるのは、殊に注意すべき點である。第四に今日既に湮滅せる資料を引用してゐる事、即ち風土記の今日滅びて了つたものを引用してゐるのは、風土記の資料としても貴重なるを思はせる。

【參考】校本萬葉集（仙覺全集）佐佐木信綱　〇萬葉集書志　武田祐吉　〔久松〕

萬葉集名寄（まんえふしふなよせ）　歌枕研究書　上下四卷【著者】下河邊長流【成立】年代不明。【刊行】萬治二年頃か。【諸本】數種の刊本がある。その最も古きものは無刊記で、奧に「寺町通二條下ル丁　西田庄兵衞板行」とあるものである。初めには序文を附し、最後には「下河邊氏某撰」と記して、祖沖の跋文がある。跋の終りには、「萬治己亥秋八月下旬　雲水祖沖跋」とあるが、萬治己亥は即ち萬治二年であつて、この書の原稿の出來たのもその頃であらう（祖沖は、長流の弟子で、「林葉累塵集」の中にその名が見える）。この本は、長流の自筆を版下として刊行したものと思はれる。この次に寶永七年の刊本がある。これも四册より成り、各卷の題簽及び目錄の初めの内題には、「萬葉集名所部類抄」と記されてゐる。また下之二の卷末には、前の西田庄兵衞板行の代りに、「寶永七年孟春吉祥日　兒玉氏藏板」とあるが、その他は前板と全く等しい。内題及び奧附は原板を削つて入木したものらしい。なほこの書は天和六年刊の「新撰書籍目錄大全」には四册となつてゐるのであが、元祿五年刊の「本朝彫廣益書籍目錄大全」には五册と出て居り、「群書一覽」にも、五卷と記されてゐるところを見ると、本書は四册本の外に五册本も亦出てゐるやうである。長流全集は右の第一の原刊本によつてゐる。【由來】歌をよむ時、名所を探る便あらしむるため作つたもので、「萬葉歌枕分類書」と云ふ風な書物が欲しいと考へて、作つたものである（序）。【内容】「萬葉集」の國々の名所の歌を假名まじりで記し、土地々々によつて分類し、畿内・東海・東山・北陸・山陰・山陽・南海・筑紫の順序で五十二ヶ國を排列したものである。一國のうちの名所の順序は殆ど無秩序で何を標準にして並べたのか分らない。中にごく稀にではあるが、説明を記入してゐる個所がある。それは語の解釋と、地名・人名の説明の註が最も多い。併し地名研究書とまでは行かず、單に地理分類書の域に止まつてゐる。【價値】單に分類書といふにとどまり、而もその分類は、かなり不完全なものである。洩れてゐる地名も甚だ多く、所屬を誤つてゐる地名も多い。又地名でないものを地名と誤つて例にあげてゐる。大和の部の青垣山・東野、相模の部の百津島、上總國の阿取波神等の如きである。地名のよみ方も「耳高山」「小疏宮」「刀比河内」「守山（上野國）」等、目につく誤が少くない。要するに歌作の單なる參考書として當時便宜を與へたものに過ぎない。　〔森本〕

萬葉集の鑑賞及び其批評（まんえふしふのかんしやうおよびそのひひやう）　歌論書【著者】島木赤彥【刊行】大正十四年十一月、岩波書店。【解説】晩年の著作で、「萬葉集」の歌を大體三期に分け、その各期の特色のある歌二百六十五首を選んで、純粹に鑑賞的態度をもつて講じたものである。長年月にわたる「萬葉集」の鑑賞によつて得た悟道を本書によつて窺ふことが出來、同時に同じ著者の「歌道小見」（別項）の姉妹篇とも看做すことが出來るものである。附錄として「寫生雜記」及び「萬葉集雜記」を收めてゐる。これは前篇として發行になつたのであるが、著者は大正十五年三月病歿した爲め、後篇發行の運びに至らずに終つた。〔齋藤（茂）〕

萬葉集の新研究（まんえふしふのしんけんきう）【著者】久松潛一【刊行】大正十四年九月、至文堂。昭和四年十一月增訂版。【内容】本書は東京帝大での講義に補正を加へ、別に執筆した論文を加へたもの。「萬葉集」とは如何なる書物か、如何にしてかくの如き書が生れたか、それは後世如何に取扱はれたかの三點を、ほぼ遺憾なく説き盡してある。一、「上代の抒情文學」と、「記紀の歌謠より萬葉集への展開」の二項は、「萬葉」以前に如何なる歌謠が行はれてゐたか、それから如何にして「萬葉集」の歌が生れて來たかと云ふ事情の解説。二、「萬葉集を取扱ふ態度と成立の歷史」の項は、「萬葉集」の書籍としての各性質を説明したもので、萬葉各卷の内容・用字法・編纂・撰者等を解説してゐる。四―十二の九項は、作家の研究で、人麿・赤人等の著名歌人や無名歌人を評論し、十三、「萬葉集と漢文學」の項は、「懷風藻」その他の解説で、「萬葉集」の時代的背景を觀察したもの。十四―十六（增訂版では、十七項が附加されてゐる）は、「萬葉集」と後世との關係を詳説したもので、「萬葉集」の影響をうけた歌人・小説を説き、「萬葉集」を後世の歌人・學者がどう考へたかどんな研究が試みられていつたかを説明してある。附錄として、「萬葉集」卷一の難語句に關する主なる註釋家の訓點を集めた表が附けてある。【價値】本書の内容は、凡そ一つの書籍の解説としてなされねばならぬと考へられる諸部門が、殆ど洩れなく説き及んである。この點、「萬葉集」のみならず、書物の解説書としての方法を示した書と言ひ得るであらう。これが諸所に見える著者の創見と共に、本書を研究者の座右から手離せないものたらしめてゐる。〔森本〕

萬葉集檜柧（まんえふしふひのつまで）　註釋書　七册【著者】橘守部【成立】嘉永元年【諸本】本書は從來刊本がなかつたのを雜誌「アララギ」の特別號として刊行され、橘守部全集に入り、更に萬葉集叢書に收められた。【内容】「萬葉集」卷三の中頃までを註釋したものである。總論なく、卷一は「萬葉集檜嬬手」と題し、卷二以下は「萬葉集檜柧」と題す。目錄を省く。

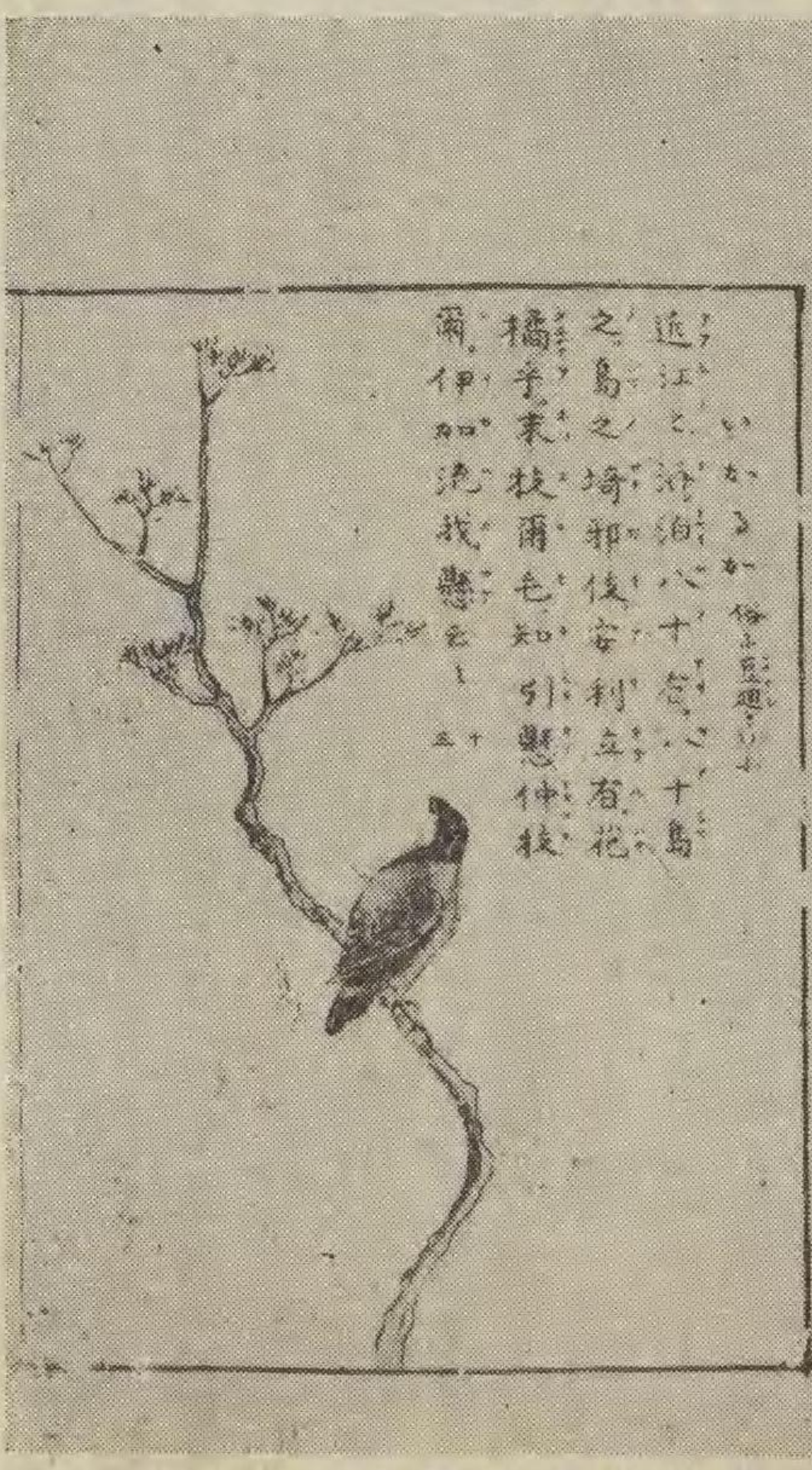
註釋は六卷より成り、別記一卷があり、これも卷二以下を草する豫定であつたらしいが、遂に成らなかつた。嘉永元年三月二十日の自序、同二十一日の凡例がある。本文の文字を校合して新たに著者の改めたものは、その文字の左傍に符を附し、註釋は一々の語句に就いて簡單明瞭に記し、終りに一首の大意を述べた。別記は特に詳しく自說を述べて考證した條項が十七箇條ある。【價値】卓見に富む新說が少くない。註釋は極めて明快で解り易く、考證に走り、枝葉の說に拘泥する等の紛はしい所のないのは、本書の一特徵であり、地理を明かにしたる點も本書の價値ある所以である。「代匠記」「考」等の說を襲用した所が少くない。〔佐佐木〕

萬葉集品物解　研究書

目錄一册・本文四册【著者】鹿持雅澄【成立・由來】「古義」の附屬的研究として著はされたもの。宮内省圖書寮藏の「萬葉集品物解目錄」内題の下に「天保七年丙申八月六日再校」と記してあるを見れば、それ以前の著作。【刊行】著者の死後、土佐に於けるその子孫及び門弟の家に藏せられて久しく刊行の機を得なかつたが、明治二十四年宮内省から「萬葉集」古義の附錄として出版せられた。【内容】「萬葉」中の動植物の研究である。緒言・目錄・本文の順に作られてゐる。緒言の部一項―七項は編纂方針、八項―十六項は用字法、十七項―十九項は動植物の名稱に關する都合十九の事項を取扱つてゐる。本文は、草類上（第一卷）、草類下、竹類（第二卷）、木類（第三卷）、鳥類・獸類・魚類・蟲類（第四卷）の七類に分けて、その各類の内を五十音順に排列してある。各動植物の解說の記し方（體裁）は、最初にその動植物名を平假名で出し、次にその動植物名の「萬葉」に出てゐる字面の全部を洩れなく原字のまゝで出し、それから集中の例歌を擧げ、その後で解說に移つてゐる。例へば、「あさ（麻）（安佐）（朝）」と最初に見出しとして出し、それから行をかへて麻の例歌と解說とを記してゐる。なほその動植物の異名が、「萬葉」に出てゐるものは、最も普通な名稱の次へ取りまとめてその異名を出して解說してある。麻の部のところへ、麻の異名である「を」「そ」を出して說明してある如きである。また熟語のやうになつてゐる物も、同樣に取扱つてある。例へば、「菅」の次に、「山菅」「小菅」「在間菅」「三島菅」等を出して說明してある如きである。見出し及び例歌を出した後に解說を記す。解說は最初に、「和名抄」「字鏡」「和名本草」等の說を載せ、次に篤信・玄達・小野博等近世の本草家の說を載せてゐる。その前か後かに自說を記す。時には故意にか無意識にか、先蹤の說を自說のやうに取り用ひて記してゐるらしい所もある。次に「萬葉」以外の古書にその動植物の出てゐる例を記す。最後に、名義―その動植物の名稱の意義（卽ち語源）を記す。【價値】雅澄は「古義」（別項）の副產物として、種々の書を作つてゐるが、この書の如きは最も傑出してゐる。これ以前に同類の書が有りはするが、これほど周到な用意を以て詳細に集中の例歌を網羅し盡し、用字法にまで注意を拂ひ、解說に於ても、古來の字書及び本草學者の說を一書に集大成し得た書は、外に見出し得ない。ただその解說の主要をなす動植物の實物の說明は、「本草綱目啓蒙」（小野蘭山）等の說に負ふところが多い。〔森本〕

萬葉集品物圖繪　研究書

三册【著者】鹿持雅澄【成立・由來】「萬葉集品物解」（別項）に現はれた動植物を圖によつて示さうとして本書を編んだものである。本書の草・竹・木等の分ち方や排列順は「品物解」と全く一致するし、また本書の今傳はる三本に何れも目錄がないのは「品物解」に讓るつもりだつたのかと思はれる。而して本書の成立には、山本世孫の「萬葉集名物考」の功が加はつてゐる事と思はれる。【諸本】三本ある。第一は、宮内省圖書寮に藏する自筆稿本「萬葉集品物圖繪稿」と題する美濃判の一冊。第二は、同寮所藏の「萬葉集古義附錄　品物圖」と題するものである。この本は、名著刊行會の手によつて、「萬葉集古義」普及版の附錄として昭和三年寫眞版で縮寫發行された。以上二本は、福羽美靜の「萬葉集古義」刊本の序文に、雅澄の嗣子飛鳥井雅慶から宮内省へ「古義」の附錄二十餘卷を奉つたとある、その内の一部だと思はれる。第三は、帝國圖書館にある上・中・下三册に分れた美濃判袋綴の本である。同本の奧書の中に、「鹿持雅澄先生之自筆」とあるが疑はしい。この三本を比較して見ると、（I）稿本は繪が、構圖も描線も如何にも素朴で寧ろ稚拙と云ふに近く、色どりは綠一色が大部分で、赤、黃等がその補ひのやうに使つてある。全然色を用ひぬ墨線だけの圖も少くなく、素人の描いたものだと一見して分るもので、恐らく雅澄自筆と思はれる。これに比べて帝國圖書館本は、色の數が非常に多くなり、塗り方も甚だ綿密である。墨の描線もなだらかな筆つきで細密に描いてある。この點が稿本と違ふ。併し各圖の構成はほぼ一致してゐる。「かたかご」「すみれ」等大きさも形も葉の曲り方等まで、寸分違はぬものが澤山ある。構圖に小異のあるものが大部分で、全く違つたものは全く同じものより少數である。これ等の類似から見ると、この二本を全然無關係だとしてしまふ事は不可能だと思はれる。なほ稿本で實物不明のため繪の書けなくて「未圖」とある部分は、帝國圖書館本でも大方「圖未だ詳かならず」となつて一致してゐる。要するに二本の間には殆ど相違がない。次に圖書寮一本は、「藤原雅澄撰」「河田小龍　畫」とある故、雅澄の指圖の下に小龍（土佐の畫師）が描いたものであらう。前記二本とは種々の點で相違してゐる。以上三本のうち、稿本は全部自筆で最も信用される本であるが、草稿とでも云ふべきものである。圖書寮一本は最もよく整理され、恐らく素人畫の拙さを憚かつて雅澄が畫だけを小龍



萬葉集品物圖繪（自筆稿本）

に依賴したものであらう。ただ帝國圖書館本は雅澄自身の淨書本か、他人の摸寫したものか、この點は明かでない。【内容】全體の組織を三卷に分け、上卷（圖書寮一本では、卷之一以下これに準ず）に草・竹類。中卷に木類。下卷に鳥・獸・魚・蟲類を圖す。この順序は「品物解」と同じである。「あさ」の次に、「さくらあさ」を出すやうに類似のものを

れて居り、我が國でも發行されてゐるが、我が國の文學書では、あまり例のない試みである。但し雅澄が自ら思ひついたのか、右の「詩經」の圖解に暗示されたのか、或は上記の山本亡羊の「萬葉名物考」に何等かの暗示を得たものか明かでない。故に創意と云ふ點で、早急に著者をほめたゝへることは出來ないが、書物そのものは、「萬葉」の理解を援けるために

の二字は抹殺してあるところから見て享保年間の作であることが分る。【諸本】羽倉氏藏本は卷一下一册だけで、春滿の訂正もあり、最も信ずべき本である。寫本は多く傳はり、三册本が多い。内容は皆同一である。刊本には萬葉學叢書本と荷田全集本とがある。【内容】「萬葉集」卷一の註釋書であつて、卷二以下は成らなかつた。註釋は本文を擧げ、次に註釋

より要所を摘出して「萬葉集美夫君志」と名づけ、明治二十二年大八洲學會より、その一部が刊行せられたが、その後も訂正校合を怠らず、書入を加へたものを淨書して、卷一が明治三十四年に上梓せられるに至つた。卷二は明治四十四年刊行。更に卷一は大正二年著者逝去後、肖像及び略傳を附して三版が公にせられた。その稿本は現に岩崎文庫に藏せられ

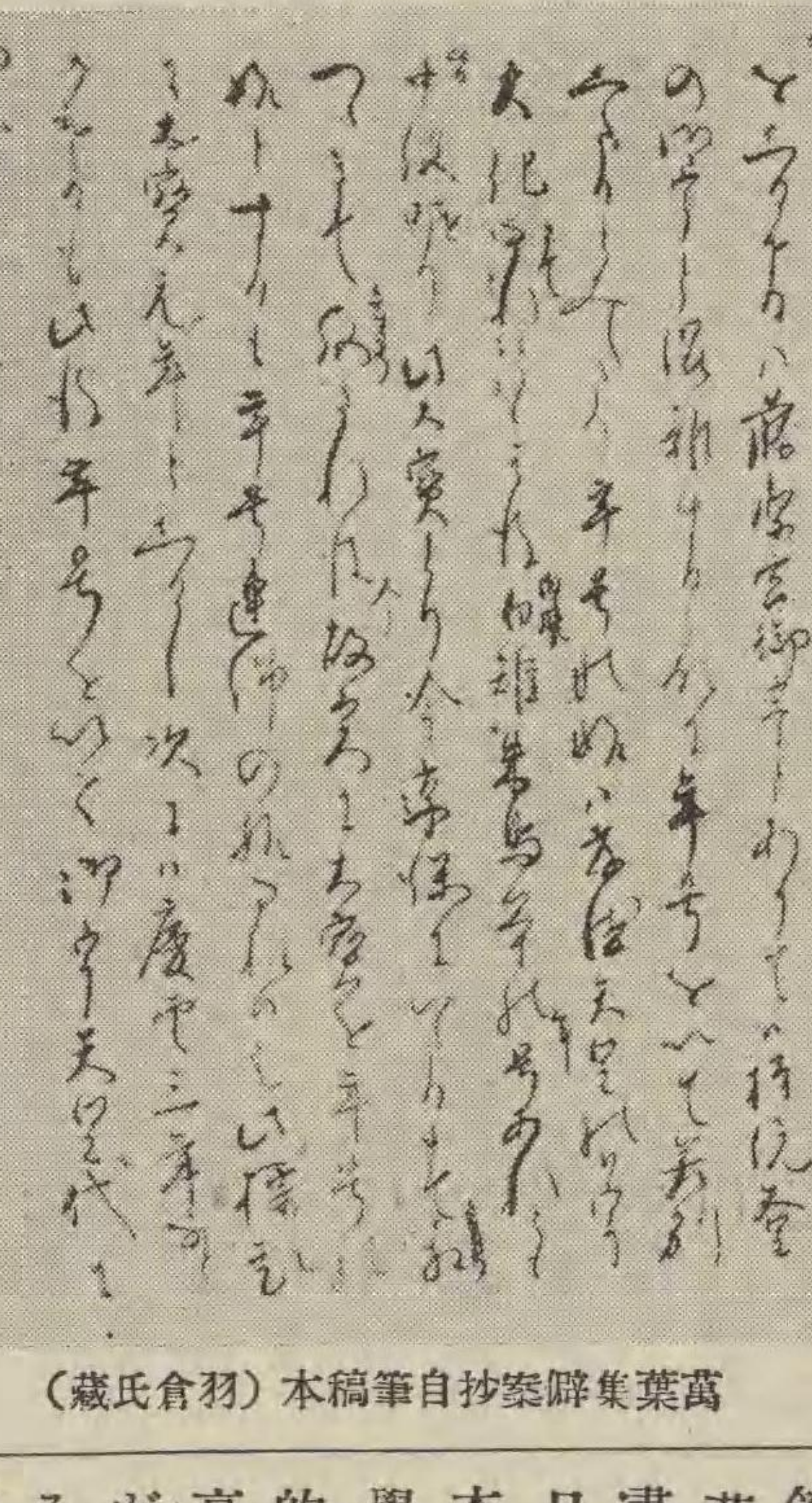
著者の死後、土佐に於けるその子孫及び門弟の家に藏せられて久しく刊行の機を得なかつたが、明治二十四年宮內省から「萬葉集」古義の附錄として出版せられた。【內容】「萬葉」中の動植物の研究である。緒言・目錄・本文の順に作られてゐる。緒言の部一項—七項は編纂方針、八項—十六項は用字法、十七項—十九項は動植物の名稱に關する都合十九の事項を取扱つてゐる。本文は、草類上（第一卷）、草類下、竹類（第二卷）、木類（第三卷）、鳥類・獸類・魚類・蟲類（第四卷）の七類に分けて、その各類の內を五十音順に排列してある。各動植物の解說の記し方（體裁）は、最初にその動植物名を平

を記す。最後に、名義—その動植物の名稱の意義（卽ち語源）を記す。【價値】雅澄は「古義」（別項）の副産物として、種々の書を作つてゐるが、この書の如きは最も傑出してゐる。これ以前に同類の書が有りはするが、これほど周到な用意を以て詳細に集中の例歌を網羅し盡し、用字法にまで注意を拂ひ、解說に於ても、古來の字書及び本草學者の說を一書に集大成し得た書は、外に見出し得ない。ただその解說の主要をなす動植物の實物の說明は、「本草綱目啓蒙」（小野蘭山）等の說に負ふところが多い。（森本）

萬葉集品物圖繪（まんえふしふひんぶつづゑ）　研究書

古義」刊本の序文に、雅澄の嗣子飛鳥井雅慶から宮內省へ「古義」の附錄二十餘卷を奉つたとある、その內の一部だと思はれる。第三は、帝國圖書館にある上・中・下三冊に分れた美濃判袋綴の本である。同本の奧書の中に、「鹿持雅澄先生之自筆」とあるが疑はしい。この三本を比較して見ると、(1)稿本は繪が、構圖も描線も如何にも素朴で寧ろ稚拙と云ふに近く、色どりは綠一色が大部分で、赤、黃等がその補ひのやうに使つてある。全然色を用ひぬ墨線だけの圖も少くなく、素人の描いたものだと一見して分るもので、恐らく雅澄自筆

め繪の書けなくて「未圖」とある部分は、帝國圖書館本でも大方「圖未だ詳かならず」となつて一致してゐる。要するに二本の間には殆ど相違がない。次に圖書寮一本は、「藤原雅澄撰」「河田小龍　畫」とある故、雅澄の指圖の下に小龍（土佐の畫師）が描いたものであらう。前記二本とは種々の點で相違してゐる。以上三本のうち、稿本は全部自筆で最も信用される本であるが、草稿とでも云ふべきものである。圖書寮一本は最もよく整理され、恐らく素人畫の拙さを憚かつて雅澄が畫だけを小龍に依頼したものであらう。ただ帝國圖書館本は雅澄自身の浄書本か、他人の摸寫したものか、この點は明かでない。【內容】全體の組織を三卷に分け、上卷（圖書寮一本では、卷之一以下これに準ず）に草・竹類。中卷に木類。下卷に鳥・獸・魚・蟲類を圖す。この順序は「品物解」と同じである。「あさ」の次に、「さくらあさ」を出すやうに類似のものを一まとめにして出してゐる點も三本同一である。草類・鳥類等の各部の內は、「品物解」と同じく五十音順に次第してゐる。次に各圖面の體裁は、上記三本とも殆ど同一で、周圍に黑い劃線を引き、內に黑線で動植物の圖を描く。その上を綠・赤・黃等の色で彩つてゐる（稿本にはまゝ色のないものがある）。その畫のない空地に、平假名でその動植物の名を記して見出しとし、横にその動植物を詠んである「萬葉」の歌一首、稀に二首を萬葉假名（右側に片假名附）で記してある。品物が不明で圖の描かれないものは「圖未ダ詳ならず」と記して歌だけを記してある。圖の無いものの數は、本によつて違ふ。稿本の各卷の最初の頁に、朱で「未圖」として名を書き出してあるものは、第一卷草竹類十五種、第二卷木類八種、第三卷が鳥類六種、通計二十九種であるが、これは最初稿本作製の折の數らしく、「あべたちばな」「もむにれ」の如きは、右の二十九種中に名が出てゐるに拘はらず圖が出てゐる。後に補充したものであらう。【價値】或る本の動植物を圖を以て示す事は、支那で「詩經」に對して淸以來試みられて居り、我が國でも發行されてゐるが、我が國の文學書では、あまり例のない試みである。但し雅澄が自ら思ひついたのか、右の「詩經」の圖解に暗示されたのか、或は上記の山本亡羊の「萬葉名物考」に何等かの暗示を得たものか明かでない。故に創意と云ふ點で、早急に著者をほめたゝへることは出來ないが、書物そのものは、「萬葉」の理解を援けるために有效な書である。「むろの木」の如き、「たかべ（鳥名）」の如き、同じ日本でも土地によつては目に見ることの出來ぬ物、或はごく稀なものを一目で知らしめるために甚だ有用な書である。內に「あづさ」「かづのき」等、今日から見てまるで違つたものを描いてゐるものや、「ねつこぐさ」の如く、實物の分らないものを分つたと誤つて圖を描いてゐる如き誤謬のあるのは、當時の本草學の程度では已むを得ぬ誤りとして許容すべきであらう。（森本）



萬葉集僻案抄自筆稿本（羽倉氏藏）

萬葉集僻案抄（まんえふしふへきあんせう）　註釋書

寫三冊【著者】荷田春滿【成立】羽倉信眞氏藏の春滿自筆本に、卷一下卷の「巨勢山乃列列椿云々」の歌の解の、大寶年號の事の條に、「此大寶より今享保にいたる迄」とあり、享保の二字は抹殺してあるところから見て享保年間の作であることが分る。【諸本】羽倉氏藏本は卷一下一冊だけで、春滿の訂正もあり、最も信ずべき本である。寫本は多く傳はり、三冊本が多い。內容は皆同一である。刊本には萬葉學叢書本と荷田全集本とがある。【內容】「萬葉集」卷一の註釋書であつて、卷二以下は成らなかつた。註釋は本文を擧げ、次に註釋を加へてゐるが、多く問答的になつてゐる。創見が極めて多いが多少獨斷的の所もある。【價値】春滿の萬葉註釋書は、「僻案抄」の外に「萬葉集改訓抄」「萬葉集訓釋」「萬葉和假名訓」等があり、また春滿の說の聞書とも言ふべき荷田信名の「萬葉童蒙抄」（別項）もあるが、本書は卷一だけではあるが、最も完備して居り、且つ最も多く流布した爲めに、春滿の見解の本書によつて傳はることが多く、春滿の萬葉學說を見る上に、最も注意すべきである。【史的地位】春滿の「萬葉集」學說が契沖の影響を享けてゐることは、本書の中に或說とあるのが契沖の「代匠記」の說であることでも知られるが、春滿の「僻案抄」の說は後の眞淵以下の萬葉研究家に影響してゐる所が多く、その歷史的意義に於て大きいものがある。

【參考】萬葉僻案抄刊本（萬葉學叢書）〇荷田全集第一卷〇校本萬葉集首卷下　（久松）

萬葉集美夫君志（まんえふしふみぶくし）　註釋書

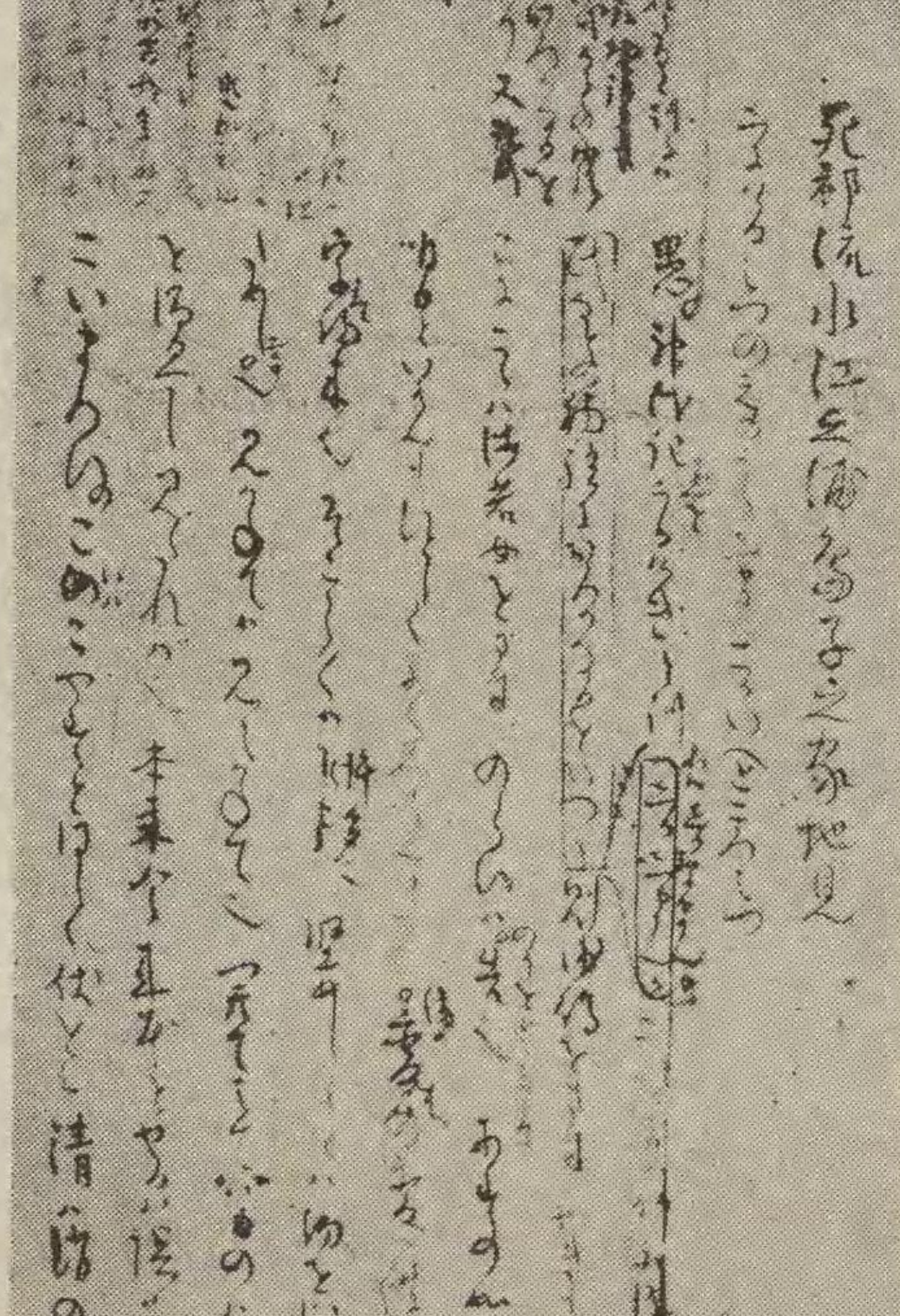
二帙八冊【著者】木村正辭【名義】卷頭の雄略帝御製の歌詞による。【成立・刊行】嘉永六年著者二十七歲の時、「萬葉」の註釋を思ひ立ち、音訓の研究、本文批評の研究、諸抄本の涉獵より始めて註釋に從事し、「萬葉集證註」と云ふものを起稿したが、果さずして王政維新の世の中となつた。その後、その「證註」の中より要所を摘出して「萬葉集美夫君志」と名づけ、明治二十二年大八洲學會より、その一部が刊行せられたが、その後も訂正校合を怠らず、書入を加へたものを淨書して、卷一が明治三十四年に上梓せられるに至つた。卷二は明治四十四年刊行。更に卷一は大正二年著者逝去後、肖像及び略傳を附して三版が公にせられた。その稿本は現に岩崎文庫に藏せられるが、幾度も改寫補訂し、初稿本・再稿本等、數種の草稿本や校正本淨書本があり、縱橫に朱墨の書入が施してある等、苦心の跡が歷々と存してゐる。【內容】第一帙は卷一の註釋二冊、首卷別記各一冊。第二帙は卷二の註釋三冊、別記一冊より成る。首卷總說の目錄は題號の事、撰者の事、訓點の事、古訓の一樣ならざりし事、歌數、略本萬葉集、古本萬葉集、附新撰萬葉集、目錄の事、本集の諸々の傳本の事、先哲の註釋に引きたる本どもの事、本書の用字中隋唐以前の音訓及び六朝の時の俗字を用ひたるものの事、文字を妄りに改むまじき事、舊訓によりて本文を改正すべきものある事、史學をせむとする人は必ず本集を研究すべき事、本集につきての縣居・鈴屋の兩大人の敎へ言、書中に引用したる本どもの稱呼。以上の諸項に分れ、古說先人の說をあげること豐富に、引證も確實で、甚だ便利である。別記二冊は、各卷の本文に說き盡し難き說、難解の語、その他の事項に就いて詳しく述べたもの。別に第一帙の別記には、附錄として加納諸平の「山多豆考」、その補正、鹿持雅澄の「玉蜻考」、その補正、「左註日本紀年紀攷」があり、第二帙の別記の附錄には、「刻本萬葉集復舊」がある。右のうち「左註日本紀年紀攷」は、萬延元年に成つた。第一帙別記の

奥にある萬延元年の奥書は、「左註日本紀年紀攷」に附するもので、「美夫君志」の成立に關するものでない。【批評】特色は、なるべく原本の文字を改易しないで訓を附して解釋しようとし、文字の改むべき箇所は、これを古寫本、その他の證本に憑據を求めた所にある。この原本に忠實なる點は著者の一貫せる態度で、賀茂眞淵や鹿持雅澄等の態度とは異なる所である。卽ち自由奔放なる獨創的態度よりも、寧ろ着實穩健なる考證的態度をとつた。それが本書の價値を高からしめてゐる。その註釋も集中の語句、或は記・紀以下「和名抄」、或は支那の音韻の書や史籍等を引いて、專ら證例をあげ、依據を正してその解の謬なからん事を期した。それゆゑ解釋は詳密にして槪ね妥當、安んじて依賴し得る書である。古說をあげる事も詳しく、疑問の辭句は多く他の註釋書の說を引いてこれを檢討してゐる。この態度を以て全卷の註釋を綜つたならば、最も優秀なる註釋書が出來上つたであらうが、僅か二卷のみの解であるは遺憾である。その引用せる從來の註釋書には、「萬葉集代匠記」「萬葉集考」「萬葉集略解」「釋萬葉集」「萬葉集燈」「萬葉集玉の小琴」「萬葉集槻落葉」「萬葉集檜柧」（各別項）などが見え、又「萬葉集攷證」（別項）の影響が多く、中には文章まで一致せるものがある。「萬葉集古義」（別項）の註解とも合致する說があるが、本書成稿の當時には、未だ「古義」は世に出でなかつたのであるから、これは暗合である。併し別記の中には「古義」の說を引き補訂を加へてゐる。これは後に增補したものである。

【參考】校本萬葉集首卷（諸本輯影）　〔佐佐木〕

萬葉集文字辨證（まんえふしふもんじべんしよう）　研究書　二卷一冊【著者】木村正辭【成立】安政二年【刊行】明治三十七年【內容】萬葉三辨證の一。安政二年二月六日の自序及び凡例がある。集中の用字の疑はしきもの、普通の字體と異なるものに就き、和漢の古書の用例を記し、諸說を擧げて論じ、また諸寫本によつてその字の異同を校し、正字・略字・俗字・造字等の別を論證したもの。上卷は岳より匣に至る三十四項、下卷は莒より桙に至る二十三項及び「偏旁を省けるなりといへる字」以下「二合字」に至る九項を收めた。【價値】三辨證はいづれも同一の態度より出てゐる。卽ちみだりに文字を改めず、變體の文字や發音・訓義の普通と異なるものがあつても、それ等の文字を改めず、變態字をも肯定し、訓をも普通の言葉で附して、容易に讀解しようと云ふ主張の上から生れた書である。隨つて時に牽强附會の說あるを免れないが、考證精緻で內外の書にわたつて博引旁證してゐるから、萬葉研究上一生面を開くと共に、從來の學者に見られない考證的立場を取つて新資料を出し、新しい方法を示してゐるのが、研究者に多大の暗示を與へる所以である。　〔佐佐木〕

萬葉集略解（まんえふしふりやくげ）　註釋書　二十卷三十冊【著者】橘千蔭【成立】寛政八年。松平定信の寛政改革の時に當つて、父枝直以來町與力を勤めてゐた千蔭は、辭職後であつたが、減祿の上百日の押込を命ぜられたのが動機となり、その間、卽ち二月より五月にわたつて閉門してゐた間に本書を起稿するに至つたのである。併し千蔭は、本居宣長に疑問の箇所を尋ね、また略解の稿成るごとに宣長のもとに送つて閱を請うた。その間の往復の手紙も存し、本書にも宣長の說が多くあげられてゐる。【刊行】文化九年【諸本】自筆稿本は一・三・四・五・十一上・十三上下・十七・十八・十九上下・二十上下の十三冊が帝國圖書館に、六・七・八・九・十上下・十四・十五上下・十六の十冊が東京帝室博物館に、序及び卷一の草稿の一部が竹柏園に藏せられる。校正及び清書の年月が記されてゐるので、その成稿の年代を知ることが出來、また表紙に春海・道別が校したといふ覺書や、伊勢の宣長の所へ遣はした日附などが記されてゐるから、その成立の過程をも知る事が出來る。刊本には「寛政八年丙辰八月刻成、文化九年壬申三月發行」の奥附があるけれども、その刊本にも版によつて若干の異同があり、前版と再版に於ては說を改めた所などもあるので、初版と改正本との差異あることを、注意すべきである。明治以後の活版本は甚だ多く、積善館本、和歌叢書本（これには、岡本保孝の萬葉集略解書入本や、鹿持雅澄の萬葉集古義等の說が鼇頭に記してあつて、略解の說が補正してある）、日本古典全集本・諸訓參考萬葉集略解（この兩本は他の註釋書の訓が參考として揭げられてゐる）、國文叢書本・校註萬葉集略解（何れも頭書があつて他の註釋書の說を參考に揭げてある）等がある。【內容】寛政三年三月の自序があり、卷二十下の奥書によれば、寛政三年二月十日起筆、同八年八月十七日稿本成り、同十二年正月十日に自ら書き綜つたといふ。而して寛政八年より文化九年三月にわたつて、全部の刊行を綜つたのである。二十卷の中、三・四・十・十一・十二・十三・十四・十七・十九・二十の十卷が上下に分れてゐるから全部で三十冊となる。宣長の說が多くあげられ、その他には凡例によれば村田春海及び信夫道別・安田躬弦の助力をも受けたと云ふ。師の賀茂眞淵の影響は最も多く、枕詞の解釋の如きは、眞淵の「冠辭考」（別項）にゆづつてこれを省き、その他にも「萬葉考」や師說を引くことが多い。更に契沖の「代匠記」や春海の說等をも引き、多くの先蹤の說を集成してゐる。又異本との校合や他書の引用の如きも、「代匠記」や「考」に引いてゐるのを多く用ひてゐる。「萬葉集」の本文は全部流布本によつて載せてゐるが、その訓の附け方は、從來の書き方とは全く違つてゐる。卽ち「萬葉集」の歌と並行に、同じ大きさを以て、平假名で歌の次の行に訓を書き記してゐる。この形式は本書の一特色である。【價値】註解が簡略で而も要を得てゐる。從つて眞淵の如き獨創的見解には乏しいが、それは寧ろ本書をして穩健中正なる態度に傾かしめ、その「萬葉集」の入門書としての價値を高からし



萬葉集略解自筆稿本（帝室博物館藏）

めてゐる。他の說を引く事が多いが、就中宣長の說に見るべきものが少くない。また何某の說と記さなくても、先人の註釋書等の說によつたものが數多く見える。他書の引用も孫引したものも多いが、中には節略して引いたところや、他書に引用したのを意を誤つて引き違へたものもある。同一語同一文字の註解が、時としては、場所の異る時に解をも異に

れよりも詳しい）○萬葉集略解補遺（中島廣足。富士谷御杖・橫山由清・黑川眞頼等の略解書入本）。【索引】萬葉集略解目錄二冊（南陔。卷々の目錄を摘錄して五十音に分類したもの、天保十四年成）○萬葉集略解通證標　一冊（風間年繁。全部より主要なる語を拔いて丁數を示す、天保十一年成）。【參考】略解關係書簡集（東京帝室博物館所藏）○萬葉集略解竟宴歌（同上）○萬葉集略解編

（三）に於ては刊本の方が優れ、（四）（五）の點では本書の方が優れてゐる。大體から云へば旋頭歌のない點は別として、刊本よりも本書の方が整頓してゐると云へる。二書何れが前に成つたものかは決し難い。【內容】「萬葉集」の短歌と旋頭歌とを集めて分類した書物である。奥書の最後に「長歌部嗣出」とある故、長歌もつづけ出して「萬葉」の全歌を分類するつ

ならつたものである。【著者小傳】美波留は、大村光枝に學び、後、塙保己一の弟子となつた學者で、文政五年四十八歲で歿した。「めざましぐさ」その他數種の著述がある。　〔森本〕

萬葉集類句（まんえふしふるゐく）　索引　三卷【著者】賀茂季鷹【成立】江戶在住（十九歲、江戶へ赴く）の折から、三十八歲（寛政元年）で京都へ

せる從來の註釋書には「萬葉集代匠記」「萬葉集考」「萬葉集略解」「釋萬葉集」「萬葉集燈」「萬葉集玉の小琴」「萬葉集槻落葉」「萬葉集檜杺」（各別項）などが見え、又「萬葉集攷證」（別項）の影響が多く、中には文章まで一致せるものがある。「萬葉集古義」（別項）の註解とも合致する説があるが、本書成稿の當時には、未だ「古義」は世に出でなかつたのであるから、これは暗合である。併し別記の中には「古義」の説を引き補訂を加へてゐる。これは後に增補したものである。

【參考】校本萬葉集首卷（諸本輯影）〔佐佐木〕

萬葉集文字辨證 まんえふしもんじべんしよう 研究

い方法を示してゐるのが、研究者に多大の暗示を與へる所以である。〔佐佐木〕

萬葉集略解 まんえふしふりやくげ 註釋書 二十卷三十册【著者】橘千蔭【成立】寛政八年。松平定信の寛政改革の時に當つて、父枝直以來町與力を勤めてゐた千蔭は、辭職後であつたが、減祿の上百日の押込を命ぜられたのが動機となり、その間、即ち二月より五月にわたつて閉門してゐた間に本書を起稿するに至つたのである。併し千蔭は、本居宣長に疑問の箇所を尋ね、また略解の稿成るごとに宣長のもとに送つて閲を請うた。その間の往復の手紙も存し、本書にも宣長の説が多くあげられ

注意すべきである。

明治以後の活版本は甚だ多く、積善館本、和歌叢書本（これには、岡本保孝の萬葉集略解書入本や、萬葉集略解札記や、鹿持雅澄の萬葉集古義等の説が鼇頭に記してあつて、略解の説が補正してある）、日本古典全集本・諸訓參考萬葉集略解（この兩本は他の註釋書の訓が參考として揭げられてゐる）、國文叢書本・校註萬葉集略解（何れも頭書があつて他の註釋書の説を參考に揭げてある）等がある。【內容】寛政三年三月の自序があり、卷二十下の奧書によれば、寛政三年二月十日起筆、同八年八月十七日稿本成り、同十二年正月十日に自ら書き終つたといふ。而して寛政八年より

の説を集成してゐる。又異本との校合や他書の引用の如きも、「代匠記」や「考」に引いてゐるのを多く用ひてゐる。「萬葉集」の本文は全部流布本によつて載せてゐるが、その訓の附け方は、從來の書き方とは全く違つてゐる。即ち「萬葉集」の歌と並行に、同じ大きさを以て、平假名で歌の次の行に訓を書き記してゐる。この形式は本書の一特色である。【價値】註解が簡略で而も要を得てゐる。從つて眞淵の如き獨創的見解には乏しいが、それは寧ろ本書をして穩健中正なる態度に傾かしめ、その「萬葉集」の入門書としての價値を高からし

めてゐる。他の説を引く事が多いが、就中宣長の説に見るべきものが少くない。また何某の説と記さなくても、先人の註釋書等の説によつたものが數多く見える。他書の引用も孫引したものも多いが、中には節略して引いたところや、他書に引用したのを意を誤つて引き違へたものもある。同一語同一文字の註解が、時としては、場所の異る時に解をも異にしてゐる事があり、必ずしも一貫して統一ある態度で註解したものではない。本書はしかく幾多の缺點短所を有しながらも、入門書としては最も適したものといふべく、「萬葉集」の最も簡便なる全註として、今日まで世に行はれてゐる。なほ異本との校異の如きも、多くは「代匠記」によつたものであるが、ただ元曆校本を初めて引用して、本文校勘の上に使つたのは、本書の一功績である。

【研究書】右の如く本書は最も廣く行はれた結果、その説の不備を補正する書も多く編まれてゐる。○萬葉集略解直日 二册（橘守部。略解の卷一・二を寫して、自説を頭書してゐる）○荏野のつみ草 六册（田中大秀。大秀が師宣長の説及び自説を略解全部に書き入れたものを、元田修三氏が摘記したもの）○萬葉集略解補闕二册（八木美穗。卷一より卷五に及ぶ。卷一は弘化三年、卷二は嘉永六年成）○萬葉集略解札記十一册（岡本保孝。略解の句を拔抄し、その註を補正したもの、もと略解に書き入れたのを寫したものである。慶應四年成）○萬葉集略解補正一册（間宮永好。卷一の補正）○萬葉集略解補一册（安部眞貞。卷一より卷七までの補正）○萬葉集略解補正十六册（木村正辭。卷一より卷十四まで及び卷二十の補正、初卷の題簽には楢の落葉とある。萬延元年起筆、明治元年成）○萬葉集略解正誤二册（木村正辭。前書の再稿で、そ

れよりも詳しい）○萬葉集略解補遺（中島廣足。富士谷御杖・横山由淸・黑川眞賴等の略解書入本）。

【索引】萬葉集略解目錄二册（南陔。卷々の目錄を摘錄して五十音に分類したもの、天保十四年成）○萬葉集略解通證標 一册（風間年繁。全部より主要なる語を援いて丁數を示す、天保十一年成）。

【參考】略解關係書簡集（東京帝室博物館所藏）○萬葉集略解竟宴歌（同上）○萬葉集略解編成の事情 關根正直（帝國文學八ノ六）○萬葉集書目提要 木村正辭 ○校本萬葉集首卷（諸本輯影）〔佐佐木〕

萬葉集類句 まんえふしふるゐく 索引 五册【著者】長野美波留【成立】寛政十一年春【諸本】寛政十一年の刊本は著者自ら發刊したもので、著者の最も意に叶つたものであらうが、今、宮內省圖書寮に藏されてゐる「萬葉類句四句一卷」と表題のある寫本がある。序文も奧書もないから、誰が如何にして作つた本か不明だが、その內容が刊本と酷似してゐるから刊本の異本と認むべきものであらう。刊本との相違をあげると、(一)刊本の四册なるに對し、本書は全部を一册に纏めてある。(二)刊本が短歌と旋頭歌との分類なるに對し、本書には旋頭歌がない。(三)刊本は例歌を出すのに、例歌の上に卷數と頁數とを並記してゐる。本書は卷數のみで頁數を記さない。(四)刊本よりも、本書の方が例歌がかなり豐富である。最初から十五首ほどで二首の違ひがあるから、全體としては餘程の數に上るであらう。(五)刊本では、寛永年間刊行の萬葉流布本を底本としてゐるから、流布本の誤のまゝ分類してゐる。本書は、寛永版を用ひてゐることは確かであるが、甚しい誤はその右わきに訂正を書きこんでゐる。通觀すると、(一)

(三)に於ては刊本の方が優れ、(四)(五)の點では本書の方が優れてゐる。大體から云へば旋頭歌のない點は別として、刊本よりも本書の方が整頓してゐると云へる。二書何れが前に成つたものかは決し難い。【內容】「萬葉集」の短歌と旋頭歌とを集めて分類した書物である。奧書の最後に「長歌部嗣出」とある故、長歌もつづけ出して「萬葉」の全歌を分類するつもりであつたらしいが、長歌の方は完成されたか否か不明である。本書は短歌を三句まで（即ち後世の上の句）と四句以下（即ち下の句）までとに分ち、第四句の初めの語によつて分類排列してゐる。排列は、いろは順である。故に全體が、いろは四十七音に分類され、そのいの部・ろの部の內で、更にいろは順（下の句の初語のいろは順）に排列されてゐる。例へばいの部の最初を例示すれば、

十　五十四　こひまろひこひはしぬともいちしるくいろにはいてしあさかほの花（以上を一行に記した）

四　四十四　いふことのさかなき國そくれなゐのいろにないてそおもひしぬとも　大伴坂上郎女（同右）

七　二十四　月草にころもはそむるきみかためいろとるころもすらんおもひて（同右）

何れも第四句の「いろにはいでし」「いろにないでそ」「いろとるころも」で、順番つけて並べたものであることが明かである。かくの如くして、第一册から第四册の大部分で短歌を終り、次に第四册の最後の三枚半に旋頭歌を載せてゐる。旋頭歌は短歌の上の句の代りに、第四句迄を上の句と見、第五句・六句を下の句と見なして、第五句の初語で排列してゐる。以上の編纂法は「古今類句」などの編纂體裁に

ならつたものである。【著者小傳】美波留は、大村光枝に學び、後、塙保己一の弟子となつた學者で、文政五年四十八歲で歿した。「めざましぐさ」その他數種の著述がある。〔森本〕

萬葉集類句 まんえふしふるゐく 索引 三卷【著者】賀茂季鷹【成立】江戶在住（十九歲、江戶へ赴く）の折から、三十八歲（寛政元年）で京都へかへつた後も、仕事をつづけて文化二年九月（五十二歲）に脫稿したもので、少くとも十四五年以上を費して延び〳〵になりながら出來上つたものである。なほ訓の附方は羽倉濟風の助力を得てゐる。【刊行】文化三年春【內容】「萬葉集」の短歌と旋頭歌とを下の句（何れも第四句以下）で探し出すために作られた書で、下の句索引とも云ふべき書である。最初に序文があつて本書の編纂の方針と由來とをのべ、次に本文、最後に跋がある。本文は全體をいろは順に區分排列し、そのい部・ろ部等の各部の內を更にいろは順に排列して、「萬葉」の歌の第四句の頭字のいろは順によつて並べてゐる。上卷に、「い」から「か」まで、中卷に「よ」から「て」まで、下卷に「あ」から「す」までを收めてゐる。各歌の上には、卷數と丁數とを記してある。短歌と旋頭歌とは區別を立てず、混合して一樣に排列してゐる。【價値】本書は、四年後の文化七年に刊行された同人の「萬葉集長歌類句」と併せて、「萬葉集」の歌の索引書であるが、永年の苦心に拘らず、畢竟、第四句索引書、又は第四句類句集に終つてゐる。この點、長野美波留の「萬葉集類句」（別項）と同樣な根本的な缺陷を持つてゐて、本書が今日顧みられぬ理由はこゝに在る。これは亦萬葉時代には、後世の上句・下句の考へはなく、且つ

句の切れやうも第三句で切れてゐた事を知らなかつた點でも許容出來ぬ缺陷である。旋頭歌を短歌と區別せず一緒に混合して排列してゐるのは、兩者の特質を知らず、前者は短歌の下にも一句加はつたものぐらゐの考へで扱つたものらしく、これも他の同類の索引書に劣つてゐる點である。但し本書の用意に對しては推稱する價値がある。殊に「野」を「ぬ」、「しのぶ」を「しぬぶ」として入れてそれを序文にことわつたり、古點の誤つてゐるのを訂正して用ひたりしてゐる點は、他の類似書に缺けた用意で、本書の特色である。全體として今日からは用のない書であるが、當時としては、作歌や研究のため（殊に前者のため）に有用な書であつたであらう。〔森本〕

萬葉集類林（まんえふしふるゐりん）　辭書　十五卷

【著者】海北若沖【諸本】從來寫本として傳へられてゐたが、契沖全集附卷長流全集に附載せられて、本文十五卷が飜刻せられ、別に萬葉集類林索引が添うてゐる。【內容】集中の語をいろは別に分ち、更にその中を、釋言・釋人・釋宮・釋器・釋天・釋地・釋草・釋蟲・釋雜の名目に分つて掲げ、その註の出でた卷數・丁數及び歌詞を若干句記し、次にかなり詳しい註解・考證を記した書である。集中の用例のみならず、他の古典・辭書等の所見をも附してゐる。註解は多く契沖の說によつた。師說とて契沖說を引いた外、木瀨三之・下河邊長流等の說をも載せてゐる。若沖の著「古類葉抄」七册は、萬葉及び記・紀の語をいろは分にして解を添へたもので、「萬葉集類林」の初稿本となつたものである。【價値】いろは別の中を更に分類したのは煩雜にすぎるが、用例も豐富で、註釋も詳しく、辭書と索引とを兼ねた書として卓越した書である。殊に古學開けて間もなき頃の著として、かく尨大且つ精緻な編著をものしたのは、たとひ不備な點や誤れる解があつても、多く稱するに足るものがある。實に古語の辭典としては最初に出た完備せる書と云ふ事が出來る。

【附記】楫取魚彥の「楫乃嬬手」（五册。嘉永四年刊）は「萬葉集類林」と「萬葉考」とによつて「萬葉」及び記・紀の語を五十音順に排列したもので、橘守部の「萬葉集墨繩」には「萬葉類林」として本書の解題が記されてゐる。〔佐佐木〕

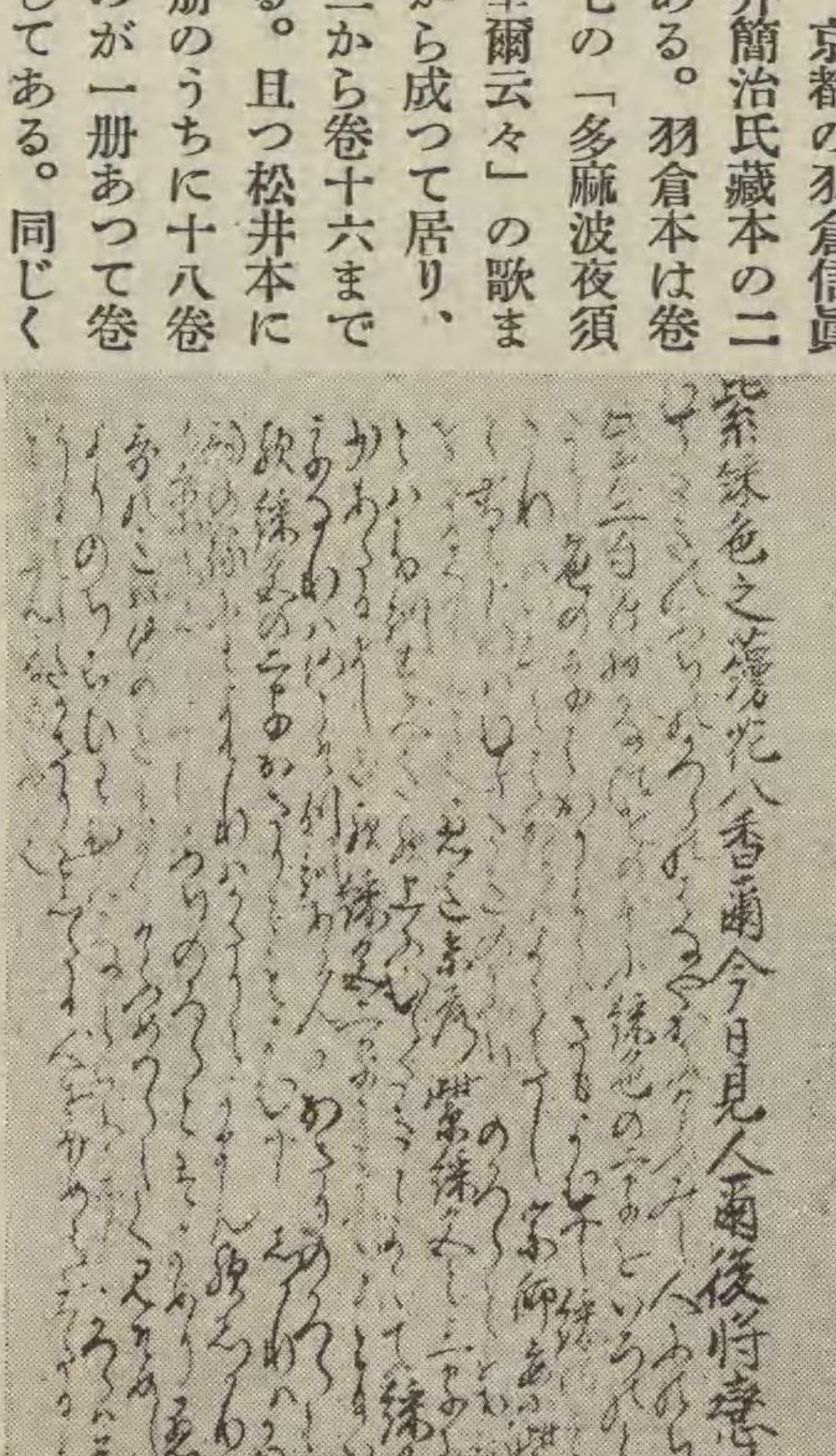
萬葉新採百首解（まんえふしんさいひやくしゆかい）　抄釋書　三卷二册

【著者】賀茂眞淵【成立】寶曆二年【刊行】嘉永四年【諸本】自著稿本は竹柏園に存す。刊本には誤脫がある。賀茂眞淵全集にも入る。【內容】刊本には賀茂眞淵の序文、藤原眞彥の跋文がある。集中より優れたる短歌百首を選出し、春・夏・秋・冬・相聞（以上上卷）・羇旅（中卷）・遊覽・古京・皐居・雜事・宴會・賀（以上下卷）に分類して、詳しい註釋・批評を加へたもの。部類分中の歌の掲出順は卷の順によらず、同種の歌を同一の箇所に掲げてゐる。歌詞は先づ萬葉假字で記し、次に訓を別提して草假字で記した。附記に「萬葉集」の歌のすぐれたる所以を論じて古道に說き及んでゐる。【價値】百首の短歌は、いづれも傑出した歌で、さすがに眞淵の歌を見る眼の秀でたことが分る。註釋も親切且つ明快で、臆說・獨斷も少く、批評も亦肯綮に價するものがあつて、好著である。附記の古今の歌の差違を論じた說も、眞淵の意見を窺ふ上に好資料たるを失はぬ。【附記】「萬葉新採百首」は、百首の短歌だけを橘千蔭が書いて享和三年に刊行したものである。〔佐佐木〕

【參考】萬葉新採百首解補註（寫）藤井高尙

萬葉童蒙抄（まんえふどうもうせう）　和歌　四十六册

【著者】荷田信名。從來、荷田春滿の著書と傳へられたのであるが、本書を見ると春滿の說を宗師案として掲げ、別に「愚案」と說があげてあるので、本書は春滿の說を主としてその門弟が記したものといふことになるが、羽倉家藏の羽倉可亭良信撰の「荷田東丸遺稿目錄」といふ寫本の中に「萬葉集童蒙抄信名筆記」とあるから、この書は信名の著書である事が知られる。信名は春滿の弟である。【成立】「萬葉僻案抄」の成立後とすれば、享保以後であらう。【諸本】京都の羽倉信眞氏藏本と松井簡治氏藏本の二部の寫本がある。羽倉本は卷二から卷十七の「多麻波夜須武庫能和多里爾云々」の歌まで四十六册から成つて居り、松井本は卷三から卷十六まで四十四册ある。且つ松井本には、四十四册のうちに十八卷異本といふのが一册あつて卷八の註を施してある。同じく卷八の註を施してある松井本の第二十册、羽倉本の第二十册とを比較するに、松井本・羽倉本の二十はほぼ同じであるが、この十八卷異本は餘程趣を異にしてゐる。內の表紙に、「萬葉集移徙草」とあり、「此卷は重出なれとも註に異同有之」と記してある。が、この異本は「萬葉集代匠記」初稿本が一册紛れて入つたのであるから、松井本は四十三册になつてゐるといふことが出來る。松井本は大震災の時一部燒失した。荷田全集所收。【內容】「萬葉集」卷二から卷十七に至る註釋書である。卷一のないのは恐らく「萬葉集僻案抄」につぐためであつたらう。詳細な註釋書であるが春滿の講義に基づいて信名が記したのであらう。未整頓なところが多い。全體として訓の上にも註釋の上にも創見が多いが臆說もある。【價値】本書は春滿の著書と言ふことは出來ないにしても、春滿の說を基礎にして成つたものであるから、春滿の萬葉學說を知る重要資料としても、又信名の萬葉學者としての特質を見る上からも重要なものである。殊に春滿の他の萬葉註釋書が多く零卷であるに對して、「萬葉集」の十數卷を註釋した大部なものであるから、萬葉註釋書としては、たとひ未完成であり臆斷が多いにしても重要なるものである。



萬葉童蒙抄（羽倉信眞氏藏）

【參考】校本萬葉集首卷下〇荷田全集　〔久松〕

萬葉山常百首（まんえふやまとひやくしゆ）　拔萃書　一卷

【編者】本居大平【成立】文化十二年【刊行】文政三年【諸本】本居大平全集所收。

【解說】「萬葉集」中より、古道の助けとなる歌を卷の順に百首を抄出したもの。傍訓を附し、卷數・丁數を記す。文政三年の安田長穗の序文、編者の跋文がある。

【參考】萬葉山常百首解久保季玆（明治十六年刊）〇萬葉山常百首諸義木村正辭　〔佐佐木〕

萬葉用字格（まんえふようじかく）　研究書　一卷

【著者】釋春登【成立】文化十四年【刊行】文化十五年【內容】文化十五年二月の狩谷棭齋の序、文化十四年正月の自序例言がある。集中の用字を五十音順に分ち、各部の中を更に、正音・略音・正訓・義訓・略訓・約訓・借訓・戲書の八種に分つて文字を掲げ、傍訓を附し、

氏に對するそれ〴〵異つた忠節義心を取扱つたもので、史實としては「東鑑」「源平盛衰記」に記された所に據つてゐる。

【梗槪】〔一段〕（眞鶴崎）石橋山に敗れた賴朝主從七騎は協議の末、土肥遠平を使者として援を關八州の侍に求める事になる。義朝の勘氣をうけた儘死んだ八丁礫の喜平治の寡婦と遺兒大三郎が烏帽子賣となつて來り謁し、手

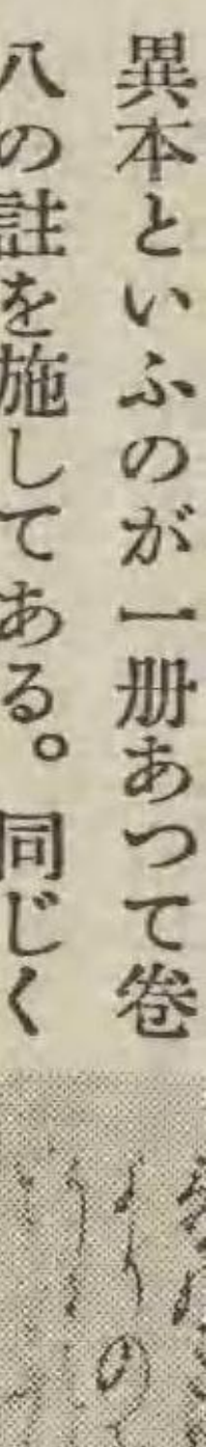
うと、後家を伴ひ許嫁の青貝師の娘梢を尋ね、遊女請出金に入用と稱し傾城勤めをして吳れと賴む。梢は後家に嫉妬する。舅六郎太夫は本心を見破り、豫て大場景親が懇望の劍を手放さうと梢を連れて急ぐ。（星合寺）大場に劍の目利きを乞はれた梶原平三は稀代の名劍と賞し、中字の「八幡」の文字に何事かを察する。なほも俣野の横槍で二つ胴の試し斬りをする

持せる名劍の威德によつて玉房についてゐた妖狐、曾て大助が那須野で射とめた玉藻前の靈が退散し、その劍は昔大助が忘れ形見の嬰兒に與へたものと知れ、六郎太夫は三浦の長男であつた事が明かになる。大助はその菩提のため、すぐに有髮の僧となり、名も長命の瑞を顯はし、瑞翁と名乘る。〔五段〕（石橋山）再擧の賴朝勢に畠山・梶原が來り屬し、眞田文

釋人・釋宮・釋器・釋天・釋地・釋草・釋蟲・釋雜の名目に分つて掲げ、その註の出でた卷數・丁數及び歌詞を若干句記し、次にかなり詳しい註解・考證を記した書である。集中の用例のみならず、他の古典・辭書等の所見をも附してゐる。註解は多く契沖の説によつた。師説と契沖説を引いた外、木瀨三之・下河邊長流等の説をも載せてゐる。若沖の著「古類葉抄」七冊は、萬葉及び記・紀の語をいろは分にして解を添へたもので、「萬葉集類林」の初稿本となつたものである。【價値】いろは別の中を更に分類したのは煩雜にすぎるが、用例も豐富で、註釋も詳しく、辭書と索引とを兼ねた書

の順によらず、同種の歌を同一の箇所に掲げてゐる。歌詞は先づ萬葉假字で記し、次に訓を別提して草假字で記した。附記に「萬葉集」の歌のすぐれたる所以を論じて古道に説き及んでゐる。【價値】百首の短歌は、いづれも傑出した歌で、さすがに眞淵の歌を見る眼の秀でたことが分る。註釋も親切且つ明快で、臆説・獨斷も少く、批評も亦肯綮に價するものがあつて、好著である。附記の古今の歌の差違を論じた説も、眞淵の意見を窺ふ上に好資料たるを失はぬ。【附記】「萬葉新採百首」は、百首の短歌だけを橘千蔭が書いて享和三年に刊行したものである。〔佐佐木〕

異本といふのが一冊あつて卷八の註を施してある。同じく卷八の註を施してある松井本の第二十冊、羽倉本の第二十冊とを比較するに、松井本・羽倉本の二十はほぼ同じであるが、この十八卷異本は餘程趣を異にしてゐる。内の表紙に、「萬葉集移徒草」とあり、「此卷は重出なれとも註に異同有之」と記してある。が、この異本は「萬葉集代匠記」初稿本が一冊紛れて入つたのであるから、松井本は四十三冊になつてゐるといふことが出來る。松井本は大震災の時一部燒失した。荷田全集所收。【内容】「萬葉集」卷二から卷十七に至る註釋書である。卷一の



ら、萬葉註釋書としては、たとひ未完成であり臆斷が多いにしても重要なるものである。【參考】校本萬葉集首卷下○荷田全集　〔久松〕

萬葉山常百首（まんえふやまとひやくしゆ）　拔萃書　一卷　【編者】本居大平　【成立】文化十二年　【刊行】文政三年　【諸本】本居大平全集所收。【解説】「萬葉集」中より、古道の助けとなる歌を卷の順に百首を抄出したもの。傍訓を附し、卷數・丁數を記す。文政三年の安田長穗の序文、編者の跋文がある。【參考】萬葉山常百首解久保季茲（明治十六年刊）○萬葉山常百首諸義木村正辭　〔佐佐木〕

萬葉用字格（まんえふようじかく）　研究書　一卷　【著者】釋春登　【成立】文化十四年　【刊行】文化十五年　【内容】文化十五年二月の狩谷棭齋の序、文化十四年正月の自序例言がある。集中の用字を五十音順に分ち、各部の中を更に、正音・略音・正訓・義訓・略訓・約訓・借訓・戲書の八種に分つて文字を掲げ、傍訓を附し、割註にその文字の出でた卷數・用例を記したものである。稀に記・紀の用例をも記した所がある。又註解もある。それは多く「略解」に從つてゐる。【價値】集中の文字の用例を一目して知るのに便利な書で、この種の書としては唯一の刊本である。又索引の用をなす所もあり、研究者に便宜を與へる。但し文字に洩れたものや誤り等もあつて、更に多くの補正を必要とする。【參考】萬葉用字格補遺　木村正辭　〔佐佐木〕

み

三井寺（みゐでら）　「狂女物の謠曲」を見よ。

三浦大助紅梅靮（みうらのおほすけこうばいたづな）　淨瑠璃　五段　時代物　【作者】長谷川千四・文耕堂　【名稱】四の切、衣笠落城を前に、大助が紅梅靮を搔繰つて、馬を進める件による。【興行】享保十五年二月十五日初日、竹本座。【諸本】文耕堂淨瑠璃集（續帝國文庫）所收（歌舞伎臺帳は、時代狂言傑作集卷一・日本戲曲全集卷二十六に收む）。【題材】源賴朝の伊豆擧兵に際し、俗に「三浦大助百六つ」と謠はれた老將義明と、その一黨及び畠山重忠・梶原景時などの、源氏に對するそれ〳〵異つた忠節義心を取扱つたもので、史實としては「東鑑」「源平盛衰記」に記された所に據つてゐる。【梗概】〔一段〕（眞鶴崎）石橋山に敗れた賴朝主從七騎は協議の末、土肥遠平を使者として援を關八州の侍に求める事になる。義朝の勘氣をうけた儘死んだ八丁礫の喜平治の寡婦と遺兒大三郎が烏帽子賣となつて來り謁し、手柄を立てた上、主從となる事を約して別れる。（衣笠城）百六歲の誕辰を迎へた三浦大助は、一門九十三騎を集めて祝ひを受けるが、惣領娘お土のみは、その子岡崎父子が賴朝擧兵に馳せ參じた留守を預つた爲めに不參と聞き、出陣の機を逸した事を悔む。佐殿の使者土肥遠平と名乘つてお土が御召の旨を傳へるので大助は喜び、直に出陣の令を發するが、孫聟畠山重忠一人は平家方であるためそれを拒む。〔二段〕（道行）お土は孫眞田與市の安否を氣遣ひ石橋山へ。（岡崎館）それはお土の夢で、やがて與市の附人眞田文藏が馳せ歸つて戰の物語。與市が俣野に討たれたと聞いてお土は激怒、文藏を勘當する。（又九郎兵衞住家）八丁礫の後家は、遺兒大三郎をつれて强慾な紺屋の又九郎兵衞に再緣してゐる。土肥遠平の情で大三郎を一味に加へる連判狀が届けられるのを、無筆の夫は密夫からの起請と邪推する。丁稚の長吉實は源氏方の安達盛長は密通の相手を寺子屋の定右衞門だと告げるので又九は男を連れて來て起請を突附けると、男は又九を刺し眞田文藏と名を明かす。又九も八丁礫の父で日頃の强慾は軍用金を調へん手だてだつたと告げ、貯へた七百兩を嫁と孫に託して死ぬ。〔三段〕（青貝師六郎太夫住家）文藏は又九の遺した七百兩になほ三百兩を補はうと、後家を伴ひ許嫁の青貝師の娘梢を尋ね、遊女請出金に入用と稱し傾城勤めをして吳れと賴む。梢は後家に嫉妬する。舅六郎太夫は本心を見破り、豫て大場景親が懇望の劍を手放さうと梢を連れて急ぐ。（星合寺）大場に劍の目利きを乞はれた梶原平三は稀代の名劍と賞し、中字の「八幡」の文字に何事かを察する。なほも俣野の橫槍で二つ胴の試し斬りをする事になるが、死罪人が一人しかないので金欲しさに六郎太夫は自ら試される事を懇願して許される。梶原は重ね合された二人のうち、わざと老人のみを助けるので、大場・俣野はその目利違ひを嘲つて歸つて行く。梶原は源氏に心を寄せる本心を明かした上刀を買取らうと約し、傍の手水鉢を切つて名劍のしるしを見せる。〔四段〕（重忠館）衣笠城攻擊を前に、重忠は妻の祖父大助に陣中見舞を贈らうと妻玉房の乳人お犬を贈物の鎧櫃に附添うて赴かせようとする所へ、大場景親が入來、重忠の二心を疑ふので櫃を開くと玉房が物狂ひの體で現はれる。大場は疑ひを晴しお犬は離別された玉房を伴ひ衣笠城へ。（衣笠城中）一門盡くを賴朝救援に赴かせた大助は、ただ一騎嫁どもと共に籠城してゐる。お犬は玉房のために一方の守備を仰せつけられたいと相嫁達に賴むが、却つて重忠の間者と疑はれる。重忠が討ち入るが大助は彼が己を救はうとしてゐる心底を見破り、自ら首を重忠に討たせ、三浦・畠山の血緣を元通り繫がうと言ふ。折しも大助の首討つたりと呼ばはつて、景時が雜兵に扮した青貝師の娘梢を伴ひ、身代りに死んだ六郎太夫の首を提げて馳けつける。お犬は六郎太夫の姉娘で、梶原への恩義とお犬の主重忠への奉公に自ら死んだのである。梶原の所持せる名劍の威德によつて玉房についてゐた妖狐、曾て大助が那須野で射とめた玉藻前の靈が退散し、その劍は昔大助が忘れ形見の嬰兒に與へたものと知れ、六郎太夫は三浦の長男であつた事が明かになる。大助はその菩提のため、すぐに有髮の僧となり、名も長命の瑞を顯はし、瑞翁と名乘る。〔五段〕（石橋山）再擧の賴朝勢に畠山・梶原が來り屬し、眞田文藏は俣野を討つて主君與市の仇を報じ、丁稚長吉の安達盛長・八丁礫の後家・大三郎は大場を生捕つて來り會する。

【脚色】筋立頓作の名人文耕堂と、淡々として癖のない千四との合作であるから、例によつてすなほで不自然がなく、而も相當曲のある作になつてゐる。三段目の切、二つ胴の段は「石切梶原」として歌舞伎の重要な中幕物となつてゐるが、三の切が屋體（やたい）ではなくて屋外を扱つてゐる點が、「娘景淸」「襤褸錦」と共に古來特異な例とされてゐる（傳奇作書）。又殆ど總ての場合敵役として描かれる梶原平三を立役とし、意識的に、「名をげぢ〳〵と言はるれど誠は武士の鏡」と辯解してゐる點や、淨瑠璃特有の惡型らしい人物が現はれない點が珍らしい。なほ四段目の切で大助が瑞翁と名を改める件は「恩愛一門振捨つる此身は志賀の一ッ松云々」と仄めかしてゐるやうに、本曲の出た享保十五年の六月十六日（玄同放言卷三參照）に高齡を以て歿した當時長壽で名の高い志賀隨翁（隨應・瑞翁とも）の單なる當て込みである。【傳統】本曲は初演以來、殆ど行はれなかつたが、天保十一年九月大阪稻荷境内東芝居で春野家有齋・山田案山子に依り改作上演されて居り、初代豐澤團平入朱の細字五行本が今日豐竹巖太夫氏の藏となつてゐる由である（歌舞

て、日本歷史・日本法制沿革を講じ、翌二十五年には東京女子高等師範學校教授を兼ね、二十六年帝大助教授として專任となり、三十二年文學博士の學位を受けて教授に任じ（大正十五年まで）國史科第一講座を擔任、三十八年史料編纂官（大正八年まで）として日本史料編纂の事務に從ひ、三十九年には帝國學士院會員に擧げられ、又臨時帝室編修局に編修官長とし

太田白雪【本稱】誹諧三河小町【名義】下卷末に、小野の小町が伊勢の土田の浦から船に乘つて、三河の小坂井の鄕に渡つたと言ひ傳へるとあつて、これから三河小町と名づけたのであるとある。本書の下卷を女流俳人の句の集にしたのもこれに因んでのことらしい。【刊行】元祿十五年十一月【諸本】蕉門珍書百種第三編所收。【內容】上卷を天象・時節・

【刊行】昭和二一―三年【內容】寫本のみで傳はつて版本にならなかつた江戶時代の隨筆一百種を集めたもので、隨筆と言つても普通版行された皇漢學者等の考證又は好古的のものではなく、主として、江戶の市政・行事・風習・時事等に關する好事家の書留などを特稱したのである。隨つて江戶及び江戶期の全國の制度・民情・世態等の史的攻究資料として役立つ

〔第十七卷〕公侯照鑑・狩野五家譜・享保通鑑・官祿書。〔第十八卷〕裡見寒話・柳亭淨瑠璃本目錄・六國列香之辨・小うた打聞・新徵組目錄・六國四季之火合。〔第十九卷〕在京在坂中日記・文政雜說集・綠山砂子・貴賤上下考・天狗騷動實錄・十寸見編年集。〔第二十卷〕雪のふる道・大江戶春秋・寬政祕策・花柳古鑑・東叡見聞誌。〔第二十一卷〕江戶芝居年代記。〔第二十二卷〕天保新政錄・峽陽來書・近世珍談集・川越松山之記・身延攻。〔第二十三卷〕難廼爲可

伎昭和二ノ一二）。併し今は「二つ胴」以外は行はれない。歌舞伎に移されたのは本曲の出た享保十五年の八月十四日初日、大阪角芝居嵐三十郎座（京坂歌舞伎年代記）が最初であらう。爾後種々の替名題で上演されてゐるが、寶暦明和の頃に三保木儀左衞門が梶原を演じた話、降つて文化の頃璃寛嵐吉三郎が梶原の役を拒絕した話、濱松歌國が本曲をそのまゝ「會稽三浦譽」なる繪入讀本に仕立てた事、文政四年三代歌右衞門がこれを演じた事等が「傳奇作書」に詳しい。今日では鴈治郎・羽左衞門・吉右衞門がそれ〴〵獨自の演出を示してゐる。

【參考】傳奇作書拾遺下卷○舞臺觀察手引草　杉贋阿彌○吉右衞門の石切梶原の型（舊歌舞伎六八）○鴈治郎の石切梶原の型（演藝畫報大正五ノ三）○演劇評話「四人の石切梶原」三宅周太郎○棧敷から書齋へ　伊原青々園　〔近藤〕

三浦別れの段（みうらわかれのだん）「鎌倉三代記」を見よ

三笠附（みかさづけ）　雜俳【解說】冠附（かむりづけ）（別項）の一種で、後には賭博類似のものとなつた雜俳の一種である。中絕して今日に傳はつてゐないので詳細なことは不明であるが、本來は名稱の通り笠附の五文字を三題出し、その各題に各々七文字・五文字を附け、つまり一組三句づつの笠附を出して高點を爭うたものらしい。が、後には笠附の題一つに二十一句を書き附けて示し、その二十一句中から己の好きなもの三句を選んで一組として出し、點者の選句と一致した句の多きを勝とするもので、例へば三句悉く當つた時は三兩、二句の時は二兩、一句の時は一兩を與へ、當らぬ時は何も與へぬといふ風な定め方で、入花料は一組につき通例十文づつ位であつたもののやうである。後にはなほ一層當て物式となり、催主は和歌三神などを書いた卷紙に、一・十・十五、或は三・十六・二十一などとただ數字のみを書いて封じ置き、附ける者は規定の入花を添へて一から二十一迄の數字を一組三つづつ書いて出し、催主の書いて置いた數字と照合し、三つ共悉く當つたものを一番、二つ當つたものを二番とするなど、全く句作を離れて純然たる鬮引となつてしまつた。更に後には棒引と稱へて自分の思ふ句の下にただ何本かの棒を引き、若し五本棒の句が當れば五兩、十本のが當れば十兩を遣るといふやうなこととなつた。「嬉遊笑覽」中に引いた大田南畝の說には、「三笠附はその始め卷を二通かきて、一通は點をして封じ、一通は封ぜずしてあるを、人々それぞれに心にかなふ句を己が句と定めたる後、かの點をして封じたる方を開き勝負を定むるなり。句は二十一句なり。鳥の子紙に書きたり。點者此句は筆にまかせて書點して諸國に鬻ぎ大に利を得たり、其の後句をやめて一より二十一までの數を三つ重ねて書き勝負を定む。是より博奕にひとしければ御禁止ありといへり」とある。（川柳參照）　〔西原〕

三日月（みかづき）　小說【作者】ちぬの浦浪六（村上浪六）【發表】明治二十四年四月五日より六月二十八日まで「報知叢話」に連載。【刊行】同年七月七日、春陽堂。【梗概】一と年飛鳥山の花見に、旗本と爭ひ、十七人を斬つた三日月は、奉行白須甲斐の情けで五年の所拂ひとなり、下總佐倉の城下に人目を忍ぶ。斬られた十七人の遺族は三日月を仇と狙ひ、佐倉の家老田原大角を賴んで、奸計によつて三日月を討たうとする。その奸計が破れるや更に藩の力によつて召捕らうとする。三日月は怒つて召捕の武士を斬つて江戶に歸る。この事が原因となつて、三日月の子分の町奴達及びそれにつながる町火消と、佐倉藩士の間に葛藤が出來、遂には血氣の激するところ、佐倉侯の屋敷に火をかけてこれを包圍し、一場の大騷動にならうとする。大老酒井若狹守はこれを耳にし、佐倉家の落度を責め、田原を切腹させる一方、三日月にも切腹させる。三日月は折柄搔き鳴らす琵琶の音を聞きつつ、武士らしく大老の面前で華々しい最期をとげる。【解說】缺點の甚だ多い小說である。描寫に誇張と無理が多く、性格が描かれてゐず、結構に朦朧としたところや、不手際な補綴細工をしたところが目につく。又作中の人物を玩弄し過ぎた點がある。だが、著者の所謂「人に骨なく腸は魚河岸にのみある」今の世に對する諷刺乃至氣焰錄と見れば、稚氣と衒氣と蕪雜が多少鼻につくが、三日月の俠勇が全篇に言ひやうのない緊張味を添へ、文章に凛とした氣合がこもつてゐて、今日なほ大衆の心をうつものがある。この作は浪六の處女作であるが、發表するや好評嘖々、作者の浪六とは何人ぞといふ問題を生じ、紅葉・露伴の何れかならんとまで推想された。それは文品が、紅・露二家に似たといふよりは、寧ろこの二家でなければ、これだけのものは書けまいといふにあつた。即ち浪六はこの一作を以て一躍文名を得たのである。　〔柳田（泉）〕

三方（みかた）　漢學者【姓名】山田ノ史。三方は御形・御方とも書く。【生歿】未詳【家系】山田宿禰と同祖。山田宿禰は周の靈王の太子晉の後とも、魏の司空王昶（ちやう）の後ともいふ（新撰姓氏錄）。「大日本史」（列傳一四〇）には、「山田史御方は魏の司空王昶の後なり」とある。【閱歷】持統天皇の六年十月、務廣肆を授けられた。越えて慶雲四年、學術を嘉して布・鍬・鹽・穀等を賜はつた。和銅三年正月從五位下、四月周防守に任ぜられた。養老四年從五位上、翌年、紀淸人・山上憶良・刀利宣令等十餘人と共に退朝毎に東宮に侍せしめられた。當時三方は文章博士であつた。同六年四月、盜に座し法によつて贓を償はしめられたが、家に尺布もなかつたので、特に赦されたといふ。後、大學頭となつた。なほ養老六年四月の詔の中に、「朕念ふに御方は笈を遠方に負うて蕃國に遊學す。歸朝の後、傳へて生徒に授け、而して文館の學士頗る文を屬するを解す云々」と見えてゐる。これによつてその學識の一斑を知ることが出來よう。その詩は「懷風藻」に、歌は「萬葉集」に載つてゐる。　〔山岸〕

三上參次（みかみさんじ）　國史學者【閱歷】兵庫縣人幸田貞介の二男として慶應元年九月二十八日姬路に生れ、先代三上勝明の養嗣子となる。明治十九年、東京帝國文科大學和文學科に入學したが、當時の教授には島田重禮・小中村淸矩（日本古代法律・日本歷史）・內藤恥叟・物集高見・チェンブレン（和文學・博言學）等が居り、同窓には高津鍬三郎、一級上に上田萬年がゐた。和文學科の學制は三年間を通じて、和文學は十二時間であつたが、日本歷史及び日本支那古代法律は二十一時間に及ぶ有樣であつた。二十二年卒業の後直ちに大學院に學んだが、二十四年文科大學講師となつ

三上参次

ないので詳細なことは不明であるが、本來は名稱の通り笠附の五文字を三題出し、その各題に各々七文字・五文字を附け、つまり一組三句づつの笠附を出して高點を爭うたものらしい。が、後には笠附の題一つに二十一句を書き附けて示し、その二十一句中から己の好きなもの三句を選んで一組として出し、點者の選句と一致した句の多きを勝とするもので、例へば三句悉く當つた時は三兩、二句の時は二兩、一句の時は一兩を與へ、當らぬ時は何も與へぬといふ風な定め方で、入花料は一組につき通例十文づつ位であつたもののやうである。後にはなほ一層高て物式となり、催主は

いへり」とある。（川柳參照）〔西原〕

三日月（みかづき） 小說【作者】ちぬの浦浪六（村上浪六）【發表】明治二十四年四月五日より六月二十八日まで「報知叢話」に連載。【刊行】同年七月七日、春陽堂。【梗概】一と年飛鳥山の花見に、旗本と爭ひ、十七人を斬つた三日月は、奉行白須甲斐の情けで五年の所拂ひとなり、下總佐倉の城下に人目を忍ぶ。斬られた十七人の遺族は三日月を仇と狙ひ、佐倉の家老田原大角を賴んで、奸計によつて三日月を討たうとする。その奸計が破れるや更に藩の力によつて召捕らうとする。三日月は怒つて召捕の武士を斬つて江

が、發表するや好評嘖々、作者の浪六とは何人ぞといふ問題を生じ、紅葉・露伴の何れかならんとまで推想された。それは文品が、紅・露二家に似たといふよりは、寧ろこの二家でなければ、これだけのものは書けまいといふにあつた。卽ち浪六はこの一作を以て一躍文名を得たのである。〔柳田（泉）〕

三方（みかた） 漢學者【姓名】山田ノ史。三方は御形・御方とも書く。【生歿】未詳【家系】山田宿禰と同祖。山田宿禰は周の靈王の太子晉の後とも、魏の司空王昶（ちやう）の後ともいふ（新撰姓氏錄）。「大日本史」（列傳一四〇）には、「山田史御方は魏の司空王昶の後なり」とある。【閱

三上參次

中村清矩（日本古代法律・日本歴史）・內藤恥叟・物集高見・チェンブレン（和文學・博言學）等が居り、同窓には高津鍬三郎、一級上に上田萬年がゐた。和文學科の學制は三年間を通じて、和文學は十二時間であつたが、日本歴史及び日本支那古代法律は二十一時間に及ぶ有樣であつた。二十二年卒業の後直ちに大學院に學んだが、二十四年文科大學講師となつ

て、日本歴史・日本法制沿革を講じ、翌二十五年には東京女子高等師範學校教授を兼ね、二十六年帝大助教授として專任となり、三十二年文學博士の學位を受けて教授に任じ（大正十五年まで）、國史科第一講座を擔任、三十八年史料編纂官（大正八年まで）として日本史料編纂の事務に從ひ、三十九年には帝國學士院會員に擧げられ、又臨時帝室編修局に編修官長として「明治天皇紀」編纂に功あり、その他維新史料編纂會委員・國寶保存會委員等に任じた。大正十五年四月停年制に依り、東大教授を退き、同名譽教授に推された。昭和九年正月の政治初めには「明治天皇紀」編纂の功により勳一等旭日大綬章を親授された。【著書】日本文學史○日本文學小史○白河樂翁公と德川時代（明治二十四年、吉川弘文館）○社寺領性質の研究（大正三年、東京帝國大學文科大學紀要第一）○日本歴史圖會十二册。【業績】帝國大學國文學科卒業直後に刊行された「日本文學史」（別項）は、最初の國文學史として重要な地位を占めるものであり、國文學者としての論文も亦相當に多く、雜誌「帝國文學」「文」等に發表されてゐるが、やはり「史學雜誌」等に現はれた論文の數の方が多く「歴史より見たる自殺特に情死」（史學雜誌）「江戸時代の殉死に就て」（同上）「模範政治家としての松平定信」（同上）等に察せられる如く、社會學的な立場を取つたものが目に立つが、これは博士の一つの特徴であらう。以上の諸雜誌の外、「皇典講究所講演」「歴史地理」「法律新聞」「日本社會學院年報」等に論文が見られる。國史研究家としては勿論、國文學の開拓者としてもその功績は大きい。〔土井〕

三河小町（みかはこまち） 俳諧集　二册　【撰者】太田白雪【本稱】誹諧三河小町【名義】下卷末に、小野の小町が伊勢の土田の浦から船に乘つて、三河の小坂井の鄕に渡つたと言ひ傳へるとあつて、これから三河小町と名づけたのであるとある。本書の下卷を女流俳人の句の集にしたのもこれに因んでのことらしい。【刊行】元祿十五年十一月【諸本】蕉門珍書百種第三編所收。【內容】上卷を天象・時節・地儀・山類・水邊・居所・國世界・草部・木部・鳥類・獸類・蟲類・魚類・氣形・人倫幷異名・人事・人事雜物幷調度・衣類・食物・言詞・雪月花郭公の分類によつて發句四百二十句を採錄し、下卷は四季の序次によつて當時の女流俳人の發句百二句を採錄し、末に專車・桃鯉・言風等二十六人の附句四十三句を拔萃してゐる。作者は、上卷は三河地方の人が多いが、芭蕉を初め當時の著名な蕉門俳人も少からず、下卷の女流俳人は日本全土に廣く亙つてゐる。下卷の初めに舍羅の序、末尾に小町に關する記事五項を添へてゐる。【價値】本書はその分類の特色ある點に於て先づ注意される。また白雪にはこの集より前に、元祿十二年に「誹諧曾我」、同十四年に「切々打込」があり、元祿十二年、白雪の長子の桃先と雪丸との共撰に「茶のさうし」があつて、本集はこれ等の集と共に芭蕉歿後の三河地方の蕉風を知るべきものとして注意すべきであるが、三河地方以外の俳人中でも、當時大阪邊に隱れ住んでゐた凡兆の句の見える事なども注意すべきものである。又下卷を女流俳句集とした事は、正に女流俳句集の先鞭を附けたものである。〔志田・萩原〕

身代り音頭（みがはりおんど）「大塔宮曦鎧」を見よ。

未刊隨筆百種（みかんずゐひつひやくしゆ） 隨筆　二十三冊【編者】三田村鳶魚校訂・山田清作編【刊行】昭和二―三年【內容】寫本のみで傳はつて版本にならなかつた江戸時代の隨筆一百種を集めたもので、隨筆と言つても普通版行された皇漢學者等の考證又は好古的のものではなく、主として、江戸の市政・行事・風習・時事等に關する好事家の書留などを特稱したのである。隨つて江戸及び江戸期の全國の制度・民情・世態等の史的攷究資料として役立つ書を多く收めてゐる。從來未刊の書を集めた點に於て普通の隨筆集と選を殊にせるは言ふまでもない。原本に圖畫の有るものは悉く皆これを收めてあるのも貴い。每卷の首（はじめ）に所收書籍の解題、又卷尾に簡單な索引が添へられてゐる。

〔第一卷〕岡場遊廓考・操曲入門口傳之卷・新役龍の包丁。〔第二卷〕江戸拾葉・文政年間漫錄・博奕仕方風聞記・吉原春秋二度の景物・慶應雜談。〔第三卷〕享和雜記・俗事百工起源・淺草志・勝扇子。〔第四卷〕青樓年歷考・天明紀聞寬政紀聞・濟生堂五部雜錄。〔第五卷〕尾陽戲場事始・吉原失墜・迂鈍・村攝記。〔第六卷〕事々錄・天保改革雜談。〔第七卷〕業要集・傾城百人一首・古今東名所。〔第八卷〕かくやいかにの記・文化祕筆・戲言養氣集・七種寶納記。〔第九卷〕及瓜漫筆・天保風說見聞祕錄。〔第十卷〕東都一流江戸節根元集・祕登利古刀・寶丙密祕登津・藝界きくまゝの記・寬延雜祕錄・世のすがた。〔第十一卷〕きゝのまに〳〵・白石先生寶貨事略追加・豐島郡淺草地名考・俗語問屋場始末。〔第十二卷〕寶夢錄・江戸圖書目提要・洛水一滴抄・關東潔競傳・家守杖。〔第十三卷〕鄙雜俎・槃謠世々の蹟・高田雲雀・江戸愚俗徒然噺・崎陽賊船考。〔第十四卷〕露草雙紙・柔話・一德物語・楓林腐草・文廟外記・江戸自慢。〔第十五卷〕柳營譜略・水戸前中納言殿御系記・遊女出入書留・公鑑・三十三个條案文・踊之著慕駒連。〔第十六卷〕眞木のかつら・角力め組鳶人足一條・頃日全書・雜交苦口記・愚痴拾遺物語・使奕心得。〔第十七卷〕公侯照鑑・狩野五家譜・享保通鑑・獻証書。〔第十八卷〕裡見寒話・柳亭淨瑠璃本目錄・六國列香之辨・小うた打聞・新徵組目錄・六國四季之火合。〔第十九卷〕在京在坂中日記・文政雜說集・緣山砂子・貴賤上下考・天狗騷動實錄・十寸見編年集。〔第二十卷〕雪のふる道・大江戸春秋・寬政祕策・花柳古鑑・東囊見聞誌。〔第二十一卷〕江戸芝居年代記。〔第二十二卷〕天保新政錄・峽陽來書・近世珍談集・川越松山之記・身延攻。〔第二十三卷〕難廼爲可話・桐竹紋十郎手記・一本草・門前地改更之實錄・玉川三登鯉。〔和田〕

幹雄（みきを） 俳人【姓名】三森兼治【別號】春秋庵・香楠居・桐子園・天壽老人【生歿】文政十二年十二月十六日、磐城國石川郡形見村に生れ、明治四十三年十月十七日、東京深川の自庵に歿す。享年八十二【閱歷】幼少から俳諧を好み、仙臺の老臣寺島梅成及び鈴木左竹等と交り、靜波と號して俳諧を修業した。安政元年二十六歲の時江戸に上り、惺庵西馬の門に入つて幹雄の號を受けた。明治七年七月俳諧明倫社を創設し、十三年「明倫雜誌」（別項）を發行して風教陶冶の道を鼓吹し、また大成教に屬して大教正の位を受けた。二十六年春秋庵十一世となり、四十一年庵號を嗣子準一に讓り、天壽老人と號した。【著作】俳諧自在法○俳諧名譽談○歲時記季寄○文學心の種等。〔伊藤〕

三木竹二（みきたけじ） 劇評家【姓名】森篤次郎【生歿】慶應三年島根縣岩見國津和野町に生れ、明治四十一年一月十日、神田賀古病院で咽喉病で歿す。享年四十二【家系】家は島根藩龜井家の典醫で森鷗外を兄とした。【閱歷】明治初年父につれられて上京、向島の同藩主邸內に住み、小學校から獨逸語學校を經て醫科大學を卒業した。當時「公衆醫事」を編輯し

たことがあつた。卒業後、帝大醫科大學で內科の助手を勤め、間もなく日本橋蠣殼町に內科醫を開業し、醫術開業試驗官並に駒場農學校の校醫をした。ペンネーム三木竹二による劇評は、學生時代の明治二十四・五年頃、讀賣新聞に始まり、「しがらみ草紙」（別項）、更に同二十八・九年頃、「歌舞伎新報」（別項）に進出し、同時に「めざまし草」（別項）にも若年で立派な批評を書いた。但し眞の劇評は彼の主宰による雜誌「歌舞伎」（別項）發刊以後であらう。

三木竹二

【業績】從來の劇評家は要するに通に止まり、見功者、評判記の域を脱しなかつた。然るに新しい美學的見地と、あらゆる文獻や歷史から調べた學究的視野とで、歌舞伎劇のよきものを藝術の分野にまで擴張紹介した眞の劇評家は、彼を以て嚆矢とする。又彼は當時の低劣な活歷物、卑俗な寫實劇、新派劇等を輕く受け流しつつ、時流を拔いて、よき歌舞伎劇の闡明と、シェークスピア、イプセンその他海外の名劇をすら紹介輸入するに吝かでなかつた。なほ實際的運動としては、「歌舞伎」に彼が發表し、或は校閱した「型」の記錄が素晴らしい權威を持つた。明治三十六年秋、團十郎死後の人なき歌舞伎座へ招かれて上京した片岡我當（仁左衞門）に助言を與へ、逸早く彼の妙技を紹介した。又眞砂座の伊井蓉峰（別項）の如きも、彼によつて後年の成功を得たのである。三十六年一月市村座に於ける鷗外作「玉篋兩浦嶼」（別項）の劃期的演出、或は眞砂座に於ける近松物の研究的演出の如き、悉く彼の後援による所が多かつた。更に彼の烱眼は、團・菊歿後、今日の市村羽左衞門をよく見出し、羽左衞門はこれに勢ひを得て、着々進步發達した。その他、小山內薰を撫子の名に於て世に出した如き、後輩を誘導した功も少くない。なほ彼の「觀劇偶評」は、鷗外の「月草」（別項）所收。外に「日本演劇史」を書くために、相當な原稿を殘してゐる。　〔三宅〕

右田寅彥　戲作者・劇作家【號】柳塢亭。又矮亭主人と稱した事もあるらしい。【生歿】慶應二年二月豐後國臼杵町に生れ、大正九年一月十五日東京芝區岩島病院に於て歿す（肺炎）。享年五十五。【墓所】東京高輪東禪寺【閱歷】明治八年東京へ移住したといふ。長じて三田英學校に學び、更に同鄉の大儒帆足萬里の高足である高谷龍淵が、芝愛宕町三丁目林邸內に濟美黌といふ漢學塾を開いてゐたのに、兄豐彥（大蘇芳年の門人、梧齋年英と稱す）と共に入門した。この時塾生の一人に二葉亭四迷もゐたといふ。明治十二年、小說稗史の作者たらんとして三世柳亭種彥（高畠藍泉參照）の弟子となり、柳塢亭寅彥と號した。が、後日「三つ彥」の印を讓渡される出藍の譽れある逸材となつた。それよりめざまし新聞を振出しとして都新聞（明治十八年設立）へ移り、小說・雜報に麗筆を揮ひ、又小說「平家姬小松」（同二十二年）を出版して好評を博した。めざまし新聞が、東京朝日新聞と改稱されて後（同二十一年）歸參し、社會部長として所謂三面の主任となり、彼の物する艷種は戲作者一流の名文章で、讀者を魅了した。又俗曲（小唄）の作詞に巧妙で洒興に乘じて出來たものが、現在なほ哥澤や端唄に殘存してゐる（苗賣り・玉子酒等）。同三十八年、當時劇評を擔任する新聞記者の集團「若葉會」が所謂文士劇を公演するや、彼も素人俳優として登場した。が、この事が新聞社の忌避に觸れ、遂に感情の衝突より朝日を退社するに至つた。併し一面には漸く當時の急激なジャーナリズムの進展に遲れて來たのも退社原因の一であつたらう。同四十三年に帝國劇場附屬技藝學校が設立されるや、伊坂梅雪等の斡旋に依り、女優を養成するための脚本（女性を主人公の戲曲）や試演會用の淨瑠璃を執筆した。同四十四年三月より帝國劇場が開場した後は、客員といふは表面で、座附の狂言作者として毎月新脚本を提供してゐた。即ち大正九年逝去するまでの帝劇十年間に現はれる脚本の過半數は、彼の創作改訂と稱しても過言ではない。【著作】代表作數種を擧げる。〇堀部妙海尼（大正元年十一月、妙海―梅幸、富江―宗十郎）〇長和長年（大正二年十月、幸田露伴原作、長年―幸四郎、堯心入道―松助）〇紀國文左大盡舞（同三年三月、二代目紀文―宗十郎）〇江島生島（同五年九月、梅幸・宗十郎の結合）〇御江戶日本ばし（同七年一月、女髮結お勝―梅幸、堀部安兵衞―幸四郎）〇苅萱堂（同七年二月、宗十郎・松助の結合）〇文ひろげ（舞踊劇）〇鎌倉武士（同上）等。【人物】輕妙洒脫、眞に江戶末期の戲作に表示された風流人であつた。而して彼は逝去する前年に、旗亭に於て葬式を盛大に擧行したほどの洒落者であつた。饗庭篁村とは常に酒と旅行を俱にし、溫泉「鹽原」を紹介したことは、兩氏のかくれた功績と言はれてゐる。【批評】默阿彌の死後、三世新七・竹柴其水等漸く衰退を示した明治末期より大正初頭に掛け、座附狂言作者の最後的人物であつた。即ち帝劇入座以後、關心はあつたものの餘り創作しなかつた脚本に進出し、圓滑華麗の筆は、早くも劇界の異彩となり、帝劇不可缺の存在となつた。殊に尾上梅幸・市川高麗藏・澤村宗十郎・同宗之助・尾上松助等の座附俳優の「にん」を觀察してその長短を檢討し、縱橫に馳驅せしめて座附作者の責任を完全に果した巧妙にして機智ある手腕は驚嘆の外はない。殊に、「紀國文左大盡舞」に於ける作者は、江戶の感情・風物を嫋々たる詩趣を以て感受し、その寂寥と淸楚と艷美とを併せ示現した。零落しつつも意地強く外聞を飾る紀文の立場には、最後の戲作者・狂言作者としての彼の心胸も反射して、まさしく會心の作品であつた。又作品全體の傾向が、默阿彌を髣髴させる筋立の複雜と巧妙さを所有し、しかも前者の如き因緣因果の小乘的佛教觀と勸善懲惡思想から逸脫し、常識的なものであつた事は、江戶を遠く離れた明治末期の影響と言へる。ただ作中の人物に自ら創作した個性を附與する事なく、全然出演俳優の性格に依存せしめて反省しなかつた。即ち當時の新劇運動流行の文藝界の風潮を少しも顧慮しなかつた事は、大なる缺點であつた。が、又その一面に、最後の戲作者であり、最後の狂言作者としての片意地な面目が浮動してゐると思ふ。【參考】帝國劇場十年史　〇明治劇壇五十年史　關根默庵〇私の見た明治文壇野崎左文　〔尾澤〕

御教書　古文書【解說】公卿或は將軍幕府などより下す文書。公卿の御教書は平安時代からあり、公卿の家司が上意を奉じて出すので、一に奉書ともいふ。上より云へば御教書で、下より云へば奉書である。蓋し藤原氏の公私混淆政治の結果出來たものであらうが、その樣式も公文書たる宣旨（別項）の式と私文書たる牒（別項）の式との混成されたものである。

被關白殿　仰云、來廿六日伊勢公卿勅使祿分料合
袴三腰、期日以前、美麗可調進由、宜仰遣者、仰
旨如此、知綱謹狀、
十月十二日　　右衞門權佐藤原知綱奉
謹奉　淡路守殿

書き出しの「被關白殿仰云」は書かぬ場合が多

（花押）〇足利義教
毛利治部少輔熙房安藝國所領等事、任當知行旨、
領掌不可有相違之狀如件、
永享十年六月十七日

近江國永源寺舍空院領伊勢國久米守忠名事、早爲
守護使不入之地、可全領知之狀如件、
應永廿三年四月三日
內大臣源朝臣（花押）　足利義政

織田氏・豐臣氏及び德川氏には、御教書といふ

のために美學を講じたりして生活し、當時の詩作を輯めて大正十二年には「信仰の曙」を發表した。同十四年トラピストを辭して東京に歸り、再び文筆生活に入り、主として童謠の製作に沒頭した。童謠集「小鳥の友」（大正十五年）その他童謠に關した著書もある。全集として「露風詩集」が大正十五年に發行され、外に「露風詩話」「修道院雜事」「修道院生活」の如き隨筆集をも著はした。

集第十にも收められた。以上のうち屋本に最も近いものは、鈴木朖自筆書入本である。又（四）御國辭活用鈔は體裁內容共に他の五本とやゝ異り、その系統また明かでない。なほ鈴木朖自筆書入本には、「天明二年以田中大人本寫終　川村正雄」、「寛政十二年庚申冬以正雄本誂人寫畢　鈴木朖」の奧書があり、また表紙見返しには、朖の自筆にて「活語活用格　鈴屋本居先生起草　田中道麻呂編集　鈴木朖訂補」と

のを藝術の分野にまで擴張紹介した眞の劇評家は、彼を以て嚆矢とする。又彼は當時の低劣な活歷物、卑俗な寫實劇、新派劇等を輕く受け流しつつ、時流を拔いて、よき歌舞伎劇の闡明と、シェークスピア、イプセンその他海外の名劇をすら紹介輸入するに吝かでなかつた。なほ實際的運動としては、「歌舞伎」に彼が發表し、或は校閲した「型」の記錄が素晴らしい權威を持つた。明治三十六年秋、團十郎死後の人なき歌舞伎座へ招かれて上京した片岡我當（仁左衞門）に助言を與へ、逸早く彼の妙技を紹介した。又眞砂座の伊井蓉峰（別項）の如きも、彼によつて後年の成功を得たのである。三十六年一月市村座に於ける鷗外作「玉篋兩（たまくしげふたり）

と共に入門した。この時塾生の一人に二葉亭四迷もゐたといふ。明治十二年、小説稗史の作者たらんとして三世柳亭種彥（高畠藍泉參照）の弟子となり、柳塢亭寅彥と號した。が、後日「三つ彥」の印を讓渡される出藍の譽れある逸材となつた。それよりめざまし新聞を振出しとして都新聞（明治十八年設立）へ移り、小説・雜報に麗筆を揮ひ、又小説「平家姬小松」（同二十二年）を出版して好評を博した。めざまし新聞が、東京朝日新聞と改稱されて後（同二十一年）歸參し、社會部長として所謂三面の主任となり、彼の物する艷種は戲作者一流の名文章で、讀者を魅了した。又俗曲（小唄）の作詞に巧妙で洒興に乘じて出來たものが、現在なほ哥澤

盡舞（同三年三月、二代目紀文—宗十郎）○江島生島（同五年九月、梅幸・宗十郎の結合）○御江戸日本ばし（同七年一月、女髮結お勝—梅幸、堀部安兵衞—幸四郎）○苅萱堂（同七年二月、宗十郎・松助の結合）○文ひろげ（舞踊劇）○鎌倉武士（同上）等。【人物】輕妙洒脫、眞に江戸末期の戲作に表示された風流人であつた。而して彼は逝去する前年に、旗亭に於て葬式を盛大に擧行したほどの洒落者であつた。饗庭篁村とは常に酒と旅行を倶にし、溫泉「鹽原」を紹介したことは、兩氏のかくれた功績と言はれてゐる。【批評】默阿彌の死後、三世新七・竹柴其水等漸く衰退を示した明治末期より大正初頭に掛け、座附狂言作者の最後的人物であつた。即ち帝劇入

然出演俳優の性格に依存せしめて反省しなかつた。即ち當時の新劇運動流行の文藝界の風潮を少しも顧慮しなかつた事は、大なる缺點であつた。が、又その一面に、最後の戲作者であり、最後の狂言作者としての片意地な面目が浮動してゐると思ふ。【參考】帝國劇場十年史 ○明治劇壇五十年史 關根默庵○私の見た明治文壇野崎左文 〔尾澤〕

御教書（みけうしよ） 古文書【解說】公卿或は將軍幕府などより下す文書。公卿の御教書は平安時代からあり、公卿の家司が上意を奉じて出すので、一に奉書ともいふ。上より云へば御教書で、下より云へば奉書である。蓋し藤原氏の公私混淆政治の結果出來たものであらうが、その樣式も公文書たる宣旨（別項）の式と私文書たる狀（別項）の式との混成されたものである。

被關白殿　仰云、來廿六日伊勢公卿勅使祿分料合袴三腰、期日以前、美麗可調進由、宜仰遣者、仰旨如此、知綱謹狀、
十月十二日　右衞門權佐藤原知綱奉
謹奉　淡路守殿

書き出しの「被關白殿仰云」は書かぬ場合が多い。綸旨・院宣（各別項）及び後世の令旨（別項）等は何れもこの公卿の御教書に準據したものであるが、武家の御教書も亦さうである。尤もこれは鎌倉時代のものと室町時代のものとに區別して見る必要がある。鎌倉時代のものは全然公卿御教書式で、執權連署の奉じたるを關東御教書、兩六波羅探題の奉じたるを六波羅御教書、鎭西探題の奉じたるを鎭西御教書と稱へる。關東御教書の例は、

平子如圓與弟彥六郎重有相論周防國仁保多々良庄等內田畠事、下知狀兩通（副兩方和與狀）如此、早可下給彼輩也、者依仰執達如件、
德治二年五月九日　陸奧守（花押）
相模守（花押）
武藏右近大夫將監殿

次に足利時代となると、從前の式に據り管領の奉じたる御教書の外に、御判御教書と云つて將軍の署判あるものを生じた。これに三通りある。例へば、

大覺寺宮當寺御登山云々、於奉捕彼宮者、先帝勅裁之寺領事、不可有相違之狀如件、
建武三年八月廿五日　花押○足利尊氏
神護寺衆徒御中

これを特に御書御教書とか目下御判御教書と稱へて、最も鄭重な式である。

（花押）○足利義教
毛利治部少輔熙房安藝國所領等事、任當知行旨、領掌不可有相違之狀如件、
永享十年六月十七日

近江國永源寺含空院領伊勢國久米守忠名事、早爲守護使不入之地、可全領知之狀如件、
應永廿三年四月三日
內大臣源朝臣（花押）足利義政

織田氏・豐臣氏及び德川氏には、御教書といふものはない。〔井木〕

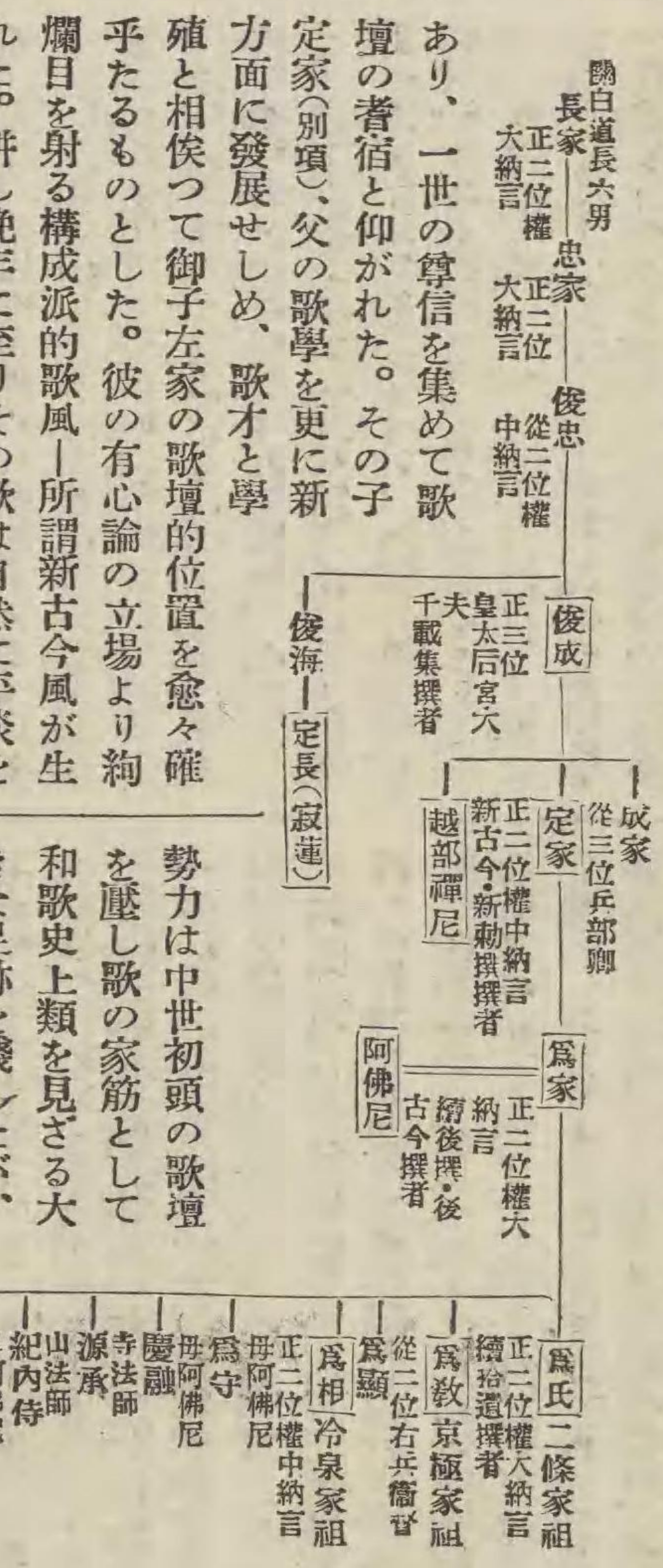
三木露風（みきろふう） 詩人【本名】操【別號】一時羅風と改號し、間もなく露風に復した。【閱歷】明治二十二年六月二十三日、兵庫縣揖保郡龍野町に生る。姬路中學校・岡山閑谷黌等に學び、早稻田大學英文科・慶應義塾大學文科等に聽講生たりしことがある。處女詩集は同三十八年岡山市血汐會より「夏姬」と題して刊行。この中には短歌も加はつてゐた。後、上田敏主宰「藝苑」に、「五月野」外數篇を發表し、その詩才を認められ、後、人見東明・加藤介春・相馬御風・野口雨情・福田夕咲（各別項）等と共に早稻田詩社を結んだ。當時御風と口語體の詩を唱へ「暗い扉」を發表した。詩壇への最初の詩集は「廢園」（別項）（明治四十二年）で、當時の詩壇に於て新人の作として注目を惹き、永く北原白秋（別項）とその詩名を並稱された。後「寂しき曙」（別項）（明治四十三年）を出し、更に「白き手の獵人」（大正二年）、「幻の田園」（大正四年）を刊行し、大正五年には北海道トラピスト修道院を訪れてその印象を基本にした詩作を集め、「良心」と題して出版した。その後「生と戀」（大正十年）、「芦間の幻影」（大正十年）等の詩集を出したが、當時から信仰生活に入り、北海道トラピスト修道院に起居し、同院修道士のために美學を講じたりして生活し、當時の詩作を輯めて大正十二年には「信仰の曙」を發表した。同十四年トラピストを辭して東京に歸り、再び文筆生活に入り、主として童謠の製作に沒頭した。童謠集「小鳥の友」（大正十五年）その他童謠に關した著書もある。全集として「露風詩集」が大正十五年に發行され、外に「露風詩話」「修道院雜事」「修道院生活」の如き隨筆集をも著はした。【作風】彼は最初「廢園」に於て、官能的な印象的抒情詩を以て始まり、それが頽廢的心意と靈性への思慕となつて「寂しき曙」に表はれ、東洋風な自然的瞑想をフランスの象徵主義的手法によつて示し、「白き手の獵人」と「幻の田園」に表現した。トラピスト修道院生活に入つてよりの彼の作は、感情と感覺に於て、遙かに往年の作に劣るものがあるが、そこに敬虔な內省的傾向を見ることが出來る。彼は日本に於ける象徵主義の理想的側面を示した詩人である。〔川路〕

御國詞活用抄（みくにことばくわつようせう） 語學書【著者】本居宣長【名稱】鈴木朖自筆書入本並に神宮文庫本「活語斷續譜」（別項）には、「言語活用抄」「活語活用格」「活語活用抄」「活用抄」とも云ひ、帝國圖書館藏の寫本には、「御國辭活用鏡」と題せられてゐるが、併し普通には「御國詞活用抄」と呼ばれてゐる。【諸本】現存の本としては、（一）鈴木朖自筆書入本一册（寬政十二年寫）、尾張栗田貫一氏藏、（二）本居大平自筆書入本一册（文化元年寫か）、本居淸造氏藏、（三）安政二年木村正辭自筆書寫校合本一册、岩崎文庫藏、（四）御國辭活用鏡（寫本二册）、帝國圖書館藏、（五）小田淸雄校本、（明治十九年刊一册）等があり、增補本居宣長全集第十にも收められた。以上のうち原本に最も近いものは、鈴木朖自筆書入本である。又（四）御國辭活用鏡は體裁內容共に他の五本とやゝ異り、その系統また明かでない。なほ鈴木朖自筆書入本には、「天明二年以田中大人本寫終　川村正雄」、「寬政十二年庚申冬以正雄本誂人寫畢　鈴木朖」の奧書があり、また表紙見返しには、朖の自筆にて「活語活用格　鈴屋本居先生起草　田中道麻呂編集　鈴木朖訂補」とあり、本書の凡例の次には、朖の自筆にて「朖云、右四條ハ舊稿本ノマヽナリ　今數條ヲ左ニ補フ」として七條の增補を揭げ、本文に於て到る處「朖云」「朖補」又は單に「補」として訂補のあとが見える。しかもこれはすべて同筆にて朖の自筆である。【成立】鈴木朖自筆書入本の見返しにも記す如く、田中道麻呂の援助によつて、天明二年本居宣長これを撰したものといふべきであらう。〔以上覓〕【內容】活用言の活用を二十七種に分け、各種類について、その種の活用言を羅列したもので、活用に就いての說明はない。二十七種とは、一、か、き、く、け。二、さ、し、す、せ。三、た、ち、つ、て。な、に、ぬ、ね。四、は、ひ、ふ、へ。五、ま、み、む、め。六、ら、り、る、れ。七、け、く、くる、く。八、せ、す、する。九、て、つ、つる。十、ね、ぬ、ぬる。十一、へ、ふ、ふる。十二、め、む、むる。十三、え、ゆ、ゆる。十四、れ、る、るる。十五、ゑ、う、うる。十六、き、く、くる。し、す、する。十七、ち、つ、つる。十八、に、ぬ、ぬる。十九、ひ、ふ、ふる。二十、み、む、むる。二十一、い、ゆ、ゆる。二十二、り、る、るる。二十三、え、う、うる。ね、ぬ、ぬる。へ、ふ、ふる。ゐ、

う、うる。二十四、し、す、する。き、く、くる。二十五、い、いる。き、きる。に、にる。ひ、ひる。み、みる。ゐ、ゐる。ぬ、ぬる。け、ける。二十六、し、か、き、く、け。二十七、し、しき（しか、く、しけ）、し（帝國圖書館本には、二十八、雑）これである。而して各條に初めに雅言を擧げ、次に俗言を擧げてゐる。【價値・影響】活用の研究としては不十分なもので、活用形は漏れてゐるもが、混合してゐるものが澤山にあり、活用の種類に於ても、漏れたものがあり、混同してゐるものが頗る多い。が、これを眞淵の「語意考」（別項）に比すれば、數等の進歩を見ることが出來る。而して鈴木朖の「活語斷續譜」（別項）は、この書の補訂に依つて成つたものである。また信友や篤胤が既に云つてゐる如く、本書は「詞八衢」（別項）の源流となつたものであつて、この點に於て活用の研究史上重要な意義を有するものである。なほ俗言、即ち口語の活用を揭げてゐることは、「詞八衢」以後、一時この方面は顧みられなくなつてゐたが、口語の研究史上注目すべきことである。〔以上龜田〕

御饌歌　「里神樂」を見よ。

御子左家　和歌【名義】醍醐天皇の皇子源兼明左大臣となり、世に御子左と稱し、その邸（三條坊門南、大宮東）を御子左第と呼んだ。御子左とは皇子にして左大臣の職に在つたからである。後關白藤原道長第六子權大納言長家この邸を傳領し、邸の名をとつて御子左大納言と呼ばれた。これより御子左家の名が出來たのである。その三世の孫に俊成出でてより、御子左家は歌の家筋となつた。【沿革】俊成（別項）は、藤原基俊（別項）の門に入り、歌才については源俊頼（別項）に推服してゐた（長明無名抄）。當時歌壇には「金葉」「詞花」（各別項）の新を追ひ、むしろ奇嬌に馳せた歌風が行はれたが、彼は「三代集」（別項）の溫雅を愛してこれを宗とし（古來風體抄）、遂に幽玄體なる新風を生み出し、人物も溫厚にして雅量あり、一世の尊信を集めて歌壇の耆宿と仰がれた。その子定家（別項）、父の歌學を更に新方面に發展せしめ、歌才と學殖と相俟つて御子左家の歌壇的位置を愈々確乎たるものとした。彼の有心論の立場より絢爛目を射る構成派的歌風―所謂新古今風が生れた。併し晩年に至りその歌は自然に平淡を加へ來り、文曆元年撰進した「新勅撰集」（別項）は、この晩年の傾向を示してゐる。次いで、爲家（別項）、定家の嫡子としてその後を繼ぎ、定家晩年の傾向を襲つて穩健正雅の歌風を立てた。その歌學說は「詠歌一體」（別項）に於て見ることが出來る。爲家の後、御子左家は二條・京極・冷泉（各別項）の三家に分れ、互に軋轢して勢力消長にあつたが、何れも歌の宗家として歌壇に仰がれ、就中、爲家の嫡子爲氏を祖とする二條家及びその門下は、爲家の穩健正雅の歌風を受けついで、近世初頭まで師承傳來した。以上は御子左家の正系の人々であるが、その他俊成の姪寂蓮、俊成の女越部禪尼、爲家の室阿佛尼（各別項）等、何れも和歌を善くし、越部禪尼には「越部禪尼消息」一篇があり、阿佛尼は、夫爲家の說を祖述して「夜の鶴」一卷を著はした。次に俊成門下の壬生二品藤原家隆（別項）は、定家と並び稱された歌人で「新古今集」撰者の一人である。又鎌倉右大臣源實朝（別項）、衣笠内府藤原家良等何れも、定家の敎へを受け、定家の著書中「近代秀歌」（別項）は實朝のために、「毎月抄」（別項）は家良のために書かれたものである。かくて御子左家の勢力は中世初頭の歌壇を壓し歌の家筋として和歌史上類を見ざる大きな足跡を殘したが、これ一に俊成・定家二代の力によるものと云はなければならぬ。



【參考】日本歌學史　佐佐木信綱　○國文學全史（平安朝篇）鎌倉室町時代文學史　藤岡作太郎　○俊成の歌論　山崎敏夫（國語國文の研究一ノ八）　○藤原定家の歌學思想　谷鼎（同上）〔中島〕

巫女舞　舞踊【名稱】巫女の演ずる舞の義。【解說】巫女には各種の種類があり、而も初めは凡て歌舞と緣故があつたが、近世は歌舞を事とせぬ巫女も出た。神社附屬の巫女には、八乙女・鄕巫女その他の名がある。神樂男に對して舞姬とも、また命婦とも云ふ。巫女の容姿は時と處に依り異なるが、髮はおすべらかし、お下げで多く紫の布を以て髮の末を卷く。また千早と稱する特殊の衣服を着る。扇・鈴・笹等を手にして拜殿或は神樂殿で舞ふ。神事の日に限り舞ふのと、毎日神社に詰めて參詣人の所望によつて舞ふのとある。幼年の女子を選ぶ土地もあり、妙齡の女子の勤める土地もある。（湯立の舞參照）〔小寺〕

操形黃楊小櫛　人情本　三編九册【作者】初編には紀山人（二世十返舍一九の別號）と署名。第二・三編は二世十返舍一九。【畫工】花岡光宣【名稱】初編序に黃楊の櫛に黃金色を忍び、金のほしき心を現はすのであると斷わつてある。蓋し當時より天保年代にかけて流行した櫛を名稱としたのである。【刊行】初編天保初年（二代目襲名は天保元年からの推定）、第二編天保五年。第三編天保六年か（天保七年、文壇より退き、而も序には第二編より遲れて刊行した由見えるからである）。【題材】初編序に武藏金澤にあつた一奇譚に基づくと斷わつてある。【梗概】武藏久良岐郡野島村に、富岡孔之介と云ふ鄕士があつた。妻を奥野と云ひ、心やさしき婦人であつたから召使の男女皆悅服してゐた。然るに孔之介、いつの程か鎌倉花水橋の歌妓沖水と馴染み、身請して中里村の別莊に置くうち男子が生れ、名を喜代吉と名づけ、はや七歳になつた。本妻奥野には實子がないので、孔之介は喜代吉を後繼にしたいと考へたが、自分は養子、奥野は家附きの娘であるから遠慮してゐた。奥野は沖水母子の事を知つたけれど別に嫉妬もせず、良人の心遣ひを察し、知らぬ風を裝うてゐた。玆に畠山家の浪人に洲崎浪太郎と云ふ者がゐた。孔之介の基敵で繁々出入するうち、奥野の美しさに戀慕し、度々言ひ寄つたけれど、一向相手にされない。或る日主人の不在をねらつて入り込み、奥野に沖水母子の寵愛一方ならぬ事を告げて煽動したが效が見えぬ。そこで沖水に密夫があり、孔之介を殺す計略があると言ひ出したので、奥野も驚いて、それなら主人へ告げて下さいと言ふだけで、相手にならなかつた。浪太郎は所詮孔之介が生きてゐたのでは成功せぬと考へ、或る夜孔之介が沖水の別莊へ通ふ途中に暗殺した。奥野は悲歎に沈んだが、浪太郎の言葉を思ひ起し、沖水母子を縛らせて責めたが、素より知らぬ事とて白狀しない。浪太郎も來り、奥野を深切らしく慰め、沖水を

操競三人女　草雙紙　合卷　六册合二册・前後二編【作者】柳亭種彥【畫工】歌川豐國【名稱】「筑紫權六、白浪響談」の角書があり、別名を「京太郎物語」といふ。【刊行】文政六年、山本屋刊。【諸本】續帝國文庫第二十三編中に本文のみを收める。【題材】「十二段の草子」（異本）の「美人揃」の段に據ると記すが、それは僅かであつて、多く

寶の二龍の旗を奪つてゐるのを取戻し、夫佐文次を喜ばせるために、袖浦がいやがるのを口說いて丹柳方に妾奉公に出し、旗は見事手に入れたと語る。大和橋の茶屋で、京太郎・綠之助・藤の井・藝子の八重梅（實は、京太郎の許嫁の尾花）等が酒宴してゐる處へ軍太兵衞が現はれ、嘗て桐太夫を讒言した點で藤の井等に討たれる。桐太夫・佐文次・袖浦等は、計略を用

新しく上つた腰元おりうに目をかけるやうになつたので、嫉妬のあまり、おりうを蚊帳の上から刺殺し、自分も死んでしまふ。ついで淺草寺開帳のため遊歷して來た遊行上人の念佛によつて二人とも解脫する。なほこの事件を材としたものには「艶油こひの夜嵐」といふ淨瑠璃がある。〔小泉〕

短夜仇散書　脚本　四幕

なくなつてゐたが、口語の研究史上注目すべきことである。〔以上龜田〕

御饌歌 みけうた 「里神樂」を見よ。

御子左家 みこひだりけ 和歌 【名義】醍醐天皇の皇子源兼明左大臣となり、世に御子左と稱し、その邸（三條坊門南、大宮東）を御子左第と呼んだ。御子左とは皇子にして左大臣の職に在つたからである。後關白藤原道長第六子權大納言長家この邸を傳領し、邸の名をとつて御子左大納言と呼ばれた。これより御子左家の名が出來たのである。その三世の孫に俊成出でてより、御子左家は歌の家筋となつた。【沿革】俊成（別項）は、藤原基俊（別項）の門に入り、歌才については源俊賴（別項）に推服して

てた。その歌學説は「詠歌一體」（別項）に於て見ることが出來る。爲家の後、御子左家は二條・京極・冷泉（各別項）の三家に分れ、互に軋轢して勢力消長にあつたが、何れも歌の宗家として歌壇に仰がれ、就中、爲家の嫡子爲氏を祖とする二條家及びその門下は、爲家の穩健正雅の歌風を受けついで、近世初頭まで師承傳來した。以上は御子左家の正系の人々であるが、その他俊成の姪寂蓮、俊成の女越部禪尼、爲家の室阿佛尼（各別項）等、何れも和歌を善くし、越部禪尼には「越部禪尼消息」一篇があり、阿佛尼は、夫爲家の說を祖述して「夜の鶴」一卷を著はした。次に俊成門下の壬生二品藤原家隆（別項）は、定家と並び稱された歌人で「新

○俊成の歌論　山崎敏夫（國語國文の研究一ノ八）
○藤原定家の歌學思想　谷鼎（同上）　〔中島〕

巫女舞 みこまひ 舞踊 【名稱】巫女の演ずる舞の義。【解說】巫女には各種の種類があり、而も初めは凡て歌舞と緣故があつたが、近世は歌舞を事とせぬ巫女も出た。神社附屬の巫女には、八乙女・鄕巫女その他の名がある。神樂男に對して舞姬とも、また命婦とも云ふ。巫女の容姿は時と處に依り異なるが、髮はおすべらかし、お下げで多く紫の布を以て髮の末を卷く。また千早と稱する特殊の衣服を着る。扇・鈴・笹等を手にして拜殿或は神樂殿で舞ふ。神事の日に限り舞ふのと、毎日神社に詰めて參詣人の所望によつて舞ふのとある。

に置くうち男子が生れ、名を喜代吉と名づけ、はや七歳になつた。本妻奥野には實子がないので、孔之介は喜代吉を後繼にしたいと考へたが、自分は養子、奥野は家附きの娘であるから遠慮してゐた。奥野は沖水母子の事を知つたけれど別に嫉妬もせず、良人の心遣ひを察し、知らぬ風を裝うてゐた。玆に畠山家の浪人に洲崎浪太郎と云ふ者がゐた。孔之介の棊敵で繁々出入するうち、奥野の美しさに戀慕し、度々言ひ寄つたけれど、一向相手にされない。或る日主人の不在をねらつて入り込み、奥野に沖水母子の寵愛一方ならぬ事を告げて煽動したが效が見えぬ。そこで沖水に密夫があり、孔之介を殺す計略があると言ひ出した

ので、奥野も驚いて、それなら主人へ告げて下さいと言ふだけで、相手にならなかつた。浪太郎は所詮孔之介が生きてゐたのでは成功せぬと考へ、或る夜孔之介が沖水の別莊へ通ふ途中に暗殺した。奥野は悲歎に沈んだが、浪太郎の言葉を思ひ起し、沖水母子を縛らせて責めたが、素より知らぬ事とて白狀しない。浪太郎も來り、奥野を深切らしく慰め、沖水を拷問した。或る夜二人を助け出す者がある。浪太郎の命で母子を水に投じ、罪を二人に嫁せんとする計略であつたが、二人は巧みにその場を免れた。奥野は家名の斷絕せん事を歎き、浪太郎の深切を信じ、そのまゝ彼を入婿にしてしまつた。富岡家に出入する山猫婆といふ後家があり、その繼娘に音瀬と云ふ美人があつた。富岡の召使東太郎といつか夫婦約束をしてゐるのを知らずに浪太郎は口說くが、間もなく二人の仲を知つて東太郎を責める。音瀬は山猫婆のため化粧坂に遊女に賣られ、浪太郎は富岡家の金を湯水のやうに遣つて通ふ。沖水殺しを賴まれた惡漢は時々金をゆすりに來るが、度重なるので斷わると、大聲揚げて孔之介殺しの事を口走る。奥野は自分が欺かれたのを悟り、東太郎に遺言狀を殘して自害する。東太郎は音瀬とも逢ひ、沖水母子をさがし出し、自分の實の親なる俠客秋月稻八と再會し、その助力で喜代吉に親の敵浪太郎を討たせた。【構想】さまでの特徵はないが、奥野が遂に洲崎浪太郎の奸計に欺かれて結婚する一節は、後世の人情本には餘り存在せぬ悲劇である。金澤八景に因む八人の俠客が出て來るのは、明かに演劇の影響で、終結が復讐になつてゐるのは合卷本に似通つた筋である。〔山崎〕

操競三人女 みさをくらべさんにんをんな 草雙紙 合卷 六冊合二冊・前後二編 【作者】柳亭種彥【畫工】歌川豐國【名稱】「筑紫權六、白浪譚」の角書があり、別名を「京太郎物語」といふ。【刊行】文政六年、山本屋刊。【諸本】續帝國文庫第二十三編中に本文のみを收める。【題材】「十二段の草子」（異本）の「美人揃」の段に據ると記すが、それは僅かであつて、多くは演劇の「千代始音頭瀨戶」の玄海灘右衞門に佐々木巖流を取合せたものであらう。【梗概】〔前編〕濱名判官重豐は嫡子多賀之丞の御傅役油原桐太夫が、亡父濱名判官の命日に惡漢共を餘儀なく斬り捨てた事を聞き、怒つて閉門を申附ける。絹脇佐文次は濱名判官が素性の知れぬ浪人雲津丹柳を濫りに寵愛する事を諫めて勘當される。日岡峠で濱名の家中の落久保京太郎は、追放された母方の叔父桐太夫に面會し、その娘の藤の井を妹としてかくまふ。京太郎の義理の叔父矢栗軍太兵衞は、桐太夫を祿盜人と罵つたので、藤の井は軍太兵衞を討つて父の恥を雪がんとする。既に藤の井と契つた並松綠之助は、藤の井・京太郎の關係を疑つたが、事實は無根であつた。一方、京太郎と許嫁の請竹節藏の妹の尾花は、藤の井・京太郎の關係を疑ひ、病死と僞つて京太郎に許嫁を解消させ、藤の井を殺害せんとして綠之助に捕へられ、今迄の誤解がとける。〔後編〕絹脇佐文次は妻の袖浦、娘小千代を舅千種嵯峨右衞門方にあづけ、暫く留守した後に歸家して、濱名家を見限り、秩父殿に抱へられたと語り、女房袖浦の厚化粧と服裝とを見て、他に聟をとつたものと疑ふ。嵯峨右衞門は、雲津丹柳が玄海灘で討ち漏らされた海賊の張本筑紫權六であつて、彼が室町殿の重寶の二龍の旗を奪つてゐるのを取戾し、夫佐文次を喜ばせるために、袖浦がいやがるのを口說いて丹柳方に妾奉公に出し、旗は見事に入れたと語る。大和橋の茶屋で、京太郎・綠之助・藤の井・藝子の八重梅（實は、京太郎の許嫁の尾花）等が酒宴してゐる處へ軍太兵衞が現れ、嘗て桐太夫を讒言した點で藤の井等に討たれる。桐太夫・佐文次・袖浦等は、計略を用ひ、丹柳に先年濱名判官に亡ぼされた玄海灘右衞門の實弟筑紫權六と名乘らせて、すつかり裏をかき、濱名多賀之丞は丹柳を討取る。【解說】時代物と世話物とを取合せ、種彥特有のお芝居がかりの趣向であつて、作爲の跡があまりに露出してゐる。三女性中の藤の井を孝、尾花を貞、袖浦を忠に案じてゐるが、袖浦の如きは、對手もあらうに陰謀の張本人の妾となつて重寶を奪ひ出すなど、忠義のためとは言ひながら無理がある。疑惑誤解によつて筋をはこぶは煩はしいが、死者に對して離緣狀を與へる事は一趣向である。藤の井が雷鳴を恐れる事から京太郎との關係を疑はれる趣向は、後年に山東京山が「敎草女房形氣」（別項）中で眞似てゐる。〔小池〕

操草紙 みさをさうし 浮世草子 五卷 【作者】淡海子の署名がある。【畫工】岷江とある。【刊行】明和八年【諸本】德川文藝類聚第一所收【解說】明和六年五月二十三日、江戶兩國五十嵐屋といふ髮油店の妻、夫の妾を嫉みて殺害し、己れも自害した（街談錄）。この事件を材としたものである。筋は江戶兩國橋西詰に名高き冠髮香の本舖五十嵐屋惣七の妻おきよは、一生不犯の願を持つてゐたので、惣七に勸めて古道具屋安兵衞の娘おつやを妾とさせる。おつやは惣七の寵愛を受けてゐたが、惣七が新しく上つた腰元おりうに目をかけるやうになつたので、嫉妬のあまり、おりうを蚊帳の上から刺殺し、自分も死んでしまふ。ついで淺草寺開帳のため遊歷して來た遊行上人の念佛によつて二人とも解脫する。なほこの事件を材としたものには「艷油こひの夜嵐」といふ淨瑠璃がある。〔小泉〕

短夜仇散書 みじかようきなのちらしがき 脚本 四幕八場 世話物 【作者】福森久助【名義】短夜は夏狂言の意。仇は「うきな」と讀ませてあるが、世界に取つた義太夫「八重霞浪花濱荻」中の「婀娜な（とし）の散らし書き」の文句を借りた名題である。【通稱】お園六三【興行】文化十年七月十五日初日、江戶中村座初演。

〔役割〕（とし）おばアお松・大工六三郎（尾上松助）、福島屋娘お園（二代澤村田之助）、醫者若林七郎助（中村東藏）、福島屋後家お梶（芳澤いろは）、梶川長兵衞（市川市藏）、田舍娘おわた（瀨川多門）、中村少長（中村七三郎）、市川露鶴（市川傳藏）、福島屋濤兵衞（助高屋高助）、船越十右衞門（三代坂東三津五郎）。

【諸本】文化文政江戶世話狂言集（日本戲曲全集）所收。

【梗概】〔序幕〕（兩國廣小路）印子の鯉魚を失つて浪人した小柴六三郎は、大工六三となつてお園と人目を忍ぶ仲。その鯉魚を奪つた梶川長兵衞もお園に心をかけ、母お梶に所望するが諾かない。（とし）おばアお松は牢舍から赦され、子分達が出迎へる。長兵衞はお松にお園・六三の手を切るやう賴み、鯉魚の袱紗を渡す。六三はお松の義理ある弟である。（柳橋大のし）お園・六三の色模樣。若林七郎助は、お松に貸した金を六三に催促する。長兵衞は二人の不義を云ひ立てて割かうとしたが、却つ

て船越十右衞門から長兵衞の金が極印金なる事を指摘されて失敗する。〔二幕〕（深川網打場お松內）お園は家を逃げ出して爰に匿まはれる。福島屋から手代が迎ひに來たが、お松に追ひ返される。十右衞門が掛合に來る。お松は藝者時代から十右衞門に惚れてゐたので一旦は承知したが、とても我が意を納れないと見るや、お園に墮胎藥を服ませて六三の胤を闇に沈めようとする。その藥のため却つてお松は顏を火傷し、逃げるお園を追ふ。（中木場）大雷雨の中に、お松はお園を殺さうとする。藪の中から六三が出てお松を斬り、お園と立ち退く。〔三幕〕（向島福淸寮）少長・露鶴の兩優、淸兵衞をたづねて、お松殺しの話をする。お園は伯父の淸兵衞へよそながらの暇乞ひ、淸兵衞は六三へ敎訓。〔大切〕（向島土手）お園・六三の道行に、田舍娘おわた搦む。常磐津淨瑠璃「道行仇散書（うきなのちらしがき）」。（眞崎稻荷）長兵衞・七郎助が惡事の相談、六三駈けつけて鯉魚を奪はんと爭ひ、川へ打込むと、鯉魚は大鯉となつて現はれる。六三は長兵衞の子分等と鯉摑み本水の大立廻り。血汐の穢れで鯉魚は元の印子の置き物となり、六三の手に入る。

【脚色】お園六三の書き替へに過ぎぬが、六三をいさみの大工にしたのは、この狂言が始まりで、以來その型に定まり、尾上家の家藝となつた。六三とお松の早替りは、南北の「阿國御前化粧鏡（けしやうのすがたみ）」の累・與右衞門を借りたもの。鯉摑みは江戸夏狂言の常式で、その他は常套な筋、ただ簡潔な點を採るべきであらう。お松があまり見かけぬ型の役柄で、面白く書けてゐる。これは當時實在の遠州屋お蝶といふ惡婆の當て込みだと云はれる。その外、お松が自宅で行水を使ふ場面の前後が、一種の氣分劇とも見るべく、江戸時代の深川、その裏町の長屋情調を面白く出してゐる。〔遲美〕

三品藺溪（みしなりんけい）「柳條亭華彥」を見よ。

三島霜川（みしまさうせん）小說家【本名】才二【生歿】明治九年四月生れ、昭和九年三月歿す。享年五十九【閲歷】富山縣西礪波郡麻生村に生れた。文壇的には硯友社系統に屬し、既に明治三十一年の「埋れ井戸」以來、「新小說」「文藝倶樂部」等に作品を發表し、田園趣味豐かな作風を以て次第にその特色を認められるに至つた。長短百餘篇の作品があり、「中央公論」「新潮」等に「解剖室」「しつかり者」「栗の花」を出すに及んで、堅實なる中堅作家として推されたが、その活動は主として自然主義文學勃興時代迄であつた。後、創作に遠ざかり、「演藝畫報」の發刊されるや、早くより關係して、犀兒・椋右衞門等の名の下に逐號劇評隨感の類を寄せた。中にも大正初頭、數年に亙つて連載した「大正役者藝風記」の如き、この種の批評中出色の文字である。後、同誌の首腦となつて劇文壇のために力を致した功績は少くない。その他歌舞伎脚本の編著にも從つた。〔水木〕

水鏡（みづかゞみ）歷史物語　三卷【著者】中山忠親（「本朝書籍目錄」假名部。中山大納言定親の「薩戒記」應永三十三年十一月十六日の條（比古婆衣所引）に據る）。古來殆ど定說とされてゐるが、忠親よりも遙かに後の鎌倉末期の作で、作者不明といふ說もある（黑板勝美氏「國史の研究」）。【名義】「大鏡」に比べると、ことばも賤しく、誤りも多く、讀者の譏りを受けること疑ひないが、しかし昔の佛が水鏡にうつる程度には見えよう、と、著者自身が第三卷末に記してゐる。【卷冊】「水鏡一帖」の語があるから（薩戒記）、一卷本もあつたと思はれる。【成立】忠親は、建久六年三月十二日に薨じてゐるから、それ以前なることは確かであるが、「今鏡」の著者と推定される源通親と同時代であり、嘉應元―二年に成つた「今鏡」（別項）との先後は明かでない。芳賀矢一博士は「續世繼といひ今鏡などいうた所から見ると、今鏡の方が先であらう」といつてゐる（歷史物語）。果して然らば、嘉應二年以後建久六年に至る二十五年間（著者四十一歲―六十五歲）に出來たものである。【諸本】詳略二系統があり、流布本は簡略で異本は詳密、而も文章も大に異なつた所がある。何れが先であるか明かでないが、多分「大鏡」に後人の加筆があると同樣に、「水鏡」も後人の加筆によつて詳密本が出來たのであらう。逆に詳密本を抄略し、文章を書き改めて流布の簡略本が出來たといふ說もある（國史の研究）。（一）流布本には、古活字本・永正古寫本（永正九年四月古槐散木判の奧書がある。「比古婆衣」所載信友の考證によれば一條兼良。謄寫本大澤淸臣藏）・寬永古寫本（寬永八年三月奧書。井上頼圀藏）・烏丸光廣書寫本（松井簡治博士藏）・榊原芳野舊藏本（中卷一冊のみ。帝國圖書館藏）・近衞本（近衞公爵家藏）・同一本（同家藏）・藤貞幹舊藏本（靜嘉堂文庫藏）・神宮文庫本（神宮文庫藏）・塙保己一校本（內閣文庫藏）・石橋眞國校本・屋代弘賢校本（古活字本を底本とし、永正本その他を以て校合す。阿波文庫舊藏、小杉榲邨藏。史籍集覽に收む）・松本愛重氏藏本（屋代本に似てゐる）・校定水鏡（明治三十一年刊、萩野・松井・關根三氏校。烏丸本を底本とし、近衞本・同一本・石橋本・史籍集覽本・流布刊本を以て校合等がある）等がある。（二）異本には、前田家本（片假名である。永和元年十月信乘の奧書がある。明治十三―十五年の謄寫本が內閣文庫にある。國史大系に收む）・古印本がある。史籍集覽・日本文學全書・國史大系・國文大觀・有朋堂文庫・校註國文叢書・新釋日本文學叢書・校註日本文學大系・日本古典全集等所收。

【組織・內容】「大鏡」以前、即ち神武天皇より仁明天皇まで五十四代（原本は第十五代に神功皇后を、第二十四代に飯豐天皇を數へ、弘文天皇をば數へないので五十五代としてある）、一千五百十年間の編年體歷史。結構は「大鏡」（別項）に摸し、對話體で、場所は大和國泊瀨寺。時は鎌倉時代、或る年二月初午の日、大和國高市郡龍蓋寺（岡寺）より歸るさ、通夜の折。人物は聽者（老尼七十三歲）、話者（修行者三十四五歲）。修行者の話から始まる。私が一昨年秋九月十日頃葛城山で法華經讀誦中、藤の皮の衣、竹の杖、瘦せて神さびた翁姿の仙人が現はれて、世に修行者は多いが誠に佛道に入る人は少いのに感心だといつて話しかけ、出家の原因は何だときくから「この十餘年、世のなりまかるさまの心とゞむべくも見え侍らねば」と答へると、世相は時に隨つて變遷するのが常である、古をほめ、今をそしるべきではないと言ひ（こゝに著者の史觀がうかゞはれる）、なほ仙人は言葉をついで、我は神代以來葛城・吉野をすみかとして、遠近都鄙の樣を具に見聞してゐるから話してやらう。併し文德天皇以後は萬壽の頃世繼の翁が話してあるので、それ以前の事を語り聞かさうと、卷上（神武天皇―欽明天皇）・卷中（敏達天皇―孝謙天皇）・卷下（廢帝（流布本）、大炊天皇（異本）―仁明天皇）の順序で次々に話し、語り終ると仙人はもとの道へ歸つてしまつた。私が今話したのは仙人の話の十分の一位であらうと話を結んだ修行者は、夜明け頃に何方ともなく立ち去つた。決して他にもらすなとその修行者は言つたが、聞き捨てにするのは惜しいし、私（尼）は若い時から歷史が好きなので書きつけた。大體かういふ結構であるが、材料は主として「扶桑略記」（別項）により、漢文を假名文に書きかへ、更に「聖德太子傳曆」や「日本靈異記」「今昔物語」（各別項）等から佛敎說話を多く取入れてゐる。年代は「古事記」によらず、持統天皇までは「書紀」により、それ以後は「續日本紀」によつてゐる。武烈天皇に關する暴

說も佛敎的見解であるが、「水鏡」以後に現はれる鎌倉時代の各種文學が、すべて佛敎的色彩の濃厚であるに對し、それ等の先行者ともいふべきで、時代思潮の反映である。

【價値】「大鏡」を摸してゐるが、史書としても文學としても到底それに及ばない。「大鏡」（百七十六年間）、「今鏡」（百四十六年間）、「增鏡」（百五十二年間）、「月の行方」（十二年間）、「池の藻屑」（二百七十年間）（各別項）は、年數が比較的短いか

岡虎之助（歷史地理四五ノ三）○水鏡と扶桑略記・水鏡の價値を論ず 喜田貞吉（史學雜誌一四ノ一二）○歷史物語の本質 沼澤龍雄（國語と國文學三ノ六）○歷史物語 芳賀矢一 〔沼澤〕

水鏡詳解（みづかゞみしやうかい）註釋書【著者】江見淸風（松本愛重閱）【刊行】明治三十六年、明治書院。【解說】流布本「水鏡」により、上卷を神武―欽明、中卷を敏達―孝謙、下卷を廢帝―仁明としてあるが合本一冊である。本文校訂

年刊、國芳畫）○東花雨鉢木（天保十二年刊、國貞畫）○旅硯振袖日記（天保十三年刊、國貞畫）○繪卷物今樣姿（天保十三年刊、芳鶴畫）○結緣妹脊組絲（天保十三年刊、芳鶴畫）○春說名勝記（天保十三年刊、芳虎畫）○舞扇出世景淸（天保十四年刊、國芳畫）。

【作風】「善惡振分道中數語錄」（天保十三年刊、美圖垣笑顏作）によると、天保十年刊の二作が處女作らしい。「兒雷也豪傑譚」は幕末長編合卷

なつて現はれる。六三は長兵衛の子分等と鯉掴み本水の大立廻り。血汐の穢れで鯉魚は元の印子の置き物となり、六三の手に入る。【脚色】お園六三の書き替へに過ぎぬが、六三をいさみの大工にしたのは、この狂言が始まりで、以來その型に定まり、尾上家の家藝となつた。六三とお松の早替りは、南北の「阿國御前化粧鏡」の累・與右衞門を借りたもの。鯉掴みは江戸夏狂言の常式で、その他は常套な筋、ただ簡潔な點を採るべきであらう。お松があまり見かけぬ型の役柄で、面白く書けてゐる。これは當時實在の遠州屋お蝶といふ惡婆の當て込みだと云はれる。その外、お松が自宅で行水を使ふ場面の前後が、一種の氣

出色の文字である。後、同誌の首腦となつて劇文壇のために力を致した功績は少くない。その他歌舞伎脚本の編著にも從つた。〔水木〕

水鏡（みづかゞみ）　歴史物語　三卷　【著者】中山忠親（「本朝書籍目錄」假名部。中山大納言定親の「薩戒記」應永三十三年十一月十六日の條（比古婆衣所引）に據る）。古來殆ど定説とされてゐるが、忠親よりも遙かに後の鎌倉末期の作で、作者不明といふ説もある（黑板勝美氏「國史の研究」）。【名義】「大鏡」に比べると、ことばも賤しく、誤りも多く、讀者の譏りを受けること疑ひないが、しかし昔の佛が水鏡にうつる程度には見えようと、著者自身が第三卷末に記してゐる。【卷冊】「水鏡一帖」の語があるから（薩戒記）、一卷

本（寛永八年三月奥書。井上頼圀藏）・烏丸光廣書寫本（松井簡治博士藏）・榊原芳野舊藏本（中卷一册のみ。帝國圖書館藏）・近衞本（近衞公爵家藏）・同一本（同家藏）・藤貞幹舊藏本（靜嘉堂文庫藏）・神宮文庫本（神宮文庫藏）・塙保己一校本（内閣文庫藏）・石橋眞國校本・屋代弘賢校本（古活字本を底本とし、永正本その他を以て校合す。阿波文庫舊藏、小杉榲邨藏。史籍集覽に收む）・松本愛重氏藏本（屋代本に似てゐる）・校定水鏡（明治三十一年刊、萩野・松井・關根三氏校。烏丸本を底本とし、近衞本・同一本・石橋本・史籍集覽本・流布刊本を以て校合箏がある）等がある。（二）異本には、前田家本（片假名である。永和元年十月信乘の奥書がある。明治十三ー十五年の謄寫本が内閣文庫にある。國史大系に收む）・

に隨つて變遷するのが常である、古をほめ、今をそしるべきではないと言ひ（こゝに著者の史觀がうかゞはれる）、なほ仙人は言葉をついで、我は神代以來葛城・吉野をすみかとして、遠近都鄙の様を具に見聞してゐるから話してやらう。併し文德天皇以後は萬壽の頃世繼の翁が話してあるので、それ以前の事を語り聞かさうと、卷上（神武天皇ー欽明天皇）・卷中（敏達天皇ー孝謙天皇）・卷下（廢帝（流布本）、大炊天皇（異本）ー仁明天皇）の順序で次々に話し、語り終ると仙人はもとの道へ歸つてしまつた。私が今話したのは仙人の話の十分の一位であらうと話を結んだ修行者は、夜明け頃に何方ともなく立ち去つた。決して他にもらすなとその修行者は言つたが、聞き捨てにするのは惜しいし、私（尼）は若い時から歴史が好きなので書きつけた。大體かういふ結構であるが、材料は主として「扶桑略記」（別項）により、漢文を假名文に書きかへ、更に「聖德太子傳曆」や「日本靈異記」「今昔物語」（各別項）等から佛敎説話を多く取入れてゐる。年代は「古事記」によらず、持統天皇までは「書紀」により、それ以後は「續日本紀」によつてゐる。武烈天皇に關する暴虐の記事（書紀は朝鮮の事實を誤記したもので、齋藤彥麿・内山眞龍の考證がある）を載せたり、「高き屋にのぼりて見れば」の歌（藤原時平作日本紀竟宴歌）を仁德天皇御製としたり、道鏡即位に關する神託の進言（習宜阿曾麻呂であることは「續日本紀」に明記してある）を和氣淸麻呂の姉廣蟲（法均尼）であるとしたなどは、大きな誤謬の例であるが、「書紀」に見えない大友皇子の即位を天武天皇の條に明記してあるので（一代として題目をは掲げないが）、「大日本史」もこれによつて一代と數へ、明治になつて確定した。神功皇后（「古事記」は、ただ事蹟を記し、「書紀」は攝政とす）を一代に數へたのは、「扶桑略記」によつたものであるが、皇太子早良親王の廢せられた事情、光仁・桓武二帝即位の委しき事情など、正史に見えない重要記事のあるのは注意すべき事である。なほ最も著しく眼につく事は佛敎的色彩の強い事である。神武天皇以前神代の事を略敍し、更に溯つて開闢説を述べてあるが、それは全く佛敎の解釋で、小劫・中劫・大劫について委しく述べてある。欽明天皇の朝、佛敎渡來以後、その記事の多いのは勿論であるが、それ以前にも、神武・孝靈・開化・崇神・垂仁・神功皇后・宣化天皇等の條に、佛敎に關する記事がある。「神皇正統記」（別項）の開闢説も佛敎的見解であるが、「水鏡」以後に現はれる鎌倉時代の各種文學が、すべて佛敎的色彩の濃厚であるに對し、それ等の先行者ともいふべきで、時代思潮の反映である。

【價値】「大鏡」を摸してゐるが、史書としても文學としても到底それに及ばない。「大鏡」（百七十六年間）、「今鏡」（百四十六年間）、「增鏡」（百五十二年間）、「月の行方」（十二年間）、「池の藻屑」（二百七十年間）（各別項）は、年數が比較的短いから、長壽者をかり來つて話させる結構にしたが、「水鏡」は一千五百十年間の長きにわたるから、神代以來生きてゐるといふ仙人を連れて來て話させる事にしたのは、思ひつきの妙味であり、卷末に話者・聽者の結末をつけて、「增鏡」が龍頭蛇尾に終つた如き失態に陷らないのは、著者の細心の注意がうかゞはれるが、話者・聽者の風丰の活躍せぬのは、著者の創作的才能の乏しきを示すものであり、「大鏡」をまねながら、乾燥無味に陷り易い本紀のみで、興趣豐かなるべき列傳を記さない事も、本書の一大缺點である。文章は擬古體であるが、漢語・佛語を多く用ひ、平安朝の文とは自ら相違がある。平易簡明ではあるが、情熱が乏しく魅力がない。「大鏡」「增鏡」と共に三鏡と數へられるが、實は「今鏡」に及ばない。要するに史料としても文學としても、決して高い位置を占めるものではないが、著者自ら「よしなし事に侍れども」と言つてゐる幾多荒唐無稽の傳説中に、時代精神の片影を認め得る點に本書の價値がある。

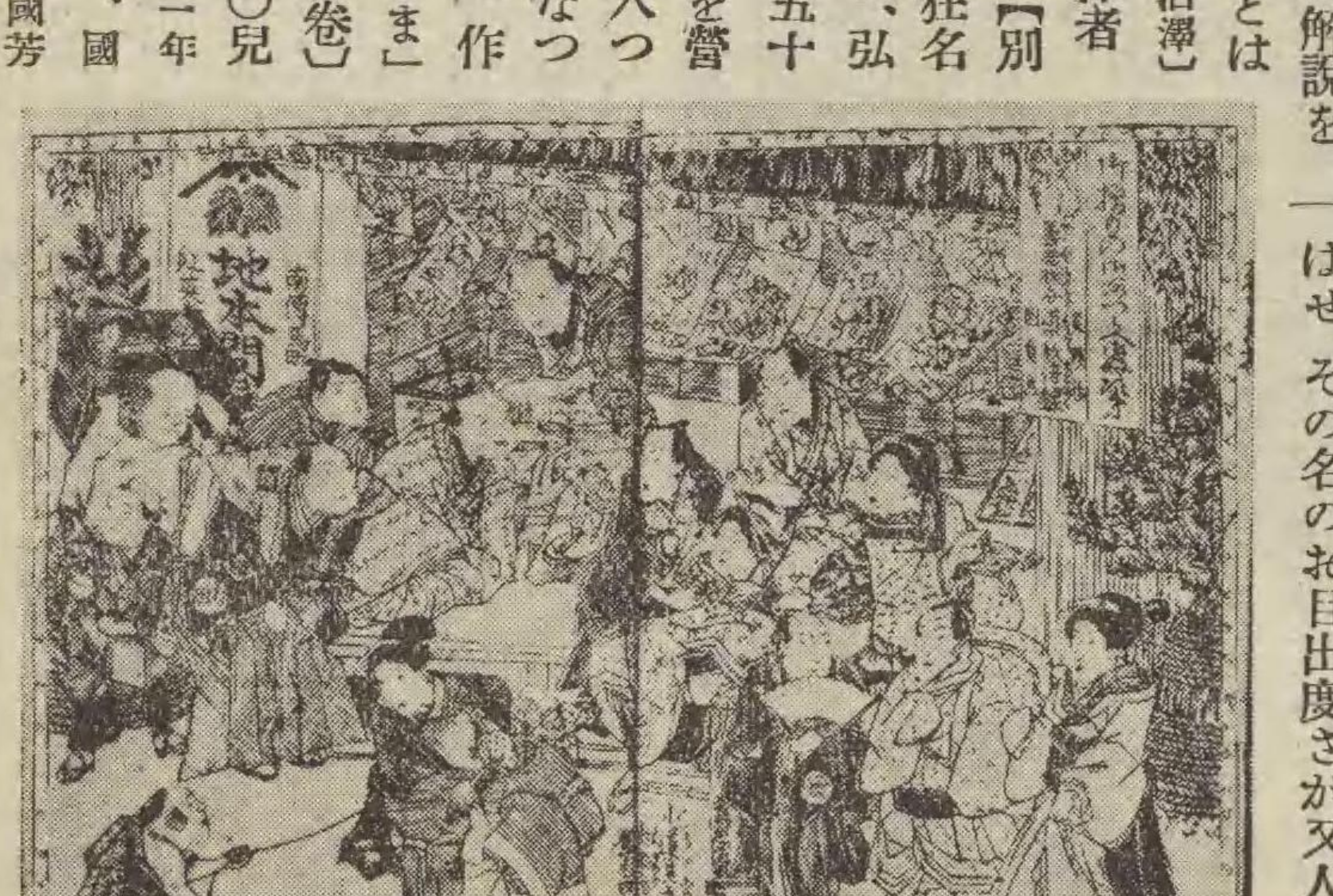
【註釋書】水鏡短觀抄六卷大石千引○水鏡索引著者未詳○水鏡詳解（別項）江見淸風。

【參考】比古婆衣卷六伴信友○水鏡解題（史學界一ノ二）○水鏡の書名・卷數・著者について西岡虎之助（歴史地理四五ノ三）○水鏡と扶桑略記・水鏡の價値を論ず喜田貞吉（史學雜誌一四ノ二）○歴史物語の本質沼澤龍雄（國語と國文學三六）○歴史物語芳賀矢一　〔沼澤〕

水鏡詳解（みづかゞみしやうかい）　註釋書　【著者】江見淸風（松本愛重閲）【刊行】明治三十六年、明治書院。【解説】流布本「水鏡」により、上卷を神武ー欽明、中卷を敏達ー孝謙、下卷を廢帝ー仁明としてあるが合本一册である。本文校訂にも力を注いで一々何本によると註記し、假名遣の誤りも原形を保存してゐるのは學術的態度である。歴朝陵墓を明治三十四年宮内省諸陵寮調査の「陵墓一覽」によつて現今の所在地を示したり、卷頭に著者及び異本の解説を、卷尾に五十音順索引を附してあるなどは便利である。〔沼澤〕

美圖垣笑顔（みづがきゑがほ）　草雙紙作者　【姓名】通稱を美濃屋甚三郎といふ。【別號】愛亭（「めでてい」と讀んでゐる）。狂名を涌泉亭眞淸。【生歿】寛政元年生れ、弘化三年（二五〇六）九月五日歿す。享年五十八。【閲歴】初め新橋加賀町で質屋を營んで居り、この頃、狂歌堂眞顔の門に入つて狂歌を習つたらしい。後、書肆となつて涌泉堂と號し、芝區田町に住んだ。作品中の署名には「竹芝の浦に湊のいとま」などと肩書を附けてゐる。【作品】〔合卷〕柳髮雪吹夜嵐（天保十年刊、貞齋泉晁畫）○兒雷也豪傑譚（別項）○忠臣文庫（天保十一年刊、國貞畫）○花櫓詠義經（天保十一年刊、國芳畫）○名所競睦珠歌話（天保十一年刊、國芳畫）○辨慶狀武勇封（天保十一年刊、國直畫）○英雄男女競（天保十二年刊、芳虎畫）○智勇兼備志（天保十二年刊、國芳畫）○鳩八幡霞陣幕（天保十二年刊、國芳畫）○裏花雨鉢木（天保十二年刊、國貞畫）○旅硯振袖日記（天保十三年刊、國貞畫）○繪卷物今樣姿（天保十三年刊、芳鶴畫）○結緣妹脊組絲（天保十三年刊、芳鶴畫）○春説名勝記（天保十三年刊、芳虎畫）○舞扇出世景淸（天保十四年刊、國芳畫）。

【作風】「善惡振分道中數語錄」（天保十三年刊、美圖垣笑顔作）によると、天保十年刊の二作が處女作らしい。「兒雷也豪傑譚」は幕末長編合卷の一で、注意すべき作品である。師匠は立川焉馬（別項）であり、既に馬琴・京山老い、種彥も漸く衰へて來た際、僅かに五年間ではあるが、専ら讀切合卷を創作して當時の文壇を賑はせ、その名のお目出度さが又人氣を呼んだ。書肆であつた爲めに、彼の戲作道樂には、問屋が贔屓して書かせてくれ、彼もこの點を承知して努力した。天保十年には僅かに二部の



繪卷物今樣姿（笑顔似顔繪）

作品であつたが、翌十一年には七部となり、同年の合卷作者中第一位の創作率である。翌十二年に十二部、十三年には十一部を刊行したが、天保の改革により斷然筆を斷つた。彼の趣向は時代物、就中戰爭物から始まり、武家の系圖を作中に揭げ、屢々戰鬪の樣を描き、武者繪めいた色彩を持つてゐる。世話物風の作品も相當にあるが、その內に軍記物の分子を含んでゐるものを屢々見かける。趣向や人物等に奇を求めず、大衆就中婦人子供向きである。文章は普通であつてたくまず、支那小說の影響として見るべきものはない。修養も少く、狂歌も劣つてゐる。印章は卍の眞中に三つ巴を畫いた物を用ひてゐる。「繪卷物今樣姿」には、扇地紙形の中央に「の」の字を三ツ巴風に三つ畫いて、大田蜀山人の印章を眞似てゐる。〔小池〕

水掛聟（みづかけむこ）　能狂言　【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられてゐる。【別稱】水論聟【格式】小習（和泉流）

【梗概】百姓が、當年は殊の外田がよく出來て嬉しいが、この中天氣續きで田に水がない。一雨降らせたいものだと言ひつつ、自分の田に來て見ると、水口を止めて隣の田に水を引いてある。それは誰あらう聟の田だのに、聞えぬ事だと怨んで、又水を元のやうに我が田に引いて番をしてゐる。處へ聟が出て來て、己が田を見て隣の舅の田に水を取つてゐるのを怨む。舅は聟と對面し、雨乞の話などいろ〳〵ある。そのうちに、聟は我が田に水を引く。舅はこれを見て立腹し、遂に互に水の取りあひとなり、水を掛けたの泥を掛けたのと大喧嘩になる。其處へ女が出て來て、なう〳〵悲しや父樣とこちの人と喧嘩が出來た。誰かとりさへて下されと言ふ。聟は女を加勢にして舅を打ち倒し、女も父樣祭には來ませうぞと、倶に逃げるのを、父やるまいぞ〳〵。

【解說】狂言には聟の出るものが種々存する。そして、無法な聟を主要人物としてゐる。「鷄聟」「口まね聟」の如きは、無藝無作法な聟をあらはしてゐる。「船渡聟」は却つて舅の方を酒好きで面目を失ふこととして仕組んでゐる。この作には、親子の間にも油斷がならず、また妻は舅と夫との爭の時、夫の方に附くといふ趣や、殊に戰國亂離の世態の反映さへ觀られる。〔野村〕

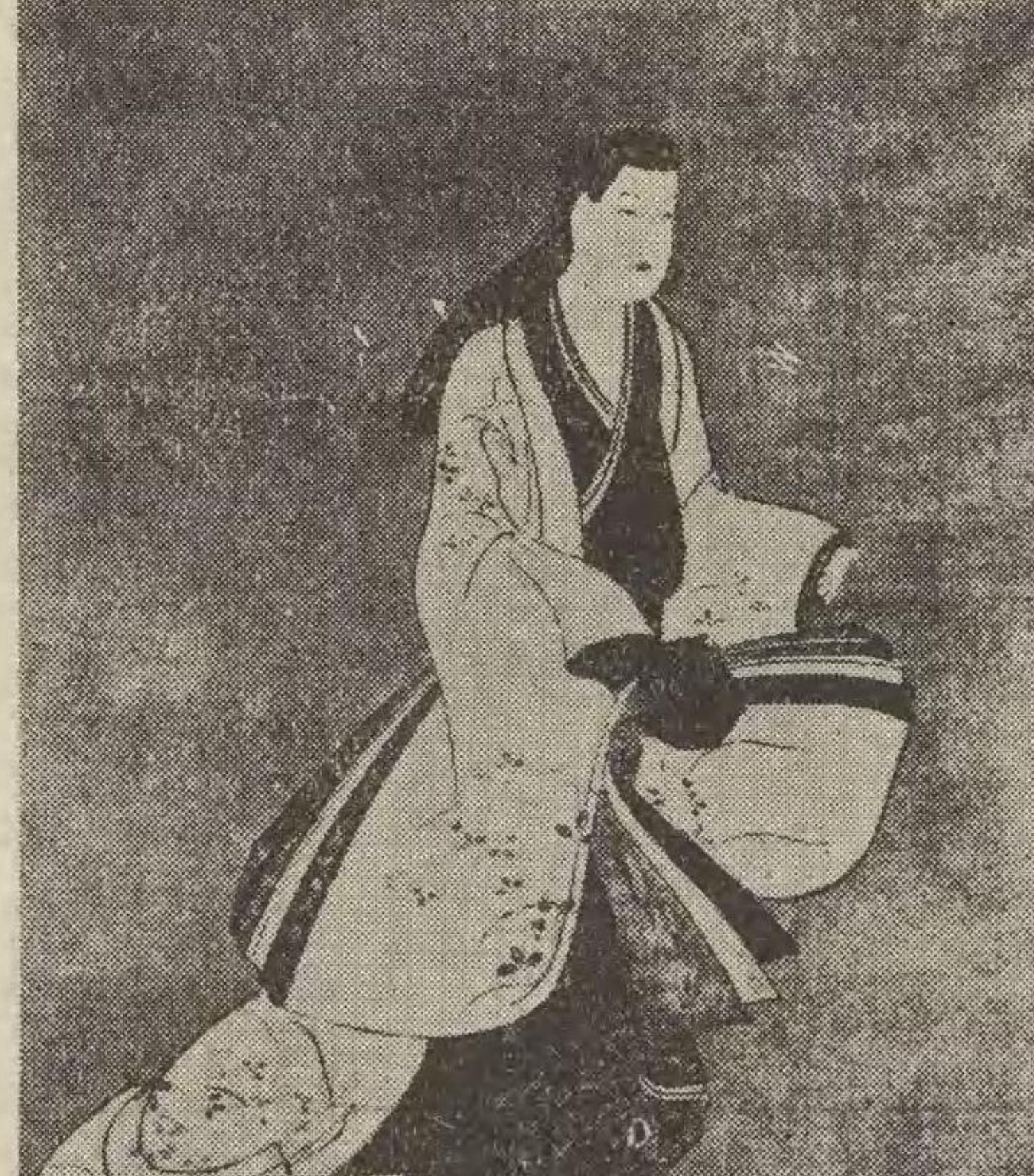
水甕（みづがめ）　短歌雜誌　【創刊】大正三年四月、水甕社。【解說】當時、なほ東京帝國大學の學生であつた和氣朝臣・石川橫村・石井直三郎・岩谷莫哀・赤木桁平・出隆・佐竹哲雄・逸見義亮等により尾上柴舟を中心とした會員組織で發行した。爾來石井直三郎・岩谷莫哀が主として編輯經營に當り、昭和三年から發行所を名古屋に移し、今日に及んでゐる。現在の主なる同人は、主宰尾上柴舟を初め、石井直三郎・細井魚袋・上田英夫・金澤種美・松田常憲等である。歌風は或る特殊の主義によらず、各々個性に根ざした作風を重んずると云ふ主義であるが、やはり尾上柴舟の「日記の端より」以後の歌風の影響を受けることが比較的目に立ち、內容の平明にして表現の穩健なものが多く、而して抒情的な分子に富み、且つ一體に新古典派とよぶのが最もふさはしいかとも思はれる。〔石井〕

大空の色も深さもかはらねばまたわが涙おつるなりけり　尾上　柴舟

アルパカの上着身がろに此家より會社へ通ふ日はあらざらむ（病中）　岩谷　莫哀

山いくへ夕山いくへ鳴かぬ鳥寂しき鳥のおちてゐる山　石井直三郎

水木辰之助（みづきたつのすけ）　俳優　【通稱】清十郎。後年大和屋宇右衞門【初名】大和屋牛松・鶴川辰之助【俳名】歌蝶【生歿】延寶元年大阪に生れ、延享二年（二四〇五）九月二十三日同地に歿す。享年七十三。【閱歷】大阪半道方の俳優齋藤新八の子で、立役の名優初代大和屋甚兵衞（高德院宗玄日體）の甥。延寶末から子役として大阪大和屋座へ出で、貞享二年若衆方となり、元祿初年若女方に轉じ、水木と改姓。同二年冬甚兵衞と共に京都萬太夫座に上り、翌春「袖の海」の傾城事で名を揚げて太夫號を得、同四年「娘親の敵討」に、湯女有馬の藤を演じたのが、一代の當り役とされた。爾來京阪を去來して評判を得たが、同八年早雲座の「水木辰之助餞振舞」（別項）を名殘りに、同年冬江戸市村座へ下つたが、その時の給金は五百兩だつたといふ。而して御目見得狂言は有名な「四季御所櫻」で、當り藝たる槍踊とから猫の所作を演じて大喝采を博し、江戸の人氣を一身にあつめたが、かの其角が、「花の夢胡蝶に似たり辰之助」や、「煤掃や諸人がまねる鎗踊」と詠んで稱へたと傳へる。江戸に留まること二年にして同十年冬歸京、萬太夫座で江戸土產の「七化け」を演じて大當りを取り、江戸上りの中村七三郎所演の「關東小六」を壓倒した。それより益々聲價を高めたが、寶永元年春大阪岩井座の「嫁色直衣」の女房お石に扮したのち、幾何もなく廢業したらしく、梨園にその名を絕つたが、その原因は詳かでない。かくてその後大和屋宇右衞門と改め、大阪に隱棲して餘生を送つた。【藝風】面體はすぐれなかつたが、「諸藝三國無雙、殊に傾城事御姬樣、又は賤の女にしていやしき業、若衆方にてふらせても殘る所なく」（雨夜三盃機嫌）、「扇の手舞ひ振り、至つて怨靈死靈、やつし傾城事名人、殊更昔から女方にも立役にも竟に致さぬ七化け」（役者口三味線）といふ變化舞踊の創始者だつた。しかし「諸藝利口すぎて銳どに見ゆるが氣の毒」（三國舞臺鏡）ともいはれた。彼は初代芳澤あやめと共に對稱された元祿期を代表する名女方で、殊に所作事に於ては當代隨一の名手だつた。また彼は近松門左衞門作の名脚本の女方に多く扮した事に於ても、水木帽子を創めた事に於ても有名である。



傳水木辰之助（清水直治氏藏）

【二代】〔初名〕水木竹之助〔別名〕大和屋甚兵衞（三代）〔俳名〕此誰〔閱歷〕初代の門下水木染之助の門葉。享保十八年若衆方から若女方となり、元文元年冬京都で初座本を勤め、

翌二年十一月二代を襲名。それより「磯馴松」の松風、「傾城大井川」の龜山等に好評を得、延享三年冬大阪嵐三右衞門座へ下り、翌四年十一月中の芝居で三代大和屋甚兵衞を繼いで立役に轉ず。寬延元年冬歸京して早雲座に現はれ、「蒔繪忠臣藏」の今川仲秋、「歌仙櫻」の家二郎等に評判を得たが、同三年染松座出勤後、寶曆元年に至つてその名が梨園から見失

〔役割〕安達數馬（大和屋甚兵衞）、奧名月（玉川さんや）、大內房之丞（小野川宇源次）、待宵姬（袖崎いろは）、家老大友大膳（荒川十之右衞門）、小姓一角（村上竹之丞）、同左近（早川はつせ）、門番半助（若林四郎右衞門）、てつさん法印（金子吉左衞門）、有馬の藤（水木辰之助）、同おてら（藤井こきん）、和歌浦光右衞門（坂田藤十郎）等。

【諸本】繪入狂言本の傳はる外に、近松門左衞

た祈禱によつて、死靈は數馬の言葉を信じ、やがて一同を美濃國なる九太夫の屋敷に案內する。（九太夫屋敷）死靈は、九太夫を木の空に吊し上げて罪を白狀させ、數馬の刃に討たせる。數馬の念佛に死靈は成佛し、一同も本國に引上げる。〔三幕〕（千日寺）お藤の弟は姉の死のため、馬士にまで零落したが、姉の靈を回向せんと千日寺に來る。丁度居合はせた名

破伴左衞門島原狐」との交涉が疑問とされてゐる。本作は再演された事はないが、相當の評判をあげ、辰之助の狂ひは異常な當りであつた。

【參考】水木辰之助餞振舞解說高野辰之（近松歌舞伎狂言集）○近松脚本著作年代考　秋葉芳美（演劇學一ノ二）〔守隨〕

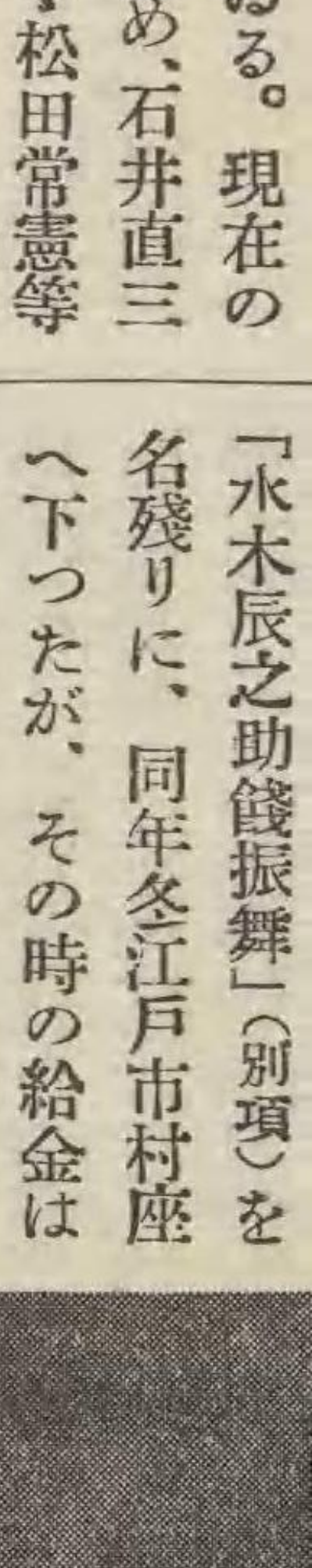
水木舞扇猫骨（みづきのまひあふぎのねこぼね）　草雙紙

【梗概】百姓が、當年は殊の外田がよく出來て嬉しいが、この中天氣續きで田に水がない。一雨降らせたいものだと言ひつつ、自分の田に來て見ると、水を仕掛けて置いたのに、水口を止めて隣の田に水を引いてある。それは誰あらう聟の田だのに、聞えぬ事だと怨んで、又水を元のやうに我が田に引いて番をしてゐる。處へ聟が出て來て、己が田を見て隣の舅の田に水を取つてゐるのを怨む。舅は聟と對面し、雨乞の話などいろ〳〵ある。そのうちに、聟は我が田に水を引く。舅はこれを見て立腹し、遂に互に水の取りあひとなり、水を掛けたの泥を掛けたのと大喧嘩になる。其處へ女が出て來て、なう〳〵悲しや父樣とこち

を名古屋に移し、今日に及んでゐる。現在の主なる同人は、主宰尾上柴舟を初め、石井直三郎・細井魚袋・上田英夫・金澤種美・松田常憲等である。歌風は或る特殊の主義によらず、各々個性に根ざした作風を重んずると云ふ主義であるが、やはり尾上柴舟の「日記の端より」以後の歌風の影響を受けることが比較的目に立ち、內容の平明にして表現の穩健なものが多く、而して抒情的な分子に富み、且つ一體に新古典派とよぶのが最もふさはしいかとも思はれる。〔石井〕

大空の色も深さもかはらねばまたわが涙おつるなりけり　尾上　柴舟

アルパカの上着身がろに此家より會社へ通ふ日は


（蔵氏治直

「水木辰之助餞振舞」（別項）を名殘りに、同年冬江戸市村座へ下つたが、その時の給金は五百兩だつたといふ。而して御目見得狂言は有名な「四季御所櫻」で、當り藝たる槍踊とから猫の所作を演じて大喝采を博し、江戸の人氣を一身にあつめたが、かの其角が、「花の夢胡蝶に似たり辰之助」や「煤掃や諸人がまねる鎗踊」と詠んで稱へたと傳へる。江戸に留まること二年にして同十年冬歸京、萬太夫座で江戸土產の「七化け」を演じて大當りを取り、江戸上りの中村七三郎所演の「關東小六」を壓倒した。それより益々聲價を高めたが、寶永元年春大阪岩井座の「嫁色直

舞臺鏡」ともいはれた。彼は初代芳澤あやめと共に對稱された元祿期を代表する名女方で、殊に所作事に於ては當代隨一の名手だつた。また彼は近松門左衛門作の名脚本の女方に多く扮した事に於ても、水木帽子を創めた事に於ても有名である。

【二代】〔初名〕水木竹之助〔別名〕大和屋甚兵衛（三代）〔俳名〕此誰〔閲歴〕初代の門下水木染之助の門葉。享保十八年若衆方から若女方となり、元文元年冬京都で初座本を勤め、

翌二年十一月二代を襲名。それより「磯馴松」の松風、「傾城大井川」の龜山等に好評を得、延享三年冬大阪嵐三右衛門座へ下り、翌四年十一月中の芝居で三代大和屋甚兵衛を繼いで立役に轉ず。寛延元年冬歸京して早雲座に現はれ、「蒔繪忠臣藏」の今川仲秋、「歌仙櫻」の家二郎等に評判を得たが、同三年染松座出勤後、寶曆元年に至つてその名が梨園から見失はれた。

【三代】〔初名〕水木市松・菊川常次郎〔別名〕菊川喜代太郎（二代）〔閲歴〕初代菊川喜代太郎の門葉。初め京都子供芝居に出て修業し、寛延二年十一月同地四條水木吉三郎座が大芝居の初舞臺。寶曆二年色子から若女方の部に入り、同八年十一月三代を名乘つて江戸中村座に下り、辰之助改名披露引合を四代市川團十郎がなし、「木毎花相生鉢樹」に、鎗踊と猫の所作事を勤む。然るに同九年十一月森田座で、二代菊川嘉代太郎を襲名し、同十一年冬三年振りで歸京、爾來同地の芝居を轉勤してゐたが、明和二年頃から劇壇にその名を絶つに至つた。

【參考】野郎立役舞臺大鏡○京阪歌舞伎年表　秋葉芳美（上方一三・一五）○近松脚本年代考　秋葉芳美（演劇學第一輯）○老の樂抄　市川栢莚（燕石十種第三）○歌舞伎叢書佐々醒雪編○日本演劇史　伊原敏郎　〔秋葉〕

水木辰之助餞振舞　みづきたつのすけたちぶるまひ

脚本　三幕【作者】近松門左衛門【名稱】名女方水木辰之助の江戸下りにつき、その名殘狂言の由をきかす。幷書に、「亭主方、坂田藤十郎やつし事仕候、亭主方、大和屋甚兵衛所作事仕候」と記す。【興行】元祿八年九月（カ）、京都萬太夫座上演。

〔役割〕安達數馬（大和屋甚兵衛）、奧名月（玉川さんや）、大內房之丞（小野川宇源次）、待宵姬（袖崎いろは）、家老大友大膳（荒川十之右衛門）、小姓一角（村上竹之丞）、同左近（早川はつせ）、門番半助（若林四郎右衛門）、てつさん法印（金子吉左衛門）、有馬の藤（水木辰之助）、同おてう（藤井こきん）、和歌浦光右衛門（坂田藤十郎）等。

【諸本】繪入狂言本の傳はる外に、近松門左衛門全集第一卷・近松歌舞伎狂言集上卷に所收。

【題材】古く歌謠等に謳はれた有馬の湯女お藤を中心に、お家騷動を描いた。

【梗概】〔序幕〕（安達家花圃）當主安達數馬は有馬へ湯治の留守を幸に、繼母の隱居常智院は、實の娘待宵が許嫁の和歌浦光右衛門の行方不明に乘じて、家督を繼がさうと謀を構へる。中間友助を使嗾して、有馬の湯女お藤を嫉妬させるに事よせ、御臺名月を放逐しようとしたが皆失敗する。下人にやつして入り込んでゐた光右衛門は、偶々名月に會つて兄妹の名乘りを交した爲め、隱居は下人の妹とあつて逐はうとする。これを救ひに出たのが名月の弟と名乘る房之丞で、隱居の素性も洗はれ、惡人を拂ひ、光右衛門は隱居を刺して立ち退く。〔二幕〕（有馬湯治場）友助は九太夫と名乘り、數馬の留守中、お藤を使つて二百兩を盜み出し、これを訝つたお藤を數馬の命だと言ひ含めて慘殺する。お藤は怨みながら息を引取る。（數馬屋敷）數馬が氣色の惡いため、てつ山法印が祈禱を上げる。數馬が歸つて小姓一角を相手に有馬の噂をしてゐる所にお藤の幽靈が現はれる。一角の眼に見えぬ中、數馬の太刀は宙を行き、ひとりで刃が拔けた。數馬は始めて怪しと認めたが、やがて死靈と共に歌ひつ舞ひつ狂ふ。法印の一心かけた祈禱によつて、死靈は數馬の言葉を信じ、やがて一同を美濃國なる九太夫の屋數に案內する。（九太夫屋數）死靈は、九太夫を木の空に吊し上げて罪を白狀させ、數馬の刃に討たせる。數馬の念佛に死靈は成佛し、一同も本國に引上げる。〔三幕〕（千日寺）お藤の弟は姉の死のため、馬士にまで零落したが、姉の靈を回向せんと千日寺に來る。丁度居合はせた名月・待宵とも會つて喜ぶうち、荷物に隱れた惡家老大膳が飛び出し、馳せ來つた房之丞等のために討たれる。一同は館に引上げ、待宵は光右衛門と一緒になる。

【解說】お藤役の辰之助が、所作事役者である所から、十分踊らす目的であり、名殘を惜しむ意味をきかさうとした爲め、筋としては多少の無理がないでもない。當時の習はしでお家騷動の筋書にしたが、やはり二幕目湯治場の方が遙かに興味があつたと思はれる。役の數も少くて、靜かな中に凄慘な氣に充ち、自然らしさの描寫に成功してゐる。當時の評に怨靈の動作について非難もあつたが、全體として失敗の作とは見えぬ。死靈が怨言を放つ箇所にきかす歌は、最も有名になつて謳はれたらしく、「松の葉」などにも收められてゐる。序幕は簡單な筋でありながら、人數を多く出すために、徒らに複雜な關係を生じたのは惜しい。これ等は、出場役者の都合と見るべきであらうか。和歌浦光右衛門と房之丞とは、儲け役である。近松の作の成功は、多くやつし等の方面にあるが、怨靈事の如き場面にも活路は開いてゐるので、「一心二河白道」（別項）は、この種の第一作であつて、本作もこの系統に屬する。本作の成立については、「江戸芝居年代記」元祿三年の條に記される「有馬の藤三世相」不破伴左衛門島原狐」との交涉が疑問とされてゐる。本作は再演された事はないが、相當の評判をあげ、辰之助の狂ひは異常な當りであつた。

【參考】水木辰之助餞振舞解說　高野辰之（近松歌舞伎狂言集）○近松脚本著作年代考　秋葉芳美（演劇學一ノ二）　〔守隨〕

水木舞扇猫骨　みづきのまひあふぎのねこぼね

草雙紙合卷　前後二編　六册合二册【作者】柳亭種彥【畫工】歌川國貞【名稱】一部の趣向の骨子に猫の所作がある。それを有名な水木辰之助の猫の舞に託して、水木の舞といつたのである。扇の猫骨は勿論舞の緣で名づけた。その猫骨卽ち猫間扇、正しくいへば猫間すかしに就いては、種彥は序文の中で、猫骨本名は猫間すかしであるが、古俳句に猫骨といふ例があるから標題にしたと斷わつてゐる。口繪の人物にそれ等の俳句を配して證とする。たとへば胡蝶・信太小太郎の二人の繪に、「崑山集」の「窮鼠かへりくふは猫間の扇かな　政直　蝶ばたんゐがく猫間の扇かな　信元」を書き添へる類である。【刊行】文政六年、泉市・西村合板【諸本】續帝國文庫所收。【題材】近松の淨瑠璃「下關猫魔達」による。

【梗概】〔前編〕（京都宗林寺門前）女房お花に鼓を打たせて舞々の辻芝居をしてゐる浪人梅永半七が、舊主信太左衛門の總領小太郎に邂逅する。小太郎は室町守護のために上京したのであるが、父の勘氣はよきに計らふからとて半七に歸參を許す。夫婦の喜び、併し衣類大小を質入れしたので、支度に當惑する。百合判官の遺子小夜照姬は、宗林寺參詣に託して密かに小太郎に逢ふ。この二人の結婚はすでに室町殿の許しをも得てゐるに拘はらず、

姫の繼母以葉手に妨げられて果さない。そればかりか、以葉手の弟岩洞鬼東吾は、姉と相談の上、毒茶を以て姫を殺さうと寺內に待ち構へてゐる。お花は一途に夫の支度の費用を調達したさに、鬼東吾持參の茶箱を盜んで來て姫に買つて貰ふ。姫はすぐにお茶を立てさせて飮まうとする時、奴の竪平が毒見をして死ぬ。姫の附添海見田畑之進は早くも鬼東吾の奸策を看破し、鬼東吾が盜賊として牛七夫婦を苛（さいな）むのを、庇うて釋放させる。（宗林寺の奧庭）鬼東吾の家來轉寢具良助は、小太郎が姫と合印にしてゐる印籠を盜んで來る。鬼東吾は又具良助に室町の組子と僞り、忍び逢つてゐる姫と小太郎を搦め取れと命ずる。具良助は大勢を率ゐて二人をとり圍む。牛七は舞々の衣裳をつけ、舞々の仕ぐさで皆々を追ひ拂うて二人を逃がす。〔後編〕（小太郎の京館）小太郎は室町殿より牡丹の花に蝶を追ふ猫を畫けとの御意を承はりながら、自分が子の歲生れ故に、母親の厚意で猫を飼はないことにしてゐるだけに、手本がなくて困つてゐる。かねて小太郎に想ひを焦す腰元の胡蝶が水木辰之助の猫の所作を見たことがあるからとて、それを舞うて見せる。辰之助の所作は夫戀しさの一念からそのまゝ猫の體となつて狂ふあはれさを見せるのであるが、胡蝶はそれにかこつけて己れの思ひをほの見せる。鬼東吾と心を合せて信太家を覘つてゐる小太郎附の姦臣四刺團吾は、小太郎を唆かして胡蝶との仲をとり持つ。而も自分はその機を逸せず、小太郎が室町殿から預つた唐の鏡を盜み出し、忍び込んでゐる具良助に手渡しする。その樣子を胡蝶に見咎められた團吾は、小夜照姫に賴まれてそなたを殺すと僞つて刺す。胡蝶は苦しみ悶えながら死ぬ。（小夜照姫の居間）胡蝶の靈、盲人となり、又美しい女となつて姫をさいなむ。腰元夏野が投げつけた神符の威德で猫の姿を現じて去る。そこへ小太郎の近臣と稱し、合じるしの印籠を持參した者が姫を迎へに來る。いつになく以葉手が勸めて姫を送り出す。姫は病氣だからとて居間からすぐに乘物に乘り移る。（三條河原）僞使者の具良助が姫の乘物に向つて、以葉手と鬼東吾から姫を殺せと命ぜられたと告げる。中から幽靈姿の竪平が現はれる。竪平は夙くに蘇生してゐたが、今は姫の身替りとなつて來たのである。具良助はまことの幽靈と思つて唐の鏡をさしかざす。竪平は具良助を殺してその鏡をとり戾す。そこへ田畑之進と謀り、お花に姫を盜み出させた牛七が來かゝつて、その鏡を請取つて去る。（關の明神の附近）千年飴賣りに身を扮した牛七夫婦が、密かに姫を守護して唐崎の隱家に行く途中、團吾、手の者を率ゐてとり圍む。牛七これを追ひ拂ひ、まづお花を姫に附添へて一足さきに隱家に赴かせる。（唐崎の庵室）小太郎は鏡紛失の罪を得て、叔母清歸尼の庵に隱れて手習師匠をしてゐる。組子に追はれた小夜照姫が逃げて來て鏡を渡す。その時姫はゆくりなくも物妬みを起していひ爭ふはずみに鏡を池の中に落す。俄に遊女出現して姫を虛空に引立てようとする。清歸尼が念珠を繰りかけたので、遊女は胡蝶の靈なる事を告げ、寶の鏡が戾つたので小太郎との婚禮の調ふのが妬しく、姫に悋氣を起させて鏡を取り落させたといふ。折から牛七、四刺團吾を搦め來りて、そなたを殺す時、姫に賴まれたといつたのは此奴の虛言だと言ひきかせる。胡蝶の靈が夏菊の花をふり上げれば團吾の首は飛び、胡蝶の姿は消えて白骨ばかりが殘る。血汐の穢れを厭ふか、池水さつと捲き上がり鏡が浮ぶ。そこへ、夏野・竪平が駈けて來り、鬼東吾の惡事露顯して幕命を奉じた田畑之進に討たれ、以葉手は自害したことを語る。小太郎は本領を安堵し、姫との婚禮も調ひ、忠臣皆それ〴〵加增される。

【構想】本作は前編に於ては、牛七の女房お花が夫のために盜みをしたことが、偶然夫の舊主信太小太郎の戀人を救ふやうになつた不思議、また牛七が舞々の科で舊主たちの難を救ふ面白さが中心になつてゐる。後編に於ては腰元胡蝶の戀ゆゑの猫の所作、又嫉妬ゆゑに一念猫となつて小夜照姫に祟ることが中心になつてゐる。この二つの中心はただ姫と小太郎との婚禮を妨げる御家騷動によつてのみ繫がれてゐる。その關係はさまで緊密でない。殊に作者みづからの興趣は後編の猫の所作と怪事とによつて多く動いてゐるやうである。題名の附け方がすでにその意を暗示する。作者が自序の中で、「此草紙は平安堂が添削せし猫魔達といふ古淨瑠璃によりて作り設けしなれば彼の辰之助がなしたる御所櫻の狂言とは異なり」と斷わるのも、一つにはその所據を明かにすると共に、一つにはその興の動きを語るものである。近松の「猫魔達」は下關の押領使治部大夫義治の遺子小夜照姫の繼母が弟の僧行山と謀つて押領使の一家を奪はうとしたのを、姫の戀人藤波右衞門淺平が姫を助けて、敵方をおし斥けるといふ御家騷動である。種彥は小夜照姫の名はそのまゝに用ひながら、その戀人の名淺平をば毒茶に中つて假死した奴の名に殘して竪平といつてゐる。しかも戀人その人を信太小太郎とかへたのは、近松の作「信田小太郎」の主人公に藉りたのである。尤もそれとこれとの關係は淺い。主人公の名の外には、毒茶の趣向がそれの毒酒の趣向から暗示を得たと思はれるだけである。その毒茶にしても、前後の運びは殆ど「猫魔達」そのまゝである。殊に後編になると、なほその筋を辿るといつてよい。併し種彥は或る一點に於て原作とけぢめをつけようとした。原作が有（も）つ凄慘の趣を優美にかへようとした。その點に於ては相應に成功した。原作では、姫は寅の歲の生れゆゑに、みづから畫いた虎の額を藥師堂に奉納しようとするものの、モデルがなくて困つてゐる。行山の弟子の大貳は、虎は猫のたぐひだからとて猫の所作をして見せる。かねての戀の思ひをほのめかすためである。その大貳は蒸風呂の中で行山のために蒸し殺され、しかもそれが姫のなす業と思ひ誤つて、一念猫と現じて姫に仇をするといふ筋であるが、種彥はその若僧を腰元にかへ、蒸風呂のくだりを省いたのである。殊に原作ではただ暗示にとゞめてゐる水木辰之助の猫の所作を、はじめから表にかざしてかゝるところに、いかにも種彥好みがある。この作の筋に原作と異なるところがあるとすれば、すべてこの中心點から割り出された筆の運びである。また原作は五段の長いものであり、事件も多少複雜であるのを、これは截斷して二三の興深いところのみを選んだ。前編と後編との間に、緊密を缺く結果を得たのは當然である。

【山口】

水汲（みづくみ）　能狂言

【別名】「水汲新發意（みづくみしぼち）」「お茶の水」【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【格式】內神文濟相傳の部（大藏流）。【解說】清水にお茶の水を汲みに住持から命ぜられた新發意は、心安い女を行かせる。女が清水のほとりで小歌を歌ひながら水を汲んでゐると、新發意もやつて來て女に戲れかゝる。其處へ餘り遲いといふので住持が來て、その有樣を見て叱るので、新發意と女とは住持を打ち倒して逃げ入るといふ筋。別本に據れば、住持は登場せず、新發意が女に水を浴せかけられて終ると云ふの

ることを、「燒山越」は忠三といふ正直な男が慾に迷つて悲慘な境涯に陷つた徑路を、「狂詩人」は山北水南といふ狂詩人が、幻想裡に意中の人と逢つたことを描いたのである。【批評】「兜の星影」は、劇的で直ぐ芝居になるやうに書かれてあるが、健筆に任せて書き放したといふところがあつて鍛錬の足らぬのが目につく。が、醜い海女の戀はよく描いてある。短

最も洒落本的色彩の濃厚な作品である。京傳は實在の人物からヒントを得て、三人物を形成したらしい事は、「江戸生艷氣樺燒」の艷次郎の場合と同樣であるが、本書の三人物は、己惚と云ふ一般的の型に粘液質の人間を當てた。艷次郎とは異つて、更に個性的に展開して來た。「江戸生艷氣樺燒」の思想的背景は洒落本「令子洞房（むすこべや）」（別項）であるが、本書の根柢をな

身請までの遊女の樣々の苦勞を、地獄繪にたとへて說法する。

【小池】

水谷不倒（みづたにふたう）　小說家

【本名】弓彥【閱歷】安政五年十一月、名古屋市長者町に生る。東京專門學校文科出身で、本來學者肌の人であるが、早稻田派の人々が坪內逍遙の指導のもとに小說を書くことになつた時、不倒も亦文壇に打つて出る最初の仕事として小說

てゐるだけに　手本がなくて困つてゐる。かねて小太郎に想ひを焦す腰元の胡蝶が水木辰之助の猫の所作を見たことがあるからとて、それを舞うて見せる。辰之助の所作は夫戀しさの一念からそのまゝ猫の體となつて狂ふあはれさを見せるのであるが、胡蝶はそれにかこつけて己れの思ひをほの見せる。鬼東吾と心を合せて信太家を覘つてゐる小太郎附の姦臣四刺團吾は、小太郎を唆かして胡蝶との仲をとり持つ。而も自分はその機を逸せず、小太郎が室町殿から預つた唐の鏡を盜み出し、忍び込んでゐる具良助に手渡しする。その樣子を胡蝶に見咎められた團吾は、小夜照姬に賴まれてそなたを殺すと僞つて刺す。胡蝶は

を姬に附添へて一足さきに隱家に赴かせる。（唐崎の庵室）小太郎は鏡紛失の罪を得て、叔母清歸尼の庵に隱れて手習師匠をしてゐる。組子に追はれた小夜照姬が逃げて來て鏡を渡す。その時姬はゆくりなくも物妬みを起していひ爭ふはずみに鏡を池の中に落す。俄に遊女出現して姬を虛空に引立てようとする。清歸尼が念珠を繰りかけたので、遊女は胡蝶の靈なる事を告げ、寶の鏡が戾つたので小太郎との婚禮の調ふのが妬しく、姬に悋氣を起させて鏡を取り落させたといふ。折から半七、四刺團吾を搦め來りて、そなたを殺す時、姬に賴まれたといつたのは此奴の虛言だと言ひきかせる。胡蝶の靈が夏菊の花をふり上げれ

者が自序の中で、「此草紙は平安堂が添削せし猫魔達といふ古淨瑠璃によりて作り設けしなれば彼の辰之助がなしたる御所櫻の狂言とは異なり」と斷わるのも、一つにはその所據を明かにすると共に、一つにはその興の動きを語るものである。近松の「猫魔達」は下關の押領使治部大夫義治の遺子小夜照姬の繼母が弟の僧行山と謀つて押領使の一家を奪はうとしたのを、姬の戀人藤波右衞門淺平が姬を助けて、敵方をおし斥けるといふ御家騷動である。種彥は小夜照姬の名はそのまゝに用ひながら、その戀人の名淺平をば毒茶に中つて假死した奴の名に殘して堅平といつてゐる。しかも戀人その人を信太小太郎とかへたのは、近松の

ではただ暗示にとゞめてゐる水木辰之助の猫の所作を、はじめから表にかざしてかゝるところに、いかにも種彥好みがある。この作の筋に原作と異なるところがあるとすれば、すべてこの中心點から割り出された筆の運びである。また原作は五段の長いものであり、事件も多少複雜であるのを、これは截斷して二三の興深いところのみを選んだ。前編と後編との間に、緊密を缺く結果を得たのは當然である。　〔山口〕

水汲（みづくみ）　能狂言　【別名】「水汲新發意（みづくみしぼち）」「お茶の水」【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【格式】內神濟相傳の部（大藏流）。【解說】清水にお茶の水を汲みに住持から命ぜられた新發意は、心安い女を行かせる。女が清水のほとりで小歌を歌ひながら水を汲んでゐると、新發意もやつて來て女に戲れかゝる。其處へ餘り遲いといふので住持が來て、その有樣を見て叱るので、新發意と女とは住持を打ち倒して逃げ入るといふ筋。別本に據れば、住持は登場せず、新發意が女に水を浴せかけられて終ると云ふのもある。出家物の中古の曲の一つで、能樂「地主」の姉妹篇と見るべきものである。曲中の小歌に「閑吟集」所載のものと一致するものがあつて、歌謠硏究の上からも逸することの出來ない狂言である。　〔瀧田〕

水車（みづぐるま）　小說集　【作者】江見水蔭【刊行】明治二十八年八月【內容】長篇「兜の星影」の外に、短篇「夏の館」「雪折竹」「燒山越」「斷橋」「溫泉」「狂詩人」等を收めてゐる。「兜の星影」の荒筋は、難波田太郎といふ智勇備はつた若武者が、北條方の動靜を探るため敵地に入り込んだが、病に冐され難澁する。ふと醜い海女千鶴に助けられ、義理にからまれて夫婦の契りをした。その後、太郎が本國へ歸ると、松ケ枝といふ美女から烈しく戀されて煩悶したが、彼は義理を重んじて醜い海女千鶴を正妻に迎へた。が、松ケ枝はその後、手を引かうとせぬので、二人の女の間に葛藤を生じ、千鶴は淺い考へから夫を欺いた罪を悔いて自殺し、松ケ枝は戀の病が重つて世を去り、太郎は佛門に入つた。「夏の館」は或る硬骨の盲人が、貧のため、娘の愛のために膝を屈したが、惡漢のために娘を奪ひ取られるといふ哀話。「雪折竹」は或る詩人が詩想が涸れたのか、他に思ふ所あつたのか、裏長屋に住み、砲兵工廠の職工となり、新妻と睦じくすることを、「燒山越」は忠三といふ正直な男が慾に迷つて悲慘な境涯に陷つた徑路を、「狂詩人」は山北水南といふ狂詩人が、幻想裡に意中の人と逢つたことを描いたのである。【批評】「兜の星影」は、劇的で直ぐ芝居になるやうに書かれてあるが、健筆に任せて書き放したといふところがあつて鍛鍊の足らぬのが目につく。が、醜い海女の戀はよく描いてある。短篇の中では「燒山越」「狂詩人」の二篇がすぐれてゐる。

【附記】「兜の星影」は、市川左團次が莚升時代に明治座で上演するに當り、明治三十八年四月、別に刊行した。「水車」刊行後、同じく短篇を集めた「水の聲」が明治二十八年十一月に出たことがある。　〔高須〕

三筋緯客氣植田（みすぢだちきやくのきうゑだ）　黃表紙　三册　十五丁十七圖【作者】山東京傳【畫工】北尾政演（京傳）【名義】當時流行の上田紬の三筋立を三人の嫖客に通はせる洒落。【刊行】天明七年蔦重板【題材】自作の「遊人三幅對」（政演畫、安永九年刊）の三人物を「通和者交」（後出）などを參考として遊里に活躍させ、實在の人物やその方面では相當に知れ渡つてゐる事件によつて裏附けてゐるらしい。【梗概】梅枝・八重次郎・松太郎の三人が、各自に遊女買の趣向を立てた。梅枝は子供のやうに遊興すれば遊女が靡くと考へ、六歲の我が子の取卷となつて遊んで勘當され、八重次郎は短命の遊女に馴染み、短くして美しい戀を求めて遂に坊主となり、松太郎は氣の合つた遊女と長く馴染み、遂にめでたく結婚する。【解說】京傳作の「江戶生艷氣樺燒」（別項）、「會通己惚照子」（後出）、「碑文谷利生四竹節」（寬政元年版）、「九替十年色地獄」（後出）等と同樣に、最も洒落本的色彩の濃厚な作品である。京傳は實在の人物からヒントを得て、三人物を形成したらしい事は、「江戶生艷氣樺燒」の艷次郎の場合と同樣であるが、本書の三人物は、己惚と云ふ一般的の型に粘液質の人間を當てた艷次郎とは異つて、更に個性的に展開して來た。「江戶生艷氣樺燒」の思想的背景は洒落本「令子洞房（むすこべや）」（別項）であるが、本書の根柢をなす遊興論は、洒落本「吉原楊枝」（別項）である。「吉原楊枝」は天明八年の出版であるから、その前年出版の本書は思想的に先驅をなしてゐる。「吉原楊枝」の分類に從へば、梅枝は惚れられに行く客、八重次郎は名聞を求めて遊女を買ふ客、松太郎は眞實の戀愛を求めんとする客である。【價値】性格描寫の片鱗を黃表紙中より發見せんとするならば、本書の如きはそれであらう。艷次郎に比較すると性格的觀照が深まつたと共に、己惚の甘さから通の澁味に入つてゐる。諷刺の辛辣さは遊里生活を題材とする黃表紙中稀に見る所である。繪は文と相俟つて個性的色彩を表現せんとしてゐる。梅枝は團十郞、その子梅三郎はゑび藏の似顏らしい。幇間の我物・五丁をはじめ、似顏らしく思はれる人物が多い。京傳の作品中の傑作で、同時に黃表紙中の傑作である。【備考】「通和者交」（市場通笑作、天明五年刊）武部源藏に新吉・次郎八・武介の三人の寺子があり、新吉は遊里へ行つても正直過ぎ、次郎八は孝行過ぎ、武介は如才なく、遊びに行つても持てるが世をはかなむ。「會通己惚照子」（山東京傳作、天明八年刊）京屋傳二郎は、客人大明神から授かつた己惚鏡で人情に通ずる。「九替十年色地獄」（山東京傳作、寬政三年刊）狂傳和尙は鼻の下建立のため、女衒の手に渡るから身請までの遊女の樣々の苦勞を、地獄繪にたとへて說法する。　〔小池〕

水谷不倒（みづたにふたう）　小說家【本名】弓彥【閱歷】安政五年十一月、名古屋市長者町に生る。東京專門學校文科出身で、本來學者肌の人であるが、早稻田派の人々が坪內逍遙の指導のもとに小說を書くことになつた時、不倒も亦文壇に打つて出る最初の仕事として小說「鑄刀」「薄唇」の二篇を「新小說」に公にした。それから明治三十年四月創刊の「新著月刊」に「めなしちご」を發表し、次いで下阪して大阪每日新聞社會部に入つた。後退社して書肆を經營したこともある。本來の特色は江戶文學研究にあつて、古淨瑠璃について知るところが相當に深い。が、小說家としても、近松式構圖を以て、相應興味ある作を出した。【著書】小說十七八篇の外、「列傳體小說史」（別項）「繪入淨瑠璃史」等がある。　〔高須〕

水手（みづて）　「葦手（あしで）」を見よ。

水猿曲（みづのゑんきよく）　「宴曲」を見よ。

水濃行方（みづのゆくへ）　讀本　五册【著作】平秩東作【別名】近代隱逸傳【成立・刊行】明和元年秋八月作、同二年春刊。【解說】この書は市中に放浪するすね者を隱君子と見立てたもので、柔和里先生（一卷）・取替兵衞・馬糞先生（二卷）・塵世遁法師・大森の翁（三卷）・華表嶺勘輔（四卷）・龜山丈人（五卷）、すべて七人の隱者の生活を寫したものである。即ち「柔和里先生」といふは、江戶の或る町に五六十軒の長屋があり、其處の親分十兵衞は、正直を旨として稼業を勵み、法を守り、勤儉を尊び、慈悲善根を基として常に敎訓を與へ、その德化が長屋中に及んで、一人の曲つた者もなく、廉恥を重んじ、喧嘩口論などなく、頗る柔和な模範長屋

であるから、この一部落を柔和里と稱し、親分十兵衞を柔和里先生と尊敬した。「取替兵衞」はその頃市中を取替べえと呼んで、錠前、煙管の雁首、椀笄の古手、何でも不用なものを物々交換する飴屋があつた。或る時この飴賣が、醉に乘じ、辯に任せて物々交換を修身齊家治國平天下の理義に附會して滔々論ずるといふ話。又「大森の翁」といふは、石尊參りの若者共が、歸途大森を通りかゝり、麥わら細工を土産に買はうとしたが、江戸ッ兒の常として駄洒落や惡態を吐きつつ素見して行くうちに、或る家で老翁が聞き咎め、朱鞘の脇差をひねくりながら睨み附けたので、青くなつて引返し、附近の茶屋で、彼の老人は何者かと聞くと、彼は曾て一人の强盜が矢尻を切つて家に押入らうとした時、槍を突出して强盜を驚かした有名な老翁だといふ話。「龜山丈人」の篇は、勢州龜山產れの長吉といふ少年が、志を立てて江戸に下り、稼ぎ出すまでの筋は、東作の自傳の如くであるが、この青年が幸運に惠まれ、トン〳〵拍子に出世して百萬長者になるのは、彼の實際とは反對で、その空想を畫いたものとも取れる。後にこの長者が家を子に讓り、自分は龜山に退隱して龜山丈人と稱し、大福帳說を著はし、世人に世渡りの道を授ける話は、西鶴の「日本永代藏」（別項）あたりを狙つたものである。「莘野茗談」にも、「水濃行方」の五卷目は、西鶴を摸したものといつてゐる。併し作意をいへるか語法をいへるか、詳かでない。作意から云ふと、寧ろ「近代艷隱者」（別項）に似た所がある。何れにしてもこの作は、西鶴の町人ものに負ふ所が少くない。それだけ寶曆・明和の開放時代には後れた作である。殊に儒教主義が濃厚であるから、甚だくつろぎがない。併しただこの一篇を以て、東作はその文才を示し、優に作者の列に入つたのである。【影響】浮世草子に於ける町人ものの脈は、寛延・寶曆に至るも盡きず、談義ものと形を變へて、一榮え榮えたが、「水濃行方」を最後としてその脈はこゝに絕えた。で、この作の影響と見るべきものは殆どない。〔水谷〕

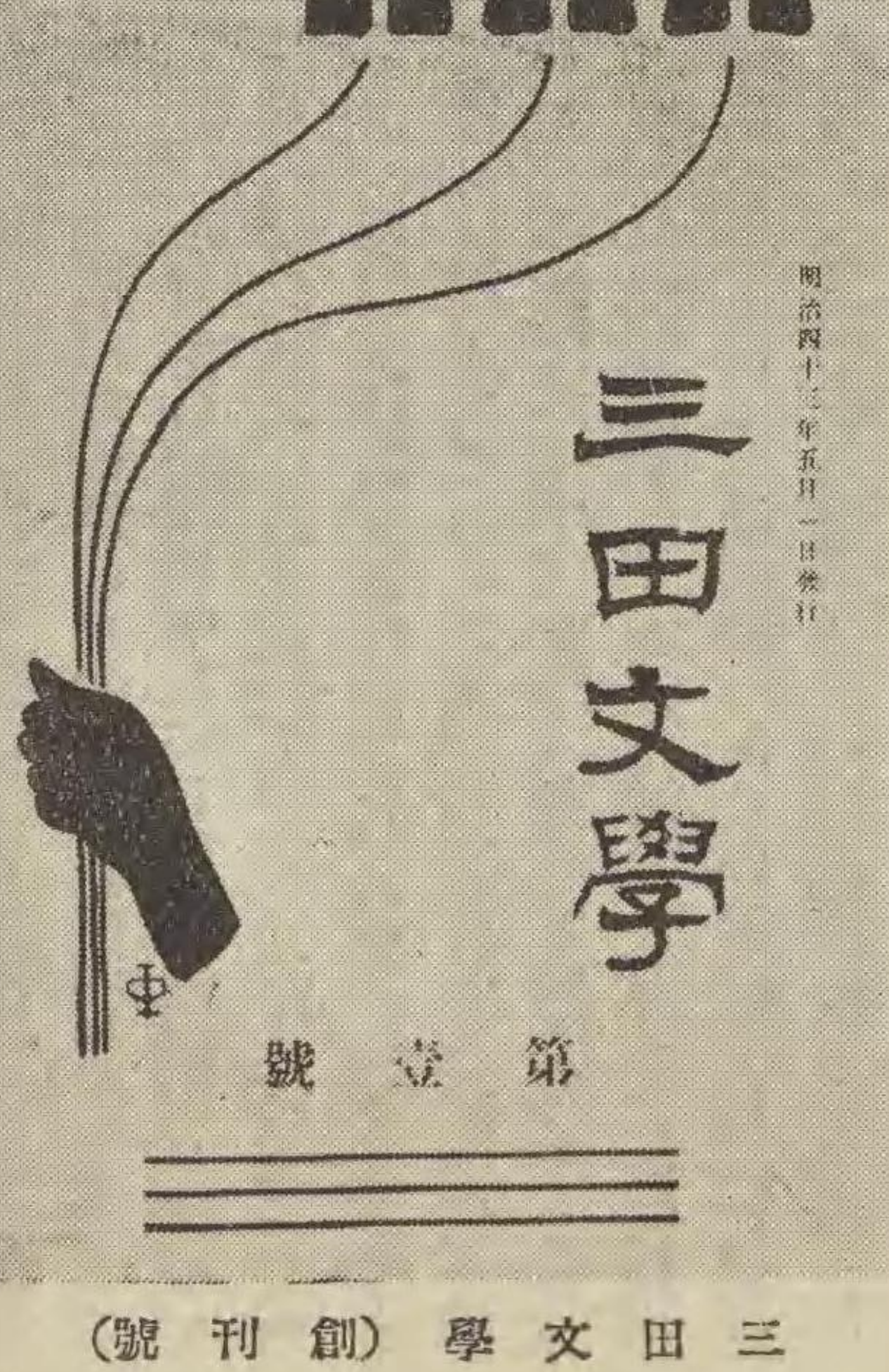
水野葉舟（みづのえふしう）　小說家【本名】盈太郎【閱歷】明治十六年四月、東京下谷に生る。三十八年早稻田大學政治科を卒業。その前後より小說・詩・短歌等を作り、「文庫」「新聲」等に投書した。與謝野寛が新詩社（別項）を起した頃、これに加はり、短歌・長詩にその才能を示した。後、自然派の機運大に動きだした頃、小說に轉じて感覺描寫の精妙を以て稱された新進作家中、最も有望な者の一人とされた。それ等の作品は「微溫」「壁畫」等に收められてゐる。又一時盛んに小品文を書いた。それは閃めく感情を詩の如き高い調子で精練せる文章に現はすといふのであつて、その集に「響」「森」（明治四十一年出版）などがあり、これ亦當時文壇の注目を惹いたものであつた。彼は結局伸びるべくして伸びず、家庭文學の開拓などに手を着けたが、これ又、左程著しい特色を示さないで終り、今は全く筆を捨て、千葉縣下に歸農してゐる。なほ以上の外、詩集「凝視」がある。〔高須〕

禊敎（みそぎけう）　「神道各派」を見よ。

三十輻（みそのや）　叢書　四冊【編者】大田蜀山人【刊行】大正六年、國書刊行會。【解說】序に、「武藏野の草の始めて開けそめしより、家々の文々ここの卷三十部をもて一集とし、眞名に書けるを群書一轂といひ、假名に寫せるを三十輻と名づく、これなん李の下の翁が、みそのやはひとつのこしきをともにす云々」とある。輯まるに從つて纏めたもので、「三十輻」三十一部（第一卷）、「續三十輻」二十九部、「廣三十輻」十八部（第二卷）、「新三十輻」三十一部（第三卷）、「補三十輻」九部、「百和香」三十六部（第四卷）を收め、頭書の叢書名を以て刊行した。隨筆あり、考證あり、國語あり、俳諧あり、史傳ありといふ風に多方面に材料を求めて、或るものは資料として貴重なものを遺してゐる。〔土井〕

御嶽敎（みたけけう）　「神道各派」を見よ。

三田派（みたは）　文學團體【名義】雜誌「三田文學」に據れる人々を總稱する名目である。【沿革】慶應義塾大學では、文科の興隆を策して明治四十三年度から學制に大刷新を施し、新進有爲の士の多くを教授として招聘すると共に、機關雜誌として創作中心の「三田文學」（明治四十三年五月創刊）を出した。推されて新に教授の要職に就いた永井荷風（別項）は、又この雜誌の主幹をも兼ねて一切を主宰することになり、森鷗外・上田敏を顧問としたので、當時「早稻田文學」（別項）を本據に一世を風靡してゐた文學運動と對立して、反自然主義の旗幟の下では、同志たるべき人々が集つたのである。內部の荷風・鷗外・敏・小山內薰・馬場孤蝶・戶川秋骨等を別にすれば、主として寄稿した者は與謝野夫妻・木下杢太郎・長田秀雄・吉井勇等の「スバル」（別項）に屬する人々であり、更に後藤末雄・谷崎潤一郎等の新思潮派（別項）と、それに泉鏡花・薄田泣菫・黑田湖山等で、文壇の一角に有力な作家群を形成した。しかし眞に三田派と名づくべきものは、荷風の推奬を俟つて輩出した塾出身の文學者である。久保田万太郎・小澤愛圀・澤木梢・松本泰・水上瀧太郎・佐藤春夫・小林乳木・增田廉吉・山崎俊夫・久米秀治等が續々執筆するに及んで、「三田文學」は始めて機關雜誌の實を擧げ、又三田派なる一團がはつきり存在することになつた。大正五年に荷風が塾を去り、同時に「三田文學」主幹を辭して後も南部修太郎・井汲清治・宇野四郎・小島政二郎・三宅周太郎・水木京太・勝本淸一郎・加宮貴一等、三田出身者がこれに加はつたが、雜誌は中心を失つた形で漸次振はず、大正十四年に至つて一時休刊したが、翌年水上瀧太郎を主盟にして再刊し、主として三田出の作家の作品發表の任に當つて來たので、謂ゆる三田派の人々は益々その數を加へてゐる。【批評】「三田文學」は、學校の機關雜誌として生れたものではあるが、折柄目覺しき創作的活動をなし、且つその特色の著しい荷風を主幹としただけに、最初は彼を中心に趣味傾向の相似た人々のみが據つて溪


三田文學
第壹號
明治四十三年五月一日發行

三田文學（創刊號）

然と三田派を形造つてゐた。當時の粗野の難を免れぬ自然主義文學に對峙して、この一群は技巧に富む多彩的な都會文學を樹立して、荒野に華々しい花園を培つたのである。荷風の好尚作風は、彼去つて後も前期三田派には傳統の如く殘つたが、改めて再刊して以後の新進三田派は單に同窓者の友愛關係から手を携へてゐるので、思想傾向を異にする者が集

戀愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり」とあり、戀愛詩集であると斷つてゐるのである。すべて短歌四百首を收めてゐる。

【批評】奔放なる熱情と、革新的奔放性に於ては、一の時代を作つたものと言へるが、その作には未完成な粗笨なものが多い。寛の詩歌集「紫」に於て、新詩社派の短歌といふもの

掛ける一人である。お房の名で相談があると小池を呼び寄せ、酒を出して小池を挑む。小池が怒つて歸つた後へ、酒田が偶然に來合せ、お桂の不貞を怒つて手切れをする。お桂はお房の戀愛の純情に搏たれ、手切金をお房に與へて大阪に去つた小池の跡を追はせ、自分は一切を諦めて姿をかくした。

【批評】筋もよく通り、まとまつた好短篇であ

衞門歸國後、しゆんが伊勢參宮をしたのを機會とし、途中に奪ひ取りて誘拐し、船で大阪に行つた。國許ではこれを知つて重左衞門は弟重介と共に搜索に出で、乘合船の船頭に依つて兩人の所在を知り、義理のために娘の搜索に出た助右衞門と共に、藤九郎を田邊屋橋の邊りで討つた。しゆんは未だ身を汚すに至らなかつた事を明かにして自殺した。〔卷五・

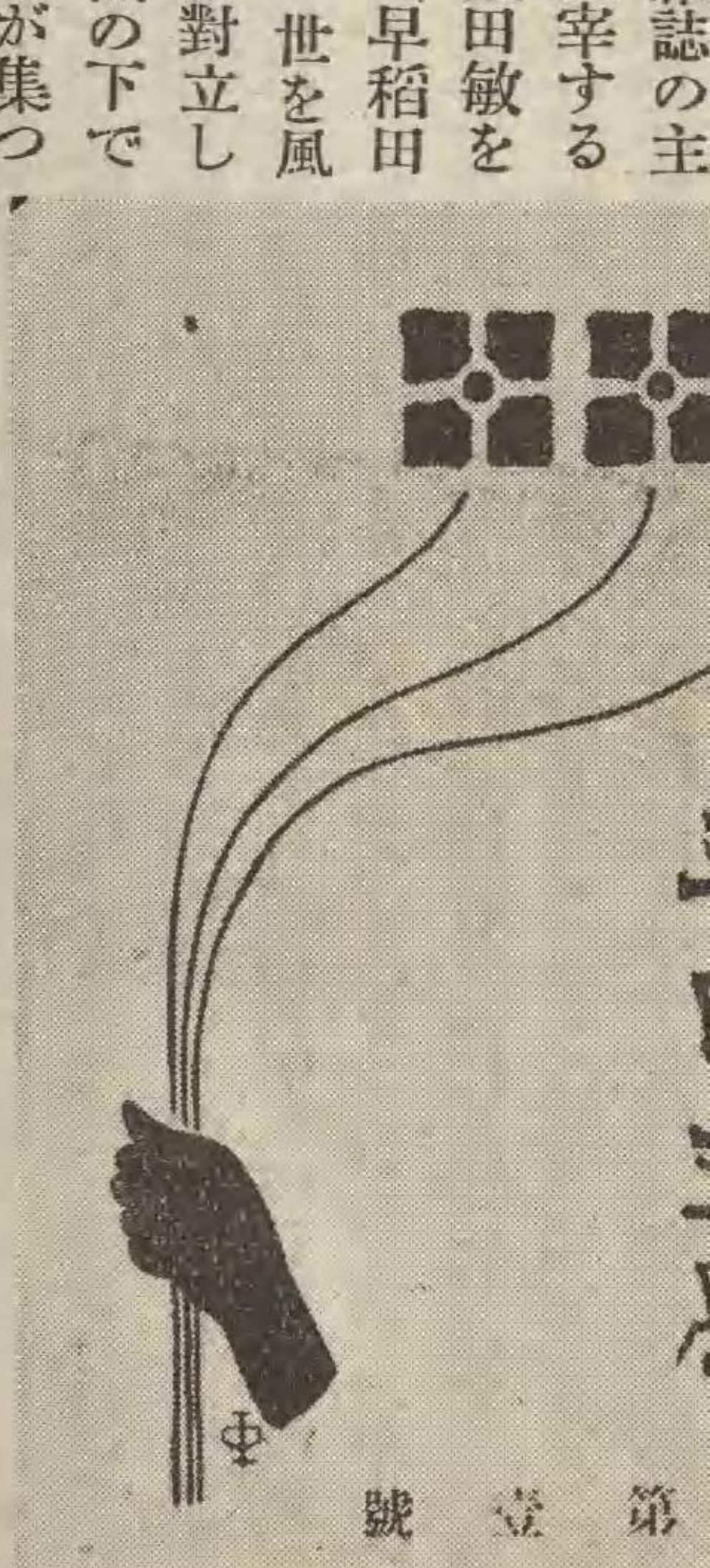
れ、トン〳〵拍子に出世して百萬長者になるのは、彼の實際とは反對で、その空想を畫いたものとも取れる。後にこの長者が家を子に讓り、自分は龜山に退隱して龜山丈人と稱し、大福帳說を著はし、世人に世渡りの道を授ける話は、西鶴の「日本永代藏」（別項）あたりを狙つたものである。「莘野茗談」にも、「水濃行方」の五卷目は、西鶴を摸したものといつてゐる。併し作意をいへるか語法をいへるか、詳かでない。作意から云ふと、寧ろ「近代艶隱者」（別項）に似た所がある。何れにしてもこの作は、西鶴の町人ものに負ふ所が少くない。それだけ寶曆・明和の開放時代には後れた作である。殊に儒教主義が濃厚であるから、甚だくつろ

「森」（明治四十一年出版）などがあり、これ亦當時文壇の注目を惹いたものであつた。彼は結局伸びるべくして伸びず、家庭文學の開拓などに手を着けたが、これ又、左程著しい特色を示さないで終り、今は全く筆を捨て、千葉縣下に歸農してゐる。なほ以上の外、詩集「凝視」がある。〔高須〕

禊教（みそぎけう）「神道各派」を見よ。

三十輻（みそのや）叢書　四冊【編者】大田蜀山人【刊行】大正六年、國書刊行會。【解說】序に、「武藏野の草の始めて開けそめしより、家々の文々ここの卷三十部をもて一集とし、眞名に書けるを群書一轂といひ、假名に寫せるを三十輻と名づく、これなん李の下の翁が、

荷風（別項）は、又この雜誌の主幹をも兼ねて一切を主宰することになり、森鷗外・上田敏を顧問としたので、當時「早稻田文學」（別項）を本據に一世を風靡してゐた文學運動と對立して、反自然主義の旗幟の下では、同志たるべき人々が集つたのである。內部の荷風・鷗外・敏・小山內薰・馬場孤蝶・戶川秋骨等を別にすれば、主として寄稿した者は與謝野夫妻・木下杢太郎・長田秀雄・吉井勇等の「スバル」（別項）に屬する人々であり、更に後藤末雄・谷崎潤一郎等の新思潮派（別項）と、それに泉鏡花・薄田泣菫・黑田湖山等



文學（創刊號）

來たので、謂ゆる三田派の人々は益々その數を加へてゐる。【批評】「三田文學」は、學校の機關雜誌として生れたものではあるが、折柄目覺しき創作的活動をなし、且つその特色の著しい荷風を主幹としただけに、最初は彼を中心に趣味傾向の相似た人々のみが據つて渾然と三田派を形造つてゐた。當時の粗野の難を免れぬ自然主義文學に對峙して、この一群は技巧に富む多彩的な都會文學を樹立して、荒野に華々しい花園を培つたのである。荷風の好尙作風は、彼去つて後も前期三田派には傳統の如く殘つたが、改めて再刊して以後の新進三田派は單に同窓者の友愛關係から手を携へてゐるので、思想傾向を異にする者が集つて「三田文學」に據つてゐるに過ぎない。多かれ少かれ荷風の影響の下に立つてゐた前期の人々と違つて、これは各人各說的態度で潑剌たる氣息を感ぜしめる。即ち中心作家を師父として仰ぐ關係から、學校中に結ばれた關係に移つたことに同じ名の「三田文學」に據るとはいへ、前期後期の三田派のはつきりした推移が認められる。かゝる結合が文學的にどれ程の意義あるかは暫く措き、現在學校の機關たる文學雜誌として立つものは「三田文學」が唯一のものであり、而もこれに據る謂ゆる三田派から異色ある新進作家が續々生れつつあるのは事實である。なほ前期三田派の作品を集めたものに「三田文選」（玄文社）「三田文學選」（高陽社）がある。〔水木〕

三田文學（みたぶんがく）「三田派」を見よ。

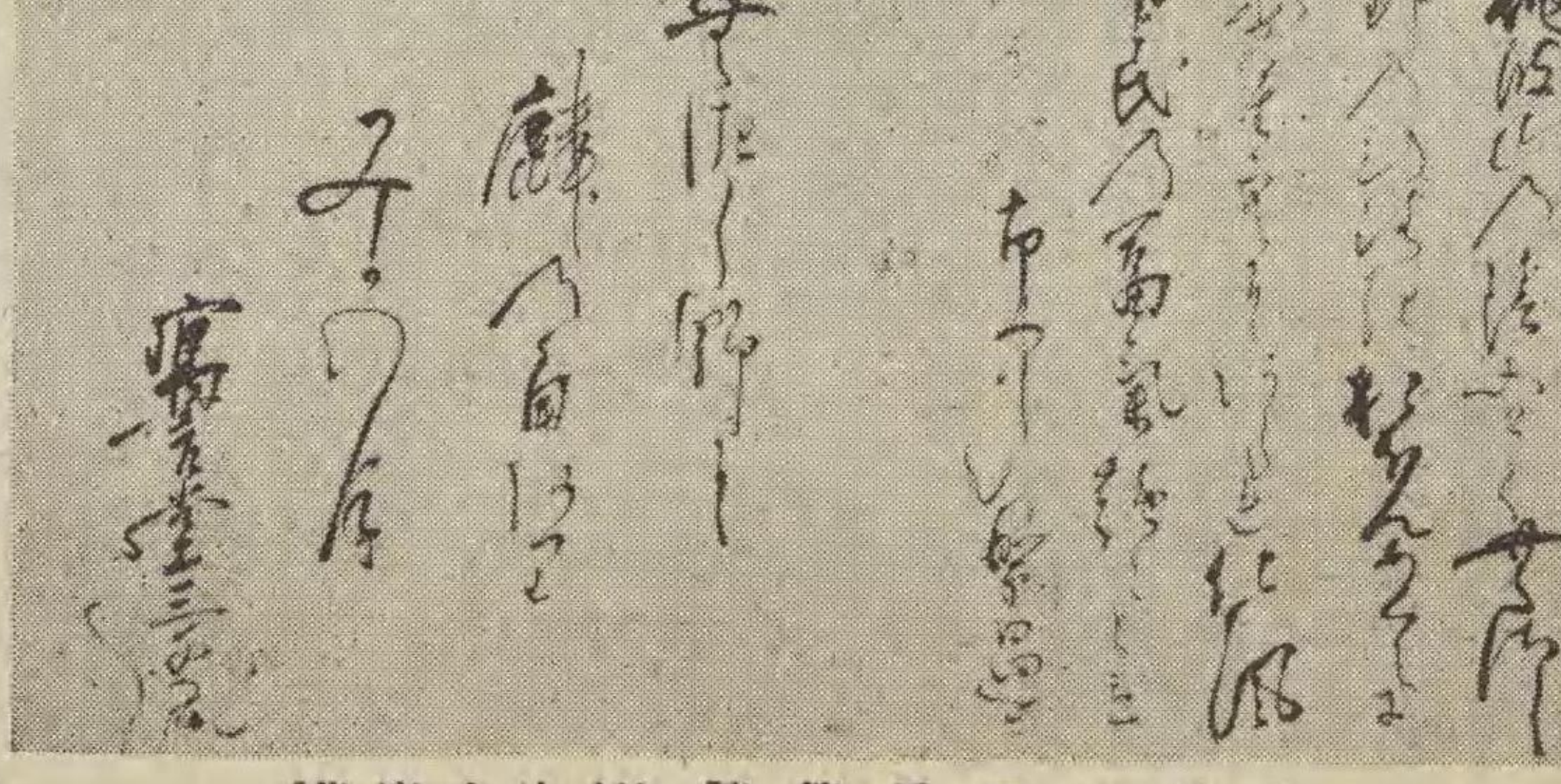
みだれ髪（みだれがみ）歌集【作者】鳳晶子（後の與謝野晶子）【刊行】明治三十四年八月十五日、東京新詩社、伊藤文友堂。【內容】東京新詩社は、後の新詩社（別項）であり、與謝野寛の主宰するところである。歌集でこの三六判型は最初のものであり、恐らく最初の三六判型であつたのであらう。一頁三首組、表紙・扉の外、七枚の挿畫がある。卷首の一頁に小書して、「この書の體裁は悉く藤島武二先生の意匠に成れり、表紙畫みだれ髪の輪廓は、戀愛の矢のハートを射たるにて矢の根より吹き出でたる花は詩を意味せるなり」とあり、戀愛詩集であると斷つてゐるのである。すべて短歌四百首を收めてゐる。【批評】奔放なる熱情と、革新的奔放性に於ては、一の時代を作つたものと言へるが、その作には未完成な粗笨なものが多い。寛の詩歌集「紫」に於て、新詩社派の短歌といふものが、一つの完成を見た以上、こゝから拔け出すのには、進んでこの轉化を求めなければならなかつたのである。それを早くも自ら認めて、この時代容易ではなかつた一冊の集として、こゝに紹介した寛の見解に誤りはなかつた。新派和歌集としては、寛の「東西南北」（別項）につぐ問題の集であり、爾後三十年、未だに多くの問題を殘してゐるものである。が、普通には、未完成の作が多い點と、その問題に重きをおいて少數の完成されたものを見逃してゐる憾みがある。世に持て囃されたところの「やは肌のあつき血潮に」その他の作は、今日に於ては、寧ろその時代の浪漫的情熱の所產として見ても、その作の價値は疑はれてゐる。〔北原〕

みだれ髪（みだれがみ）小說【作者】小杉天外【發表】明治三十二年三月、「文藝倶樂部」所載。明治四十二年十一月、章光閣出版。天外小說集「草笛」中に收む。【梗概】某銀行會社の重役三上博友が、亡官吏の遺子お房の美貌を見染めて妾にしようとする。針仕事で母子二人の不自由な暮しをしてゐるお房の母も同意する。お房は、下宿人の學生小池に戀愛を感じて居り、また妾商賣を好まない。お房は酒田某の妾をしてゐる姉とも思ふお桂に相談する。お桂も小池に思ひを掛ける一人である。お房の名で相談があると小池を呼び寄せ、酒を出して小池を挑む。小池が怒つて歸つた後へ、酒田が偶然に來合せ、お桂の不貞を怒つて手切れをする。お桂はお房の戀愛の純情に撲たれ、手切金をお房に與へて大阪に去つた小池の跡を追はせ、自分は一切を諦めて姿をかくした。【批評】筋もよく通り、まとまつた好短篇である。中心人物はお桂であり、妾らしい心理や生活が無理がなく開展され、當時の作品としては全體に會話の自由さも目に付く。〔千葉〕

亂脛三本鑓（みだれはぎさんぼんやり）浮世草子　六冊【作者】西澤一風【名稱】亂脛に姦通を表はし、三本鑓に武士の妻敵討に關する三話を集めたことを表はしてゐる。【諸本】近世文藝叢書第四所收。【刊行】享保三年【梗概】〔卷一・二〕（國は色より出る雲）雲州松江の大守歸國の祝に、池田軍次郎（廿五）能のシテを勤め、小森幸右衞門の娘かんに見染められ、後密かに契る。然るにかんは茶道玉井宗義の妻となり、三人の子を產む。偶々宗義江戶詰となり、長男の武藝を軍次郎に託した。かくて宗義の不在中、軍次郎屢々玉井家に出入し、遂にかんと不義の關係を結んで懷姙させた。そのうち夫は歸國する事となり、且つかんは家來武介に切諫されたので二人は駈落し、武介は責を負うて自殺した。宗義歸國してこれを知り、暇を請うて妻敵討に出で、遂に兩人を大阪高麗橋の上で討つた。〔卷三・四〕（國は作州津山、所は大阪田邊屋橋）作州津山の家中に小出重左衞門といふ武士がある。同家中富永助右衞門娘しゅんを娶つた。婚後間もなく主命を受けて江戶詰となつた。同家中倉橋藤九郎は豫てしゅんに思ひを寄せ、重左衞門歸國後、しゅんが伊勢參宮をしたのを機會とし、途中に奪ひ取りて誘拐し、船で大阪に行つた。國許ではこれを知つて重左衞門は弟重介と共に搜索に出で、乘合船の船頭に依つて兩人の所在を知り、義理のために娘の搜索に出た助右衞門と共に、藤九郎を田邊屋橋の邊りで討つた。しゅんは未だ身を汚すに至らなかつた事を明かにして自殺した。〔卷五・六〕（國は丹州笹山）丹波笹山の家中に、出石勘右衞門といふものがあつた。浪人となつて京に出で、妻かね、下女・下人と共に暮してゐた。槍術の門弟に水島小八郎といふものがあつて寄食してゐた。偶々勘右衞門は江戶に奉公の口が出來たので、下人を伴ひ、留守を妻かねと小八郎に託して行つた。然るに小八郎は屢々かねに情を通ずることを迫つた。下女はこれに就いてかねを切諫した。所へ鄕里から、かねの兄彌內夫婦が勘右衞門の不在中、かねを引取りに出て來た。かねの不在中、小八郎はその家財を賣拂つて丹波猪野目村に逃げた。勘右衞門主從は江戶から歸つて小八郎の不都合を知つた。偶々彌內の家來が猪野目村に小八郎のゐることを知らせたので、勘右衞門主從は早速行つて小八郎を討つた。かねには方便のために誓紙を小八郎に送つたことはあるが、不義の事實はないことが明かになつたので、これを尼にした。【解說】第一話の元の事件は、「月堂見聞集」享保二年の條に記されてある。享保二年七月十七日の事で、早くも同年同月二十一日附の序のある「女敵高麗茶碗」といふ浮世草子に綴られてゐるが、この序に依ると、この前に近松門左衞門に同事件を材として「好色橋辨慶」といふ作があり、狂言作者に同じ材で「浮世は夢の

浮橋」といふ作があつたと知られるが、いづれも狂言で事件直後に看板を擧げたものであらう。それから同年八月二十二日を初日に竹本座に興行した近松作の「槍權三重帷子」（別項）も本事件を材にして、槍權三に附會したものである。「雲州松江の鱸」と題する浮世草子も同材であるが、この書も本文中に「ことし享保二年」とあるから、同年の作であらう。かく同年中に多くの作の材となつたのは、事件が當時の耳目を聳動したのに基づくのであらう。本書はこれ等に比べると、最も後れて出來たものである。第三話は、「是より（享保二年）廿六年後歌舞伎狂言に丹州笹山妻敵討といふ外題角の芝居に出でたり」と「傳奇作書」（追加）に見えてゐるのが、これと同材かも知れない。本書は三つの妻敵討を集めたものといふ點と「槍權三重帷子」と同材の說話を含むといふ點で、世に多く知られてゐるが、作としては傑れてゐない。〔藤村〕

三千風（みちかぜ）　俳人【姓名】三井友翰。自ら大淀氏とも稱した。字は部焉。【別號】湖山飛散人（行脚の旨を示す）・景狂人（探勝の志をいふ）・頂雲軒（高山に登る時）・尺鷃堂（一室に籠る時）・紫冥軒（神道を說く時）・一念堂（佛敎を論ずる時）・浮謠軒（謠曲を謠ふ時）・寓言堂（戲言を草する時）・呑空法師・呑空居士・呑空齋（抱貧の大なる事をいふ）・無不非軒（何にまれ有らざること無しの義）・無極軒（天地間の事極りなしの義）・東往居士（東の方松島に往った義か）。この外、なほ折に觸れ所に隨ふ大箭數・無玉庵・無月庵・椿木庵・行脚山人・無刀軒等の號があつた。【生歿】寛永十六年生れ、寶永四年（二三六九）一月八日歿す（從來種々に誤り傳へられてゐたが、近來射和村共同墓地に於ける三井家墓域の三千風の墓碑、同地妙通寺にある墓碣、菩提寺不宗寺の過去帳、その他葬儀帳等の發見によって明かとなつた）。【辭世】名聞ののりも繼ぎ目も破れ紙子音も嵐の庭の塵塚　【法名】花月院不生居士【墓碑】三井家墓域の墓碑には、（正面）友翰法師、（右側）寶永四丁亥正月八日、（左側）三井氏とあり、妙通寺の墓碣には、（正面）不生居士三千風之墓、（右側）には辭世の歌（左側）があつて寶永四丁亥天正月八日（享年六十九卒　射和連中）とある。萬水堂朱角が享保七年十月九日に建てた追善碑が仙臺にあつて（今仙臺市小田原高松通佐澤氏邸内にある）、これには寶永五年芳春初九日に歿すとあつて、有力視されてゐたが、これも誤りである事が明かになつた譯である。【俳系】「日本行脚文集」（別項）によると、鄕里での師に基親といふ人があり、又同地蓮生寺の祐順法印を机師と云つてゐるが、共に如何なる人であつたか知られない。俳諧に關しては、同文集の序に「色弗空鐘（やつがれこま）まはせし昔より虛道の俳諧を逸（すけ）り。（中略）さりとて師園にしも入らず學山にも登らず、且暮自眀の反古塚を枕とせしのみ」と云つてゐるから、俳諧は無師獨學のものであつたと見える。【閱歷】伊勢國飯南郡射和（いざわ）村の人で、三井家は家業は何であつたかは詳かでないが、兎に角相當富裕な商家であつたらしく、また京阪に出店があつたやうで、三千風も家に在つた頃は、この出店へ毎年往來した。兄に宗貞といふのがあり、三千風は二男か三男かであつたらしい。然るに彼は十五歳の春から俳諧に心を傾け、思ひを行脚に馳せてゐたが、父母眷族がこれを許さなかつた。寛文九年三十一歲の秋、どうした關係でか希望が叶ひ、自ら薙髮して「柳髮も世を秋風の手剃かな」と吟じ、呑空法師と號して、仙臺に緣を求めて松島に赴き、瑞巖寺に身を寄せた。松島の雄島の庵室に留まること十五年、その間俳諧に精進し、延寶七年三月には、二千八百句獨吟の「仙臺大矢數」を公けにし、西鶴の讃辭を得たのであるが、その巻頭吟が「空花を射る矢數や一念三千句」の句であつたので、この句によつてか世人が三千風と字（あざな）したのだといふ。十五年後の天和三年四月四日、仙臺を立つて宿望の全國大行脚に出で、大旅五年、見殘し再順二年、都合七年を費して全國を遊歷し、天和三年十月三日一旦故鄕射和村に歸り、貞享二年の暮も故鄕に越年し、元祿二年五月行脚を終へて又故鄕に歸つたのであるが、この旅行の紀行が「日本行脚文集」である。仙臺出立の時、「けふを命日にしてたうびよ」と云つて、「けふぞはや見ぬ世の旅の更衣」の句を殘してゐるので、これから歿日や辭世が誤られたりもしてゐるのである。一旦故鄕へは歸つたが、間もなく行脚に出で、又行脚を續けてゐたらしいが、元祿八年東武隅田川のほとりの假庵にゐた時、相州大磯鴫立庵から入庵の交渉を受け、五月入庵した。鴫立庵は寛文の初め小田原の宗雪が創庵し、宗雪歿後二年にして三千風の入庵となつたのである。三千風は入庵して修理を加へ、西行堂・虎堂その他を設け、元祿十年には西行の五百年忌を修した。又元祿十三年頃までに自ら壽碑を建て、これに「鴫立し澤邊の庵をふきかえてこゝろなき身のおもひ出にせん」の歌及び「鴫たつてなきものを何よぶことり」の句を刻し、自號に「中興鴫立庵主」と肩書してゐる。この後歿時までの動靜は、その著作などの知られる外詳かでない。【人物】「行脚文集」の序に、誰に恐れ何者に恥ぢようか。自分は妻子もなく、爵祿の望みもない。かくて世に住まれなければ住まれずともよいと云ふ意味の事を述べてゐて、これによれば不羈獨往の性格らしく見えるが、それでゐて行脚中の態度を見ると、阿諛諂辭甚しくて、全く迎合主義である。又學識學才のある事は十分認められるが、而も漢字の奇怪な使用をしたり、無闇と多くの號を使ひ分けたりするなど、非常識なほど衒學的で、學識の惡用に陷つて居り、なほ尨大なる「行脚文集」を編んだり、寓言體小說風の「法語三人物語」の如きを書いたり、謠曲を作つたり、西鶴に眞似て大矢數俳諧をやつたり、數多くの著作をしてゐたりする所に、衒學と野心をも感ぜしめる。身は出家となり、松島の勝景を慕つて行つたに拘らず、又當時彼を今西行といふ人があつたり、自らも犬西行など云つてゐるに拘らず、「遊女ノ行文」（文集）なるものを書いて、「師直執筆吉田ノ艷好弟子寗（みち）風書」と署名するなど、その他凡ての點から見て



大淀三千風筆蹟（松宇文庫藏）

彼自ら「賣俗坊」と云つてゐるに違はず、俗物たることは爭はれない。畢竟三千風は奇矯と矛盾に滿ちた性格の持主である。【著書】松島一色兩吟集（延寶八年刊）○松島眺望集（延寶年間）○仙臺大矢數（延寶七年刊）○富士詣（貞享三年刊）○日本行脚文集（別項）（元祿三年刊）○法語三人物語（元祿九年刊）○和漢田鳥集（元祿十四年刊）○三千風笈さがし和風編（元祿十四年刊）○

てたのである。この意味に於て三千風は一種の奇傑である。

【參考】ころもがえ（追善集）朱玉・南山序○俳家奇人談竹内玄々一○誹家大系圖生川春明○相模風土記間宮士信○俳人百家撰水谷川柳○仙臺三十六歌仙○俳人小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海○名人忌辰錄關根只誠○俳諧紀行全集提要飯田飯人（俳諧文庫）○聽雨窓俳

ゐる。【學統】丹後國にあつては細川幽齋に師事し、京師にあつては三條西實枝を師表と仰いだ。【閱歷】「公卿補任」によれば、天正八年正月、通勝二十五歲にして正三位に敍せられ、間もなく同年正月十七日官を辭し、同六月十八日勅勘により出奔して丹後國に行つた。當時田邊城にゐた細川幽齋のもとに赴き、就いてこれに學び、「古今和歌集」の傳及び歌道

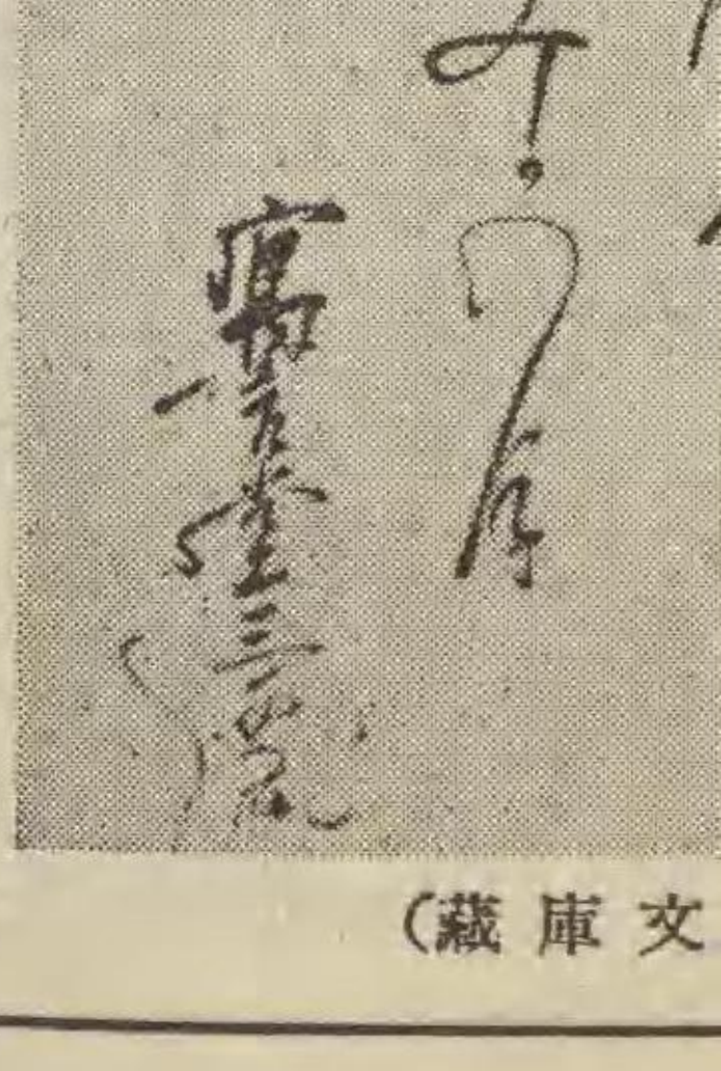
月、岩波書店。漱石全集第六卷・同普及版第九卷所收。

【梗概】健三は、やゝもすればセンチメンタルな氣分に支配され易いくせに、決してデモンストラチヴになれない男であつた。だから獨斷的な氣質が一層專制的に見えた。お住は表向き夫の權利を認めながら腹の中ではいつも不平があつた。彼女は考へなかつた。けれど

山飛散人（行脚の旨を示す）・景狂人（探勝の志をいふ）・頂雲軒（高山に登る時）・尺鷃堂（一室に籠る時）・紫冥軒（神道を說く時）・一念堂（佛敎を論ずる時）・浮謠軒（謠曲を謠ふ時）・寓言堂（戲言を草する時）・呑空法師・呑空居士・呑空齋（抱負の大なる事をいふ）・無不非軒（何にまれ有らざることゝ無しの義）・無極軒（天地間の事極りなしの義）・東往居士（東の方松島に往つた義か）。この外、なほ折に觸れ所に隨ふ大箭數・無玉庵・無月庵・椿木庵・行脚山人・無刀軒等の號があつた。【生歿】寛永十六年生れ、寶永四年（二三六九）一月八日歿す（從來種々に誤り傳へられてゐたが、近來射和村共同墓地に於ける三井家墓域の三千風の墓碑、同地妙通

ら、俳諧は無師獨學のものであつたと見える。【閱歷】伊勢國飯南郡射和村の人で、三井家は家業は何であつたかは詳かでないが、兎に角相當富裕な商家であつたらしく、また京阪に出店があつたやうで、三千風も家に在つた頃は、この出店へ毎年往來した。兄に宗貞といふのがあり、三千風は二男か三男かであつたらしい。然るに彼は十五歳の春から俳諧に心を傾け、思ひを行脚に馳せてゐたが、父母眷族がこれを許さなかつた。寛文九年三十一歳の秋、どうした關係でか希望が叶ひ、自ら薙髮して「柳髮も世を秋風の手剃かな」と吟じ、呑空法師と號して、仙臺に緣を求めて松島に

た時、相州大磯鴫立庵から入庵の交渉を受け、五月入庵した。鴫立庵は寛文の初め小田原の宗雪が創庵し、宗雪歿後二年にして三千風の入庵となつたのである。三千風は入庵して修理を加へ、西行堂・虎堂その他を設け、元祿十年には西行の五百年忌を修した。又元祿十三年頃までに自ら壽碑を建て、これに「鴫立し澤邊の庵をふきかえてこゝろなき身のおもひ出にせん」の歌及び「鴫たつてなきものを何よぶことり」の句を刻し、自號に「中興鴫立庵主」と肩書してゐる。この後歿時までの動靜は、その著作などの知られる外詳かでない。【人物】「行脚文集」の序に、誰に恐れ何者に恥ぢようか。自分は妻子もなく、爵祿の望みもない。



文庫藏）

物語」の如きを書いたり、謠曲を作つたり、西鶴に眞似て大矢數俳諧をやつたり、數多くの著作をしてゐたりする所に、衒學と野心をも感ぜしめる。身は出家となり、松島の勝景を慕つて行つたに拘らず、又當時彼を今西行といふ人があつたり、自らも犬西行など云つてゐるに拘らず、「遊女ノ行文」（文集）なるものを書いて、「師直執筆吉田ノ艷好弟子密風書」と署名するなど、その他凡ての點から見て

彼自ら「寶僧坊」と云つてゐるに違はず、俗物たることは爭はれない。畢竟三千風は奇矯と矛盾に滿ちた性格の持主である。【著書】松島一色兩吟集（延寶八年刊）○松島眺望集（延寶年間）○仙臺大矢數（延寶七年刊）○富士詣（貞享三年刊）○日本行脚文集（別項）（元祿三年刊）○法語三人物語（元祿九年刊）○和漢田鳥集（元祿十四年刊）○三千風笈さがし和風編（元祿十四年刊）○鴫立澤（謠曲）○金花山（謠曲）。

【俳風・業績】「行脚文集」に「所專俳諧は狂言なり、寓言也。實書不用にして戯が中の虛也」と云ひ、「せんずる處、此道は世間の浮說、小隱不善をなさじと日暮らしのすさびなりと野子などは思ふが、但し是も亦偏見か知らず」と云ひ、また「うつくしき阿法となるは只此道なり」など云つてゐるので、三千風の俳諧觀は明かである。これは正に談林の影響を受けてゐるもので、從つて彼の作も談林風であるが、談林風にしては又似て非なるものがある。內容的に談林風の奇拔斬新が乏しく、寧ろ形式表現上の奇拔が主である。特に奇拔といふよりも、用字用語の怪奇、表現の怪奇である。嶮難た漢字に和訓を施したり、和語に怪奇な漢字を宛てたりするのがその身上で、思想的には寧ろ古くて何等の情趣も風韻もない。彼の第二の故鄕たる松島・仙臺は、十五年の地盤であつただけ、この地を中心とした東北地方には、門人も多く勢力もあつたやうであるが、優れた門人が殆ど現はれてもゐない。全國を普く行脚して各地の俳人と交遊したに拘らず、彼の俳風が遵奉されるに至らなかつたのは、彼の俳風の當然の歸結でなからねばならぬ。かくて彼は僻陬の地の名もなき俳人を相手として終り、一時の奇調に快を貪つて果てたのである。この意味に於て三千風は一種の奇傑である。

【參考】ころもがえ（退齋集）朱玉・南山序 ○俳家奇人談竹内玄々一○誹家大系圖生川春明 ○相模風土記間宮士信○俳人百家撰水谷川柳○仙臺三十六歌仙 ○俳人小傳中村光久 ○俳諧人物便覽三浦若海○名人忌辰錄關根只誠○俳諧紀行全集提要飯田飯人（俳諧文庫）○聽雨窓俳話角田竹冷 ○三千風の晚年青山善太郎（句と評論昭和七ノ四）○大淀三千風雜考竹内琴涯（唐辛子昭和七ノ一〇） 〔志田〕

通方（みちかた） 有職家【姓】土御門。本姓は源氏【生歿】文治五年生れ、曆仁元年（一八九八）十二月二十八日歿す。享年五十。【閱歷】建久五年從五位下に敍し、翌年因幡守となり、建仁元年左少將、承元元年右中將、建曆元年藏人頭を經て、同二年從三位に敍せられた。後進んで建保三年には參議に任じ、承久元年には左中將・右衞門督・檢非違使別當となつた。同二年更に權中納言に轉じ、右衞門督・檢非違使別當を辭したが、貞應二年には正二位に進み、寛喜三年には權大納言に任じ、翌年には中宮大夫となつた。土御門上皇の承久の事に依つて阿波國御遷幸の事があつた時に、その皇子（後嵯峨天皇）を預り奉つたことは「增鏡」三神山の條に見えてゐる。曆仁元年大納言に轉じたが、十二月二十七日出家、翌日薨去した。「飾抄」（別項）の著がある。 〔石村〕

通勝（みちかつ） 學者【姓】源【氏】中院【號】也足、又は也足軒【法號】素然【生歿】永祿元年に生れ、慶長十五年（二二七〇）三月二十五日薨ず。享年五十三。【家系】その先、具平親王より出で、正二位大納言通爲の子で、その子孫に通村（別項）・通茂等の堂上歌人を出してゐる。【學統】丹後國にあつては細川幽齋に師事し、京師にあつては三條西實枝を師表と仰いだ。【閱歷】「公卿補任」によれば、天正八年正月、通勝二十五歳にして正三位に敍せられ、間もなく同年正月十七日官を辭し、同六月十八日勅勘により出奔して丹後國に行つた。當時田邊城にゐた細川幽齋のもとに赴き、就いてこれに學び、「古今和歌集」の傳及び歌道の祕奧を受けたと云ふ。天正十四年八月十三日出家して素然と號し、慶長四年十二月七日には赦されて再び京師に歸つた。翌慶長五年には後陽成帝、通勝を召して御詩を賜ひ、これに答へて自らも亦和歌一首を獻じた。その後褒貶和歌會を靈山に設けたと云ふが、年代が判然しない。慶長十年九月十六日には、後陽成天皇を初めとして、桂宮知仁親王・三條西實枝等三十六人で、御當座の千首を行はせられたが、通勝も亦その中の一人で、「慶長千首」中にその時の歌が見える。當時彼の詠歌は頗る世にもてはやされたと云ふが、怜悧明敏の才幹を抱いた通勝の眞面目は、素より歌人としてにあるのでなく、幽齋の庇護激勵のもとに完成した大著「岷江入楚」（別項）の學的功績の上にある。その他幽齋の著「伊勢物語闕疑抄」の弘布に力を致し、幽齋自書の「十六夜日記」を轉寫（原本前田侯爵家藏）する等、その學統を繼承し、宣揚するに與つて力があつた。【著書】岷江入楚○百人一首像讃鈔二卷。その他「慶長千首」中にその作歌が見える。【參考】國學者傳記集成○古註の集成―岷江入楚野村八良（國語と國文學二ノ一〇） 〔池田〕

道草（みちくさ） 小說【作者】夏目漱石【發表】大正四年六月三日から同年九月十四日まで、東京・大阪兩朝日新聞に連載。【刊行】同年十月、岩波書店。漱石全集第六卷・同普及版第九卷所收。

【梗概】健三は、やゝもすればセンチメンタルな氣分に支配され易いくせに、決してデモンストラチヴになれない男であつた。だから獨斷的な氣質が一層專制的に見えた。お住は表向き夫の權利を認めながら腹の中ではいつも不平があつた。彼女は考へなかつた。けれども考へた結果を野性的によく感じた。この夫婦は彼等に特有な因果關係を持つてゐることを冥々の裡に自覺してゐた。さうしてその因果關係が一切の他人には全く通じないのだといふこともよく呑み込んでゐた。健三は三つの時から七つの時まで島田といふ家に貰はれてゐた。さうしてまた實家に戻つたが、籍の脫けたのは二十二の時であつた。その時島田には父が養育料を與へて絕緣した。その島田と十五六年目に偶然にも往來で出逢ひ、それからまた昔の因果關係が復活して、彼は惱まされねばならなくなつた。彼には一人の兄と腹違ひの姉があつた。姉には比田といふ連合があつた。細君の父も不遇になつてゐた。すべてが頽廢の影であり、凋落の色彩であるうちに、血と肉と歷史とで結びつけられて彼は桎梏に苦しめられた。みんな自我主義者であり、みんな獨斷者であり、さうしてどうすることも出來ない運命を背負つてゐた。最後に又島田に金を取られて事件が落着した時、お住はこれですつかり片づいたと言つて安心した。けれども健三は世の中に片づくなんてものはありやしないと言つて、その口調は吐き出すやうに苦々しかつた。

【批評】これは作者の長篇中で、最も傑出した物の一つであり、また唯一の自叙傳的色彩を

帶びた長篇である。今作者の經歷に於て、篇中の事件とパラレルを成す二三の點を擧げて見ると、作者には三人の兄があつたが、上の二人は比較的早く世を去り、末兄が今なほ生存してゐる。外に異母姉も晩年まで生きてゐた。作者は三歲の時、もと家の書生をしたことのある鹽原某の養子となり、八歲の時實家に歸り、二十二歲の時正式に復籍した。作者が英國留學から歸つたのは三十七歲の春であつた。その後間もなく元の養父が訪ねて來て窮乏を訴へ、作者の窮乏の中から金若干を與へられたことがあつた。作者が文壇に進出したのは明治三十八年（三十九歲）からで、「我輩は猫である」（別項）の完結したのは翌三十九年（四十歲）であつた。その間に、作者は多くの短篇を書いた。「道草」（別項）の主人公も島田に渡す金は原稿でかせいだ。「道草」は完成した作品中の最後のもので、作風は渾然たる寫實的の表現で、事件に波瀾は少いが、性格の描寫は甚だ圓熟したもので、そのすべてが運命の渦卷に捲き込まれてどうすることも出來ない破目に陷つて行くのが主題である。この考へ方は更に絕筆の「明暗」（別項）に於て一段の進境を示さうとしつつあつた。　（野上）

道眞（みちざね）　漢學者【姓名】姓は菅原。字は三。小名は阿呼といつた。【生歿】承和十二年に生れ、延喜三年（一五六三）二月二十五日、筑前太宰府に薨じた。享年五十九（「菅家文草」卷一、月夜見梅華に「齊衡乙亥（一五一五）年十二とあるのに據る）。【廟所】筑前の安樂寺に葬つた。今の太宰府神社がそれである。【家系】淸公の孫、是善の子である（淸公・是善參照）【閱歷】十一歲の時、父是善が、島田忠臣をして道眞に作詩を試みさせたところ、眼前の景を「月耀如晴雪、梅花似照星、可憐金鏡轉、庭上玉房馨」と詠じたことは人口に膾炙されてゐる。貞觀十二年三月、二十六歲で文章生に擧げられ、やがて得業生となつた。次いで後、

淸公—是善—道眞—
　—高視—文時—輔昭
　—景行
　—淳茂
　—兼茂—鎭延（安樂寺別當）
　—女子（齊世親王室）
　—女子（衍子　寬平妃）

對策に及第して諸官を歷進し、元慶初年に式部少輔兼文章博士となり、詔を奉じて「後漢書」を講じた。同七年（三十九歲）には加賀權守をも兼ねてゐた。その四月二十一日、渤海の客裴廼等を饗するために假に治部大輔の事を行はしめられ、島田忠臣と共に接伴の事を行つた（三代實錄、元慶七年四月二十一日の條）。裴廼は道眞の詩を稱揚して白樂天の詩の如しといつたといふ。仁和二年正月（四十二歲）讃岐守に任ぜられた。次いで同四年、たま〳〵宇多帝より太政大臣基經に下された詔書中の關白・阿衡の文字に關して紛議起り、基經はこれを空名として喜ばず、ために帝は詔書の改訂をすら遊ばされ、詔書の執筆者は罰せられようとした。道眞はこれに關して基經に上書して斷案を述べ、事なきを得た。道眞が宇多帝の御信任を得るに至つたのは實にこの事件によるのである。寬平三年（四十七歲）この年正月基經薨じ、道眞は二月藏人頭に任ぜられた。皇胤或は大臣家以外の者がこれに任ぜられることは前例のないことであつた。同五年四月敦仁親王が皇太子とならせられたが、この度の立太子は、帝と道眞とで決せられたといふ程の御信任を蒙つた。翌年八月、當時參議左大辨であつた道眞は遣唐大使に任ぜられたが、在唐の僧中璀から唐國の衰微內亂を上申して來たので、翌月これを上奏し（菅家文草）、遣唐使の事は遂に止んだ。この年門人等が道眞の五十の賀を行つた。その時一老父が賀章と沙金とを机上に置いて去つたが、それは宇多帝の下し賜うた事と後で知られた（荏柄天神緣起）。寬平九年六月、時平は大納言兼左近衞大將に、道眞（五十三歲）は權大納言兼右近衞大將に任ぜられた。翌七月、帝は讓位され、醍醐帝が立たれた。時に大臣等或は薨じ、又は退いて缺員が多かつたので、時平と道眞に新帝を輔佐せしめられた。「寬平遺誡」（別項）はその時のものである。その中に道眞に關しては、「菅原朝臣は朕が忠臣に非ずして新君の功臣なり。人の功は忘るべからず。新君之を愼み給へ」とある。宇多帝の御信任、以て知るべきである。昌泰二年二月、時平は左大臣に、道眞（五十五歲）は右大臣に任ぜられた。上表して三度辭したが許されなかつた。翌三年正月三日帝は宇多法皇の朱雀院に行幸して密議し給ひ、「左右大臣倶に天下の政を執るは統一を缺きて不便なり」とて道眞を召し、「今より天下の政は汝一人にて奏決せよ（荏柄天神緣起）」と仰せられた。道眞は固辭して受けなかつたが、召されてただに退出する事は人の疑ひも如何とて「春生ニ柳眼中ニ」の題を賜はりて詩を賦し、法皇及び天皇から各々御衣を賜はつて退出した。その後、大將を罷めようと上表したが許されなかつた。然るに朱雀院に於ける密議の內容が時平の耳に漏れた。これ等の機微を知つた文章博士三善淸行（別項）は、この年、書（本朝文粹第七）を寄せて道眞の隱退を勸告したが、道眞は從はなかつた。その頃、大納言源光、中納言藤原定國等は道眞の下風に在るを不快とし、又藏人頭藤原菅根は事によつて道眞を恨んでゐた。時平はこれ等の人々と結んで道眞を讒奏し、政務に私がある事や、今上を廢して皇弟齊世親王を立てんと謀る由を密奏した。親王は廣相の女の腹に生れ、又道眞の婿でもあり、帝も十六歲の御若年なれば深い思慮もなく、延喜元年正月二十五日、道眞の官位を褫奪して太宰權帥に左遷せられた。權帥と稱しても全く名義のみで、實は流罪に處せられたのである。法皇は急ぎ淸涼殿に參り給うたが、藏人頭菅根は衞士に嚴しく守らしめ、自らもこの由を奏聞しなかつた。この時、道眞の子女二十三人中、男子四人は四ケ所に、長女は京に留め、少男少女は配所に伴ふことを許された。「慰少男女」（本朝文粹卷一）は、この時の心情を察するに餘りがある。（太宰府への途中の狀況は「大鏡」の時平傳に詳しく、又配所の生活は「菅家後集」に明かである）。【著作】菅家文草十二卷○菅家後草一卷○菅家萬葉集（新撰萬葉集）二卷○菅家遺誡二卷○類聚國史二百卷○三代實錄四十卷（以上各別項）。なほ「須磨記」一卷は恰も「淸少納言松島日記」の類で、菅公の須磨紀行と稱せられるものであるが僞書である。また「長谷寺緣起」「大安寺緣起」等も道眞の作と稱せられる。詩は「扶桑集」や「本朝文粹」にもある。和歌は「三代集」及び「新古今」「續後撰」「續古今」「玉葉」「新拾遺」「新續古今」等に散見される。【人物】英邁敢行の人らしいところがある。道眞が始めて讃岐に赴任した時、前の讃岐守藤原保則が竊に人に語つて、「新太守は當今の碩儒にして吾が測り知る所に非ず。但し其の心を見るに誠にこれ危殆の士なり」（三善淸行作の「藤原保則傳」による）と言つた。これは身を全うする人にあ

らざることを言ふに似てゐる。或は又藤原菅根が、道眞の推薦によつて官位の昇進をしながら、その恩を忘れて深く彼を恨んだのは、庚申の夜、道眞に頰を打たれたことに起因する。また三善淸行の勸告を退けたのも豪邁と言ふべく、その身の危殆を顧みない行爲である。これ等の點を綜合すれば、道眞は必ずしも圓滿寬厚の人物ではなかつたやうに思はれ

北野宮寺緣起○北野本地○天神講式○天滿大自在天神寶藏記○北野神君畫幀帖（以上續類從五七）○菅神初瀨影向記（續類從六五）○北野神社由來記　田中尙房○松崎天神鎭座考　弘正方○大鏡（時平傳）○續古事談（王道）○愚管抄（卷三）○扶桑略紀○三代實錄○江談抄（卷四・五・六）○古事談（神社・佛寺）　（山岸）

道綱母（みちつなのはは）　歌人・物語作者【姓】藤

長ずること六七歲位であつたらしい。「蜻蛉日記」は、兼家との關係について記されたものであるが、兼家は正曆元年七月二日、年六十二を以て薨じた。この時道綱母は生きてゐたか、或は尼になつてゐたか知れない。歿年ははつきりと分らないが、「小右記」長德二年五月二日の條に、「新中納言道綱亡母周忌法事、送七僧、粥時又、依候大內不訪向之由、自內差致

の範となつた。そのことは、淸輔が「郭公秀歌は五首也」として、貫之・公忠・兼盛・實方等の歌と共に推稱したところである（袋草紙）。道綱母はかく和歌の名手であつたが、作歌に際しては非常に苦心した。「愚祕抄」下に、「道綱母は、くらき所にてよみならひたるとかや。いつも灯火をそむけて、目をとぢて案ぜられ侍りけるとなん」とある。道綱母は人と爲り溫

渦卷に捲き込まれてどうすることも出來ない破目に陷つて行くのが主題である。この考へ方は更に絕筆の「明暗」（別項）に於て一段の進境を示さうとしつつあつた。〔野上〕

道眞 みちざね　漢學者【姓名】姓は菅原。字は三。小名は阿呼といつた。【生歿】承和十二年に生れ、延喜三年（一五六三）二月二十五日、筑前太宰府に薨じた。享年五十九（「菅家文草」卷一、月夜見梅華に「齊衡乙亥（一五一五）年十一」とあるのに據る）。【廟所】筑前の安樂寺に葬つた。今の太宰府神社がそれである。【家系】淸公の孫、是善の子である（淸公・是善參照）。【閱歷】十一歲の時、父是善が、島田忠臣をして道眞に作詩を試みさせたところ、眼前の景を

文字に關して紛議起り、基經はこれを空名として喜ばず、ために帝は詔書の改訂をすら遊ばされ、詔書の執筆者は罰せられようとした。道眞はこれに關して基經に上書して斷案を述べ、事なきを得た。道眞が宇多帝の御信任を得るに至つたのは實にこの事件によるのである。寬平三年（四十七歲）この年正月基經薨じ、道眞は二月藏人頭に任ぜられた。皇胤或は大臣家以外の者がこれに任ぜられることは前例のないことであつた。同五年四月敦仁親王が皇太子とならせられたが、この度の立太子は、帝と道眞とで決せられたといふ程の御信任を蒙つた。翌年八月、當時參議左大辨であつた道眞は遣唐大使に任ぜられたが、在唐の僧中

給ひ、「左右大臣俱に天下の政を執るは統一を缺きて不便なり」とて道眞を召し、「今より天下の政は汝一人にて奏決せよ（荏柄天神緣起）」と仰せられた。道眞は固辭して受けなかつたが、召されてただに退出する事は人の疑ひも如何とて「春生ニ柳眼中ニ」の題を賜はりて詩を賦し、法皇及び天皇から各々御衣を賜はつて退出した。その後、大將を罷めようと上表したが許されなかつた。然るに朱雀院に於ける密議の內容が時平の耳に漏れた。これ等の機微を知つた文章博士三善淸行（別項）は、この年、書（本朝文粹第七）を寄せて道眞の隱退を勸告したが、道眞は從はなかつた。その頃、大納言源光、中納言藤原定國等は道眞の下風に

聚國史二百卷○三代實錄四十卷（以上各別項）。なほ「須磨記」一卷は恰も「淸少納言松島日記」の類で、菅公の須磨紀行と稱せられるものであるが僞書である。また「長谷寺緣起」「大安寺緣起」等も道眞の作と稱せられる。詩は「扶桑集」や、「本朝文粹」にもある。和歌は「三代集」及び「新古今」「續後撰」「續古今」「玉葉」「新拾遺」「新續古今」等に散見される。【人物】英邁敢行の人らしいところがある。道眞が始めて讚岐に赴任した時、前の讚岐守藤原保則が竊に人に語つて、「新太守は當今の碩儒にして吾が測り知る所に非ず。但し其の心を見るに誠にこれ危殆の士なり」（三善淸行作の「藤原保則傳」による）と言つた。これは身を全うする人にあらざることを言ふに似てゐる。或は又藤原菅根が、道眞の推薦によつて官位の昇進をしながら、その恩を忘れて深く彼を恨んだのは、庚申の夜、道眞に頰を打たれたことに起因する。また三善淸行の勸告を退けたのも豪邁と言ふべく、その身の危殆を顧みない行爲である。これ等の點を綜合すれば、道眞は必ずしも圓滿寬厚の人物ではなかつたやうに思はれる。宇佐の奉幣使藤原淸貫が太宰府に寄つた時、道眞の擧動を見て、廢立の陰謀を自認した言語があつた由を、歸京後に淸貫が奏してゐる（扶桑略記卷二十三）。但し淸貫は時平の黨類であるから、この言は俄には信じ難い。要するに道眞は忠誠の外に顧みる所がなかつた積極的性格の人であつた。藤原氏の勢力は堅固にして既に拔く事は出來なかつた。道眞はこれを知悉してゐて、而も萬難を排して顧みない所以は、先帝の知遇に感じ、王權を恢復するにあつた。その身の安危は問ふ所でなかつたのである。

【詩人としての道眞】詩人的な情熱の人と言ふことは出來ない。ただその境遇と忠誠一貫の心情とを以て、事の成敗利鈍は豫め知るべきでないが、鞠躬盡瘁、身を君に捧げた點が、その詩を重からしめるものである。恰も「新葉集」の和歌が事實以上に評價せられる事に類してゐる。また能書を以て知られてゐる。王羲之の蘭亭を學んで遒勁これに過ぐと稱せられてゐるが、眞に道眞の書として信ずべきものは今明かでない。

【參考】北野古緣起○同假字緣起○兩聖記○菅神入宋授衣記（以上類從第十九）○天滿宮託宣記○菅家御傳記○最鎭記文○梅城錄（以上類從第二十）○荏柄天神緣起（類從第二十四）○北野宮寺緣起○北野本地○天神講式○天滿大自在天神寶藏記○北野神君畫幀帖（以上續類從五七）○菅神初瀨影向記（續類從六五）○北野神社由來記 田中尙房 ○松崎天神鎭座考 弘正方○大鏡（時平傳）○續古事談（王道）○愚管抄（卷三）○扶桑略紀○三代實錄○江談抄（卷四・五・六）○古事談（神社・佛寺）〔山岸〕

道綱母 みちつなのはは　歌人・物語作者【姓】藤原氏【閱歷】道綱母の傳記は、その著「蜻蛉日記」によるより外に確かな資料がない（蜻蛉日記參照）。父倫寧は、河內・伊勢・丹波・陸奧等の守に任ぜられた（大鏡・蜻蛉日記・長能集等）。長能のことは「作者部類」に、「伊勢守藤原倫寧男、寬弘六年、任伊賀守」と見え、有名な歌人であつた。その略歷は「中古歌仙傳」に見え、又「長能集」の卷末にも見える。

冬嗣―長良（從二位上）―高經（正四位下）―惟岳（從五位下）―倫寧（伊勢守 上總守 河內守 丹波守 常陸守）（貞元二年卒）
　├理能（從五位上）（肥前守）
　├長能（歌人）
　├女（爲雅妻）
　├道綱母（歌人）
　└女（孝標室）

「長能集」の引く所によると、永觀二年は長能三十六歲の時であるらしいから、彼は天曆二三年の誕生であらう。それ故に道綱母の兄ではなくて弟である。この事については山岡俊明にも考證がある。長能は道綱母歿後も、なほ存命したのであるが、その事は「中古歌仙傳」に、寬弘六年伊賀守に任じた記事が見えてゐるから確かである。道綱母には姉も妹もあるが、その中の一人は「更級日記」の作者孝標女（別項）の母にあたるらしい。道綱母は名も生年月も知る由はないが、兼家の通ひ初めた天曆八年を假りに二十歲とすれば、承平五六年の誕生であらう。天曆八年は兼家二十六歲の時であるから、道綱母に長ずること六七歲位であつたらしい。「蜻蛉日記」は、兼家との關係について記されたものであるが、兼家は正曆元年七月二日、年六十二を以て薨じた。この時道綱母は生きてゐたか、或は尼になつてゐたか知れない。歿年ははつきりと分らないが、「小右記」長德二年五月二日の條に、「新中納言道綱亡母周忌法事、送七僧、粥時又、依候大內不訪向之由、自內差致信示送了」と見えてゐるから、その前年即ち長德元年五月二日にみまかつたものではないかと思はれる。なほ彼女の事蹟は「類聚名物考」「百人一首一夕話」等には少し見えてゐるが、詳しいものではない。【著作】蜻蛉日記三卷（別項）。なほ勅選集に入つてゐる歌を「作者部類」によつて抄出すれば、拾遺七、後拾遺十、詞花二、新古今二、新勅撰二、續後撰一、續古今一、玉葉七、續千載三、續後拾遺二、風雅一、新千載三。【人物】系圖には、「本朝第一美人三人內也」と見えてゐる。「大鏡」には「この君きはめたる和歌の上手におはしければ」とあり、「清少納言枕草子」にも、「をのとの母上こそは、普門寺といふ所に八講しけるをききて、またの日、小野殿に人々あつまりて、あそびし、文つくりけるに、たきぎこる事はきのふにつきにしをけふは斧の柄ここにくたさむとよみ給ひけんこそめでたけれ」と感心してゐる。又、彼女は、弟の長能と共に、寬和二年の內裏歌合に出席してゐることが、日記卷末の附錄にも、また「拾遺集」にも見えてゐる。その內裏歌合の歌「都人ねてまつらめや郭公いまぞ山邊に（をイ日記）なきていづ（すぐ日記）なる」の歌は、「日記」卷末にも見え、又「傳大納言母上集」にも見えてゐるが、この歌は古今の名歌として後世の範となつた。そのことは、清輔が「郭公秀歌は五首也」として、貫之・公忠・兼盛・實方等の歌と共に推稱したところである（袋草紙）。道綱母はかく和歌の名手であつたが、作歌に際しては非常に苦心した。「愚祕抄」下に、「道綱母は、くらき所にてよみならひたるとかや。いつも灯火をそむけて、目をとぢて案ぜられ侍りけるとなん」とある。道綱母は人と爲り溫良貞淑な婦人であつた。それだけに、兼家の氣まぐれな態度に對して不滿を抱いてゐる。「日記」を見れば、彼女が家庭生活の破綻に惱み、弱き者に同情し、自然の美を慕ひ、我が子の愛に生きて、常に純一を追求する正直な婦人であつたことが分る。【參考】蜻蛉日記解環 坂徵〔池田〕

通俊 みちとし　歌人【姓】藤原【生歿】永承二年に生れ、康和元年（一七五九）八月薨ず。享年五十三。【閱歷】經信よりは三十一年の後輩で官位も低く、匡房よりは六年の後輩で官位はほぼ等しい。康平二年從五位下に敍せられ、永保四年參議、應德三年從三位、寬治二年正三位、同八年匡房と共に權中納言に任じ、治部卿を兼ね、從二位に敍せられた。承曆二年白河天皇の敕を蒙つて「後拾遺集」（別項）を撰し、應德三年奏上し、「後撰」「拾遺」にはなかつた序をも附した。當時經信・匡房は、聲望も力量も通俊に優つてゐたのに、後輩の通俊が敕撰集撰者の名譽を荷つたので、「後拾遺集」に對する非難が諸方に起つた。彼は頭腦明晰で、學問にも深

實賴―齊敏┬高遠―資高―和泉式部
　　　　　├實資
　　　　　└懷平―經通―經平┬通宗
　　　　　　　　　　　　　└通俊

く、厚く白河天皇の御寵愛を蒙り、「後拾遺集」の如きも自ら私に撰した後に天皇の御思召を得たのであるともいはれる。經信の非難に對しては論爭もしてゐる如く、一般の非難に抗するため、貫之に倣つて「後拾遺集」の內三百六十首を拔いて「續新撰」を撰したといはれてゐる。承曆二年の內裏歌合には講師並に作者であり、寬治八年の高陽院七番歌合には作者である。その他歌人としての經歷の乏しいのは比較的短命であつた爲めであらう。【著作】後拾遺集序○續新撰（佚書）○敕撰集に入る歌は、後拾遺集五首、金葉三、詞花二、千載二、新古今二、以下凡そ二十七首。私撰集に入るものは後葉集三首、續詞花集五首である。

【批評】その歌には現實味があり、意志の閃きが見え、著しい新傾向を示してゐる。「後拾遺集」にも同樣の傾向があつて、「三代集」とは異る色彩を呈し、和歌は「後拾遺集」から新しくなつたと、鎌倉時代の人々は考へてゐたのである。

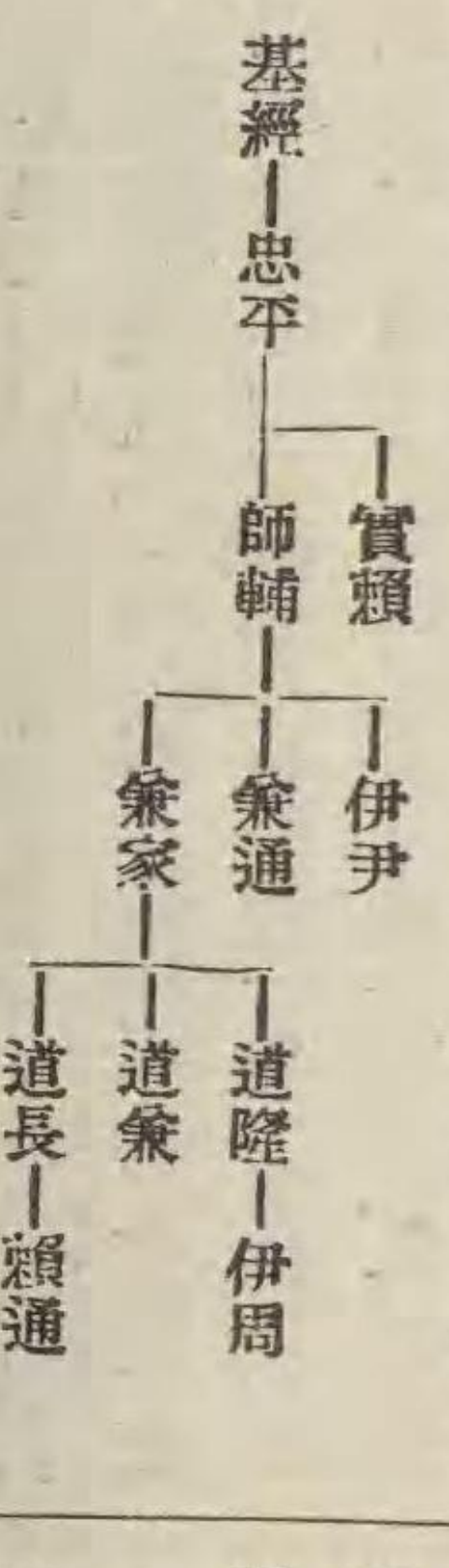
【參考】大日本史（第二百二十）○公卿補任○尊卑分脈　［西下］

道敏（みちとし）　國語學者　【姓】栂井（とがのゐ）　【號】一室　【生歿】享保十年生れ、天明五年（二四四五）六月十日歿す。享年六十一。【墓所】京都市西大谷　【閱歷】未詳。京都の人で書肆を營んでゐたやうである。武者小路家について和歌を學び、小澤蘆庵・伴蒿蹊（各別項）等と交つた。道敏について學んだ人に幻交庵主人と號する人がある。【著書】てには網引綱二卷二册（別項）○蜘のすがき二卷二册（文化十一年刊。自序は安政八年。「てには網引綱」の後をうけて、甲卷には手爾波の意味を說き、乙卷には「唯」「猶」「早」「先」「此」「是」「その、それ」等所謂虛字八十餘を說き、古歌から例證を上げてゐる）○詞の秋草四卷三册（文化十年刊。「てには網引綱」と「蜘のすがき」とを合刊したもの）。

【業績】道敏の國語學に關する著書は「てには網引綱」と「蜘のすがき」の二部であり、而も後者は前者の補遺とも見るべきもので、主要な著述は「てには網引綱」一部であるが、道敏の國語學史上に於ける地位は特筆すべきものがある。第一に、道敏は歌道に於ける祕傳・傳授を排擊し、學術的研究を唱道してゐる。第二に道敏の手爾波研究は、（イ）手爾波と詞（一語で獨立した意味を有するもの）とを區別し、（ロ）手爾波の呼應を古歌に依つて研究してゐる。これをそれ以前の研究に比すれば、同日に談ずる事の出來ない進步である。又手爾波と云ふ語が乎古止點から出た語であると說いてゐる事も注意すべき事である。

【參考】平安名家墓所一覽○（慶長以來）書賈集覽○日本文法史　［龜田］

三千歲（みちとせ）「天衣紛上野初花」を見よ。



道長（みちなが）　歌人・詩人　【姓】藤原　【法號】行觀、後に行覺と言つた。【生歿】康保三年に生れ、萬壽四年（一六八七）十二月四日薨じた。享年六十二【閱歷】天元三年、十五歲で從五位下に叙せられ、左近衞少將に任ぜられた。次いで永延二年（二十三歲）正月權中納言、正曆三年（二十七歲）四月、從二位に叙せられ、中宮大夫に任ぜられた。また賴道の生れた長德元年（三十歲）四月左近衞大將を兼ね、六月、右大臣に進み、翌年七月、左大臣になつた。この年伊周・隆家等が配流せられ、天下の權は全く道長に歸した。長保二年（三十五歲）その女彰子中宮となり、道長の權力は次第に增長し、帝もこれを快しと思はれなかつた。殊に三條帝の御卽位の頃、卽ち道長の四十六歲頃は、專橫最も甚だしく、帝に迫つて位を皇太子に讓らしめ申した。皇太子は立つて後一條帝とならせられた。帝の御母は彰子である。道長は攝政となつた。次いで寬仁元年（五十二歲）八月、皇太子（小一條院）を廢して、後一條帝の御弟を立てて皇太弟とした。この年三月道長は攝政を罷め、十二月に太政大臣に任ぜられた。又寬仁二年（五十三歲）、輦車で宮中に出入することを許されたが、二月太政大臣を罷めた。四月にその女威子が女御となり、十月に中宮となつた。「この世をば我が世とぞ思ふ」の歌は、この時の中宮册立の饗宴に詠んだものである（小右記）● 蓋し道長はその女三人が、共に后位に昇り、四女嬉子は東宮妃（敦良親王、後に後朱雀帝）、五女寬子は小一條院の妃となつた。卽ち三后を女とし三帝を外孫としてゐる。加ふるに長子賴通は關白左大臣、三子敎通は內大臣、四子賴宗、五子能信は共に大納言で、一門の富貴顯榮を極めた。「この世をば」は甚だ僭越な歌ではあるが、當時の道長の僞らざる心中を述べたものであらう。寬仁三年（五十四歲）三月十七日から病んで二十七日に入道した。法號は行觀、後に行覺と稱した。京極邸の東に規模宏大なる法成寺を建立した。「榮華物語」によれば、當時攝政賴通は「公事は公事として先づこの御堂の事を先にすべし」と、諸司及び諸國に令を發した。因つて國司等は、地租・官物を怠納して只管御堂の役夫・材木・檜皮・瓦等を納入する事を競うたといふ。なほ當時の模樣は「榮華物語」に詳しい。萬壽四年（六十二歲）十月二十八日病み、その後次第に篤く、十一月二十五日には、主上親しく法成寺に行幸し給うた。翌月四日薨じ、七日の夜に葬送した。【著作】御堂關白集（丹鶴叢書所收、全部七十三首の中、道長の歌は八首に過ぎず、他は主として上東門院彰子の歌で、他の人々のも一部分交つてゐる）○御堂關白記（別項）。古典全集の「御堂關白記」の末には、諸書に散見する道長の歌五十六首を網羅してゐる。

【人物・業績】剛膽な氣性であつたらしく、公任の頬を踏まうと豪語したり、五月闇の深更に紫宸殿の高御座の傍まで行つて南面の柱の下を削つて來たことなどは彼の性格を象徵した說話であらう。又飯室の尋禪僧正の伴僧の見た相は「虎子如渡深山峯」とて人相中第一の勝れた相を道長は持つてゐた。毘沙門の生きた手本を見るやうだと言つたのも彼の人相から來る感じである。或は荒馬を乘りこなす所、弓術の勝れた點、すべて平凡な貴公子ではなかつた。それは道長の豪放な書風にも現はれてゐる。剛毅果敢な反面には詩歌にも勝れてゐた。「大鏡」には「事に觸れて遊ばせる詩和歌など居易や赤人・人丸・躬恒・貫之といふともえ思ひよらざりけむとこそおぼえ侍れ」と評した。やゝ過褒のやうでもあるが、道長には詩歌方面の修養も深かつた事を示すものである。卽ち歌人として、その歌は「後拾遺」以下「詞華」「千載」「新勅撰」「續後撰」より「新拾遺」「新後拾遺」等に至るまで採られてゐる。詩人としても、「本朝麗藻」にその詩が見え、又「江吏部集」には、「賀大江匡衡兼三官」の一首が載つてゐる。「大鏡」の傳へは過褒であるとしても、その作は決して凡庸なものではなかつた。

【參考】榮華物語○大鏡○御堂關白記○法成寺藥師堂供養記（類從四三二）○法成寺金堂供養記（類從四三二）○無量壽院供養記（類從四三二）○扶桑略記○百錬抄○日本紀略○愚管抄○古事談○續古事談○富家語談○古今著聞集　［山岸］

美地乃蠣殼（みちのかきがら）　洒落本　一册

【作者】蓬萊山人歸橋　【名稱】序に「此冊子を

住んでゐた。その家に通人新傘・祝鶴・琴孝の三人が偶然に落ち合つて、四人揃つて深川へ出かけることになる。船宿二見屋から舟に乘り、永代橋火の見下から橫川に入つて油堀に來り、船頭の案內で裏櫓の上田屋に上つた。女の素振が惡いと舌戰する琴孝、見事に振られる祝鶴、色氣より酒で泥醉する天馬、しんみりした幕の新傘等さまぐ＼で、やがて祝鶴

太夫以下百九十四人の名を列ねてあるが、その國所は京攝のみならず、大和・河內・伊勢・武藏・備前・備中・備後・播磨・豐前・筑前・肥前・淡路・伊豫・加賀・長門・出雲・安藝等に及んでゐるが、多少宣傳的の意味があらうと思はれる。陸奥太夫は、「竹本祕傳丸」の筑後掾門弟の條に、「ざこばみちのく茂太夫九兵衞」として四人目に出てゐる。目錄を擧げる。

一、祝言　若松

最初の音曲倭西湖四丁と最後の祝言一丁を除くの外は、すべて丸本の拔刷りの寄せ集めであつて、中には文句の中途で終つた不體裁のものもある。［藤井］

陸奥話記（みちのくはなし）「陸奥話記（むつわき）」を見よ。

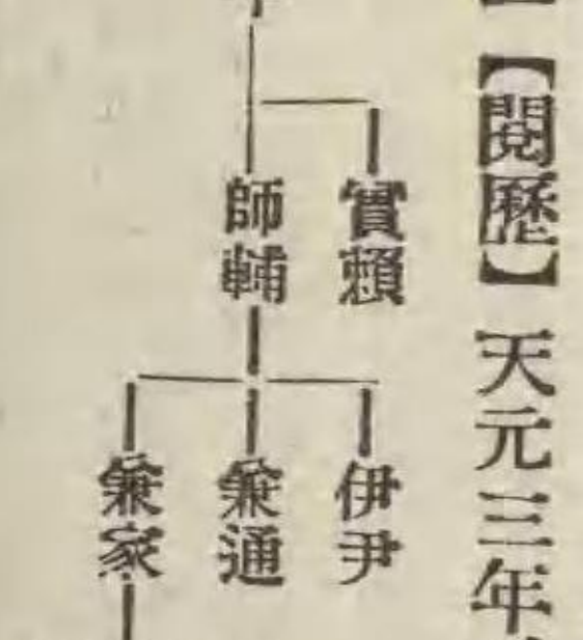
道迺佐喜草（みちのさきくさ）　國學書　一卷

【著者】本居春庭　【成立】刊本には、文政二年

【参考】大日本史（第二百二十）○公卿補任○尊卑分脈　〔西下〕

道敏（みちとし）　國語學者　【姓】栂井（とがのゐ）【號】一室【生歿】享保十年生れ、天明五年（二四四五）六月十日歿す。享年六十一。【墓所】京都市西大谷【閲歷】未詳。京都の人で書肆を營んでゐたやうである。武者小路家について和歌を學び、小澤蘆庵・伴蒿蹊（各別項）等と交つた。道敏について學んだ人に幻交庵主人と號する人がある。【著書】てには綱引綱二巻二册（別項）○蜘のすがき二巻二册（文化十一年刊。自序は安政八年。「てには綱引綱」の後をうけて、甲巻には手爾波の意味を說き、乙巻には「唯」「猶」「早」「先」「此」「是」「その、それ」等所謂虛字八十餘を說き、古歌

道長（みちなが）　歌人・詩人　【姓】藤原【法號】行觀、後に行覺と言つた。【生歿】康保三年に生れ、萬壽四年（一六八七）十二月四日薨じた。享年六十二【閲歷】天元三年、十五歳で從五



位下に敍せられ、左近衞少將に任ぜられた。次いで永延二年（二十三歳）正月權中納言、正曆三年（二十七歳）四月、從二位に敍せられ、中宮大夫に任ぜられた。また賴道の生れた長德元年（三十歳）四月左近衞大將を兼ね、六月、右大臣に進み、翌年七月、左大臣になつた。この年

三后を女とし三帝を外孫としてゐる。加ふるに長子賴通は關白左大臣、三子敎通は內大臣、四子賴宗、五子能信は共に大納言で、一門の富貴顯榮を極めた。「この世をば」は甚だ僭越な歌ではあるが、當時の道長の僞らざる心中を述べたものであらう。寬仁三年（五十四歳）三月十七日から病んで二十七日に入道した。法號は行觀、後に行覺と稱した。京極邸の東に規模宏大なる法成寺を建立した。「榮華物語」によれば、當時攝政賴通は「公事は公事として先づこの御堂の事を先にすべし」と、諸司及び諸國に令を發した。因つて國司等は、地租・官物を怠納して只管御堂の役夫・材木・檜皮・瓦等を納入する事を競うたといふ。なほ當時の模

かつた。それは道長の豪放な書風にも現はれてゐる。剛毅果敢な反面には詩歌にも勝れてゐた。「大鏡」には「事に觸れて遊ばせる詩和歌など居易や赤人・人丸・躬恒・貫之といふともえ思ひよらざりけむとこそおぼえ侍れ」と評した。やゝ過褒のやうでもあるが、道長には詩歌方面の修養も深かつた事を示すものである。即ち歌人として、その歌は「後拾遺」以下「詞華」「千載」「新勅撰」「續後撰」より「新拾遺」「新後拾遺」等に至るまで採られてゐる。詩人としても、「本朝麗藻」にその詩が見え、又「江吏部集」には、「賀大江匡衡兼三官」の一首が載つてゐる。「大鏡」の傳へは過褒であるとしても、その作は決して凡庸なものではなかつた。

【参考】榮華物語○大鏡○御堂關白記○法成寺藥師堂供養記（類從四三二）○法成寺金堂供養記（類從四三二）○無量壽院供養記（類從四三二）○扶桑略記○百錬抄○日本紀略○愚管抄○古事談○續古事談○富家語談○古今著聞集　〔山岸〕

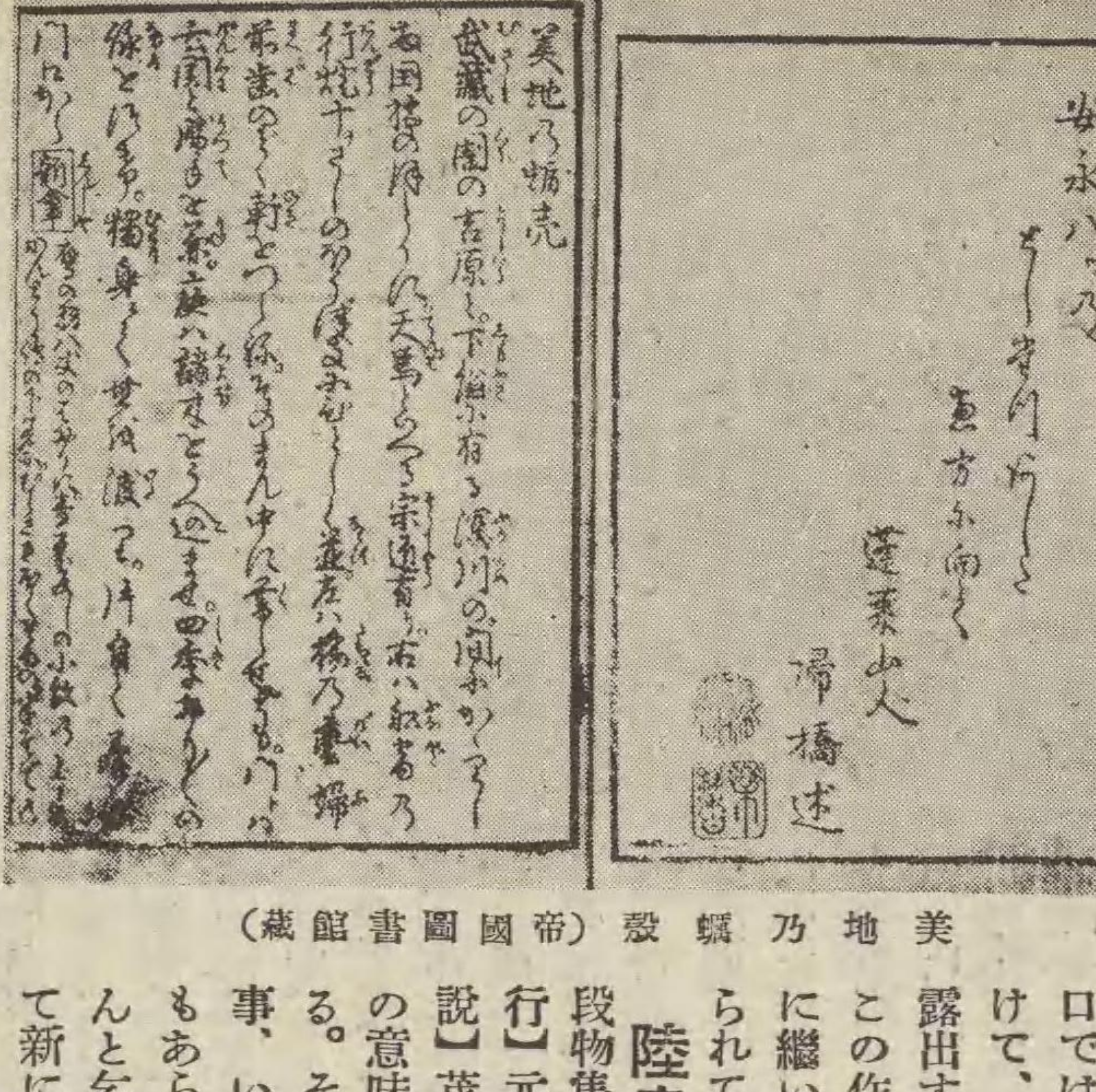
美地乃蠣殻（みちのかきがら）　洒落本　一册

【作者】蓬萊山人歸橋【名稱】序に「此册子を見て後は、ほれられもせずふられもせず、しやれて踏まるる美地の蠣殻」とある意味に依り、同時に路地に蠣殻の敷いてある深川の特徴を採つて、深川を描く意を含めたのである。【刊行】安永八年【諸本】徳川文藝類聚第五・洒落本代表作集（近代日本文學大系）所收。【題材】洒落本に始めて深川を描いた「辰巳之園」（別項）に刺戟されて綴つたのである。

【梗概】兩國橋邊に、天馬と云ふ俳諧の宗匠が住んでゐた。その家に通人新傘・祝鶴・琴孝の三人が偶然に落ち合つて、四人揃つて深川へ出かけることになる。船宿二見屋から舟に乘り、永代橋火の見下から横川に入つて油堀に來り、船頭の案內で裏櫓の上田屋に上つた。女の素振が惡いと舌戰する琴孝、見事に振られる祝鶴、色氣より酒で泥醉する天馬、しんみりした幕の新傘等さまぐ＼で、やがて祝鶴に促され、皆々歸り支度して店を出る。

【構想】洒落本初期の傾向を代表せる作品で、深川の情調よりむしろ客と遊女の五分の隙もない對話、通話に興味をもつた描寫である。

而して通人ぶる客の冷遇される趣や、口では淡泊らしく、色男らしく見せかけて、いざとなると野暮極まる醜態を露出するをかしみなどが描いてある。この作は洒落本中、「辰巳之園」（別項）に繼いで、深川を描寫せる代表作と見られてゐる。　〔山崎〕



美地乃蠣殻（帝國圖書館藏）

陸奥杣谺（みちのくそまやまひこ）　淨瑠璃段物集　一册【編者】陸奥茂太夫【刊行】元文二年八月、山本九兵衞板【解說】茂太夫が筑後掾の二十五回忌追善の意味で刊行した寄せ本の段物集である。その序文に、「予護（みだり）に此集を撰する事、いまだ必しも傍人の毀りなきにしもあらず然ども門人稽古のために便（たより）せんと乞ふ事頻りなれば止（やむ）ことを得ずして新に曲節の祕密を加へて卷すでに成りぬ」とある。次に「淨瑠璃傳授祕事」と題して初段・二段目・三段目・四段目・五段目について語り方の心得を說いてゐるが、それは「竹本祕傳丸」（別項）に見えるそれと殆ど同樣である。次に陸奥茂太夫門弟として安治川九兵衞事佐太夫以下百九十四人の名を列ねてあるが、その國所は京攝のみならず、大和・河內・伊勢・武藏・備前・備中・備後・播磨・豐前・筑前・肥前・淡路・伊豫・加賀・長門・出雲・安藝等に及んでゐるが、多少宣傳的の意味があらうと思はれる。陸奥太夫は、「竹本祕傳丸」の筑後掾門弟の條に、「ざこばみちのく茂太夫九兵衞」として四人目に出てゐる。目錄を擧げる。

一、筑後掾廿五回忌追善	音曲倭西湖
一、梅屋澁浮名色揚	下の巻
一、元祿曾我太平劒	髮すきの段
一、源氏十二段	長生殿四季
一、同四段目	淨るり御前道行
一、せみ丸	あふさか山道行
一、百合若大臣野守鏡	宮島八景
一、百日曾我	哥仙
一、金剛山合戰	屛風八景
一、大原問答	九品の淨土
一、賴義北國落	懸物ぞろへ
一、賴光跡目論	鹽がまの段
一、三浦北條軍法論（くらべ）	七夕まつり
一、金平法門論（あらそひ）	義綱月見
一、富士牧狩	時宗三部經
一、神武天皇	五天ぢく
一、曾我五人兄弟	かたみおくり
一、法隆寺開帳	あやひめ道行
一、自然居士	新（にひ）のまへ道行
一、本海道虎石	大磯のとら道行
一、一心五戒魂	かほるひめ道行
一、主馬判官盛久	馬子うた
一、雁金文七五人男	中の巻
一、業平一代記	小野の小町道行
一、同	卒都婆小町
一、赤松軍功記	卿の宮道行
一、富貴曾我	幾世まんざい
一、祝言	皇帝
一、祝言	老松

最初の音曲倭西湖四丁と最後の祝言一丁を除くの外は、すべて丸本の拔刷りの寄せ集めであつて、中には文句の中途で終つた不體裁のものもある。　〔藤井〕

陸奥話記（みちのくはなし）「陸奥話記（むつわき）」を見よ。

道廼佐喜草（みちのさきくさ）　國學書　一巻

【著者】本居春庭【成立】刊本には、文政二年治部卿藤原貞直の序がある。著者失明後の著であるから、恐らく本書も妹美濃子に口授して成つたものであらう。【諸本】國民道德叢書第一編（有馬祐政・黒川眞道共編）所收。【內容】皇國の大道は正直を以て根本とするといふ立場から皇道と儒道とを比較し、そこに正・邪・清・濁の相違あることを主張したものである。先づこれを文學の上に見るに、須佐之男命の「やくも立つ」の歌の如きは明かに戀歌であるが、我が國の風として、眞心を僞り矯めることなく、率直に詠み現はしてゐる。然るに支那の詩に於ては、上代以外には、婦人に擬して作つた閨怨の如きものはあつても、男の戀を歌つた詩は、「毛詩」を初め「三體詩」「唐詩選」等にも見當らぬ。實際には、たはれたごとの甚だしい國でありながら、男には戀がないかのやうに見えるのは僞りであつて、人情の自然に反してゐる。我が國の歌はこれと異なり、名利のためでも諷刺のためでもなく、ただ心からの感動の表現であるから、一見はかない戲れのやうに見えても、そこに自らまことが現はれ、上下和ぎ合ふ道となり、修身・治國の根本となるものであるとしてゐる。また國體・國俗等の上から考へても、堯が舜に位を讓つたことを彼の國人は美事として推稱するが、これはさういふ人々に野心があるからで、

結局帝位の輕いことを示すに過ぎず、堯・舜等は、位を禪り民を惠むといふ美名の下に、實は後世放伐の端を開き、禍根を萬代に遺したものと言はねばならぬ。のみならず、舜・禹等の受禪も、實際に於ては、簒奪の疑ひがあり得るものである。然るに我が國は、大御神の御生國であり、永遠にその御子孫が神勅によつて治め給ふ國であつて、民は大御神の御心を心とし、上下の分明かに、而もよく和合して泰平を樂しんでゐるとして、樣々の方面から皇國の道の優れて正しい所以を論證しようとしてゐる。【批評】大體に於て宣長の古道説の祖述であるが、文學を中心として古道を説く所に春庭らしい特色がある。〔西尾〕

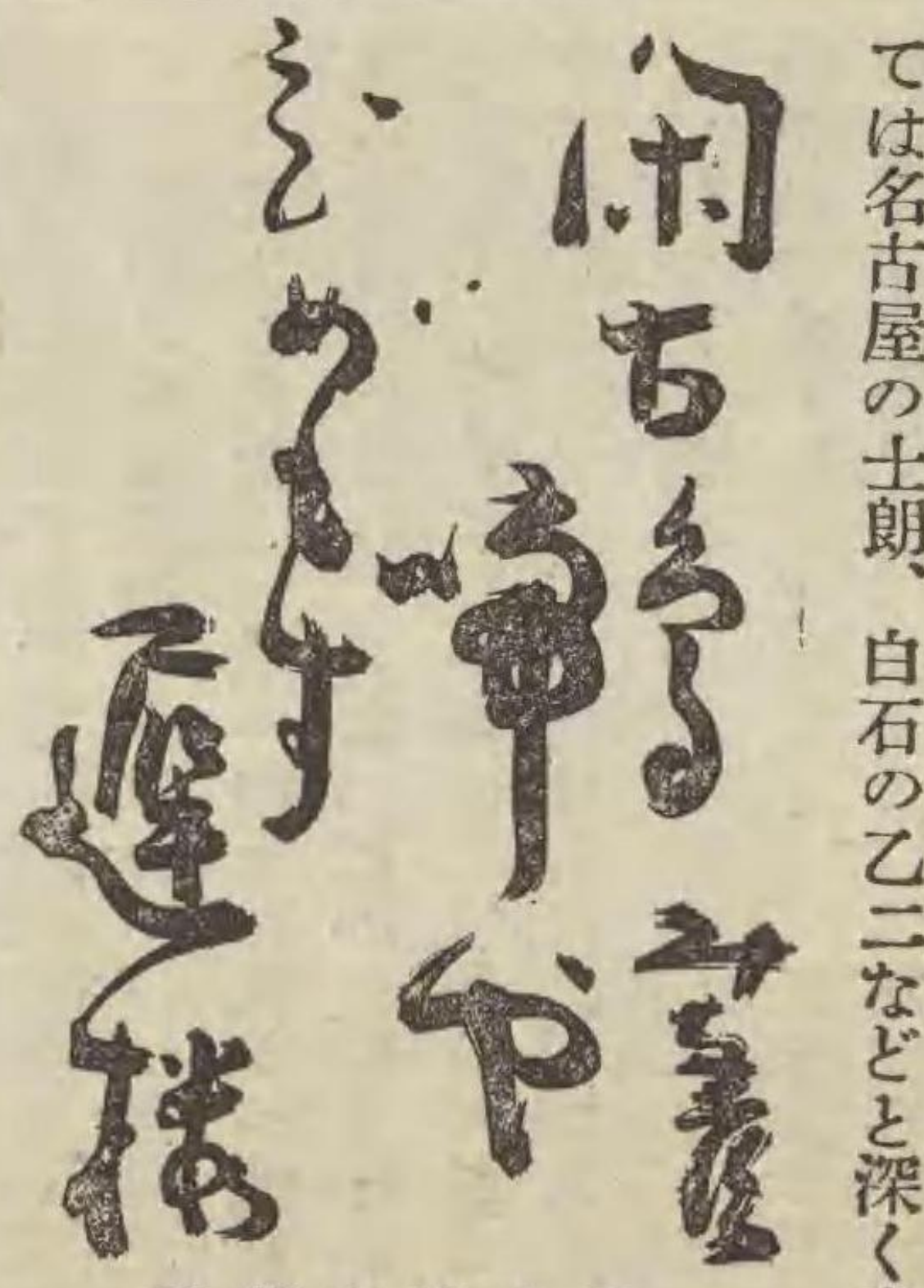
通憲 みちのり　漢學者【姓】藤原、もと高階經俊の養子となつたので、高階氏を稱したが、後本姓に復したらしい。【法號】圓空、後に信西と改めた。【生歿】嘉承元年に生れ、平治元年（一一五九）十二月十三日歿した。享年五十四（「本朝世紀」に天養元年の通憲出家の條に三十九歲とあるによつて逆算）。【家系】季綱（別項）の孫である。

季綱—實兼—通憲—┬俊憲
　　　　　　　　├貞憲
　　　　　　　　└澄憲—聖覺

【閲歷】鳥羽・崇德・近衞の三朝に歷仕して正五位下に至り、日向守に任ぜられた。「平治物語」に據れば、自ら劍難の相を知り、又相人もその事を告げ、僧となれば免れると敎へた。通憲はこの言を信じて僧とならうと決心したが、日向入道と稱せられるのを殘念に思ひ、白河法皇に少納言たる事を頻りに願つたのであるが、前中納言藤原顯頼が、「通憲は天下の才子であるから、その要請を輕々しく許すべきではない」と法皇に奏したので、遂に許されなかつた。なほ請うて已まないので、近衞帝の天養元年に少納言に任ぜられた。その年七月二十二日、三十九歲で出家した。「台記」には「余深痛之」と記し、「本朝世紀」には、少納言を拜して後に高階を改めて本姓に復し、氏神の祟があつて非業の最後を遂げたものの如く註してゐる。後白河帝の保元元年（五十一歲）七月の亂後、新院の味方した源爲義や平忠正等十八人が出でて降を乞うたが、信西の論が强硬で、帝も遂に悉く斬罪に處せられた（保元物語卷下）。又當時大內裏が破損して朝儀の廢せられたものもあつたが、信西の計畫によつて一兩年の間に舊に復した事もある。二條帝の代には特に權を擅にし、藤原信頼が近衞大將とならうとした事を阻み、後白河上皇をして遂にそれを止めしめた。上皇は喜び給はなかつたので、信西は唐の安祿山の謀叛の事實三卷を圖に描いて獻上した。卽ち信頼を安祿山に比したのである。なほ初め源義朝は、その女を是憲に嫁せしめようと請うたが、父信西はそれを辭し、間もなく平淸盛の女を成範の妻とした。その邊に信西の才餘つて德の足らない點が察知せられる。平治元年の亂の前に、天變を見て逃れ、石堂山に穴を掘つて埋まり、竹筒を以て呼吸してゐたが發見せられた。但し殆ど窒息しかけてゐたが、なほ氣息が絕えなかつたので斬首せられた。「愚管抄」には自ら胸を刺して死んだと記してゐるが、恐らく眞に近いものであらう。【著作】本朝世紀三十卷（國史大系第八卷所收）。○法曹類林三百六十卷（仁和寺書目には二百三十卷とある。類從第四六四、續類從二四六に載つてゐるものだけが傳はつてゐる。これは法曹の勘文に通鑑の今案を加へたものである）○信西入道書目（別項）○大悲山寺緣起一卷（大日本佛敎全書所收）○筆海要津（仁和寺の海惠僧都が祖父信西の遺作を集めた願文集。續々類從一五所收）○信西古樂圖（古樂の圖を集めたもので、日本古典全集所收）。この外「日本紀註」二卷、「法曹勘狀」等は今日傳はらない。又「本朝無題詩」には信西の詩十八首を載せてゐる。

【人物】出家するに日向入道の名を忌んで、少納言を望んだり、その朝妻子が、後白河帝の乳母である事によつて特に信任せられたり、或は爲義・忠正を斬罪に處分せしめる點等、どこか性格に缺陷のあることを思はしめ、同時に拔け目のない人間のやうに感ぜしめられる。嘗て出家しようとした時、頼長に「高才絕代なれども世に知る者なし」と褒められ、「吾れ薄命の爲に一の顯職にも就かず。故に今遁世しようとする。才ある者が却つて不幸であれば學問も亦廢頽するであらう。願くば顧みよ」と泣いて訴へた事もある。さればこそ「台記」には信西の出家に對して「余深痛之」と記したのであらうが、その頼長を安祿山に比した如きは、德ある人の行爲とは見られない。併し甚だ努力家で、鳥羽法皇が熊野へ御幸せられた時、宋の僧淡海のために通譯をして人々を驚かせた事は有名であつた。要するに博覽宏才、多能で典故を諳んじ、又人相や天文や佛敎にも通じ、歌舞をもよくした人であつた。【參考】愚管抄○保元物語○平治物語○本朝世紀○台記○古事談○續古事談〔山岸〕

道彦 みちひこ　俳人【姓名】鈴木由之【別號】金令舍・十時庵・秋香庵【生歿】寶曆七年生れ、文政二年七月六日歿す。享年六十三。【法名】智秀道彦居士【墓所】江戶淺草山之宿敎善院に葬つたが、明治の末頃墓地整理の際、巢鴨庚申塚へ移した。【閲歷】道彦は仙臺の人で、江戶に住んで醫を業としてゐたが、いつ仙臺から出たか、誰に醫術を學んだか、いつ頃から白雄に就いたかの諸點は凡て判明しない。白雄八弟子（別項）の一人として當時の俳壇に勢圏を張つた。同門の長翠がその師の春秋庵を嗣いだが、間もなくこれを葛三に讓り、江戶を去つて武州本庄に小蓑庵を結んだ經緯に就いては、暗に道彦の策動によるとする說がある。道彦は江戶の俳人中では最も成美と巢兆とに親しみ、地方人としては名古屋の士朗、白石の乙二などと深く交つてゐた。享和元年士朗が江戶に下つた時、所謂屐を逆にして迎へるといふ欵待をした事は「鶴芝」によつて明かである。同三年乙二が來た時も亦厚遇して歸した。その「無孔笛」附錄に於ける諸俳人の短評中、師白雄を評して「白雄房は國を威すに兵革をそなへて、かへつて人を和するの玄德なし」と記したので、非難されたのであつたが、これを長翠の春秋庵嗣號問題に併せ考へる時は、師弟間に何等かの事故のあつた暗示を受けるのである。とまれ道彦はその縱橫の才を揮つて俳壇の一勢力となり、寛政三大家（別項）の一に算へられるに至つたのである。その妻も亦俳諧を善くし、道彦歿後剃髮して應々尼と稱し、金令舍の別號



鈴木道彦筆蹟

を用ひて點者生活に入つたのであるが、その夫に後るゝこと二十四年、卽ち天保十三年三月二十七日に歿した。享年は詳かでない。【編著】そゞろごと○くろねぎ○鶴芝○馬の上（道彦七部集參照）○長持男（享和二年刊）○濫よつ手（別項）○蔦本集二册（道彦自選句集、文化年中刊）○續蔦本集二册　門人氷狐編（天保九年刊、道彦句集續篇）〔贄川〕

通光 みちみつ　歌人【姓】源氏【通稱】後久我太政大臣（勅撰集も「續後撰和歌集」以下の作者名は盡くこれによつてゐる）。【生歿】文治三年に生れ、寶治二年（一九〇八）正月十八日歿す。享年六十二。【學統】母方の祖父範兼（別項）は、

具平親王—顯房（源）—雅實—雅定—┐
雅通—通親—┬通具
　　　　　　└通有（六條）—有房

てゐる。

あけぬとて野べより山に入る鹿の跡ふきおくる萩の下風（秋上）

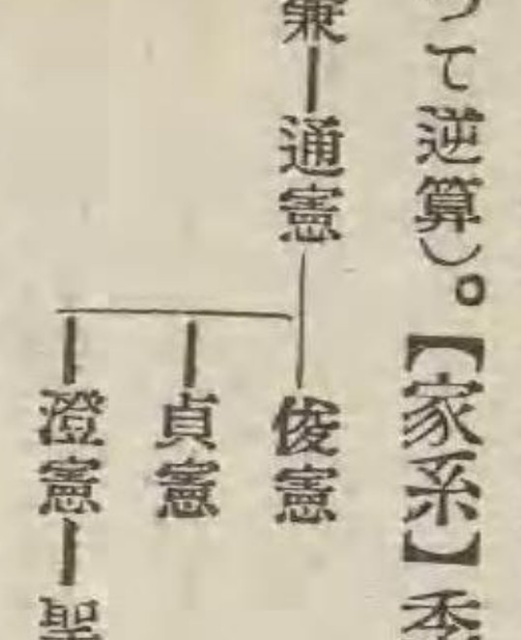
入日さす麓の尾花打ちなびきたが秋風に鶉なくらむ

眺めわびそれともなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空

これ等「新古今集」に選入された彼の歌調に溢

て論明した手法を學び、時代の特色ある歌人二十人を選び、品評した上、その代表作を掲げたものである。細緻ではないが特色を簡潔に把握し得てゐる）○續歌仙落書（類從第一九三所收、東山の一隱者が住吉神社に詣で、宿の主に送られた書であると云ふやうな序話で出來てゐるが、全く前書の續篇で、通光が當代の歌人二十五人計一百餘首の例歌をあげて、同筆法で批評を下したものである。

本朝世紀」に天養元年の通憲出家の條に三十九歳とあるによつて逆算)。【家系】季綱(別項)の孫で



ある。【閲歴】鳥羽・崇德・近衞の三朝に歴仕して正五位下に至り、日向守に任ぜられた。「平治物語」に據れば、自ら劍難の相を知り、又相人もその事を告げ、僧となれば免れると敎へた。通憲はこの言を信じて僧とならうと決心したが、日向入道と稱せられるのを殘念に思ひ、白河法皇に少納言たる事を頻りに願つたのであるが、前中納言藤原顯賴が、「通憲は天下の才子であるから、その要請を輕々しく許すべきではない」と法皇に奏したので、遂に許

の女を是憲に嫁せしめようと請うたが、父信西はそれを辭し、間もなく平淸盛の女を成範の妻とした。その邊に信西の才餘つて德の足らない點が察知せられる。平治元年の亂の前に、天變を見て逃れ、石堂山に穴を掘つて埋まり、竹筒を以て呼吸してゐたが發見せられた。但し殆ど窒息しかけてゐたが、なほ氣息が絶えなかつたので斬首せられた。「愚管抄」には自ら胸を刺して死んだと記してゐるが、恐らく眞に近いものであらう。

【著作】本朝世紀三十卷（國史大系第八卷所收）。○法曹類林三百六十卷（仁和寺書目には二百三十卷とある。類從第四六四、續類從二四六に載つてゐるものだけが傳はつてゐる。これは法曹の勘文に通憲の今案を加へたものである）○信西入道書目（別

には信西の出家に對して「余深痛之」と記したのであらうが、その賴長を安祿山に比した如きは、德ある人の行爲とは見られない。併し甚だ努力家で、鳥羽法皇が熊野へ御幸せられた時、宋の僧淡海のために通譯をして人々を驚かせた事は有名であつた。要するに博覽宏才、多能で典故を諳んじ、又人相や天文や佛敎にも通じ、歌舞をもよくした人であつた。

【參考】愚管抄○保元物語○平治物語○本朝世紀○台記○古事談○續古事談　〔山岸〕

道彦（みちひこ）　俳人【姓名】鈴木由之【別號】金令舍・十時庵・秋香庵【生歿】寶曆七年生れ、文政二年七月六日歿す。享年六十三。【法名】智秀道彦居士【墓所】江戸淺草山之宿敎善院に葬つたが、明治の末頃墓地整理の際、巣鴨

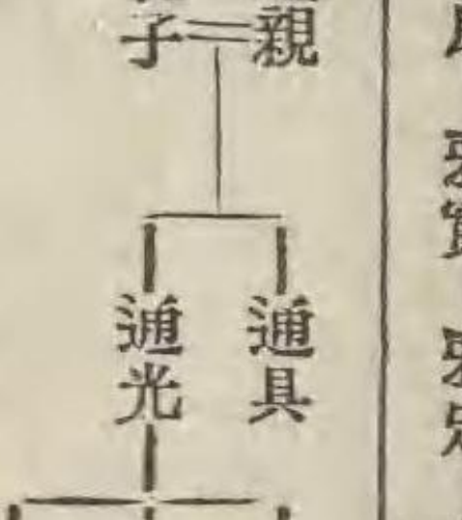
つてゐた。享和元年士朗が江戸に下つた時、所謂屐を逆にして迎へるといふ歡待をした事は「鶴芝」によつて明かである。同三年乙二が來た時も亦厚遇して歸した。その「無孔笛」附錄に於ける諸俳人の短評中、師白雄を評して「白雄房は國を威すに兵革をそなへて、かへつて人を和するの玄德なし」と記したので、非難されたのであつたが、これを長翠の春秋庵嗣號問題に併せ考へる時は、師弟間に何等かの事故のあつた暗示を受けるのである。とまれ道彦はその縱橫の才を揮つて俳壇の一勢力となり、寛政三大家（別項）の一に算へられるに至つたのである。その妻も亦俳諧を善くし、道彦歿後剃髮して應々尼と稱し、金令舍の別號

を用ひて點者生活に入つたのであるが、その夫に後るゝこと二十四年、即ち天保十三年三月二十七日に歿した。享年は詳かでない。

【編著】そゞろごと○くろねぎ○鶴芝○馬の上（道彦七部集參照）○長持男（享和二年刊）○澁よつ手（別項）○蔦本集二册（道彦自選句集、文化年中刊）○續蔦本集二册　門人氷狐編（天保九年刊、道彦句集續篇）　〔贇川〕

道彦七部集（みちひこしちぶしふ）　俳諧書　小本二册【編者】未詳【刊行】未詳【解說】道彦（別項）の編著又は關係ある小著七種を纂輯刊行したもので、恐らくは道彦歿後に於て、その盛名を利用せんとする書肆の仕事であらうことは、その書目を强ひて七の數に合はさんとして、他人の編著まで編入したのによつてもうなづかるゝのである。その書目は次の七種である。○鳶眼集（別項）○そゞろごと（寛政六年刊、道彦が巣兆・宗讃と共に武藏野旅行をした紀行である）○澁よつ手（別項）○鶴芝（別項）○馬の上（享和二年刊、足利學校一見の紀行である）○くろねぎ（寛政九年長翠のために道彦・双烏・巣兆等が編したもので、連句發句の集である。道彦の記した小みの庵記が收錄されてゐる。本七部集中のものは、省略や編次の錯誤がある）○畑芹附錄（乙二が作句法に就いて、「趣向のぬしの句」「古き趣向ながら五七五の内にて、言葉のぬしになりて我物になりたる句」などの類を分ち、古人の作句を引例して啓蒙的解說を下したもので、道彦の讃美の一文がその末に附してある。本七部集中のものは、その一文を削り去つて、その代りに「右乙二「道彦論」」と記してある。これは甚だ人を迷はすもので、これだけを見ると、この畑芹附錄の作句法は、乙二と道彦とが談論討議の末に成つたものと解される。又これを道彦七部集に編入することも適當でない）。　〔贇川〕

通光（みちみつ）　歌人【姓】源氏【通稱】後久我太政大臣（勅撰集も「續後撰和歌集」以下の作者名は盡くこれによつてゐる）。【生歿】文治三年に生れ、寶治二年（一九〇八）正月十八日歿す。享年六十二。【學統】母方の祖父範兼（別項）は、



「千載集」以下の名ある勅撰集歌人で、「和歌童蒙抄」「後六々撰」の編者としても知られ、また學者である。父系も代々の文人で、久我太政大臣の雅實、中院右大臣の雅定、久我内大臣の雅通、土御門内大臣の通親がそれ〴〵「金葉集」乃至「千載集」以下の歌人で、歌舞音曲の道にも長けてゐた。通光の兄通具は、特に「新古今集」歌人の一人として令名を遺してゐる。

【閲歴】名家の出のため、榮達は三男ながら著しいものがあつた。二歲の正月、早くも敍爵（式子内親王賜ふ）、建久元年七月（四歲）任加賀守、同三年正月從五位上、同五年正月任侍從、同十年正月（十三歲）正五位下、同年九月任右少將、その後、官は兼丹波介（正治二年）兼春宮權亮（同年）、權中將（同年）、右中將（建仁二年）、兼尾張權守（同年）、左中將（元久元年）、權中納言（同年）、左衞門督（元久二年）、中納言（同年）、權大納言（承元元年）と云ふやうに順調に昇進し、位もこれに伴ひ、十九歲にして既に正二位であつた。但しその十四歲と十六歲の時に、二年を隔てて母と父を次々に喪つた。而も時代は歌壇高潮の盛期に際し、かの「千五百番歌合」の成つたのがその十五歲の年、「新古今集」編纂の大略成つたのが、十七歲の四月に相當してゐる。

あけぬとて野べより山に入る鹿の跡ふきおくる荻の下風（秋上）

入日さす麓の尾花打ちなびきたが秋風に鶉なくらむ

眺めわびそれともなしに物ぞ思ふ雲のはたての夕暮の空

これ等「新古今集」に選入された彼の歌調に溢れる一味哀切の情は、實に新古今調の一色彩としての哀感美が影響したものとのみは考へられない。なほ承元二年皇后宮大夫を兼ねたが、翌年それを辭退した（時に二十三歲）。三十一歲の年右大將を兼ね、更に右馬寮御監に昇り、翌年には大納言、翌々年には内大臣にまで昇進したが、承久三年七月（三十五歲）、内大臣を辭してより、六十歲、從一位太政大臣の極官を與へられるまで二十五ケ年間は何等著しい事項も生じてゐない。相國の地位にあること一年有餘、急病で薨去した。「八幡山さかゆく嶺はこえはてて君をぞ祈る身の嬉しさに」と云ふ作が、當年の歌合の中に遺されてゐるのを見ると（「玉葉集」神祇）、この一首が絶筆となつたものかも知れない。世人は曾祖父雅實が久我太政大臣と稱されたに對し、後久我太政大臣と通稱した。

【著作】〔和歌〕勅撰集に入つた歌は、新古今集十四首、新勅撰集四首、續後撰集四首、續古今集二首、續拾遺集四首、後後撰集四首、玉葉集一首、續千載集三首、續後拾遺集一首、風雅集一首、新千載集一首、新拾遺集四首、新後拾遺集一首、新續古今集六首。〔著書〕歌仙落書一卷（「通光風體抄」とも。類從第二九三卷及び輪池叢書二十九卷所收、俊成卿亭で書かれたもので（序詞）、「古今集」序文の六歌仙の歌風を諷諭によつて說明した手法を學び、時代の特色ある歌人二十人を選び、品評した上、その代表作を揭げたものである。細緻ではないが特色を簡潔に把握し得てゐる）○續歌仙落書（類從第二九三所收、東山の一隱者が住吉神社に詣で、宿の主に送られた書であると云ふやうな序話で出來てゐるが、全く前書の續篇で、通光が當代の歌人二十五人計一百餘首の例歌をあげて、同筆法で批評を下したものである）。

【歌風】早熟の歌人ではあつたが、その作風は特色に乏しい。大體敍景歌に於て優れ、句格の引きしまつてゐる點に妙味がある。

淡路島しるしの煙見せわびて霞をいとふ春の舟びと（新勅撰集）

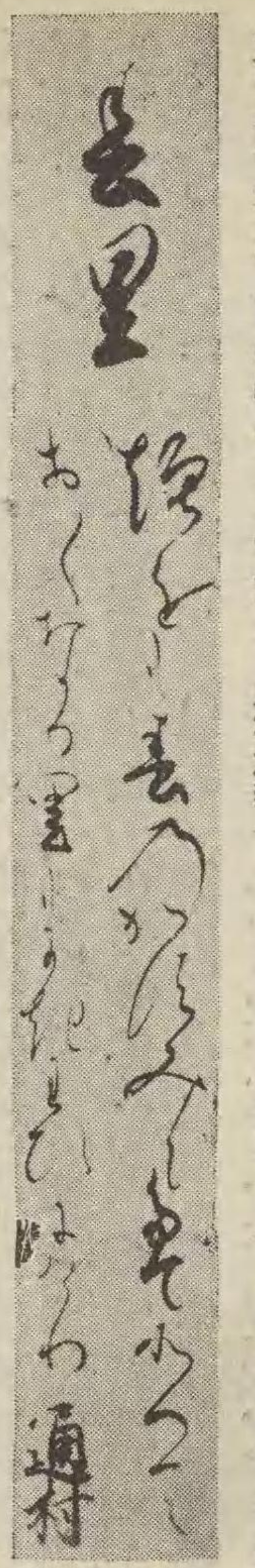
立ちこめてそことも知らぬ山本の霧の上よりあくるしのゝめ（續後撰集）

霰ふる音ぞ淋しき御狩する交野のみのゝならの葉がしは（新後撰集）

霞・霧・霰等の素材を、いかにも新古今調的ではあるが、ともかく上乘に生かし得てゐる作である。「歌仙落書」の主人公にも、歌道に對する執念さを語らしてゐるが、それはその儘に通光の主觀であつたのであらう。但し殊更の歌才に惠まれなかつた彼は、俊成・定家・家隆と云ふ如き天才的歌人の中に於て、輪廓が甚だ朦朧としてゐる。

【參考】公卿補任○尊卑分脈　〔齋藤（淸）〕

通村（みちむら）　歌人【姓名】姓は中院。本姓源氏。幼名通貫【生歿】天正十六年京師に生れ、承應二年（一三一三）二月二十九日歿す。享年六十六（天正十五年生誕說をとれば六十七歲）。【諡號】後十輪院【家系】右大臣師房の六世源通親の五男通方を中院家の祖とする。大臣家の一。【學統】堂上歌學の家で、父通勝は智仁親王・三條西實條・烏丸光廣等と共に、細川幽齋（別項）に就いて歌道を修めた人。隨つて



通村筆蹟

通村も、後水尾院その他三條西家や烏丸家の人々と歌道を互に錬磨するところ多かつた。その孫通茂の如きは、父通純の指導を受けると共に、後水尾院の御指導をもうけてゐる。【閲歷】慶長五年、十三歳にして從五位下侍從となり、累進して元和六年（三十三歳）には從二位權中納言の榮職につき、寛永元年には武家傳奏となつた。特に時の後水尾天皇の殊遇を蒙り、皇室の藩屏となり、勅命を受けて江戸に下つたこと、元和八年・寛永四年等幾度かに及んでゐると云ふやうに、公武の間を取持つた。次いで同六年權大納言になつたが、後水尾天皇は德川和子の出なる皇女に對する武家の偏遇甚しきを怒り給ひ、隱約の間に御讓位があつたのもその年のことである。將軍家光は、この擧に通村の與かることを探知し、翌年奏して武家傳奏を免じたのみならず、程なく江戸に下して南光坊の中に幽居せしめてしまつた。後水尾院は御製を賜ひ以て憂悶を慰め給ふところもあつたが、南光坊の僧正天海（崇傳とも）の哀訴により、家光の許可を受けて寛永十二年初めて歸洛することを得た。幽居中、通村の詠んだ「行方に身をばさそはで夜な夜なの袖の露とふ武藏野の月」と云ふ歌が、將軍の心を動かしたと云ふ逸話が喧傳されてゐる。その後、正保四年に至り一時内大臣に任ぜられたこともあつたが、三四ケ月で辭官した。通村は元來文事に長じ、その書法は世尊寺流を傳へ、畫も素人の域を越えてゐた。幽齋の系統を傳へてゐるやうに、古文學に通じ、早く元和八年に、女院に「源氏物語」の講義をしてゐる。承應二年、急病で薨去した。「殘るとてたのむ日數も有明の影のうちなる年のくれかな」と云ふ歌が辭世の作になつた由、家集に記されてゐる。【著作】後十輪院内大臣詠草一卷（寫。寛文六年門人の觀阿居士以繁が編述したもの。內閣文庫本には、表紙裏に、春部二百十五首、夏部百十一首、秋部百九十二首、冬部九十三首、戀部百八十二首、雜部二百三十六首、計千二十九首なることが註され、三條西實條が合點したものであることが書かれてゐる。本書には附錄として寛永詠百首和歌がある。續々群書類從卷十四所收）〇後十輪院通村家集〇後十輪院內府集（前者は寫本六卷、內閣文庫に存し、後者は寫本三卷、圖書寮に存するけれど、內容同一の選集である。部立も四季・戀・雜の六部である。詠出の年月などの註加といひ、體裁殆ど詠草に類してゐるが、系統は全然別である）〇後十輪院內府五十番（夏日同詠五十番和歌で寫本一卷、圖書寮藏）。【作風】實條が合點してゐる四十歳以後の佳作を例示して見る。

行水もこほりにたえし跡とめてふるき道しる春風ぞふく（春水解氷）
もえ出でて霞むみどりの玉津島入江にさむき蘆の葉もなし（江上霞）
春の夜のみじかき軒端明けそめて梅が香白き園の朝風（簷梅）

題材の捉へ方の鮮かさが、如何にも時流の間に一頭地を抜いてゐる。江戸幽居中、家光から古今傳授を强ひられながら、斷然辭退したと云ふ逸話も名高いが、後鳥羽院四百年遠忌に詠出した「思ひやる波路かなしき隱岐の海の昔も遠くかすむ月影」の作にも、彼獨自の氣概が見えてゐる。【史的地位】影響の著しいものは見當らぬ。孫の通茂の如きも二條派的歌人として名高いが、保守的であると共に、性格の嚴肅さが、一層想の自由を萎縮せしめてゐるやうである。【參考】野史〇松屋筆記〇窓のすさみ追加〇常山紀談　〔齋藤（淸）〕

通盛（みちもり）「平家物の謠曲」を見よ。

道行（みちゆき）【名義】「萬葉集」に、「わかければ道行しらじ」の歌があり、「道行」を冠した熟語も「萬葉集」以下の歌文に見えて來る。名稱としては伎樂の「道行（みちゆき）」に出發して演出上に用ひられ、延いて國文學に於ける特殊な展開を遂げた表現形式を然（し）か呼ぶに至つた。表現の內容を主として考へる場合は「道行」、表現の形式を主として呼ぶ場合は「道行文」と云ふ。【沿革】〔前期〕「古事記」「日本書紀」の歌謠より「萬葉集」に至るもの、主人公或は自己の經過する土地を謠ひ續けて道の進行を表はし、それが一つの漸層的な效果を生じ、强調して終る表現の中心をそれだけ强く印象づける歌詞で、土地の名には枕詞の外、或る形容語句が添へられたりする。例、

石の上（いそのかみ）　布留を過ぎて　薦枕　高橋過ぎ　物多（さは）に　大宅（おほやけ）過ぎ　春日（はるひ）の春日を過ぎ　妻籠る　小佐保を過ぎ　玉笥には　飯さへ盛り　玉盌（もひ）に　水さへ盛り　泣き沾（そぼ）ち行くも　影媛あはれ（日本書紀、武烈）

〔本期〕道行の源流は、今樣歌謠に求むべきであるが、心理的には、平安時代中期以後、急速に交通が發展した結果として地理的な興味が求められた事に原因すると考へられる。道行は、「梁塵祕抄」等の今樣（別項）歌謠に於て、今樣歌謠に卓越する物盡し（別項）として出發し、參詣巡禮熱によつて裏附けられ、單なる或る種類の地名の列擧になる物盡しから展開して「何れか……へ參る道」「……へ參る道」と云ふ句を冠し、經過する地名を列擧する形で成立してゐる。例、

何れか淸水へ參る道、京（極く——日本歌謠集成）だりに五條まで、石橋よ、東の橋詰四つ棟六波羅堂、愛宕（おたぎ）寺大佛（おほぼとけ）深井とか、それを打過ぎて八阪寺、一（ひと）段上（のぼ）りて見下せば、主典大夫が仁王堂、塔の下（あと）天降り末社（すゑやしろ）、南を打見れば、手水（てうづ）棚手水とか、お前に參りて恭敬禮拜（くぎやうらいはい）して見下せば、此の瀧は、樣かる瀧の興がる瀧の水。（梁塵祕抄、四句神歌・靈驗所歌）

かく時間的な進行を多少とも認められる所に道行の成立がある譯で、鎌倉時代の宴曲（別項）がこの道行を物盡し參詣物等と共に今樣歌謠から攝取してゐる。宴曲はその形式が長大となつたので、道行の展開は「海道」上・中・下三篇（宴曲集）の獨立となり、「熊野參詣」（宴曲抄）などの成立となる。「海道」は一面に於て紀行に見られる當時の海道下り（後出）の潮流を追つてをり、道行としては地名を追ひつつ、不自然ながら辿り行く道の光景や旅情などを織り込み、また接續にも懸詞などの技巧が見られる。序に續く一部を示せば、

……馴來（こ）し都を顧て、逢坂越えて打出の、濱より遠を見渡せば、鹽ならぬに海に欹てる、石山詣での昔まで、其面影の心地して、山田にかゝる湖（にほ）の渡（わたり）、矢橋（やばせ）を急ぐ渡守、長良の山を外（よそ）に見て、淡津の原を後にし、勢多の長橋野路の末も、時雨にいたく守山の、篠の露ちる篠原の、小竹（さゝ）分くる袖もしをれつゝ、日も夕暮にや成りぬらむ、……（海道、上）

道行文の發達は鎌倉時代に入つてからで、主流は東海道を下る海道下りとして表はされ、

年奏して武家傳奏を免じたのみならず、程なく江戸に下して南光坊の中に幽居せしめてしまつた。後水尾院は御製を賜ひ以て憂悶を慰め給ふところもあつたが、南光坊の僧正天海（崇傳とも）の哀訴により、家光の許可を受けて寛永十二年初めて歸洛することを得た。幽居中、通村の詠んだ「行方に身をばさそはで夜な夜なの袖の露とふ武藏野の月」と云ふ歌が、將軍の心を動かしたと云ふ逸話が喧傳されてゐる。その後、正保四年に至り一時内大臣に任ぜられたこともあつたが、三四ケ月で辭官した。通村は元來文事に長じ、その書法は世尊寺流を傳へ、畫も素人の域を越えてゐた。幽齋の系統を傳へてゐるやうに、古文學に通じ、早

詠草に類してゐるが、系統は全然別である）○後十輪院内府五十番（夏日同詠五十番和歌で寫本一卷、圖書寮藏）。

【作風】實條が合點してゐる四十歳以後の佳作を例示して見る。

行水もこほりにたえし跡とめてふるき道しる春風ぞふく（春水解氷）
もえ出でて霞むみどりの玉津島入江にさむき蘆の葉もなし（江上霞）
春の夜のみじかき軒端明けそめて梅が香白き園の朝風（簷梅）

題材の捉へ方の鮮かさが、如何にも時流の間に一頭地を拔いてゐる。江戸幽居中、家光から古今傳授を强ひられながら、斷然辭退した

り「萬葉集」に至るもの、主人公或は自己の經過する土地を謠ひ續けて道の進行を表はし、それが一つの漸層的な効果を生じ、强調して終る表現の中心をそれだけ強く印象づける歌詞で、土地の名には枕詞の外、或る形容語句が添へられたりする。例、

石の上　布留を過ぎて　薦枕　高橋過ぎ　物多に
大宅過ぎ　春日の春日を過ぎ　妻籠る　小佐保を
過ぎ　玉笥には　飯さへ盛り　玉盌に　水さへ盛
り　泣き沾ち行くも　影媛あはれ（日本書紀、武烈）

【本期】道行の源流は、今樣歌謠に求むべきであるが、心理的には、平安時代中期以後、急速に交通が發展した結果として地理的な興味が求められた事に原因すると考へられる。道行

などの成立となる。「海道」は一面に於て紀行に見られる當時の海道下り（後出）の潮流を追つてをり、道行としては地名を追ひつつ、不自然ながら辿り行く道の光景や旅情などを織り込み、また接續にも懸詞などの技巧が見られる。序に續く一部を示せば、

……馴來し都を顧て、逢坂越えて打出の、濱より遠を見渡せば、鹽ならぬに海に歃てる、石山詣での昔まで、其面影の心地して、山田にかゝる湖の渡、矢橋を急ぐ渡守、長良の山を外に見て、淡津の原を後にし、勢多の長橋野路の末も、時雨にいたく守山の、篠の露ちる篠原の、小竹分くる袖もしをれつゝ、日も夕暮にや成りぬらむ、……（海道、上）

道行文の發達は鎌倉時代に入つてからで、主流は東海道を下る海道下りとして表はされ、

海道下りの好尚は、紀行文學に於ける數個の作品ともなつてゐる。「平家物語」卷第十「海道下」は海道下りの道行である。宴曲「海道」迄は特定の個人を定立しないが、これは物語として主人公が存在し、その主人公の心情を訴へようがための叙述である。悲哀に包まれた主人公の旅によつて色附けられる情緒を、直接の抒情とする表現をとらないで過ぎる土地土地の光景、懷古に包んで聲調を整へた辭句として纒綿させることにより、却つてその感傷的な氣分を高めようとする狙ひどころを持つ。此處では七五調的な律調となつてゐるけれども、「哀也」の終止の如き自然な地の文としての姿がある。この發達はやがて語り物としての特殊な部分として獨立する契機を既にその胎内に包藏してゐる。なほこの道行の成立には「保元物語」「平治物語」（各別項）よりの影響が考へられ、「源平盛衰記」「平家物語」（各別項）諸本、宴曲間の關係が考へられる。平曲（別項）に出發する道行が定形に到達したのは、「太平記」の時期に於てで、「太平記」に於ては數箇所に見られ、その「俊基朝臣再關東下向事」がやはり海道下りになつてゐる。その序に續く一部を擧げれば、

……憂をば留ぬ相阪の、關の淸水に袖濡て、末は山路を打出の濱、沖を遙に見渡せば、鹽ならぬ海にこがれ行、身を浮舟の浮沈、駒も轟と踏鳴す、勢多の長橋打渡り、行交人に近江路や、世をうねの野に鳴鶴も、子を思かと哀也。時雨もいたく森山の、木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分る道を過行ば、鏡の山は有とても　泪に曇て見え分ず。……

これは「平家物語」の「海道下」に範を仰ぎ、宴曲の「海道」の進行法を學び、この二系列を綜合し、名數の地名が叙景を伴ひ、古歌利用、懸詞等の修辭を用ひて前後に言ひ懸けられて特殊な文體をなし、且つ全體としての進行が示されて居り、その間々に道行の主人公の哀愁の心を語る言葉・叙述、或は懷古・挿話が織り込まれてゐる。かくして感傷の美化を目指す道行文の持つべき形式と要素とを併せてゐる典型的なものとなつてゐる。これ等の道行が後出の多數の合戰軍記物語などによつて摸倣され、これが「太平記」より多くの受容を示す瀧澤馬琴の讀本にまで影響してゐる。

次に劇曲に於ける登場の道行は、伎樂（別項）の道行音聲、道行拍子、舞樂の序に奏せられる道行に出發し、延年（別項）に於て見出される。これが田樂及び猿樂（各別項）の能に攝取され、完成された能樂（別項）に於ては、「道行」（「道行」を缺く時にも同樣の内容を有する歌の部分が存在する）は序段の中心を成し、ワキが目的地に行く經過を表はすことによつて、觀衆をシテ登場の雰圍氣へ導入するために用ひられる。

近江路や、勢田の長橋うち渡り、猶行く末に鏡山、老蘇の森をうち過ぎて、末に伊吹の山風の、不破の關路を過ぎ行き、靑墓の宿に着きにけり（朝長）。

五音に始まつて七五調となり、右に述べた先行の道行文とその表現を等しくし、道行の内容經過が客觀化して謠はれ、演出上の形式を發展確立してゐるが、人物と道行との關係から考へれば、從屬的な地位に立たせられてゐる。これに對して道行を有する狂言では、同樣に序ではあるが既に事件の筋の進行過程にあり、更に道行の白は道行の所作に隨伴した會話や獨白乃至道行所作中に心の中に考慮する道行外の事柄の發表を内容としてゐる。なほ同時代の幸若舞（別項）の詞章の上に道行が有力な地位を占め、その小舞小謠中にも指摘し得る。幸若舞の詞章のやゝ破調的な所や說明語の挿入は見られるが、物語られる人物の道行として所謂道行調の行文をなす事は明かである。曲舞（別項）には、「東國下」「西國下」の道行が重要な曲をなし、前者は主馬判官盛久の東國下り、後者は平家の西國下りで、律調内容共に宴曲風であるが、叙景や旅情に就いての抒情は、七五調的で寧ろ他の道行とその揆を一にする。文學諸形式に通じて見られた海道下りの好尚が、放下の謠ひ物に「面白の海道下りや」（「海道下り」參照）を生み、この小歌（別項）が各方面に用ひられた。

淨瑠璃（別項）の詞章は、その初めは叙事風のもので草子物語と本質的相異がなかつたと思はれ、道行も從來と異なる所がなかつた。然るに古淨瑠璃（別項）の時代に於て、既に道行の部分が音樂的效果を狙ふ部分の一となるに至るが、地點の移行を叙景と糾つて表現しようとする道行に對して、人形の動作に合せ主人公の彽徊する心情を季節的な情景に濾過して物語らうとする轉向せる態度のものを見出し得る。後者に於ては背景及び推移が從的な立場に置き換へられてゐる。この二樣の傾向を或は綜合交錯し、或はその一により他の表現要素を取入れ、自由なる驅使を示し、道行の一形態を完成したものは近松門左衞門であつた。大體の傾向から云へば、時代物に於ては從來の道行の型を多く繼承し、世話物の心中道行等に於ては多く第二の型に出づるものと考へられる。物盡し（別項）を追ふ形式の取入れられたものもある。彼によつて複雜化され、開かせ場とされてゐる道行が、全曲と調和して存在の必然性を有する場合は、世話物の或る種の道行・心中道行の如きであらう。淨瑠璃の世界に世話物を成立せしめた近松は、從來の道行を基として、世話物の精神に立つより高度の道行をも確立した。道行文の頂點は正にこの邊に求めらるべきであらう。

此世の名殘夜も名殘、死に行く身を譬ふれば、仇しが原の道の霜、一足づゝに消て行く、夢の夢こそ哀れなれ、あれ數ふれば曉の、七ツの時が六ツ鳴りて、殘る一ツが今生の、鐘の響きの聞納め、寂滅爲樂と響くなり、鐘ばかりかは草も木も、空も名殘と瞰上れば、雲心なき水の音、北斗は冴て影映る、星の妹脊の天の川、梅田の橋を鵲の、橋と契りて何時までも、我と和女は夫婦星、必ず添ふと縋寄り、二人が中に降る涙、河の水嵩も增るべし、……神や佛にかけ置し、現世の願を今此處で、未來へ囘向し後の世も、猶しも一ッ蓮ぞやと、爪繰る珠數の百八に、涙の玉の數添て、盡せぬ哀れ盡る道、心も空も影暗く、風しん／＼たる曾根崎の、森にぞ辿り着にける。……（曾根崎心中）

これが三絃の伴奏につれて語り出され、勾欄の上の人形の道行の所作ともつれて、この詞章・音樂・舞踊によつて釀し出される夢幻世界に於ける訴へ、それが悲戀心中道行の狙ひ所であつた。歌舞伎の世界にこれを移入し、この男女の駈落心中などの哀艷の場面を特に淨瑠璃を伴つて半舞踊物とするのが「道行所作」である。近世三味線歌謠が、發展して行く道行物を取入れ、淨瑠璃うた物が遊里に歡迎され歌舞伎に參加すると、道行に重要な地位を與へた。これに一中・豐後・常磐津・淸元・新内（各別項）等が活躍し、長短多數の道行の詞章が或は獨立物として或は獨立しない物として次から次へと作られて行つたが、爛熟した道行文は既に成長展開を止めたのである。

【參考】日本歌謠史高野辰之○道行文の發達に就て中島悦次（國文教育大正一五ノ八）○古歌謠

行、寛政十一年四月中村座)〇戀中車初音の旅(通稱忠信、享保三年八月市村座、傳存)〇三人花眞の道行(小女郎新兵衞、文化元年二月中村座)〇願絲緣苧環(通稱お三輪)(別項)。【宮本】妹春鳥名所夕暮(あげ卷助六道行、寶曆三年八月中村座)〇梅川忠兵衞道行戀飛脚(通稱梅川忠兵衞、同九年七月同座、傳存)〇きの國や小春紙屋治兵衞道行野邊の書置(通稱野邊の書置、同四年二月市村座、曲のみ傳存)〇道行諸手

小いな半兵衞道行近江八景(安永二年二月、森田座)等。【長唄】孤東柳(梅若丸、元文五年五月市村座)〇乘掛情の夏木立(通稱與作、明和元年七月市村座、曲のみ傳存)〇道行置霜尾花袖(通稱尾花袖、同五年十一月同座)〇道行女夫傘(淸玄櫻姬、同六年三月中村座)〇道行法の蘆分船(九年坊、同年七月市村座)〇道行昔のうつし繪(三勝半七、天明二年七月中村座)〇道行兒櫻[illegible](白菊、同四年

なり、この方面の開拓に盡した。【著書】「明治天皇御集研究」「民族心理學研究」「我等は如何にこの兇逆思想を處置すべきか?」等があり、なほ詩集に「祖國禮拜」などがある。【批評】正岡子規の傘下に在つて、作歌の傍、日本主義運動に從事し、二十年一日の如く、論戰の陣頭に立つた。その表現には少しく潤ひを缺く所があるが、自ら信ずることに厚く、

がある。歌論書に於ても同樣に言靈的態度を用ひて綿密な考察を行つてゐる。【著書】「國語學に關するもの」詞葉新雅一卷一冊(寛政四年九月刊。作歌の參考書で、俗語から雅言を知るやうにした辭書)〇俳諧天爾波抄六卷六冊(文化四年刊「脚結抄」(別項)の說に依つて俳諧に用ひる天爾波の意味用法を記したもの)〇脚結抄翼[illegible]

の本質藤田德太郎(國語と國文學昭和二ノ四)〇閑吟集歌謠序說志田延義(國語と國文學昭和六ノ一〇)〇道行の展開志田延義(月刊日本文學昭和七ノ八・一〇)〇道行文雜考佐々木八郎(國漢昭和七ノ八・一二)〇系統的國文學史解說鬼澤福次郎〇近古文學と時代精神高木市之助(岩波講座日本文學)　〔志田(延)〕

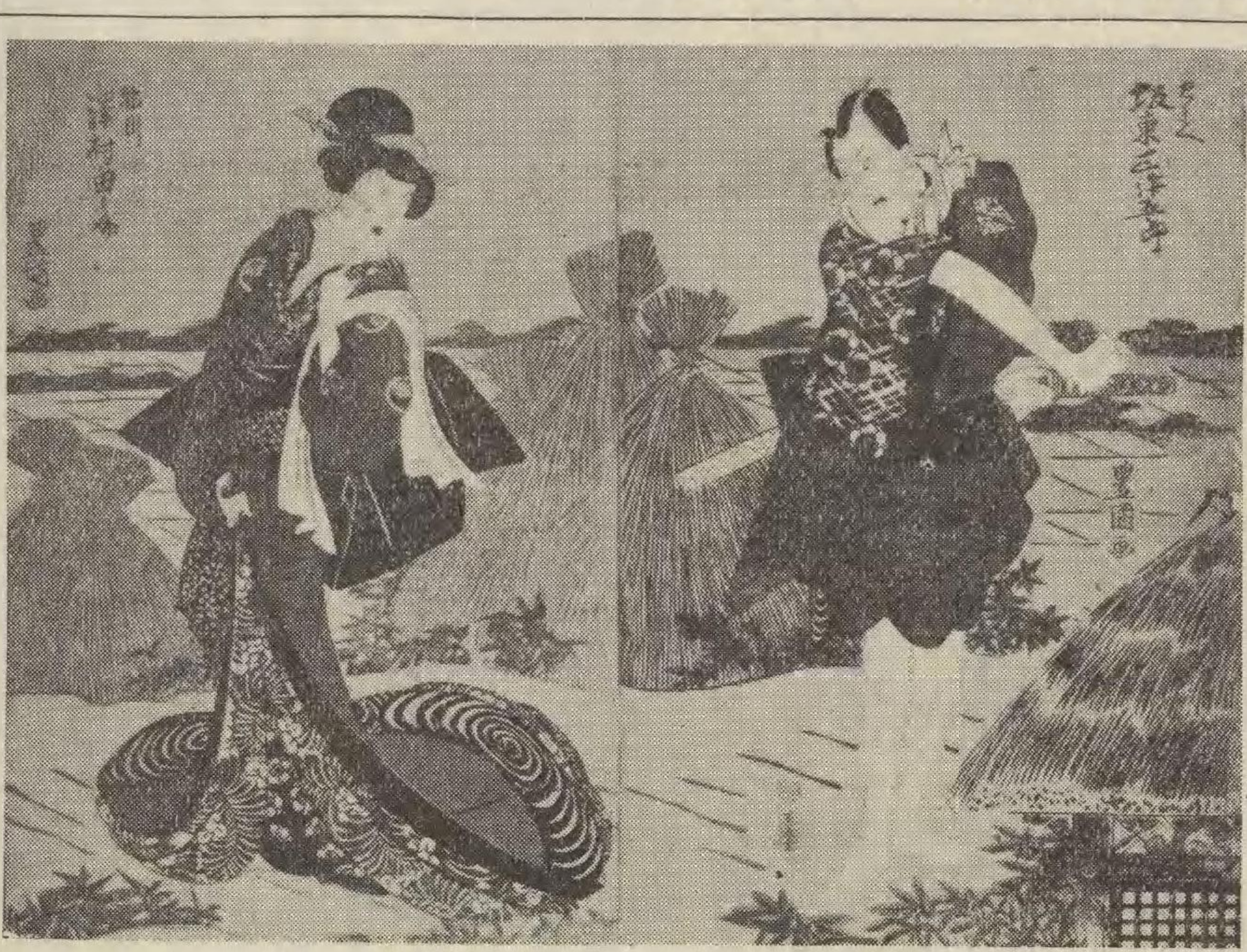
道行揃 淨瑠璃道行集　一冊【刊行】延寶六年三月。卷末に、「延寶六歲午三月吉日　正本屋五兵衞」とある。【解說】細字繪入の宇治加賀掾淨瑠璃の道行集で、その目次は左の如くである。

【第一】ゆやきよ水詣で【第二】三社の託宣てる日のまへ道行【第三】大原問答みちゆき【第四】殿上のうはなりうち道行【第五】西行物語道ゆき【第六】とらのまきみちゆき【第七】源氏供養音樂の巻【第八】霹法樂のまひ【第九】うぶすなまふでかせんのまき。

第一は「熊野物語」、第二は「三社託宣」(別項)の一章。第三は「念佛往生記」の文と小異あり、第四は「花山院后諍」(別項)の一章。第五は東海道より平泉までの道行で、文章は暢達輕妙である。第六は牛若丸がかつらの前をつれ、湯淺・片岡・武藏坊を供にして紀州湯淺に赴く道行。第七は「源氏供養」(別項)の一節。第八は義經の御前に靜立ちて舞ひ、鶴若・龜菊の二女侍坐し、辨慶・片岡・龜井見物する體の挿繪があり、第九はかげひさが淸輔に六歌仙の歌について說明することを叙してある。こゝに簡單に內容を說明した分は、その原正本の未だ發見されないものである。　〔藤井〕

道行旅路の花聟 「落人」を見よ。

道行物 所作事【性質】道行(別項)を題材とした所作事の一類であるが、その道行は一つの演伎の出に相當する一部分の道行(例へば、所作事に於ける花道の出端、能樂に於ける橋懸りの間など)を指すものでなく、一段或は一場を通じての道行である。即ち道行それ自身に獨立又は獨立性を有し、或る假定の地に達する間の脚色になる所作ものを指す。隨つて花道も舞臺も共に道行する道程と見做されてゐる。【沿革】能樂の影響をうけた操淨瑠璃の道行物が、まづ所作事の源泉と見てよい。尤も古淨瑠璃當時は時代物の道行で、これが歌舞伎にも輸入せられて延寶頃から行はれ、元祿期には既に所作事の一類として相應に演じられた程であつた。然るに元祿末頃から世話物が擡頭し、殊に近松門左衞門の「曾根崎心中」(別項)の道行に至つて、俄然その必然性を發揮するに及び、在來さほど重要視されなかつた道行が、延いては淨瑠璃一篇中の肝要部となつた。爾來時代世話共に道行の描寫に重きを置かれ、作者は專らこゝに最上の修辭の妙を施すやうになり、漸次時代物よりも世話物の盛行を見、且つ歌舞伎にも轉用又は改作されるに至つた。次いで所作事も時代より世話の流行が見られ、地も各流を通じて種々に用ひられたが、殊に江戸では豐後節(別項)によつて上演されるのが慣例となつた。かくて流行の結果、その形式に行詰つた爲めに、悲劇的な道行の中に短い喜劇的事物を挾んで觀客を倦怠から免れしめると同時に、悲劇をして一層深からしめようとする手法が行はれて、遂には主題の道行よりも寧ろ挿入物の方が重要視されるといふやうなものも現はれ、且つ二組或は三組の變態心中道行物さへも生れた。隨つてその種類も多岐多樣に亙り、所作事の一大群をなして今日に及んでゐるが、その大半は最初脚本中の一齣として作られた爲めに、その中には筋の通らぬものも尠くない。


道行三度笠故郷春雨(錦繪)

【種別】その題材から見て、(一)「落人」「かさね」(各別項)等の如き戀愛的のもの、(二)「名所の塗笠」「辨慶道行」(安宅參照)等の如き非戀愛的のものの二つに分けることも出來、またその當事者の員數から見て、(イ)「今川仲秋道行」や「孤東柳」(後出)の如き一人の道行もの、(ロ)「道行雨夜衜」「親子心中」などの如き二人の道行もの、(ハ)「仕立莊三棲紅粉」「梅柳戀道連」等の如き、三人以上の道行ものの三つにも分ける事も出來、更に脚色樣式から見て、「薄雪」「忠信」「道行女夫傘」等の時代物と「瀨川の仇浪」(桂川連理柵參照)、「小いな」「お染」(別項)等の世話物との二種に分ける事も出來る。但し戀愛的の世話物が大半を占め、また道行物の精髓でもあらう。左に各流の主要種目を擧げる。(狂亂の道行物は「狂亂物」參照)

【土佐】今川仲秋道行(延享元年七月、市村座)。【半太夫】秩父順禮名所の塗笠(寛延三年五月市村座)〇道行櫻雪後黎明(景淸道行、安永二年三月同座)等。【一中】末若葉卯月染衣(お梅粂之助、明和元年三月中村座)。【義太夫】道行若菜の花(垂井おせん、寛延二年二月市村座)〇甘輝金照女道行比翼織(寶曆九年四月中村座)〇道行おむめ忠兵衞野分堤別鷄(同十二年八月市村座)〇道行此面彼面菖蒲天(お花半七、おきよ半兵衞、高崎與吉。同十四年四月森田座)。【宮古路】駒鳥戀關札(女馬士お六、延享元年三月中村座)〇刀屋半七井筒屋お花道行夢路蝶(同二年三月市村座)〇おはつ德兵衞道行雨夜衜(同年四月同座)。【常磐津】お菊幸助比翼加賀紋(寶曆元年八月市村座)〇杜鵑花空解(通稱甲斐なくおちよ、明和七年七月森田座)〇好借川傍柳(通稱長作入お花、安永七年二月中村座)〇褄重袷羅衣(通稱お房德兵衞、天明四年四月同座)〇おさん茂兵衞浮名草月小夜衣(通稱おさん茂兵衞、同七年八月同座)〇三勝半七お花半七月友對道行(寛政元年八月、同座)〇おちよ半兵衞染躑躅敷寢毛氈(飛圖子賣入、同二年四月市村座)〇帶文桂川水(よたか入お半、同八年二月都座、傳存)〇東結緘旅路花嫁(忠臣藏八段目道

第四は「花山院后諍」（別項）の一章。第五は東海道より平泉までの道行で、文章は暢達輕妙である。第六は牛若丸がかつらの前をつれ、湯淺・片岡・武藏坊を供にして紀州湯淺に赴く道行。第七は「源氏供養」（別項）の一節。第八は義經の御前に靜立ちて舞ひ、鶴若・龜菊の二女侍坐し、辨慶・片岡・龜井見物する體の挿繪があり、第九はかげひさが淸輔に六歌仙の歌について說明することを叙してある。こゝに簡單に內容を說明した分は、その原正本の未だ發見されないものである。〔藤井〕

道行旅路の花聟　「落人」を見よ。

道行物　所作事　【性質】道行（別項）を題材とした所作事の一類であるが、その

面（錦繪）

て花道も舞臺も共に道行する道程と見做されてゐる。【沿革】能樂の影響をうけた操淨瑠璃の道行物が、まづ所作事の源泉と見てよい。尤も古淨瑠璃當時は時代物の道行で、これが歌舞伎にも輸入せられて延寳頃から行はれ、元祿期には既に所作事の一類として相應に演じられた程であつた。然るに元祿末頃から世

はれて、遂には主題の道行よりも寧ろ挿入物の方が重要視されるといふやうなものも現はれ、且つ二組或は三組の變態心中道行物さへも生れた。隨つてその種類も多岐多樣に亙り、所作事の一大群をなして今日に及んでゐるが、その大半は最初脚本中の一齣として作られた爲めに、その中には筋の通らぬものも尠くない。

【種別】その題材から見て、（一）「落人」「かさね」（各別項）等の如き戀愛的のもの、（二）「名所の塗笠」「辨慶道行」（安宅參照）等の如き非戀愛的のものの二つに分けることも出來、また

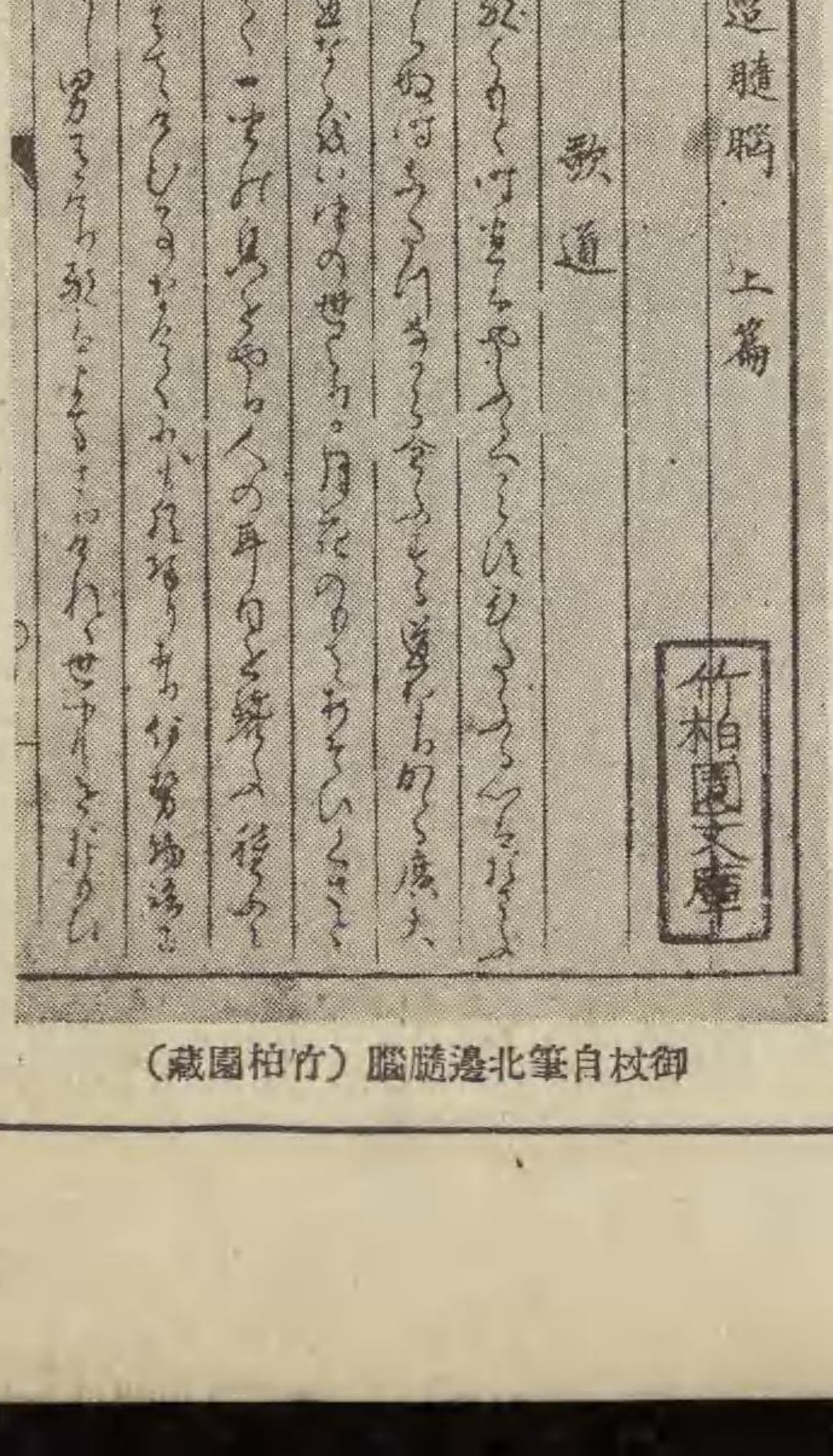
蒲天（お花半七、おきよ半兵衞、高崎與吉。同十四年四月森田座）。〔宮古路〕駒鳥戀關札（女馬士お六、延享元年三月中村座）○（刀屋半七 井筒屋お花）道行夢路蝶（同二年三月市村座）○（おはつ 德兵衞）道行雨夜衞（同年四月同座）。〔常磐津〕（お菊 幸助）比翼加賀紋（寶曆元年八月市村座）○杜鵑花空解（通稱甲斐なくおちよ、明和七年七月森田座）○好儕川傍柳（通稱長作入お花、安永七年二月中村座）○棲重袷羅衣（通稱お房德兵衞、天明四年四月同座）○（おさん 茂兵衞）浮名草月小夜衣（通稱おさん茂兵衞、同七年八月同座）○（三勝半七 お花半七）月友對道行（寛政元年八月、同座）○（おちよ 半兵衞）染躑躅敷寢毛氈（飛團子寶入、同二年四月市村座）○帶文桂川水（よたか入お半、同八年二月都座、傳存）○東結織旅路花嫁（忠臣藏八段目道

行、寛政十一年四月中村座）○戀中車初音の旅（通稱忠信、享保三年八月市村座、傳存）○三人花眞の道行（小女郞新兵衞、文化元年二月中村座）○顚絲縁苧環（通稱お三輪）（別項）。〔富本〕妹脊鳥名所夕暮（あけ卷助六道行、寶曆三年八月中村座）○（梅川 忠兵衞）道行戀飛脚（通稱梅川忠兵衞、同九年七月同座、傳存）○（きの國や小春 紙屋治兵衞）道行野邊の書置（通稱野邊の書置、同四年二月市村座、曲のみ傳存）○道行諸手綱親子心中（同五年五月中村座）○（小いな 半兵衞）俠容形近江八景（通稱小いな、寛政六年二月都座、曲のみ傳存）○（小ぎく 半兵衞）達模樣吾妻八景（通稱小ぎく、同上）○道行妻夫事雨柳（通稱白藤お俊、文化元年正月市村座）○道行念玉蔓（通稱長作、同二年四月中村座、曲のみ傳存）○幾菊蝶初音道行（通稱忠信、同五年五月同座、傳存）○袖浦誓中偕（通稱お駒、同八年正月市村座、淸元に傳存）○（あづま與五郎 おこよ源之丞）梅柳戀道連（安政三年三月同座）等。〔淸元〕道行思案餘（通稱お半、文政二年正月中村座、傳存）○道行誰夕月（通稱おはや、同六年正月森田座、曲のみ傳存）○色彩間刈豆（通稱かさね）（別項）○（お染 久松）道行浮塒鷗（通稱お染）（別項）○道行旅路の嫁入（通稱おかけ參り、天保元年四月市村座、傳存）○道行旅路の花聟（通稱落人）（別項）○心中誰夕立（通稱玉屋新兵衞、天保四年五月河原崎座、傳存）○（若菜屋若草 浮世伊之助）濡嬉浮寢鳰（通稱若草、嘉永四年十一月同座、傳存）○梅柳中宵月（通稱淸心、「小袖曾我薊色縫」參照、傳存）等。〔新內〕〔富士松〕（おなつ 淸十郎）卯花二世合駕籠（延享四年四月市村座）○（網の新七 柴屋梅川）憂名妹脊鳥（寛延三年八月森田座）。〔鶴賀〕露時雨裳浪（通稱お花半七、寶曆元年五月同座）。〔吾妻路〕忍岡戀曲者（白玉權九郎、安政五年三月市村座、同名題で淸元に傳存）等。〔薗八〕仕立莊三褄紅粉（別名朧月「對染衣」、お染久松・お初德兵衞・お千代半兵衞。明和八年三月中村座）○（小いな 半兵衞）道行近江八景（安永二年二月、森田座）等。〔長唄〕孤東柳（梅若丸、元文五年五月市村座）○乗掛情の夏木立（通稱與作、明和元年七月市村座、曲のみ傳存）○道行置霜尾花袖（通稱尾花袖、同五年十一月同座）○道行女夫傘（淸玄櫻姬、同六年三月中村座）○道行法の蘆分船（九年坊、同年七月市村座）○道行昔のうつし繪（三勝半七、天明二年七月中村座）○道行兒櫻戀淵瀨（白菊、同四年正月同座）○道行鳥邊山（お俊傳兵衞、文化五年四月同座）○道行霜夜菊（織江杢四郎、天保九年十一月同座）○道行重扇色三升（お初德兵衞、嘉永二年十一月同座）等。

【參考】劇代集（二代櫻田左交）○近世邦樂年表○歌舞伎圖說（守隨憲治・秋葉芳美共編）○日本歌謠集成（卷九・一〇・一一）○道行の展開　志田延義（月刊「日本文學」三ノ四・五）〔秋葉〕

三井甲之　評論家・歌人　【本名】甲之助【閱歷】明治十六年十月、山梨縣中巨摩郡敷島村に生れた。第一高等學校を經て、明治四十年、東京帝國大學國文科を卒業、同四十一年、正岡子規の遺業、根岸短歌會（別項）を繼承し、雜誌「アカネ」を編輯して、早くから日本主義の宣揚に努めた。「アカネ」は一時中絶したが、明治四十四年五月再び刊行。同四十五年に及び、「人生と表現」と改題し、主として、評論及び短歌・長詩に力を注いだ。大正五年、一時「人生と表現」を休止し（同十年、復活號が出たが、井上右近の手で編輯、京都から發行した）、更に大正十四年に至り、蓑田胸喜と協力して「原理日本」を創刊し、今日に及んでゐる。昭和三年、敷島の道の會を「原理日本」同人と共に創立し、日本精神の表現について、詩歌の上から力說する所があつた。なほ早くから雜誌「日本及日本人」（別項）の短歌選者となり、この方面の開拓に盡した。【著書】「明治天皇御集研究」「民族心理學研究」「我等は如何にこの兇逆思想を處置すべきか？」等があり、なほ詩集に「祖國禮拜」などがある。【批評】正岡子規の傘下に在つて、作歌の傍、日本主義運動に從事し、二十年一日の如く、論戰の陣頭に立つた。その表現には少しく潤ひを缺く所があるが、自ら信ずること厚く、主張の上に底力と熱意とを有する點は獨自の長所である。歌人としては伊藤左千夫（別項）と並んで子規門に重きをなし、しかも子規歿後、左千夫と相和せず、「日本及日本人」に行つてその歌欄を擔當し、今日に及んでゐる。日本思想を强調した「人類の世界はひろししかれどもわれらは行くべししきしまの道を」の如き直情的の作を得意とするが、一面又「秋雨のすがしく晴れし夕暮に相見しゐまひ忘れかねつも」の如き、優婉可憐の趣のものもないではない。〔高須・金子〕

御杖　歌人・國學者　【姓名】富士谷氏。初名成壽、成元。通稱源吾、專右衞門。【號】北野【生歿】明和五年に生れ、文政六年（二四八三）十二月十六日歿す。享年五十六【閱歷】御杖は富士谷成章（別項）の子、幼時より國學和歌を父に承けて家聲を墜さず、殊に文章を善くし、また彈琴に巧みであつた。御杖は國語に「言靈の幸」ある事を信じ、その點から特に手爾乎波語法を詳細に研究してゐる。その說は所謂言靈說であつて、部分的には卓見も少くないが、全體としては直ちに用ひ難いものがある。歌論書に於ても同樣に言靈的態度を用ひて綿密な考察を行つてゐる。【著書】〔國語學に關するもの〕詞葉新雅一卷一冊（寛政四年九月刊、作歌の參考書で、俗語から雅言を知るやうにした辭書）○俳諧天爾波抄六卷六冊（文化四年刊「脚結抄」（別項）の說に依つて俳諧に用ひる天爾波の意味用法を記したもの）○脚結抄翼卷數未詳（現存著者自筆稿本二冊、「脚結抄」（別項）の註解で、脚結抄本文を註し、例證を增補したりしてゐる）。〔歌文の註釋及歌論書〕萬葉集燈五卷五冊（文政五年刊。大正十一年刊萬葉集叢書所收、萬葉集卷一の註釋。言靈說に依つてゐるから、直に用ひ難いものもあるが卓見もある。なほ手爾波の解釋の詳細な點は多とすべきである）○古事記燈二卷（文化五年刊）（別項）○土佐日記燈二十四卷（明治三十一年刊。活版本三冊。土佐日記の註としては最も詳細なもので、御杖の代表的著書の一つである）○百人一首燈二卷二冊（文化元年刊）○百家類葉二卷（刊）○百家部類抄十卷○歌袋八卷（寛政六年刊「歌學文庫」卷三所收）○いれひも一卷○歌道非唯抄一卷○北邊隨筆四卷（別項）○北野文集○御杖大人歌文○神明憑談一卷（文政五年成）○五級三差辨一卷○眞言辨二卷（別項）○北邊隨



北邊髓腦　上篇

歌道

竹柏園文庫

御杖自筆北邊髓腦（竹柏園藏）

腦二卷○哆南辨乃異則一卷○詞道擧要一卷○和歌五體辨一卷等。　〔以上龜田〕

【歌人として】歌は幼くして廣橋兼胤に學んだが、固より堂上派の糟粕を嘗めて滿足してはゐなかつた。家學から來た萬葉風に、當時の古學派の調べを加へて、なか〳〵の上手である。まゝ新しい言葉なども用ひて頗る自由清新の趣を出してゐる。當時の歌壇では第一流であり、今日から見ても相當注意すべき歌人である。

あし引の山のこかけに母を置きて心にもあらず立ちまふらしも（猿）
恭仁（くにひと）人のわたす高橋たかだかにこひわたり來て今ぞくやしき（寄橋戀）

等にその萬葉に近い詠風のよく消化されてゐるのを見るべく、「かはほりの飛び交ふ空の夕づく日かげろふ見れば秋たちにけり」「蕨折る人し絶えねば春の野になま落ちしつゝ雲雀鳴くなり」などに、その詠風の自由と清新とが見られる。而してそれが寫實から來てゐることは特に注意すべきである。　〔以上窪田〕

【參考】學界の偉人西村天囚○日本歌學史　佐佐木信綱○國文學の哲學的研究第一卷土田杏村○富士谷御杖と桂園派久松潛一（國の花、昭和四ノ四）

御杖大人家集　みつゑうしかしふ　「富士谷御杖大人家集」を見よ。

三日太平記　みつかたいへいき　淨瑠璃　十段　時代物【作者】近松半二・三好松洛・八民平七・竹本三郎兵衞【角書】泉州小田居茶屋　攝州殿下茶屋【名稱】光秀の所謂三日天下に據つたもので太平記物とは關係がない。角書の右は六段目、左は十段目から來てゐる。【初演】明和四年十二月十四日初日、竹本座。座本竹田文吉（正本）【諸本】七行九十五丁本。十行六十四丁本。近松半二淨瑠璃集（續帝國文庫）所收。【題材】太閤記物の正系で、多く近松作の「本朝三國志」（享保四年二月十四日初日。竹本座）の影響を受けてゐる。

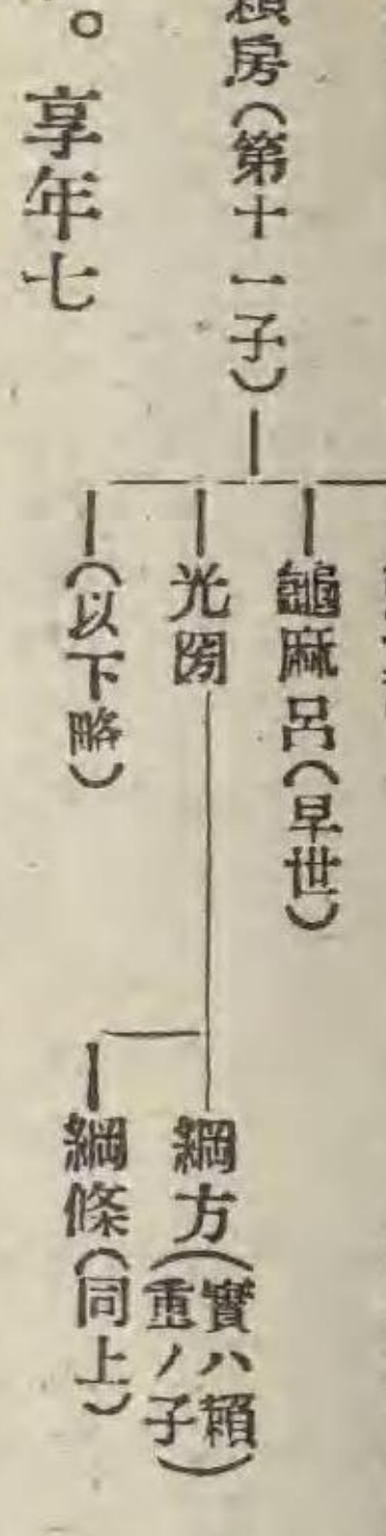
【梗概】〔初段〕（信永別館）四海を平定した功に依り小田信永は內大臣に任ぜられた。諸大名はお祝ひに色とりどりの生花を獻上する。時に信永の一人娘千本姬は細川の息與市郎を見染める。〔二段〕（道行花見の粧ひ）千本姬は麗かな春景色の中を、戀しい與市郎に逢ふべく、桃山へと向ふ。（桃山）執權松永彈正の粹な言葉で、姬は思ふ儘に與市郎と語り合ふ。與市郎は面白く戀話などをして姬の歡心を買ひ、形見に蘭奢待の名香を送られる。併しこの美男の與市郎は贋物で、實は堺の町人小西彌十郎であつた。逆意ある彈正が姬の放埓を種に、信永を罪に落さうとする謀である。〔三段〕（松永館）植木屋となつて入り込んだ森蘭丸を、彈正はそれとも知らず取立て腹心とする。この日信永の妾小野お通と簾中臺の前と千本姬とが入來する。姬は先日桃山で誓つた與市郎に逢はうためである。時に與市郎に化けてゐた彌十郎の父如淸が、證據の蘭奢待を持つて息子の惡事を糺しに來る。かくて不義が現はされ、千本姬はその場から勘當となり、臺の前は罪を負うて自害する。彈正が御臺の死に微笑んでゐると、俄に蘭丸の相圖に依つて遠攻の鐘太鼓が響く。計略に落ちた彈正は雄々しくも悠々と自刎する。この時討手に向つた武智光秀は、彈正の最後の言葉に依つて彼の遺兒である事を知り、密に父の志を繼ぐべく決心する。〔四段〕（安土城）信永の嫡孫三法師君の誕生日を祝つてゐる所へ、彈正の討手を果して蘭丸と光秀が歸つて來る。併し兩人共御臺を見殺しにした咎に依つて勘當となつてしまふ。蘭丸は千本姬を尋ねに行く嫡子信忠のお供をし、光秀は信永の短慮に愈々叛逆の心を定める。〔五段〕（本能寺）信永は中國を平定すべく本能寺に出陣する。光秀はお供を願つて目通りに出る。併し信永はなほ光秀を犬猫と罵つて打擲する。光秀の兵は一度に本能寺を取卷く。寺僧等も皆光秀の家來であつた。信永は遂に無念の中に切腹する。光秀は將軍の綸旨を受くべく馬上で禁廷へ向ふ。〔六段〕（小田居茶屋）今は千本姬も身を落して泉州堺の津の廓に司と云ふ傾城となつてゐる。小野お通は仲居となつて附添ひ、信永の像を守護して味方の人々を集めてゐる。小西彌十郎は虛無僧となつて來て、前非を悔い、味方に加はらうとするが許されない。一方森蘭丸は瓦石大臣と名乘つて入り込み、司を揚詰にして樣子を覗つてゐる。折柄西國の戰から久吉が歸つて來る。久吉は蘭丸の忠義に感じ、信永に代つて勘當を許し、又お通の方の赤心を賞する。〔七段〕（德右衞門住居）光秀叛逆の折柄、信永公の嫡孫三法師君を連れて立ち退いた忠臣柴田權六は、圖らずも久吉の生家の婿となり、德右衞門と名乘つて鼓の師匠をしてゐる。舅彌助は老耄して子供のやうに他愛もない。外には三法師君の詮議が嚴しい。久吉はかくと察して自分の子を若君に仕立て巧に身代りにする。舅彌助は早くも德右衞門の連子を若君と知り、今迄老耄を裝つて守護してゐたのであつた。權六は久吉の忠義に感じて若君を渡し、彌助は出世して誇らぬ我子久吉を賞しつつ自ら出家して緣を絕つ。〔八段〕（山崎）光秀と久吉の軍は戰ひ正に酣である。一代の軍師松下嘉平治も今は世を逃れ、戰をよそに釣に來る。と、偶然川端に供養する我娘さつきに逢ふ。さつきは稚くして養女に行つたが、その後光秀に嫁したのである。良人の逆軍の破れん事を悲しんで、彼女はかく供養するのであつた。嘉平治は娘を連れて我が家へ歸る。（小栗栖）光秀の末子重次郎は父を尋ねて彷徨ふ。光秀も我が子を搜してゐるうちに、遂に百姓の竹槍に刺される。光秀は傷つきながら、百姓に化けて一時を逃れ、なほも重次郎を尋ねる。〔九段〕（嘉平治住居）偶然嘉平治の許に宿つた光秀は、自害して妻子を助けようとしたが、重次郎は父の跡を追つて共に切腹した。彌十郎は光秀の首を討ち落して始めて久吉に仕へる事を許される。一方嘉平治・さつきは出家する。〔十段〕（殿下茶屋）大領久吉は功に依つて豐臣關白となり、勢ひ並ぶ者もない。この日久吉は住吉明神に祈願して三韓征伐を宣言する。

【解說】本曲は、合作の弊として統一がなく不自然な所が多い。前半は歌舞伎式に運ばれたに過ぎず、眼目はやはり後半の逆臣光秀に配するに仁義の久吉を以てし、以て喝采を得ようとした所にある。從つて五段目本能寺の場と九段目嘉平治住居の場とが山となる。殊に後者は最も趣向を凝した場面で、興味深く見られる。そしてこの趣向は「比良嶽雪見陣立」（別項）に取入れられてゐる。本曲中現在まで唱へられるのはこの場のみである。なほ以後の歌舞伎淨瑠璃に於ける多くの太閤記物に關係を持つてゐる事は云ふ迄もない。　〔鶴見〕

【參考】近世邦樂年表（義太夫之部）○歌舞伎細見飯塚友一郎（太閤記之部）

光圀　みつくに　歌人・國學者【姓名】德川氏、名は光圀、字は子龍、幼名千代松、初めの名

は德亮、字は觀之【號】日新齋・常山人・率然子・西山隱士・梅里。【私諡】義公【生歿】寛永五年六月十日水戸三木之次の家に生れ、元祿十三年（一三六〇）十



二月六日薨ず。享年七十三。【墓所】常陸久慈郡瑞龍山【閲歴】兄

集（各別項）○常山文集○西山公隨筆（別項）○參考源平盛衰記○參考太平記○參考保元物語○參考平治物語（以上各別項）等。

【業績】義公が德川三家の一として、政治上に

盡した功績はこゝでは擧げない。

が、學問史の上から見ると、「大日本史」と「禮儀類典」と「釋萬葉集」とは、その大きな業績の三方面である。殊に

佳・瀨川路考の死。

【梗概】（六道の辻の茶見世）今度、秀佳・路考の新下りのために、一九は「凶例白無會我」といふ狂言を書き、國丸はその看板を描いたと語り合ふ。閻魔が金主となつて芝居を打つたのである。二人が惣ざらへを見に行つたあとで、秀佳に惚れた奪衣婆が路考に、路考に惚れた閻魔が秀佳に媒を頼む。二人共に承知す

を費したこと、しかも間に合せに過ぎないことを斷わつてゐる。彼の遲筆の程度が知られる。三馬が一夜を待たずに「兩面蓮華道」を書いたことを參照して考ふべきであらう。但し三馬の作は、先代瀨川路考・澤村訥子の死に關してゐる。種彥のこの作に於て、二人の役者が閻魔と奪衣婆とに惚れられての困難、又巧みに欺いて閻魔と奪衣婆とを忍び逢ませた趣

は特に注意すべきである。〔以上窪田〕

【參考】學界の偉人西村天囚〇日本歌學史佐佐木信綱〇國文學の哲學的研究第一卷土田杏村〇富士谷御杖と桂園派久松潛一（國の花、昭和四ノ四）

御杖大人家集（みつゑうしかしふ）「富士谷御杖大人家集」を見よ。

三日太平記（みつかたいへいき）　淨瑠璃　十段　時代物　【作者】近松半二・三好松洛・八民平七・竹本三郎兵衞　【角書】（泉州小田居茶屋攝州殿下茶屋）　【名稱】光秀の所謂三日天下に據つたもので太平記物とは關係がない。角書の右は六段目、左は十段目から來てゐる。【初演】明和四年十二月十四日初日、竹本座。座本竹田文吉（正本）【諸本】

千本姫とが入來する。姫は先日桃山で誓つた與市郎に逢はうためである。時に與市郎に化けてゐた彌十郎の父如淸が、證據の蘭奢待を持つて息子の惡事を糺しに來る。かくて不義が現はされ、千本姫はその場から勘當となり、臺の前は罪を負うて自害する。彈正が御臺の死に微笑んでゐると、俄に蘭丸の相圖に依つて遠攻の鐘太鼓が響く。計略に落ちた彈正は雄々しくも悠々と自刎する。この時討手に向つた武智光秀は、彈正の最後の言葉に依つて彼の遺兒である事を知り、密に父の志を繼ぐべく決心する。〔四段〕（安土城）信永の嫡孫三法師君の誕生日を祝つてゐる所へ、彈正の討手を果して蘭丸と光秀が歸つて來る。併し

の赤心を賞する。〔七段〕（德右衞門住居）光秀叛逆の折柄、信永公の嫡孫三法師君を連れて立ち退いた忠臣柴田權六は、圖らずも久吉の生家の婿となり、德右衞門と名乘つて鼓の師匠をしてゐる。舅彌助は老耄して子供のやうに他愛もない。外には三法師君の詮議が嚴しい。久吉はかくと察して自分の子を若君に仕立て巧に身代りにする。舅彌助は早くも德右衞門の連子を若君と知り、今迄老耄を裝つて守護してゐたのであつた。權六は久吉の忠義に感じて若君を渡し、彌助は出世して誇らぬ我子久吉を賞しつつ自ら出家して緣を絕つ。〔八段〕（山崎）光秀と久吉の軍は戰ひ正に酣である。一代の軍師松下嘉平治も今は世を逃

に過ぎず、眼目はやはり後半の逆臣光秀に配するに仁義の久吉を以てし、以て喝采を得ようとした所にある。從つて五段目本能寺の場と九段目嘉平治住居の場とが山となる。殊に後者は最も趣向を凝した場面で、興味深く見られる。そしてこの趣向は「比良嶽雪見陣立」（別項）に取入れられてゐる。本曲中現在まで唱へられるのはこの場のみである。なほ以後の歌舞伎淨瑠璃に於ける多くの太閤記物に關係を持つてゐる事は云ふ迄もない。

【參考】近世邦樂年表（義太夫之部）〇歌舞伎細見飯塚友一郎（太閤記之部）〔鶴見〕

光圀（みつくに）　歌人・國學者　【姓名】德川氏、名は光圀、字は子龍、幼名千代松、初めの名

は德亮、字は觀之【號】日新齋・常山人・率然子・西山隱士・梅里。【私諡】義公【生歿】寬永五年六月十日水戶三木之次の家に生れ、元祿十三年（二三六〇）十二月六日薨ず。享年七十三。【墓所】常陸久慈郡瑞龍山【閱歷】兄賴重を超えて德川御三家の一たる家を嗣ぐことになつたが、伯夷・叔齊の故事に感激して、初め兄の子綱方を家嗣とし、綱方歿するに及んで、その弟綱條を嗣と定めた。元祿三年十月（六十三歲）致仕して家を綱條に讓り、自らは翌年五月久慈郡大田鄕西山に隱居して西山公又は水戶黃門と言はれ、文事に心を寄せて學問の研究並にその保護に力を盡した。寬文五年、明の遺臣朱舜水（別項）を聘して弟子の禮を執り、道を問うた。明曆三年、彰考館（別項）を設けて多くの學者を招き、古書の蒐集を各地に行はしめると共に、諸家の珍籍を謄寫せしめた。しかも單に古典籍を集めるのみでなく、一貫して國家の大統を明かにし、大義明分を知らしめるための大著述の完成に力を盡した。延寶五年「扶桑拾葉集」（別項）成り、天覽を仰いだ。晚年「萬葉集」の研究に力を盡すに及んで、下河邊長流・契沖（各別項）等を禮を篤くして迎へんとした。又元祿五年八月楠正成の忠誠を嘉して、湊川に「嗚呼忠臣楠子之墓」といふ碑を建てたことによつても、その精神を見られる。元祿十三年十二月に薨ずるまでその精神は一貫してゐた。天保三年贈從二位權大納言、明治二年從一位、同三十三年追贈して正一位に陞叙された。【編著】大日本史〇禮儀類典〇釋萬葉集〇常山詠草〇扶桑拾葉集（各別項）〇常山文集〇西山公隨筆（別項）〇參考源平盛衰記〇參考太平記〇參考保元物語〇參考平治物語（以上各別項）等。

- 德川家康—賴房（第十一子）
  - 賴重
  - 鶴麻呂（早世）
  - 光圀
    - 綱方（實ハ賴重ノ子）
    - 綱條（同上）
  - （以下略）

【業績】義公が德川三家の一として、政治上に盡した功績はこゝでは擧げない。が、學問史の上から見ると、「大日本史」と「禮儀類典」と「釋萬葉集」とは、その大きな業績の三方面である。殊に「大日本史」は水戶學の中心をなすもので、義公初め代々の主君の心血を濺いで成つたものであり、史學上の大編著であるのみならず、その勤王精神を鼓吹するには最も力あつたものである。また「禮儀類典」は有職故實を新しく見直し、整理したものと言ふべく、「釋萬葉集」は「萬葉代匠記」の存する以上、直接の價値は乏しいとするも、義公の「萬葉集」に於ける努力と、長流・契沖の如きすぐれた萬葉學者を生み出した功績は忘れられない。義公なかりせば契沖の「萬葉代匠記」も出來なかつたであらう。又賴山陽の「日本外史」（別項）の出現も、或は近世の勤王精神の勃興もこゝに淵源するものが甚だ多い。義公の偉大なる業績はそこにある。歌人としての義公も「常山詠草」によつて見られる如く、相當の歌人であることが知られる。

【參考】義公行實安積澹泊等（「常山文集」「事實文編」等に收む）〇桃源遺事三木之幹等（續々群書類從史傳部第二・日本偉人言行資料等に收む）〇水戶義公傳佐藤進　〔久松〕

三津瀨川上品仕立（みつせがはじやうほんじたて）　草雙紙　合卷　二册合一册　【作者】柳亭種彥　【畫工】歌川國貞　【名稱】追善を聞かせた命名である。柱には、ただ「つゐぜん」とのみある。【刊行】天保三年、山本板。【題材】坂東秀佳・瀨川路考の死。

【梗概】（六道の辻の茶見世）今度、秀佳・路考の新下りのために、一九は「凶例白無曾我」といふ狂言を書き、國丸はその看板を描いたと語り合ふ。閻魔が金主となつて芝居を打つたのである。二人が惣ざらへを見に行つたあとで、秀佳に惚れた奪衣婆が路考に、路考に惚れた閻魔が秀佳に媒を賴む。二人共に承知する。（六道屋の奧座敷）秀佳と路考吹替へで、閻魔と婆とを暗い一室に忍び合せる。閻魔達は氣づかずして契り合ふ。（六道辻樂屋新道）茶屋娘の拵への門之助、これは前にこゝに來てゐた役者であるが、婆が閻魔へ當てた密書を拾つて讀む。秀佳・路考には罪はないが、芝居をさせて金儲けをさせるために六道辻に留めておくと書いてある。こゝに路考の歸途を擁して閻魔は赤鬼と共に、さき程欺かれた仇討をしようとする。路考・五郎時致の出立で、二人を投げつける。（秀佳の住家）これも欺かれたのを遺恨に思ふ婆の旨を承けた鬼どもが秀佳を捕へようとする。秀佳、朝比奈の拵へで鬼どもを脅す。門之助、歌舞菩薩の姿となつて、秀佳・路考と共に、極樂さしてゆく。二人は紫雲の上、迎への駕籠に乘る。

【構想】追善の作とて、死んだ二人を極樂に送り込むのが覘ひであるが、役者だけに六道の辻の芝居興行をきかせ、又奪衣婆と閻魔が、二人にからむ戀にをかしさを見せたのである。

【價値】作としては、さまでの價値を認められない。ただ種彥もこの種の際物を書いたといふ點に於てのみ注意すべきであらう。或は芝居好きの作者であるから、板元の囑に應じたのであらうか。殊にこの二人は贔屓にしてゐた役者であつた。また種彥は、この作に三日を費したこと、しかも間に合せに過ぎないことを斷わつてゐる。彼の遲筆の程度が知られる。三馬が一夜を待たずに「兩面蓮華道」を書いたことを參照して考ふべきであらう。但し三馬の作は、先代瀨川路考・澤村訥子の死に關してゐる。種彥のこの作に於て、二人の役者が閻魔と奪衣婆とに惚れられての困難、又巧みに欺いて閻魔と奪衣婆とを忍び逢はせた趣向は相應に面白いものであらう。二河庵白道の作、安政二年板「明烏夢物語」にその儘襲用されてゐるが、これは八代目團十郎と二代坂東秀佳の死に關するものである。〔山口〕

滿田新造（みつだしんざう）　音韻學者　【生歿】明治八年六月三日、福島縣若松市東名古屋町に生れ、昭和二年二月七日、岡山市門田德吉町に歿す。享年五十三【法名】新月院誠譽通韻大居士【墓所】岡山市操山六高裏市有墓地【家系】蒲生氏鄕の家臣滿田出雲守の後裔。【閱歷】明治二十九年、第一高等中學校を經て、三十二年、東京帝國大學文科大學漢文科卒業、同年十月、島根縣第一中學校敎諭、翌年八月第六高等學校の創設せらるゝや、その敎授となる。大正十一年八月、文學博士の學位を授けられた。同十五年三月病の故を以て退職。その後も六高講師として引續き敎鞭をとつてゐた。磊落不羈で、虛飾を惡み、また宛然仙人の風があつた。併し又、その半面には最も常識に富み、事務家としての才能も多分に持つてゐた。【著作】支那音韻斷一册（大正四年刊）〇中原音韻分韻の概說一册（大正七年刊）〇支那音韻の歷史的研究一册（未刊）。その他「藝文」「國學院雜誌」「東洋學報」等に多くの論文がある。【業績】夙く明治三十二年頃（二十六歲）から支那音韻の問題に心を竊め、爾來二十有八年、公

務の餘暇、專らこの研究に沒頭して餘事を省みず、大正八・十年の兩度、支那に渡つて益々研鑽を加へた。特に研究の對象としたものは支那音韻史とその研究の歷史とであつた。由來支那音韻の研究家には、とかく歷史的變遷を無視し、音韻諸現象を個々別々のものとして、類似又は差異のみを以て說明しようとして來たことに缺陷のあるのを思ひ、諸現象相互の間には、變遷關係を以て說明せらるべきもののあることを信じ、從來殆ど試みられなかつた歷史的研究の方法をとつた。大正四年十月刊行の「支那音韻斷」はこの成果である。ついで、學位請求論文として提出した「支那音韻の歷史的研究」は、その資料の解說並に歸納の過程を記したものである。その他、「東洋學報」「國學院雜誌」「藝文」等に發表した論著は約四十に上るが、すべて支那の音韻に關するもので、中に日本の漢字音や字音研究史に關するものもある。

【參考】支那音韻の歷史的研究自序 ○滿田新造墓碑 秋月胤繼撰○滿田先生を悼む（六高校友會誌七五）○故滿田敎授を追想して 內藤馬藏（穹窿會々誌一六）○滿田さんに就きて 小西謙（同上）　〔寬〕

躬恒（みつね）　歌人（三十六歌仙の一）【姓】凡河內（おほしかふち）【閱歷】寬平六年甲斐權少目、延喜七年丹波權大目、同十一年和泉權掾に任じた。淡路掾にも任じたと見え、「淡路のまつりごと人の任果てゝ上りまうできての頃兼輔朝臣の家にて」（後撰集卷十五）とある。延喜五年貫之以下と「古今集」撰修の事に携はり、同七年九月法皇大井川御幸に供奉して歌を上つた。延喜十六年九月法皇石山御幸に際し、近江介（兼輔か）に招かれ、乞ひによつて屛風・障子の歌をよみ、法皇の御舟に供奉して歌を上つた。延喜二十一年春、法皇・六條の御息所の春日御詣に際し、大和守忠房の乞ひによつて大和の名所の歌をよんだ。曾て醍醐天皇は月の明き夜彼を御階の下に召され、「月を弓張といふは何の意ぞ其の由仕うまつれ」と仰せられた。彼は畏つて、「照る月を弓張としもいふ事は山邊をさしていればなりけり」と奏し上げ、御感の餘り祿に大袿（おほうちぎ）を賜はつた（大和物語・大鏡）。家集には仰せによつて奉つた賀の歌、屛風歌が多く、貫之と同じく宮中歌人であつた事が分る。兼輔とは素より友達であつたが、貫之をして「なつき」を傳へさせた（後撰集卷十六）。貫之とは二三の贈答歌があり、月の面白き夜、貫之を訪れたことがある（古今集卷十六）。延喜六年六月忠岑が贄使として贄殿にあり、彼は宣旨かひの使として忠岑が歸るのを止めて歌をよんだ。又忠岑・伊衡と三人で問答の歌をよみ、深養父・人眞と共に各三十首の歌をよみ、素性の死を悼んで貫之と贈答した。延喜の時みづし所に侍ひ、身の沈める事を歎き、或る女房を通じてうれへ文を奏したこともある。【著作】家集「躬恒集」。○勅撰集に入る歌は古今五十八、後撰二十三、拾遺三十四、新古今十、新勅撰集以下凡そ六十九首、合計凡そ百九十四首。○私撰集に入る歌は新撰和歌十、三十六人撰十、金玉集六。○古今打聞（祕藏抄）二卷は躬恒撰ではない。

寬平六年	甲斐權少目
昌泰元年	朱雀院女郞花合
延喜五年	古今集撰修
六年	泉大將四十賀
七年	法皇大井川御幸
十二年	亭子院和歌合
十三年	內裏菊合
	內侍督四十賀
十六年	伊勢にあり、九月石山御幸
十八年	八月忠平の家に八講あり、佛法僧をきく。九月いちじく山に遊ぶ
二十一年	法皇春日御詣
延喜御時	殿上に召さる、御廚子所に侍ふ

【批評】彼の歌には躍動した情緖があり、張り切つた心で一氣呵成によんだところと、或る寂しさを力強く訴へようとするところとがある。貫之の歌に比較して調子が高く銳く、而も粘りがあり、氣持を生かした表現が多い。俊賴は躬恒の表現に興味をもつてゐたらしい（長明無名抄）。要するに貫之の歌は型にはまつてゐて感動がないが、躬恒の歌は生々したところがある。

【參考】古今集目錄○歌仙傳○大日本史二一九○大和物語○大鏡○百人一首一夕話○國文學全史（平安朝篇）　〔西下〕

躬恒集（みつねしふ）　歌集【作者】凡河內躬恒【諸本】群書類從卷二六一所載本、歌仙歌集本の外、圖書寮に甲乙丙丁四種の寫本がある。類從本一卷は、歌數四百三十二首、歌仙歌集本二卷は、歌數三百二十九首である。「西行躬恒集」と稱するものは、歌仙歌集本と殆ど一致するが、第五十五首目の「秋霧のはるゝまに〳〵みわたせば云々」の一首を缺いてゐる。（甲）一卷は、歌數は四百十八首（內長歌二）で、最後の四十九首は他本の歌である。（乙）二卷は、歌數は三百八十四首（內長歌二）で、卷末には（甲）と全く同じい他本の歌がある。奧に文永三年六月九日以光俊本書寫畢とある。（丙）一卷は、歌數は二百十九首（內長歌二）で、終りに「ちはやふる神な月とやはつしくれ」の長歌があつて歌仙歌集本上卷の終りと一致し、別に「水莖の跡かきつくるしにはながれてさぞと思ひいでなむ」とあつて、頭に「紙けがしにもとはおも（思）たまへながらいなびじとかやな、又なからむ後のと方々に思ひさぶらひてこそ」と記した一葉が添つてゐる。（丁）一卷は大體類從本と同じく、奧に「建長四年二月五日巳時書畢、以或貴所御本昨今兩日馳筆、一校了、書本銘云承香殿女御御筆云々」などとあつて、本願寺の「三十六人家集」（別項）を臨寫したものとされてゐる。書式は色々と工夫され、一本又は異本にて考勘した所がある。

【內容】以上の六本は、全卷の歌數がそれ〴〵異るからその內容を異にするわけであるが、歌數のより多い本は、歌數のより少い本の內容を全部含むといふわけではなく、歌數の多少に拘らず全然別個の歌をも內容としてゐるのである。隨つて六本の內容關係は極めて複雜であるが、類從本と歌仙歌集本とを中心として相互の關係を示すと第一圖表の如くである。卽ち類從本を中心として考へると、（歌）（甲）（乙）（丙）はその順序で內容一致の關係が少くなり、歌仙歌集本を中心として考へても（類）（甲）（乙）（丙）の順序でその關係が薄くなつてゐる。これは類從本と歌仙歌集本とは極めて密接な內容一致の關係をもつてゐるが、（甲）（乙）（丙）はその總數に比例して類從本及び歌仙歌集本との關係の程度を保つてゐるといふ事である。次に（甲）（乙）（丙）（丁）の四本の歌で、類從本及び歌仙歌集本の何れにも存しない歌に就いて相互の關係を示すと、第二圖表の如くなる。卽ち（甲）（乙）は類從本及び歌仙歌集本の何れにも存しない歌が比較的多く、（丙）（丁）はこれに次ぐのであるが、更に（甲）（乙）（丙）（丁）は他の如何なる本にも存せず、その本にのみ存する歌を若干づつ有する

事になるのである。次に（甲）（乙）（丙）（丁）には存するが（類）（歌）には存しない歌に就いて見るに、（甲）（乙）の終りには共に「深養父人眞具して題三を三十首づつよみ侍りけるに人し

致せざる歌
20
150
127
18

歌	其の他
4	43
4	19
3	4
	16

にはそれが少いのである。【組織】諸本とも部類はない。（甲）は三つの要素から成つてゐる。（一）純粹の家集と考へられるもので、忠岑・伊衡・躬恒の問答歌にて終る。（二）勅撰集から書き拔いたと思はれるもので、深養父・人眞と共に作つた三十首にて終る。（三）他本の歌。（乙）は重複が多く、錯簡があるらしい。（丁）は類從本と順序が全く一致してゐる。何

一族である石川家の成敎學館の學頭を囑せられたが、故あつて間もなく辭した。【著書】多く他人の著を增補訂正したものである。○雅言集覽增補十三卷（文久三年成）○雅言集覽續編三十二卷（文久三年成）○挿頭抄增補三卷（嘉永四年成）○脚結抄考一卷○裝脚結詞の打合圖一鋪（弘化四年正月成。刊。「脚結抄」の裝圖を「詞八衢」「紐鏡」「友鏡」等の說に依つて增補したもので

品が傳へられてゐる。今人丸と俗稱されるに至つたことでも社會的輿望の絕大さも示してゐる。靈元院も彼を激賞し、一生十首の秀歌を遺し得ようと豫言し給はれたといふ。元文五年には、靈元院の皇子職仁親王に天仁遠波を御傳授申し上げた。その才德を聞いて指導を仰がうとするものが年を繼いで增した。又延享三年には關東から信州に亙る大旅行を試

造墓碑 秋月胤繼撰〇滿田先生を悼む（六高校友會誌七五）〇故滿田教授を追想して 内藤馬藏（穹窿會々誌一六）〇滿田さんに就きて 小西謙（同上）　〔寬〕

躬恒 みつね　歌人（三十六歌仙の一）【姓】凡河内（おほしかうち）【閱歷】寬平六年甲斐權少目、延喜七年丹波權大目、同十一年和泉權掾に任じた。淡路掾にも任じたと見え、「淡路のまつりごと人の任果てゝ上りまうできての頃兼輔朝臣の家にて」（後撰集卷十五）とある。延喜五年貫之以下と「古今集」撰修の事に携はり、同七年九月法皇大井川御幸に供奉して歌を上つた。延喜十六年九月法皇石山御幸に際し、近江介（兼輔か）に招かれ、乞ひによつて屛風・障子の歌を

寬平六年	甲斐權少目
昌泰元年	朱雀院女郎花合
延喜五年	古今集撰修
六年	泉大將四十賀
七年	法皇大井川御幸
十二年	亭子院和歌合
十三年	內裏菊合
	內侍督四十賀
十六年	伊勢にあり、九月石山御幸
十八年	八月忠平の家に八講あり、佛法僧をきく。九月いちじく山に遊ぶ
二十一年	法皇春日御詣
延喜御時	殿上に召さる、御厨子所に侍ふ

所に侍ひ、身の沈める事を歎き、或る女房を通じてうれへ文を奏したこともある。【著作】家集「躬恒集」。〇勅撰集に入る歌は古今五十

類從本一卷は、歌數四百三十二首、歌仙歌集本二卷は、歌數三百二十九首である。「西行躬恒集」と稱するものは、歌仙歌集本と殆ど一致するが、第五十五首目の「秋霧のはるゝまに〳〵みわたせば云々」の一首を缺いてゐる。(甲)一卷は、歌數は四百十八首（內長歌二）で、最後の四十九首は他本の歌である。(乙)二卷は、歌數は三百八十四首（內長歌二）で、卷末には(甲)と全く同じい他本の歌がある。奧に文永三年六月九日以光俊本書寫畢とある。(丙)一卷は、歌數は二百十九首（內長歌二）で、終りに「ちはやふる神な月とやはつしくれ」の長歌があつて歌仙歌集本上卷の終りと一致し、別に「水莖の跡かきつくるしるしにはながれてさ

少くなり、歌仙歌集本を中心として考へても(類)(甲)(乙)(丙)の順序でその關係が薄くなつてゐる。これは類從本と歌仙歌集本とは極めて密接な內容一致の關係をもつてゐるが、(甲)(乙)(丙)はその總數に比例して類從本及び歌仙歌集本との關係の程度を保つてゐるといふ事である。次に(甲)(乙)(丙)(丁)の四本の歌で、類從本及び歌仙歌集本の何れにも存しない歌に就いて相互の關係を示すと、第二圖表の如くなる。即ち(甲)(乙)は類從本及び歌仙歌集本の何れにも存しない歌が比較的多く、(丙)(丁)はこれに次ぐのであるが、更に(甲)(乙)(丙)(丁)は他の如何なる本にも存せず、その本にのみ存する歌を若干づつ有する

事になるのである。次に(甲)(乙)(丙)(丁)には存するが(類)(歌)には存しない歌に就いて見るに、(甲)(乙)の終りには共に「深養父人眞具して題三を三十首づつよみ侍りけるに人しれぬ戀を」といふ詞書のある二十九首があり、(甲)には忠岑・伊衡・躬恒の三人が互に問ひ答へた歌三十八首があり、(丁)には詩歌合の歌六首、聯歌六首がある。これ等の集團をなす歌はそれ〳〵の本の特色とすべきであらう。而して類從本・歌仙歌集及び(丁)には、年月日を掲げた詞書の多い事が特色であり、(乙)(丙)にはそれが少いのである。【組織】諸本とも部類はない。(甲)は三つの要素から成つてゐる。(一)純粹の家集と考へられるもので、忠岑・伊衡・躬恒の問答歌にて終る。(二)勅撰集から書き拔いたと思はれるもので、深養父・人眞と共に作つた三十首にて終る。(三)他本の歌。(乙)は重複が多く、錯簡があるらしい。(丁)は類從本と順序が全く一致してゐる。何故にかく內容を異にした各種の異本が存するかは不明である。　〔西下〕

第一圖表

	總數	重出歌	類從本と一致する歌	歌仙歌集と一致する歌	二本と一致せざる歌
類	432	2		246	
丁	473	14	430	255	20
歌	329		246		
甲	408	9	195	145	150
乙	384	30	177	130	127
丙	220		150	110	18

第二圖表

	總數	甲と一致する歌	乙と一致する歌	丙と一致する歌	丁と一致する歌	其の他
甲	150		107	13	4	43
乙	127	107		14	4	19
丙	18	13	14		3	4
丁	20	4	4	3		16

三のじ みつのじ　「切字」を見よ。

三のしるべ みつのしるべ　隨筆　三卷【著者】藤井高尙【名稱】「道のしるべ」「歌のしるべ」「文のしるべ」の三を合せて三のしるべと云ふ。【刊行】文政十二年【解說】「道のしるべ」（上卷）では、神道の直く正しい敎を以て修身の要を悟るべきことを說く。文政七年正月の所編である。また歌文の「二つのしるべ」（中・下卷）では、歌を詠み文を作る用意・方法を述べてゐる。卷首に、文政九年秋の自序（「ことりすべていふ事」と題して）がある。　〔和田〕

光則 みつのり　國學者【姓名】保田（やすだ）氏。通稱貞治【號】渚の舍【生歿】寬政九年三月仙臺中島町に生れ、明治三年三月十七日歿す。享年七十四。【墓所】仙臺新寺小路光壽院【家系】父は保田光利、仙臺藩の大番士である（光則も仙臺藩の大番士）。【學系】漢學は志村篤治（石溪と號す）・櫻田周輔（號虎門）に受け、和歌を河田了我に受けた。國語は本居大平・平田篤胤に書を通じて敎を受けた。【閱歷】光則は和漢の學に通じ、就中歌學に秀でてゐた。天保頃、養賢堂（藩の學校）の學問方指南役となり、次いで和學指南役になつた。又藩主伊達慶邦に和歌を敎へてゐた。文久元年伊達家の一族である石川家の成敎學館の學頭を囑せられたが、故あつて間もなく辭した。【著書】多く他人の著を增補訂正したものである。〇雅言集覽增補十三卷（文久三年成）〇雅言集覽續編三十二卷（文久三年成）〇揷頭抄增補三卷（嘉永四年成）〇脚結抄考一卷〇裝脚結詞の打合圖一鋪（弘化四年正月成。刊。「脚結抄」の裝圖を「詞八衢」「紐鏡」「友鏡」等の說に依つて增補したものである）〇和訓栞後篇〇語例考〇稱謂考〇訓原〇陸奧風土記等。【參考】保田光則傳資料（言語學雜誌一ノ七）　〔龜田〕

光榮 みつひで　歌人【姓名】烏丸。本姓藤原氏。名は一說に「みつやす」【生歿】元祿二年に生れ、寬延元年（二四〇八）三月十四日歿す。享年六十。【法名】不昧眞院【閱歷】父宣定は

日野資康─豐光（烏丸祖）…光廣…（四代）…宣定─
光榮─光胤（養子）

彼の四歲の時左中辨で夭死した（享年二十二）。光榮は元祿十一年（十二歲）元服敍從五位上、寶永元年（十六歲）權右少辨、同五年藏人に陞進した。かくて享保三年藏人頭、更に右大辨、その翌年には正四位上で參議を拜すると云ふやうに、地位に於て順潮の生涯であつた。歌道の家で、幼時からその敎養をうけたと見えて、「榮華和歌集」には七歲の時の詠（今朝よりはそらもすゞしく吹きそめてそれと知らるる秋の初風）、八歲の時の詠歌などが入つてゐる。百首の中に寶永二年のものがあるが、寶永二年は彼の十七歲の年で、如何に歌道に精進したかがわかる。享保時代には特に靈元院の御輔導も加はり、著しい進步を見た。官位も愈々進み、享保七年には權中納言、同九年には權大納言に任ぜられた。百首歌のみ拾つても、享保四年、同五年、同六年、同八年と云ふやうに隔年の作品が傳へられてゐる。今人丸と俗稱されるに至つたことでも社會的輿望の絕大さも示してゐる。靈元院も彼を激賞し、一生十首の秀歌を遺し得ようと豫言し給はれたといふ。元文五年には、靈元院の皇子職仁親王に天仁遠波を御傳授申し上げた。その才德を聞いて指導を仰がうとするものが年を繼いで增した。又延享三年には關東から信州に亙る大旅行を試みた。寬延元年內大臣となつたが、間もなく辭し、その年三月に薨去した。【著作】聽玉集一卷（寫。別名「加藤信成聞書」とも「請露玉話」とも。門人加藤信成が、元文元年九月から同五年までの間に聽いた師の歌話を筆錄したもの）〇詠歌金玉論一卷（寫。則榮が中院通茂以下烏丸光榮等に及ぶ十數家の歌人の歌道庭訓を輯めたもの）〇內裏進上之卷（「不昧眞院殿奧祕之卷」とも。寫本、一卷。元文二年櫻町院の叡覽に供へたもの）〇松平筑前守に送る書一卷〇烏丸前大納言光榮卿御口授一卷（寫）〇和歌敎訓十五箇條一卷（「詠歌覺悟」とも。寫。本書には幻交庵寂翁の「烏丸光榮公敎訓十五箇條抄」と云ふ註書がある）。【歌集】烏丸光榮公集二卷（寫。上卷は春・夏・秋・冬、下卷は戀・雜の部。すべて題詠で、圖書寮藏本のものには、各部に數首づつの書入追加がある）〇榮葉和歌集八卷（別項）〇烏丸光榮百首一卷（寫。享保六年三月の御着到百首であるが、「榮葉集」にも出てゐるものであり、かゝる種の百首の一卷となつたものが、他にも殘存してゐるであらう）〇不昧眞院殿御集三卷（寫。御集別本の一つで、「榮葉集」に似て異點が多い。門人が別に私撰したものであらう）〇新類題和歌集二十卷（寫。靈元院の勅を奉じ、光榮外四人の者が古今の名歌を輯めたもので、二十卷本の外に十五卷本、十三卷本もある）。なほ光榮は文章にも優れ、「扶桑殘玉集」中に選入されてゐるものに、「碧梧亭記」

「盆山の銘」「宗祇水の記」「阿蘇宮大宮司に與へらるゝ和歌の序」「桃源院を悼めることば」「桂の別殿にあたふ詞並に和歌」「打出の濱」（延享三年の旅行記）の七篇がある。初めの四篇は「榮葉集」に出てゐる。

【作風・地位】元祿時代より文運隆盛の餘波に乘せられて、堂上歌風の上にも一時爛漫たる花時が到來した。實陰・似雲・通茂・通躬・光榮・光胤等の流がそれである。かくてその末流から廬庵・景樹の輩出したのも事實であるが、堂上歌風と云ふ意味から言へば、この享保時代は消滅せんとするものの最後の火炎であつたやうにすら思はれる。彼等の風雅道は飽く迄正統派でありながら既に環境から取殘されんとするのを意識せざるを得なかつた。この光榮今人丸の不斷の精進の跡にもさうした哀調を否定することが出來ない。（榮葉和歌集參照）

【參考】野史○大海のはし○一話一言○橘窓漫錄○日本歌書綜覽　〔齋藤（淸）〕

光平（みつひら）　歌人・國學者【姓名】伴林氏（普通「ばんはやし」と讀むが、光平自ら「ともばやし」と書せるものがある）。初名周永。また洲永。通稱六郎【號】蒿齋【生歿】文化十年九月九日河內國南河內郡道明寺村尊光寺に生れ、元治元年（二五二四）二月十九日、京都六角の獄に斬らる。享年五十二。【閱歷】父は賢靜、眞宗の僧侶であつた。六歲、同郡の西願寺に養はれ、苦學多年、十八歲にして一寺の住職となつたが、後、國史を讀むに及んで、皇學を修むべき志を抱き、二十九歲、攝津伊丹に中村良臣を訪うて聞くところあり、更に因幡勝宿加知彌神社の祠官飯田秀雄の許に投じて兄弟の約を結び、秀雄の七郎年平に對して、伴林六郎光平と稱した。伴林は産土の伴林神社に因んだのであつた。ついで紀伊に加納諸平を訪ひ、從學一年、更に江戸に出でて伴信友に學んだ。その後、信友の囑に應じて山陵を調査し、幕末多事の折柄、勤王の大義を唱へ、天下の志士と交つた。文久元年還俗、三年、藤本・松本・吉村等天誅組の大和の義擧に加はつてその記錄掛となり、轉戰數旬、遂に敗れ、光平は捕へられて奈良より京都に送られた。光平獄中にあつて、同志の所囚二十餘人に「直毘靈」（別項）を講じ、義擧の顚末を記して「南山蹈雲錄」を著はした。明治二十四年、靖國神社に合祀、ついで從四位を追贈せられた。【著作】伴林光平全集二册（小野利敎編、大正八年刊。歌集・文集・上京紀行・垣內の七草・南山踏雲錄・三政一致說等を收む）○吉野紀行○月瀨紀行○園の池水一卷（國書刊行會編、百家隨筆第一册所收。國學歌道を論じ、尊王憂國の志を述べたもの）○於茂祕傳草（隨筆。やまと叢誌第五）○野山のなげき（やまと叢誌第七）○南山蹈雲錄（十津川擧兵以來、囚はるゝまでの籠中日錄）。〔以上森〕

【歌風】大體に於て、新古今風である。古調も好んでゐたので、さうした風體のものもあるが、何れも自在な詠み口で、滯るところのないのが特徵である。年若い頃に苦しんで勉强し、基礎的なものを根柢に有したので、いざとなると才氣煥發といふ趣があつたのであらう。數多い歌を見ると、さうした面影が見られる。「垣內の七草」を見ても分る。これは、春・夏・秋・冬・戀・旅・賀、即ち「古今」以後の部類に從つた七題を設け、これを七體の歌として詠んでゐる。一は太古風といひ、紀・記に摸したものである。二は上古風、萬葉調である。三、中古風、古今調。四、近昔風。新古今の氣韻に擬してゐる。五、後世風、二條家の流風である。六、近世堂上風、「三玉集」（別項）を摸してゐる。七、當時地下流行風、「鰒玉集」の風致を學ぶといふのである。これ等がそれ〴〵にその面貌を傳へてゐるのは、單なる技巧とだけでは濟まない。彼の才氣、彼の力量が背後でものをいふやうに思ふ。長歌には特に擬古體と斷つたものさへある。何處かに氣兼ねがあつたやうで、思ひ切つて古調になれなかつたところに、彼にも新しきものを追ふ心があつたのではなからうか。さうして、さらりとした輕みのある感じの細かい點に、その長所がよく伸びてゐると思ふ。〔以上鐘田〕

【參考】伴林光平傳（小野利敎著）（全集上卷の內）○伴林光平一代記（武田彌富久）

光廣（みつひろ）　歌人・假名草子作者【姓】烏丸【生歿】天正七年に生れ、寬永十五年（二二九八）七月十三日歿す。享年六十。【號】泰翁・宗山・法雲院【家系】藤原北家。日野氏の旁流。父光宣は從一位准大臣。長子光賢は中納言となり、細川忠興の女を娶る。孫に權大納言資慶があり、五代の孫內大臣光榮（別項）がある。【閱歷】天正九年、三歲にして叙爵せられ、侍從・左右少辨・藏人に歷任した。慶長四年には左中辨に進み、藏人頭に補せられ、正四位上。後、直ちに右大辨參議に列り、從三位に進む。中院通勝・三條西實條等と共に、細川幽齋に學び、古今傳授を受く。その子孫は代々彼の系統を引く。稀に見る天分と環境とに惠まれ、早くもその學才の凡ならざるを認められ、若くして西洞院時慶・舟橋秀賢等と交遊し、禁裡の御歌會又は御講釋に侍するは勿論、宮中の書籍の整理・保存等の事にも參與してゐた。然るに慶長十四年（三十一歲）圖らずも大不祥事に連坐した。卽ちこの一ケ年來その友大炊御門賴國・花山院忠長・飛鳥井雅賢・難波宗勝・德大寺實久・中御門（松本）宗信・兼康備後守成政・猪隈敎利等と共に、內裏の局數名を北野或は淸水に誘ひ出して密會を續けてゐたと云ふ事である。局衆とは廣橋兼勝の女（典侍）・中院通勝の女（權典侍）・水無瀨氏成の女（掌侍）・唐橋在通の女・兼康成政の妹（命婦）等の人々で何れも名門の子女である。七月四日首領と目された猪隈敎利及び連絡の衝に當つた兼康備後守成政兄妹は死刑に決し、その他はそれぞれ流罪仰付けられた。光廣はただ位官を停められたに過ぎなかつたやうである。やがて慶長十六年四月一日赦されて再び參議左大辨に復した。翌年には權中納言を經て元和二年權大納言に至り、同六年正二位に進み、それより二十四年にして世を去つた。慶長五年秋、幽齋が丹州田邊城に立籠つて三成の包圍に會つた時、天皇いたく歌道の祕訣の絕えん事を惜しまれ、光廣に命じて行きて開城を諭さしめられた。この大任を果した時、光廣は僅かに二十二歲であつた。傳によるとこの時幽齋は戰歿を慮つて、「古今傳授」（別項）の祕錄を篋に封じ、戰死の時を待つて開くべしと、中院通勝・三條西實條・光廣の三人に預けた。併し戰ひ果つるの日、その約を固守した者はただ光廣のみであつた。幽齋大に感じて更に筆外の祕訣を授けたと云ふ。彼の和歌の譽を讚へた傳說は極めて多い。彼の多能は和歌のみに止まらず、狂歌・俳諧にも筆を染め、又幾多の假名草子を書いてゐる。書は父より尊朝法親王流を受けて譽高く、彼の筆に書かれた古典は、數多く現存してゐる。【著作】彼の作と傳へられてゐるものは極めて多いが、明確に信じ得るものは二三を出でない。○黃葉和歌集九

卷○目覺草二卷○春の明ほの一卷○耳底記一卷○職人盡哥仙三卷○筆のまよひ一卷○花見の記○竹齋二卷（別項）○仁勢物語二卷（別項）○尤草子二卷（別項）○恨之介二卷（別項）○田夫物語一卷○伊曾保物語三卷（別項）○百人一首題圖二卷○家集二卷○面授口譯一卷○蹴鞠書一卷○東照宮御鎭座本記○東照權現御遷座之記○日行山紀行○東の道の記等。

てゐる。

【業績】歌は二條派傳統その儘の作風で、極めて因襲的な特色のない歌を詠んでゐるが、彼の功績は一に近世文學の黎明期に際して、幾多の假名草子を書いてその興隆に資したと云ふ點にある。彼の諸作は若しその著作の傳を信ずるならば、實に多樣なる形式を取つてゐることに氣付く。そしてその何れもが近世文

抄したものがあるが、これ等が三物の形に於て傳存する最も古いものであらう。この後も「實隆公記」その他の日記などに、發句・脇・第三の三句のみを拔抄したものが幾らも見られるが、そのうち三句のみを作る事も生じたのであらうし、三物といふ名稱も起つたのであらう。俳諧に於ては貞德から見えてゐる。卽ち慶安四年四月德川家光が薨じ、同年五月家

貞德永代記（中島隨流）○篇突（森川許六）○滑稽太平記（北藤浮生）○誹諧名目抄（早川宗順）○俳諧附合小鏡（大島蓼太）○俳家奇人談（竹內玄々一）○燕石襍志（瀧澤馬琴）○俳諧歲時記（瀧澤馬琴）○貞享式海印錄（原田曲齋）○俳諧提要（五乳人鈎雪）

三物拾遺（みつものしふゐ）　俳諧集　天地人三册【編者】仙石盧元坊【成立・刊行】享保庚戌（十五年）三月の自序があるから、當時の刊行であ

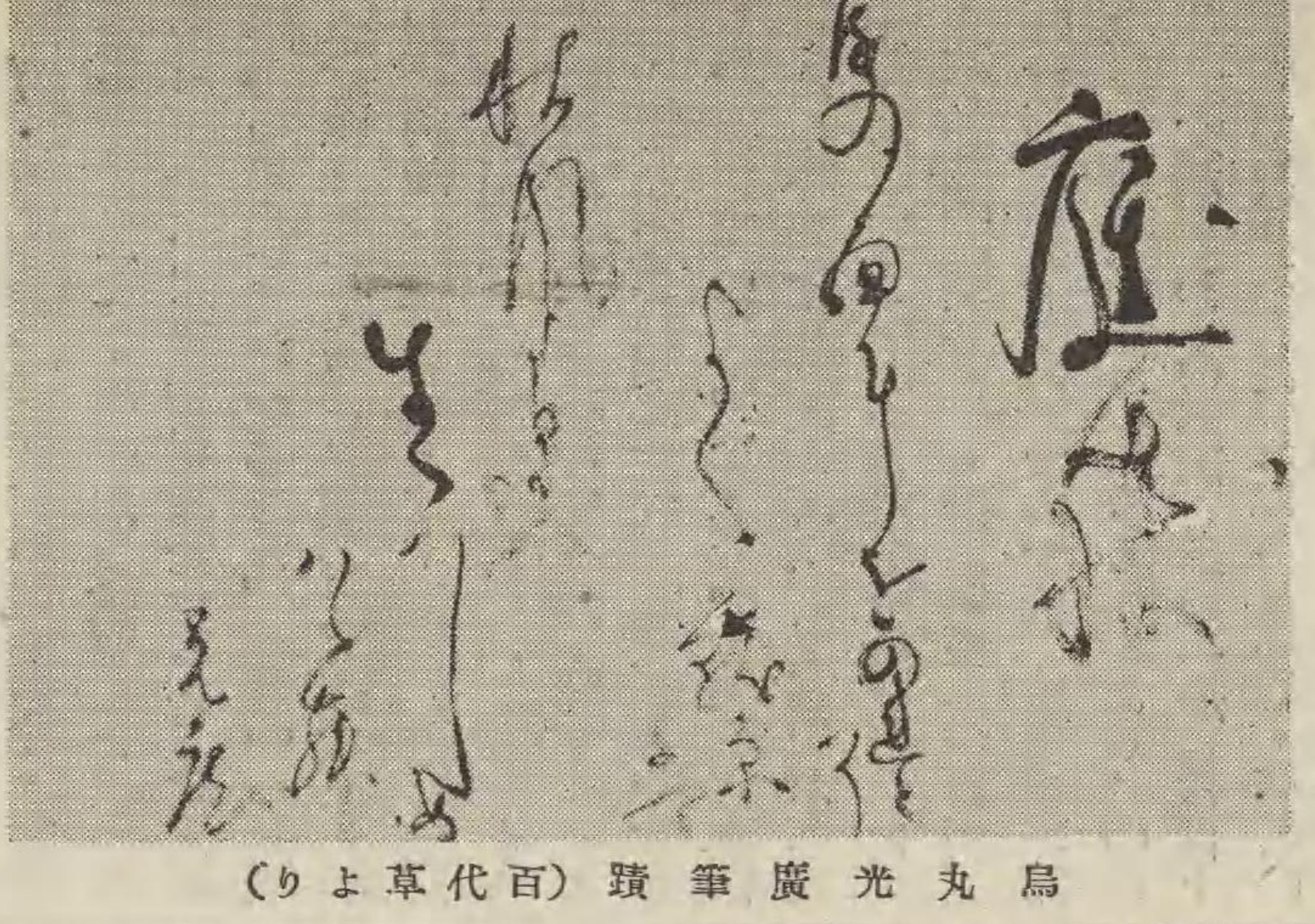
（普通「ばんはやし」と讀むが、光平自ら「ともばやし」と書せるものがある）。初名周永。また洲永。通稱六郎【號】蒿齋【生歿】文化十年九月九日河內國南河內郡道明寺村尊光寺に生れ、元治元年（二五二四）二月十九日、京都六角の獄に斬らる。享年五十二。【閲歷】父は賢靜、眞宗の僧侶であつた。六歲、同郡の西願寺に養はれ、苦學多年、十八歲にして一寺の住職となつたが、後、國史を讀むに及んで、皇學を修むべき志を抱き、二十九歲、攝津伊丹に中村良臣を訪うて聞くところあり、更に因幡勝宿加知彌神社の祠官飯田秀雄の許に投じて兄弟の約を結び、秀雄の七郎年平に對して、伴林六郎光平と稱した。伴林は產土の伴林神社に因

【歌風】大體に於て、新古今風である。古調も好んでゐたので、さうした風體のものもあるが、何れも自在な詠み口で、滯るところのないのが特徵である。年若い頃に苦しんで勉强し、基礎的なものを根柢に有したので、いざとなると才氣煥發といふ趣があつたのであらう。數多い歌を見ると、さうした面影が見られる。「垣內の七草」を見ても分る。これは、春・夏・秋・冬・戀・旅・賀、卽ち「古今」以後の部類に從つた七題を設け、これを七體の歌として詠んでゐる。一は太古風といひ、紀・記に摸したものである。二は上古風、萬葉調である。三、中古風、古今調。四、近昔風。新古今の氣韻に擬してゐる。五、後世風、二條家の流風で

言資慶があり、五代の孫內大臣光榮（別項）がある。【閲歷】天正九年、三歲にして敍爵せられ、侍從・左右少辨・藏人に歷任した。慶長四年には左中辨に進み、藏人頭に補せられ、正四位上。後、直ちに右大辨參議に列り、從三位に進む。中院通勝・三條西實條等と共に、細川幽齋に學び、古今傳授を受く。その子孫は代々彼の系統を引く。稀に見る天分と環境とに惠まれ、早くもその學才の凡ならざるを認められ、若くして西洞院時慶・舟橋秀賢等と交遊し、禁裡の御歌會又は御講釋に侍するは勿論、宮中の書籍の整理・保存等の事にも參與してゐた。然るに慶長十四年（三十一歲）圖らずも大不祥事に連坐した。卽ちこの一ヶ年來その

二十二歲であつた。傳によるとこの時幽齋は戰歿を慮つて、「古今傳授」（別項）の祕錄を篋に封じ、戰死の時を待つて開くべしと、中院通勝・三條西實條・光廣の三人に預けた。併し戰ひ果つるの日、その約を固守した者はただ光廣のみであつた。幽齋大に感じて更に筆外の祕訣を授けたと云ふ。彼の和歌の譽を讃へた傳說は極めて多い。彼の多能は和歌のみに止まらず、狂歌・俳諧にも筆を染め、又幾多の假名草子を書いてゐる。書は父より尊朝法親王流を受けて譽高く、彼の筆に書かれた古典は、數多く現存してゐる。【著作】彼の作と傳へられてゐるものは極めて多いが、明確に信じ得るものは二三を出でない。○黃葉和歌集九

卷○目覺草二卷○春の明ほの一卷○耳底記一卷○職人盡哥仙三卷○筆のまよひ一卷○花見の記○竹齋二卷（別項）○仁勢物語二卷（別項）○尤草子二卷（別項）○根之介二卷（別項）○田夫物語一卷○伊曾保物語三卷（別項）○百人一首題圖二卷○家集二卷○面授口譯一卷○蹴鞠書一卷○東照宮御鎭座本記○東照權現御遷座之記○日行山紀行○東の道の記等。



烏丸光廣筆蹟（百代草より）

【人物】幽齋のすゝめに依つて、一糸和尚の許に禪を修めた故か、寛濶恬濟、甚だ逸話に富む。居室十疊ばかりの中に書物を引き廣げ、煤塵は積むに委せ、衾を疊まず隨時睡を取つた。愛用の硯箱は三本入りの扇子箱であり、また後水尾法皇の勅にも拘はらず、邸の修理を固辭したとか、甚だしく入浴を嫌つて、これを强ふれば嬰兒の如く泣いたとか、時には遊里に遊んで戲歌をものして興じたとも傳へてゐる。

【業績】歌は二條派傳統その儘の作風で、極めて因襲的な特色のない歌を詠んでゐるが、彼の功績は一に近世文學の黎明期に際して、幾多の假名草子を書いてその興隆に資したと云ふ點にある。彼の諸作は若しその著作の傳を信ずるならば、實に多樣なる形式を取つてゐることに氣付く。そしてその何れもが近世文學の諸形體の先驅をなすものである。例へば「竹齋」（別項）の名所記に於ける「根之介」（別項）の戀愛小說に於ける、「仁勢物語」（別項）の古典飜案の滑稽物に於ける等々。なほ外國文學の最初の飜譯者として「伊曾保物語」（別項）の作者に擬せられてゐる。

【參考】大日本史料○野史○國學者傳記集成○近世作家大觀○新撰列傳體小說史○新講和歌史　〔鶴見〕

三つ面子守（みつめんこもり）「子守」を見よ。

三物（みつもの）　連歌・俳諧【名義・名稱】連歌並に俳諧の發句・脇・第三の三つを併せ稱する名。百韻でも五十韻でもこの三句は大切なもので、これを作る者は榮譽となつてゐるから、この三句が自然拔抄されたり、又この三句だけを作つて見たりすることが起つたらしく、かくしてこれが獨立の取扱を受けるやうにもなり、果ては三物といふ名目も起つたものであらう。後に新年を祝つて興行するものになつてから、三物とは天地人三才の義であるとか、發句は天意、脇は地意、第三は人意であるとか、三の數は火の形で陽を貯ふる義であるとか云ふ說などが起つてゐるが、これ等は要するに後から起つた附會說であらう。

【沿革】足利義敎が、永享二年二月十一日北野社で萬句を行つた。その發句・脇・第三を古く抄したものがあるが、これ等が三物の形に於て傳存する最も古いものであらう。この後も「實隆公記」その他の日記などに、發句・脇・第三の三句のみを拔抄したものが幾らも見られるが、そのうち三句のみを作る事も生じたのであらうし、三物といふ名稱も起つたのであらう。俳諧に於ては貞德から見えてゐる。卽ち慶安四年四月德川家光が薨じ、同年五月家綱が征夷大將軍に任じ、翌年九月改元して承應元年となつた時、

元日
御成人の君に來てあふや千代の春　貞德
粧り竹にもわたるから鳥　正章
鍬入るゝ苗代小田の土肥えて　西武

といふ三物を作つた。かくて貞德は毎年三物を組み、必ず正章（まさあきら）・西武（さいむ）と共にしたと云はれる。明曆の頃から、連歌・俳諧を通じて三物大に流行し、歲旦に連歌俳諧の宗匠の家で門弟を集めて三物を作り、これを歲旦拔（ひらき）（開）と稱し、又これを刷物として歲旦牒（帳・帖）と稱して市中に鬻ぐやうになり、この鬻ぐ者を三物賣と稱し、高聲に「連歌俳諧の三物」と呼んでこれを賣つた。天和貞享頃の歲旦牒を見ると歲旦三物の外に歲暮や和漢・漢和があつたり、歲旦歲暮の發句があつたりしてゐて、いつからかかくなり來つてゐる。元祿以降も餘風衰へず、都下の宗匠のみならず地方の宗匠も每年三物入の歲旦牒を發行し、それも初めは粗末な製本であつたが、追々華美なものを出すやうになつた。江戶末期には衰へたが、それでも明治に入つてもなほ舊派一般に惰勢を保ち、特に美濃風（別項）はなほ比較的盛んであつた。　〔福井・萩原〕

【參考】三物記北村季吟○日次記事黑川道祐○貞德永代記中島隨流○篇突森川許六○滑稽太平記北藤浮生○誹諧名目抄早川宗順○俳諧附合小鏡大島蓼太○俳家奇人談竹內玄々一○燕石襍志瀧澤馬琴○俳諧歲時記瀧澤馬琴○貞享式海印錄原田曲齋○俳諧提要五乳人鈎雪

三物拾遺（みつものしふゐ）　俳諧集　天地人三册【編者】仙石盧元坊【成立・刊行】享保庚戌（十五年）三月の自序があるから、當時の刊行であらう。京橋屋治兵衞刊。【解說】或る時、支考の許で、歲旦・歲暮の三ツ物の話から端を發して、「月花の風流より禽獸草木のさま〴〵にわたり、節供の遊びも年忘れの笑ひも、三ツ物に組ては目ざましからん。殊更夏冬の第三に至りては季節のわづらひもなく、元より神祇釋敎以下の名目を嫌はねば、虛實も自ら自在にして一卷の曲節も三句に無盡の働きあらん」と、茲にこの書撰集の志を起し、汎く各地俳人の四季の三ツ物を集めたものである。出羽鶴岡連中に始まつて、美濃郡上八幡の連中に至るまで、北越尾濃の俳人の作を主として收め、なほ嘗てその地に芭蕉・支考等が遊んだ折の舊會の作等をも拾つて居り、又名錄として各地俳人の發句をも擧げてゐる。とにかく三ツ物のみを集めて、かく大部の撰集としたものは他に類例がないであらう。　〔頴原〕

三矢重松（みつやしげまつ）　國語學者【生歿】明治四年十一月生れ、大正十二年五月十七日歿す。享年五十三。【墓所】東京雜司ヶ谷墓地【閲歷】重松は出羽國鶴岡の人で、祖父靜は藩の典學であつた。彼は先づ山形縣尋常中學校に入り、明治二十二年七月同校を卒業した。この間、別に中臺直矢・角田俊次等に就いて漢籍を學び、また庄內英學會で英語を學んだ。當時一家は悲境に沈み、學資に乏しかつたの

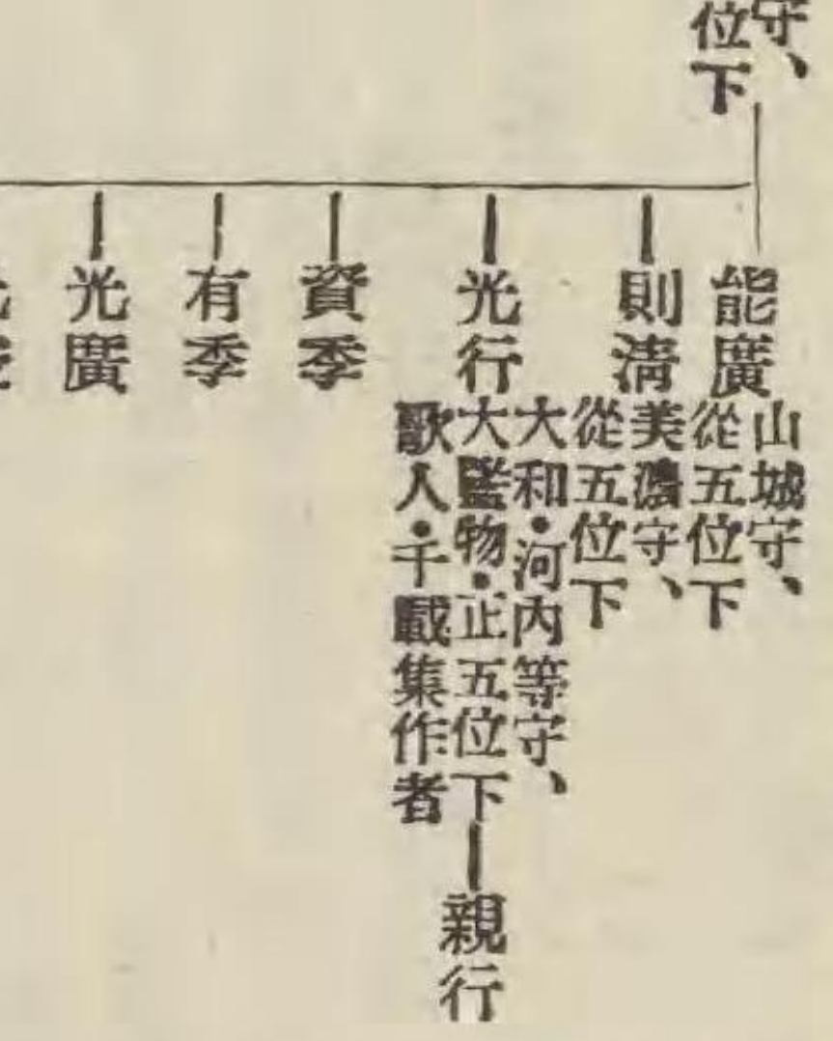
で、彼は明治二十三年九月上京して國學院の入學試驗を受け、その第一期の貸費生として入學した。同二十六年七月國學院を卒業し、同十一月、文部大臣（西園寺公望）官房圖書課に奉職した。が、大臣と意見を異にしたので諭旨免職になつた。次いで岡山縣高梁中學校教諭となり、次いで大阪府立第五中學校に轉任した（三十一年四月）。明治三十二年九月嘉納治五郎に招かれて東京へ歸り、神田猿樂町に亦樂書院を設立して支那留學生を敎育した。同三十六年國學院の商議員を囑託せられ、諸種の出版物の編纂校訂に從事した。同四十一年國學院の中に國文學會を組織し、更に大正五年に源氏物語全講會を起して、「源氏物語」の講義を始め、爾後毎週講義を繼續して完了した。この頃東京高等師範學校に教鞭を執つてゐたが、大正九年八月國學院大學敎授に任命せられた。次いで、同大學へ學位請求論文「古事記に於ける特殊なる訓法の研究」を提出して、歿する直前に文學博士の學位を授與せられた。

【業績・著作】國文學にも造詣が深かつたが、專門は國語學殊に文法であつて、有益な研究が多い。著述には左の如きものがある。○高等日本文法（別項）○作歌と助辭一冊（明治四十四年刊。「高等日本文法」の增訂版の卷末にも收む）○古事記に於ける特殊なる訓法一冊（大正十四年二月刊）。〔編纂校訂〕八代集抄二冊（刊）○勅撰作者部類一冊（刊）○賀茂眞淵全集六冊（刊）等。

【參考】双涙錄 堀江月明（國學院雜誌三〇ノ六）○芳賀博士及稻村眞里の弔辭（國學院雜誌二一九ノ九）　〔鷗田〕

三山（みつやま）「戀慕物の謠曲」を見よ。

光行（みつゆき）學者【姓】源【法號】寂因（明月記）【生歿】「爲家集」卷七雜下に「寛喜元年入道前河内守光行六十算」とあり、「明月記」寛喜元年十二月十日の條に、「光行入道請取六十賀（其年六十七云々更不得其心）」とあるから、六十と稱した年が、實は六十七であつたことが明かであり、これより逆算して、長寛元年の生れであると推定される。歿年は明かでないが、文暦二年（一八九五）七十三歳以後は、その名が見えないから、恐らくその頃に歿したものであらう。



【學統】「原中最祕抄」「紫明抄」等の記述によれば、藤原俊成の影響を受けたらしい。釋正徹の「なぐさめ草」に「抑光源氏の物がたりは、五條の三品入道釋阿、河内守光行等、專是をもてあそばされけるとかや」とあり、「東野州聞書」に「河内流と申は俊成卿第一也」とあつて、源語研究の系統の異なるものでなかつた事を裏書してゐる。【閲歴】治承四年正月二十八日民部大丞に任ぜられ（玉葉）、同四月二十一日從五位下に叙せられ（山槐記）、又建久二年以前に於て大和守となり、從五位上に叙せられてゐる筈である。壽永三年四月十四日、父豐前守光季（光遠とも）の平家に與（くみ）して罪を得たのを愁訴せんがために鎌倉に下向し、建久十年二月四日、源賴家、征夷大將軍に任ぜられるや政所に侍候した。元久元年四月十三日正五位下に叙せられ、その年「蒙求和歌」十四卷を著はした。この頃「源氏物語」を校訂し、又俊成を初め諸家の考說を集め、註釋の業に從つた（原中最祕抄）。元久二年十一月三十日左馬允に（明月記）、建暦三年四月七日大監物に任ぜられた（勅撰作者部類）。承久三年五月十九日、義時追討の宣旨に關して罪を得、將に誅せられんとするや、子、親行泣いて死罪を許されんことを訴へ、辛うじて救はれた（吾妻鏡）。後、京都に歸り、寛喜元年關東に下つた（明月記）。文暦二年二月四日相地に關し、同じく六月三十日六月祓に關し、幕府の諮詢に對して意見を答申した。時に光行七十三歳である。その後の光行の動靜は不詳。光行はその子親行と共に文學・故實の道に精しく、「源氏物語」の校本を作り、「水原抄」の草案を起し、屢々和歌・連歌の會或は歌合に出席した（原中最祕抄奥書）。光行は、「平家物語」の編纂に關係したらしく（平家物語考）、また子親行とともに、「東關紀行」の著者にも擬せられてゐる（東關紀行解詳）。

【著作】〔和歌〕「月詣和歌集」羇旅に一、戀に一、「民部卿藤原經房卿家歌合」に五、「東撰和歌六帖」に五、「夫木抄」に十二首あり、又「勅撰作者部類」によれば、「千載集」冬に一、戀二に一、戀三に一、「新古今集」雜上に一、「新勅撰集」雜一に二、雜二に一、「續後撰集」雜中に一、「續古今集」雜中に一、「續拾遺集」雜春に一、「新後撰集」雜上に一、「玉葉集」春下に一、「續後拾遺集」雜下に一、「風雅集」秋下に一、「新千載集」雜下に一、「新拾遺集」冬に一、戀三に一、「新後拾遺集」雜下に一、「新續古今集」雜上に一首を收められてゐる。〔著書〕水原抄（別項）○蒙求和歌十四卷（元久元年秋成。蒙求の中から百五十箇の故事を抄出し、國語に譯して、標題毎に、四季・戀・雜の和歌を配して詠んだもの）○百詠和歌十二卷（元久元年十月成。自詠二百四十首を撰んで註を加へたもの）。　〔池田〕

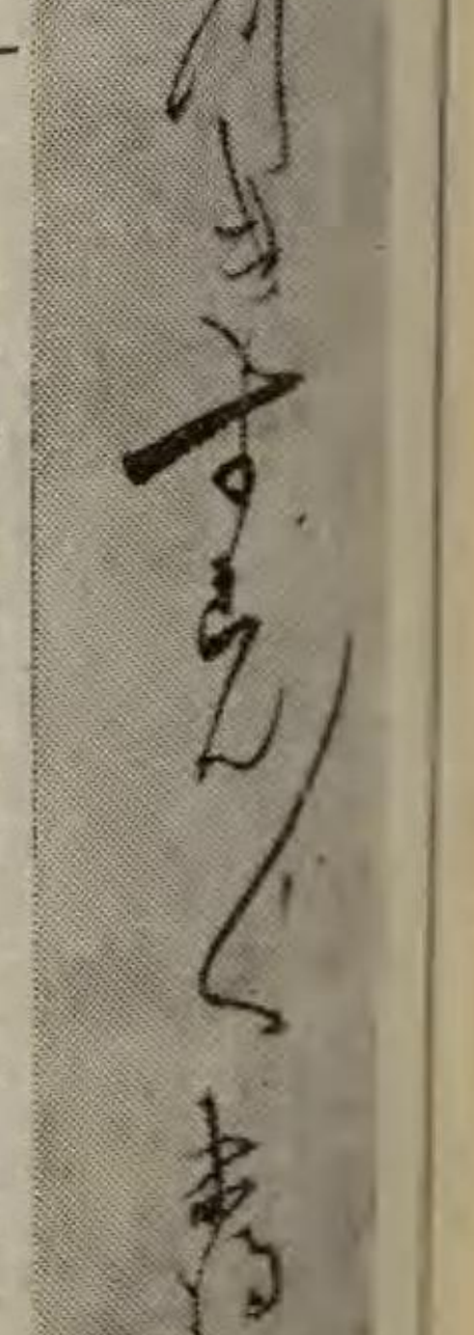
【參考】東關紀行詳解 鳥野幸次○水原抄紫明抄の撰者 山脇毅（藝文一二ノ一）○源光行親行年譜（上下）同上（藝文一二ノ四・五）○源氏物語研究史の新資料 橋本進吉（國語と國文學二ノ一〇）

光世（みつよ）有職家【姓】裏松【法號】固禪【生歿】元文元年十一月十一日生れ、文化元年（二四六四）七月二十六日歿す。享年六十九。【閲歴】前權中納言益光の子。延享四年、十二歳で家督を相續、從五位下に叙せられた。寛延二年（十四歳）元服、昇殿を許され、左兵衞佐に任ぜられた。寶暦六年（二十一歳）八月、右少辨に任ぜられ、同八年藏人に補せられ、次いで左少辨御祈奉行・氏院別當となる。同年、竹内式部の事に坐して永く蟄居の身となつた。彼の大著「大內裏圖考證」は、實にこの蟄居三十年間の收穫であつた。又この年十二月、父を喪つた。然るに天明八年內裏炎上し、老中松平定信が造營の事を掌ることとなり、光世の有職に精しいことを聞いて問ふところがあつた時、その著書を示すと、大に歎賞せられ、奏してその蟄居を解かれた。爾來內裏造營の事に關して、種々その問に應ずることとなつた。寛政二年新內裏竣工し、往古の制に復することを得たのは、光世獻替の功、與つて大に力あつた。寛政十年六十三歳で落飾した。なほ前年「大內裏圖考證」を獻上し、終身金幣を賜はるの恩典に浴した。明治二十四年從四位を追贈された。【著書】大內裏圖考證（別項）○皇居年表五冊（明治十八年刊、延暦十三年以降安貞元年に至る皇居及び殿舍の年表、採存叢書所收）○皇居年表續篇五卷九冊（安貞二年以降元和三年に至り、第五卷は附錄南朝として延元元年以降元中九年まで記してある）。　〔石村〕

三手文庫（みてぶんこ）文庫【解說】京都上

加茂別雷神社の社家に屬してゐた文庫。はじめ神社に屬する社家（東・西・中央の三手に分れてゐた）が書物講を作つて圖書の蒐集に努め、その藏儲を三手文庫と稱した。然るに今井似閑（別項）が、晩年に自著「萬葉緯」を初め、師契沖の自筆本や手澤本等、計二百餘部を寄進することを申出で（自筆の奉納目錄が、三手文庫に藏されてゐる）、その歿後それ等が文庫に移される

も多く、更に闕文のあるのが多いやうである。【解說】もと三十六卷あつたのが、後、散佚したもので、古典全集本によれば、上卷には長德四年、長保元・二・六年、寛弘二年から八年まで、下卷には寛弘九年、長和二年、同四年から六年まで、寛仁二年から五年までを收めてあつて、終りに長德元年の條が類通の抄錄した「御堂御記抄」から拔いてある。本書は又



未得筆蹟

一端を知るのに便じてゐる。

【參考】日本古典全集解題 ○歷世紀錄 星野恒（史學叢說第一集）　〔石村〕

御堂前敵討（みだうまへかたきうち）「敵討御未刻太鼓」を見

やうは、前の字を取成して心を格外に遣つて居つたが、後、あらぬ事を言ひ散らすやうになり、興醒きて、人々にうとまれたといふことである。　〔野崎・萩原〕

【業績・著作】國文學にも造詣が深かつたが、專門は國語學殊に文法であつて、有益な研究が多い。著述には左の如きものがある。○高等日本文法（別項）○作歌と助辭一册（明治四十四年刊。「高等日本文法」の增訂版の卷末にも收む）○古事記に於ける特殊なる訓法一册（大正十四年二月刊）。〔編纂校訂〕八代集抄二册（刊）○勅撰作者部類一册（刊）○賀茂眞淵全集六册（刊）等。【參考】双涙錄 堀江月明（國學院雜誌三〇ノ六）○芳賀博士及稻村眞里の弔辭（國學院雜誌二一九ノ九）〔龜田〕

三山 みつやま 「戀慕物の諸曲」を見よ。

光行 みつゆき 學者【姓】源【法號】寂因（明月記）【生歿】「爲家集」卷七雜下に「寛喜元年

書」に「河內流と申は俊成卿第一也」とあつて、源語研究の系統の異なるものでなかつた事を裏書してゐる。【閱歷】治承四年正月二十八日民部大丞に任ぜられ（玉葉）、同四月二十一日從五位下に叙せられ（山槐記）、又建久二年以前に於て大和守となり、從五位上に叙せられてゐる筈である。壽永三年四月十四日、父豐前守光季（光遠とも）の平家に與して罪を得たのを愁訴せんがために鎌倉に下向し、建久十年二月四日、源賴家、征夷大將軍に任ぜられるや政所に侍候した。元久元年四月十三日正五位下に叙せられ、その年「蒙求和歌」十四卷を著はした。この頃「源氏物語」を校訂し、又俊成を初め諸家の考說を集め、註釋の業に從つた

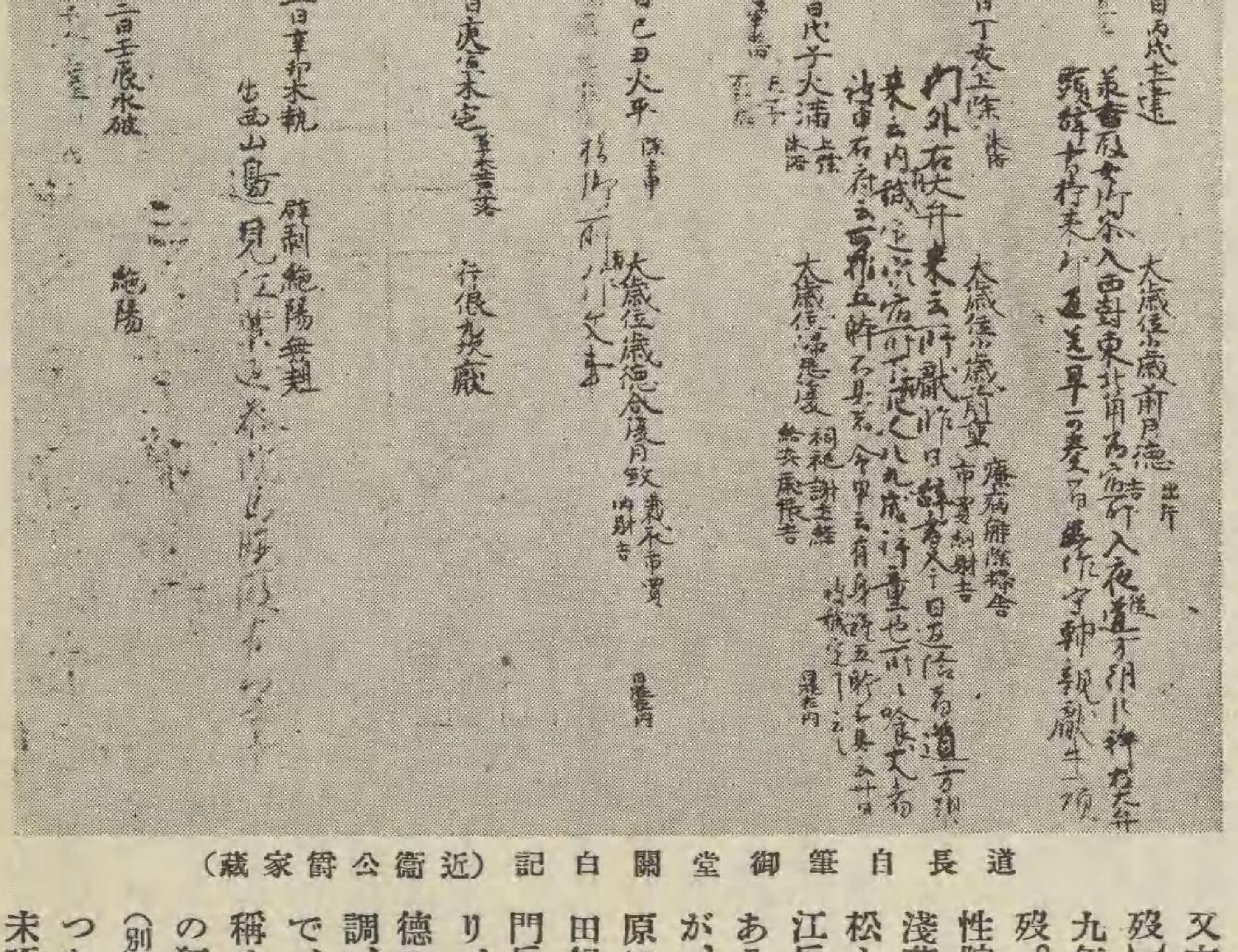
撰作者部類」によれば、「千載集」冬に一、戀二に一、戀三に一、「新古今集」雜上に一、「新勅撰集」雜一に二、雜二に一、「續後撰集」雜中に一、「續古今集」雜中に一、「續拾遺集」雜春に一、「新後撰集」雜上に一、「玉葉集」春下に一、「續後拾遺集」雜下に一、「風雅集」秋下に一、「新千載集」雜下に一、「新拾遺集」冬に一、戀三に一、「新後拾遺集」雜下に一、「新續古今集」雜上に一首を收められてゐる。〔著書〕水原抄（別項）○蒙求和歌十四卷（元久元年秋成。蒙求の中から百五十箇の故事を抄出し、國語に譯して、標題毎に、四季・戀・雜の和歌を配して詠んだもの）○百詠和歌十二卷（元久元年十月成。自詠二百四十首を撰んで註を加へたもの）。〔池田〕

奏してその蟄居を解かれた。爾來内裏造營の事に關して、種々その間に應ずることとなつた。寛政二年新内裏竣工し、往古の制に復することを得たのは、光世獻替の功、與つて大に力あつた。寛政十年六十三歳で落飾した。なほ前年「大內裏圖考證」を獻上し、終身金幣を賜はるの恩典に浴した。明治二十四年從四位を追贈された。【著書】大內裏圖考證（別項）○皇居年表五册（明治十八年刊、延曆十三年以降安貞元年に至る皇居及び殿舍の年表、採存叢書所收）○皇居年表續篇五卷九册（安貞二年以降元和三年に至り、第五卷は附錄南朝として延元元年以降元中九年まで記してある）。〔石村〕

三手文庫 みてぶんこ 文庫【解說】京都上

加茂別雷神社の社家に屬してゐた文庫。はじめ神社に屬する社家（東・西・中央の三手に分れてゐた）が書物講を作つて圖書の蒐集に努め、その藏儲を三手文庫と稱した。然るに今井似閑（別項）が、晩年に自著「萬葉緯」を初め、師契沖の自筆本や手澤本等、計二百餘部を寄進することを申出で（自筆の奉納目錄が、三手文庫に藏されてゐる）、その歿後それ等が文庫に移されるに及んで、文庫の藏書も多くなり、有數のものになるに至つた（全部移し終つたのは、元文四年の頃らしい）。似閑がその藏書を獻納するに至つたのは、當時の祠官岡本清茂と交り、その好意によつて文庫に藏する珍書を閲覽することが出來たのを德としてのことであつたらしい。似閑は、若沖・忠肅と並んで契沖門下として學殖に富み、蒐書にも優れて居つた。而して契沖と最も關係深く、契沖の遺書も、彼の手を經てこの文庫に納められ、契沖研究に又とない資料を傳へたのである（似閑參照）。この文庫は明治になつてから、上加茂別雷神社の有に歸した。【參考】加茂の文庫と今井似閑 鎌富秋村（國學院雜誌一六ノ四）〔植松・岩淵〕

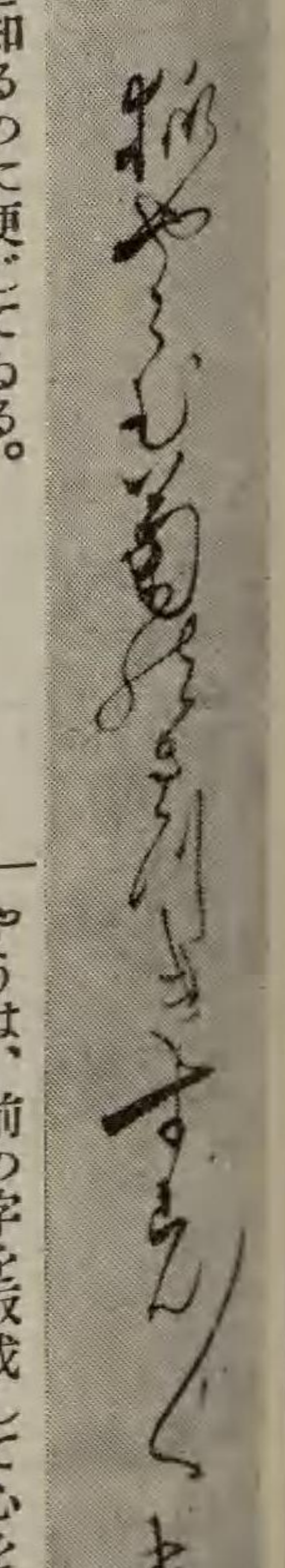
御堂關白記 みだうくわんぱくのき 日記 二册【著者】御堂關白道長【別名】「道長公記」「法成寺攝政記」「御堂御記」「御堂御曆日記」【諸本】道長自筆本は「御堂御曆日記」の名に依つても知られる如く具注曆に書いたもので、十三卷あつて今近衞公爵家に傳はつてゐる。道長の子賴通の寫した本は十六卷あつて、これ亦同家に傳はり、年次が自筆本と出入するところがあつて、自筆本の闕を補ふことが出來る。日本古典全集本は宮内省圖書寮藏の以上の二書の寫本に據つたものである。この外、傳寫本も多く、更に闕文のあるのが多いやうである。【解説】もと三十六卷あつたのが、後、散佚したもので、古典全集本によれば、上卷には長德四年、長保元・二・六年、寛弘二年から八年まで、下卷には寛弘九年、長和二年、同四年から六年まで、寛仁二年から五年までを收めてあつて、終りに長德元年の條が賴通の抄錄した「御堂御記抄」から拔いてある。本書は又別に附錄として「御堂關白集」と題し、道長の和歌を集めてある。なほ又各卷の卷頭に一葉づつ日記の一節をコロタイプ版にしたものを掲げて道長の筆蹟を示し、且つ日記の體裁の一端を知るのに便じてゐる。【參考】日本古典全集解題 ○歴世紀錄 星野恒（史學叢説第一集）〔石村〕



道長自筆御堂關白記（近衞公爵家藏）

御堂前敵討 みだうまへかたきうち 「敵討御未刻太鼓」を見よ。

未得 みとく 俳人・狂歌師【姓名】石田氏。又左衞門【別號】乾堂【生歿】天正十五年生れ、寛文九年（二三二九）七月十八日歿。享年八十三。【法名】自性院未得居士【墓所】東京淺草田島町誓願寺【俳系】松永貞德（別項）門【閱歷】江戶五誹哲（別項）の一人である。江戶兩替町に住したが、一時故ありて相州小田原に隱れ、又江戶に出て神田鍋町に住し、狂歌を以て門戶を張つたが、後、京に上り、令德（別項）に親しみ、貞德の門に入る。狂歌はその調、圓滑流麗、落想また奇警で、當時卜養（別項）と並び稱せられた。寛文年間自詠の狂歌を集め、「吾吟我集」（別項）を著はし、高名となつた。歿後その子要之助が未琢と號して亡父の業を繼いだが、三世未陌に至つてその跡を絶つた。俳諧は「滑稽太平記」の説によると、その附けやうは、前の字を取成して心を格外に遣つて居つたが、後、あらぬ事を言ひ散らすやうになり、興盡きて、人々にうとまれたといふことである。【參考】誹諧家譜拾遺集 ○滑稽太平記 ○俳家奇人談 ○誹諧名家錄 ○誹家大系圖 ○採菊暇筆 ○俳家系圖 大野洒竹 ○俳諧年表 星野麥人 〔野崎・萩原〕



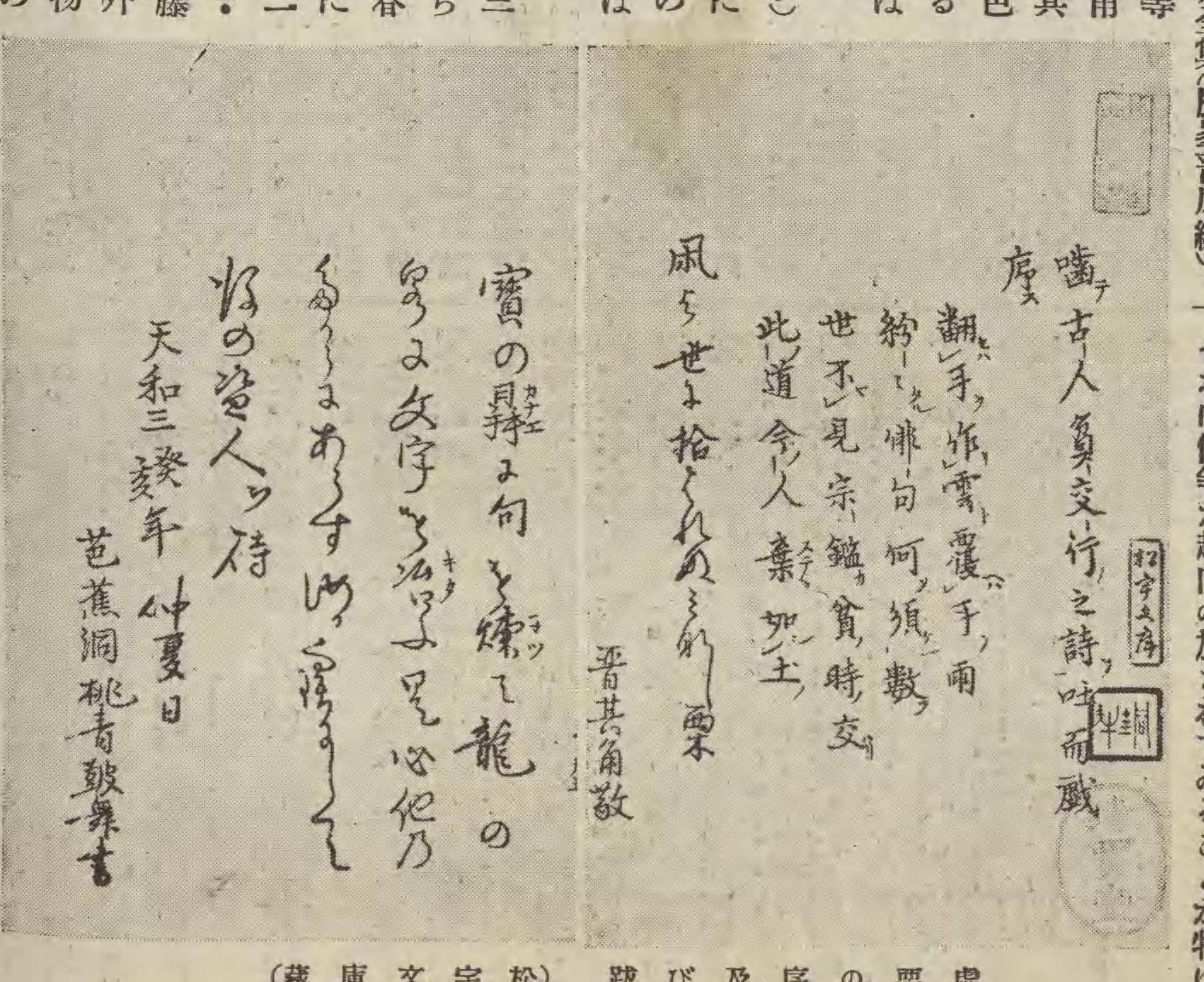
未得筆蹟

水戶史館珍籍考 みとしくわんちんせきかう 「和漢雜笈或問」を見よ。

三富朽葉 みとみきうえふ 詩人【本名】義臣【生歿】明治二十二年八月十四日、長崎縣壹岐郡武生村に生れ、大正六年八月二日、常陸國犬吠岬海岸に於て友人今井白楊と游泳中溺死した。享年二十九。【閱歷】曉星中學を經、早稻田大學英文科を出た。主として佛蘭西近代詩文を研究した。明治四十二年自由詩社同人となり、人見東明・加藤介春・福田夕咲・今井白楊等と「自然と印象」に詩作を發表した。後、佛蘭西象徵派の詩人の研究に沒頭し、ヹルレエヌ、マラルメ、ランボオ等の詩を飜譯、更に「ヹルハアレンの研究」を「早稻田文學」誌上に連載した。【作品・作風】生前には一冊の集もなかつたが、死後、增田篤夫・福士幸次郎等によりて「三富朽葉追悼錄」が編まれ、又「三富朽葉詩集」（第一書房）が出版された。その詩は佛蘭西近代詩の影響を受け、纖細な神經と敏感とをもち、明るく華やかな中に一味の哀感をも藏してゐた。ことに語感の清新であつたことが一つの特徵である。現代詩人全集第三卷（新潮社）所收。〔川路〕

水上瀧太郎（みなかみ たきたらう）　小說家・戯曲家【本名】阿部章藏【別號】はじめ阿部省三と署名した。【閱歷】明治二十年十二月六日、東京麻布飯倉に生る。慶應義塾幼稚舍及び普通部を經て同大學部理財科に入り、明治四十五年業を終へ、その年アメリカに赴いて更にハアヴァード大學に學ぶ。大正三年イギリスに渡り、翌四年フランスに移り、歐洲大戰中の倫敦巴里の生活に親しむ。大正五年歸朝、父の創立にかゝる明治生命保險株式會社に入社した。翌六年大阪支店詰となり、大正八年東京本店に復歸して勤務を續け、現在總務主事の要職にある。大正十年母方の親戚保野都と結婚。作家生活は明治四十四年七月、小說の處女作「山の手の子」を「三田文學」に發表したに始まる。年少の頃より文學を愛好して泉鏡花の作を耽讀し、後年ポオ、更にトルストイに傾倒し、遊學中も創作の筆を絕たず、特に永井荷風去つて以來の三田文學振興のために不斷の力を致して來た。同誌一度廢刊せらるゝや久保田万太郎（別項）等と協力してこれを復活更生せしめ、三田派の總帥として後進の誘掖に獻身的に努めてゐる。【著作】「處女作」「その春の頃」「心づくし」「海上日記」「旅情」「大空の下」「亞米利加記念帖」「日曜」「葡萄酒」「大阪」「明窓集」「勤人」「大阪の宿」「果樹」「月光集」等の創作集及び長篇小說の外、評論及び感想集として四冊の「貝殼追放」を刊行してゐる。選集としては明治大正文學全集第三十八卷（久保田・水上篇）がある。代表的な作品としては、小說に「山の手の子」「日曜」「英京雜記」「大阪」「勤人」「大阪の宿」等を擧ぐべく、約十篇ある戯曲の中では「律子と瑞枝」が最も傑出した作品である。【作風】新浪漫派に屬すべき作家であつて、その描法はつねに正統的な寫實的筆致に依り、極めて健全なモラリストの精神を保持してゐる。作家のおろそかならぬ生活態度が、自ら凜然たる氣魄となつて現はれ、モラルに執する熱情が基調をなして多くの作品に生命を與へてゐる。しかしそれ等は、決して何物かを主張する文學ではなく、作家は寧ろ人生の味を正しく味はひ樂しまうとする立場にあり、主として勤人であり、作家である男の周圍に展開される世相と詩情とを靜かに觀じ描いてゐる。さういふ中にも「日曜」あたりを境として、前期の時代は特に主情の色が濃く、中頃以後はずつと批判的分子が加はつて來たが、「大阪の宿」以來、この兩者をば漸く混融して作風の渾熟を示し、明かなる作家的成長を語つてゐる。特に作者の好んで書く勤人生活を描けるものの如き、新しき時代の風俗畫的作品として極めて優れた出來榮えであり、特殊の價値を有するものである。ただその人生觀照が尖銳深刻といふよりは、落着いた的確なものであるため、間々常識的だといふ譏りは免れ得ない。餘りにかつちりと作品の構造を整へ過ぎて、やゝ平板な感じを與へる作風と共に難ぜられる所以である。併し近年の作品は、枯淡味をさへ帶び、隨筆的心境とも云ふべき獨自の風格を有つて來てゐる。評論家としては識見の廣さ、理解の豐かさに加ふるに、道義に執する熱情が、その言說を非常に力強いものにして居り、顧眄なき直言がこれを一層權威づけてゐる。【參考】生を味ふ心（相馬御風）（黎明期の文學）〇三田文學（大正一五ノ一一・一二）〔水木〕

虚栗（みなしぐり）　俳諧集　上下二册【撰者】寶井其角【名義】其角の自序に附してゐる句の「凩よ世に拾はれぬみなし栗」から出てゐる語で、世人の見落してゐる新風であるといふ意味を寓してゐるものと解せられる。【刊行】天和三年【諸本】其角七部集所收本がある。其角全集（俳諧文庫）・其角全集（勝峯晋風編）・蕉門俳諧前集（俳書大系）等所收。【内容】卷頭に杜甫の「貧交行」の詩に擬した其角の戯序があり、卷尾に「芭蕉洞桃青鼓舞書」と署する芭蕉の跋がある。上卷には改正（春）・改夏（夏）の二季、下卷には改秋（秋）・上冬（冬）の二季を收め、この各季に發句と連句とがあり、その連句は、春は歌仙二卷、夏は歌仙二卷と二十五句一卷、秋は歌仙二卷、冬は歌仙三卷、都合十卷である。卽ち各季全體として云へば、春は芭蕉及び蕉門の人々並に貞門・談林の人の發句百二十三句と芭蕉・一晶・嵐雪・其角・嵐蘭五吟歌仙一卷、藤匂子・其角兩吟歌仙一卷、外に其角・嵐雪・藤匂の三ツ物三章及び其角・李下・柳興の三ツ物三章があり、夏は發句百十三句と千之・其角兩吟歌仙一卷、嚳白・其角・松濤三吟二十五句一卷、翠紅・才丸・一晶・其角・罔兩五吟歌仙一卷があり、秋は發句九十八句と嵐雪・其角兩吟歌仙一卷、楓興・其角・柳興・長吁四吟歌仙一卷があり、冬は發句八十一句と才丸・子堂・其角三吟歌仙一卷、李下・其角兩吟歌仙一卷、其角・芭蕉兩吟歌仙一卷がある。集中の發句の中に、素堂の荷興十唱や、宗因・嵐雪・其角の三夕の發句や、嵐朝・芭蕉・嵐雪の漢和聯句（別項）の發句の重陽三句があるなど、四季それぞれに何等か趣向の施されてゐることが特に注意される。【史的地位】本書は、古來芭蕉の新風開發の劃期的撰集として尊ばれてゐる。去來は「先師變風に於けるも、みなし栗生じて次韻枯れ、冬の日出でゝみなし栗落つ」（俳諧問答）と論じ、曲齋は「抑正風の始は延寶五の兩吟より起り（草體）、



虚栗の序及び跋（松宇文庫藏）

同九の次韻に流行し（中の草）、天和三の虚栗に一變し」（七部婆心錄）と云ひ、麥水はこれを七部集中の一つに數へてゐる（蕉門一夜口授）。【價値】芭蕉の跋には、漢詩や和歌の情味を取り込んだ新風であるかの如くに高唱してゐるが、表現が佶屈聱牙で、意味を難解ならしめ、怪奇な思想、放縱な故事の飜案が情趣を削減してゐて、新風鼓吹の意氣は稱すべきであるが、

水無瀬三吟百韻（みなせさんぎんひやくゐん）　連歌一卷【諸本】續群書類從連歌部に所收。【解說】長享二年正月に宗祇・肖柏・宗長の師弟三人が興行した三吟百韻で、發句に「何人」を賦した賦物（ふしもの）（別項）の連歌である。第三までを擧げると、

雪ながら山本かすむ夕べかな　宗祇
行く水遠く梅にほふ里　肖柏

と云ふ商家の樂隱居の許に、北庵・東二郎・西助等が來り、話は品川遊廓に及んだ。十八軒の大見世の内表二階に窓のない家は何處、藝者の貰ふ祝儀一歩のうち藝者が八百八十文、會所へ百五十文、口をかけに來た人に十二文、かけ集めに十六文取られる話、遊女の髪結の話、藝のある遊女の話等、みな品川通の事とて穿ちが盡きない。語るのは多く北庵・西助、

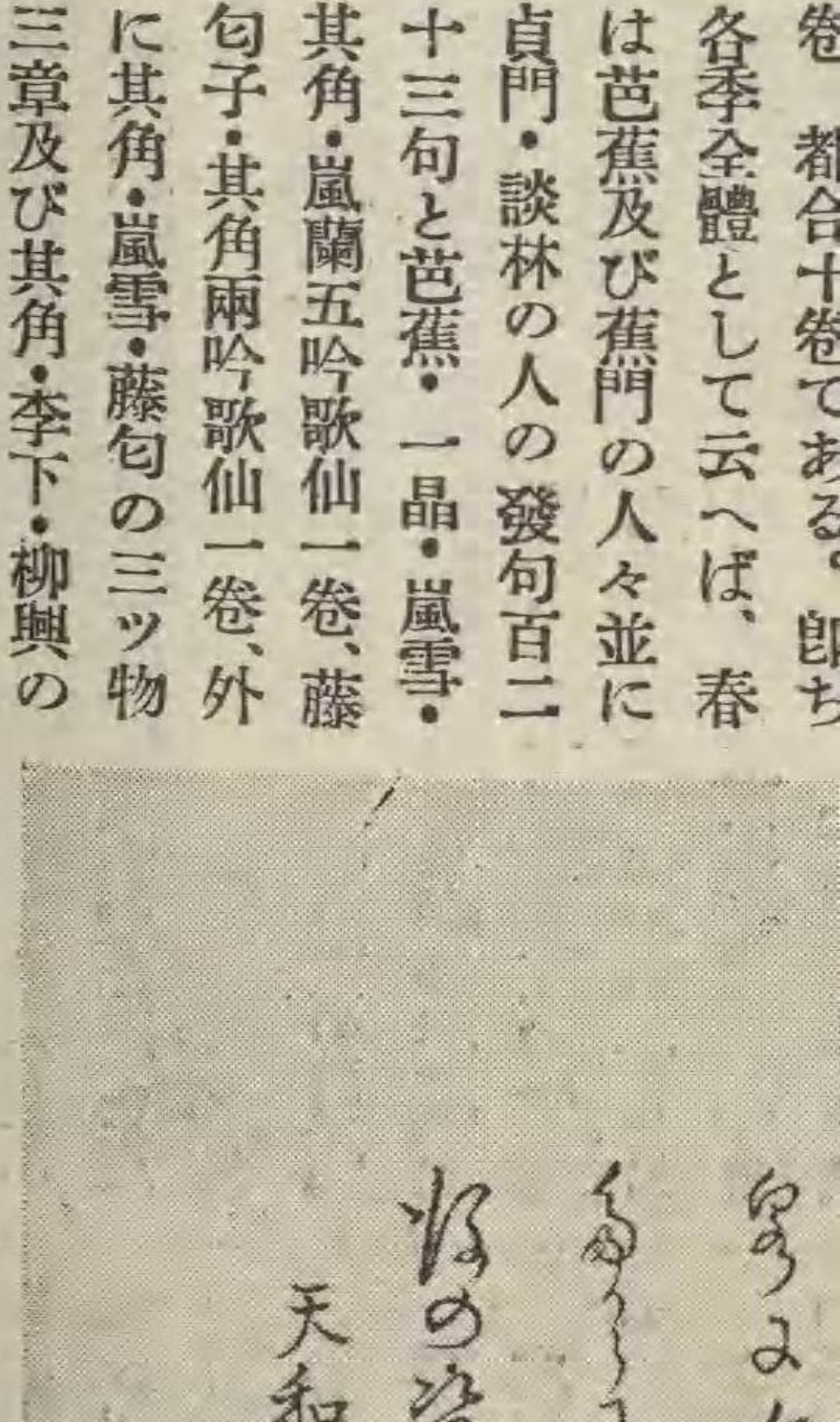
【刊行】明記してない。「花籠」（別項）に依つて考へるに、弘化年間であらう。【題材】角書にある如く、作者の前作「花籠」の拾遺で、これによつて主人公小島屋松次郎對お芳・小濱・お寅・お絹等の關係を說いて終局を附けんとしたのである。【梗概】お鶴は、日頃戀ひ慕ふ小島屋松次郎の妻となつて良人によく仕へたが、松次郎の愛

や久保田万太郎（別項）等と協力してこれを復活更生せしめ、三田派の總帥として後進の誘掖に獻身的に努めてゐる。【著作】「處女作」「その春の頃」「心づくし」「海上日記」「旅情」「大空の下」「亞米利加記念帖」「日曜」「葡萄酒」「大阪」「明窓集」「勤人」「大阪の宿」「果樹」「月光集」等の創作集及び長篇小說の外、評論及び感想集として四冊の「貝殼追放」を刊行してゐる。選集としては明治大正文學全集第三十八卷（久保田・水上篇）がある。代表的な作品としては、小說に「山の手の子」「日曜」「英京雜記」「大阪」「勤人」「大阪の宿」等を擧ぐべく、約十篇ある戲曲の中では「律子と瑞枝」が最も傑出した作品である。

の價値を有するものである。たゞその人生觀照が尖銳深刻といふよりは、落着いた的確なものであるため、間々常識的だといふ譏りは免れ得ない。餘りにかつちりと作品の構造を整へ過ぎて、やゝ平板な感じを與へる作風と共に難ぜられる所以である。併し近年の作品は、枯淡味をさへ帶び、隨筆的心境とも云ふべき獨自の風格を有つて來てゐる。評論家としては識見の廣さ、理解の豐かさに加ふるに、道義に執する熱情が、その言說を非常に力强いものにして居り、顧眄なき直言がこれを一層權威づけてゐる。【參考】生を味ふ心相馬御風（黎明期の文學）〇三田文學（大正一五ノ一一・一二）〔水木〕

虛栗（みなしぐり） 俳諧集 上下二冊 【撰者】

卷。都合十卷である。卽ち各季全體として云へば、春は芭蕉及び蕉門の人々並に貞門・談林の人の發句百二十三句と芭蕉・一晶・嵐雪・其角・嵐蘭五吟歌仙一卷、藤匂子・其角兩吟歌仙一卷、外に其角・嵐雪・藤匂の三ツ物三章及び其角・李下・柳興の三ツ物三章があり、夏は發句百十三句と千之・其角兩吟歌仙一卷、擧白・其角・松濤三吟二十五句一卷、翠紅・才丸・一晶・其角・罔兩五吟歌仙一卷があり、秋は發句九十八句と嵐雪・其角兩吟歌仙一卷、楓興・其角・柳興・長吁四吟歌仙一卷があり、冬は發句八十一句と才丸・子堂・


天和三癸年 仲夏日
芭蕉洞桃青鼓舞書

文庫藏）

注意される。【史的地位】本書は、古來芭蕉の新風開發の劃期的撰集として尊ばれてゐる。去來は「先師變風に於けるも、みなし栗生じて次韻枯れ、冬の日出でゝみなし栗落つ」（誹諧問答）と論じ、曲齋は「抑正風の始は延寶五の兩吟より起り（章、體、）

同九の次韻に流行し（の草）中、天和三の虛栗に一變し」（七部婆心錄）と云ひ、麥水はこれを七部集中の一つに數へてゐる（蕉門一夜口授）。【價値】芭蕉の跋には、漢詩や和歌の情味を取り込んだ新風であるかの如くに高唱してゐるが、表現が佶屈聱牙で、意味を難解ならしめ、怪奇な思想、放縱な故事の飜案が情趣を削減してゐて、新風鼓吹の意氣は稱すべきであるが、まだ〳〵正風の醇正な集とは考へられない。麥水は「みなし栗は奇書なり。人をして活達ならしむ。卷中に氣凱高致の吟多し」（蕉門一夜口授）と論じてゐるのであるが、中には當時に於て稀な佳作もあつて、醇正な幽玄の境地に近づきつつあることを示してゐるものも見えるけれども、去來の說の如く、「冬の日」が出づれば「虛栗」は地に落つと言つてよいやうな集である。

【影響】「新虛栗」の附言によると、當時貞門の明石居士なる者が「貞德槌」なるものを著はして本集を非難したと云ふが、古風の者が新風を理解し得ないのは當然であるけれども、兎に角新風として古風に目を瞠らせたことは察せられる。几董の說に、「加賀州中に天和・延寶の調に髣髴たる一派あり」（明烏序）とあるは、麥水一派を指したので、麥水は本集に全く傾倒し、その結果「新虛栗」（別項）の撰があつたのであり、蕪村の如きも、若き時既に「專らみなし栗・冬の日の高邈をしたふ」（几董記）と云つてゐるのである。かくの如く本集は安永・天明の復興俳諧には、その感化影響が多大であつたのである。

【參考】誹諧問答森川許六〇蕉門一夜口授堀麥水〇新虛栗（附言みなし栗の譯）同上〔志田〕

水無月祓（みなつきはらひ） 「狂女物の謠曲」を見よ。

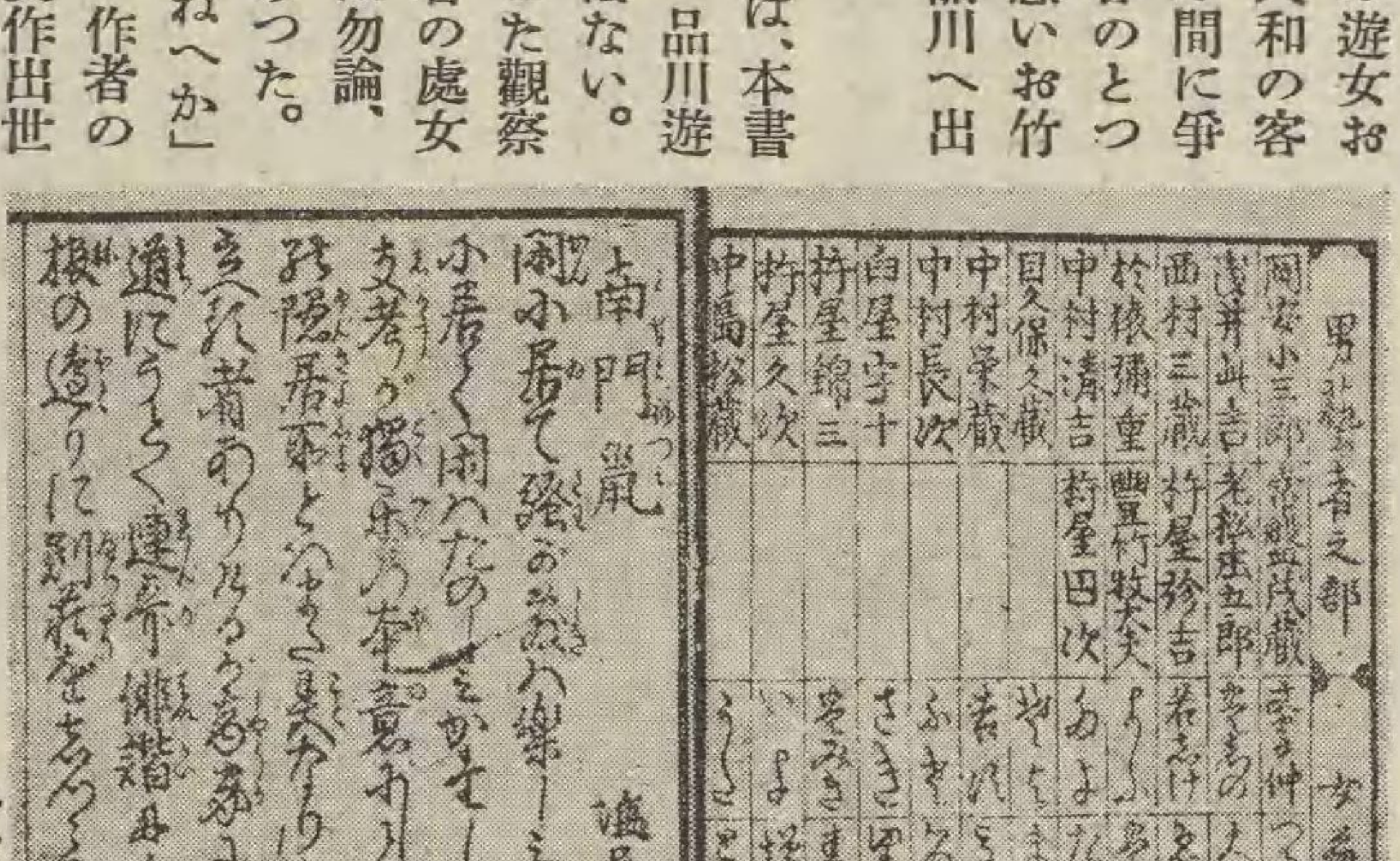
水無瀨三吟百韻（みなせさんぎんひやくゐん） 連歌 一卷 【諸本】續群書類從連歌部に所收。【解說】長享二年正月に宗祇・肖柏・宗長の師弟三人が興行した三吟百韻で、發句に「何人」を賦した賦物（ふしもの）（別項）の連歌である。第三までを擧げると、

雪ながら山本かすむ夕べかな　宗祇
行く水遠く梅にほふ里　肖柏
河風に一むら柳春見えて　宗長

の如きで、發句の賦物は「山人」と賦したものと思はれる。宗祇の連歌集「下草」（別項）の中に、この發句に「水無瀨の御廟法樂に」の前書を附して收めてあるから、後鳥羽院を奉祀した水無瀨宮（明應三年勅に依り創建）の法樂連歌として興行したものである事が知られ、從つて發句を後鳥羽院の水無瀨殿に於ての御詠の「見渡せば山本かすむ水無瀨川夕べは秋と何思ひけむ」の歌の本歌取にしてゐる所以も了解される。然るにこの三吟百韻は、技倆の優れた宗祇師弟三人が愼重に作したものと見えて、句々にも佳句が多く式目上の運びや附肌も模範的なものであるとして、古來連歌の典型として稱揚されてゐる。宗養の「天水抄」には、これを連歌の範として表八句を評釋し、多大の讚辭を捧げてゐる。〔志田〕

南門鼠（みなとねずみ） 洒落本 一册 【作者】鹽屋色主（鹽谷艷二）【名稱】書名は當時流行の染色の名を採り、品川を意味する南門の當字を用ひた。【刊行】寛政十二年 【諸本】德川文藝類聚第五・洒落本大系第九卷所收。【題材】本書扉に品川細見とあり、品川の男女藝者名を一頁に擧げてある等、全く吉原細見に摸したものである。【梗概】芝赤羽根のほとりの別莊に住む南遊と云ふ商家の樂隱居の許に、北庵・東二郎・西助等が來り、話は品川遊廓に及んだ。十八軒の大見世の內表二階に窓のない家は何處、藝者の貰ふ祝儀一步のうち藝者が八百八十文、會所へ百五十文、口をかけに來た人に十二文、かけ集めに十六文取られる話、遊女の髮結の話、藝のある遊女の話等、みな品川通の事とて穿ちが盡きない。語るのは多く北庵・西助、質問するのは東二郎である。更に話は遊女と客の戀のいきさつになる。大松の遊女おしうの許へ、新伊豆屋の客と錦大和の客とが通ひ詰め、落ち合つて兩人の間に爭ひが起つた。その時の伊豆屋の客のとつた態度に感じて、おしうと仲の惡いお竹が戀した話。とど一同打揃つて品川へ出かける。【解說】品川を題材とした洒落本は、本書以前にかなり多く刊行されたが、品川遊里の通をこれ程微細に穿つた書はない。全く山東京傳が吉原に對して行つた觀察を品川に對してなしたもの。作者の處女作であるから力が籠つてゐるのは勿論、かゝる通を示さんための著作であつた。最後に「モウうがちに忘れた事はねへか」と言はしめてゐる點から見ても、作者の自信が推知される。實に彼の代表作出世作でもあつた。併し絕板を命ぜられたことが「戲作者小傳」及び本作の後編「鼠歸」（別項）に見えてゐる。內容が淫猥でもないのにかゝる處刑を受けたのは、妓樓茶屋の名稱等を實際のまゝ記した爲めであらう。〔山崎〕

湊の月（みなとのつき） 人情本 二編六册 【作者】松亭金水 【畫工】歌川國麿 【名稱】題簽には、「美那登の月」とあり、（花筐拾遺）の角書がある。【刊行】明記してない。「花筐」（別項）に依つて考へるに、弘化年間であらう。【題材】角書にある如く、作者の前作「花筐」の拾遺で、これによつて主人公小島屋松次郎對お芳・小濱・お寅・お絹等の關係を說いて終局を附けんとしたのである。【梗概】お鶴は、日頃戀ひ慕ふ小島屋松次郎の妻となつて良人によく仕へたが、松次郎の愛する他の女達の苦しい境遇に同情して絕えず心を惱ましてゐた。荏土の小濱は松次郎の使と稱する伍八に連れ出されて消息を絕つてゐる。松次郎も驚いて心當りを問ひ合せたけれども知れない。或る日お鶴は名越の別莊に兄長五郎を尋ねようと出かけ、長谷觀音境內で圖らずもお芳が水茶屋女を勸めてゐるのに逢ひ、お寅が出產して兄の許で養はれてゐる事、荏土でお芳の從妹小濱が松次郎に愛せられて



南門鼠（帝國圖書館藏）

ゐたが、僞使ひのために誘拐された事等をお芳に告げる。お芳は小濱の事は初耳でただ驚く許りである。さてお鶴は名越の別莊に兄長五郎を尋ねたけれども、兄はお寅母子、俳諧師其祿等を連れ、榎島方面に旅行してゐたので空しく歸つた。松次郎はお芳の在所を知り、折々通うて舊交を溫めた。お龜は珠吉と通じて松次郎に放逐され、神奈川に同棲してゐたが、珠吉が病死したので、更に近所の無賴漢伍八と同棲し、金に窮した餘り、密かに伍八を松次郎の使と僞り小濱をおびき出し、神奈川の藝者に賣つてしまつた。長五郎はお寅等を連れて旅行の歸途、神奈川驛の旅館加禰澤（かねざは）に泊り藝者を招くと、その中に小濱がゐた。仔細を聞いて同情し、年期三十兩を拂つて同行して名越の別莊に歸つて來る。お鶴は再び兄を訪れて小濱に逢ひ、自宅に連れ歸つて小間使にする。松次郎は小濱を見て、痛し痒しの心地でゐる。伍八・お龜は、小濱の身代金で上方へ旅する途中、お龜は日頃の瘡毒が一時に出でて顏が醜くなつたので、伍八に捨てられてしまひ、遂には盲目となり、乞食になつて行倒れとなつたが、伍八も同樣乞食となつてしまつた。長五郎は大病に罹つた。一番心配してゐるのはお絹である。嘗ては松次郎を慕つたが、今は及ばぬものと諦めてはゐるが、長五郎の俠氣が身に沁みて嬉しく、一心に看護し、はては水垢離とつて恢復を祈願するのであつた。長五郎は漸く全快した。お絹の眞實を嬉しく思ひ、人にも勸められ正式に結婚した。お芳は全く義理を思つて松次郎と緣を切り、兄妹分となつて皆々睦ましく暮した。【構想】「花筐」の複雜な筋に解決を下さうと苦心したらしく、單に筋のみを說明してゐるが、長谷觀音（實は淺草寺）境內の描寫や、長五郎等一行の榎島（江の島）廻りの對話に、江戸時代の遊戲氣分を滲み出さしてゐる。結末に於て小濱が改めて松次郎の妾となつたとも、子までなした仲のお寅を妾にして引取つたとも說明してゐないのは、流石に作者が當局を憚り、讀者の道德觀に遠慮したのであらう。〔山崎〕

南小泉村（みなみこいづみむら）　小說【作者】眞山青果【發表】明治四十年五月「新潮」。同四十一年十月、「中央公論」。【刊行】明治四十二年十月、短篇集「南小泉村」に所收（今古堂書店）。後、代表的名作選集に收む。【梗概】百姓ほどみじめなものはない。取分け奥州の小百姓は、それが酷い。地を這ふ爬蟲の一生だ。不快だ。僕は彼等の間に田舍醫者となつて一年以上を送つたことがある。仙臺の南はづれにある南小泉村——二百戸ばかりで、士族が二軒、水車場・駄菓子屋、それに提灯屋、外は皆百姓で、石油・醬油・縫糸位の日用品は區長の家で取次ぐ。百姓は耕作だけでは活計が立たぬので、半分は菜園ものでやつと生きてゐる。だから金の有難味は骨の髓まで滲みこんで慾得の爭ひが絕えない。若者同士の肆な情交でも、ただ體と體とが觸れ合ふといふだけの考だつた。——僕はそこへ、或醫院の出張所の代診として移つて行つた。そこで最初に見出した患者、それは化膿性肋膜炎を患つてゐる六十近い老婆だ。眞暗な、黴臭ひ、ムッとする家の中で、汚い卷蒲團にもたれて、肩で呼吸をしながら、按摩膏だらけの汗臭い胸を突き出して、家傳藥だの、お禁厭だのと十兩からの金を誤魔化されたとこぼす。そして嫁と老爺が怪しいと毒づく。これが百姓の縮圖だ。その次には、僕は村の有力者を知ることが出來た。村へ來た披露の挨拶を勸められたからである。だが、それは傲慢と欺瞞と好色と沒義道漢とに外ならなかつた。【解說】この作は、最初もつと大部のものになる筈であつたらしい。その故であらうか、短篇としては整つたものとはいへない。後に發表された「あの家この家」「馬盜人」「手斧」「お灸屋の兄弟」など、この一聯の短篇は、同樣に南小泉村を扱つた作品であつて、各篇の間には一脈の關聯がある。以上の諸作はすべて短篇集「南小泉村」に收められてゐる。東北の農村を舞臺として、蒙昧なる農民生活を通じて深刻な人間苦を描けるもの。無遠慮に方言を驅使して、鮮明にロオカル・カラアを出してゐる。藤村の「破戒」（別項）を初めとしてロオカル・カラアの描出も、自然主義文學の重要なる一分野を示してゐるが、本篇も亦その點で世評を動かした。勁烈な荒けづりの文章も一特色であつたが、やゝ誇張に墮したといふ批評もあつた。いづれにしろ小說家としての青果を記念する代表的作品である。〔加藤〕

南新二（みなみしんじ）　戲作者【本名】谷村要助【別號】東喜三二・北古三・馬の武左衞。茶道の名は又照庵宗夕。俳號布川【生歿】天保六年正月七日下谷仲御徒町に生れ、明治二十八年十二月二十九日歿す（腦溢血）。享年六十一。【閱歷】世々德川幕府の御數寄屋坊主で、幼名を陽之助といひ、父兄の職を繼いで御坊主となり、春育、後に三育と名乘つたが、慶應二年茶道召上げで散兵組に編入され、谷村斐太（あやた）といつた。指圖役並に進み、伏見の役に出戰したが、敗走東歸し、散兵頭福田八郎左衞門に從つて房總地方に脫走した。明治元年四月江戶に歸り、歸商して斐野屋太郎兵衞と改め、上野山下に書畫骨董店を開いた。間もなく商賣に失敗し、大阪に流寓したが、明治三・四年頃歸京し、和泉屋（吉村）甚兵衞の回漕會社に入り、引續いて通運會社に勤め、聊か生活の安定を得ると共に戲作の筆を弄し、新聞投書家の仲間入りをした。この頃南新堀二丁目にゐたので南新二と號したのだといふ。が、道樂が一步進んで本業の新聞記者となり、東京繪入・東京日日・やまと新聞と三轉した。小說を書いたのは二十二年「新小說」の「蓮池の水禽」が最初である。二十五年三月腦溢血に罹り、一度恢復したが、終に同じ病氣で湯島天神下の寓居で歿した。【作品】初期の戲文類で新聞に出たものを別として、「釣惣」「鎌倉武士」「文車」（小說集）「甲子待」「福笑ひ」等の單行本の外、「蓮池の水禽」「夢の夢」「長し短し」「まはり燈籠」等、雜誌に載つたまゝのものが可なりある。初期の戲文の代表的なものは、遺稿集「南新二輕妙集」に收められてゐる。【批評】新二の小說は二種に分れる。「蓮池の水禽」「釣惣」「田植笠」の如き、やゝ眞面目な作物（主として時代物）と、「鎌倉武士」「筑波裾野狸牧狩」「道中すごろく」「ありあまる」の如き、滑稽と洒落と輕妙な諷刺とを主とした作物とである。前者は文辭の老練といふ外、格別優れた作はない。新二本來の面目を語るものは後者である。江戶戲作文學の氣分が濃いので、明治文學としては傍系のものであるが、淡い人情味と枯れた俳味を交へた洗練された彼のユーモアには捨て難い味がある。〔柳田(泉)〕

源順集（みなもとのしたがふしふ）　歌集　一卷（又は二卷）一册【作者】源順【別名】「續小草內和歌」。源英明の「源氏小草」五卷に次ぐの意か。【諸本】（一）群書類從二四九所載本、（二）歌仙

歌集本の外、內容の多少相違する寫本、（イ）（ロ）が圖書寮にある。歌の數、（一）は二百二首、うち長歌二首（一首缺）であるが、（二）は短歌が六首少く雙六の盤の歌がない。歌の順序は多少相違する。（イ）二卷は（一）類從本と同系統であるが、數首少く、奥にこの集は定家の姉八條院坊門局の眞筆云々と記した元和五年藤中將の奥書がある。（ロ）二卷は（イ）と比

だものである。詞書中注目すべきものには、「後撰集」撰修の當時の模樣を記したものがある。集團をなす歌には康保五年（イ二年）女五男八宮の屏風歌二十三首、天元二年宣旨によつて上る屏風歌二十二首、高明大饗の屏風歌十八首等がある。（順參照）〔西下〕

水沫集（みなわしふ）　詩文集【著者】森鷗外【名稱】「美奈和集」とも書く。【刊行】明治二

等「舞姬」にせよ、「うたかたの記」にせよ、「文づかひ」にせよ、いはば一個可憐な「物語」にしか過ぎないが、しかもこれを當時流布の作品と較べたなら、可憐ながらも、立派にリアルな人間生活に觸れ、生きた人生の姿を捉へてゐる。かくていつまでも生命のある作品となり得てゐるが、その形式から云へば、歐米先進國の小說作法に則つて作られた短篇小說の

本を藏する。「此玉吟集三册命書生新寫畢抑々在夢庵老之作六家抄然而彼本集進ニ所望故也殊於此集者雖元來所持之爲作一具而已　慶長三年九月十五日　丹山隱士玄旨判」。刊本には六家集本があり、明治以後、續國歌大觀・國歌大系等に所收。【解說】家隆の生涯の詠歌は六萬首に上ると傳へられたが、今傳はるものはその五分の一に過ぎぬ。即ち「壬二集」上

っ旅する途中　お龜は日頃の瘡毒が一時に出でて顏が醜くなつたので、伍八に捨てられてしまひ、遂には盲目となり、乞食になつて行倒れとなつたが、伍八も同樣乞食となつてしまつた。長五郎は大病に罹つた。一番心配してゐるのはお絹である。嘗ては松次郎を慕つたが、今は及ばぬものと諦めてはゐるが、長五郎の俠氣が身に沁みて嬉しく、一心に看護し、はては水垢離とつて恢復を祈願するのであつた。長五郎は漸く全快した。お絹の眞實を嬉しく思ひ、人にも勸められ正式に結婚した。お芳は全く義理を思つて松次郎と緣を切り、兄妹分となつて皆々睦ましく暮した。【構想】「花筐」の複雜な筋に解決を下さうと苦心したらしく、單に筋のみを說明してゐる

品は區長の家で取次ぐ。百姓は耕作だけでは活計が立たぬので、半分は菜園ものでやつと生きてゐる。だから金の有難味は骨の髓まで滲みこんで慾得の爭ひが絕えない。若者同士の肆な情交でも、ただ體と體とが觸れ合ふといふだけの考だつた。――僕はそこへ、或る醫院の出張所の代診として移つて行つた。そこで最初に見出した患者、それは化膿性肋膜炎を患つてゐる六十近い老婆だ。眞暗な、黴臭ひ、ムッとする家の中で、汚い卷蒲團にもたれて、肩で呼吸をしながら、按摩膏だらけの汗臭い胸を突き出して、家傳藥だの、お禁厭だのと十兩からの金を誤魔化されたとこぼす。そして嫁と老爺が怪しいと毒づく。これが百姓の縮圖だ。その次には、僕は村の有力者を

もあつた。いづれにしろ小說家としての靑果を記念する代表的作品である。〔加藤〕

南新二 みなみしんじ

戲作者【本名】谷村要助【別號】東喜三二・北古三・馬の武左衞。茶道の名は又照庵宗夕。俳號布川【生歿】天保六年正月七日下谷仲御徒町に生れ、明治二十八年十二月二十九日歿す（腦溢血）。享年六十一。【閱歷】世々德川幕府の御數寄屋坊主で、幼名を陽之助といひ、父兄の職を繼いで御坊主となり、春育、後に三育と名乘つたが、慶應二年茶道召上げで散兵組に編入され、谷村斐太（あやた）といつた。指圖役並に進み、伏見の役に出戰したが、敗走東歸し、散兵頭福田八郞左衞門に從つて房總地方に脫走した。明治元年四月江戶に歸り、歸商して斐野屋太郞兵衞と改め、

【批評】新二の小說は二種に分れる。「蓮池の水禽」「釣葱」「田植笠」の如き、やゝ眞面目な作物（主として時代物）と、「鎌倉武士」「筑波裾野狸牧狩」「道中すごろく」「ありあまる」の如き、滑稽と洒落と輕妙な諷刺とを主とした作物とである。前者は文辭の老練といふ外、格別優れた作はない。新二本來の面目を語るものは後者である。江戶戲作文學の氣分が濃いので、明治文學としては傍系のものであるが、淡い人情味と枯れた俳味を交へた洗練された彼のユーモアには捨て難い味がある。〔柳田（泉）〕

源順集 みなもとのしたがふしふ

歌集　一卷（又は二卷）一册【作者】源順【別名】「織小草內和歌」。源英明の「源氏小草」五卷に次ぐの意か。【諸本】（一）群書類從二四九所載本、（二）歌仙

歌集本の外、內容の多少相違する寫本、（イ）（ロ）が圖書寮にある。歌の數、（一）は二百二首、うち長歌二首（一首缺）であるが、（二）は短歌が六首少く雙六の盤の歌がない。歌の順序は多少相違する。（イ）二卷は（一）類從本と同系統であるが、數首少く、奧にこの集は定家の姉八條院坊門局の眞筆云々と記した元和五年藤中將の奧書がある。（ロ）二卷は（イ）と比較して、上下の卷を逆にしてゐる。【內容】本集は單なる歌集ではなく、多くの序、全然獨立した前栽合、特殊の歌等を含んでゐる。序には西宮左大臣高明の家の紅梅が初めて咲くのを悅び、文字一つをさぐりてよむ歌の序、貞元元年十月二十七日庚申の夜、いつきの宮にて「松の聲よるの琴に入る」といふ題にて奉る歌の序があり、何れも題・序・歌の三段に書き分けられてゐる。前栽合は天祿三年九月二十二日行はれたもので、十番二十首、序、判詞、判の歌十四首から成つてゐる。特殊の歌は天地の歌四十八首、雙六の盤の歌、世の中十首がある。天地の歌は四十八首の沓冠の一字を横に連ねると、上下共に天・地・星・空・山・川・峯・谷・雲・霧の如くなるものにて、「曾丹集」「相模集」（各別項）にも例がある。雙六の盤の歌は二種あつて、一は雙六の目の如く文字をならべて十五首の歌が成立するもの、一は六六三十六畫に分つ線に文字をおいて十四首の歌が成立し、三十六畫內にも一首づつの歌を書き込み、合計五十首となるものである。而して天地の歌、雙六の歌は、共に有忠が詠んだものへの返しである。世の中十首は、滿誓の「世の中を何にたとへん」に擬したもので、十首とも初め二句は「世の中を何にたとへん」にて第三句以下が異なる。應和元年二兒を失つて詠んだものである。詞書中注目すべきものには、「後撰集」撰修の當時の模樣を記したものがある。集團をなす歌には康保五年（イ二年）女五男八宮の屛風歌二十三首、天元二年宣旨によつて上る屛風歌二十二首、高明大饗の屛風歌十八首等がある。（順參照）〔西下〕

水沫集 みなわしふ

詩文集【著者】森鷗外【名稱】「美奈和集」とも書く。【刊行】明治二十七年七月初版、同三十九年五月改訂版發行。【內容】創作「うたかたの記」「舞姬」「文づかひ」（以上別項）三篇の外に、主として「しがらみ草紙」や、「國民之友」に發表して來た飜譯の業績を收載してある。即ち小說には、佛蘭西のドオデエの「戰僧」「みくづ」「綠葉歎」。獨逸のハックレンデルの「黃綬章」「ふた夜」、クライストの「惡因緣」「地震」、ステルンの「うき世の波」、ホフマンの「玉を懷いて罪あり」、シュビンの「埋木」（別項）。露西亞はトルストイの「瑞西館」とツルゲニエッフの「該撒」、亞米利加のアルギングが「新浦島」とブレット・ハアトの「洪水」。以上の十四篇である。また戲曲は西班牙のカルデロン作「ザラメヤ村長」と獨逸のシルレル作「エミリヤ・ガロッテイ」の二曲で、前者を「調高矣洋絃一曲」（しらべはたかしギタルラのひとふし）、後者を「折薔薇」と題し、いづれも三木竹二との共譯に成るものである。更に附錄として、譯詩集「於母影」（別項）を添へてゐる。「平家物語」や明の高靑邱等の詩十九篇が邦譯、又は漢譯され、新聲社譯と署されてゐる。【批評】右の創作三篇が當時の文壇に如何なる感銘を與へたかは、その各項に就いて述べたが、從來の江戶文學の脈を引いた作品とは全然ちがつて、一種淸新なロマンティックな雰圍氣を發散してゐる點が、どんなにか魅力的な驚異であつたらう。これ等「舞姬」にせよ、「うたかたの記」にせよ、「文づかひ」にせよ、いはば一個可憐な「物語」にしか過ぎないが、しかもこれを當時流布の作品と較べたなら、可憐ながらも、立派にリアルな人間生活に觸れ、生きた人生の姿を捉へてゐる。かくていつまでも生命のある作品となり得てゐるが、その形式から云へば、歐米先進國の小說作法に則つて作られた短篇小說の一模範となり、日本に於ける西洋流の短篇小說の鼻祖となつた。文體から云へば、漢文の調子と國文の美しさを調和させて最高の標準を示したものである。更にその飜譯に至つては、「英文學の紹介者は餘所にも少からねば、柵草紙はおもに獨・佛・魯の文學紹介者たるにつとめた」成果であるが、出來るだけ多種類の傾向のものを紹介し、その刺戟やら示唆やら接受やらに依つて、日本人のうちに眠つてゐる材能を目覺めさせ、伸びさせ、我が國の文壇に出來るだけ變化に富んだ花を自由に大膽に咲かせようとした先覺的な意圖の現はれである。而もその英文學が、やつとスコットやリットンあたりを紹介してゐる時に、歐羅巴現時の新聲を傳へたのだから、その淸新なる魅力がいかに強く大きかつたかが知られよう。中でも、「埋木」（別項）の如き、特に讀む者の心を撲たずには措かなかつた。要するに「水沫集」一卷は、あらゆる意味に於て日本に於ける新文學のパイロットとなつた。かくて文藝史上の非常に貴重な記念碑として記憶されなければならない。〔水木〕

壬二集 みにしふ

歌集　三卷【作者】藤原家隆【名稱】書名は著者が壬生二位と呼ばれたのに基くといふ。別に「玉吟集」の名がある。【諸本】神宮文庫に、次の如き奧書を有する寫本を藏する。「此玉吟集三册命書生新寫畢抑々在夢庵老之作六家抄然而彼本集遂ニ所望故也殊於此集者雖元來所持之爲作一具而已　慶長三年九月十五日　丹山隱士玄旨判」。刊本には六家集本があり、明治以後、續國歌大觀・國歌大系等に所收。【解說】家隆の生涯の詠歌は六萬首に上ると傳へられたが、今傳はるものはその五分の一に過ぎぬ。即ち「壬二集」上卷には、六百番歌合の百首、千五百番歌合の百首、堀河百首、大僧正四季百首、文治三年の詠百首和歌、同年十一月の詠百首和歌を載せ、上之下には詠二百首和歌（二百首とあるけれど春二十七首、夏二十三首、秋二十六首、冬二十一首、戀十六首、雜二十六首で計百三十九首を存する。建久八年の歌合の歌と同じきを以て略すと記してあるもの十六ヶ所、「初百首歌一首闕書本無」とあるもの一ヶ所ある）、爲家卿家會の百首、擬作百首（春・秋・戀各二十首、夏・冬各十五首、雜十首の內戀歌一首を缺く。九十九首存す）、洞院攝政家百首、九條前內大臣內々百首（題ありて歌を缺くもの一首。九十九首存す）の如く百首歌十一、その通算一千百三十七首を載せ、中卷に、守覺法親王會五十首、老若歌合五十首、道助法親王會五十首、日吉奉納五十首、最勝四天王院御障子和歌（四十六首）、前內大臣家三十首、寬喜元年女御入內御屛風和歌（三十六首）、泥繪御屛風歌二首、住吉三十首和歌、西園寺三十首和歌（但し無披講）の計三百七十四首を載せ、それに引續いて四季之部を立て、春部百九十六首、夏部九十九首、秋部三百三十四首、冬部百三十一首、小計七百六十首を收めてゐる。下卷は、戀・祝・旅・雜（哀傷・述懷）・神祇・釋敎の部立にて、それ〴〵戀二百四十九首、祝二十七首（そのうち他人の作二首）、旅部三十五首、雜百八十三首

（そのうち他人の歌を錄せるもの十五首）、神祇十二首、釋敎十八首、小計五百二十四首（內他人の作十七首）を收めてゐる。三卷を通算するに二千八百二十五首の歌を載せてゐる。【參考】壬二集攷 岡本保孝　〔松浦〕

岑守（みねもり）　漢學者【姓】小野朝臣【生歿】寶龜九年に生れ、天長七年（一四九〇）四月十九日歿す。享年五十三【家系】小野妹子の玄孫篁（別項）の父である。小野の姓は、妹子が近江國滋賀郡小野村にゐたのによる。【閲歷】延曆二十二年四月權少外記となり、次いで東宮少進に進み（二十六歲）、大同二年畿內觀察使判官、同四年四月、從五位下東宮亮となつた。同十一月式部少輔、翌弘仁五年近江介を兼ね、內藏頭となる。同三年正月美濃守、翌年從五位上となり、同五年左馬頭となつた。またこの頃、菅原淸公・勇山文繼等と「凌雲集」を撰した。翌五年正月陸奧守、同十二年阿波守となり、皇后宮大夫を兼ね、更に近江守を兼ねた。同十三年參議に進み、太宰大貳を兼ねた（四十五歲）。越えて天長五年（五十一歲）二月從四位上勘解由長官となり、三月刑部卿を兼ねた。同七年四月卒す（公卿補任・日本紀略）。【編著】內裏式三卷（弘仁十二年正月成る。藤原冬嗣・良岑安世・藤原三守・桑原腹赤・滋野貞主等と共に撰した內裏の諸式及び叙任の式等の次第を記したもの。但し現存の本は、天長十年二月、淸原夏野・藤原吉野・紀長江・春澄善繩等が勅を奉じて取捨したものである。群書類從卷七九所收）〇凌雲集（別項）。その外、その詩作は「凌雲集」「文華秀麗集」「經國集」（各別項）等に見えてゐる。〔山岸〕

美濃の家つと（みののいへつと）　和歌註釋書　五卷五册【著者】本居宣長【別名】內題には「新古今美濃の家つと」とある。【刊行】寛政七年十二月、名古屋永樂屋東四郞板。【由來】藤原磯足・大矢重門の序文及び本書の首に、宣長の記せる所によれば、宣長の門人大矢重門が、鈴門にありて學べるとき「新古今」の歌の趣を特に尋ね問うてゐたが、故鄕に歸るに際して、宣長に、その所說を書き記して賜はれと乞うたので、宣長が書き與へたものと云ふ。贈るに際して、宣長は「これをだに家づとにせよいせの海かひはなぎさのもくずなりとも」の歌を添へた。宣長はその門弟のために、明和三年三月から明和六年十二月までと、天明七年正月から寛政三年十月までの二回にわたり、「新古今集」の講筵を開いた。重門は宣長の「授業門人姓名錄」天明六年の條に、「美濃大垣、大矢仁左衞門重角（しげかど）」とあり、後に重門と改めた人で、寛政二年正月松坂を訪うた人であるから、この第二回目の講義を聞いた人であり、また本書の內容が、宣長の「新古今」の歌に關する意見の圓熟した折の說であることも知られる。翌三年四月十三日に訂正を加へたものといふ。【諸本】本居宣長全集第五所收。【內容】卷一は春・夏の歌、卷二は秋・冬の歌、卷三は賀・哀傷・離別・羇旅。卷四は戀、卷五は雜・神祇・釋敎の歌をそれ〴〵選釋してゐる。また宣長は、その著「うひ山ぶみ」（別項）に、歌の眞盛りは「新古今」といふもたがふべからずとの意見を述べ、この集のよき歌を賞せざるは、風雅の情を知らざるものと云ひ、更に「新古今」の歌を評して「うちよみあぐるに面白くて、捨てがたくおぼゆるは、此ほどの歌どもなり。えもいはず面白く、心深くめでたき」と書いてゐる。この立場から先づ註すべき歌も選ばれ、註釋の態度も定められたものと思はれる。從つて本書以前の「新古今集」の註釋、例へば、東常緣・加藤盤齋・北村季吟等のそれよりも一歩進んで、「歌のこゝろ」を說きあかし、簡單にして含蓄ある評を下してゐる。註釋の初めには多く、一首の全體を評しては、「めでたし」と云ひ、別に結構措辭の美に注意して、「詞めでたし」など云ひ、最も句格に注意し、倒置句には必ずその次第を註記し、懸詞・助詞等は、極めて精細に說明を加へてゐる。また「かけあひ」の說を以て、一首の歌を修辭的に、整然と註し得る趣がある。所々に本書以前の註釋書を引用し、そのこちたさを「無用の註」などを評した點も見えるが、殊に個々の歌人の作風にも注意し、西行の初句字餘りを「この法師の病」といひ、良經の「故鄕のもとあらの小萩」の歌の條には、「此殿此たぐひ多し」など評してゐる。【價値】常緣の「新抄」、盤齋の「增抄」、季吟の「抄」（八代集抄の中）など、古人の所說を主とした註釋に對し、全く獨自の立場から、「新古今集」の註解を試みたものは本書に始まる。修辭的技巧の特に複雜巧妙な「新古今」の歌に對して、文法的な立場から精細な解說を與へたことは、大なる功績である。

【影響】本書は、やがて石原正明の「尾張の家苞」（別項）を生む源となつた。また荒木田久老は「信濃漫筆」に、村田春海は「織錦舍隨筆」に、それ〴〵本書所說に對し異見を述べてゐる。「尾張の家苞」には、本書所說がやゝ語句の末に拘泥した趣あるを難じてゐるが、後來「新古今」の歌を解くもの、多くこの二つの「家苞」を併せ引いてゐるのに見ても、後世への影響の多大なるを知り得る。【末書】「美濃尾張家つとくらべ」二册林彥兵衞（明治三十五年成。兩家苞の所說に簡單なる批判を加へたるもの）。【參考】國文學研究史野村八良〇本居宣長村岡典嗣〇本居宣長全集註記〇本居宣長稿本全集註記　〔松浦〕

美濃の家つと折添（みののいへつとをりそへ）　和歌註釋書　三册【著者】本居宣長【刊行】寛政九年、名古屋永樂屋東四郞板。【成立】寛政三年四月十三日成る。【內容】「新勅撰集」以下十三代集及び「千載集」に入れる「新古今」歌人の作を「美濃の家つと」の例によつて、註を加へたるものであるが、「家つと」に比して簡略で、往々歌のみかゝげ、註のないものもある。「新勅撰」の部分には、契沖の「新勅撰評」の說に對する異見も見える。（「美濃の家つと」參照）　〔松浦〕

身延（みのぶ）「龍女物の謠曲」を見よ。

美濃風（みのふう）　俳諧流派【名義】支考（別項）の一派を云ふ。支考の生國が美濃であるから、この稱が起つたのである。又支考の別號獅子庵によつて獅子門ともいふ。【性質】俳諧は俗談平話であるといふのが支考の持論で、この派の主張もそれであつた。從つて作も平俗卑近で、深みがない。支考の作からがさうであつたのである。支考は伊勢風（別項）の乙由と常に共同運動をやつて、その作風も頗る似たものであつた。かゝる關係から、後にはこの兩派を引つくるめて支麥の徒と云つて卑まれ（麥は乙由が麥林舍と云つたからである）、また田舍蕉門とも呼ばれたのである。この派の人には俳諧行脚が多かつたが、これも支考が東に遊ぶ時は東華坊、西に遊ぶ時は西華坊と云つた風に、自派宣傳と勢力擴張のため常に諸國を行脚した例に倣つたものである。又この派の宗匠は號の下に坊と云ふ字を多く附けた

が、これも支考の東華坊等の別號に倣つたものである。【沿革】支考の門人は、各地に非常に多かつたが、殊に美濃・尾張は彼の根據地で最も深く勢力を植ゑ附けた所であるから門人も從つて多かつた。その中でも太田巴靜（はじやう）・井上童平・岸名昨囊・仙石廬元坊等が著名であつた。このうち廬元坊を經て、田中五竹坊に至り、その門人

（昭和五年繼承、現）と續いたのである。五竹坊と以哉坊との不和は、以哉坊が松島に遊んで、「松島や膝でもみきる舟の茣蓙」と詠んだ句を五竹坊が「松島や眺にもめる舟の茣蓙」と直したことに基因したといふのであるが、これは誤で、安永の末頃他の原因があつたのであらうといふ事である。然るに美濃風は漸次排他的傾向を帶びて來て、兩統の分れた頃から特

に生れ、文政五年（二四八二）江戸に歿す。享年五十八。【閲歷】初め大村光枝に學び、後、塙保己一の門に入つた。博學の人である。「萬葉集類句」（寛政十一年）は、美波留三十五歲の時の板行で、「目覺草」に於ては、契沖・春滿・眞淵を除く當代の歌人を拉し來つて、嚴しい批評を加へ、なほ、てにをはを細かく言ふ作歌法をも非難してゐる。橘守部はこの「目覺草」

の發達を遂げたものといはるべきである。一說には圓覺十萬上人がこれを起したと傳へるが、彼は恐らく中興の祖、或は大成者としての意味であつて、曲目を見ても、これがすべて一時に作られたのでなく、永い年月の間に生み出されたことが知られるのである。寧ろ諸國の寺院の演劇的行事と比較して考へなければならぬ。【價値】假面を使用して無言に

參議に進み、太宰大貳を兼ねた（四十五歲）。越えて天長五年（五十一歲）二月從四位上勘解由長官となり、三月刑部卿を兼ねた。同七年四月卒す（公卿補任・日本紀略）。【編著】內裏式三卷（弘仁十二年正月成る。藤原冬嗣・良岑安世・藤原三守・桑原腹赤・滋野貞主等と共に撰した內裏の諸式及び叙任の式等の次第を記したもの。但し現存の本は、天長十年二月、淸原夏野・藤原吉野・紀長江・春澄善繩等が勅を奉じて取捨したものである。群書類從卷七九所收）〇凌雲集（別項）。その外、その詩作は「凌雲集」「文華秀麗集」「經國集」（各別項）等に見えてゐる。 〔山岸〕

美濃の家つと（みののいへつと） 和歌註釋書 五卷五冊【著者】本居宣長【別名】內題には

知られる。翌三年四月十三日に訂正を加へたものといふ。【諸本】本居宣長全集第五所收。【內容】卷一は春・夏の歌、卷二は秋・冬の歌、卷三は賀・哀傷・離別・羇旅。卷四は戀、卷五は雜・神祇・釋教の歌をそれ〴〵選釋してゐる。また宣長は、その著「うひ山ぶみ」（別項）に、歌の眞盛りは「新古今」といふもたがふべからずとの意見を述べ、この集のよき歌を賞せざるは、風雅の情を知らざるものと云ひ、更に「新古今」の歌を評して「うちよみあぐるに面白くて、捨てがたくおぼゆるは、此ほどの歌どもなり。えもいはず面白く、心深くめでたき」と書いてゐる。この立場から先づ註すべき歌も選ばれ、註釋の態度も定められたものと思は

たものは本書に始まる。修辭的技巧の特に複雜巧妙な「新古今」の歌に對して、文法的な立場から精細な解說を與へたことは、大なる功績である。【影響】本書は、やがて石原正明の「尾張の家苞」（別項）を生む源となつた。また荒木田久老は「信濃漫筆」に、村田春海は「織錦舍隨筆」に、それ〴〵本書所說に對し異見を述べてゐる。「尾張の家苞」には、本書所說がやゝ語句の末に拘泥した趣あるを難じてゐるが、後來「新古今」の歌を解くもの、多くこの二つの「家苞」を併せ引いてゐるのに見ても、後世への影響の多大なるを知り得る。【末書】「美濃尾張家つとくらべ」二冊林彥兵衞（明治三十五年成。兩家苞

は俗談平話であるといふのが支考の持論で、この派の主張もそれであつた。從つて作も平俗卑近で、深みがない。支考の作からがさうであつたのである。支考は伊勢風（別項）の乙由と常に共同運動をやつて、その作風も頗る似たものであつた。かゝる關係から、後にはこの兩派を引つくるめて支麥の徒と云つて卑まれ（麥は乙由が麥林舍と云つたからである）、また田舍蕉門とも呼ばれたのである。この派の人には俳諧行脚が多かつたが、これも支考が東に遊ぶ時は東華坊、西に遊ぶ時は西華坊と云つた風に、自派宣傳と勢力擴張のため常に諸國を行脚した例に倣つたものである。又この派の宗匠は號の下に坊と云ふ字を多く附けた

が、これも支考の東華坊等の別號に倣つたものである。

【沿革】支考の門人は、各地に非常に多かつたが、殊に美濃・尾張は彼の根據地で最も深く勢力を植ゑ附けた所であるから門人も從つて多かつた。その中でも太田巴靜（はじやう）・井上童平・岸名昨囊・仙石廬元坊等が著名であつた。このうち廬元坊を經て、田中五竹坊に至り、その門人安田以哉坊（雪炊庵）との間に爭論が起り、以哉坊は分離して以哉派（又雪炊派ともいふ）を立てた。五竹坊の系統は再和坊（北方町住）がこれを繼いで再和派（又北方派ともいふ）を立て、こゝに美濃風の道統は二派に分れたのである。即ち再和派は初世芭蕉庵桃青・二世東華坊支考・三世廬元坊里紅・四世五竹坊琴左・五世朧庵朴齋（再和坊）・六世森々庵松後・七世雨岡庵左柳・八世一樂庵陶里・九世徐風庵文柳・十世五竹庵子琴・十一世遲樂庵梅二・十二世梔庵青志・十三世魯松庵調固・十四世耕月庵花賞・十五世麥庵一畊・十六世曙庵虛白・十七世千秋庵鶴汀・十八世古今庵而行・十九世一味庵蚯堂（大正九年繼承、現）と續き、以哉派は初世芭蕉庵桃青・二世東華坊支考・三世廬元坊里紅・四世五竹坊琴左・五世以哉坊二狂・六世是什坊傘狂・七世白壽坊信我・八世風廬坊白哉・九世友左坊梅洲・十世逸步仙雅兆・十一世奚花坊風二・十二世優々舍士游・十三世春秋庵巒化・十四世集虛齋右麥・十五世化月坊梅故・十六世文壽坊其兆・十七世俳仙堂篠翁・十八世白果仙專雅・十九世夢外仙眠牛・二十世柳庵一瓢・二十一世積翠居吟風・二十二世好々園迂言・二十三世旭楳園文化・二十四世一圓窓雲居・二十五世回夢園夜城・二十六世知常庵靜也・二十七世紅楳園其馨・二十八世雨後庵桂園・二十九世反古庵三秋（昭和五年繼承、現）と續いたのである。五竹坊と以哉坊との不和は、以哉坊が松島に遊んで、「松島や膝でもみきる舟の莫蓙」と詠んだ句を五竹坊が「松島や眺にもめる舟の莫蓙」と直したことに基因したといふのであるが、これは誤で、安永の末頃他の原因があつたのであらうといふ事である。然るに美濃風は漸次排他的傾向を帶びて來て、兩統の分れた頃から特にそれが甚しくなり、几董の「新雜談集」には「美濃の國の俳諧者流獅子門の一派と號し、他門と交る事を堅く制す」と云つてゐる。又これ等の道統の中からは餘り優れた人は出でず、反つて巴靜門から橫井也有の如き高名な俳文家が出て居り、支考の孫弟子の蓮阿坊白尼門から天明の復興調の俳傑の一人久村曉臺（くむらげうたい）の如きが出て居り、廬元坊門の神谷玄武坊門から同じく天明の復興調の俳傑の一人松岡青蘿の如きが出てゐる。そして青蘿門からは栗本玉屑が出で、玉屑門からは栗庵宇橋が出で、宇橋門から出た栗庵宇山は明治に至つて鳴立庵十三世を繼いでゐる如き道統が見られる。又美濃風は排他的ではあるが、頭數が多いので、俳諧集や俳論等の著作が多く、歲旦帳なども尨大なものが出てゐる。併しその作その論は依然として支考を遵奉するものである。【參考】誹論白露〇芭蕉葉ぶね田川鶯笠〇各務支考及び美濃派に就いて黑田鐵一（國語と國文學大正一五ノ一一）〇獅子門道統十四世集虛齋讓請一件記各務虎雄（國語教育昭和七ノ一二―昭和八ノ一・二） 〔志田・萩原〕

身延山利生記（みのぶさんりしやうき） 「甲州鰍澤報讐」を見よ。

美波留（みはる） 歌學者【姓名】長野氏。美波留は三晴とも書く。【生歿】明和二年信濃に生れ、文政五年（一八二二）江戸に歿す。享年五十八。【閱歷】初め大村光枝に學び、後、塙保己一の門に入つた。博學の人である。「萬葉集類句」（寬政十一年）は、美波留三十五歲の時の板行で、「目覺草」に於ては、契沖・春滿・眞淵を除く當代の歌人を拉し來つて、嚴しい批評を加へ、なほ、てにをはを細かく言ふ作歌法をも非難してゐる。橘守部はこの「目覺草」を批評して「頭書ふでのすさみ」を著はした。【著書】萬葉集類句（別項）〇目覺草（一名筆のすさみ）〇百人一首抄〇徵古圖錄〇對照假字格〇縣居雜錄標註〇縣居雜錄補鈔標註。 〔窪田〕

壬生狂言（みぶきやうげん） 舞踊【別名】融通大念佛【名稱】京千本の壬生寺に行はれる樂舞なるによる。【解說】古くは三月十四日より十日間、現今は四月二十一日より二十日間行はれるもので、現今は寺に屬するものと寺と獨立したものとの二派に分れ、後者は神泉苑に於て公演してゐるが、一定時日はない。京都にはこれに似たものが、他に嵯峨釋迦堂の大念佛や、千本閻魔堂の大念佛などがあり、京都の三大念佛として名高い。但し壬生と嵯峨は無言で、千本は聲を發する。【種類】竹內勝太郎氏の分類法に從へば、第一、面棒（棒振り）・湯立・猿綱渡り。第二、桶取り・愛宕詣・山端とろろ・大原女・餓鬼角力。第三、大江山・羅生門・玉藻前・鵺・土蜘蛛。第四、猿蟹合戰・瘤取り。第五、道成寺・船辨慶・景淸、その他。因みにこの分類は、一面に壬生狂言の發達史を語るものがある。【起原】種々に說かれてゐるが、種類の條の曲目に依つて發達の過程を思ひ、そしてその起原を想像すれば、京都の三大念佛は決して京都に於てのみ獨自に發生したものでなく、ただ京都に於ての故に、獨自の發達を遂げたものといはるべきである。一說には圓覺十萬上人がこれを起したと傳へるが、彼は恐らく中興の祖、或は大成者としての意味であつて、曲目を見ても、これがすべて一時に作られたのでなく、永い年月の間に生み出されたことが知られるのである。寧ろ諸國の寺院の演劇的行事と比較して考へなければならぬ。【價値】假面を使用して無言に演技をなすことは、一部の里神樂（別項）と同じであつて、國劇史上、重要な意味を持つてゐる。また能狂言との交渉も多大である。更に一方に於て、布敎の方便ともした點に於ては、佛敎關係の舞踊史、演劇史上の一異彩でもある。【參考】壬生狂言源流考吉澤義則（國語國文の研究）〇壬生寺の大念佛の權輿 北川智海（民俗藝術一ノ五・九）〇壬生狂言の起源 竹內勝太郎（民俗藝術一ノ五・六）〇日本の默劇西川楠亭〇繪本壬生扮戲盡 〔小寺〕

三船（みふね） 漢學者【姓名】淡海眞人。三船は御船とも記す。字は淡海居士。【生歿】養老六年に生れ、延曆四年七月歿す。六十四。【家系】大友皇子（弘文天皇）の後、勝寶三年淡海眞人の姓を賜ふ。貞觀十五年五月、三船の後、濱成・高主等に淡海朝臣の姓を賜はつたことが見える。【閱歷】幼時出家して元開と稱したが、勝寶三年（三十歲）、勅によつて還俗させられ、姓を賜はつた。同八年五月、朝廷を誹謗した罪によつて衞士府に囚へられたが、やがて放免された。後、尾張介となり、正六位上を授けられた。寶字四年正月山陰道巡察使、翌年從五位下、三河守に轉じた（四十歲）。同六年文部少輔、同八年八月美作守に遷り、又造

大友皇子―葛野王―池邊王―御船王（三船）

池使となつて近江にあり、藤原仲麿の亂に際して功あり、正五位上勳三等近江介となる。次いで中務大輔兼侍從に遷る。神護二年東山道巡察使となり、翌神護景雲元年兵部大輔となつた。同年六月巡察使の事終つて復奏するに當り、國司等に對して公平を缺き、朝旨に反する事あり、勅して現任を解き譴責された。同八月太宰少貳となる。寶龜二年七月刑部大輔、翌年四月大學頭に任じ、文章博士を兼ねた（五十一歲）。同八年正月大判事、同九年再び大學頭となる。翌十年二月「唐大和上東征傳」一卷（別項）を作つた。天應元年三度大學頭となり、翌延曆元年因幡守を兼ね、更に同三年刑部大輔を兼ねた。この年桓武帝即位。次いで翌四年七月卒す。時に刑部卿從四位下兼因幡守であつた。【人物】天性聰明で、博く群書を涉覽し、文史に明かで、當時、文名一世に高かつた。併しその性格は「續日本紀」の神護景雲元年、譴責せられた條などから推すると、聰敏を恃んで却つて義理を失ひ、意に任せて決斷するが如きことも少くなかつたやうである。要するに彼は熱情の人であつたらしい。

【著作】大安寺碑文一首並序（續々群書類從第一六・大日本佛敎全書一一八所收）○唐大和上東征傳一卷（別項）。なほ「經國集」に詩作がある。

【業績】桓武帝の平安奠都の後、三船に勅して神武天皇以降光仁天皇に及ぶ漢風の諡號を奉撰せしめられた。今日傳へられるのがそれである。但し一說に、孝謙帝の朝に勅を奉じて撰すとも、或は文武帝以前の御諡號は、淡海公藤原不比等の撰ともいふ。

【參考】續日本紀（卷三十八）　〔山岸〕

身振り　みぶり　藝術論〔獨〕Mimik.〔英〕mimic.【解說】身振は、ギリシヤ語ミメシス（摸倣）に語源を有する。故に廣義に云へば、舞臺藝術の演出上の諸要素を凡て總稱する。身體的動作、表情のみで言葉（表白）を伴はない演戲をパントマイムといふ。普通に身振りといへば、演劇上の役者の肉體的表出の技術をいふ。　〔村田〕

身振言語　みぶりげんご【名稱】〔英〕the gesture-language.〔獨〕Gebärdensprache.〔佛〕le langage des gestes.【解說】最も廣く言へば表出運動（別項）の一種であるが、自然の表出たる無意反射的の身體運動とは異なり、思想・感情を發表して他人に傳達せんとする目的を有する意志行動で、身體（主として頭部・手・足等）を用ふるものを特に身振言語といふ。ヴントの說く所に從へば、情緒（Affekte）の屬性のうち、强度が血行と呼吸との作用に表はれ、性質が顏面筋肉の運動に表はれ、情緒に伴ふ表象が全身運動に表はれる。この最後の類（表象表出）は、指示運動と摸擬運動との二種に分れる。身振言語はこれ等の表象表出から生じ、發表傳達の意志が加はつたものである。身振言語の種類は、やはり指示運動と摸擬運動とに基づくものであるが、後者は更に種々に分化するが故に、これを總稱するため摸擬と言はずして叙述的身振と名づける。これを表にすれば、

身振言語
- （一）指示的身振（Hinweisende Gebärde）
- （二）叙述的身振（Darstellende Gebärde）
  - （イ）摸寫的身振（Nachbildende Gebärde）
  - （ロ）示唆的身振（Mitbezeichnende Gebärde）
  - （ハ）象徵的身振（Symbolische Gebärde）

指示的は手指で指す如きもの、摸寫的は「眠り」を示すため眼を閉ぢ、首を一方に傾ける如きもの、示唆的は山羊を示すに顎の下に手を以て髭の形を作る如きもの、象徵的は身體の後方を指して時間上の過去を示す如きものをいふ。聾啞者の間、アメリカ土人の間、イタリアのナポリ人の間、システルシアン派僧侶の間に行はれる身振は世に知られた有名なものであるが、前記各種の外多少の變化をなし、それぞれの團體に、特殊の慣習となつた形もある。又この外、指を用ひてａｂｃの字母に象り、これを順次に組合せて語を造り、會話する方法も一種の身振言語であるが、これは自然の發達により生じたのでなく、文字が先づあつてこれを手指で代表するやう工夫したのである。

【參考】Wundt, *Völkerpsychologie—die Sprache.* 4I. 1921. S. 162 f. ‖ Bloomfield, *Introduction to the Study of Language.* 1914, pp. 1–7.　〔神保〕

三保浦松月横櫛　みほのうらまつつきのよこぐし　脚本三幕　世話物【作者】二代河竹新七（默阿彌）【通稱】「切られお富」【別名題】「處女翫浮名横櫛」「夕立雲斑甲横櫛」「月影差横櫛」「友千鳥浮名香箱」等。【初演】元治元年七月、江戶守田座。

〔役割〕赤間源左衞門實は觀音久次（中村芝翫）、切られお富（澤村田之助）、井筒與三郎（澤村訥升）、赤間の手代安後に蝙蝠安（市川九藏）、赤間屋女房お瀧（中村歌女之丞）、お富の親丈賀（市川小文次）等。

【諸本】默阿彌全集第七卷所收。【題材】三代瀨川如皐の傑作「與話情浮名横櫛」（別項）を女の主人公に置きかへて創案せられた書替狂言である。

【梗概】〔序幕〕井筒與三郎は父與左衞門が夜詰の時千葉家の重寶北斗丸が盗まれた廉で切腹したので、その寶刀を見附け出して家名を再興しようと浪々してゐたが、藤ケ谷で鬪らずも以前木更津通ひの船の中で契つたお富に廻り遭ふ。お富は父親の長患ひで已むなく赤間源左衞門の妾となつてゐるので、與三郎に對する心中立てに小指を切つて誓ひ、折柄の雷雨に滑川地藏堂で契りを重ねるが、赤間の手代安藏は豫て想ひをかけたお富を手籠めにしようとして與三郎に邪魔されたので、その間に小指と血の附いた小柄とを奪ひ、海松杭の松を使つて、それを證據に源左衞門に告げ口する。源左衞門は絹問屋とは表向きで、實は盗賊觀音久次だと本性を明かして海松杭の松を斬る。又お富は安藏に嬲り斬りにされるが、安藏は急所をよけ疵だらけにしただけで、氣を失つてゐるお富を海へ捨てると見せかけて助ける。〔二幕〕介抱を受けた爲め安藏に身を任せてゐるお富と、北斗丸の行方を尋ね當て、その金子を調達に赴く與三郎とは、三年の後に薩埵峠の一つ家で邂逅し、お富の父丈賀が井筒與左衞門の若黨忠助であつたことも分かるので、お富はその金子二百兩を、今では赤間屋といふ女郎屋を開いてゐる源左衞門から强請り取る積りで引受ける。それを立ち聞きした安藏は知らぬ顏でお富の手先きに遣はれたやうに見せて一緒に赤間屋を强請り、その金を捲き上げて高飛びしようとするが、お富は歸路沓生塚へ先廻りして安藏を殺し、偶然道具屋吾市と通り合せた與三郎に二百兩を渡す。與三郎はその金で一度は北斗丸を手に入れるが、吾市に摺り替へられ、丈賀の懺悔で與三郎とお富とは實の兄妹であり、安藏が與左衞門の實子であつたことが分る。〔三幕〕

舊惡が露顯して落ち延びて來た源左衞門と、死を覺悟したお富・與三郎とは、駿州袖子ケ浦で行き合ひ、源左衞門は千葉家から北斗丸を盗んだのは自分だと白狀し、折柄駕籠屋と爭ひながら來合せた吾市を殺して北斗丸を與三郎の手へ戻した上、敵を討たれた心でその北斗丸で腹を切る。與三郎は丁度そこへ尋ねて來た千葉家中の者に北斗丸を渡し、弟與五郎

と骨を折つてゐる。（5）池洲稻荷、孫兵衞の家に現じ、道意と協力して頼朝を世に出させよと告げる。（6）孫兵衞、草雙紙の御用で北條時政の奧向に出入する。（7）鶴岡八幡宮社頭、時政の息女政子、艾おろしの頼朝に出逢ひ、相惚れとなる。（8）政子の戀患ひ、醫者が灸治を勸めてゐる。〔中册〕（9）腰元せきや、政子のために戀の媒を孫兵衞に頼む。（10）孫

睦、一人は三升艾の袋を手にし、一人は「三升增鱗祖」を手にしてゐる。

【構想】江戸の名物三升艾、一名團十郎艾の店本三升屋、同じく江戸の名物草雙紙の問屋鱗形屋の屋號及び本三升屋の主人の平右衞門の平、また鱗形屋が伊豆生洲稻荷を勸請してゐることを、頼朝・時政・政子の事件に附會して、兩家警書由來記の想をなしたのである。また

多く筆は執つたが、特筆するほどの當り作はなかつた。【著作】源平劇場年代記（文政十三年十一月市村座。源平盛衰記の顔見世狂言）○頼有御攝綱（天保三年十一月河原崎座。前太平記の顔見世狂言）○假名手本忠臣藏（天保四年三月河原崎座。忠臣藏の裏として、蜂の巢の平右衞門・お輕勘平道行・宅兵衞上使・師直湯治場の夢等を附加す）○新兵衞菖蒲帷子（天保四年五月河原崎座。二人新兵衞

決斷するが如きことも少くなかつたやうである。要するに彼は熱情の人であつたらしい。【著作】大安寺碑文一首並序（續々群書類從第一六・大日本佛敎全書一一八所收）〇唐大和上東征傳一卷（別項）。なほ「經國集」に詩作がある。【業績】桓武帝の平安奠都の後、三船に勅して神武天皇以降光仁天皇に及ぶ漢風の諡號を奉撰せしめられた。今日傳へられるのがそれである。但し一說に、孝謙帝の朝に勅を奉じて撰すとも、或は文武帝以前の御諡號は、淡海公藤原不比等の撰ともいふ。【參考】續日本紀（卷三十八）　〔山岸〕

身振り　みぶり

藝術論〔獨〕Mimik.〔英〕mimic.【解說】身振は、ギリシヤ語ミメシス

から生じ、發表傳達の意志が加はつたものである。身振言語の種類は、やはり指示運動と摸擬運動とに基づくものであるが、後者は更に種々に分化するが故に、これを總稱するため摸擬と言はずして敍述的身振と名づける。これを表にすれば、

身振言語
- (一)指示的身振(Hinweisende Gebärde)
- (二)敍述的身振(Darstellende Gebärde)
  - (イ)摸寫的身振(Nachbildende Gebärde)
  - (ロ)示唆的身振(Mitbezeichnende Gebärde)
  - (ハ)象徵的身振(Symbolische Gebärde)

指示的は手指で指す如きもの、摸寫的は「眠り」を示すため眼を閉ぢ、首を一方に傾ける如きもの、示唆的は山羊を示すに顎の下に手を以て髭の形を作る如きもの、象徵的は身體の後方を指して時間上の過去を示す如きものを

守田座。（役割）赤間源左衞門實は觀音久次（中村芝翫）、切られお富（澤村田之助）、井筒與三郎（澤村訥升）、赤間の手代安後に蝙蝠安（市川九藏）、赤間屋女房お瀧（中村歌女之丞）、お富の親丈賀（市川小文次）等。【諸本】默阿彌全集第七卷所收。【題材】三代瀨川如皐の傑作「與話情浮名横櫛」（別項）を女の主人公に置きかへて創案せられた書替狂言である。【梗概】〔序幕〕井筒與三郎は父與左衞門が夜

年の後に薩埵峠の一つ家で邂逅し、お富の父丈賀が井筒與左衞門の若黨忠助であつたことも分かるので、お富はその金子二百兩を、今では赤間屋といふ女郎屋を開いてゐる源左衞門から强請り取る積りで引受ける。それを立ち聞きした安藏は知らぬ顏でお富の手先きに遣はれたやうに見せて一緒に赤間屋を强請り、その金を捲き上げて高飛びしようとするが、お富は歸路畜生塚へ先廻りして安藏を殺し、偶然道具屋吾市と通り合せた與三郎に二百兩を渡す。與三郎はその金で一度は北斗丸を手に入れるが、吾市に摺り替へられ、丈賀の懺悔で與三郎とお富とは實の兄妹であり、安藏が與左衞門の實子であつたことが分る。〔三幕〕舊惡が露顯して落ち延びて來た源左衞門と、死を覺悟したお富・與三郎とは、駿州袖子ケ浦で行き合ひ、源左衞門は千葉家から北斗丸を盜んだのは自分だと白狀し、折柄駕籠屋と爭ひながら來合せた吾市を殺して北斗丸を與三郎の手へ戻した上、敵を討たれた心でその北斗丸で腹を切る。與三郎は丁度そこへ尋ねて來た千葉家中の者に北斗丸を渡し、弟與五郎には自分は家來の倅でお富と兄妹であることを告げてお富と共に自殺する。

【解說】「切られ與三」に對して作られた「切られお富」ではあるが、その後日譚でもなければ趣向の踏襲でもない。主要なる人名を借用して全然別な狂言にしたもので、所謂書替狂言といふべきものに屬する。

【參考】河竹默阿彌河竹繁俊〇澤村田之助矢田挿雲〇續々歌舞伎年代記　〔河竹〕

三升增鱗祖　みますますうろこのはじめ

黃表紙　三冊十五丁二十二圖【作者】戀川春町【畫工】自畫【名義】江戸名物三升艾の繁昌を祝福する義と、繪草紙板元鱗形屋の由來を示す義とを兼ねてゐる。【刊行】安永六年、鱗形屋板【諸本】稀書複製會本がある。【題材】時政が賴朝に政子を添はせた史實を藉りてゐる。【梗概】〔上册〕(1)近江伊吹山麓に艾を商つてゐる永持道意の夢に、伊豆の池洲稻荷が示現する。石橋山の敗後身を寄せる所なき源賴朝を守り立てよ、然らば將來富貴ならんとのこと。(2)道意、賴朝のために助命を願ふ。(3)道意、賴朝に供して伊豆の配所にゆく。その旅姿。(4)道意が伊豆池洲稻荷の傍に出した艾店、賴朝も手傳つてゐる。賴朝の若衆姿で店は一段と繁昌する。その隣の草雙紙店の主人山内屋孫兵衞も艾屋の繁昌に負けまいと骨を折つてゐる。(5)池洲稻荷、孫兵衞の家に現じ、道意と協力して賴朝を世に出させよと告げる。(6)孫兵衞、草雙紙の御用で北條時政の奧向に出入する。(7)鶴岡八幡宮社頭、時政の息女政子、艾おろしの賴朝に出逢ひ、相惚れとなる。(8)政子の戀患ひ、醫者が灸治を勸めてゐる。〔中册〕(9)腰元せきや、政子のために戀の媒を孫兵衞に賴む。(10)孫兵衞、艾の御用を道意に仰せつけるやう政子の附家老新五左衞門に賴む。(11)道意と孫兵衞の密議、共に賴朝のために盡さうと約束する。(12)政子の灸治、孫兵衞はお慰みに草雙紙をさし上げる。道意・賴朝は、切艾をさし上げる。艾を三升ほどすゑる。(13)せきやの計らひで政子・賴朝の密會、時政樣子を窺ひ知る。(14)新五左、密會を見つけて騷ぎ立てる。せきや色仕掛で騷ぎを留める。(15)せきや・賴朝、新五左を灸で懲してその口を封ずる。(16)政子と賴朝の祝言。時政、道意に北條家の姓平の字を名前につけさせる。又三升を家の紋にさせる。政子の全快も灸三升をすゑた爲めだといふ理由である。時政、孫兵衞にも北條家にゆかりある鱗の紋所を與へる。草雙紙も灸治の役に立つたとの理由である。〔下册〕(17)道意、江戸大傳馬町に艾店を開いてゐる。三升屋平右衞門といふ。(18)三升屋の隣に孫兵衞、草雙紙店を開いてゐる。屋號鱗形屋、傍に池洲稻荷を勸請してゐる。(19)平右の夢、艾どもの評議、孫兵衞の夢、草雙紙一味のものの評議。夢は互に賴朝を世に出した功を獨占しようとする二人の本心の現はれである。(20)夢。艾と草雙紙の戰爭、草雙紙墨を塗られて敗北。(21)夢。草雙紙に湯を浴びせられて艾の敗北。(22)夢覺めた平右と孫兵衞の和睦、一人は三升艾の袋を手にし、一人は「三升增鱗祖」を手にしてゐる。

【構想】江戸の名物三升艾、一名團十郎艾の店本三升屋、同じく江戸の名物草雙紙の問屋鱗形屋の屋號及び本三升屋の主人の平右衞門の平、また鱗形屋が伊豆生洲稻荷を勸請してゐることを、賴朝・時政・政子の事件に附會して、兩家繁昌由來記の想をなしたのである。また艾が湯を浴びせられること（二十一圖）、又それがために、却つて艾の效能が現はれるやうになつたといふのは、その艾が湯ざらし艾と銘をうつてゐることからの着想である。【史的地位】艾と草雙紙の戰爭などの擬人物は、草雙紙に於ては可なり古い想であり、三升艾の由來記めくものも、寶暦十三年鳥居淸滿畫の「江州伊吹山團十郎蓬艾傳」等の先蹤があるが、兩家を併せ說き、又宣傳用の趣向を立てたのは珍しい。　〔山口〕

三升屋二三治　みますやにさうぢ

脚本作者【通稱】伊勢屋宗三郎【俳號】和島・榮思・思馨【生歿】天明三年江戸に生れ、安政三年（一八五六）八月五日江戸にて歿す。享年七十二。【墓所】深川龜住町正壽院【閱歷】家は淺草藏前の札差業、伊勢屋といふ富豪であつたが、七代市川團十郎を贔屓にした關係から愛好者となり、作者を希望し、文化九年には團十郎の紹介で、三升屋二三治の名を番附へ出させたが、芝居へは出勤しなかつた。文化十年に芝居道の人々七十餘人を山谷の八百善へ招いて大振舞をしたのが問題となり、家を廢嫡されたので、正式に劇道へ入り、文化十三年桐座の顏見世に二枚目に進み、文政十三年市村座の顏見世に立作者に上つた。嘉永元年の市村座春興行を名殘りとして引退するまでの二十年間、多く筆は執つたが、特筆するほどの當り作はなかつた。【著作】源平劇場年代記（文政十三年十一月市村座。源平盛衰記の顏見世狂言）〇賴有御攝綱（天保三年十一月河原崎座。前太平記の顏見世狂言）〇假名手本忠臣藏（天保四年三月河原崎座。忠臣藏の裏として、蜂の巢の平右衞門・お輕勘平道行・宅兵衞上使・師直湯治場の夢等を附加す）〇新兵衞菖蒲帷子（天保四年五月河原崎座。二人新兵衞の書替へ）〇梅初春五十三驛（天保六年二月市村座。南北の五十三驛を增補す）〇金龍山誓礎（天保十三年十月中村座。淺草觀世音靈驗記）〇花盞大江山（弘化二年十一月中村座。羅生門と綱館）等の脚本の外、「歌舞伎品定」「作者店卸」（別項）「三升屋二三治戲場書留」（別項）「紙屑籠」（別項）「妓用袋」「歌舞伎之式」等の著がある。何れも歌舞伎の故實考證を記したものである。　〔渥美〕

三升屋二三治戲場書留　みますやにさうぢけぢやうかきとめ

演劇書　二卷【著者】三升屋二三治【成立】天保末年か。【諸本】「燕石十種」に收められたのは、關根東紫所藏の寫本なる由活東子の奧書あり。國書刊行會本燕石十種卷一所收。【解說】上卷は劇場の故實、狂言の由來、俳優の逸話等五十項を雜纂的に述べ、下卷は歌舞伎の初として永祿三年お國山三の女芝居より、天保元年八月迄の江戸歌舞伎の歷史を年表的に略記し、「花江都歌舞妓年代記」（別項）の相違と附錄の形式で天保十二・十三年の芝居猿若町移轉に關する言渡書等と一ケ年給金名題とを記す。注目すべき記事多く、附載當時の俳優給金附の如きは、特に價値多き研究資料である。　〔增田〕

三升屋兵庫　みますやひやうご

脚本作者【解說】初代市川團十郎の作者名（市川團十郎參照）。早くは作者名をも市川團十郎と記してゐたが、

現存狂言本によると、元祿十三年に始めて兵庫と見えてゐる。但しこれを以て直にその以前に兵庫と言はなかつたとは斷言できない。

【作品】現在では、「金の揮」等の記事により、「門松四天王」（貞享元年、中村座上演）を彼の初作と傳へてゐるが、その後は元祿十年頃まで執筆の傳が見當らぬ。尤も當時の傾向から見て先行作によつて書き替へられた筋立が多いから、嚴格に彼の自作といふ意味も、單なる署名によつて判ぜられぬ場合もあると思ふ。元祿年中に於ける彼の作と認められてゐる名題を次に列擧する。○參會名護屋（元祿十年）（別項）○百合若大臣（元祿十年三月、中村座。中村明石淸三郎と合作。幸若の飜案）○兵根元曾我（同年）（別項）○龍女三十二相（元祿十一年六月、同座。同作）○源平雷傳記（同年）（別項）○吉野靜碁盤忠信（同年同座）○女飛驒内匠（元祿十二年正月同座）○信田和合玉（同年三月、同座）○葛城小夜嵐（同年五月、同座。不破名古屋）○一心五界玉（同年七月、同座。甲賀三郎）○當世小國歌舞伎（同年十一月、森田座。細川山名爭）○景政雷問答（元祿十三年正月、森田座。源平雷傳記に據る）○和國御翠殿（同年三月、同座。源氏物語女三宮の條）○大日本鐵界仙人（同年五月、同座。曾我）○金平六條通（同年十一月、中村座）○傾城王昭君（元祿十四年、「面向不背玉」參照）○出世隅田川（同年三月、同座）○日本祇園精舍寶寺開帳（同年五月、同座。文覺上人）○當世酒呑童子（同年七月、同座。毘沙門）○葛城呉越戰（同年十一月、同座。不破に丹波助太郎）○星合十二段（元祿十五年二月、同座。安宅）○新板高館辨慶狀（同年七月、同座。二人辨慶）○天地人筒守（同年十一月、森田座。和泉小二郎）○式三番柱曆（元祿十六年正月、同座）○成田山分身不動（同年四月、同座）○小栗十二段（同年七月、同座）○源氏六十帖（同年十一月、市村座。源氏物語）○移徙（わたまし）十二段（寶永元年二月、同座。藤本平左衞門合作、佐藤忠信）等。右は多く當り作で、存生中に再演されたものも擧げられる。

【作風】題材乃至脚色の世界は、所謂「時代」を中心とし、要するに武家物を以て終始してゐるが、これは彼の荒事藝の演出の要求に對しては最も妥當な態度である。彼と中村座との關係が、何に起因して發生したか不明であるが、江戸草分格の中村座に於て、座本にも比せらるべき地位を得て、自己の作を演じ得られた事は、彼のために幸福であつたと共に、江戸式演技としての荒事藝の構成に最も貢獻した所である。世界の背景を強ひて分類すれば、王代・時代・お家の三種に分たれるのであるが、それ〴〵の內容は武骨さ壯大さにあつて、時に稚拙味を持つ超自然的な雰圍氣を漂はす。但し單なる武骨さを以て終始した時代物ではなくて、常に濃艶な世話場を添へる用意を失つてをらぬ。そこに後世に見る如き純時代物へ分類せられぬ明るみをもつ事を特徴とする。その點に於て素朴や枯淡でなしに、優雅な稚拙味があると思ふ。元祿十年代には合作者として中村淸三郎（別項）を加へてゐる。想ふに、その頃はまだ兵庫の作者的練習時代とも見られて、優雅な方面を淸三郎によつて補添せられたのではなかつたらうか。而もそれによつて江戸演劇としてすら、不備な結果を生むべきことを免れしめたのではなかつたらうか。

【參考】金之揮（二代市川團十郎）○古今役者大全○役者全書○狂言作者の傳統（伊原敏郎（早稻田文學二一九ノ二））○日本演劇史（同上）○江戸歌舞伎（守隨憲治（日本文學講座））○戲曲小說近世作家大觀（鈴木竹三）　（守隨）

みみずのたはこと　感想集【作者】德富健次郎（蘆花）【刊行】大正二年三月、新橋堂（後、福永書店）【內容】「故人に」「都落ちの手帳から」「草葉のさゝやき」「麥の穗稻穗」「ひとりごと」「過去帳から」「落穗の掻き寄せ」「旅日記から」「讀者に」の九篇から成る感想集で、著者が東京の郊外粕谷の里に移つて後六ケ年間の記錄である。全體八十七章の短文から成つてゐる。【解說】明治三十五年より死を欲するほどの懊惱に陷つてゐた著者は、明治三十九年の夏エルサレムにキリストの蹟を探り、ロシヤにトルストイを訪ね、やゝ精神の安靜を得て歸り、明治四十年二月二十七日を卜して東京府北多摩郡千歳村粕谷に居を移し、百姓生活をする事になつた。そして小說「黑潮」（別項）刊行以來疎隔になつてゐた兄猪一郎とも和し、綱島梁川・木下尙江・內村鑑三・石川三四郎・伊藤證信・小田賴三・山路愛山等と親交往來するやうになり、學生たちの依賴に應じて、青山學院・第一高等學校などに講演にも出かけた。兄猪一郎の末女鶴子を迎へて養女とし、平和なる日を送り迎へつつ日毎に鍬を執り畑を耕し、樹を植ゑ花を作つた。この時代は著者の生涯中最も平和に充ち感謝に溢れた時で、小說家としてよりも、土に親しむ自然詩人、人道主義の思想家として當時の青年から渇仰された。著者はこの感謝時代の六ケ年間に經驗せる感想を集めてこの一書を編み、これを公けにする時、自らその廣告を書いた。その文中に、「神は田舍を造り、人は都會を作る。著者は田舍を愛すれども都會を捨つる能はず、心竊に都會と田舍の間に架する橋梁の其の板の一枚たらん事を期す、されば本書は信仰と趣味、理想と煩惱の間に徘徊彷徨せる著者が懺悔の一片とも見るべく、又多感多情の著者なるレンズを透かして印象せられたる田園生活の印畫とも見るべし云々」とあるのは本書の內容を十分に語り得たものである。著者の著書中、この書ほど、あらゆる階級の人々から批評稱讃されたものはない。本書は第二の「自然と人生」（別項）であつて、更に內容の幾十倍充實した書で、如何に讀書界の歡迎を受けたかは、發行後一ケ年にして三萬部を賣り盡したことでも證明されよう。　（沖野）

耳引（みみひき）　能狂言「口眞似」を見よ。

耳囊（みみぶくろ）　隨筆　二卷【著者】根岸守信【諸本】本書は元來卷數不定で五卷五册本、十卷十册本等があり、更に後編として十二册を數ふる本もあつて詳略も區々である。今は帝國圖書館藏の二卷本を底本として置く。但し傳寫の誤りが少くない。續隨筆文學選集卷三所收。【解說】著者の自序に、「此耳囊は、營中勤仕の暇、古老の物がたり或は閑居へ訪來る人の雜談、暫し耳に止りて面白しとおもひし事共、または子弟の心得にもならんとおもふ事を書留て一囊に入置し云々」とある如く、江戸時代中葉に在つた上下雅俗諸階級の人事、その他里談巷說、奇事異聞、醫方藥方の類を何くれとなく集めたもので、上卷には禪僧狂歌の事から怪僧墨蹟の事に至る數十條、下卷には蛇を養ひし人の事から福を授くるを福を植うると云ふ事に至る數十條を收め、聊か圖畫を交へてある。中に劍道家小野次郎右衞門等、猿樂家觀世新九郎・金春太夫・鼻金剛・鷺仁右衞門等、藥舗大木口哲、實母散店の起立、柳生但馬守・大岡越前守の逸事、德川治貞の賢德、德川吉宗の大力、兩國橋幾世餠の事、賤妓

の篤實、非人の賢者の諸項、その他猥談・怪談等もあつて、宛然江戸時代の「宇治拾遺物語」の如き觀をなしてゐる。無年紀の著者自序がある。

【著者小傳】根岸守信は一名鎭衞、幕臣で肥前守と稱し、小普請組の家から起つて、佐渡奉行・勘定奉行を經て町奉行に陞り、名吏と謂は

た。舊金澤藩士。年少、藩校に學び、夙に學才卓越を以て知られた。後、上京して帝國大學に入り、明治十六年卒業文學士になつた。同十九年、神田集成社から「基督教小史」を出版。且つ東京專門學校講師として、社會學・論理學を講じた。同二十一年四月、當時の急激な

る歐化的風

同志の人々を指導して東洋文學の研究に從事し、明治二十六年、「王陽明」を出版したが、一方、彼の專門である哲學開拓にも亦力を入れ、二十二年、「哲學涓滴」を著はし、二十五年、「我觀小景」（別項）を公にした。後者は學界に於て相當重要視せられた。その後、三十四年四月、文學博士の學位を受けた。三十九

通に「都路往來」といふのは、江戸から京都へ上る東海道五十三次の驛名を詠み込んだもので、「都路は、五十三次餘りに三つの宿、時得て咲くや江戸の花、波靜かなる品川や、頓（やが）て越え來る川崎の、軒端並ぶる神奈川は、はや程ケ谷の程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ」の如く文字鎖になつてゐる。享保年間の作であ

森田座。細川山名爭）○景政雷問答（元祿十三年正月、森田座。源平雷傳記に據る）○和國御翠殿（同年三月、同座。源氏物語女三宮の條）○大日本鐵界仙人（同年五月、同座。曾我）○金平六條通（同年十一月、中村座）○傾城王昭君（元祿十四年、「面向不背玉」參照）○出世隅田川（同年三月、同座）○日本祇園精舍寶寺開帳（同年五月、同座。文覺上人）○當世酒呑童子（同年七月、同座。毘沙門）○葛城吳越戰（同年十一月、同座。不破に丹波助太郎）○星合十二段（元祿十五年二月、同座。安宅）○新板高館辨慶狀（同年七月、同座。二人辨慶）○天地人筒守（同年十一月、森田座。和泉小二郎）○式三番柱曆（元祿十六年正月、同座）○成田山分身不動（同年四月、同座）○小栗十二段（同年七月、同座）○

時代物へ分類せられぬ明るみをもつ事を特徴とする。その點に於て素朴や枯淡でなしに、優雅な稚拙味があると思ふ。元祿十年代には合作者として中村淸三郎（別項）を加へてゐる。想ふに、その頃はまだ兵庫の作者的練習時代とも見られて、優雅な方面を淸三郎によつて補添せられたのではなかつたらうか。而もそれによつて江戸演劇としてすら、不備な結果を生むべきことを免れしめたのではなかつたらうか。

【參考】金之揮（二代市川團十郎）○古今役者大全○役者全書○狂言作者の傳統（伊原敏郎（早稻田文學二九ノ二））○日本演劇史（同上）○江戸歌舞伎（守隨憲治（日本文學聯講））○戲曲小說近世

て、青山學院・第一高等學校などに講演にも出かけた。兄猪一郎の末女鶴子を迎へて養女とし、平和なる日を送り迎へつつ日毎に鍬を執り畑を耕し、樹を植ゑ花を作つた。この時代は著者の生涯中最も平和に充ち感謝に溢れた時で、小說家としてよりも、土に親しむ自然詩人、人道主義の思想家として當時の青年から渇仰された。著者はこの感謝時代の六ケ年間に經驗せる感想を集めてこの一書を編み、これを公けにする時、自らその廣告を書いた。その文中に、「神は田舍を造り、人は都會を作る。著者は田舍を愛すれども都會を捨つる能はず、心竊に都會と田舍の間に架する橋梁の其の板の一枚たらん事を期す、されば本書は

人の雜談、暫し耳に止りて面白しとおもひし事共、または子弟の心得にもならんとおもふ事を書留て一囊に入置し云々」とある如く、江戸時代中葉に在つた上下雅俗諸階級の人事、その他里談巷說、奇事異聞、醫方藥方の類を何くれとなく集めたもので、上卷には禪僧狂歌の事から怪僧墨蹟の事に至る數十條、下卷には蛇を養ひし人の事から福を授くるを福を植うると云ふ事に至る數十條を收め、聊か圖畫を交へてある。中に劍道家小野次郎右衞門等、猿樂家觀世新九郎・金春太夫・鼻金剛・鷺仁右衞門等、藥舖大木口哲、實母散店の起立、柳生但馬守・大岡越前守の逸事、德川治貞の賢德、德川吉宗の大力、兩國橋幾世餠の事、賤妓の篤實、非人の賢者の諸項、その他猥談・怪談等もあつて、宛然江戸時代の「宇治拾遺物語」の如き觀をなしてゐる。無年紀の著者自序がある。

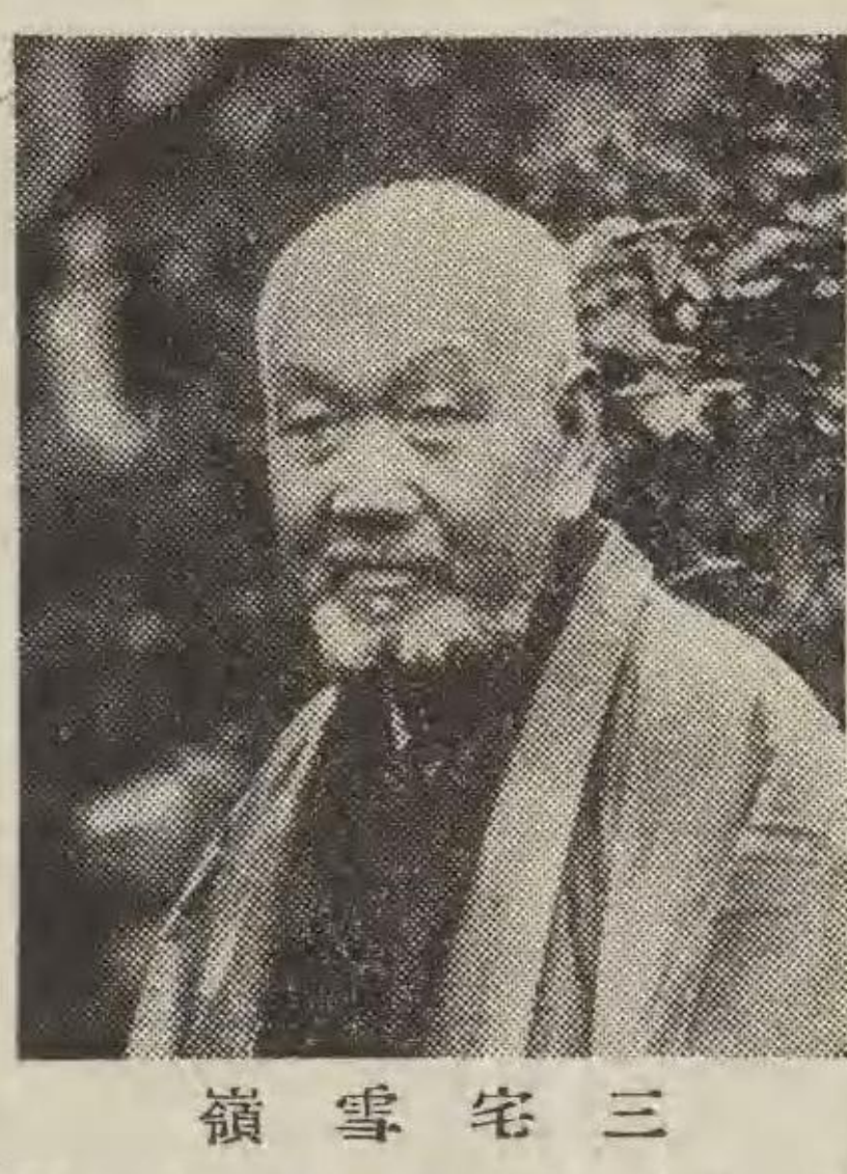
【著者小傳】根岸守信は一名鎭衞、幕臣で肥前守と稱し、小普請組の家から起つて、佐渡奉行・勘定奉行を經て町奉行に陞り、名吏と謂はれた人である。文化十二年十月六日歿す。享年七十九。〔和田〕

御裳濯 みもすそ 「神事物の謠曲」を見よ。

宮城野信夫 みやぎのしのぶ 「碁太平記白石噺」を見よ。

三宅花圃 みやけくわほ 小說家【本名】龍子【閱歷】明治元年十月、東京に生る。父は幕末から明治にかけて外交方面で鳴らした田邊太一。花圃は跡見女學校出身で、三宅雪嶺（別項）に嫁する前から早く小說の筆を執り、田邊花圃の名で知られた。また和歌を中島歌子に學び、樋口一葉（別項）と共に門下の双璧と稱せられた。明治二十一年、小說「藪鶯」を發表、次いで二十八年二月、「太陽」に「露のよすが」を出した。同年末、「文藝俱樂部」臨時增刊「閨秀小說」の卷頭に、「萩桔梗」を寄せ、溫雅な作品として推奬せられた。その後も「文藝俱樂部」に「電報」等を出したが、家事に追はれて永く文筆に遠ざかつた。大正九年、雪嶺が雜誌「女性日本人」を創刊するに及びてこれを助け、花蔭會同人を率ゐて、歌壇を擔當した。同誌上に一中節の新歌曲なども出した。且つ女流文學者を世に出すについて相當貢獻してゐる。同誌廢刊後は、雜誌「我觀」に時々隨筆を發表してゐる。〔高須〕

三宅雪嶺 みやけせつれい 思想家【本名】雄二郎【閱歷】萬延元年五月、石川縣金澤に生れた。舊金澤藩士。年少、藩校に學び、夙に學才卓越を以て知られた。後、上京して帝國大學に入り、明治十六年卒業文學士になつた。同十九年、神田集成社から「基督教小史」を出版。且つ東京專門學校講師として、社會學・論理學を講じた。同二十一年四月、當時の急激なる歐化的風潮にあきたらず、祖國の文化を中外に顯揚せんとする目的の下に、同憂の人々と共に雜誌「日本人」（別項）を政教社から創刊して國粹主義を高唱し、翌二十二年二月、新聞「日本」が生れるや、これにも關係した。「日本人」は、隱然、歐化的平民主義を唱ふる「國民之友」（別項）に對抗し、常に薩長藩閥の專恣を非難して痛烈な筆を揮つた爲め、時の政府に忌諱されて一再ならず發行停止を受けた。雪嶺はその休刊中、單行本「眞善美日本人」を明治二十四年三月上梓し、次いで同年五月、「僞醜惡日本人」を公けにして日本精神を高調し、相當に大きい世の反響を喚起した。次いで同二十五年、同志志賀矧川と雜誌「亞細亞」を創刊、卷頭の「日本人」欄には、矧川と共に論說・隨筆等を執筆した。當時、雪嶺等は藩閥內閣が極度に言論を抑厭することを憤り、諷刺と罵倒に滿ちた「頌德表」と題する一册子を出版し、伊藤博文・井上馨、その他の人々に向つて挑戰した。その後、間もなく「日本人」を再刊して政界・宗教界等の腐敗を指彈し、本願寺改革の問題に關しては、殊に侃諤の筆を揮ひ、青年間の人氣を博した。他方、雪嶺は同志の人々を指導して東洋文學の研究に從事し、明治二十六年、「王陽明」を出版したが、一方、彼の專門である哲學開拓にも亦力を入れ、二十二年、「哲學涓滴」を著はし、二十五年、「我觀小景」（別項）を公にした。後者は學界に於て相當重要視せられた。その後、三十四年四月、文學博士の學位を受けた。三十九年、陸羯南が病のために日本新聞の經營を伊藤欽亮に讓り、主幹兼社長の地位を去るや、雪嶺は推されて主幹となつた。そして新聞編輯に關しては、雪嶺は飽くまで日本新聞の傳統を守らうとするのを、伊藤がそれに反對したので、同年部下二十餘名と共に退社し、新たに雜誌「日本人」を改題して「日本及日本人」（別項）とし、その主張を固持した。その後、傍ら「中央公論」に屢々人物月旦を寄せ、次いで「實業之世界」に、久しきに亙つて卷頭論文を執筆した。大正九年八月、日本の女性に向つて國民的自覺を與へんがため、夫人花圃と共に「女性日本人」を創刊したが、永續しないで終つた。次いで大正十二年末、「日本及日本人」の經營についても、政教社同人と意見が合はず、去つて雜誌「我觀」を發行し、今日に至つてゐる。【著書】前記の外に、「宇宙」（別項）「馬鹿趙高」「冒頓」「想痕」「世の中」「大塊一塵」「小泡十種」「明治思想小史」等がある。【影響】雜誌「日本人」及び日本新聞に於ける雪嶺の麾下に集り、論壇・學界に名を成したものが少くない。內藤湖南・畑山呂泣・田岡嶺雲・長澤別天・國府犀東・長谷川如是閑・香川怪庵・古島一雄等は、その主なるものである。〔高須〕


三宅雪嶺

土產の鏡 みやけのかがみ 「鏡男」を見よ。

都一中 みやこいつちゆう 「一中節」を見よ。

都路往來 みやこぢわうらい 往來物【解說】普通に「都路往來」といふのは、江戸から京都へ上る東海道五十三次の驛名を詠み込んだもので、「都路は、五十次餘りに三つの宿、時得て咲くや江戸の花、波靜かなる品川や、頓て越え來る川崎の、軒端並ぶる神奈川は、はや程ケ谷の程もなく、暮れて戸塚に宿るらむ」の如く文字鎖になつてゐる。享保年間の作であらうといふ。地理科往來物中、都路型と呼ぶもので、交通路を示す目的で編纂されたものである。七五調を取り文字鎖を用ひたのは、逍遙院の「源氏名寄文章」を學び、語呂によつて記憶に便ならしめようとしたのに外ならぬ。

【都路型の諸往來】東海道を逆に、京都から江戸に下るものに「東下り」がある。中仙道を江戸から京都へ上るものに、「中山道往來」「木曾往來」「岐岨の花布美」「木曾のかけはし」等があり、同じ道を逆にとつたものに、「吾妻路往來」がある。會津から江戸への宿驛を詠み込んだのが「江戸道中往來」、仙臺から江戸へのが「長町往來」である。金澤から江戸への交通路を示したものを「あづまの都路」といひ、萩から京都への交通路を編んだのを「驛路の栞」といふ。

【參考】往來物落穗集（石川謙）○封建制下に於ける民主的傾向の胎生（同上）○地理科往來物についての研究（同上）〔石川（謙）〕

宮古路加賀太夫 みやこぢかがだいふ 「富士松薩摩掾」を見よ。

宮古路月下の梅 みやこぢげつかのうめ 豐後節寄せ本　上下二册【刊行】未詳。併し多分この淨瑠璃が江戸で禁止された元文頃に出たのであらう。板元は江戸本濱町伊賀屋勘右衞門。【諸本】日本歌謠集成卷十・德川文藝類聚第九所收。【內容】宮古路豐後掾一派の正本三十

七種を合綴した寄せ本で、版式も字體・行數も區々である。目錄の示すが如く、過半は近松の世話淨瑠璃を借用したものであるが、豐後掾の語り口は悽婉纖細で、當時の淫靡頽廢的な世好に投じたので、風俗上害ありとして江戸に在ることを禁ぜられた。目次・奧付は左の如くである。

〔上卷〕

一、祝言　魚づくし
二、忍ぶ山頭日草　（舟や儀介　花やおふゆ道行）
三、妹脊の中酌　（お菊幸介みち行　旅のきせわた）
四、比翼の初旅　（新兵衛　小女郎道行）
五、雙紋刀の銘月　（半七　お花みち行）
六、相生萬歳寶藏　友ずみ物ぐるひ
七、同祝儀龍神揃
八、小町大かゞみ　少將みち行
九、（おちよ　半兵衛）浮名のもふせん
一〇、ゑほう長じや
一一、ふたご隅田川　狂女道行
一二、傾城小夜のなかやま
一三、高野萬年草　（くめ之助　おむめ道行）
一四、用明天皇　舟路道行
一五、千代若みどり　わん久道行
一六、若かいで口舌の帶
一七、吾妻噂夜老鶴　八百やお七道行
一八、心中天網島　なごり橋づくし

〔下卷〕

一九、あし刈　難波女まひ
二〇、河内がよひ　なり平唄念佛
二一、夏芙蓉紅染小袖　（おちよ　半兵衛道行）
二二、そね崎つい善　（おはつ　徳兵衛道行）
二三、半九郎ぶし　戀路の濡わらじ
二四、ひめお笠　（おなつ　清十郎さいごの段）
二五、傾城出口柳の道行
二六、辛崎心中　（半兵衛　小いな道行）
二七、しのだづま　くずのは道行
二八、曾我駒の泪　（鬼王　團三郎かたみをくり）
二九、契情吉原筏　（與吉　高さき道行）
三〇、難波津色羽二重　（たるや　おせん道行）
三一、酒呑童子　賴光山いり
三二、睦月連理の椿　（伊八　おさん道行）
三三、かりばざくら　かよひつばさ
三四、淀ぞめ　三ツかりがね
三五、十七年忌　（傳兵衛　おしゆん道行）（原本に本文なし）
三六、まんざいゑほうみやげ
三七、駒鳥こひのせきふだ
三八、祝言　新たかだち
千秋萬歳叶

世にあざむく類板多ク有といへども其寫なるゆへに節章のあやまりはなはだし仍而太夫直傳之正本は㊞如此之印形おし令開板者也能々御吟味被成御求メ御らん被遊可被下候宮古路豐後掾　㊞　直傳

江戸板元　もと濱町　いがや勘右衛門㊞

然るに、こゝに同名の一異本が筆者の家藏にある。改裝本一册で版元等は不明であるが、最初に目錄が一枚ついてをり、內容の異同が甚だしく、兩書共通のものは、○印を附した十九種に過ぎぬ。これは多分書肆が後に勝手にさしかへて賣出したものであらう。目次は原本に二段になつてゐるが、便宜上一段に改める。

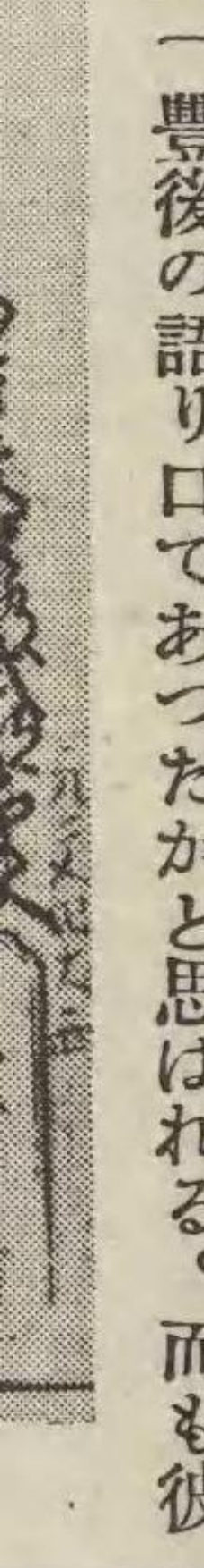
宮古路月下の梅　宮古路豐後直傳
道行景事段物　惣目錄數四十三番
○祝言　魚づくし
○妹脊の中酌　お菊幸助みち行猿のきせわた
○比翼の初旅　（新兵衛　小女郎みち行）
○雙紋刀銘月　（半七　お花みち行）
○相生萬歳寶藏　友ずみ物ぐるひ
○同　祝儀龍神揃
○小町大かゞみ　少將みち行
同　しのびの段
同　そこは小町
傾城二子山　いもせ川
朧月うつゝの女夫　鉢たゝき
同　うつゝの道行
殘月蘆枯葉　（喜七　清瀧）木末の鶯
壽門松　（與次兵衛　あづま道行）
○吾妻噂夜老鶴　八百屋お七道行
○夏芙蓉紅染小袖　（おちよ　半兵衛道行）
福壽海姿見寶殿　（國次　あげ卷みち行）
○心中天網島　（次兵衛　小はるみち行）
○しのだづま　くずのは道行
○河内がよひ　なり平哥念佛
淀鯉出世瀧德　（辰五郎　あづまみち行）
○雙子隅田川　狂女みち行
○高野萬年草　（くめの介　おむめみち行）
○辛崎心中　（半兵衛　小いな道行）
契情三度笠　（忠兵衛　梅川相合籠）
○曾我駒のなみだ　（鬼王　團三郎かたみをくり）
丹波與作　道行夢路のこま
石川五右衛門　柳の前道行
○酒呑童子　賴光山いり
傾城反魂香　みくまのかげろふの姿
大經師昔暦　（おさん　茂兵衛みち行）
十七年忌　（傳兵衛　おしゆんみち行）
袂の白しぼり　（おそめ　久松）地藏めぐり
百合若野守鏡　みやじま八けい
小袖賣　もやうづくし
蟬丸　あふ坂山みち行
陰陽相生鏡　大ざつしよ
萬年草後日土產　みち行ちかひの紙づくし
藪椿戀拔道　（宇山　おはつみち行）
○曾根崎追善　（徳兵衛　おはつみち行）
比翼の初旅　丸壹段
○祝言　新高館

〔藤井〕

宮古路薗八（みやこぢそのはち）「薗八節」を見よ。

宮古路豐後掾（みやこぢぶんごのじよう）　淨瑠璃太夫【本名】未詳【藝名】都國太夫半仲・宮古路國太夫。受領して宮古路豐後掾橘盛村【生歿】萬治三年京都に生れ、元文五年（二四〇〇）九月一日同地に歿す。享年八十一（常磐種に據る）【法名】千壽院榮譽文彌居士（東京淺草寺境內の七回忌追福の石碑には、還國院本譽自性居士）【閱歷】一中節（別項）の流祖都太夫一中の門から出で、享保初期には既に師流から獨立して姓を宮古路と改め、半中節又は國太夫節と呼び囃されて上方に行はれた。殊に享保七年十二月、大阪嵐座の「山崎與次兵衛半中節」に、與次兵衛物狂ひを語つて大喝采を得、同十三年春京夷屋座の「けいせい亥刻鐘」に數馬の夢の段を勤めて愈々名聲をあげ、次いで受領して豐後掾と改名した。同十六年正月大阪佐渡島座の「雙紋刀銘月」にお花半七の心中道行を出語りして大當りを取り、これより名古屋を經て江戸に下り、同十九年九月葺屋町河岸の播磨芝居で、名古屋で當てた「（たゝみや伊八　金村屋おさん）睦月連理椿」（名古屋心中）を語つて大好評を博し、翌二十年七月には、これが中村座に上演されて絕大の人氣を高め、彼の風俗が世に靡き、文金髷・文金風とて流行し、遂にこれを宮古路風と稱へた。又その世話淨瑠璃の色事心中を生地で行かうとするものが多くなつたとさへいはれ、ために翌元文元年にはその筋より豐後節の劇場出演や稽古差止めを命ぜられたとまで傳へられてゐる。尤もこれは諭旨程度のものであつたかと思ふが、とにかく興行は元文二年までで、成功裡に打上げて京都に歸つた。而して同四年春大阪芳澤座で「女夫鶴現の床」を、九月には京龜屋座で「夕霧淺間嶽」を語り、同五年九月に歿してゐるので、世に傳

はる豐後の江戸での情死説とか、豐後節禁止説とかは門弟等に就いてなされたもので、彼自身には關係はない。辭世「おく露やともに消ゆく沓の下」。【門弟】豐後掾の歿後、國太夫の名跡は、その子（養子とも）若太夫によつて相續され、また豐後掾の名義は初代薗八の門弟宮古路世代太夫が襲いだ。養子



の轉用又は改作も尠くはないが、詞藻の見るべきもののみを撰んでゐる。近松の道行の名文の情趣を眞に語り活かしたのは大聲激越な曲風を誇りとした義太夫よりは、優婉典雅な語り口の一中、又それよりも遙かに魅惑的な豐後の語り口であつたかと思はれる。而も彼

中の直寫とはいへ、より徹して吟唱自在に驅使したものであつたらう。彼は演奏に秀でたのみでなく、また作曲にも非凡の才を有つてゐたといふ。【史的地位】彼は豐後節諸流派の總祖たるのみでなく、江戸長唄の中興の名手富士田吉治（前名佐野川千藏、また二代都和中）が一中節から出て豐後節をも能くし、次いで

【參考】聲曲類纂齋藤月岑○江戸時代音樂通解町田博三○宮古路豐後掾の功績黒木勘藏（近世演劇考說）○歌舞伎圖說（解説篇）守隨憲治・秋葉芳美○宮古路豐後掾と名古屋心中　松村靜雄（歌舞伎研究一八）○豐後節雜記　三田村鳶魚（同上二四・三〇）○心中淨瑠璃　同上（演藝月刊五・六）○日本歌謠史高野辰之○江戸時代之音樂

一四、用明天皇　舟路道行
一五、千代若みどり　わん久道行
一六、若かいで口舌の帶
一七、吾妻噂夜老鶴　八百やお七道行
一八、心中天網島　なごり橋づくし

〔下卷〕

一九、あし刈　難波女まひ
二〇、河内がよひ　なり平唄念佛
二一、夏芙蓉紅染小袖　おちよ半兵衞道行
二二、そね崎つい善　おはつ德兵衞道行
二三、半九郎ぶし　戀路の濡わらじ
二四、ひめお笠　おなつ淸十郎さいごの段
二五、傾城出口柳の道行
二六、辛崎心中　半兵衞小いな道行
二七、しのだづま　くずのは道行

甚だしく、兩書共通のものは、○印を附した十九種に過ぎぬ。これは多分書肆が後に勝手にさしかへて賣出したものであらう。目次は原本に二段になつてゐるが、便宜上一段に改める。

宮古路月下の梅　宮古路豐後直傳
道行景事段物　惣目錄數四十三番
○祝言　魚づくし
○妹脊の中酌　お菊幸助みち行猿のきせわた
○比翼の初旅　新兵衞小女郎みち行
○雙紋刀銘月　半七お花みち行
○相生萬歲寶藏　友ずみ物ぐるひ
○同　祝儀龍神揃
○小町大かゞみ　少將みち行
同　しのびの段

○酒呑童子　賴光山いり
傾城反魂香　みくまのかげろふの姿
大經師昔曆　おさん茂兵衞みち行
十七年忌　傳兵衞おしゆんみち行
袂の白しぼり　おそめ久松地藏めぐり
百合若野守鏡　みやじま八けい
小袖賣　もやうづくし
蟬丸　あふ坂山みち行
陰陽相生鏡　大ざつしよ
萬年草後日土產　みち行ちかひの紙づくし
藪椿戀拔道　宇山おはつみち行
○曾根崎追善　德兵衞おはつみち行
比翼の初旅　丸壹段
○祝言　新高館

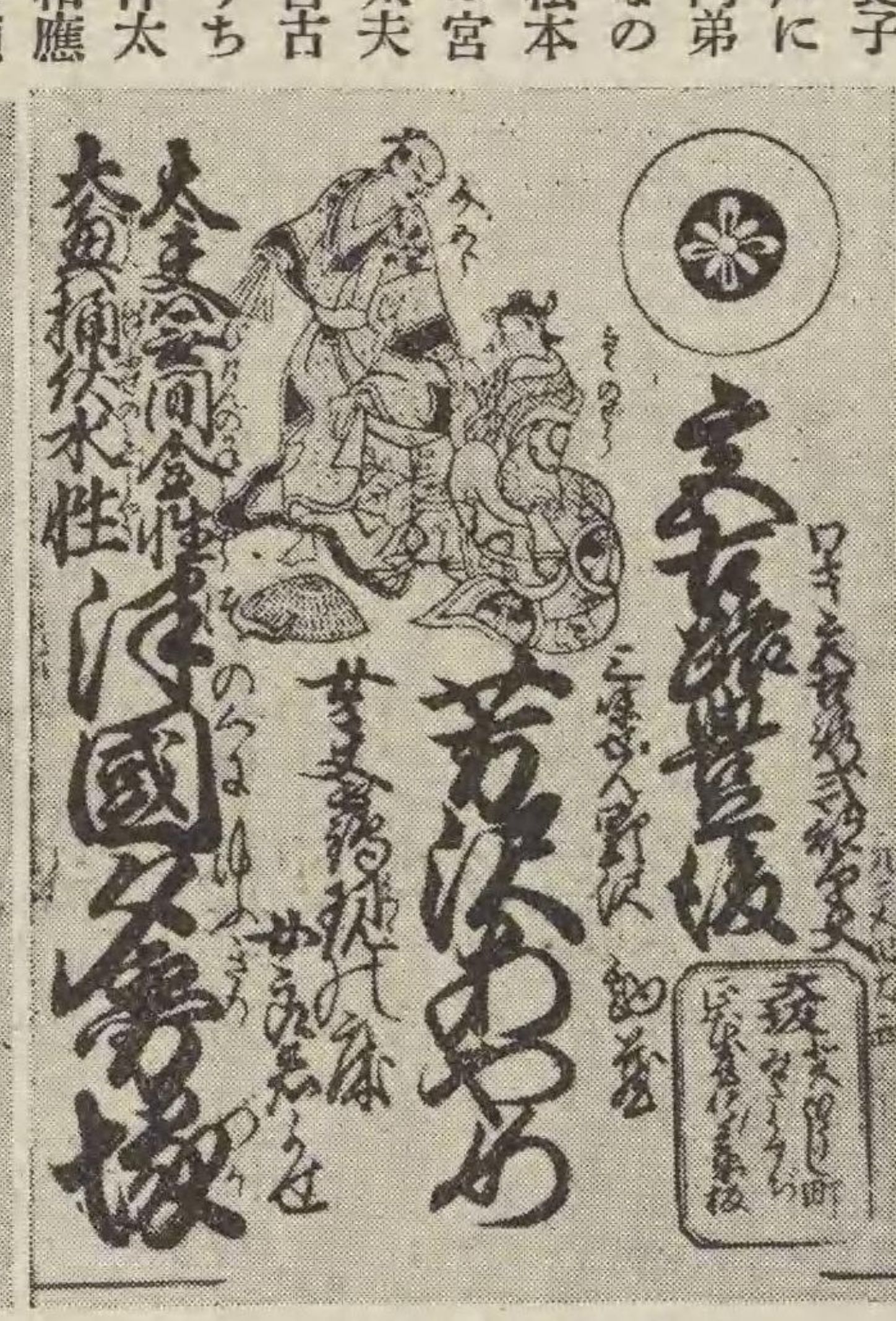
〔藤井〕

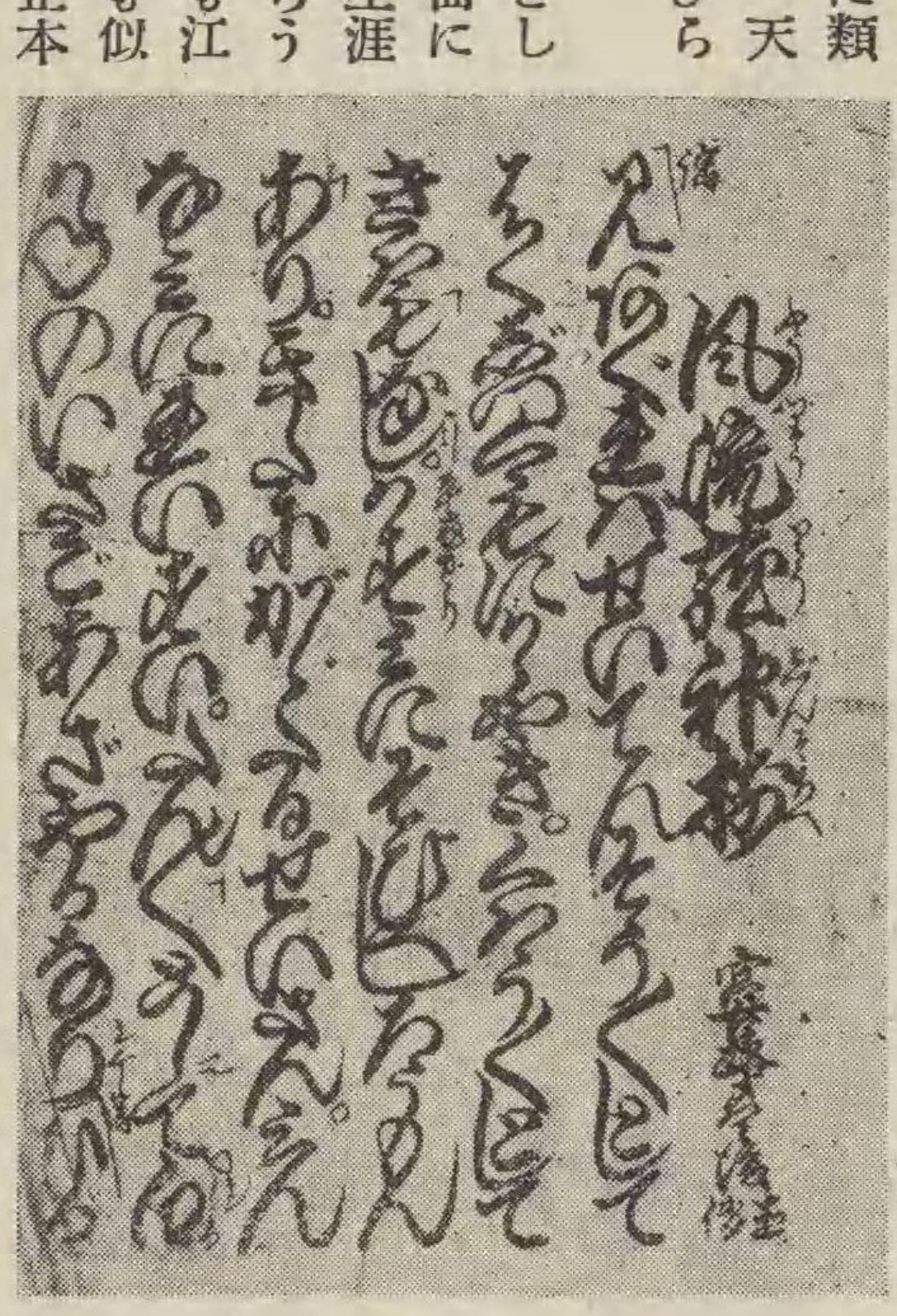
宮古路薗八（みやこぢそのはち）

「薗八節」を見よ。

睦月連理棬」（名古屋心中）を語つて大好評を博し、翌二十年七月には、これが中村座に上演されて絶大の人氣を高め、彼の風俗が世に靡き、文金髷・文金風とて流行し、遂にこれを宮古路風と稱へた。又その世話浄瑠璃の色事心中を生地で行かうとするものが多くなつたとさへいはれ、ために翌元文元年にはその筋より豐後節の劇場出演や稽古差止めを命ぜられたとまで傳へられてゐる。尤もこれは諭旨程度のものであつたかと思ふが、とにかく興行は元文二年までで、成功裡に打上げて京都に歸つた。而して同四年春大阪芳澤座で「女夫鶴現の床」を、九月には京龜屋座で「夕霧淺間獄」を語り、同五年九月に歿してゐるので、世に傳

はる豐後の江戸での情死說とか、豐後節禁止說とかは門弟等に就いてなされたもので、彼自身には關係はない。辭世「おく露やともに消ゆく苔の下」。【門弟】豐後掾の歿後、國太夫の名跡は、その子（養子とも）若太夫によつて相續され、また豐後掾の名義は初代薗八の門弟宮古路世代太夫が襲いだ。養子と傳へる宮古路文字太夫は江戸に留まつて常磐津節を起した。門弟は極めて多いが、その中著名なのは江戸の富士松薩摩掾（別項）・松本數馬太夫・宮古路綱太夫、京阪の宮古路薗八（薗八節參照）・豐美繁太夫（繁太夫節參照）・大和路仲太夫・宮古路大和太夫等である。以上のうち大和路仲太夫は、初め宮古路仲太夫といひ、後に一派を成して相應に行はれ、曲風は薗八・正傳等に類してゐた。而してその門下は、天明前後まで京阪の歌舞伎に用ひられた。（豐後節參照）


宮古路豐後掾正本


同上

【詞章と曲風】今日その正本として傳存するもののみにても百曲に近い多數に上るので、恐らく生涯の曲數は二百をも越ゆるであらうが、一中と豐後との關係は恰も江戸の半太夫と河東との關係にも似てゐた事は、分離後でもその正本や語物の共通したもののあるのによつて推察出來ると思ふ。彼は主として世話を好んで語り、而もその多くは心中物の道行や濡場で、正に上方の軟派浄瑠璃の代表者ともいはるべきである。殊に師流一中に於けるが如く、その詞章は近松が義太夫節のために作つたものの轉用又は改作も勘くはないが、詞藻の見るべきもののみを擇んでゐる。近松の道行の名文の情趣を眞に語り活かしたのは大聲激越な曲風を誇りとした義太夫よりは、優婉典雅な語り口の一中、又それよりも遙かに魅惑的な豐後の語り口であつたかと思はれる。而も彼は師流を表とし、これに文彌節と阿波太夫節とを加味したらしく、更に自家修練工夫の妙技を加へて一流を成したもので、豐後節として特色を成した當時の彼の曲風に殊にこの感が深い。その曲節の特色の一ともいふべきイロ詞が連續してゆく手法やクドキの如き、一中の直寫とはいへ、より徹して吟唱自在に驅使したものであつたらう。彼は演奏に秀でたのみでなく、また作曲にも非凡の才を有つてゐたといふ。【史的地位】彼は豐後節諸流派の總祖たるのみでなく、江戸長唄の中興の名手富士田吉治（前名佐野川千藏、また二代都和中）が一中節から出て豐後節をも能くし、次いで長唄に轉じて唄浄瑠璃に貢獻する所あつたのを思へば、間接にしても長唄に及ぼした影響は決して些少ではなく、且つ今なほその支派たる江戸豐後節が義太夫節と相對して盛行さるゝ點等に於て、江戸近世三絃樂の父祖たるのみならず、日本音樂史上重要な地位を占めてゐる。

【代表曲】彼の作曲に成る傳存曲は「狩野雪姫北條力之助傳授の雲龍」一曲に過ぎない。それも常磐津の手によつて現はれるのみである。今彼が語り物の中から代表曲を擧げておく。○山崎與次兵衞半中節（前出）○與作小まん夢路の駒○傾城三度笠相合籠道行　○加賀お菊妹脊の中酌（道行旅着綿を含む）○玉屋新兵衞三國小女郎道行比翼の初旅○雙紋刀銘月（前出）○名殘の橋盡し（心中天網島道行）○おかん半九郎戀路の濡草鞋（半九郎ぶし）○おそめ久松名殘の廿三夜　○金村屋おさんたゝみや伊八睦月連理棬（前出）○女夫鶴現の床（元文四年春大阪芳澤座）等。〔段物集〕その門下の語物をも收めて數十段合輯した段物集の現存するものでは、「宮古路月下の梅」と「宮古路窓の梅」（各別項）との二種が著名である。その他「宮古路大寄藏」を初め、「宮古路祇園囃子」「宮古路時和の梅」「宮古路桃盃」「宮古路花の園」「宮古路菊水」「宮古路紫竹調」「宮古路初音梅」「宮古路花會」「宮古路花筏」「宮古路粧車」「宮古路幕の中」（但しこの中には橫厚册子本も含む）等がある。

【參考】聲曲類纂　齋藤月岑○江戸時代音樂通解　町田博三○宮古路豐後掾の功績　黑木勘藏（近世演劇考說）○歌舞伎圖說（解說篇）守隨憲治・秋葉芳美○宮古路豐後掾と名古屋心中　松村靜雄（歌舞伎研究一八）○豐後節雜記　三田村鳶魚（同上二四・三〇）○心中浄瑠璃　同上（演藝月刊五・六）○日本歌謠史　高野辰之○江戸時代之音樂　田邊尚雄　〔秋葉〕

宮古路窓の梅（みやこぢまどのうめ）

豐後節寄せ本　上下二册【刊行】未詳【諸本】德川文藝類聚第九所收。【內容】「宮古路月下の梅」（別項）の姉妹篇で、豐後掾及びその門下の正本二十八種を載す。○印をつけたのは「月下の梅」と重複するもので、目錄と奧附は次の如くである。

新板宮古路まどの梅　直傳正本
一、雙紋刀銘月　丸一段
○一、ひよく初たび　同
一、玉屋新兵衞三國小女郎みち行
一、加賀お菊　中の卷　丸一段
一、同幸助おきく道行
一、睦月連理棬　丸一段
下
○一、同伊八おさん道行
一、出世はちの木　道行
一、山崎與次兵衞道行
一、傾城三度がさ道行
一、大きやうじ　茂兵衞おさん道行
一、丹波與作　道行
一、笠物ぐるい　道行
○一、用明天皇　船路道行
一、はちたゝき道行
一、わんきうみち行
一、奈良八景　さくらづくし道行
一、三勝半七　みち行

一、天智天皇美人揃
一、助六心中みち行
一、かたみおくり
○一、八百やお七道行
○一、小まち大かゞみ　道行
一、少將しのび
一、刀の名月　道行
一、鎌倉八景　道行
○一、曾根崎追善　おはつ徳兵衞道行
一、けいせいさよの中やま

世に正本といひて普く淸章すれどもいづれも又寫しの故に節に誤り有章にわずかづゝの違ひ多し縱ば荻と萩の字のごとし其心上風下露の相違たるべし仍てあらたに遂吟味を新板せしむる者也
　宮古路豐後掾直傳
　板元　新大坂町　三川屋源七
〔藤井〕

都傳內（みやこでんない）　脚本作者・劇場主　【本名】未詳【生歿】延寶八年七月二十一日歿との說がある。享年は六十三歲說があるが確かでない。【閱歷】江戶歌舞伎の創生時代ともいふべき寬文三年に、市村座は上方から藝者を多く呼び下したが、やがて寬文四年には、江戶の續狂言の嚆矢と見られる「今川忍び車」二番續を上演して非常な喝采を博した。この作者は都傳內であつたといふ。當時相座本であつたとの說もあるが、如何か。「大江山」「梅が妻」「竹生島」等も彼の作と傳へる。これ等は、皆舞踊を主要素とした作柄である。彼は脚色上に新工夫を出すと共に、舞臺裝置にも創案を用ひたといふ。但しこの傳內の閱歷に關しては、甚だ明瞭を缺くものがある。即ち當時、都傳內が兩名ゐる。早く寬永六年（十年說もある）大阪から下つた久三郎と稱する放下師があつて芝居を興行してゐたが、明曆三年、神田明神社內で類燒し、後、葺屋町に移つて興行してゐたが、その頃、京都から新たに下つた放下師が、やはり都傳內と名乘つて堺町に興行したので、その間に一時、出入があり、內濟となつてから前者は「古へ都傳內」、略して「古へ傳內」又は「いにしへ」、後者は「新傳內」と稱へた。後者は後になつてから「都右近」と改めたともいふが、同じ座名で興行を續け、延寶年中に及んで廢座となつたらしい。古へ傳內の方は代を繼いで、享保五年、二代（か）傳內は大芝居取立を願ひ出たが許されず、同十九年、森田座の休座中、その櫓に代り、その子（三代？）が寬政五年から五ヶ年間、中村座に代る控櫓を許されて興行した。市村竹之丞を助けて續狂言を脚色した傳內は、右の何れであるか判然しない。〔守隨〕

【參考】剣野老○享保五年いにしへ傳內覺書○寬政五年池田筑後守伺書○江戶圖說

都鳥妻戀笛（みやこどりつまごひぶえ）　「梅若丸一代記」を見よ。

都の手ぶり（みやこのてぶり）　隨筆　一册　【名稱】都（江戶）の風俗を擬古文に書いたもので、古風に名づく。【著者】六樹園飯盛（石川雅望）【刊行】文化六年五月、東都麴町平川町貳丁目角丸屋甚助梓【諸本】百家說林・錦葵文庫・有朋堂文庫所收。【解說】大本一册、紙數二十一枚、一頁ほぼ十一行である。橋千蔭の序があり、著者の門人山本長祥の跋がある。內容は擬古文を以てした一種の紀行文風の隨筆であつて、大江戶の手ぶりの幾分を紹介した五つの短文より成り、「とみ澤の市」「兩國の橋」「ばくろの町」「やくし堂」「よたか」の項目に分れる。「とみ澤の市」では富澤町に質流れの古着のみを賣る朝市が立つといふので、そこの古着とりどりに一流の品定めをして見せ、「兩國の橋」では橋の叙景にはじまつて樣々な見世物の情景を寫し、「ばくろの町」では旅籠町としての沿革から、其處に集ふ各國旅人の狀態を述べ、「やくし堂」では當時はやつた鎧橋の藥師に詣でて、秋草の花の名づくしをやり、「よたか」では夜鷹の出る場面の描寫をつくしてゐる。これは地誌や風俗史の參考にもならうが、主たる興味は、その隨筆としての妙味である。千蔭もその序に、かやうに今の事を古ぶりに書くのは、著者の如く古典に通じ、才氣ある者にして能くなし得ることだといつてゐる。「兩國の橋」や「ばくろの町」の文章などは小說的でさへある。跋に都手振前編一卷とあり、卷末に後編の廣告もあるが、後編は遂に出なかつたらしい。「狂文吾嬬那萬俚」といふのは、書名からすると本書の姉妹編の如く見えるが、別個のもので故事を主とせる戲文である。〔笹野〕

都の錦（みやこのにしき）　浮世草子作者　【本名】宍戶銕舟（「播磨椙原」には銕秀居士とある）。初名は八田光風（光景といふ說もある）。【別號】黃金峒山人・澤風軒（東北帝國大學所藏「播磨椙原」所戴松岡十太夫が書添の中に、薩摩山ヶ野金山役人市來辰右衞門が傳へた彼の詩歌の奧に、これ等の號が見えてゐる）。【生歿】延寶三年生れ（右同書所揭の鹿籠金山の關市之衞所傳の彼が獄中よりの訴狀の中に、申三拾歲とある。同訴狀は寶永元年霜月十八日の日附であるから逆算して定める）、歿年不詳。但し右市來所傳の詩歌の奧に、寶永七年孟冬上旬とあるから寶永七年冬までは生きてゐたと見える。【閱歷】右關市之衞所傳の訴狀は、その內容を彼の著作に參照して眞のものと思はれるから、今これに據ることとする。本國は常陸宍戶鄕、大阪に生れた。父は松平萬右衞門康富、母は廣幡豐忠の女で、彼は源賴朝の兄知家より二十一代の孫に當る。攝津佐用郡佐用姬神社の神主を勤めて八田光風と稱してゐたが、二十一歲の時儒學修行のために京都に出て、伊藤仁齋の門に入り、傍ら國學を北村季吟に就き、和漢の學をなすこと六年であつた。偶々二十六歲の春、惡友に誘はれて遊蕩に耽り、學資を費ひ果てて遂に祖父の所有に係る三條繩手の屋敷を密賣し、藏書衣類迄も殘らず賣却して遊蕩費に供した。親類緣者から緣を切られたので、翌年の春新黑谷門前に小庵を結んで佛法を修行し、山科大宅寺の月波和尙に參禪して名を銕舟と改めた。生活のために假名文の書を述作すること二年六月であつた。それから身を立てるために、同學の添書を携へて元祿十六年の春江戶に出で、或る人を賴らうとしたが、その人は火災に罹つて行方を失してゐたので、徘徊してゐるうちに浮浪人と認められて、十月遠流に處せられ、薩摩の山ヶ野金山に追はれた。少時から日置流の弓術を好んで、笠掛・犬追物等に習熟してゐたので、時々これを役人達に敎へて厚遇されてゐた。それがために仲間の憎みを受けて虐待堪へ難いので、一旦逃亡したが、捕へられて獄に投ぜられ、日々の食物もろく〳〵與へられない苦しさに、寶永元年十一月十八日、獄中から其の筋に對して、「願はくは御仁心を以て被召出、忽ち首を刎られ被下候はば、生前の大幸難有奉存候」と死刑を願つたことがある。死所を詳かにしないが、恐らく薩摩であらう。【著書】元祿曾我物語○風流日本莊子○御前御伽婢子○元祿太平記○風流神代卷○沖津白浪○風流源氏物語（各別項）○播磨椙原○四書

授蒙句解（「元祿太平記」にこの著あることがいつてある）。〔藤村〕

みやこの花（みやこのはな）　雜誌　【編輯者】中根淑（香亭）と山田武太郎（美妙齋）の二人が主となつて編輯に當つた。【名稱】或は「都の花」【刊行】明治二十一年十月、金港堂から創刊され（月二回）、第百〇九號を以て廢刊。【解說】純文藝雜誌として明治文壇に現はれた最初の

る。種彥の「淨瑠璃目錄」には「愛子若都富士、宇治加賀掾古淨瑠璃なり。都富士とばかり標題にかきたる本あり」とあるが、現存のものは竹本義太夫の正本で、加賀掾の正本は未見である。近松全集第四卷・淨瑠璃名作集上卷所收。【題材】古淨瑠璃「愛護若」（別項）を藍本としたもの。

【梗概】（初段）（序）淸水の段。二條左大臣淸

が萌す。（奧）早苗之介は主君淸平に六條姬との結婚の不可なる所以を極諫し、怒を買つて勘當される。（切）早苗之介一家退去。〔三段〕楓狂庵の段。愛護若は昨年世を去つた實母供養のために、邸內の楓狂庵に籠り、紅葉の葉毎に法華經の文句を一字づつ書いて、遣水に流してゐる。鳰照姬は男裝して通つて來る。庭では六條姬が戀に悶えて、愛護若が流した

（別項）を改作して、右大將有雄の叛逆に戀愛の三角關係を取合せて複雜な仕組とし、且つ原作は筋を運ぶを主とした敍事體であるのを、場面相互の變化を保たせる描寫式にしようとしたのは、戲曲として一段進んでゐる。尤も結末に、山王權現の靈驗・奇瑞が相當に強く出てゐる點は、まだ古淨瑠璃の臭味を脫し切らないものといふべきである。なほ

を多く呼び下したが、やがて寛文四年には、江戸の續狂言の嚆矢と見られる「今川忍び車」二番續を上演して非常な喝采を博した。この作者は都傳内であつたといふ。當時相座本であつたとの説もあるが、如何か。「大江山」「梅が妻」「竹生島」等も彼の作と傳へる。これ等は、皆舞踊を主要素とした作柄である。彼は脚色上に新工夫を出すと共に、舞臺裝置にも創案を用ひたといふ。但しこの傳内の閱歷に關しては、甚だ明瞭を缺くものがある。即ち當時、都傳内が兩名ゐる。早く寛永六年（十年説もある）大阪から下つた久三郎と稱する放下師があつて芝居を興行してゐたが、明曆三年、神田明神社内で類燒し、後、葺屋町に移つて興

稱】都（江戸）の風俗を擬古文に書いたもので、古風に名づく。【著者】六樹園飯盛（石川雅望）【刊行】文化六年五月、東都麴町平川町貳丁目角丸屋甚助梓【諸本】百家説林・錦葵文庫・有朋堂文庫所收。【解説】大本一册、紙數二十一枚、一頁ほぼ十一行である。橘千蔭の序があり、著者の門人山本長祥の跋がある。内容は擬古文を以てした一種の紀行文風の隨筆であつて、大江戸の手ぶりの幾分を紹介した五つの短文より成り、「とみ澤の市」「兩國の橋」「ばくろの町」「やくし堂」「よたか」の項目に分れる。「とみ澤の市」では富澤町に質流れの古着のみを賣る朝市が立つといふので、そこの古着とりどりに一流の品定めをして見せ、

は八田光風（光景といふ説もある）。【別號】黃金峒山人・澤風軒（東北帝國大學所藏「播磨楫原」所載松岡十太夫が書添の中に、薩摩山ケ野金山役人市來辰右衞門が傳へた彼の詩歌の奧に、これ等の號が見えてゐる）。【生歿】延寶三年生れ（右同書所揭の鹿籠金山の關市之衞所傳の彼が獄中よりの訴狀の中に、申三拾歲とある。同訴狀は寶永元年霜月十八日の日附であるから逆算して定める）、歿年不詳。但し右市來所傳の詩歌の奧に、寶永七年孟冬上旬とあるから寶永七年冬までは生きてゐたと見える。【閱歷】右關市之衞所傳の訴狀は、その内容を彼の著作に參照して眞のものと思はれるから、今これに據ることとする。本國は常陸宍戶鄕、大阪に生れた。父は松平萬右衞

山ケ野金山に追はれた。少時から日置流の弓術を好んで、笠掛・犬追物等に習熟してゐたので、時々これを役人達に敎へて厚遇されてゐた。それがために仲間の憎みを受けて虐待堪へ難いので、一旦逃亡したが、捕へられて獄に投ぜられ、日々の食物もろく〳〵與へられない苦しさに、寶永元年十一月十八日、獄中からその筋に對して、「願はくは御仁心を以て被召出、忽ち首を刎られ被下候はば、生前の大幸難有奉存候」と死刑を願つたことがある。死所を詳かにしないが、恐らく薩摩であらう。
【著書】元祿曾我物語○風流日本莊子○御前御伽婢子○元祿太平記○風流神代卷○沖津白浪○風流源氏物語（各別項）○播磨楫原○四書

授蒙句解（「元祿太平記」にこの著あることがいつてある）。〔藤村〕

みやこの花 みやこのはな　雜誌【編輯者】中根淑（香亭）と山田武太郎（美妙齋）の二人が主となつて編輯に當つた。【名稱】或は「都の花」【刊行】明治二十一年十月、金港堂から創刊され（月二回）、第百〇九號を以て廢刊。【解説】純文藝雜誌として明治文壇に現はれた最初のものである。坪内逍遙の「小説神髓」（別項）によつて唱道された後の新作や新作家の紹介に努め、明治文學混沌期以後、飜譯小説・政治小説出現後の明治文學の草創時代に參與した。故に「文學界」（別項）等の起るまでの作品と作家の多くは、この誌上で紹介されたとも云へる。第一號には劈頭に美妙齋の「花車」、二葉亭の「めぐりあひ」以下四篇を紹介してゐる。二葉亭の「浮雲」（別項）第三篇、嵯峨の屋の「初戀」（別項）の名作を初め、學海・忍月・藤蔭・三昧・如電・露伴・湘煙・仰天子等の當時の花形の作を以て埋めたが、ただ硯友社一派の作家は同社を去つた美妙に快しとせずして多く寄稿しなかつた。又挿繪は毎號四五面宛挿んでゐたが、渡邊省亭・小林清親・月岡芳年・尾形月耕・武内桂舟・松本楓湖・富岡永洗・三島蕉窓・鈴木華村等の流行作家を以てした。同誌は創作品以外の雜錄や編輯言の如きを一切用ひなかつたのも、後の雜誌と比較して異色があつた。登載の作の多くは完結毎に合本にして賣出す形式をも採つた。〔齋藤（昌）〕

都の富士 みやこのふじ　淨瑠璃　五段　時代物【作者】一説に近松門左衞門【名稱】一名「愛子若都富士」【興行】元祿六年正月二日初日、竹本座初演（明和板外題年鑑）【諸本】八行五十二丁の大形本、半紙本の外に繪入細字本もある。種彥の「淨瑠璃目錄」には「愛子若都富士、宇治加賀掾古淨瑠璃なり。都富士とばかり標題にかきたる本あり」とあるが、現存のものは竹本義太夫の正本で、加賀掾の正本は未見である。近松全集第四卷・淨瑠璃名作集上卷所收。【題材】古淨瑠璃「愛護若」（別項）を藍本としたもの。

【梗概】〔初段〕（序）清水の段。二條左大臣清平の子愛護若（十六歳）が清水參詣の時、家臣田端早苗之介の妻木幡の取りなしで、茅原權大納言爲道の女鴆照姫と契る。（中）南殿の段。嵯峨天皇崩御後大富門院が女帝として政治を執られ、不德不人望なる一の宮村雲の王子を措いて、御實子玉柏の王子に御代を讓らうとの御心遣ひが原因で御惱となり、醫藥・加持も效がない。比叡山師の阿闍梨の奏上で、二條家に傳はる降天（がうてん）の鞍を三歳の駒に置き、刄（やいば）の太刀を佩いて愛護若が南殿の庭に於てこの駒を乘り据ゑ、三日三夜の御祈をすると、叡山の神猿が現はれて、その奇瑞によつて御惱は忽ち平癒遊ばされる。（奥）右大將有雄のために、師の阿闍梨が「比叡山緣起」を語る。（切）二條家の臣早苗之介が唐鞍と刄の太刀とを守護しての歸途、右大將有雄と乘打の爭ひとなり、一同を蹴散して二條の館へ歸る。〔二段〕（口）有雄館の段。有雄は甥に當る村雲王子を位に卽けようと企て、先づ權臣左大臣清平を除くために、女六條姫を清平の後妻に輿入させて同家に預かる二種の寶を盜ませ、それを落度に罪に落さうとの評議をこらす。（中）二條家館の段。有雄の臣駿河の前司が二條家の臣惡五郎友定と氣脈を通じ、六條姫を輿入させる。祝言の席で姫は愛護若と親子の盃をする時、その美貌に心を奪はれて、道ならぬ戀が萌す。（奥）早苗之介は主君清平に六條姫との結婚の不可なる所以を極諫し、怒を買つて勘當される。（切）早苗之介一家退去。〔三段〕楓狂庵の段。愛護若は昨年世を去つた實母供養のために、邸内の楓狂庵に籠り、紅葉の葉毎に法華經の文句を一字づつ書いて、遣水に流してゐる。鴆照姫は男裝して通つて來る。庭では六條姫が戀に悶えて、愛護若が流した紅葉を網ですくひ狂亂の態（謠曲櫻川の飜案）。愛護若は初めて繼母の道ならぬ戀を知つたが應じようとしない。六條姫の意を受けた乳母月小夜が、亡き母の亡靈に扮して愛護を説伏しようとすると、老臣荒木左衞門が鬼の面をつけ刺叉を携へて出で、月小夜を捉へて白狀させ、庭の松の木に縛する。清平が來て尋ねると、月小夜は愛護に命ぜられて家の重寶を盜まうとしたのを、荒木に見咎められた故であると誣告する。清平はこの言を信じて愛護を勘當する。荒木の言ふがまゝに叔父なる叡山の師の阿闍梨の許へ行く（あいごの若道行）。〔四段〕阿闍梨庵室の段。穴生の里早苗之介侘住居の段。野宿の場。三尊出現の場に分れて愛護若が失望と憤怒の極、辛崎の濱に身を投げる迄の經過、六條と鴆照とが愛護の後を慕つて迷ひ出で、行き暮れてそれとは知らず二人一緒に野宿中に、愛護の亡靈の告によつて事情を知り、互に名乘り合ひ、手を携へて共に身を投げて戀人の後を追ふこと。投身した三人が釋尊・彌陀・藥師の尊體を現じて、都の富士（比叡山）の利益を示して、人々を渴仰させる顚末を敍してある。〔五段〕神移しの神事、惡人滅亡、大團圓。

【構想】説經の系統を引いた靈驗記・本地物の色彩を濃厚に持つてゐる古淨瑠璃の「愛護若」（別項）を改作して、右大將有雄の叛逆に戀愛の三角關係を取合せて複雜な仕組とし、且つ原作は筋を運ぶを主とした敍事體であるのを、場面相互の變化を保たせる描寫式にしようとしたのは、戲曲として一段進んでゐる。尤も結末に、山王權現の靈驗・奇瑞が相當に强く出てゐる點は、まだ古淨瑠璃の臭味を脫し切らないものといふべきである。なほ又發端清水の場は、「清玄櫻姫」の清水の場に似てゐる。

【影響】紀海音の作「愛護若塒箱（ねぐらのはこ）」がある。正德四年十月朔日から豐竹座上場（明和板外題年鑑）で、文章も趣向も原作よりは碎け、靈驗的色彩は稀薄になつてゐる。特色としては、愛護若に對する六條・鴆照の戀爭ひを、六條姫輿入以前よりのことに仕組み、繼母となつてもその思ひが愈々募つた爲めに、清平の刄にかゝつたに拘はらず、愛着の一念が死後も執拗に附き纏ふといふ趣向にして、鴆照と愛護とは結局添ひ遂げること、清平を果斷正義の士として鮮明に描いたこと、忠臣早苗之介夫婦の活動の描寫に力を入れたこと等が特に目につく。更にこの「塒箱」の改作に、辰松幸助作の「愛護若都の富士」がある。前述の義太夫の正本と混同され易いが別物である。右大將家の臣廣嗣が、清平の臣佐久間善澄に傾城買を强ひられて困ることや、奴江戸兵衞が清平に召抱へられて伊賀前司國光と名乘ることなどが第一・二段の中に作り込まれてゐるが、後半は「塒箱」と大同小異で、首尾一貫しない支離滅裂の惡作である。正本の所屬流派を明かにしないが、フシ附・版式等から見て義太夫の正本とは思はれない。

【參考】淨瑠璃解題（歌舞伎研究第一輯）〔黑木〕

都羽二重拍子扇 みやこはぶたへひやうしあふぎ　淨瑠

璃詞曲集　六冊　【刊行】文政三年正月、江戸瀬戸物町文花堂鹽屋庄三郎板。【解説】一中節（別項）の詞曲を五代目都太夫一中が編輯して大字六行本としたもので、各巻の奧附に「近來予が一流世にひろまるに古板の正本は皆細字故此度改て幸所緣ある文花堂の主に再板をたのむ事とはなりぬ」とある。その目次は、

【初編】辰巳の四季○よし原八景（吉原八景花紅葉錦廓故左交述）○小春髮結○夕がすみ（夕霞淺間嵩）○くらべ牡丹○家ざくら（家櫻傾城姿）○雛あわせ（源平妹脊の雛合）○小町少將（小町少將道行）○根曳の門松○墨繪の島臺（榮思述）【二編】松づくし○笠もの狂（お夏笠物狂）○用明天皇（用明天皇道行）○賤はた帶（尾上の雲賤機帶）○信田妻○與さく（丹波與作夢路駒）○三度笠（梅川忠兵衞道行三度笠）○松がさね（榮思述）○松羽衣（疎柳補文）○きのへ子（疎柳述）【三編】都見物左衞門○少將道行○唐崎心中（こいな半兵衞唐崎心中）○柳の前（柳の前道行）○河内通（業平河内通）○花照姫（花照姫道行）○傾城淺間（傾城淺間嶽、初代櫻田左交述）○石和川（鵜飼石和川）○皐月の前（皐月の前道行）○若衆萬歲（都若衆萬歲）【四編】高砂松之段○神樂高砂○曾我かたみ贈○同駒の泪○自然居士過去物語【五編】泰平船盡○稽首國道行○賴光山入（作者近松門左衞門）○同衣あらひ（作者近松門左衞門）○同童子對面（作者近松門左衞門）【六編】安宅道行○同勸進帳○腕久道行○同下の卷○龍の口。

表紙に、上部に都の定紋藤に澤瀉鶴をつけ、下部に協力者河東節の三味線ひき菅野序遊（山彥新次郎の改名）の花桐の紋をつけたのは初代序遊の功績を傳へるための記念である。

【參考】聲曲類纂卷之一下○一中節の歷史（日本音曲全集第十一卷）○日本歌謠史　（藤井）

都風俗化粧傳（みやこふうぞくけしやうでん）　風俗書　三卷【著者】佐山半七丸【畫工】速水春曉齋【名稱】女子愛敬都風俗化粧傳【刊行】文化十年初秋【解説】女子の化粧法に就いて記したもので、上卷は顏面之部、中卷は手足之部・髮之部・化粧之部、下卷は恰好之部とし、各部若干の細目に分けて諸種の方法を記し、別に上欄を設け、頭書として下文に應じたいろいろの祕傳・藥方などを記し、下卷の頭書には、帶の結び樣・被帽子の着樣・襟附の圖が載せてある。又文中まゝ風俗圖を挾んであつて、頗る興趣を添へてゐる。文化十年文月の大原權少將源朝臣重成卿の序文がある。　（石村）

都又平（みやこまたへい）　落語家　【閱歷】本名・生歿共に未詳。その著に「輕口幾世茂千」（元祿十四年刊）、「輕口臍おどり」（元祿年間刊）等があるから、元祿年間に、京都に於て活躍した落語家であつたと思はれる。　（小柴）

都名所圖會（みやこめいしよづゑ）　地誌・風俗　六卷【編者】秋里舜福【畫工】春朝齋竹原信繁【刊行】安永九年八月【解説】京都の神社・佛閣・山川等所謂名所に關して地理・風俗等を記し、その主要なものは全景・花見の圖・諸人參詣の圖などを揭げたもので、文章平易、圖樣輕快、人をして坐して名所に遊ぶの思ひあらしめたので、頗る時好に投じたものと見え、爾後この種の著作流行の源をなしたものである。著者の言によれば、「花洛細見圖」を增益し、文談は「宮古歲事記」「山城名所紀行」を種としたものである。平安城を一・二卷に、四方を左靑龍（東）・右白虎（西）・前朱雀（南）・後玄武（北）と分けて各一卷に記してある。附近の名勝、石清水八幡・宇治・叡山等は折に觸れて記してある。五條式部大輔菅原爲俊卿の序がある。後天明七年、拾遺五卷が同著者同畫工の手に依つて刊行された。　（石村）

宮崎湖處子（みやざきこしよし）　詩人・評論家【本名】八百吉【別號】八面樓主人【生歿】元治元年九月二十日、筑前國朝倉郡三奈木村に生れ、大正十一年歿す。【閱歷】東京專門學校の出身、初めは「國民之友」に據り、次いで國民新聞、「少年園」「家庭雜誌」「少年子」「青年文學」等に作詩・譯詩・美文を發表し、青年詩人の雄として明治二十年代の詩界に活動した。後、基督敎の牧師となり、聖學院の講師となつたこともある。【作品】詩の方面では、「湖處子詩集」一冊（二十六年刊）と「抒情詩」（別項）に二十二篇と「歸省」に三篇ある外は、散佚したまゝ未だ全詩集として纏められたものはない。またヒーマン、ロングフェロー、ウォルズウォース等の譯詩が四篇ある。その詩は殆ど七五調本位で四句一節とした形式が大部分を占めてゐる。用語は洗練されてゐる。擬古に奔らず、さればとて生硬な現代の漢語・俗語も交つてゐない。【業績】湖處子は明治の新體詩、就中抒情詩の開拓には、先驅的業績がある。陶淵明の「歸去來辭」や湖畔詩人ウォルズウォースの感化があると云はれてゐるが、それ等の感化を經て更に湖處子一家の新しい詩風を成してゐる。しかし湖處子が、その頃にあつては全く新異なものであつた散文「歸省」によつて、殊に青年讀書層に與へた影響も、決して鮮少だとはいはれない。それと共に、彼が初期の詩人時代よりも、明治二十八九年頃を中心とし、批評家として「國民之友」に活躍した八面樓主人時代の方が、よく文壇に記憶されてゐる。多くは作品批評であり、廣い理解に乏しいところはあつたが、一種の警拔な觀察を特色とし、時々辛辣な批評を以て作家を憤らせたこともあつた。柳浪が彼の私行を暴いた「非國民」を公にしたのも、その批評に含むところあつた結果であつた。なほ詩人としての方面は、淡々として流水のやうな格調のうちに抒情詩として掬すべき眞情が含まれてゐた。「歸省」に收められた「歸思」「離別」等の諸篇は、湖處子詩中の優れたものである。即ち西詩の有つ情調を日本の國語の上に移す點に於て、作者獨特の溫藉な手法は、三十年以後に興つた七五を基調とする抒情詩の上にも波及し、稀薄ながらもその頃の詩人で影響を蒙らないものはなかつたと云つても宜い。　（河井）

宮崎三昧（みやざきさんまい）　小說家　【本名】宮崎璋藏【別號】三昧道人【生歿】安政六年八月一日江戸下谷御徒町に生れ、大正八年三月二十二日腎臟病で歿す。享年六十一【閱歷】芳野金陵塾に漢學を修め、後、東京高等師範學校に學ぶ。明治十二年東京日日新聞に入り、爾來やまと新聞・大阪每日新聞・大阪朝日新聞・東京朝日新聞等に關係をもち、主として文學記事を執筆して三十五年に及んだ。この間、十五年には筆禍に遭つて入獄したことがある。二十一年頃から小說に指を染めたが、支那小說を飜案した「嵯峨の尼物語」（二十一年十二月、「都の花」所載）が處女作であらう。初めて單行本となつたのは、「新著百種」の「松花錄」である。初期「新小說」に寄稿してゐた頃から根岸派（別項）の一人となつてゐたが後に離れた。二十三年演劇改良論が再燃し、文學者や俳優が相集つて演藝矯風會を起した時、「泉三郎」（いづみのさぶらう）を草し、二十四年十月九代目團十郎は淺草鳥越の中村座でこれを上演した。文學者の脚本を上演したのはこれが最初であるといふ。その作「鴫の浮巢」（別項）も關西で上場された。書籍の蒐集を好み、珍書を世間に紹介したも

のが多い。上田秋成の「雨月物語」（別項）の如きもその一である。三十九年腸窒扶斯を患つてから健康大に衰へ、やゝ文筆に遠ざかつた。【著作】〔小說〕嵯峨の尼物語○追羽子○二夫婦○松花錄○遊女塚○桂姫○戀の重荷○塙團右衞門（別項）○指環○目黑物語○鬼一口○懺悔文等。〔脚本〕泉三郎○敵艦碎筑紫神風○

以前の型）、「不破名古屋」の梅津掃部、「角田川」の山田三郎等を得意とし、實事を主として和事を兼ねたと見られる。團十郎が一面に作者として活躍したやうに、彼も傍ら同樣な態度を執つたので、當年の江戸作者の中では先輩格に屬する。寶永元年、九藏が二代團十郎襲名の時は、彼がこれを紹介し、寶永後は役者としての活動も漸次衰へて來た。

【參考】舞曲扇林河原崎權之助○歌舞伎圖說　守隨・秋葉○江戸歌舞伎守隨（日本文學講座、近世下）　〔守隨〕

宮崎文庫（みやざきぶんこ）　文庫【別名】豐宮崎文庫【解説】慶安元年、外宮禰宜出口延佳・與村弘正等が主唱し、衆庶の資財を募つて伊勢外宮に近き地（今、宇治山田市岡本町に屬す）に

諸生を試みた。彼は退いて種々工夫し、夜中に至つたが、夢中に不圖得るところがあつたので、それを記して藩主に獻じ、その才藻を賞された。それから夢柳の號を用ひたといふ。明治三年（十六歲）東京に遊び、丸山氏の塾に入り、傍ら重野成齋・成島柳北等に益を請ひ、別に英語を英國人某の夫人に學んだ。明治八

若衆萬歳〕【四編】高砂松之段○神樂高砂○曾我かたみ贈○同駒の泪○自然居士過去物語【五編】泰平船盡○稽首國道行○顯光山入（作者近松門左衞門）○同衣あらひ（作者近松門左衞門）○同童子對面（作者近松門左衞門）【六編】安宅道行○同勸進帳○腕久道行○同下の卷○龍の口。

表紙に、上部に都の定紋藤に澤瀉鶴をつけ、下部に協力者河東節の三味線ひき菅野序遊（山彥新次郎の改名）の花桐の紋をつけたのは初代序遊の功績を傳へるための記念である。

【參考】聲曲類纂卷之一下○一中節の歷史（日本音曲全集第十一卷）○日本歌謠史　〔藤井〕

都風俗化粧傳 みやこふうぞくけしやうでん　風俗書三卷【著者】佐山半七丸【畫工】速水春曉齋【名稱】女子愛敬都風俗化粧傳【刊行】文化十年初

し、その主要なものは全景・花見の圖・諸人參詣の圖などを掲げたもので、文章平易、圖様輕快、人をして坐して名所に遊ぶの思ひあらしめたので、頗る時好に投じたものと見え、爾後この種の著作流行の源をなしたものである。著者の言によれば、「花洛細見圖」を增益し、文談は「宮古歲事記」「山城名所紀行」を種としたものである。平安城を一・二卷に、四方を左靑龍（東）・右白虎（西）・前朱雀（南）・後玄武（北）と分けて各一卷に記してある。附近の名勝、石淸水八幡・宇治・叡山等は折に觸れて記してある。五條式部大輔菅原爲俊卿の序がある。後天明七年、拾遺五卷が同著者同畫工の手に依つて刊行された。　〔石村〕

宮崎湖處子 みやざきこしよし　詩人・評論家【本

開拓には、先驅的業績がある。陶淵明の「歸去來辭」や湖畔詩人ウォルズウォースの感化があると云はれてゐるが、それ等の感化を經て更に湖處子一家の新しい詩風を成してゐる。しかし湖處子が、その頃にあつては全く新異なものであつた散文「歸省」によつて、殊に靑年讀書層に與へた影響も、決して鮮少だとはいはれない。それと共に、彼が初期の詩人時代よりも、明治二十八九年頃を中心とし、批評家として「國民之友」に活躍した八面樓主人時代の方が、よく文壇に記憶されてゐる。多くは作品批評であり、廣い理解に乏しいところはあつたが、一種の警拔な觀察を特色とし、時々辛辣な批評を以て作家を憤らせたこともあつた。柳浪が彼の私行を暴いた「非國民」を公に

記事を執筆して三十五年に及んだ。この間、十五年には筆禍に遭つて入獄したことがある。二十一年頃から小說に指を染めたが、支那小說を飜案した「嵯峨の尼物語」（二十一年十二月、「都の花」所載）が處女作であらう。初めて單行本となつたのは、「新著百種」の「松花錄」である。初期「新小說」に寄稿してゐた頃から根岸派（別項）の一人となつてゐたが後に離れた。二十三年演劇改良論が再燃し、文學者や俳優が相集つて演藝矯風會を起した時、「泉三郎」を草し、二十四年十月九代目團十郎は淺草鳥越の中村座でこれを上演した。文學者の脚本を上演したのはこれが最初であるといふ。その作「鳰の浮巢」（別項）も關西で上場された。書籍の蒐集を好み、珍書を世間に紹介したも

のが多い。上田秋成の「雨月物語」（別項）の如きもその一である。三十九年腸窒扶斯を患つてから健康大に衰へ、やゝ文筆に遠ざかつた。【著作】〔小說〕嵯峨の尼物語○追羽子○二夫婦○松花錄○遊女塚○桂姬○戀の重荷○塙團右衞門（別項）○指環○目黑物語○鬼一口○懺悔文等。〔脚本〕泉三郎○敵艦碎筑紫神風○星月夜○殺生關白○惡源太等。又「吾亡妻」（二十四年「國民之友」）の一篇は小說ではなく、彼の亡妻の追悼錄であるが、至情惻々として人を動かし、當時の讀書界に大に稱讚された。【批評】三昧の作品では、「桂姬」「塙團右衞門」「鳰の浮巢」「目黑物語」等が數へられる。露伴・浪六と併稱され、一時は時代物の大家として重きをなした。文章も一味の重厚さがあり、新聞連載物として好評のあつた史的世話物「鳰の浮巢」が代表するやうに、草雙紙的な古さが邪魔になり、獨創性の缺けたことが、彼を文壇から去らせる一因でもあつた。　〔柳田（泉）〕

宮崎傳吉 みやざきでんきち　脚本作者・俳優【本名】未詳【生歿】享保度の中頃に歿したらしい。享年未詳。【閱歷】「金之揮」によると、延寶三年五月、江戶山村座「勝鬨譽曾我」（曾我續狂言の初めといはれる）で、五郎（市川團十郎）祐經（永島磯右衞門）に對して十郎役を勤めてゐるのが、記錄に出た最初であつて、爾來享保年中に及ぶまで、江戶四座に關係してゐた。就中森田座との關係が最も深かつたやうに思はれる。上方に宮崎を名乘る役者がゐたから、或はもと上方下りであらうかとも思ふ。市川團十郎・中村傳九郎・中村七三郎等と共に、元祿時代の江戶歌舞伎を樹立した立者である。演技についても、彼等と共に、天然の風儀を具へた者といはれた。役柄は「曾我」の十郎（七三郎以前の型）、「不破名古屋」の梅津掃部、「角田川」の山田三郎等を得意とし、實事を主として和事を兼ねたと見られる。團十郎が一面に作者として活躍したやうに、彼も傍ら同樣な態度を執つたので、當年の江戶作者の中では先輩格に屬する。寶永元年、九藏が二代團十郎襲名の時は、彼がこれを紹介し、寶永後は役者としての活動も漸次衰へて來た。【作品】代表作二三をあげる。○三世道成寺（元祿十四年七月、森田座興行。江戶歌舞伎の道成寺としては最古の部に屬する。元祿歌舞伎傑作集上卷所收。〔梗概〕五番續。謠曲「現在道成寺」の後日譚の形式。橘道成の息道信は庄司の娘白菊姬のために道成寺で取り殺されたので、道信の弟道善は豫て菩提のために修行の志深かつたが、白菊の靈は當御臺たる道善の繼母の娘滿月姬に憑つて、姬は道善を慕ふ。然るに御臺は家督横領のために隣國島根家の息女待宵姬を嫁に決める事によつて、夫婦を放逐せんと企らむ。道善には白菊姬の妹で侍女となつてゐる十六夜との仲に一子道丸がゐたが、道善が大峯に上るうち、御臺の知る所となつて十六夜は慘殺される。併しその靈は現はれて幼兒を育て、或は道善の危難を救つたりしたが、滿月姬の生靈が道善を羽黑山に追つて、遂に最上川で道善を取り殺した。十六夜の兄忍之助と弟常五郎とが、鐃供養の道成寺で惡方を討つ。滿月の靈は龍體となつて鐃を纏ひ、日高川に飛び入る。橘道善（村山平右衞門）、滿月姬（上村吉三郎）、十六夜（袖崎いろは）、忍之助（宮崎傳吉）等。

けいせい角田川（寶永元年二月、山村座興行。江戶の角田川狂言に影響する所が多い。「連獅子」の原作）○櫟根元曾我（享保五年一月、森田座興行。二代團十郎の矢の根の初作で、出世藝であつた）。【作風】舞臺技巧に主を置いた眼先本位で、構想上に特に新傾向ありとも思へぬが、大體に於て、手堅い作風として優れてゐる。【參考】舞曲扇林河原崎權之助○歌舞伎圖說　守隨・秋葉○江戶歌舞伎守隨（日本文學聯講、近世下）　〔守隨〕

宮崎文庫 みやざきぶんこ　文庫【別名】豐宮崎文庫【解說】慶安元年、外宮禰宜出口延佳・與村弘正等が主唱し、衆庶の資財を募つて伊勢外宮に近き地（今、宇治山田市岡本町に屬す）に創建したもの（この擧に贊した人々を文庫籍中と稱した）。書籍を集め、講堂を設けて神宮祠官の子弟の修學に資した。この事朝廷に達して創立者は嘉賞された。又幕府の儒官林道春はために文庫記を作つた。その後萬治三年幕府より修繕費を受けたのを初めとして多くの貴紳家よりも書籍等の寄贈を受け、漸くその基礎を固くするに至り、一方、諸學者の來つて書を講ずる者が多かつた。然るに維新後、籍中の私有物の如くなつて、一般公衆からは殆ど全く離隔せられるに至り、又明治十一年の春、火災に罹つて講堂その他を烏有に歸したが、書籍は幸にその災を免れた。その後宇治山田市某氏の手に移り、敷地と共に一私人の有に歸したが、藏書全部は神苑會がこれを讓り受け、明治四十四年十一月、更に神苑會は宮崎文庫の舊藏書二萬七百四十五册を擧げて神宮文庫に寄贈した。（神宮文庫參照）　〔植松・岩淵〕

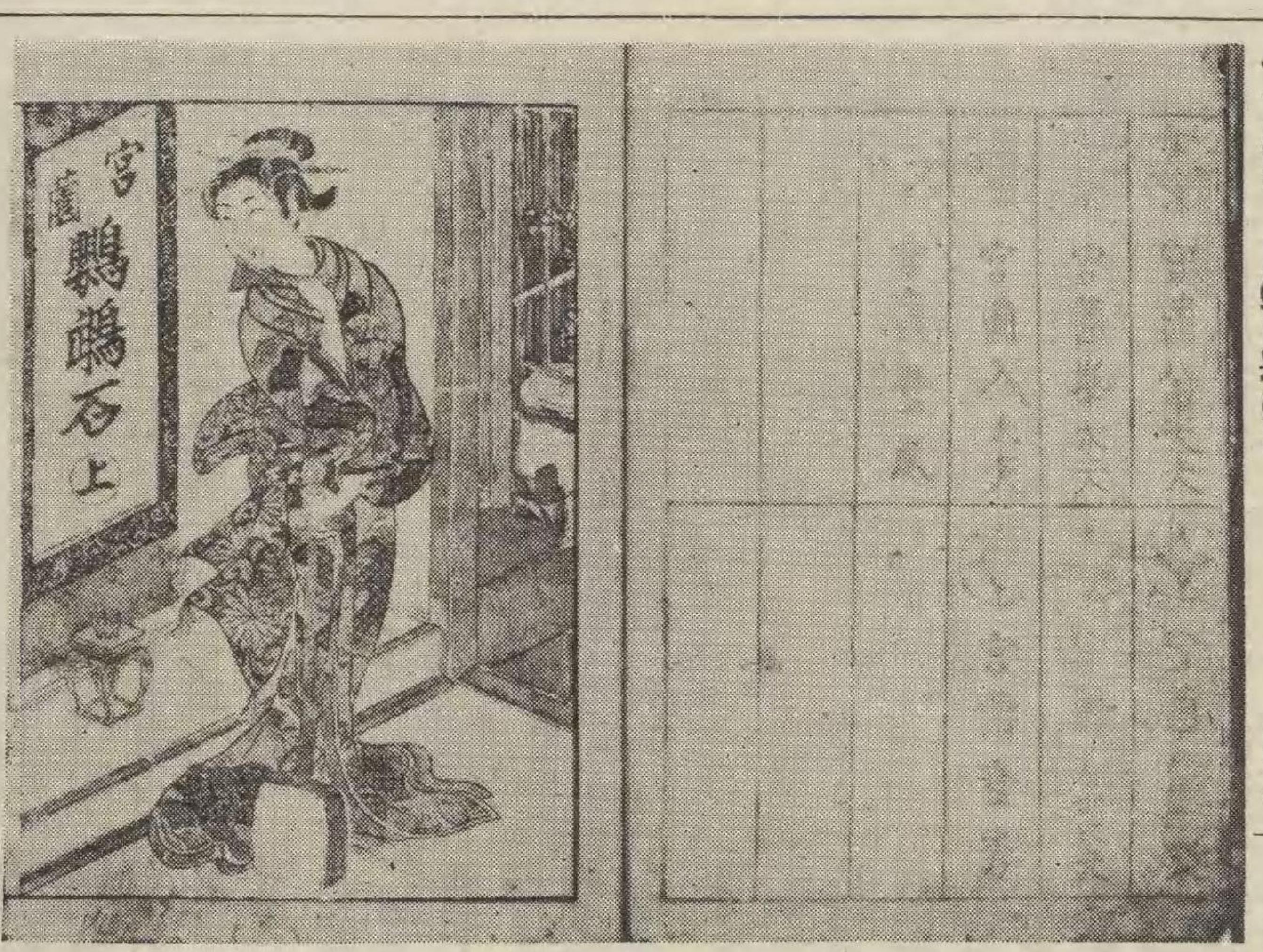
宮崎夢柳 みやざきむりう　飜譯家・小說家【本名】富要【別號】芙蓉。夢柳居士とも言つた。【生歿】安政二年土佐高知中新町に生れ、明治二十二年七月二十三日、大阪堂島の寓舍に病歿す。享年三十五。【閱歷】父は宮崎富成、土佐藩士、初め名東縣出仕、後、讚岐琴平神社の祠官となつた人。母はゑつ子、川村氏。夢柳は幼より詞賦を喜び、藩黌致道館に學ぶ。一日藩主（容堂公）が視學に來て、「柳」の詩を以て諸生を試みた。彼は退いて種々工夫し、夜中に至つたが、夢中に不圖得るところがあつたので、それを記して藩主に獻じ、その才藻を賞された。それから夢柳の號を用ひたといふ。明治三年（十六歲）東京に遊び、丸山氏の塾に入り、傍ら重野成齋・成島柳北等に學んだ。明治八年頃、島本仲道の北洲舍に入り、又東北地方を歷遊した。その後母死去の報知を得たので、讚岐に赴きその喪に服してから又出遊した。明治十三年高知新聞の發刊されるや、坂崎紫瀾・和田稻積等と共に、これに筆を執つた。十五年七月同新聞發行禁止の前後、上京して板垣退助が新に發行した自由新聞に入つた。同新聞が別働隊として繪入自由新聞を起すや、彼は第一線に立つて活躍した。論說に小說に彼の名は隆々として揚つた。十七年には小室案外堂と共に新聞「自由燈」を起したが、この時代が彼の文學活動の絕頂であつたらしい。十九年には彼が「自由燈」に連載した「鬼啾々」（別項）の單行本が祕密出版の罪に問はれ、禁錮三ケ月の罰をうけた。この後間もなく高知に歸り、土陽新聞に入つたが、更に大阪に出て日報社員となり、意見が合はずして二十一年東雲新聞に轉じ、再びやゝ得意の境に入らうとしたが、不幸にも翌年歿した。【著作】夢柳は今日主として小說家として記憶されてゐて、論文その他は全く知られてゐない。十五年自由新聞入社以前にも小說の作があつたかどうか分らないが、それ以後の彼の小說を年代順に擧げる。〔飜譯小說〕自由乃凱歌（別項）（明治十五年）○魯西國虛無黨寃枉乃鞭笞（十五年）○一滴千金憂世乃涕涙（十六年）○龍動塔話　十六年）○佛蘭西太平記鮮血の花

（十七年）〇虛無黨實傳記鬼啾々（十七—八年）（別項）〇佛國史談義勇兵（二十二年）。〔創作〕勤王濟民高峰の荒鷲（十六年）〇芒の一と叢（二十一年）等。

【批評】飜譯と創作とを問はず、夢柳の小說は凡て自由民權の伸張を目的とし、民間志士の反抗意識を強める手段として書かれたものであつた。そのために彼の小說は佛蘭西革命の出來事と露西亞虛無黨の政治行動とに限られたかの觀がある。だが、これは彼が關係した新聞の方針がさうだつたので、夢柳自身は政治上にそれ程根深い信念や主張をもつてゐたとは思はれない。彼は寧ろ多情多感な風流才子で、それが時勢に激して悲歌慷慨した程度に止まるであらう。彼の小說中有名なものは飜譯に多いが、事實は飜譯といひ條、自分勝手に增補手加減をしたもので、彼の自作といつてもいゝ位である。今日からいへば、假想的壓制反抗を目的とした煽動的情緖以外に、何等本質的價値のない小說ではあるが、人心に投じて大人氣を得た。時代思想の反映として、又政治小說の重要な先驅として、明治文學乃至文化の硏究者は、一讀を要するものであらう。なほ夢柳は好んで漢詩を作り、殊に香奩體の詩をよくした。〔柳田（泉）〕

宮島春松（みやじまはるまつ）「哲烈禍福譚」を見よ。

宮薗鸚鵡石（みやぞのあうむせき）宮薗節寄せ本　半紙本二册【刊行】安永二年【諸本】日本歌謠集成卷十所收。【解說】宮薗節（薗八節參照）の正本集で、序文に「（前略）此頃書肆森川氏正本をうつし、刪定を請ふて新曲集成す、且名題をこふ、先生魯魚を正し墨譜をなし、名づけて宮薗あふむ石と云、我いふて石答ふる乎、石いふて我響くか、また唯造化自然曲節を忘るゝといふもの非乎、なほ書肆の求に應じて一言を贅すと云。安永癸巳九月、宮薗門人園古識」とあり、序についで紅綠の色摺にした宮薗紋集幷連名があり、一派の太夫三味線ひき七十一人の名稱と紋所をあらはし、目錄も短册形の下半に詞曲の意味を描いて風情を添へてゐる。目錄を擧げる。〔藤井〕



宮薗鸚鵡石（笹野堅氏藏）

【上卷】

○くるはまんざい　○道行相合ごたつ
○袂の北しぐれ　○涙の通ひ路
○情のふたへおび　○朧のかつら川
○廓の色いとこ　○とり邊山
○傾せい釣ぎつね　○なたねの亂れ咲
○お七哥經の段　○なごりのうす衣
○二世の待合　○むつの玉川
○反魂香相の山の段　○妹脊のかけ行燈
○さつきの文紙子　○浮名のにしのうみ
○くずの葉あべのゝ別れ　○戀のおだ卷
○料理の店見　○三つのまぼろし
○かりがねおつたうれい　○淨るりくやう

【下卷】

○御祝儀松づくし　○たこへの深山木
○名ごりの初女夫　○こひのさよ風
○夕ぎり文しやう　○戀のだて紋
○しのだ妻　○猫の綱手
○重井筒いけんの段　○とらがいし
○道行ゆかりの名月　○おさなげんじ
○萬年ぐさ　○卯の葉がさね
○宵がうしん　○時雨のてうとり
○つくば山とけつの段　○つくば山不心中の段
○江戸繪すがた　○緣にしの辻かご
○くぜつ楊貴妃　○夢の思ひば
○そこ輪小町　○こひの染木
○いもせの走書　○二世のきぬ〴〵
○かたみ曾我　○おぼへの帳つら川
○くるわ道中　○おかげ拔參り

宮薗千之（みやぞのせんし）「薗八節」を見よ

宮薗花扇子（みやぞのはなあふぎ）宮薗節寄せ本　半紙本一册【刊行】明和六年【解說】明和六年己丑春三月宮薗鸞鳳軒の自序あり、次に左の系譜を掲げる。

淨瑠璃諸流之祖文祿寬永之頃世ニ流布ス
薩摩治右衞門—虎屋源太夫—山本土佐掾—
（角太夫一流之祖）
江戸肥前同外記同土佐永間牛太夫河東等師レ之
伊勢島宇治加賀掾山本等師レ之
文彌若太夫一仲等師レ之
一流之祖
國太夫當一流之祖
都太夫一仲—宮古路豐後
大和路仲太夫豐美繁太夫等師レ之
宮古路薗八—宮薗鸞鳳軒
春富士正傳中頃出雲ト云
常世代太夫後豐後ト云
宮薗等師レ之
姑襲二薗八之名一中頃豐前ト云

次に八十太夫以下男女百五人の名と印とを載せてある。初版は印はすべて朱摺であり、「祝言松づくし」の一曲だけは、根曳の小松模樣の色摺紙に特に肉太な字で記されてゐるが、後摺は印譜も墨摺になり、「祝言」も普通の字體で普通の紙になつてゐる。

祝言松づくし　おさな源氏　夕ぎり文章
かたみ曾我　戀の小夜かぜ　そこは小町
のべのいく重　花街の色いとこ　まんねん草
みやがうき身　猫のつな手　虎が石
こひの伊達紋　菜種のみだれ咲　とり邊山
二世の待合　浮名の西のうみ　しのだづま
朧のかつら川　卯の葉がさね　口舌楊貴妃
江戸畫すがた　まつの時雨　こひの染木
淨瑠璃供養（以上二十五番）

版式は六行に統一されて頗る體裁がよい。鸞鳳軒の手版で、紙質・印刷共に佳良である。系譜に見える如く、鸞鳳軒は薗八節を創めた宮古路薗八の門人で、二世を襲名したが、明和の初め頃より宮薗鸞鳳軒と改めて京阪間にその流派を擴めた。この人は多少文筆の才があつて、近松の詞章を抽出綴合して正本となし、又短簡な肴淨瑠璃の作もある。（薗八節參照）〔藤井〕

宮薗節（みやぞのぶし）「薗八節」を見よ。

宮薗都大全（みやぞのみやこだいぜん）宮薗節寄せ本　半紙本一册【刊行】寶曆十三年か。【諸本】德川文藝類聚第九所收。【解說】詞章は大部分近松・紀海音以下、竹本・豐竹二座の淨瑠璃の一部分を殆どそのまゝ借りたものである。

染模樣妹脊門松　道行夢路の地藏廻
染模樣妹脊門松　質店奧ぐらの段
○ゆかりの月見　伊左衞門夕霧借座舖口舌の段
○逢夜の唐崎　半兵衞小いな口舌八景の段

花系圖壬生の段　託言戀のはつ潮
○かみすきの段　治兵衞小春名ごりの姿見
○番蝶夢逢夜　長三郎おかんうれひの段
○班女物狂ひ　亂あふぎけいごと
○戀女房染分手綱　十段目三吉うれひの段
○傾城黃金鷄　辰五郎あづま諸はがひ
○新薄雪物語　左衞門うすゆき道行
○花香琴の段　わたるけさ御前別れの段

○浪花の橋盤　治兵衞小はるみち行
○不心底闇鮑　七兵衞小さみ道行
○里玉子泪八文字　おこようれひの段
○御祝儀　うをづくし

この書寶曆十三未年改正とあれども、本文中に「染模樣妹脊門松　道行夢の思ひ羽」（明和四年作）「京羽二重娘氣質　開帳場口舌の段」（明和元年作）「闕取千兩幟　相撲の段」（明和四年作）な

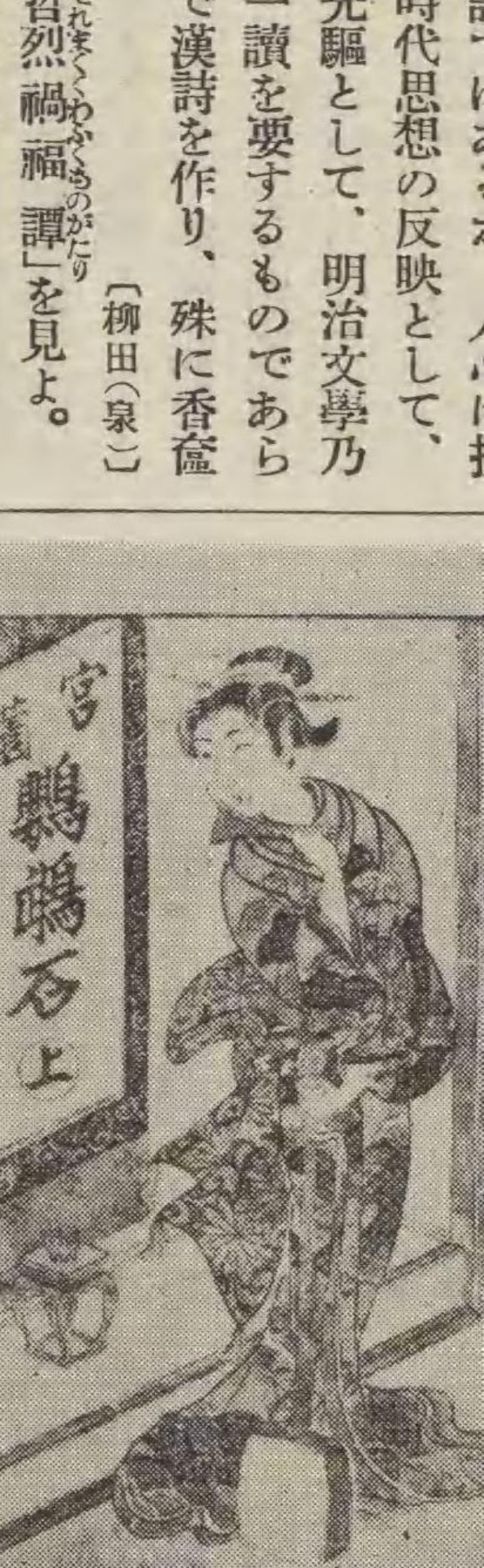
歌の一で、「宮人の　あゆひの小鈴　落ちにきと　宮人どよむ　里人もゆめ」と云ふ短歌形式より成る。【備考】「古語拾遺」に、天照大神を倭笠縫邑に祀り奉つた夜に宴樂した時の歌が出で、それを若干變改したものが、神樂歌の大前張に「宮人」と題して入つた。即ち「宮人の　大よそ衣　膝遠し　着のよろしもよ　大よそ衣」とある。

結城某は、小兒を荒法師に奪はれ、探索の末、荒木村重の籠る伊丹城の古井戸を怪しみ、村重に仕へ、熱湯を注いで蝦蟇を殺して仇を報ずる。（四）豪輔幽魂に逢うて危きを逃る說。足利氏繁榮の頃、望月豪輔といふ色好み、怪美女の俘となるが、酒宴の興に嬲り殺しにされた男の亡靈に身の危急を敎へられ、危難を逃れて前非を悔いる。「卷之三」（五）東條純八

じて大人氣を得た。時代思想の反映として、又政治小說の重要な先驅として、明治文學乃至文化の硏究者は、一讀を要するものであらう。なほ夢柳は好んで漢詩を作り、殊に香奩體の詩をよくした。〔柳田（泉）〕

宮島春松 みやじまはるき　「哲烈禍福譚」を見よ。

宮薗鸚鵡石 みやぞのあうむせき　宮薗節寄せ本　半紙本二册【刊行】安永二年【諸本】日本歌謠集成卷十所收。【解說】宮薗節（薗八節參照）の正本集で、序文に「（前略）此頃書肆森川氏正本をうつし、刪定を請ふて新曲集成す、且名題をこふ、先生魯魚を正し墨譜をなし、名づけて宮薗あふむ石と云、我いふて石答ふる乎、石いふて我響くか、また唯造化自然曲節を忘



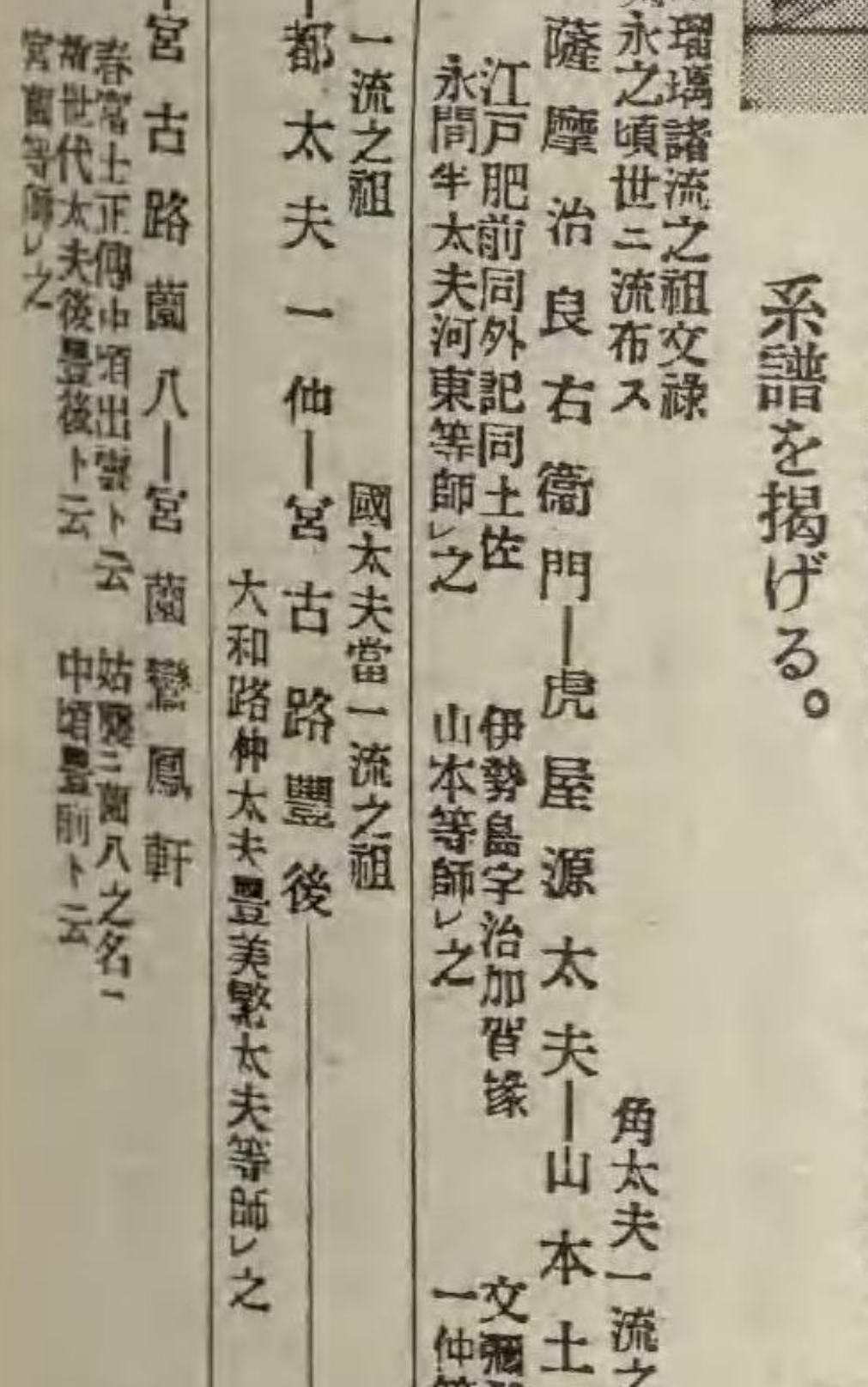
野堅氏蔵）

【上卷】
○くるはまんざい　○道行相合ごたつ
○袂の北しぐれ　○涙の通ひ路
○情のふたへおび　○朧のかつら川
○廓の色いさ　○とり邊山
○傾せい釣ぎつね　○なたねの亂れ咲
○お七哥經の段　○なごりのうす衣

○くるわ道中　○おかげ拔參り

宮薗千之 みやぞのせんし　「薗八節」を見よ

宮薗花扇子 みやぞのはなあふぎ　宮薗節寄せ本　半紙本一册【刊行】明和六年【解說】明和六年己丑春三月宮薗鸞鳳軒の自序あり、次に左の系譜を掲げる。



た。この人は多少文筆の才があつて、近松の詞章を抽出綴合して正本となし、又短簡な肴淨瑠璃の作もある。（薗八節參照）〔藤井〕

宮薗節 みやぞのぶし　「薗八節」を見よ。

宮薗都大全 みやぞのみやこだいぜん　宮薗節寄せ本　半紙本一册【刊行】寶曆十三年か。【諸本】徳川文藝類聚第九所收。【解說】詞章は大部分近松・紀海音以下、竹本・豐竹二座の淨瑠璃の一部分を殆どそのまゝ借りたものである。

染模樣妹脊門松　道行夢路の地藏廻
染模樣妹脊門松　質店與ぐらの段
○ゆかりの月見　伊左衞門夕霧借座鋪口舌の段
○逢夜の唐崎　半兵衞小いな口舌八景の段

花系圖壬生の段　託言戀のはつ潮
○かみすきの段　治兵衞小春名ごりの姿見
○番蝶夢逢夜　長三郎おかんうれひの段
○班女物狂ひ　亂あふぎけいごと
○戀女房染分手綱　十段目三吉うれひの段
○傾城黃金鷄　辰五郎あづま諸はがひ
○新薄雪物語　左衞門うすゆき道行
○花香琴の段　わたるけさ御前別れの段
○二世の緣言　源五兵衞おまん口舌の段
○傾城幾夜廓　助六揚卷露蝶口舌の段
○戀咲廓情湊　新兵衞小女郞道行
○業平雙子櫻　ゆめのあくた川
○長町の段　五段目三かつ緣切の段
○葛葉別の段　恩愛二面かゞみ
○忘草信夫昔　對王丸安壽姬別れの辻
○苅萱山の段　うれひの段
○むかし祭文　傳兵衞おしゆんみち行
○仇名の旅枕　茂兵衞おさん道行袖屏風
○曲輪嘶の段　花街の汲分上之卷
○四ツ袖哥の段　萬三郎道芝くぜつの段
○姿のうつし畫　西行あけ屋の段
○雪姬鼠の段　花がすみ名畫鼠
○鐵の緣似合　おなべ角內うれひの段
○男作五雁金　道行夢のかよひ路
○彥三頭巾　戀のたばね木
○新屋鋪の段　八重霞かしくの段
○浮名の淀川　竹五郎吾妻口舌の段
○三瀨川戀柵　又兵衞おさな道行
　信仰記上かん屋　三段目口
○雙生隅田川　きやう女みちゆき
○壽のかど松　山崎與治兵衞道行
○重井筒　ゐけんのだん
○茜染野中隱井戸　梅の由兵衞みちゆき
　中將姬雪責の段　ひばり山の段
○傾城吉原筏　與吉高さきみち行
○同よしはらいかだ　與吉高さきうれひの段
○千代の若綠　お染久まつ山みち行

○浪花の橋盡　治兵衞小はるみち行
○不心底闇鮑　七兵衞小さみ道行
○里玉子泪八文字　おこようれひの段
○御祝儀　うをづくし

この書寶曆十三未年改正とあれども、本文中に「染模樣妹脊門松　道行夢の思ひ羽」（明和四年作）「京羽二重娘氣質　開帳場口舌の段」（明和元年作）「關取千兩幟　相撲の段」（明和四年作）などの義太夫物が殆ど原作通りで收められてゐるを見れば、早くも明和四年の末に增補したものとせねばならぬ。寶曆十三年は增補以前の年月であつて、目次だけを新に板に起し、本文はそれ以前に印行された一段本を合綴したものである。初版のものは、目錄の終りに「寶曆十二午歲　宮古路薗八事　宮薗豐前　改正直傳」とある。思ふにこの「宮薗大全」は、改名披露を兼ねての出版であらう。これには語り物五十段を集め、宮薗豐前直傳と記するもの三十段、宮古路薗八直傳とあるもの四段、宮古路豐後とあるもの二段、その餘十四段は何とも記してない。○印は二書共通で、その外に左の十曲がある。

初楓歌中山（小さん金五郎）道行歌の中山　○當世染情噂（小春治兵衞）道行妹脊の抱紋○死出の山科　心中道ゆき○ゆかりの十德　お染久松山物ぐるひ○樽屋おせん口舌の段○涙の玉櫛笥　襤褸錦髮すきの段○升落の段　壽門松中の卷○妹脊の中汲　幸助お菊道行○雙紋刀銘月　半七おはな道行○笠物狂　淸十郎お夏愁ひの段。〔藤井〕

宮薗鸞鳳軒 みやぞのらんぽうけん　「薗八節」「宮薗花扇子」を見よ。

宮人振 みやひとぶり　歌謠【名稱】歌詞の第一句による稱である。【出典】「古事記」允恭の條に一首出づ。【解說】雅樂寮で敎習した大歌の一で、「宮人の　あゆひの小鈴　落ちにきと　宮人どよむ　里人もゆめ」と云ふ短歌形式より成る。

【備考】「古語拾遺」に、天照大神を倭笠縫邑に祀り奉つた夜に宴樂した時の歌が出で、それを若干變改したものが、神樂歌の大前張に「宮人」と題して入つた。即ち「宮人の　大よそ衣　膝遠し　着のよろしもよ　大よそ衣」とある。この歌は「宮人振」と關係があるのではなからうか。（伊勢神歌・倭舞參照）〔藤田〕

深山草 みやまぐさ　讀本　四册【作者】伊丹椿園【名稱】扉には「今古怪談深山草」、內題には「古今奇談深山草」とある。世に傳へざる怪異の說話を、深山の異草奇花に譬喩したものである。【刊行】天明二年正月、京錢屋庄兵衞・千種屋平兵衞・鹽屋平助板。【題材】支那の書を引き、仙術幻術、蝦蟇の怪、亡靈說話を採つてゐる。殊に「遊仙窟」「杜氏春秋傳」等の變形されたものがある。多く世界を我が戰國時代に移して怪異の物語を作つてゐる。

【梗概】〔卷之一〕（一）黿龜化して三度災難を救ふ說。天正の頃、西園寺公寛の妾笹千代は、侍女水江が若君の命を救ひ、又館の災害を防いで愛せらるるを怨み、佞臣多田と通じ、若君を失ひ、わが腹の女子を世に立てんと謀り、共に水江のために池に沈められる。公寛その夜の夢に、水江が現はれて、永く池に住む龜の姿を變じてかく恩を報いたと告げる。（二）娼妓死後に怨恨を報ずる說。梅原某といふ士、浪花の妓と深く契つたが、故あつて一時別れる。後、友の釜澤が妓に言ひよつた事を誤り聞き、諦めて妻を迎ふ。妓これを知つて縊死し、その亡靈釜澤を殺す。〔卷之二〕（三）蝦蟇怪をなし小兒を取る說。永祿年中、大內家の浪人結城某は、小兒を荒法師に奪はれ、探索の末、荒木村重の籠る伊丹城の古井戸を怪しみ、村重に仕へ、熱湯を注いで蝦蟇を殺して仇を報ずる。（四）豪輔幽魂に逢うて危きを逃る說。足利氏繁榮の頃、望月豪輔といふ色好み、怪美女の俘となるが、酒宴の興に嬲り殺しにされた男の亡靈に身の危急を敎へられ、危難を逃れて前非を悔いる。〔卷之三〕（五）東條純八仙客に逢ふ說。赤貧に安んじてゐた東條某、或る日怪僧に出逢つて金錢を得てから豪奢を誇り、三年にして凡てを失ふ。これは僧の神通力を以てしたことであつた。後十年、かの僧再び彼を見、仙骨ありとて弟子とする。（六）常山道人幻術を行ふ說。蚺蛇の口から現はれた常山といふ者、武田勝賴に仕へて、その妾の不義を幻術によつて發き、又武田家滅亡の迫れるを家臣に告げる。〔卷之四〕（七）蝘蜓少人と化して人を惑はす說。明智光秀の家臣大友某、美童の事より友と爭ひこれを殺す。その弟丹後の文殊堂で大友を殺して復讐し、天井に隱れた少年を突くと、蝘蜓が腹をさかれて落ち、文殊堂の妖怪の正體が現はれる。（八）覺淵慢心して魔道へ落つる說。覺淵といふ僧、妖怪の正體を現はしてより遠近に歸依する者多く、遂に一宇を建立し、數百卷の書を編み、慢心して世の心にそはぬ書を燒かうとし、妖魔のためにさいなまれて魔界に沈む。（九）老狐神通を現はして恩を報ずる說。島原の揚屋の娘を戀した富豪の子、女の靡かぬを怨みてこれを殺し、自殺せんとするが、或る夜助けた狐の計ひによつて、三年の後遂に妻に迎へることになり、狐の恩を謝した。

【解說】怪異小說として、先蹤のものに比して多く異彩あるを見ない。材の珍奇なことにの

者】不詳【刊行】不詳【諸本】帝國圖書館藏寫本。續氣質全集（帝國文庫）所收。【解說】所謂氣質物の一つである。上卷九話、下卷五話より成る端物集で、夫氣質、婦氣質に關するいろ〳〵な說話を集め綴つてある。各說話には作爲誇張があり、且つ滑稽を表はしてゐるが、その滑稽にも自然味を缺くものがある。福富屋原四郎といふ者の妻は、至つて氣の弱い遠正筆たることを認めながら、僞筆なれば高價には買ひ難しといつて一分に買ひ取り、後八百兩に賣つたといふ話は、狡猾なる婦氣質を寫したものである。滑稽的なる說話には、後の滑稽本中の說話に似たものがある。恐らく後の滑稽本は、本期の氣質物と全く無關係に現はれたものではあるまい。〔藤村・小泉〕

女夫星（めをと）　小說【作者】小杉天外

まり思ひ切りがわるく書いてあるために、時には彼女を愚物のやうに思はせる。また夫としての源次郎の行爲に同感し難い點があるのも描き方が十分でないためであらう。中で世話好きのお芳が一番よく現はれてゐる。概して冗漫な感じがするが、當時の作としては、注目すべき一篇であらう。〔高須〕

夫婦物の謠曲（めをとものの）【曲目】相

歌から想を得たもの。複式夢幻能。五流現行。【女郎花】四番目【作者】世阿彌（能本作者註文）とも、龜阿（二百十番謠目錄）とも。【內容】九州松浦潟の僧（ワキ）が都に上り、石淸水八幡に來て女郎花を折ると、一人の老翁（前ジテ）が出てこれを留め、互に古歌を引いて言ひ爭つた後、僧を八幡宮の社前に導き、なほ男塚女塚に案內し、その回向を乞うて消え去る。やが

み闘心して、他を顧みなかつた爲めに、作品として小說的構想に缺くる所があり、又文に柔味少く藝術味に乏しい。〔笹野〕

明暗流（みやうあんりう）「尺八」を見よ。

明惠（みやうゑ）　學僧【俗姓】伊藤氏【諱】高辨【法號】明惠【生歿】承安三年正月八日に生れ、貞永元年（一八九二）十月十八日寂す。享年六十。【學統】明惠は夙く山城の高尾山に登つて文覺上人に師事した。十六歳の時、上覺上人に就いて手度を受け、東大寺戒壇院に登つて具足戒を受け、尊勝院林觀房聖詮に就いて俱舍論を學び、仁和寺の惠鏡房尊實に就いて眞言の章疏を學び、華嚴院景雅の下に華嚴五敎章を學んだ。上覺上人から十八道、金剛界を傳授して專ら苦修練行した。後、東大寺尊勝院で華嚴の章疏を研究した。【閲歷】明惠は紀伊在田郡石垣莊の人で、本姓は伊藤氏と云ひ、後、養父の姓を襲つて平氏と云つた。母は湯淺權守藤原宗重の第四女である。幼い時に、父母に死に別れ、姨母の手に育てられ、九歳の時、山城の高尾山に登つた。これが明惠の勉學修業の第一歩で、この後は專ら苦修練行をつづけた。後、湯淺兵衞尉宗光の供養を受けて筏立山に草菴を營み、釋迦牟尼佛像の前に大願文を誦した。この後、高尾山に歸つたが、明惠の學德の令名は四方に聞えた。併し衆請を厭ふ念が強く、西方の峯頂に草菴を營み、練若臺と名づけて、こゝに日夜修法坐禪讀經等に勵んだ。後、この草菴を捨てて栂尾に新しい草菴を營み、石水院と號して幽棲した。賀茂の別所に移り、再び栂尾に歸り、重ねて賀茂に住み、遂に楞伽山に幽棲して坐禪入觀した。栂尾にて梵網菩薩戒本の講敷をなし、續いて最後の說戒である戒本の講敷をなし、やがて疾に罹つたので、諸弟子に遺訓し、六十歳を以て寂した。【著作】菩提樹寶塔式四卷○摧邪論三卷○華嚴修禪觀照入解脫門義○華嚴唯心義釋○金師子章光顯鈔○光明眞言加持土砂觀信記各二卷○莊嚴記○華嚴信種義各一卷。外に三十餘部三十餘卷。【參考】明惠上人行狀記○明惠上人傳記○施無畏寺文書○諸宗章疏錄〔鷲尾〕

明經道（みやうぎやうだう）「大學」を見よ。

名字狀（みやうじじやう）「一字狀」を見よ。

明星（みやうじやう）　詩歌雜誌【主宰者】與謝野鐵幹（後に寬）【刊行】（第一期）明治三十年四月新詩社刊行。同四十一年十一月百號を以て廢刊。（第二期）大正十年十一月刊行、昭和二年四月廢刊。【解說】初め、四六判四倍大の新聞體であつたが、第六號から四六倍判の普通雜誌體に改められた。新味ある挿繪、良好なる紙質、清新なる體裁に於て、當時の誌界に大なる刺戟を與へた。「明星」は明治三十年代を通じて日本短歌の未曾有の革命を遂げ、新抒情詩時代の機運に聰くも乘じて、早くも詩歌藝術の一大勢力を張り、星菫派の王國として四方に君臨した觀があつた。殊に晶子の出現は「明星」をして近代の香氣馥郁たる新歌苑風景たらしめた。詩と戀愛の時代、星と菫の浪漫精神がさながら表現された。天下の俊髦才媛は翕然として新詩社に集り、清婉瀟洒の畫風はまた興つて短歌革命の先聲に交響し、「明星」の新容は、雜誌界裝幀界の目を驚かした。以來鷗外・敏・孤蝶等來り援け、泣菫・有明等は詩稿を寄せ、呼應し去來する同人その他には、栗島狹衣・谷活東・山本露葉・小林天民・高須梅溪（芳次郎）・山川登美子・增田（茅野）雅子・川上櫻翠・窪田空穗・水野葉舟　高村砕雨（光太郎）・相馬御風・平出露花（修）その他があり、全く時を得たのである。鐵幹を中心にする「明星」の業績は、主として短歌に繫つたが、詩に於ても新抒情詩時代の後期より象徴詩の勃興期にかけて、常に最高の權威たり、詩の統一的王國を成した新人風景は實に空前の盛觀であつた。同人連作長篇叙事詩「源九郎義經」の冒頭に、「家門は平氏、地は平安、時は平治ぞ、天に謝せ」と落筆したのは鐵幹であつた。これは三十六年の一月より「明星」を賑はした。鐵幹について、白星の「幻境」、林外の「初戀」等連唱されたが、鐵幹の「清水詣」「鳴鏑」が優に他を壓した。次の「日本武尊」の連作の作者は山崎紫紅・平野弔影（萬里）・前田翠溪・大井蒼梧・晶子・相馬御風・川上櫻翠・茅野暮雨（蕭々）・鐵幹等であつて、この叙事詩の提唱は詩壇に影響するところが多大であつた。晶子は日露戰役當時、人間愛の立脚點から「君死にたまふことなかれ」の詩を本誌に掲げて軍國主義者たちに投げつけた。新詩社の短歌は落合直文の系統より出でて、同門の尾上柴舟・金子薰園・服部躬治等（各別項）を凌ぎ、佐佐木信綱の折衷派、子規の萬葉調を壓して新詩社の短歌時代を現出した。窪田空穗・水野葉舟・相馬御風の脫退後も、高村光太郎・吉井勇・玉野花子・平野萬里・茅野蕭蕭の新進一夜百首歌の競詠に紙面を賑はし、北原白秋また、詩作の餘に象徴詩風の新短歌を制作し、クロロホルム・苦味丁幾・電信等、近代の新感覺をもこれに移さんとした。詩に於ては、泡鳴・林外・御風等の退社後は昵近なる社外の詩家、敏・泣菫・有明・鷗外等の來援を俟つて詩壇に雄視した。三十七八年の交には、石川啄木・萬里・蕭蕭・白秋・木下杢太郎・長田秀雄等に依つて、華々しき浪漫精神を高揚し、新抒情詩より象徴詩の新運動に參加したが、三十九年白秋・杢太郎・秀雄の連袂退社以來、散文界の自然主義勃興の機運に禍されて遂に四十一年の十一月にその百號を以て廢刊するに至つた。〔北原〕

明星
主筆 與謝野鐵幹
第一號

明星創刊號（久松潜一氏藏）

妙竹林話七偏人（めうちくりんばなししちへんじん）「七偏人」を見よ。

夫婦氣質（めをとかたぎ）　浮世草子　二冊【作

られ、九歳の時、山城の高尾山に登つた。これが明惠の勉學修業の第一歩で、この後は專ら苦修練行をつづけた。後、湯淺兵衞尉宗光の供養を受けて筏立山に草菴を營み、釋迦牟尼佛像の前に大願文を誦した。この後、高尾山に歸つたが、明惠の學德の令名は四方に聞えた。併し衆請を厭ふ念が強く、西方の峯頂に草菴を營み、練若臺と名づけて、こゝに日夜修法坐禪讀經等に勵んだ。後、この草菴を捨てて栂尾に新しい草菴を營み、石水院と號して幽棲した。賀茂の別所に移り、再び栂尾に歸り、重ねて賀茂に住み、遂に楞伽山に幽棲して坐禪入觀した。栂尾にて梵網菩薩戒本の講敵をなし、續いて最後の說戒である戒本の講

判の普通雜誌體に改められた。新味ある挿繪、良好なる紙質、淸新なる體裁に於て、當時の誌界に大なる刺戟を與へた。「明星」は明治三十年代を通じて日本短歌の未曾有の革命を遂げ、新抒情詩時代の機運に聰くも乘じて、早くも詩歌藝術の一大勢力を張り、星菫派の王國として四方に君臨した觀があつた。殊に晶子の出現は「明星」をして近代期より象徵詩の勃興期にかけて、常に最高の權威たり、詩の統一的王國を成した新人風景は實に空前の盛觀であつた。同人連作長篇敍事詩「源九郎義經」の冒頭に、「家門は平氏、地は平安、時は平治ぞ、天に謝せ」と落筆したの

刊號（久松潛一氏藏）

し、クロロホルム・苦味丁幾・電信等、近代の新感覺をもこれに移さんとした。詩に於ては、泡鳴・林外・御風等の退社後は昵近なる社外の詩家、敏・泣菫・有明・鷗外等の來援を俟つて詩壇に雄視した。三十七八年の交には、石川啄木・萬里・蕭蕭・白秋・木下杢太郎・長田秀雄等に依つて、華々しき浪漫精神を高揚し、新抒情詩より象徵詩の新運動に參加したが、三十九年白秋・杢太郎・秀雄の連袂退社以來、散文界の自然主義勃興の機運に禍されて遂に四十一年の十一月にその百號を以て廢刊するに至つた。〔北原〕

妙竹林話七偏人　「七偏人」を見よ。

夫婦氣質　浮世草子　二冊　【作

者】不詳【刊行】不詳【諸本】帝國圖書館藏寫本。續氣質全集（帝國文庫）所收。【解說】所謂氣質物の一つである。上卷九話、下卷五話より成る端物集で、夫氣質、婦氣質に關するいろ〳〵な說話を集め綴つてある。各說話には作爲誇張があり、且つ滑稽を表はしてゐるが、その滑稽にも自然味を缺くものがある。福富屋源四郞といふ者の妻は、至つて氣の弱い遠慮深い氣質であつた。或る日その夫が隣家の花見の宴を土藏の陰から覗き見しようとして過つて二度放屁した。妻はこれがために隣家の人々に知られたことと心配し、癪まで起し、番頭を遣つて詫言をした。これに對する隣家の主人の口上は、御念の入つたお使、出物はれ物の諺もござります。その上風向きもよく、此方は何の障りもござりませんといふのであつたといふ上卷第一話は、所謂婦氣質を描いて滑稽を表はしたものである。松島屋茂平六といふ男、至つて女房自慢の氣質であつた。妻に繪を習はせ、その繪を所々の神社の繪馬に上げ、松島屋茂平六妻自畫と書し、又琴三味線をも習はせて誇りとしたが、終に騎馬弓矢の術までも習はせた。或る日妻は拳を狂はせて馬場守りの母親に射當てたが、幸に弱弓であつた爲めに布子の裏もかゝず、傷もつけずに濟んだ。すると茂平六、これをも自慢の種にし、人に射當てて裏かゝぬやうにしたのは、名人の證據だといつたといふ第二話は、愚昧な夫氣質を描いたものである。これ等は愚の誇張から來る滑稽を表はしたものであるが、又古手屋九郞兵衞の妻は、平素佛書を讀み、妄語を愼み、物を賣るにも元價を客に知らせる正直者と評判されてゐたが、或る日或る手代が日蓮自筆の曼陀羅を賣りに來たのを、その正筆たることを認めながら、僞筆なれば高價には買ひ難しといつて一分に買ひ取り、後八百兩に賣つたといふ話は、狡猾なる婦氣質を寫したものである。滑稽的なる說話には、後の滑稽本中の說話に似たものがある。恐らく後の滑稽本は、本期の氣質物と全く無關係に現はれたものではあるまい。〔藤村・小泉〕

女夫星　小說　【作者】小杉天外　【刊行】明治三十三年十月、春陽堂。【梗概】芝浦の都家といふ料理屋の女中お仙と、小間物屋の次男源次郞が夫婦約束をして小間物店を出したが、源次郞が投機に失敗したので、一時別れる。或る日お仙が元の同輩お芳のやつてゐる待合に行くと、都家時代にお仙に言ひ寄つて跳ねつけられた植田淸之助に逢ふ。お芳はお仙の母と同じく、彼女の將來のため、源次郞と別れて植田の妻になるやうに頻りに勸めるが、お仙は源次郞にまだ未練がある。母親に隱れて媾曳をしたり、金を工面したり、時には彼のために植田から借金したこともあつた。それ等の事からお仙は母と合はないのみか、植田との關係を源次郞にも疑はれる。それを癪に思つた彼女の母が、源次郞のところへ鋭く苦情を持ち込んだ事から、お仙は源次郞にも見限られ、途上で打擲されて畜生の如く扱はれる。そのために嘗ては源次郞の諒解の下に、植田と結婚しようとまで思つてゐたお仙は、前途を悲觀し、醫科大學構內の池へ投身自殺を計る。最後の言葉は「源さんの家へ行つて死にたい」といふのであつた。

【批評】天外の作物の中でも、題材としてすぐれたものではない。氣が弱く、情に脆いお仙のいぢらしさがしみ〴〵と感得されるが、あまり思ひ切りがわるく書いてあるために、時には彼女を愚物のやうに思はせる。また夫としての源次郞の行爲に同感し難い點があるのも描き方が十分でないためであらう。中で世話好きのお芳が一番よく現はれてゐる。概して冗漫な感じがするが、當時の作としては、注目すべき一篇であらう。〔高須〕

夫婦物の謠曲　【曲目】相愛の男女が死後なほ戀慕の妄執に苦しむ樣を描いたものに「船橋」「女郞花」「錦木」があり、夫が遠く離れてゐた留守に悲劇の起るものに「砧」「鳥追舟」があり、夫婦再會の喜びを描いたものに「蘆刈」があり、一種の三角關係を描いたものに「藍染川」がある。なほこの外に女の戀慕を描いたものに狂女物及び戀慕物（各別項）がある。【諸本】謠曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謠曲三百五十番集（日本古典全集）等所收。

【船橋】四番目〔作者〕世阿彌の改作。〔古名〕「佐野船橋」、「能作書」に、「佐野船橋、古風有」とある。〔內容〕熊野山伏（ワキ）が松島に赴く途次、上野國佐野で、橋の勸進をしてゐる二人の男女（前ジテ、前ヅレ）に、「萬葉集」の歌「東路の佐野の船橋とりはなし親しさくれば妹に逢はぬかも」（原歌とは少し違ふ）の謂れを尋ねると、「昔この所の男が船橋を渡つて忍び妻の許へ通つてゐたところ、或る夜親がその橋板をとり放して置いたのを知らないで渡つた爲め、川に落ちて死んでしまつたのです。私はその幽靈です」と回向を乞うて消え去る。山伏が回向してゐると、男（後ジテ）女（後ヅレ）の亡靈が現はれ、邪婬の罪により地獄で苦しんでゐる樣を述べたが、やがて山伏の功力によつて成佛したといふ曲。上揭「萬葉集」の東歌から想を得たもの。複式夢幻能。五流現行。

【女郞花】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文）とも、龜阿（二百十番謠目錄）とも。〔內容〕九州松浦潟の僧（ワキ）が都に上り、石淸水八幡に來て女郞花を折ると、一人の老翁（前ジテ）が出てこれを留め、互に古歌を引いて言ひ爭つた後、僧を八幡宮の社前に導き、なほ男塚女塚に案內し、その回向を乞うて消え去る。やがてこの男塚女塚の主、小野賴風（後ジテ）とその妻（後ヅレ）の亡靈が現はれ、妻が男の心を疑つて放生川に身を投げると、賴風も亦その後を追うた昔の樣を演じて、邪婬の惡業の苦を訴へ、回向を乞ふといふ曲。「古今集」序に「男山の昔を思ひ出で、女郞花の一時をくねるにも」とある句から思ひついたのであらう。複式夢幻能。五流現行。

【錦木】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文、二百十番謠目錄・申樂談儀等に曲名見ゆ）。〔內容〕諸國一見の僧（ワキ）が陸奧國狹布の里に行くと、女（前ヅレ）は鳥の羽で織つた布、男（前ジテ）は美しく色どつた木を持つた夫婦の市人が來たので、その謂れを尋ねると、夫婦の者は錦木細布の昔語を聞かせ、僧を錦塚に案內して、塚の內に入つてしまふ。僧が回向してゐると、男（後ジテ）女（後ヅレ）の亡靈が出て、細布を織つてゐる女の門に、男が錦木を立て重ねる樣を演じたと思ふと、僧の夢はさめたといふ曲。「袖中抄」の記事を主材とした。複式夢幻能。五流現行。

【砧】四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文・申樂談儀に曲名見ゆ）。〔內容〕九州蘆屋何某（ワキ）は自訴の事があつて上京以來、既に三年にもなつたので、侍女夕霧（ツレ）を國に歸して、この秋には必ず歸國すると妻に傳へしめた。

妻（前ジテ）は夫の歸りを待ち兼ね、砧を打つて僅かに心を慰めてゐたが、今年の暮にも歸れないと、都からの使が來たので、悲歎の餘り病死してしまつた。夫（後ワキ）は歸國して妻の死を悲しみ、梓の弓にかけて、その亡靈を呼び寄せた。妻の亡靈（後ジテ）は夫の薄情を恨んだが、法華讀誦の力によつて成佛したといふ曲。典據はない。夢幻的劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【鳥追舟】 四番目〔作者〕金剛（二百十番謠目錄）。〔名稱〕「鳥追」とも。〔内容〕薩摩國日暮（ひぐらし）殿の家臣左近（さこ）尉は、主人が上京して十年餘も歸國しないのを幸ひに、主人の妻（シテ）及びその子花若（子方）を下人のやうに扱ひ、川に舟を泛べて、田づらの鳥を追はせる。日暮殿（ワキ）は國に歸つてこの樣を見、大に憤つて左近尉を討たうとしたが、妻が引留めたので、その罪を宥したといふ曲。出典はない。二段劇能。五流現行。

【蘆刈】 四番目〔作者〕世阿彌（能本作者註文）とも、金春禪竹（二百十番謠目錄）ともいふ。〔内容〕攝津國日下の左衞門夫婦は貧のために別居してゐたが、妻（ツレ）は都に出て、さる方の乳母となり、相當の暮らしが立つやうになつたので、その邸の從者（ワキ）を連れ、難波に下つて夫を尋ねた。ところが、左衞門は散々の態となつてこの處にもゐない。折柄色々の戲れ事をいつて蘆を賣る男（シテ）が來たので、從者が女の慰みにこの男を呼んで小歌などを謠はせ、蘆を女に手渡しさせると、その男が左衞門であつた。左衞門は零落を恥ぢて逃げようとしたが、妻は引き留めた。左衞門は從者に勸められて喜びの男舞を舞つた。そして夫婦相携へて都に歸つたといふ曲。「大和物語」の記事に據つた。一段劇能。五流現行。

【藍染川】 四番目〔作者〕不明〔内容〕京都一條今出川の女梅壺侍從（前ヅレ）は一子梅千世（子方）を連れて、在京の節契りを結んだ太宰府の神主を尋ねて行く。そして宿主左近尉（ワキヅレ）に神主へ文を屆けさせたところ、折惡しく神主は留守で、後妻（狂言）がその文を見て嫉妬を起し、京女を離別する僞手紙を作つて宿主に渡し、且つ宿から直に追ひ出せと命じた。宿主はこれを京女に傳へる。女は歎き悲しんで藍染川に身を投げてしまつた。神主は宅に歸る途中、女の死骸を見て大に驚き、その遺書を讀んで深く悲しみ、神前に跪いて女の蘇生を祈つた。すると、天滿天神（後ジテ）が現はれて女を蘇生せしめ給ふといふ曲。出典はない。二段劇能。觀世・寶生現行。

【構想】 謠曲作者は、常に戀愛を斥けて戀に死んだものは、墮獄の苦を受けるものとしてゐる。「錦木」「船橋」「女郎花」等いづれもその例で、殊に親の許さぬ戀に死んだ「船橋」や、たとへ夫に對してとはいへ戀死に死んだ「砧」に於て、この樣を最も深刻に描いてゐるのである。併し夫婦愛そのものをも否定してゐるのではなく、狂女物（別項）に於ても必ず夫婦を再會せしめてゐるが、この「蘆刈」の如きは原據よりも一歩進んで、再び夫婦の樂しい家庭を作らせてゐるのである。「鳥追舟」は男性の不實と女性の寛容とを對立せしめたもので、この點「草子洗小町」に似てゐる。「藍染川」に死んだ京女を「砧」の如く地獄に墮さないで、再び蘇生させてゐるのは、三角關係に對する謠曲作者の見解を示したものともいへよう。

【參考】 謠曲評釋 大和田建樹 〇謠曲大觀 佐成謙太郎 〔佐成〕

明法博士（みやうはふはかせ） 「大學」を見よ。

妙々痴談（めう〳〵ちだん） 滑稽本 上下二册（但し前編のみ）【作者】三芝居士口授。玉虹老人編次とある。三芝居士は花笠文京である。【名稱】（役者必讀）と角書がある。文政十二年に成つた周滑平の「妙々奇談」に擬し、役者に關してゐるため、この名稱を附したのである。【刊行】天保十四年【諸本】滑稽名作集下（帝國文庫）に所收。【題材】當時の名優に關する皮肉であり、諷刺である。俎上に上つたものは、七代目市川海老藏を初め、尾上松助・中村芝翫・五代目岩井半四郎・坂東三津五郎・秀調等。

【梗概】七代目市川海老藏が、先祖才牛の百三十回遠忌並に實母の十七回忌を勤めるため、芝増上寺に行くと、五代目祖父白猿の靈が現はれて、その信心を讃めながら、年未だ若くして八代目に名跡を讓つて團十郎を繼がせし不德を詰り、且つ上方風に滲みて三座の出勤をなす事などに對して長談義をする。氣がつけば樂屋への駕籠の中の夢であつた。故人尾上松緑がこの世に姿をあらはして、孫尾上松助の吝嗇根性を叱り、役者は大氣でなくてはならぬと淺草の小綺麗な料理屋で敎訓する。松助が感謝すると松緑の姿は消えてゐた。江戸へ下つた中村芝翫は、素晴らしい人氣で深川に居住してゐた。夏の宵、庭に出てゐると老僧が來て芝翫を誘つて舟へ載せる。老僧は物故した三代目坂東彥三郎で、芝翫に愛敬・藝能について懇々と説いた。五代目岩井半四郎は子粂三郎に名を讓つて、杜若となつて隱居してゐても、女形拂底のため時々出勤してゐた。故人瀨川仙女があらはれ、女形の藝風に就いて語り、且つ將來を大に戒めた。坂東三津五郎が臨終に際して伜秀調を枕邊に呼び、慢心の愼しむべきこと、陰德の施すべきこと、謙讓の德などを細々と説いた。

【解説】構想の點から言へば、全く「妙々奇談」を踏襲したもので、諧謔諷刺を以て隱微を發き、目には見えぬ靈魂をして縱横に罵倒させるが如きは、「妙々奇談」に見える所である。「妙々奇談」の俎上の人物は當時の儒者であつたが、本書は人氣商賣の役者であつた。そこに「妙々奇談」よりも一般的な興味を惹いた所以がある。滑稽本とは言へ、一種の人物評傳であり、役者評判記の裏を搔いたものとも見られる。かうした題材によるためには、その作者も相當芝居道に明るいものでなくてはならぬ。文京は鶴屋南北の門に入つて狂言作者となり、後、梅幸（三代目菊五郎）に從つて浪花に上り、或は江戸に戻つた後も代作を業とした者であれば、芝居道に對し、又俳優達の缺點短所にも相當明るかつたと思はれる。なほ目次を見ると、「三笑五瓶等今の狂言を批評す」「四代目訥子澤村訥升が自誇を止む」「近松門左衞門中村歌右衞門梅玉が作名なる金澤龍玉を罵る」「猩々一泉が一席の狂言話」があるが、單に目次のみに終つてゐる。〔小柴〕

妙々痴談返註錄（めう〳〵ちだんへんちゆうろく） 滑稽本 二册【作者】二世烏亭焉馬【名稱】「妙々痴談」を表紙及び見返しには角書としてゐるが、本文の外題には、「役者必讀妙々痴談」としてゐる。いづれにしても、三芝居士の「役者必讀妙々痴談」（別項）に對する反駁なれば、この題名を用ひたのである。【刊行】天保四年【諸本】滑稽名作集（帝國文庫）所收。【題材】「役者必讀妙々痴談」の俎上に載せられた連中が出でて、「役者必讀妙々痴談」をいぢめるといふのである。

【梗概】七代目市川團十郎が、去春倅海老藏に名跡を讓つたが、出演を賴まれるまゝに勤め、歸宅後一睡すると、夢に「役者必讀妙々痴談」が高手小手に縛られ、初代烏亭焉馬を初め、「妙々痴談」に皮肉られた連中、並に五代目路考まで居り、「妙々痴談」を詮議してゐる。焉馬は、白猿に代つて「妙々痴談」の文中にある八代目襲名の件、地方巡業の件、その他に就

目五百九十六を集め、これを恒例諸公事篇附神事佛事・同臨時篇・私儀篇・諸公事言説篇附私儀・禁中所々名篇・人體篇・院中篇・雜物篇・衣服篇・喪服篇附雜々（車具篇・文書篇の二篇は篇名のみあつて記載がない）の十篇に分けて、諸名目の訓み方を記し、まゝ簡單な説明を下してある。明應九年姉小路濟繼の奧書には、「右一册不慮披見之間、卒寫レ之、東山左府（實熈公）自筆

者、竹田小出雲。寛保二年二月。良辨僧正縁起に似た立恕上人縁起なるものを仇討の筋に書く）と、「中元噂掛鯛」（合作者、竹本嘉藏。明和六年七月。近松の心中天網島の改作）等であるが、何れも傑作といへぬ。但し「妹脊山婦女庭訓」（別項）の花渡しの段の如き、彼の案と見える所や「手習鑑」の道明寺が彼の筆と傳へる所を以て見れば、落着いた色氣のある筆致を特徴としたかに思は

であると思はれる。かくの如く見て來ると、彼の作者としての生涯は常に表立たなかつたが、立作者としてよりも、他の場合の方が佳作を發表してゐるところから見て、複雜な構想を馳せて、そこに錯綜の妙味を漂はす底の方面は寧ろ不得手ではなかつたらうか。これに反して、限られた範圍内での美的效果を擧げる作意に得意があつたかと思はれる。一生

】四番目【作者】世阿彌（能本作者註文）とも、金春禪竹（二百十番謠目錄）ともいふ。【内容】攝津國日下の左衞門夫婦は貧のために別居してゐたが、妻（ツレ）は都に出て、さる方の乳母となり、相當の暮らしが立つやうになつたので、その邸の從者（ワキ）を連れ、難波に下つて夫を尋ねた。ところが、左衞門は散々の態となつてこの處にもゐない。折柄色々の戯れ事をいつて蘆を賣る男（シテ）が來たので、從者が女の慰みにこの男を呼んで小歌などを謠はせ、蘆を女に手渡しさせると、その男が左衞門であつた。左衞門は零落を恥ぢて逃げようとしたが、妻は引き留めた。左衞門は從者に勸められて喜びの男舞を舞つた。そして夫婦相携へて都に歸つたといふ曲。「大和物語」

て　殊に親の許さぬ戀に死んだ「船橋」や、たとへ夫に對してとはいへ戀死に死んだ「砧」に於て、この樣を最も深刻に描いてゐるのである。併し夫婦愛そのものをも否定してゐるのではなく、狂女物（別項）に於ても必ず夫婦を再會せしめてゐるが、この「蘆刈」の如きは原據よりも一歩進んで、再び夫婦の樂しい家庭を作らせてゐるのである。「鳥追舟」は男性の不實と女性の寛容とを對立せしめたもので、この點「草子洗小町」に似てゐる。「藍染川」に死んだ京女を「砧」の如く地獄に墮さないで、再び蘇生させてゐるのは、三角關係に對する謠曲作者の見解を示したものともいへよう。【參考】謠曲評釋大和田建樹○謠曲大觀 佐成謙太郎　〔佐成〕

げば樂屋への駕籠の中の夢であつた。故人尾上松緑がこの世に姿をあらはして、孫尾上松助の吝嗇根性を叱り、役者は大氣でなくてはならぬと淺草の小綺麗な料理屋で敎訓する。松助が感謝すると松緑の姿は消えてゐた。江戶へ下つた中村芝翫は、素晴らしい人氣で深川に居住してゐた。夏の宵、庭に出てゐると老僧が來て芝翫を誘つて舟へ載せる。老僧は物故した三代目坂東彥三郎で、芝翫に愛敬・藝能について懇々と說いた。五代目岩井半四郎は子粂三郎に名を讓つて、杜若となつて隱居してゐても、女形拂底のため時々出勤してゐた。故人瀨川仙女があらはれ、女形の藝風に就いて語り、且つ將來を大に戒めた。坂東三津五郎が臨終に際して伜秀調を枕邊に呼び、

「四代目訥子澤村訥升が自誇を止む」「近松門左衞門中村歌右衞門梅玉が作名なる金澤龍玉を罵る」「猩々一泉が一席の狂言話」があるが、單に目次のみに終つてゐる。　〔小柴〕

妙々痴談返註錄（めうめうちだんへんちゆうろく） 滑稽本　二册【作者】二世烏亭焉馬【名稱】「妙々痴談」を表紙及び見返しには角書としてゐるが、本文の外題には、「役者必讀妙々痴談」としてゐる。いづれにしても、三芝居士の「役者必讀妙々痴談」（別項）に對する反駁なれば、この題名を用ひたのである。【刊行】天保四年【諸本】滑稽名作集（帝國文庫）所收。【題材】「役者必讀妙々痴談」の俎上に載せられた連中が出でて、「役者必讀妙々痴談」をいぢめるといふのである。

【梗概】七代目市川團十郎が、去春伜海老藏に名跡を讓つたが、出演を頼まれるまゝに勸め、歸宅後一睡すると、夢に「役者必讀妙々痴談」が高手小手に縛られ、初代烏亭焉馬を初め、「妙々痴談」に皮肉られた連中、並に五代目路考まで居り、「妙々痴談」を詮議してゐる。焉馬は、白猿に代つて「妙々痴談」の文中にある八代目襲名の件、地方巡業の件、その他に就いて痴談に詰問し、松緑は松助に放蕩者になれと言つた點について怒り、彥三郎も芝翫に對する敎訓の矛盾を指摘する。仙女は又半四郎の事に關して一言し、「妙々痴談」をして終に謝罪せしめるに至る。

【構想】徹頭徹尾、「妙々痴談」の反駁のために作つたものである。「妙々痴談」の出づるや、事芝居道、役者に關するがため、反對や憤慨も相應あつたであらう。殊に「妙々痴談」は本書にも述べてゐる通り、藝の巧拙よりもむしろ個人攻擊の點があつた爲め一層他から反感も蒙つたであらう。二世烏亭焉馬は作者といふ立場からも一言せずにはゐられなかつたであらう。從つてその反駁辯明も理論的であるよりも感情的に流れてゐる。　〔小柴〕

名目鈔（みやうもくせう） 有職　一卷【著者】藤原實凞【別名】「禁裏仙洞小名目」「禁中名目抄」【諸本】速水房常校正の刊本がある。群書類從卷四六八所收。【解說】卷頭の自序に「夫於二我朝一、稱二名目一、多不レ當二音訓一、又相二交淸濁一、不二口傳一輙不レ可レ呼レ之、無二口傳一而呼レ之、必失レ法、自レ古至レ今、家々說々雖二區（まち）分（まち）一、能學レ之深思レ之、非レ無二一義一矣」とあつて、漸次名目の訓み方の失はれるのを歎き、この書を著はす由が書いてあり、漢字の訓み方で我が國特有の訓み方として故實となつた名目五百九十六を集め、これを恒例諸公事篇附神事佛事・同臨時篇・私儀篇・諸公事言說篇附私儀・禁中所々名篇・人體篇・院中篇・雜物篇・衣服篇・喪服篇附雜々（車具篇・文書篇の二篇は篇名のみあつて記載がない）の十篇に分けて、諸名目の訓み方を記し、まゝ簡單な說明を下してある。明應九年姉小路濟繼の奧書には、「右一册不レ慮披見之間、卒寫レ之、東山左府（實凞公）自筆也。件本草本歟、或有二篇目一不レ載二其子細一」とある。【註釋書】禁中名目抄校註一卷（速水房常）がある。　〔石村〕

美代吉殺し（みよきちごろし）「八幡祭小望月賑」を見よ。

三好松洛（みよししようらく） 淨瑠璃作者【本名】未詳【生歿】元祿九年生れか。歿年未詳。但し安永初年で、享年八十歲前後か。【閱歷】伊豫の人で、幼にして寺に入つたらしく、長じて松山城外眞言宗願成寺の住職であつたが、事故によつて、追はれて大阪に出て還俗したと傳へる。醫を業としたとか、北新堀江の茶屋の主人ともなつたとかいふが、出雲について淨瑠璃作を學び、長谷川千四（別項）等と同輩であつた。元文元年（四十歲）初めて文耕堂との合作で、「赤松圓心緣陣幕」を發表してから、明和八年十二月「櫻御殿五十三驛」に後見の名を連ねる迄、三十六年間の長い作者生活を送り、五十餘篇の作の筆を執つた。長壽の故もあるが、淨瑠璃作者中では多作家に屬する。時代物作者といふべきで、合作のみであるが、佳作も相當に見られる。淨瑠璃芝居の隆盛期から衰退期へかけて往來した作者だけに、作の方向はかなり多角的である。【作品・作風】（一）自身立作者たる作。「花衣いろは緣起」（合作者、竹田小出雲。寛保二年二月。良辨僧正緣起に似た立恕上人緣起なるものを仇討の筋に書く）と、「中元噂掛鯛」（合作者、竹本嘉藏。明和六年七月。近松の心中天網島の改作）等であるが、何れも傑作といへぬ。但し「妹脊山婦女庭訓」（別項）の花渡しの段の如き、彼の案と見える所や「手習鑑」の道明寺が彼の筆と傳へる所を以て見れば、落着いた色氣のある筆致を特徵としたかに思はれる。他の立作者との合作は年代記にも分類されて次の如くである。（二）立作者文耕堂の作。大體元文寛保年代に屬し、「敵討襤褸錦」「御所櫻堀川夜討」「行平磯馴松」「ひらがな盛衰記」「新うすゆき物語」（各別項）等が見られる。艷な時代物といへる。初めは文耕堂と二人であつたが、やがて次席作者に竹田出雲を入れた。（三）立作者竹田出雲、又は並木千柳（宗輔）等の作。延享・寛延・寶暦年代に屬し、「夏祭浪花鑑」「楠昔噺」「菅原傳授手習鑑」「義經千本櫻」「假名手本忠臣藏」「双蝶々曲輪日記」「源平布引瀧」「戀女房染分手綱」「愛護若名歌勝閧」「姬小松子日遊」（立作者、吉田冠子）「敵討崇禪寺馬場」（立作者、同上）「極彩色娘扇」（立作者、二歩堂）「由良湊千軒長者」（立作者、竹田小出雲）等（以上各別項）が名篇として擧げられる。この年代に世話物を手がけて成功してゐるところを見ると、彼の手腕の非凡なるを認めねばなるまい。（四）立作者近松半二の作。明和年中、「姻（こんれい）袖鏡」「本朝廿四孝」「太平記忠臣講釋」「三日太平記」「近江源氏先陣館」「妹脊山婦女庭訓」（以上各別項）「關取千兩幟」等の佳作がある。これ等の作に於て半二の成功した反面には、既に作者界の名實共に長老たる松洛の存在を忘れてはならぬ。即ち時代に世話に鍊磨を積んだ松洛の助力があつて完成した諸作であると思はれる。かくの如く見て來ると、彼の作者としての生涯は常に表立たなかつたが、立作者としてよりも、他の場合の方が佳作を發表してゐるところから見て、複雜な構想を馳せて、そこに錯綜の妙味を漂はす底の方面は寧ろ不得手ではなかつたらうか。これに反して、限られた範圍內での美的效果を擧げる作意に得意があつたかと思はれる。一生殆ど立作者の地位を他に讓つてゐた態度は、寧ろ己れを知るものと思ふ。【參考】道聽塗說第十五編大郷信齋○京攝戲作者考木村默翁○江戶時代戲曲小說通志雙木園主人○近代國文學の研究前島春三　〔守隨〕

御代始抄（みよはじめせう） 有職　一卷【著者】一條兼良【別名】「代始和抄」「御即位假名抄」「三知抄」【成立・由來】奧書に「依二僧宗祇所望一馳筆畢、文明十年二月日後成恩寺禪閤」とある。【刊行】寛永八年【諸本】嘉永元年板がある。群書類從四六六・故實叢書第一輯所收。【解說】御代始に於ける儀式及びその沿革を記述したもので、御讓位の事、御即位の事、御禊の行幸の事、大嘗會の事の四條より成つてゐる。寶永八年・嘉永元年等の諸版本には卷首に御即位庭上圖、大嘗會南庭上悠紀嘗殿主基嘗殿之圖、女御御入內御行粧等の諸圖を揭げてある。又群書類從本は異位重行以下十一箇條を附記し、その奧に「此抄一條禪閤御作也、重尋申候條々追書加レ之畢、宗祇」とある。又別に八條を加へて、奧に「依二種玉老人嚴命一、聊顯二累葉之家風一者也、莫二敢外見一矣、文明十一年十二月日、神道長上卜部朝臣兼俱卿」とある本もある。　〔石村〕

未來記（みらいき） 幸若舞曲（三十六番の一）一卷【作者】不詳【成立】室町期【諸本】古

板本は寛永十二年板。舞の本（上田萬年校訂）・舞の本（名著文庫）・新群書類從第八舞曲部所收。又節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを日本歌謠集成卷五近古篇に載せてある。【內容】判官物（義經傳說）。鞍馬天狗傳說。兵法傳授說話。鞍馬の奥僧正ヶ崖で夜々牛若丸が天狗を相手に兵法を習ふ熱心さに、その孝心に愛でた天狗が源平兩家の運命の未來記を語り、天狗の法を許し、助力を約し、且つ兄賴朝の憎みを買はぬやう、梶原の惡計に陷らぬ戒愼を忠告する事を作る。謠曲「鞍馬天狗」と同材であるが、これは特に豫言說話型の分子を中心としてゐる。それが所謂未來記で、「太平記」の天王寺未來記・雲景未來記、「天狗の內裏」（別項）の未來記等と同類のものである。【影響】本書からばかりではないが、未來記の構想は謠曲「沼捜」にもあるが、特に「雨月物語」（別項）の白峯の條を擧げたい。〔島津〕
【參考】近古小說新纂初輯（「天狗の內裏」考說）

未來派（みらいは）　藝術論　〔英〕 Futurism

【解說】近代イタリアを中心として發生した藝術運動の一つで、當初の運動主唱者達の感情の內には、單に藝術の範圍內での主張でなく、當時の國際間特にオーストリアに對するイタリアの政治的緊張によるイタリア國民一般の感情が反映してゐたと考へられる。彼等の間の合言葉「オーストリアをやつけろ」と云ふが如きを以て推察される。藝術上の主張としては、過去一切の藝術が古きものの追從摸倣であるに反して、未來の藝術を創造建設するといふ點にある。これこの命名が起つた所以である。繪畫上の運動に初まり、後に音樂・詩歌・戲曲等の各藝術に亙つた。繪畫上の樣式的特徵は、記憶・聯想等作家の意識の一切を同時に同一畫面に描出するといふ意圖から生ずるもので、從つて立體派と別個のものであるが、他面廣義の表現派の中に考へられるところのダヽイズムの如き主張と聯絡するものである。同存主義（シマルタンスム）とも呼ばれる。

【理論】マリネッティの未來主義第一宣言書はこの派の（一）繪畫理論の基礎と見做される。それによれば、藝術一般の目的とするところは、在來の一切の因襲的形式を打破し、激烈な速度の美を求めるところにある。而してこの時間的意識の上に立つ速度の美が、空間藝術上に特に求め難いことは當然である。從つて繪畫上にこれを表現せんとするならば、他の藝術よりもなほ一層在來の形式を破壞せねばならぬだけ、それだけ表現の問題は困難である。要するに未來派繪畫の目的は、文學・舞踊・音樂等の謂はゆる時間藝術に於て表現される速度又は運動の美を空間藝術であるところの繪畫上にも同じやうに表現しようとすることである。彼等のこの考は、吾人の實際經驗に於て空間の意識は時間の意識と截然區別し得ないものであると主張する點から來てゐる。そこで時間意識の內に現はれる一切の記憶とか聯想とか、或は音響までも描き出し、そこに對象に對する全感情を表現し得るものとする。彫刻家ボッチオニ自身の語を以てすれば、印象主義（別項）は單一の瞬間を描いたが、未來主義は多くの瞬間を描くのである。かくして彼等は觀者をして繪に對せしめるのでなく、「繪畫の眞中に置く」ことを求める。更に（二）彫刻に於ても、記憶・聯想を刻むことを試みる。在來の彫刻と異なり、單一の像でもただ一つの物象を刻むのでなく、種々の物象を刻み合せるのである。又その現實感を強調するためには、ガラス・木片・セメント・牌紙・皮・布・鏡・ブリキ板等種々な材料が用ひられる。（三）音樂上では、樂音內に實生活上の鳥の聲、或は機關の轟音、群集の噪音等が混入せしめられる。（四）文學上では、速度の美が同樣に表現されねばならぬとすることから、非限定的な言語、例へば動詞の不定法を選び、或は修辭的言語、例へば、形容詞・副詞を斥けて謂はゆる「自由な言葉」を用ひる條項を宣言實行し、加ふるに未來派繪畫の效果を應用して文字を書くのに色彩を用ひたり、形象文字を使用する。併し事實上の作品について見れば、その宣言條項の通りではない。しかし彼等の文學は一般に、否定的・破壞的・虛無主義的な思想を表明してゐる。この點は、マリネッティの戲曲「電氣人形」「法皇の專制」の如きを見れば明かである。戲曲では特に登場人物が彈丸や或は犬であつたり、或はピストルの音だけで、一言の臺詞なくして幕が終るといふ如きものもある。急激に耳目を聳動せしめるといふ效果には見るべき點がある。次に彼等の宣言書の中から、一二の言葉を擧げる。「我々の詩歌の本質的要素は、勇氣・敢行・反逆でなければならない」「從來の文學は、靜思・恍惚・睡眠を頌榮した。我々は、侵掠運動、猛烈な不眠症、二倍の速度の步調、宙返り、又は拳打拳鬪を讚美せねばならない」「我々は世界に存在する美が、一つの新らしい美、即ち速度の美に依つて豐かにされたといふことを宣言するものである」「輪廓は決して我々の眼には運動として見えない。――網膜に映ずる殘像の永存によつて運動しつつある物象は、不斷にその物象を增加する。故に疾走しつつある馬は四本の脚を有するのでなく、二十本の脚を有つてゐる。そしてその脚の運動は、三角形を構成する」「彫刻家はその思想を表現するためには、一作品中に二十種の材料を用ひても宜い」

【沿革】一九〇二年二月二十日、この派の首領とされるエヂプト生れのイタリアの詩人マリネッティ（F. M. Marinetti 1878—）は宣言十一ケ條をパリのフィガロ新聞紙に發表した。一九一〇年二月ミラノに於ける最初の繪畫展覽會。同年同月十一日、ボッチオーニ、カルラ、ルッソーロ、バルラ、セヴェリーニ以上五人による「未來派畫家宣言書」發表。一九一〇年十月十一日、プラテルラによる「未來派音樂家宣言」以後、數度の各宣言書が發せられ、又歐洲各都市で展覽會・講演が續けられ、多くの同志を得た。一九一四年大戰參加の運動を行つたが、當初からマリネッティは運動の保護者であつたと共に熱烈な主唱者であつた。遂にこの運動はロシヤにまで傳はつたのである。日本に於ても大正七八年頃から神原泰その他の共鳴者があり、數度の展覽會が催された。

【參考】*The Italian Futurist Painters.* London. 1912. ‖ Boccioni: *Pitura scultura futuriste.* Milano. 1913 ‖ Boccioni: *Manifesta technique de la sculpture futuristes.* Milano. 1912. ‖ Eddy: *Cubistand Post-Impressionism.* Chicago. 1914. ○未來派研究　神原泰　〔村田〕

見德一炊夢（みるがとくいつすゐのゆめ）　黃表紙　三册　十五丁二十二圖　【作者】朋誠堂喜三二　【畫工】署名なし。北尾重政（推定）か。【角書】「榮花程（えいぐわのほど）五十年、蕎麥價（そばのあたひは）五十錢」【刊行】天明元年、蔦屋板　【名稱】人間の榮華は粟餅一炊の夢に過ぎないと悟る「金々先生榮花夢」（別

項）に對して、よし一炊の夢にせよ、榮花を見
るだけ得だといふ意を籠めてゐる。角書は誂
へた蕎麥の來る間に、五十年の榮華を見たと
いふ筋を示してゐる。【題材】春町の黃表紙
「金々先生榮花夢」に據る。
【梗概】〔上册〕（1）淺草茅町蘆の屋の店、息
子淸太郎蕎麥を誂へにやる。（2）淺草並木夢

ての趣向である。「榮花夢」の榮華が割合に簡
單であるのを複雜にして、その種類と範圍を
擴げたこと、又うがちを細かくしたこと、そ
の他彼の作ではあつさりとした勘當をこれに
は破產とし、破產のあとの出家にまで事を運
ぶなど、細緻なのを書き替への主眼としてゐ
る。更に夢中夢の趣向は當時として珍らしか

るKの友人Yを戀して、胸の切なさをKに話
してゐた。二度目に會つたのは、私がKに連
れられて時本の離れ座敷で遊んだ晩で、あな
たは浮々して、妾、文學者大好きよ、妾、若し
男だつたらどんな苦勞をしても文學者になり
たいと思ふわといつた。私の胸は妙に波立つ
た。三度目に矢張り時本の二階で、酒がまは

それが隱されてゐて、女を思ふ男の執着や未
練が、渾然とした一個の藝術品に淨化されて
ゐる。この作品には又、くど〳〵と持つて廻
つたやうな表現もなく、すら〳〵といかにも
なだらかに全篇が統一づけられてゐる。彼は
全體から云へば主觀的作家である。そこに長
所もあれば短所もある。ところがこの作品は

未來派 みらいは　藝術論　〔英〕Futurism

【解說】近代イタリアを中心として發生した藝術運動の一つで、當初の運動主唱者達の感情の內には、單に藝術の範圍內での主張でなく、當時の國際間特にオーストリアに對するイタリアの政治的緊張によるイタリア國民一般の感情が反映してゐたと考へられる。彼等の間の合言葉「オーストリアをやつつけろ」と云ふが如きを以て推察される。藝術上の主張としては、過去一切の藝術が古きものの追從摸倣であるに反して、未來の藝術を創造建設するといふ點にある。これこの命名が起つた所以である。繪畫上の運動に初まり、後に音樂・詩歌・戲曲等の各藝術に亙つた。繪畫上の樣式的特徵は、記憶・聯想等作家の意識の一切

ことである。彼等のこの考は、吾人の實際經驗に於て空間の意識は時間の意識と截然區別し得ないものであると主張する點から來てゐる。そこで時間意識の內に現はれる一切の記憶とか聯想とか、或は音響までも描き出し、そこに對象に對する全感情を表現し得るものとする。彫刻家ボッチオニ自身の語を以てすれば、印象主義（別項）は單一の瞬間を描いたが、未來主義は多くの瞬間を描くのである。かくして彼等は觀者をして繪に對せしめるのでなく、「繪畫の眞中に置く」ことを求める。更に(二)彫刻に於ても、記憶・聯想を刻むことを試みる。在來の彫刻と異なり、單一の像でもただ一つの物象を刻むのでなく、種々の物象を刻み合せるのである。又その現實感を强調す

ものもある。急激に耳目を聳動せしめるといふ效果には見るべき點がある。次に彼等の宣言書の中から、一二の言葉を擧げる。「我々の詩歌の本質的要素は、勇氣・敢行・反逆でなければならない」「從來の文學は、靜思・恍惚・睡眠を頌榮した。我々は、侵掠運動、猛烈な不眠症、二倍の速度の步調、宙返り、又は拳打拳鬪を讚美せねばならない」「我々は世界に存在する美が、一つの新らしい美、即ち速度の美に依つて豐かにされたといふことを宣言するものである」「輪廓は決して我々の眼には運動として見えない。――網膜に映ずる殘像の永存によつて運動しつつある物象は、不斷にその物象を增加する。故に疾走しつつある馬は四本の脚を有するのでなく、二十本の脚を

日本に於ても大正七八年頃から神原泰その他の共鳴者があり、數度の展覽會が催された。【參考】*The Italian Futurist Painters.* London. 1912. ‖ Boccioni : *Pitura scultura futuriste.* Milano. 1913 ‖ Boccioni : *Manifesta technique de la sculpture futuristes.* Milano. 1912. ‖ Eddy : *Cubistand Post-Impressionism.* Chicago. 1914. ○未來派研究　神原泰　〔村田〕

見德一炊夢 みるがとくいつすゐのゆめ　黃表紙　三册　十五丁二十二圖　【作者】朋誠堂喜三二　【畫工】署名なし。北尾重政（推定）か。【角書】「榮花程五十年、蕎麥價五十錢」【刊行】天明元年、蔦屋板　【名稱】人間の榮華は粟餠一炊の夢に過ぎないと悟る「金々先生榮花夢」（別項）に對して、よし一炊の夢にせよ、榮花を見るだけ得だといふ意を籠めてゐる。角書は誂へた蕎麥の來る間に、五十年の榮華を見たといふ筋を示してゐる。【題材】春町の黃表紙「金々先生榮花夢」に據る。

【梗概】〔上册〕(1)淺草茅町蘆の屋の店、息子清太郎蕎麥を誂へにやる。(2)淺草並木夢商ひ榮華屋の店先、客が邯鄲の枕を借りに來てゐる。(3)二人の客夢を買つて見てゐる。三十二文の客の夢は舟饅頭、十六文の客の夢は芝居の一ト切。(4)四文錢一本の客の夢、吉原の遊び。(5)銀百匁の客の夢、祝言の夢と花嫁に死なれて女中を口說く夢。(6)清太郎千兩の客となつて、五十年の榮華を見ようとする。〔中册〕(7)清太郎二十歲、江島遊び。(8)清太郎京の祇園の遊び、大勢の白人を剃下奴にした踊の趣向。(9)同じく京の遊び、江戸三座の役者を呼び寄せてゐる。(10)清太郎三十一歲、長崎で唐人に就いて書道の稽古。(11)三十七八歲、唐土の遊興。(12)江戸の通な遊び。(13)俳諧の運座。(14)五十歲、素人狂言、清太郎道成寺を舞ふ。(15)能。清太郎は「邯鄲」のシテ盧生を演ずる。(16)茶の湯。〔下册〕(17)清太郎七十歲、我が家懷しく歸路に就く。(18)蘆の屋の家督をうけたもとの手代代二、清太郎を死んだものと思つて五十年の法要を營んでゐる。(19)蘆の屋の座敷、大勢の者が代二を對手に清太郎の遊興費の貸を催促してゐる。(20)蘆の屋の破產、歸宅した清太郎恐縮してゐる。(21)清太郎と代二と坊主になつたと思ふ途端、清太郎の夢さめる。もとの店先、代二は帳場で帳合してゐる。清太郎呆れてゐる。(22)蕎麥の誂へが來る。【構想】すべて「金々先生榮花夢」を下に据ゑての趣向である。「榮花夢」の榮華が割合に簡單であるのを複雜にして、その種類と範圍を擴げたこと、又うがちを細かくしたこと、その他彼の作ではあつさりとした勘當をこれは破產とし、破產のあとの出家にまで事を運ぶなど、細緻なのを書き替への主眼としてゐる。更に夢中夢の趣向は當時として珍らしかつたらう。作者はその趣向のために、清太郎を蕎麥の誂へにやる、すぐに寢るといふ運びをつけなかつた。(15)の「邯鄲」の能のところで、「盧生は夢さめて」と書き込んで、こゝで夢が覺めたかと思ひの外、まだ夢の續いてゐる點が、或は得意の趣向であつたらう。【史的地位】「金々先生榮花夢」の摸倣であることはいふまでもないが、彼の大まかな手法にかへて、細かい趣向や筆致、又さし繪も彼の作のより寫實がかつた點に、時代好尙の推移が見られる。出版當時の推稱もその點にあつたやうである。黃表紙の評判記「菊壽草」で立役極上上吉の位附になつたのもそのためである。この作は「榮花夢」の後を追ふと共に「榮花夢」の原に溯つて邯鄲の枕の故事にまで還つたのであるが、その二筋を合せて趣向とすることは、寬政三年板、京傳作の「盧生夢魂其前日」などの先蹤をなすものである。　〔山口〕

未練 みれん　小說　【作者】近松秋江　【發表】大正六年二月、雜誌「新公論」【刊行】大正六年六月、春陽堂。

【梗概】戀してゐる女に、或る誤解から捨てられた男の未練がましい氣持を、男が一人稱で述べたもの。――私は今日まで隨分多くの女を戀し惚れもしたが、あなたほど私が身も心も打ち込んだ女は一人もない。Kの家で私があなたに初めて會つた時、あなたは詩人であるKの友人Yを戀して、胸の切なさをKに話してゐた。二度目に會つたのは、私がKに連れられて時本の離れ座敷で遊んだ晩で、あなたは浮々して、妾、文學者大好きよ、妾、若し男だつたらどんな苦勞をしても文學者になりたいと思ふわといつた。私の胸は妙に波立つた。三度目に矢張り時本の二階で、酒がまはつてほんのり私の頰が赤くなつた頃、あなたは湯上りの薄化粧の頰を薔薇色の花のやうに美しく氣高くして現はれた。妾はもうYさんを諦めたわ、これからはあなた相談相手になつて頂戴よといつた。私は嬉しく承知した。併しあなたは私を愛してくれるのかどうなのか、はつきり分らなかつたので、或る夜あなたは私をどう思つてゐるかと訊ねた。あなたは妾なんかに惚れてはいけません、妾は男に惚れると、その男に服從してゐるのが嫌ひで、どこまでもその男を自由にしたいのよ、妾はあなたの奥さんにとはいひませんが、私が素人になるまで奥さんを持たずにゐて下さいねといつた。私はそれを誓つた。そしてその夜、私とあなたは離れ難い關係を結んだのだつた。併しKが私たちの仲に水をさして、私が近いうちに奥さんを貰ふといふやうな出鱈目をあなたに話したので、あなたは私を捨ててしまつた。私は眞實を示さうと思つたが、それに要する金を調達することが出來なかつた。それどころか、私は私自身食ふことにも困つてゐた。今は北海道の果に漂浪してゐる。あなたは私を惡しざまにいつてゐるさうだが、私はあなたを心から愛してゐる。私にはあなたに對して未練がある。

【批評】比較的生な實感味が濃厚に出てゐるのが、彼の他の作品の特色であるが、これにはそれが隱されてゐて、女を思ふ男の執着や未練が、渾然とした一個の藝術品に淨化されてゐる。この作品には又、くど／＼と持つて廻つたやうな表現もなく、すら／＼といかにもなだらかに全篇が統一づけられてゐる。彼は全體から云へば主觀的作家である。そこに長所もあれば短所もある。ところがこの作品は題材の點では素より主觀的なものであるが、非常に客觀的に優れたものになつてゐる。この意味で本篇は、彼の作品中、異色のあるものとして見るべきであらう。　〔宮島〕

三輪 みわ　「神事物の謠曲」を見よ。

三輪式神婚說話 みわしきしんこんせつわ　神話　【解說】三輪山型說話とも呼ばれる。(一)男性の神が蛇その他の動物の形をとつて女性の人間に婚を求むること、(二)男は夜のみ來て晝は見えないこと、(三)女がその素性を探るために、綵をつけた針を男の衣に刺すことを話根として成り立つてゐる說話を云ふ。這般の內容を持つ說話が三輪の大物主神について物語られる故、これを代表としてこの種の說話群の名としたのである。この型の說話は、古くは「古事記」「土佐國風土記」に現はれ、近くは「源平盛衰記」「平家物語」「神社考」等に載つて居り、又民間の諸家の祖先譚として諸地に見出される。恐らく本來は民間說話であつたらう。もし綵と針との話根を除去したならば、數千年の昔から世界の諸民族の間に傳承せられてゐると云ふことが出來る。綵と針との話根を含むもの、即ち完全な三輪式神婚說話と雖も、決して日本內地だけの所有ではない。沖繩縣宮古島にも漲水御嶽辨財天女の傳說として傳承せられ、朝鮮にも「三國遺事」に百濟の甄萱の傳として擧げられ、また咸鏡北

道の廣積寺及び豆滿江畔會寧附近に語られてゐる。「三國遺事」の記述には、「又古記云、昔有二一富人一、居二光州北村一、有二一女子一、姿容端正、謂レ父曰、毎有二一紫衣男一、到レ寢交婚、父謂曰、汝以二長絲一貫レ針刺二其衣一從レ之、至レ明尋二絲於北墻下一、針刺二於大蚯蚓之腰一、後因姙、生二一男一、年十五自稱二甄萱一」とあり、而して甄萱のその後の英雄的行動にも說き及んでゐる。夜毎に訪れて來たものが、神格ではなくて一の蚯蚓であるといふ事實に注意しなくてはならぬ。それから支那にも完全な型の三輪式神婚說話が見出される。唐張讀編「宣室志」に曰く、白衣の青年が夜毎平陽の張景の女の許に訪れ、天明に先だつて姿を隱すので、女は父の敎に從つて、その末に縷を貫いた一金錐を竊に項に刺すと、男は驚いて逃げ去つた。翌日縷を便りにして尋ねると、近くの古木の下の穴に一尺餘の蠐螬が項を貫かれてゐるのを見出してこれを殺したとある。これも對手は神ではない。又全體の內容は少し異なつてゐるが、絲と針との話根を含む說話としては、死靈が或る處女に憑いた時、牧師の助言によつて績苧をその男のボタンに結びつけたといふ說話が、南方スラブ民族の間に見出され、また吸血鬼が夜毎處女を訪うて鷄鳴を聞くと去るので、一夜絲をつけた針を背に刺し、それを傳つて行くと、或る墓に異樣の男が坐つてゐたといふ說話が、ジプシイ族の間に傳承せられてゐる。(Krauzs, F. S. Sagen und Märchen der Südslaven, vol. I. P. 293 ; Groome, F. H. : Gypsy Folk-tales, P. 14—18.) これ等の說話を比較すると、（一）說話に現はれる男性には、純粹な神格とせられるものと、怪しい動物とせられるものとがある。（二）男女の夜の交會を說くことを物語の中核とするものと、生兒の出立とその後の活動とを說くことに力點を置くものとがあることを知る。發生的に云へば、怪しい動物を主人公としたもの即ち怪婚說話は、未だ神を主人公としたもの即ち神婚說話にまで發達しないより原始的な形式であらう。兩者はまさしく低級說話と高級說話との發生的關係を示してゐる。次に婚姻說話の面目を有するものと英雄說話の趣を備へるものとの關係については、前者を以て後者よりも本原的な形相に近いものとしたい。又同時に生兒の活動を說くことよりも、奇怪な男女の交會を說くことが本來の意圖であつたと考へたい。

【參考】日韓に分布する三輪山的傳說に就て　鳥居龍藏（東亞之光七ノ七）○日韓共通の民間說話　高木敏雄（東亞之光七ノ十一）○三輪山式神婚傳說　松村武雄（鄕土研究二ノ二）　〔松村〕

三輪神道　みわしんたう　「兩部習合神道」を見よ。

眠雲札記　みんうんさつき　隨筆　二卷　【著者】朝川鼎　【刊行】嘉永五年　【解說】儒家の漢文隨筆で、泉澤好・小林道彰の所校。支那の古典に對する所懷、知名人物の評論、字義その他の雜項を載す。孝子定五、阿富勦賊、仙太復讐の如き、日本人の節義談も交つてゐる。附錄として文章書式四則がある。卷一に古文尙書、今文尙書、孔安國序以下二十七條、卷二に太甲繼祖、殷人改元、論樂毅、論王介甫以下三十五條を收めてゐる。嘉永五年小笠原長若（明山）の序、無年紀羽倉用九、嘉永五年勝野正道の跋がある。【著者小傳】朝川鼎、字は士修。通稱晉四郞、號は同齋。碩儒善庵の義子。加賀の人。本姓橫江氏。儒業を善庵に受け、後、その女婿となり、肥前松浦侯に仕へた。書は市河米庵門でその堂に入つた。安政四年十月二十二日歿す。享年四十四。なほ「征韓實記」「尙書古今文管窺」等の著述がある。　〔和田〕

民間說話　みんかんせつわ　「民譚」「傳說」を見よ。

岷江入楚　みんがうにふそ　註釋書　【著者】中院通勝　【名稱】入楚は「につそ」とも、「じつそ」ともよまれる。命名の由來は、自序に「山谷先生が詩にいへらく、岷江初濫觴、入楚乃無底と。彼奧入はまことに岷江の初といふべきにや。今此抄の楚に入つて底なきがごとくなるは、世くだり、人の心おろかにして、はかなきふしまでをもらさず註釋せんとするがゆゑなり。（中略）時に慶長三の年みな月の中の九日、也足の東軒にしてしるしをはりつゝ、」とあり、幽齋の跋に「余乃題以岷江入楚矣」とあるから幽齋の命名せしものであらう。又別に「源氏註抄」と題した二十冊の本が南葵文庫にある。【卷冊數】自序に「五十五帖になしぬ」とあり、幽齋の跋に「畢二五十五帖一」とあるから、五十五卷五十五冊である。現存諸本には、この外に或は二十冊、或は三十冊、或は三十五冊或は五十四冊等に分けるものもある。しかして五十五冊中、帚木を二冊に分け、雲隱を匂兵部卿宮に合綴したる系統の本と、帚木を一冊とし、雲隱を別冊としたる系統の本とがある。【成立】自序によれば、幽齋はもと「源氏物語」の諸註を集成すべき素志があつたが、その暇なく、たまたま通勝が勅勘を蒙つて弃り、幽齋のもとに身をよせたので、つひに幽齋の委託を受け、さきに三光院（實枝）の講筵に侍つた際の聞書をもととして、苦心十年にして本書を成し、舊註師說を集成して自說を加へ、五十五帖とした。慶長三年六月十九日、幽齋六十五歲、通勝四十一歲の時であつた。【諸本】「群書一覽」に、「料紙半面十六行に書きつめたるを善本とす。又此書に、竹田本・伏見本といふあり。首に橫に書入あるもの也」とある。京都帝國大學所藏の殘缺四帖（空蟬・夕顏・末摘花・紅葉賀）は、通勝自筆か、又はそれに近い本と稱せられる。この稿筆者藏の一本は、也足軒（通勝）自筆の本をもつて書寫して中の奧書ある本をもつて校合した本で、その校合の部分は、前記京大本と同一である。神宮文庫・宮內省圖書寮等にもこの系統と思はれる本があるが、三條西伯爵家藏の古寫本は、奧に寬永二十年、參議飛鳥井雅章が、也足自筆本を以て、自ら全部を書寫せし由の自筆の奧書と花押がある。これ等の本は、今は散佚した中院家所傳の原本の面影を最も完全に傳ふるものである。流布諸本に比するに出入異同甚だ多く、一般に註釋詳細で、且つ正確である。宮內省圖書寮の一本は、寬永頃の書寫と思はれ、三條西家本につぐ善本である。現存諸本は、右の如き中院家本の系統と思はるゝ本と、流布本と、その中間にある本との三種があり、これ等三種に屬する傳本甚だ多く、一々枚擧に遑がない。國文註釋全書所收。【內容】本書は「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」、公條の「祕抄」（細流抄）、實枝の「箋」、實枝よりの聞書（箋とは少しく異なる）、公條の說を引いた或る抄などの說を中心とし、著者自らの今案を加へ、稀れに「仙源抄」「孟津抄」などの說を抄出し、「源氏物語」の全部に亙つて詳細なる諸註の集成を試みたものである。先づ卷頭には假名の自序があり、次いで（一）光源氏物語事、（二）作者事、（三）時代、（四）物語之起、

（五）大意、（六）文體等之事、（七）物語時代之准據、（八）光源氏准據并模行迹事、（九）故人此物語稱美事、（一〇）諸本不同、（一一）諸抄（一二）此抄ニ引ク所ノ肩付、（一三）光源氏物語題號、（一四）物語之心詞用ニ和歌ニ作例、（一五）卷々之名事、（一六）河海抄序、（一七）花鳥餘情序、（一八）祕抄序、（一九）年立序等、「源

は云ふまでもなく、著者自身の註釋は妥當なるもの多く、詳細深切であるが、本書中三光院の箋（山下水とも云ふ）と著書が三光院より受けた講義の筆記とを所々に抄記せるを以て、これ等の原本の面目を察知する上に重要なる資料となる。「明星抄」は「細流抄」を修補したもので、これによつて實枝の自說をうかがふ

ーランの民衆演劇論の如きは、その代表的なものである。（プロレタリア文學・プロレタリア演劇參照）　〔村田〕

【參考】R. Rolland : *La Théatre du Peuple.* ‖ Mielke : *Volkskunst.* ‖ Hue : *L'art populaire.* ○民衆藝術　大杉榮譯

民衆派　みんしゆうは　詩派　【名義】民衆派といふ名稱は、甚だ不明確なものであるが、雜誌

頌）・加藤一夫・井上康文等であるが、この一派の人々は必ずしもデモクラシーの代辯を詩句によつてなしたのではなく、そこには舊き人道主義的傾向も、自由主義も、自然主義的大地主義・重農主義・鄉土主義等をも含有してゐるのである。福田正夫は、大正七年に小田原で雜誌「民衆」を發行し、百田宗治は「民衆」發刊前、大阪で個人雜誌「表現」を發行し、そこで

神ではない、又全體の內容は少し異なつてゐるが、絲と針との話根を含む說話としては、死靈が或る處女に憑いた時、牧師の助言によつて績苧をその男のボタンに結びつけたといふ說話が、南方スラブ民族の間に見出され、また吸血鬼が夜每處女を訪うて鷄鳴を聞くと去るので、一夜絲をつけた針を背に刺し、それを傳つて行くと、或る墓に異樣の男が坐つてゐたといふ說話が、ジプシイ族の間に傳承せられてゐる。（Krauzs, F. S. Sagen und Märchen der Südslaven, vol. I. P. 293 ; Groome, F. H. : Gypsy Folk-tales, P. 14—18.）これ等の說話を比較すると、（1）說話に現はれる男性には、純粹な神格とせられるものと、怪しい動物とせられるものとがあ

眠雲札記 さつき　隨筆　二卷【著者】朝川鼎【刊行】嘉永五年【解說】儒家の漢文隨筆で、泉澤好・小林道彰の所校。支那の古典に對する所懷、知名人物の評論、字義その他の雜項を載す。孝子定五、阿富動賊、仙太復讐の如き、日本人の節義談も交つてゐる。附錄として文章書式四則がある。卷一に古文尚書、今文尚書、孔安國序以下二十七條、卷二に太甲繼祖、殷人改元、論樂毅、論王介甫以下三十五條を收めてゐる。嘉永五年小笠原長若（明山）の序、無年紀羽倉用九、嘉永五年勝野正道の跋がある。

【著者小傳】朝川鼎、字は士修。通稱晉四郞、號は同齋。碩儒善庵の義子。加賀の人。本姓橫江氏。儒業を善庵に受け、後、その女婿と

冊數】自序に「五十五帖になしぬ」とあり、幽齋の跋に「畢二五十五帖一」とあるから、五十五卷五十五冊である。現存諸本には、この外に或は二十冊、或は三十冊、或は三十五冊或は五十四冊等に分けるものもある。しかして五十五冊中、帚木を二冊に分け、雲隱を匂兵部卿宮に合綴したる系統の本と、帚木を一冊とし、雲隱を別冊としたる系統の本とがある。【成立】自序によれば、幽齋はもと「源氏物語」の諸註を集成すべき素志があつたが、その暇なく、たま〳〵通勝が勅勘を蒙つて奔り、幽齋のもとに身をよせたので、つひに幽齋の委託を受け、さきに三光院（實枝）の講筵に侍つた際の聞書をもととして、苦心十年にして本書を成し、舊註師說を集成して自說を加へ、五

省圖書寮の一本に、實枝の書寫と思はれ、三條西家本につぐ善本である。現存諸本は、右の如き中院家本の系統と思はるゝ本と、流布本と、その中間にある本との三種があり、これ等三種に屬する傳本甚だ多く、一々枚擧に遑がない。國文註釋全書所收。

【內容】本書は「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」、公條の「祕抄」（細流抄）、實枝の「箋」、實枝よりの聞書（箋とは少しく異なる）、公條の說を引いた或る抄などの說を中心とし、著者自らの今案を加へ、稀れに「仙源抄」「孟津抄」などの說を抄出し、「源氏物語」の全部に亙つて詳細なる諸註の集成を試みたものである。先づ卷頭には假名の自序があり、次いで（一）光源氏物語事、（二）作者事、（三）時代、（四）物語之起、（五）大意、（六）文體等之事、（七）物語時代之准據、（八）光源氏准據并模行迹事、（九）故人此物語稱美事、（一〇）諸本不同、（一一）諸抄（一二）此抄ニ引ク所ノ肩付、（一三）光源氏物語題號、（一四）物語之心詞用ニ和歌ニ作例、（一五）卷々之名事、（一六）河海抄序、（一七）花鳥餘情序、（一八）祕抄序、（一九）年立序等、「源氏物語」の總說を記し、多く舊說をあげ、自說をも加へてゐる。この條項の順序は、流布本は（一二）（一）（二）（三）（四）（五）（六）（七）（八）（一一）（一〇）（九）（一三）（一四）（一六）（一七）（一五）で、（一八）（一九）は全然脫落してゐる。恐らく原本に、これ等の項目が一葉毎に記されたるが、轉寫の際に錯亂したのであらう。右總說のうち、準據說に關しては前人未言の新說を出し、物語の後世文學に與へたる影響に關して「河海抄」に增補し、又三條西家祕抄の序文を揭ぐるなど、注目すべき記述が多い。註釋は先づ卷の初めに、一條兼良の「源氏物語諸卷年立」を各卷に分つてかかげ、本文は全文をあげずして要語のみを摘出し、これに諸註師說並に自說を記してゐる。本文は大體靑表紙本を用ひ、稀れに河內本を參考し、三條西家本をも引いてゐる。舊說をあぐる際には、必ず、河・花・弄・祕・箋・或抄など肩に略號を附し、自說には「私」又は「私勘」等の略號を附してゐる。通勝の私說はおほむね穩健妥當であり、中には鑑賞批評に亙れる評論もある。卷尾には「奧入」「河海抄」「花鳥餘情」「弄花抄」「年立」等の奧書を收め、最後に幽齋の跋がある。【價値】本書は、「源氏物語」諸註集成の目的をもつて成された註釋書のうち最大のものであつて、源語研究史上特筆すべき著述である。諸註を一覽の下に比較する便利は云ふまでもなく、著者自身の註釋は妥當なるもの多く、詳細深切であるが、本書中三光院の箋（山下水とも云ふ）と著書が三光院より受けた講義の筆記とを所々に抄記せるを以て、これ等の原本の面目を察知する上に重要なる資料となる。「明星抄」は「細流抄」を修補したもので、これによつて實枝の自說をうかがふ事は出來ないが、「箋」と通勝の「聞書」とは、直ちに實枝の說を示すものである。本書に引用するところ、桐壺より明石までは、箋と「聞書」との兩者を用ひ、若菜下より宇治十帖までは聞書のみ、澪標より若菜上までは箋のみを用ひてゐるらしい。これ等によつて、三光院の說を知ることが出來、「箋」及び「聞書」の面目を推察することが出來る。その他、三條西家祕抄の序文を收めたのは、「細流抄」との比較研究に一資料を提供するものである。かく本書は、註釋そのものとしては勿論、研究史の資料としても價値多き著述である。

【參考】國文學研究史野村八良〇古註の集成—岷江入楚同上（國語と國文學二ノ一〇）　〔池田〕

民衆藝術（みんしゆうげいじゆつ）　藝術論〔佛〕L'art du Peuple.〔獨〕volkskunst.【解說】民族（或は民俗）藝術（別項）と名稱を區別された民衆藝術といふは、特に近世の社會主義思想の上から主唱されたところのもので、民衆即ち社會生活の下層階級無產者のために作られたところの新な感情、新興の社會的思想を表現した藝術を一般に指す。蓋し有產階級のためにそれ等の中から作られた藝術に對する一種の反動的傾向の藝術で、從つて藝術美の觀念乃至藝術觀上の基本的相異の上に規定されたところのもの。演劇の上に特に活潑に主張され、又具體的に創作されたものが多い。ロマン・ローランの民衆演劇論の如きは、その代表的なものである。（プロレタリア文學・プロレタリア演劇參照）　〔村田〕

【參考】R. Rolland : *La Théâtre du Peuple.* ‖ Mielke : *Volkskunst.* ‖ Hue : *L'art populaire.* ○民衆藝術 大杉榮譯

民衆派（みんしゆうは）　詩派【名義】民衆派といふ名稱は、甚だ不明確なものであるが、雜誌「民衆」がこの派の運動を詩壇的に認識せしめた事にも原因してゐる。詳しく言へば寧ろ民主主義思想の詩派である。【解說】大正六・七年頃から思想界・文壇を通じてデモクラシーの思潮が論議され、文壇には民衆藝術といふが如き主張が現はれた。この主なる原因は世界戰爭直後、米國大統領ウイルソンによつて唱道された國際聯盟や民主主義（デモクラシー）の新たな提議により、歐洲大戰が獨墺の軍國主義・帝國主義に對して、聯合協商國側の平和主義・民主主義が前者を覆滅せしめたものとし、オートクラシーに對するデモクラシーが世界の輿論となり、民族自決や小國勃興が、各々の民意を代表する團體主義を以て政治に思潮に表はれ來る傾向が見えたが、我が國の民主的思想も、吉野作造その他の人々によつて論壇に喧しくなり、ついでロシアの革命からマルクス主義や社會主義・無政府主義・サンヂカリズム・ボルセヴィズム等、社會運動・勞働運動に關する西歐思潮の紹介、啓蒙の運動が我が國に盛んになつた。その導火線ともいふべきものにこのデモクラシー思想がある。文壇の民衆藝術（別項）の主張はそれであり、詩壇の所謂民衆派もその派生的現象と見ることが出來る。この一派の中に目さるゝ人々は、百田宗治・福田正夫・富田碎花・白鳥省吾（各別項）・加藤一夫・井上康文等であるが、この一派の人々は必ずしもデモクラシーの代辯を詩句によつてなしたのではなく、そこには舊き人道主義的傾向も、自由主義も、自然主義的大地主義・重農主義・鄕土主義等をも含有してゐるのである。福田正夫は、大正七年に小田原で雜誌「民衆」を發行し、百田宗治は「民衆」發刊前、大阪で個人雜誌「表現」を發行し、そこでホイットマンの詩によつて示唆された散文的な自由詩によつて民主的思想を謳ひ、それに富田碎花や白鳥省吾も時々寄稿した。加藤一夫は「科學と文藝」によつて、所謂民主的思想の詩を發表してゐたが、彼には多大に人道主義的自由主義的色彩が濃厚で、その民衆藝術の主張も一時文壇の喧噪を呼び起し、論旨にやゝ明瞭を缺いたことが非難をも買つた。富田碎花はエドワルド・カアペンタアを紹介し、その「民主主義の方へ（ツワーヅデモクラシー）」を飜譯した。ついで福田正夫・白鳥省吾等は、ホイットマンの使徒トラウベルを紹介し、その「オプチモス」を抄譯した。かくて、ホイットマン、カアペンタア、トラウベルの民主的思想の詩が彼等の詩の背後にその示唆ともなり後援ともなつた。が、ホイットマン的民主主義は百田宗治に最も濃厚であり、福田正夫は寧ろ重農的に、又浪漫的に、白鳥省吾は自然的大地主義に、富田碎花はカアペンタアの影響が深く哲學的思辨をその詩の中に藏してゐた。正夫には「農民の言葉」、宗治には「ぬかるみの街道」、省吾には「大地の愛」、碎花には「地の子」、加藤一夫には「民衆藝術線」の如き詩集及び論集が出た。ホイットマンの「草の葉」も碎花により譯された。これ等が、所謂民衆派の詩的活動であつた。が、彼等の詩がその思潮に於て所謂デモ

クラシーを表出したと同時に、その形式に於てホイットマン的な散文的詩風を唱道したことに於て、その詩の藝術的側面に對する審美上の非難が諸方から起つた。後年、北原白秋は彼等の詩を「散文なり」と斷じ、わざ〳〵散文に行をかき換へたりして非難したこともあつた。〔川路〕

民俗學（みんぞくがく）【解說】民俗學は、或る一國に於て偶然發達したものでない。それが學となる以前、既に各國に於て、その素地は用意せられてゐた。その意味に於て、現今でもまだその學問としての組織の、不十分な國々もあるやうだ。又民俗と民俗を對象とする學問の區劃すら、はつきりせぬものすらある。かうして出來た民俗學は、發生に於て偶然性があると共に、それが自らにして統一せらるべき必然性を持つてゐる譯である。それだけに又、國々で別々に、民俗學に近い內容を持つた「學」と「學名」を持つて來たにしても、今の處、到底細部に至るまで、一致してゐると見られぬ所の個性を著しく持つてゐるやうである。國々によつて、學そのものに個性があると同時に、勿論、民俗學の對象たる民俗自身、研究の結果導かれて來た普遍性の上に、又深い個性を含んでゐることは考へられる。この二つが、この學問の出發點に於ける根本的の立場とならねばならない。民俗學は、從來の好事的享樂、或は好古的採集を出發點として、漸く無形抽象的なものに傾いて行つた蒐集物の上に、單に奇怪であり、驚異であるといふ事の外に、なほある徹底した理論を見出さうとする希望が、當然にして起り、或は達成した學問であり、又まだその道程にある所の方法でもある。さうして單なる物である事を最後とする好古的なものに對して、その物を通して、物に關聯した習俗を思はしめ、又習俗自身であるものは、その分類、序列的配置が、その發生の理由を思はしめるやうなものを持つてゐるのであつた。だから、その統一精神として、新しい理論を與へたものは人類學であつた。言ひかへれば、個性的な人類學方法を以てする好事學であつた。當然の歸結として、これは人種學の精神的偏向を著しくしたものと言ふ形をとつて來た。その點に於て、民俗學といふよりも民族學と稱する事の適切なることを主張する人々が多い譯だ。民族學といふ形式から言へば、民族精神發生學と云つて、その半分は盡せるかも知れぬ。が、ただその低意識狀態に止まつてゐるものであり、突發的に發揚するものでなく、週期的に而も或る責任感を伴ふものでなくてはならない。でなくては、單なる道德・宗敎なども、その中に入つて來ねばならぬ。低意識であつて、潛在意識ではあるが、突發するものではない。突發は飛躍である。のみならず、これ等によつて文學が民俗化することもある。必ずしも文學ばかりでない。飛躍して一つの社會精神生活の規範となるまでの期間を、娛育せられてゐるものと言ふことが出來る。民俗が民俗である事のためには、週期的なることを要するのは、舊時の宗敎が、成立時代の宗敎と性質を異にしてゐるからの事である。週期的に出現する神に對する誓約を履行する事によつて曆日が考へられ、祭禮を行ふやうになり、祭時を完全に經過する方法としての儀禮や傳承詞章や禁忌などが、すべての傳承の基となる。同時に、古代社會に於ける急激な變化と、社會人の頑固な保守とが、傳承を不具ならしめる。そこに民間に傳承せられる精神現象の雜多化と豐滿な忘却とを齎した。さうした殘り具はつたものが民俗であり、民間傳承である。これを對象とする學問が民俗學であり、又は民間傳承學と稱せられるものである。

【民俗學と國文學】民俗學の、文學との交涉は、極めて僅かな點である。それが如何に日本的であり、また日本に關聯してゐるかといふ點を第一として、日本文學に現はれた民俗的事項の解說を試みる所にあると思ふ。だが實際について言へば、單にそれだけでも簡單な事ではない。こゝには、この分擔の性質上、日本民俗學―と謂ふべき―のどうした項目を文學の上に注意し、關聯させながら、文學史及びその形態發生史を考へて行かねばならないかといふ事に止めねばなるまい。

【日本文學の發生】文學の發生及び維持は、それが言語傳承としての意味に於て遂げられるのだから、第一に、民俗或は民間傳承としての過程を經たことは勿論である。それと同時に、その技巧が次第に傾向を生じて來るのも、傳承の力によるのである。こゝには、全人類の原始的民俗形態を考へる必要もなし、又さうした空想に似たことが、狹い日本民俗を通じて實現せられることでもない。だから、それに觸れるにも及ばないが、なほ考へると、その研究種目の部分には、非常に關聯するものが多い。結局、私の考へ得た―多分後來變らぬだらうと思はれる部分―だけを以て、これに答へる外はないと思ふ。

日本人の持つ文學の故鄕は、同時に日本人の祖靈の集注處と信仰せられた常世（とこよ）の國であつた。それから持ち來されたものが、この土の呪詞（ことひごと）である。その發表方法によつて宣下式なのが、のりと（宣處詞（のりとごと）の略）、奏請式のが、よごと（奏壽詞（よごと））と岐れて來た。更にそれが敍事詩的內容を胚むやうに進んだ。それが卽ち物語である。物語とは恐らく精靈（もの）の語りの義である。かたるとうたふとは、日本歌謠史或は技術上の二つの軌範で、うたふは愁訴哀願を主題とするもの、卽ち抒情詩詞の演奏を示すことと云つてゐる。かたるは權威を持つて對者の靈を感染せしめる―かたる・かたらふ―誘惑力ある詞章を述べる方法を言ふので、內容的には敍事的であり、音樂的には律の變化の少い方法である。かうして呪詞から祝詞が出で、壽詞（よごと）が生れる。又轉じて敍事詩ともなる。それ等の詞章の中に、更にそのエッセンスとも謂ふべき部分が強く感じられて來る。それを以て、全詞章を代表させる習慣が、遂には全然詞章から獨立すると言つた有樣を導き、詞章そのものが亡びて、それだけが殘ると謂つた形を採ることになつた。その呪詞から出たものは、「諺」となり、敍事詩から脫落した部分は、「歌」の初めをなしてゐる。

【文學と民俗と】文學と民俗との關聯は、この點からはじまる。卽ち言語傳承が、民間傳承の重要なものとして、あらゆる傳承に結びついて、基礎的事實を形づくるやうになつたのは、こゝにその謂はれがある。これは、日本文學の發生の上に見える明かな事實であるが、外國文學に於ても、大體かうした出發點は、閑却出來ないことと思ふ。さてこの事實の後をつけて言ふことは、あまり文學史の側に傾く虞れがある。それよりも寧ろ、横に傳承の各種類に結合した言語傳承が、どういふ風に現はれて居り、又どういふ姿に文學的な

姿を纏めて來たかといふ暗示だけを書くに止めよう。

【日本に於ける民俗學】民俗學の對象は、民俗である。今少しこれを適切に言へば民間傳承である。これ等の語が、たとひ以前は無意識に近い散漫な用語例に使はれてゐたとしても、實際に學問的に用ひ出されたのは、柳田

とした民間生活を、時間的に整理する目標ともなるもので、その多くが勢力を失ひ、新しく替はるものゝ少い今日でも、なほ採集して詳細に區劃すれば、想像すべからざる數に上ることは豫期出來る。大體この國土の生活が群島及び大陸から集注したものである以上、各種族のそれ以前の鄕土における傳承の、或

なつて居り、また手段となつてゐたところの詞章である。これは後世になるほど、藝能に隨伴してゐる。その大要を言ふと、祝詞であり、歌であり、諺であり、物語であり、くどきであるといふ風に、さま〲に分化して行つた。だから、初めは、神及び精靈の呪詞であり、後年は踊り、劇の臺詞となつて行つた譯

嚴しく言へば、一つであるが、近代的には、この區分は併立してゐたのである。これに對して、生得による區劃、それが延長せられて、社會上に、權威を保つ族人を生ずることになる。元々、宗敎上の威力を中心としたもので、從つてそれによつての戰鬪力であり、智能であつたのである。これに對比する團體は、實

られぬ所の個性を著しく持つてゐるやうである。國々によつて、學そのものに個性があると同時に、勿論、民俗學の對象たる民俗自身、研究の結果導かれて來た普遍性の上に、又深い個性を含んでゐることは考へられる。この二つが、この學問の出發點に於ける根本的の立場とならねばならない。民俗學は、從來の好事的享樂、或は好古的採集を出發點として、漸く無形抽象的なものに傾いて行つた蒐集物の上に、單に奇怪であり、驚異であるといふ事の外に、なほある徹底した理論を見出さうとする希望が、當然にして起り、或は達成した學問であり、又まだその道程にある所の方法でもある。さうして單なる物である事を最

突發は飛躍である。のみならず、これ等によつて文學が民俗化することもある。必ずしも文學ばかりでない。飛躍して一つの社會精神生活の規範となるまでの期間を、媬育せられてゐるものと言ふことが出來る。民俗が民俗である事のためには、週期的なることを要するのは、舊時の宗敎が、成立時代の宗敎と性質を異にしてゐるからの事である。週期的に出現する神に對する誓約を履行する事によつて曆日が考へられ、祭禮を行ふやうになり、祭時を完全に經過する方法としての儀禮や傳承詞章や禁忌などが、すべての傳承の基となる。同時に、古代社會に於ける急激な變化と、社會人の頑固な保守とが、傳承を不具ならし

時に、その技巧が次第に傾向を生じて來るのも、傳承の力によるのである。こゝには、全人類の原始的民俗形態を考へる必要もなし、又さうした空想に似たことが、狹い日本民俗を通じて實現せられることでもない。だから、それに觸れるにも及ばないが、なほ考へると、その研究種目の部分には、非常に關聯するものが多い。結局、私の考へ得た―多分後來變らぬだらうと思はれる部分―だけを以て、これに答へる外はないと思ふ。

日本人の持つ文學の故鄕は、同時に日本人の祖靈の集注處と信仰せられた常世の國であつた。それから持ち來されたものが、この土の咒詞（ことひごと）である。その發表方法によ

詩から脫落した部分は、「歌」の初めをなしてゐる。

【文學と民俗】文學と民俗との關聯は、この點からはじまる。即ち言語傳承が、民間傳承の重要なものとして、あらゆる傳承に結びついて、基礎的事實を形づくるやうになつたのは、こゝにその謂はれがある。これは、日本文學の發生の上に見える明かな事實であるが、外國文學に於ても、大體かうした出發點は、閑却出來ないことと思ふ。さてこの事實の後をつけて言ふことは、あまり文學史の側に傾く虞れがある。それよりも寧ろ、橫に傳承の各種類に結合した言語傳承が、どういふ風に現はれて居り、又どういふ姿に文學的な姿を纏めて來たかといふ暗示だけを書くに止めよう。

【日本に於ける民俗學】民俗學の對象は、民俗である。今少しこれを適切に言へば民間傳承である。これ等の語が、たとひ以前は無意識に近い散漫な用語例に使はれてゐたとしても、實際に學問的に用ひ出されたのは、柳田國男氏である。さうして、日本の民俗學が、それ以前の好事―或る部分まで、好古或は考古學とも稱へた―學者の先導があつたとしても、眞の組織を持ちはじめたのは、これ以後のことである。先づ民間傳承を採訪し、組織するための便宜上、種目を立てて、凡そこれを五つの部類に分けて置くことにする。即ち週期傳承・階級傳承・造形傳承・行動傳承、並に言語傳承がそれである。そのうち、直接文學に關係あるものは言語傳承で、その或る程度まで進步の緩い程度に止まつたものだけが、非文學だと謂つてよい位、殆どすべてが文學化すべき理由、又は道程を持つてゐると言つてよい。

【週期傳承】週期傳承といふのは、その著しく固定した點を主として名づけた迄であつて、民間傳承自身、週期を意味してゐないものはない。この週期傳承の精神こそ、すべての民間傳承を指導するものと謂つてさしつかへない。ただ强ひて謂へば、曆日的に定着したもので、過去の長い部落生活の上に、權力の催勵以外に、或る不可抗的な內發意力によつて行はれて來たものである。曆日によると言ふことは、むしろ後世のことである。却つてそれによつて曆日觀念が起つたと見た方が正しい。國語式の普通の表はし方で、この部分を「年中行事」といふ。正月・中元・歲暮を初中後とした民間生活を、時間的に整理する目標ともなるもので、その多くが勢力を失ひ、新しく替はるものゝ少い今日でも、なほ採集して詳細に區劃すれば、想像すべからざる數に上ることば豫期出來る。大體この國土の生活が群島及び大陸から集注したものである以上、各種族のそれ以前の鄕土における傳承の、或る飽和點に達した時期のあることが考へられる。ただその程度が、百中の五十乃至三十と云つた低いふり合ひの調和で、威力ある―宗敎的に―人々の持つ傳承を中心としてゐたと思つてよい。さうしたものの中には、先住漢人種の將來して、それを生活樣式としてゐた道敎風の信仰や方式なども交つてゐたに違ひない。國家成立後も、次第に服從・歸化して來た種族の民俗を含み、その上に、廣い佛敎式の傳承を容れるやうになつて來た。これは漢人種の齎したものと違ひ、若干の實生活以外は、書籍から出たもの、又は眞に形式化したまゝのものが多かつたらう。だから、民俗原始狀態なるものが、何處にも考へられなかつた事實よりも、更に思ふことの出來ない國土の上に、漠然として成立した民俗である。さうして細かい內容に至つては、未だ知られない部分が多い。今ですらさうであるから、時代を溯るほど、愈々明かでない。而してその間に考ふべきことは、叙上の如き傳播式の考へ方の外に、勿論日本獨自に偶發した傳承のあるべきことである。併し數限りない多くの民間傳承の中から、特にこれを揭げ出す自信を持つことが出來ない。それで、ある點まで、特殊な形を示して來たものだけを擧げることにするだらう。即ち國文學と年中行事との關係は、主として行事執行の條件、または手段となつて居り、また手段となつてゐたところの詞章である。これは後世になるほど、藝能に隨伴してゐる。その大要を言ふと、祝詞であり、歌であり、諺であり、物語であり、くどきであるといふ風に、さま〴〵に分化して行つた。だから、初めは、神及び精靈の咒詞であり、後年は踊り、劇の臺詞となつて行つた譯だ。すべては、言語傳承の領域から來るものである。だから、特に細目に亙ることは避けるが、この部で言ふべきは、古代ほど、文學に隨時鑑賞といふことが行はれずに、年中行事の一部分として保存せられたのである。この曆日の束縛から自由になつて、初めて文學となつて來るのである。

【階級傳承】第二は、階級傳承である。それと國文學との關係は、勿論あるべきことであるが、これとても、階級傳承に言語傳承の交錯して來る點が擧げられるに過ぎない。階級といふのは、價値に差等をつけることでなくて、社會に何かの意義ある區分を施すことである。社會を形づくる人間を整頓するために、群團式に區劃してその理由となるべきものを揭げ出すこととする。その標目に、年齡の序によるもの、經驗の﨟に從ふもの、血族の社會的地位の生得權を、主とするものなどがある。これに各種の傳承が結びついて來るのである。一は老若制度である。なほ加へねばならぬのは、性別を職業の分岐點としての區分で、嚴格に言へば、等級を次第することではない。次には職業による傳承である。だが同時に、平靜な古態の社會では、年と經驗とが一つに見られてゐた。週期的にある飛躍が同年輩の人々の上に來る。さうして、社會的の地位と職業とを持つに至るのである。だから嚴しく言へば、一つであるが、近代的には、この區分は併立してゐたのである。これに對して、生得による區劃、それが延長せられて、社會上に、權威を保つ族人を生ずることになる。元々、宗敎上の威力を中心としたもので、從つてそれによつての戰鬪力であり、智能であつたのである。これに對比する團體は、實は對比といふよりも、延長といふ形で、次第に數が加はつて行つた。さうして、かうした階級の傳承は、常に上層の傳承が、次に成り上つた階級の傳承となつて行き、次第に下層に止まつてゐる階級の生活軌範とまでなつて行つた。又男女を標目とする區劃は、とりわけ階級の名に當らないが、我々の民俗學では、階級觀念の起原を說くのだから、これにも大きな視點のある譯である。古代日本では、成年の男性であることの第一資格は、神となり得ることだつた。それに對して成女の價値の定まるところは、巫女となる資格を持つことである。この二つの邑落的な神聖な職業の區別から、文學藝能の分立が現はれるやうになるのが、後代に至るまで、日本藝能の上にあつた特質である。而して一の階級區別から來る文學的衝動は、古代社會に詞章保持の根源力を與へた。成年・成女、或はそのうち更に特に選ばれた能力者間に、太初から永劫までの負擔としてあつたのは、神授と稱する詞章の傳承であつた。この數が次第に殖えて、文學の芽生えは愈々豐かになる。この團體の組織がなかつたならば、純粹な日本的な文學は、今の形を持つては現はれてゐなかつたらう。また詞章を傳授し、方法を指導するのが宿老(刀自)の爲事であつた。詞章・咒的行動を現實に實行して、次代まで持ち越すのが、成年更

造の根本理由であつたのである。成女も亦、成年の職業と對比する爲事を持つたもので、成年との接觸・纏綿・鬪爭の間に、次第に文學及び文學動機・文學鑑賞力が、國民的に發達して行つた。殊に相聞式發想は、こゝに生れて來た。實は連歌・俳諧・旋頭歌、皆この事情を外にしては、その發生を考へることが出來ないのである。

【職人の文藝】 今一つ階級傳承として見られる職業による民間傳承は、日本的に謂へば、最近まで、—今日すらある如く—古態な職人の間に遺存した特殊な民俗のあることから、全體としての習俗の形が思はれるのである。尾根屋・鍛冶屋・箕筬作り等の職人の間に、藝能詞章の文學に近いものが傳承せられてゐるのは、必ずしも近代だけのことではない。これ等の職人は前代の藝能人なる「瞽女」・「琵琶盲僧」・曲舞々・神事舞太夫等の類（括弧に入れたのは現存してゐるもの）と、中世的生活樣態に於て變るところがなかつたのだ。それほど、職と職の由來を說く文學の唱道とが、竝んで行はれてゐた。古く溯ると、職その物は、神事を遂行するための分業を意味するものであつて、一々について、その本緣を說く賀奏事（よごと）があつた。大事には、氏々の壽詞（抒情詩の元）なるものが行はれた。その俤の殘つたのが即ちこれである。これと共に考へられるのは、勞働に伴ふ歌謠である。元、やはり職業詞章の斷篇だつたものが、段々替へ唄を生じ、更に他の歌謠をも流用するやうになつた。それが次第に、勞働の身的律動に偕調すると共に、その勞作に對する感情を陳べる詞章を生ずるやうになつた。これには國文學側から見れば、國ぶり歌の影響が見られるのである。

勞働は、その奉仕する人へ靈魂獻上の手段になるものと信じられてゐた。譬へば、杵搗き・地搗きは、主公に對する魂鎭り呪術に伴ふ呪歌なのであつた。それが次第に臼唄—碓唄から挽臼唄へ—に擴がり、胴づき・棒づき・踏鞴唄となつて祠堂の祝福の詞章と言ふ風に用ひられて行つた。又譬へば、田植ゑ唄の如きもそれである。村の田祭りに臨む神—成年等が聖役の重要な一つとして神に扮して—を祭場なる田に迎へる成女の聖役、即ち五月處女役があつた。その時、その勞働を讚するのが、神の爲事の一部で、所謂田囃しとなつた。即ち田遊・田樂の元である。それに伴つて諷誦せられたのが田植ゑ唄であつた。だから、後世段々内容が變じて來てもさんばいと稱する來臨する神と田あるじと稱する地靈—後合理化して田の管理者から田の持ち主と思はれて來た—晝飯持ち・おなり人など言ふ田の巫女の記憶は、未だ失せきつてはゐない。勿論、舊日本の更に廣い部分には、別種の神の信仰のあつた事も考へられるが。

【造形傳承】 造形傳承は、寧ろ造形傳承物と言つた方が適切なのである。近來、その名稱の民俗藝術に除外すべからざるものであるところから、右の一部門として加へられることになつたが、他の種目に入るもの、この記述からすれば、藝能的な部分を見るべきものとは、一致しない性質を持つてゐる。彼はすべて抽象的な存在であるにかゝはらず、これは具象的なものである點である。而もあまりに具象的なもので、文學・藝能的なものに對して、技術の側から藝術的と思はれる外には、交涉がないとすら考へられる程である。併しこれを呼び更へて造形傳承といふと、如何にも所謂造形の民俗藝術が含むところの、他の民俗藝術との共通要素を思ひ得ることが出來る。信仰方面が殊に形式に固定した結果、原意を辿ることの出來なくなつたものが多い。それには、主として經濟生活が、新しい目的を無限に展開して行つた爲めであつた。さうした二次的目的を持つやうになる前から、その以後の經濟的利用の上にまで、一つの繫りが見られる。即ち信仰的な扱ひ方である。而も特にこれが文學に關聯してゐる點と言へば、やはり言語によつて、その人間及び人間以外との約束が、形式的に固着してゐる方面を見ねばならぬ。たとへば建築である。建築を祝福する詞章は「前文學」である。同時に非常に多く、文學の中に織りこまれて來てゐるものだ。古代と近代との物に就いて數行の說明をする。家ぼめの詞章が、室ノ壽詞・大殿祝詞であつた。それが悉く同じ傾向の發想法で、頻々と言ふよりも頻々とくり返された爲め、固定に固定を重ね、意義の全體的滅裂と部分的理會とを重ねて來た。その詞章の意義を補綴する合理性能が、日本人の文學能力を養育して行つた。呪詞及び長短歌の、その分類が何に屬してゐるにしても、「室壽」の痕跡を殘してゐるものが極めて多い。家ぼめには、家長の祝詞が伴うた。家長の壽を頌する詞には、邑落平安・行疫退散の目的が、自然にさうして必然に隨つてゐた。村に流行病の起つた時、或は家長の篤疾に陷つた時、行ふ呪術は室壽の形式を先行せしめなければならなかつた。その呪詞も亦必ず家ぼめの詞であつた。これは日本文學の發想法と、古代論理の論法とを開く上に、重大な役目を持つてゐるものである。意想外に大きく、單純な論理が、日本文學を支配してゐる。近代においてすら、胴衝き・木遣り・石挽き・踏鞴踏みなどが、藝能殊に踊り及び唄の發達の力となつてゐることは既に述べた。これは建築に關する行爲傳承である。このやうに造形のうち、建築に類したものには、それが大規模なだけ、言語傳承を印象するものが多いから、例としてこゝに擧げたのである。が、傳承その物の性質上、文學自身と見ることは出來ないのであるから、單なる刺戟と見ることに止める。

【行動傳承】 行動傳承は、必然的に言語傳承を伴ふものが多く、又時としては言語傳承自身が、その中心となることすらあるのである。舞踊は、原始的な行動でなくても、單純な表情の固定したものとして、最もこの部類の重いものと見ねばならない。歌謠は舞踊との提携の歷史の古いことによつて—又單獨にも起つた信仰的生理現象でもあるがために—言語傳承の一つの先行者と見てさし支へない。或は演劇の如きも、その原始的意義に於て、言語傳承を刺戟するものになつてゐる筈である。單にそればかりではない。普通言語と考へられる感動詞すらが、單なる行動に過ぎないと見る事が出來る。又その習慣的發音が、如何に傳承に拘束せられてゐるかと言ふ點から見れば、この品詞及びそれから出たものの多い「語根」の一部などは、行動傳承の變形して、言語傳承の形を採つたものといふ事も出來る。歌謠を行動傳承とも見られる所以は、この意味に於ける傳承が、次第に言語傳承の形式と似て來る點を見て言つたのである。「諺」自身は、その發生原因は別にあるが、形式は此處に生じて後、これにあてはまるべきものが、言語傳承から來たのである。謂はばまづ言語

を要しない發音だけを利用した行動傳承が、諺に先行してゐた譯である。日本の言語傳承では、それは明かには見るを得ないが、古代からさうした成因を信じてゐたと見えて、「諺」の古いものは、それらしい姿に出來てゐる。「あなにやし。えをとこを」「あなにやし。えをとめを」の如き、「あゝしやを」「えゝしやを」

するに、各傳承はその根柢として、言語がこれを繋いでゐたものと言はれる。言語は偏へに原始思考（信仰）を傳承する機關である。だから造形傳承が物品によつて、古代精神とそれから展開せられて來たものとを傳承したことの對照として、言語傳承があるので、思考の持續があり、その發達があつたのだと言ふ

感激の次第に純化したのが文學であつて、常に明かに、文學と言語傳承とは分化してゐるものと見るのは空想である。やはり、詞章の類型に對する知悉が必要である。文學上の技巧はどうして起るか。古い表現に對する忘却・無理解の重疊についての後人の誤解が、文學的方法を生んで來るのである。文學的鑑賞は

けて來るところから、短句連鎖の文學が行はれ、又一課題に對して多くの附句を要求するところから片句獨立の習慣を發想上に馴致するやうになつた。さうして、それが古くから實生活に必要な程度のものと、それ以上の遊戲に傾いたものとがあつて、一つは俳諧、他は雜俳となつて行つた。また出發點は同じこ

と職の由來を說く文學の唱道とが、並んで行はれてゐた。古く溯ると、職その物は、神事を遂行するための分業を意味するものであつて、一々について、その本緣を說く賀奏事（よごと）があつた。大事には、氏々の壽詞（抒情詩の元）なるものが行はれた。その俤の殘つたのが即ちこれである。これと共に考へられるのは、勞働に伴ふ歌謠である。元、やはり職業詞章の斷篇だつたものが、段々替へ唄を生じ、更に他の歌謠をも流用するやうになつた。それが次第に、勞働の身的律動に偕調すると共に、その勞作に對する感情を陳べる詞章を生ずるやうになつた。これには國文學側から見れば、國ぶり歌の影響が見られるのである。

つた事も考へられるが。

【造形傳承】造形傳承は、寧ろ造形傳承物と言つた方が適切なのである。近來、その名稱の民俗藝術に除外すべからざるものであるところから、右の一部門として加へられることになつたが、他の種目に入るもの、この記述からすれば、藝能的な部分を見るべきものとは、一致しない性質を持つてゐる。彼はすべて抽象的な存在であるにかゝはらず、これは具象的なものである點である。而もあまりに具象的で、文學・藝能的なものに對して、技術の側から藝術的と思はれる外には、交涉がないとすら考へられる程である。併しこれを呼び更へて造形傳承といふと、如何にも所謂造形の民

て來た。その詞章の意義を補綴する合理性能が、日本人の文學能力を養育して行つた。呪詞及び長短歌の、その分類が何に屬してゐるにしても、「室壽」の痕跡を殘してゐるものが極めて多い。家ぼめには、家長の祝詞が伴うた。家長の壽を頌する詞には、邑落平安・行疫退散の目的が、自然にさうして必然に隨つてゐた。村に流行病の起つた時、或は家長の篤疾に陷つた時、行ふ呪術は室壽の形式を先行せしめなければならなかつた。その呪詞も亦必ず家ぼめの詞であつた。これは日本文學の發想法と、古代論理の論法とを開く上に、重大な役目を持つてゐるものである。意想外に大きく、單純な論理が、日本文學を支配して

傳承を刺戟するものになつてゐる筈である。單にそればかりではない。普通言語と考へられる感動詞すらが、單なる行動に過ぎないと見る事が出來る。又その習慣的發音が、如何に傳承に拘束せられてゐるかと言ふ點から見れば、この品詞及びそれから出たものの多い「語根」の一部などは、行動傳承の變形して、言語傳承の形を採つたものといふ事も出來る。歌謠を行動傳承とも見られる所以は、この意味に於ける傳承が、次第に言語傳承の形式と似て來る點を見て言つたのである。「諺」自身は、その發生原因は別にあるが、形式は此處に生じて後、これにあてはまるべきものが、言語傳承から來たのである。謂はばまづ言語

を要しない發音だけを利用した行動傳承が、諺に先行してゐた譯である。日本の言語傳承では、それは明かには見るを得ないが、古代からさうした成因を信じてゐたと見えて、「諺」の古いものは、それらしい姿に出來てゐる。「あなにやし。えをとこを」「あなにやし。えをとめを」の如き、「あゝしやを」「えゝしやを」などの如き、頻々としてこの種のものが多い。これに就いて、殊に深く考へねばならぬのは、囃し詞である。囃し詞それ自體は、寧ろ特殊事情を共通にした一群の諷誦歌の證明語句とも言ふべきものであつた。それが固定して、意義の辿れなくなつたものが、この語の最初の形と見るべきである。が、さうしたもの以外に、必ずかうした感動的な行動傳承ともいふべき囃し詞があつたに違ひない。又かう言ふ側からすれば、從來の囃し詞に對する學界の通說なる感動說をも認めることになるのかも知れない。また擬態舞踊とも言ふべきものを舞踊の原始的なものとする說が多い。しかし原始に近いものではあるが、原始態だと思はれてはならない。ともかくも、鳥や四足の動物或は、畸形者の態をうつすものである。この舞踊に挿入する舞人自身の懸け聲が、やはり擬音であるとはいふが、同時にまた行動傳承と言つてもよい筈のものである。行動傳承それ自身については、論ぜねばならぬ問題が多くあるが、文學には關係がないからこゝには省く。

【言語傳承】最後に言語傳承である。非文學・文學を通じて、ともかくも、傳承自體、言語によつて成立してゐるのが、通例なのであるから、槪して程度問題として、日本文學と民俗學との關係とを直接に示すものである。要するに、各傳承はその根柢として、言語がこれを繫いでゐたものと言はれる。言語は偏へに原始思考（信仰）を傳承する機關である。だから造形傳承が物品によつて、古代精神とそれから展開せられて來たものとを傳承したことの對照として、言語傳承があるので、思考の持續があり、その發達があつたのだと言ふことが出來よう。ただ文學との關係を述べる場合には、言語傳承は、或る言語形式を對象として行かねばならない。だから、他の傳承は、皆正當な目的とはならない。言語傳承を假りに分類すると、

一、諺・言語遊戲

二、歌謠……民謠

三、傳說

言語を以てする傳承の全部が、必ずしも文學となり得ないといふことは、文學自體が、言語傳承の後身であり、同時に、その相違が絕對的なものでなく、極めて近似して、ただ表面的には、言語技巧の巧拙の素朴的な感觸の如何にあるが、事實は感激の固定せず、自在であり、妥當なることを得てゐる事にある。だから、時としては歷史的知識のない者からは、古代の詞章（文學でないところの）の表現法が誤つて過重に評價せられることもある。類型や傳襲の僅かしか殘らなくなつた遺物の上には、新鮮なもののやうにも見えて來るのである。この場合、單なる言語傳承を以て純文學と見るのであつて、古典文學を研究するものは、常にこの誤つた見方から、鑑賞を勞費することがある。併し文學製作の側から言へば、さうした類型が堆積して、そこに新しい飛躍が起ると、文學は現はれて來るのである。思想よりも感激が文學の初めであつた。この感激の次第に純化したのが文學であつて、常に明かに、文學と言語傳承とは分化してゐるものと見るのは空想である。やはり、詞章の類型に對する知悉が必要である。文學上の技巧はどうして起るか。古い表現に對する忘却・無理解の重疊についての後人の誤解が、文學的方法を生んで來るのである。文學的鑑賞は更に遲れて發達するものであるが、その單純なものは早くからあつて、それが言語連鎖に對する愛着となつて出て來てゐた譯である。それが飛躍して詞章に對する氣分的愉悅となる。內容と形式との關聯するところなどに及ぶのは、更に〳〵後のことである。

【諺】日本文學では、古代の呪詞も、前代の敍事詩も、文學的の意義を民族生活の上に持つてはゐなかつたけれども、諺は最も早くから、文學情操に似たものを刺戟してゐた。却つて複雜な近代人が、この部門に屬する言語から、さうした感興を享ける事を忘れてゐる譯である。單なる諷喩や、斷篇知識の貯藏庫ではなかつた。後人の文學から感受するものに似た言語の感覺美と歷史事實に持つ憧憬との感じられた形式だつた。その一つは枕詞である。現に風土記の類には諺即ち枕詞と言ふ風に書いてゐる。この諺の持つ歷史的知識が、單なる社會的申し合せの敎訓とばかり感じられる時代になつて、完全に文學から去つて言語遊戲になつて行つた。言語遊戲は、豐富な記憶と瞬間的一部變造とによつて行はれる。常に周知な知識の自由な應用であり、頓才的聯想力とが必要であつた。こゝにも言語傳承の傳承に據るがための效果を見ることが出來る。古代に懸け合ひ式の表現の盛んに行はれたのが、文字の上に移つて、一方、文學の影響を受けて來るところから、短句連鎖の文學が行はれ、又一課題に對して多くの附句を要求するところから片句獨立の習慣を發想上に馴致するやうになつた。さうして、それが古くから實生活に必要な程度のものと、それ以上の遊戲に傾いたものとがあつて、一つは俳諧、他は雜俳となつて行つた。また出發點は同じことで、目的を分化して行つたものに「謎」がある。この外に發音を主題とする傳承から來た遊戲がある。ごろ合せ・舌もぢり・長息文句等がそれである。初めの目的とその利用の方が澄んでゐて、後世却つて濁つてゐるやうに見える。併しながら、それも非文學として、文學に添うて行はれたものの狀態で、全然ただの言語傳承として殘り、又は徐々に姿を換へて行つたものには、却つて文學のよい刺戟となつたものがある。恰も散文學が固定して生命のなくなつた時に、古典的な民謠精神が、文藝復興を促す動機となつたのと同じことである。文學を好む心の對象となり易いところから、蒐集或は研究の對象となり易いのは民謠である。さうして民謠の中に含まれた傳承の複雜さは、さう〳〵たやすく解決が出來るものではない。啓蒙的なもので、同時に最後的なものとさへ言はれる。

【民謠】民謠を分けて、童謠・季節謠・藝謠の三部に分けて見たい。これは完全な分類ではないが、今は簡單な方法によるのがよいと思ふから、おほまかな區劃を採つた。童謠は信仰上神意を諷喩する象徵的な效果を持つたと言はれた「わざうた」を斥すのではない。又大正以後盛んになつた詩の一樣式として用ひられた文學としての童謠をも含まない。あれは單に童謠の論理と情調とを利用したものに過

ぎないのである。童謠は多く、幼兒に謠うて聞かせた諷喩歌から分出してゐるものと思はれる。近頃の文學が、童話・童謠の形に發想せられるのの多くなつたのは、宗教的象徴文學の影響で、マアテルリンクやトルストイの姿である。日本的には、過去に於て別の途をとつてゐたやうに見える。又季節謠の中には、眞の季節謠と、以前季節の勞働に謠つたものから出發したものの變化したと言ふ點で、普通勞働謠なるものをも籠めて言ふ。勿論季節謠といへども、古く溯ると、行爲傳承に伴つてゐたものといふことが考へられる。季節謠は、即ち廻期的儀禮執行の一部として發達し、その行はれる村が、農事を主としたところから、農事に關するものが多くなつた譯である。即ち農祭の始中後の行事にかけて言ふものが多かつたのである。それがため、その時期の到らない中から、既に他の部分を謠ふやうになつて來たのだ。その外にも、漁人の村、又は聖なる職として工業に與つてゐた村では、やはり季節的に神聖な勞働に從事したのが、臨時にも行はねばならぬ事になると、それぞれ季節謠は固定し、又は俤を更めることになる。かうして流傳してゐる間に、自然季節の拘束のない唄が出來て來る譯である。さうなると、職或は勞働その物が主題となり、また勞働中の雰圍氣を内容とした發想に變化して行く。殊にそれが男女相對するものが多いところから、性意識を含んだものが榮えて來る。文學か民謠か、判斷に苦しませられる古典的作物は、殊にこの部門に多い。季節の推移を主題とした文學の日本文學殊に短篇詩に多いのは、このためだと思ふ。行動傳承の時にあげたものは、多くこの中に入つて來る。言語傳承は、通例律文學であり、また聲樂によつて律文要素を深くするものだが、なほ成立は律文的で、結果の散文的なものもないではない。唱導的な目的を持つたものは、古くは兕詞として、その儀禮・奉祀の本縁を説くところから、叙事詩らしい形を整へて行つた。さうして語り物として、聲樂上特殊な様式を備へて來る。それが何時の時代にもまづ律文として諷誦せられ、それが散文に綴り直されて文學に近い形となり、又崩れて語り物となつて行く。これが長物語である性質上、戲曲・小説になつて行く傾向を持つてゐた。たとへば近代の説經・淨瑠璃が、同じ名稱の文學となつたやうなものである。また念佛・祭文・説經を題材としたものに、歌舞伎狂言があり、又浮世寫實小説が出た。だから、後來文學の主流となるものが、多く唱導の語り物から出た事には注意せねばならない。既知の非文學の文學化といふことが、我々の國の宗教教化の上に出て來た事實である。古く見ても、王朝の物語は、その構造の見られるもの程、唱導の口頭臺本を具象したものと言はれるのである。尤も小説の起因は外にもあるが、かうした傳承維持力の有無によつて、位置を高めさせると言ふ意識から出て來るものの多いことも、認めないではゐられぬ。

【傳説―神話・民譚・説話】 さて民俗學的氣分の愛好者に、民謠と共に擇ばれやすい題目は傳説である。これ亦、先の民謠と共に文學化せられる題材となり易いものであるが、それが律文でないだけに、文學とする過程において文學的修練を要するものがあつた。これも亦、民謠の場合の如く、神話・民譚・説話の三部門にこめることが出來る。神話は、嘗て社會に關係の最も深かつた事物の起因を、神と人との交渉あつた時代に求めた物語である。が、これも久しく叙事詩であり、文學に固定した時は、既に神話としての威信を失ひ初めてゐた。さうして成文・不文の時期に亙つて、極めて時代的な自由表現を持つた説話時代があつた筈である。日本には、基督教生活を基調としたものがないから、神話といつても西洋學者の言ふやうなものはない。民譚は神話に對して、社會統合の威力がその傳説を維持してゐた時代から去つた時代の形であるが、なほ歴史的事實とする事によつて、信頼を繫ぎ得たもので、それが起因を説かず、偶發事件とするところに歴史的意義を強調して感ぜしめる。而も事實に於て、特別に多くの類型を持つものである。それが神話と説話との間にあるやうな形であるところから、區劃して假りに民譚と稱する。説話は普通の用語例とやゝ違つてゐる。傳説を色々な名によつて幾種かに稱へ分ける事の出來るのは、その發表方法に數段の差異のあるところから、自然に要求されて來るのだと信じてゐる。即ち神話の神の誓約を元とするのに對して、人の世の任意な事件とするのが民譚で、二つながら律文形式もあり、又既に口頭説話に飜されてゐるのもある。それを全くの口頭に移し、過去と言ふ制約は持つても、實は現在に於て、あり得るものとの理會の上におくのが説話である。だから、その過去といふ時間に、比喩味を感じさせる事すらある。さうして、あり得ない事をありうちの事のやうに語る。謂はば物語の上の世話物である。だから、特殊な人物・愚昧者か、誇張家か、智者かと言ふ風に、事件の特異性を救ふ主人公を出して來る。この説話はすべて人情の世界でなく、叙事一點ばりなのだから、人物・集團は假空的のものとなつて行き、或る一人、一團體の偶然の事件と言ふ風に説く。また一方に、神話・民譚の遺型を交へるものもあり、それから新しい社會と交感する點において、訓諭的な意味を寓するやうになつて來る。又ある部分まで、人物について平凡な社會性を持たせることが出來るやうになり、事件には、テイマを寓するやうになつて來る。不信心・不孝・貪慾・邪慳など、主として凡庸な宗教的な教戒から出發して廣い意味の道話に近づく。童話については、童謠のところで言つた通りであるが、これ亦、學者の言ふやうな正しい意義のものはない。ただ傾向の似たものがあるだけである。さうして二つながら併行して發生したもので、前後を定めることは出來まい。童話では説話の當事者を極端に符號化するやうになつてゐる。我々の國の文學には、如上の事實があり、又書物の上にも當てはまる。この外に考へねばならぬことは、語りての專門的職分が解けて、自由に人々の説話する時代に入るに從ひ、又次第に説話の興味は失はれて、文學の上に移つて行つた。この事實は普通人が想像するよりも、もつと嚴肅に行はれてゐる事である。

【物語】 傳説の中に於て、なほ忘れることの出來ないのは、様式ばかりから見れば、神話から直ちに説話の世界に入つたやうに見られる「おとし咄」のことについてである。この發達の徑路には、「諺」の説明物語と歌物語との交錯がある。さうして極めて近代まで、歌物語の變態なる狂歌咄の系統が、却つて落語の正系のやうな外見を持つてゐたことである。而してなほ言語傳承について言ふべき項目は、

極めて多く、その文學との交流狀態についても、もつと細やかな説明を必要とするのは無論のことであるが、今は單に項目の説明と謂つた程度に止めることにする。〔折口〕

民俗藝術（みんぞくげいじゆつ） 藝術論〔獨〕Volkskunst.〔英〕Folk-art.【解説】譯語としては民族藝術とする場合もある。凡そ一定の民族に共通するところの精神生活は、他の民族の

文化の行きわたらない、そして古くからの傳承を保つてゐる地方の民謠や、人形芝居・村芝居には、この卑俗美があると共に、固有の民族的感情が溢れ、一種の滑稽美表現に達してゐる。この意味に於て「竹取物語」、御伽草子の中の「福富草紙」、或は多くの能狂言、或は「道中膝栗毛」「浮世風呂」（以上各別項）等、或は落語・黃表紙（各別項）の如きものは、やはり日本

【參考】Wundt, W.: *Die Kunst.* 2 A. 1908. ‖ Wundt, W.: *Elemente der Völkerpsychologie.* 1912. 〔渡邊〕

民譚（みんだん） 【名稱】〔佛〕Contes populaires.〔英〕Folktales.【名義】普通には「民間説話」と譯されてゐる。「民譚」は單に一部の學者のみが、これを簡約するために使用してゐるに過ぎない。現在に於ては二者は全然その範圍

方法もない。それがもし京都の寺などの案内役の言葉のやうに一定すると、再び又民間説話の様式に戻つて來るのである。【解説】物語は現在すべて書卷の形を以てのみ保存せられてゐるが、これも嘗ては「民間説話」の中に、包容せられてよい時代があつた。その長い物語が一つの中心信仰によつて統括し、また育成することを得なくなつて、後には人が尋常

やはり季節的に神聖な勞働に從事したのが、臨時にも行はねばならぬ事になると、それぞれ季節謠は固定し、又は俤を更めることになる。かうして流傳してゐる間に、自然季節の拘束のない唄が出來て來る譯である。さうなると、職或は勞働その物が主題となり、また勞働中の雰圍氣を內容とした發想に變化して行く。殊にそれが男女相對するものが多いところから、性意識を含んだものが榮えて來る。文學か民謠か、判斷に苦しませられる古典的作物は、殊にこの部門に多い。季節の推移を主題とした文學の日本文學殊に短篇詩に多いのは、このためだと思ふ。行動傳承の時にあげたものは、多くこの中に入つて來る。言語

語は、その構造の見られるもの程、唱導の口頭臺本を具象したものと言はれるのである。尤も小説の起因は外にもあるが、かうした傳承維持力の有無によつて、位置を高めさせると言ふ意識から出て來るものの多いことも、認めないではゐられぬ。

【傳説―神話・民譚・説話】 さて民俗學的氣分の愛好者に、民謠と共に擇ばれやすい題目は傳説である。これ亦、先の民謠と共に文學化せられる題材となり易いものであるが、それが律文でないだけに、文學とする過程において文學的修練を要するものがあつた。これも亦、民謠の場合の如く、神話・民譚・説話の三部門にこめることが出來る。神話は、嘗て社

方法に數段の差異のあるところから、自然に要求されて來るのだと信じてゐる。卽ち神話の神の誓約を元とするのに對して、人の世の任意な事件とするのが民譚で、二つながら律文形式もあり、又既に口頭説話に飜されてゐるのもある。それを全く口頭に移し、過去と言ふ制約は持つても、實は現在に於て、あり得るものとの理會の上におくのが説話である。だから、その過去といふ時間に、比喩味を感じさせる事すらある。さうして、あり得ない事をありうちの事のやうに語る。謂はば物語の上の世話物である。だから、特殊な人物・愚昧者か、誇張家か、智者かと言ふ風に、事件の特異性を救ふ主人公を出して來る。この説話

ぬことは、語りての專門的職分が解けて自由に人々の説話する時代に入るに從ひ、又次第に説話の興味は失はれて、文學の上に移つて行つた。この事實は普通人が想像するよりも、もつと嚴肅に行はれてゐる事である。

【物語】傳説の中に於て、なほ忘れることの出來ないのは、樣式ばかりから見れば、神話から直ちに説話の世界に入つたやうに見られる「おとし咄」のことについてである。この發達の徑路には、「諺」の説明物語と歌物語との交錯がある。さうして極めて近代まで、歌物語の變態なる狂歌咄の系統が、却つて落語の正系のやうな外見を持つてゐたことである。而してなほ言語傳承について言ふべき項目は、極めて多く、その文學との交流狀態についても、もつと細やかな説明を必要とするのは無論のことであるが、今は單に項目の説明と謂つた程度に止めることにする。 〔折口〕

民俗藝術（みんぞくげいじゆつ） 藝術論〔獨〕Volkskunst.〔英〕Folk-art.【解説】譯語としては民族藝術とする場合もある。凡そ一定の民族に共通するところの精神生活は、他の民族のそれとは當然趣を異にする。故にそれ等民族の素朴的な感情生活及びその傳承は、自然的に各々その民族固有の藝術を發生せしめ、材料・手法、樣式上特殊な傾向を有するとしてこれ等の研究は藝術の起原（別項）の研究者乃至社會學的に藝術を觀察する者によつて、特に民族藝術學が主唱されるにいたつた。而して一國の藝術の特色は、又その遠き祖先の社會的條件を多少とも傳ふべきものであるとする考から、民族藝術學的研究は現代の藝術を理解し、或は美そのものの本質研究にも必須の方面とされる。例へば民謠（歌謠參照）の如きものはその研究の好材料であるが、これ等から可なりにその民族固有の美的表現を察知し得るものであつて、ドイツ十九世紀初頭の文藝の興隆の如きは、ヘルデルの古代民族詩の研究に刺戟された所大であつたことなどから見て、重要な藝術學的研究部門であらう。民謠の如きものに於ては、所謂卑俗美乃至卑猥美(trivial burlesque) が表現されてゐるのを常とする。シェークスピヤの戲曲に於て英民族固有の卑俗美が溢れてゐるものがある。或はフランスのラブレーの「ガルガンチュア物語」の如き、ドイツの「ティル・オイレンシュピーゲル」、或はビュルゲルの「ミュンヒ・ハウゼン」の如き民俗文學の雄である。現代に於ても都市文化の行きわたらない、そして古くからの傳承を保つてゐる地方の民謠や、人形芝居・村芝居には、この卑俗美があると共に、固有の民族的感情が溢れ、一種の滑稽美表現に達してゐる。この意味に於て「竹取物語」、御伽草子の中の「福富草紙」、或は多くの能狂言、或は「道中膝栗毛」「浮世風呂」（以上各別項）等、或は落語・黃表紙（各別項）の如きものは、やはり日本の民族藝術として考察さるべきであつて、そこには、日本固有の特殊な民族感情が見られる。造形美術方面に於ても同樣なことが云へるであらう。しかし民俗藝術の名稱は、嚴格に云つて藝術的價値の上からのみ理解さるべきではない。個人の創作に對して、むしろ民族全般の中から、自然的に發生した傳承の生活感情表現の藝術として、特殊的意義を有するものと云ふべきであり、藝術の社會性の上から見れば、反つて重要な意義が與へられるものである。民衆藝術（別項）と區別すべきである。 〔村田〕

民族心理學的美學（みんぞくしんりがくてきびがく） 美學〔獨〕Völkerpsychologische Aesthetik.【解説】民族心理學的觀察に基く美學。在來の個人心理學の內省的又は實驗的な方法では、質的には感覺とか簡單感情とかいふ如きものに止まり、藝術の如き複雜な心理を究めることができず、量的には個人心理に限られるので、藝術の心理的起原を明かにする民族一般の心理を觀察することができぬ。又人類學的方法による美學は、藝術作品を對象としても、その心理的研究ではない。こゝに原始民族の藝術作品を心理學的に觀察する觀察法による所の民族心理學的方法による美學が主張される。ヴント(Wundt) がその代表である。

【參考】Wundt, W.: *Die Kunst.* 2 A. 1908. ‖ Wundt, W.: *Elemente der Völkerpsychologie.* 1912. 〔渡邊〕

民譚（みんだん）【名稱】〔佛〕Contes populaires.〔英〕Folktales.【名義】普通には「民間説話」と譯されてゐる。「民譚」は單に一部の學者のみが、これを簡約するために使用してゐるに過ぎない。現在に於ては二者は全然その範圍を同じくするものと解せられてゐる。目的は主として製作説話と對立せしめて、特に或る個人の空想又は作爲に基かない説話だけを區別するにあるが、更にその性質を明確にするには、別に現在の「世間話」、若しくは「事實談」といふものとの分界を立てなければならぬ。「世間話」と「民譚」との二つは、話者聽衆の性質、時期機會及び目的にも共通の點が多く、且つ双方互に材料の融通が行はれ、それが文籍に採錄せられる以前に、消えたり變化したりすることまでがよく似てはゐるが、少くともその表現の樣式だけには、間違へやうのない差異がある。卽ち「世間話」の方は、假に到底有り得べからざる話であらうとも、必ず誰が言つたとか何時何處で聞いて來たとか言つて、それが或る事實であることを示さうとするに反して、此方は所謂有りさうな話まで、悉く或る時或る男にしてしまつて、最初から空想の活躍のために一種の舞臺の如きものを設けてかゝるのである。話の珍奇なる實質以外に、その敍述の方法に對しても、若干の期待がある。これ我々の話術が、もと「民譚」の中から發達して、次第に他の方面に及んで來た證跡である。この意味から見ても、「傳説」は寧ろ「世間話」の方に屬すべきものであつた。「傳説」には通例定まつた話術がなく、又順序方法もない。それがもし京都の寺などの案內役の言葉のやうに一定すると、再び又民間説話の樣式に戾つて來るのである。【解説】物語は現在すべて書卷の形を以てのみ保存せられてゐるが、これも嘗ては「民間説話」の中に、包容せられてよい時代があつた。その長い物語が一つの中心信仰によつて統括し、また育成することを得なくなつて、後には人が尋常の能力を以て偶然に諳記し得る程度の、小さな部分に分解し始めたのである。卽ち民譚は常に短くならうとする傾向を採つてゐた爲めに、近世になつてはこれを特徵の一つに算へて、稀に殘つてゐる古來の宗敎的語り物と差別することも出來るやうになつたのである。而も如何に短くならうとも、少くとも一個の「話の種」（別項）、卽ち興味の中心となる部分を缺くことは出來なかつた。その中心が大なる神德であり、又は英雄の生死であつた時代には、説話の輪廓は非常に大きかつたが、それが或る一日の奇怪なる出來事、或る一人の平凡なる者の遭遇、若しくはその偶然なる幸不幸などに移つて行くと、又幾らでも小さく切つて話すことが出來、後世更に興味を個々の言語擧動などに求めるやうになれば、末には現代の一口話の程度にまでも、萎縮することが出來たといふだけである。民譚の分類方法は、人によつて未だ少しも一定してゐないが、右の「話の種」は常に暗々裡に最も大切なる標準になつてゐる。將來の蒐集と比較研究とに於ては、これを拔き出して適當なる名稱を附與することが、何物よりも必要な準備と考へられてゐる。日本では近頃になつて漸くその採集が始まり、地方の昔話や笑話などの、初めて筆錄せられたものが非常に増加して來た

が、以前はただ偶然に種々なる世間話又は事實談の中に、入り交つて保存せられてゐるだけであつた。「今昔物語」や「宇治拾遺物語」（別項）などは、民譚傳承の樣式を踏襲しようとしてゐるに反して、「古事談」「古今著聞集」（別項）の系統に屬する逸話集は、寧ろ民間說話をも世間話化してゐるが、二種を混淆してゐることは双方共に同じである。それ以外に、別に咄の衆の技巧に由つて、古來の話の種に改造に近いほどの變化を加へ、後世の製作說話の先驅をなしたものも多かつた。安樂庵策傳の「醒睡笑」（別項）などは、最も早い採集の一つに算ふべきものだが、やはりその三分の一は實話であり、又他の三分の一は新に作り設けられたものであつた。これに反して「狂言記」（別項）の數百篇を初めとして、近世の文藝作品の中には落想を前代の民間說話から導いて、これを趣向と名づけてゐたものが存外に多かつたやうである。この意味に於ては彼等も亦、落語（別項）と同樣に、無意識なる傳承者であつたといふべきである。　〔柳田（國）〕

明朝綴 みんてうとぢ　書誌學　【解說】冊子本（別項）の綴ぢ方の一種で、和裝本に普通に用ひられるもの。綴ぢ目の方の紙端から一定の距離に數個の孔を穿ち、糸を一つの孔に通して背にまはして再び同じ孔に通し、その後、次の孔に通して、こゝでも、また背にまはして再びその孔に通し、更に次の孔に進んで同樣の手續を繰返すもので、本の上下兩端に近い孔では、糸を背へまはすと共に、また上又は下の木口の方へもまはして、本の背の部分を密着して離れぬやうにする。袋綴（別項）の本には、この綴ぢ方を用ひるのが普通である。

（圖書參照）　〔橋本〕

民約譯解 みんやくやくかい　飜譯書　一册　【譯者】中江兆民【原著】ルソオの「民約論」。【發表】明治十五年三月以降、兆民等が佛學塾から出してゐた雜誌「政理叢談」（月二回）の第二號から揭載し、第十一號を以て原著の第一卷を終り、第二卷は第十二號以下多少斷續して、第四十三號（明治十六年七月）を以て中止した。全部完成されなかつたらしいが、第二卷六章までが發表されてゐる。【刊行】明治十五年冬、佛學塾。但し出版されたのは原書の第一卷に當る卷之一のみで、「太陽」臨時增刊號「明治名著集」（明治四十年六月）及び「兆民文集」（同四十二年十月刊）に收められたのも、この卷之一だけである。雜誌に發表の分に比し、多少の修訂が加へられてゐるが、大體に於て大差はない。【解說】文章は凡て漢文で書かれてゐる。譯者の意は原著の本旨を廣く傳へたいと言ふにあつたらしく、巧妙な意譯に一々自家の註解を附してある。これ「譯解」の名のある所以であらう。意譯としては相當の出來で、且つ隨所に附記せる譯者の註解は、彼自身の思想並に當年の政治思想を瞥見する資料としても面白い。「政理叢談」は佛國の政治思想の傳播者として有名であり、又それだけの功績もあるが、就中兆民の「民約譯解」は廣く江湖に傳唱されて多大の影響を與へたと言はれてゐる。思想的に根柢深い影響を與へたかどうかは疑ひあるも、恰も民權自由論の旺盛を極めた時代であるから、豫て盛名を傳聞してゐるルソオの代表作だからと云ふので到る處に持て囃されたことは想像に餘りある。永い間ルソオの邦譯と云へば、この「民約譯解」の外にないかに考へられたのも、該書が極めて廣く頒布された一證であらう。

【備考】早い時代の民約論の邦譯としては、明治十年十二月出版の服部德譯「民約論」及び同十六年二月出版の原田潛譯「民約論覆義」で、共に完譯である。大正九年刊行の市村光惠・森口繁治共譯「民約論」は、學術的邦譯として完成したものである。なほ平林初之輔の譯本（岩波文庫所收）もある。　〔吉野〕

【參考】明治文化全集第七卷（民約譯解解題）

民友社派 みんいうしやは　文學團體　【解說】明治二十年二月十五日、德富蘇峰が民友社を創立して、雜誌「國民之友」（別項）を發行するや、忽ち文壇の一勢力となつた。次いで同二十三年二月、國民新聞を創刊するに及び、その勢力は一段の伸張を見るに至つた。當時前後して民友社員となつた文學者には、德富蘆花・矢崎嵯峨の屋・內田魯庵・竹越三叉・山路愛山・塚越停春樓・緖方流水・宮崎湖處子・松原二十三階堂・人見一太郎・國木田獨步等があつた。獨步は最も後れて明治二十七年に入社した。以上の諸文士を民友社派と稱した。「國民之友」は「新日本文學之一大現象」を以て標榜し、藻鹽草の一欄を設けて每號、森田思軒・依田學海等當時に重きを爲した人々の飜譯・隨筆の類を載せ、更に新年附錄及び夏季附錄には諸名流及び新人の小說・詩歌の類を揭げた。これによつて文壇に名を成した人も少くない。文藝評論は初めは專ら石橋忍月が執筆したが、後には八面樓（宮崎湖處子）と內田不知庵（魯庵）が文學評論の筆をとつた。且つ「十二文豪」（別項）その他史傳・史論の刊行によつて、民友社同人の名は廣く世に知られ、文壇の一勢力となつた。その中心人物は德富蘇峰である。後、小說の上に於て、蘆花・獨步等が頭角を擡げた頃には、もう民友社派といふ名稱は次第に文壇的に解消していつた。　〔高須〕

民謠 みんえう　歌謠　【解說】本來、民謠は民族の歌謠である。云ふまでもなくその時代時代に於ける民族固有の、而もなほ普遍的な生活感情を表現することに、民謠の眞率性と素朴性とがある。民謠の歌詞と形態とは常に時代に順應し、その眞髓に於ては古今を通じて一貫した民族の精神を精神としてゐる。日本民謠の淵源は遙かに神代にある。嚴密に云へば、民謠はその生れるところに、俗謠・三絃樂に伴ふ各種の唄ひもの、或は小唄・琴曲等とはその相を異にしてゐる。極めて純正なる土俗の野調であるからである。この民衆と鄕土との聲であつた日本の民謠も、明治維新以來、多くはその地方色と野調とを失つて俗謠化されて行つた。今なほ本來の面目を保つ民謠の正調は、極めて稀れに見る狀態にある（明治以前の民謠に就いては「歌謠」參照）。以下に述べるところは、明治以後に至り、詩人によつて創作され復興されたもので、實は新民謠として在來の民謠とは區別されなければならぬものである。

【沿革】〔明治期〕明治二十四年に中西梅花の「浦のとまや」等が「國民之友」に發表された。新體詩人の民謠風の創作は、これ等が最も早いものであらう。しかし「浦のとまや」は純然たる民謠ではなく、小唄（別項）に近いものであつた。その後も民謠調の詩作は可なり見られたが、眞に民謠と稱すべきものは見られなかつた。その間にあつて、明治の三十年代、文庫派（別項）の全盛期に、夜雨の「お才」が著しく鄕土的な民謠調を流露せしめた。これは新民謠發達史の上に極めて注目さるべきものである。その他當時詩作の傍ら、時として民謠の

創作に漸次熱意を示して來た人に、高安月郊・平木白星・前田林外・薄田泣菫・岩野泡鳴等があつた。蒐集・研究・評論等も目立つて來た。中にも泣菫の民謠體は特に注意すべきものである。個人の民謠集では、明治三十八年三月に出版された野口雨情の「枯草」を以て嚆矢とするが、彼の民謠は當にその片鱗を示したにすぎなかつた。北原白秋には、三十七八年の

つた新童謠の作家の簇出雲の如く、その童謠の普及日に盛んで、新時代の民謠も愈々確實性を帶びて來つつ、蒐集・研究・論戰も亦愈々詩壇的となつた。この期には白秋の作が最も多かつた。雨情も民謠童謠に復活した。彼はその鄕土茨城の方言を用ひて固有の野調を成した。最近に至り、各鄕土地方に創作新民謠大に興り、その歌詞・歌曲を詩人に委囑して、

し、遊樂に身を任せてゐた。偶々佐々木家の重寶百蟹の圖を將軍に披露せんと上京した名古屋三郎左衞門の子山三郎は、これを諫めたが聽かれず、後、伴左衞門は藤波に懸想して追放され、山三郎も歸國させられた。そこで忠臣佐々良三八郎は藤波を斬つて立ち退き、又同夜佞臣の一人長谷部雲六は百蟹の圖を盜んで逐電する。翌日伴左衞門

楓は蛇にまつはられる身となつた。しかも[illegible]て道犬を滅さんとの志から、密かに彼等の動靜を探つてゐることが知れて討手が差向けられ、南無右衞門は栗太郎の首を斬つて月若と僞り、楓が因果の身を賣つて得た百蟹の圖を携へ、若君を奉じて妻と共に河内に落ち、月若と妻を此處に殘し、桂之助夫妻を尋ねて旅

たといふべきである。〔柳田（國）〕

明朝綴（みんてうとぢ） 書誌學 【解說】 冊子本（別項）の綴ぢ方の一種で、和裝本に普通に用ひられるもの。綴ぢ目の方の紙端から一定の距離に數個の孔を穿ち、糸を一つの孔に通して背にまはして再び同じ孔に通し、その後、次の孔に通して、こゝでも、また背にまはして再びその孔に通し、更に次の孔に進んで同様の手續を繰返すもので、本の上下兩端に近い孔では、糸を背へまはすと共に、また上又は下の木口の方へもまはして、本の背の部分を密着して離れぬやうにする。袋綴（別項）の本には、この綴ぢ方を用ひるのが普通である。〔橋本〕（圖書參照）

に附記せる譯者の註解は、彼自身の思想並に當年の政治思想を瞥見する資料としても面白い。「政理叢談」は佛國の政治思想の傳播者として有名であり、又それだけの功績もあるが、就中兆民の「民約譯解」は廣く江湖に傳唱されて多大の影響を與へたと言はれてゐる。思想的に根柢深い影響を與へたかどうかは疑ひあるも、恰も民權自由論の旺盛を極めた時代であるから、豫て盛名を傳聞してゐるルソオの代表作だからと云ふので到る處に持て囃されたことは想像に餘りある。永い間ルソオの邦譯と云へば、この「民約譯解」の外にないかに考へられたのも、該書が極めて廣く頒布された一證であらう。

「新日本文學之一大現象」を以て標榜し、藻鹽草の一欄を設けて毎號、森田思軒・依田學海等當時に重きを爲した人々の飜譯・隨筆の類を載せ、更に新年附錄及び夏季附錄には諸名流及び新人の小說・詩歌の類を掲げた。これによつて文壇に名を成した人も少くない。文藝評論は初めは專ら石橋忍月が執筆したが、後には八面樓（宮崎湖處子）と内田不知庵（魯庵）が文學評論の筆をとつた。且つ「十二文豪」（別項）その他史傳・史論の刊行によつて、民友社同人の名は廣く世に知られ、文壇の一勢力となつた。その中心人物は德富蘇峰である。後、小說の上に於て、蘆花・獨歩等が頭角を擡げた頃には、もう民友社派といふ名稱は次第に文壇

來の民謡とは區別されなければならぬものである。

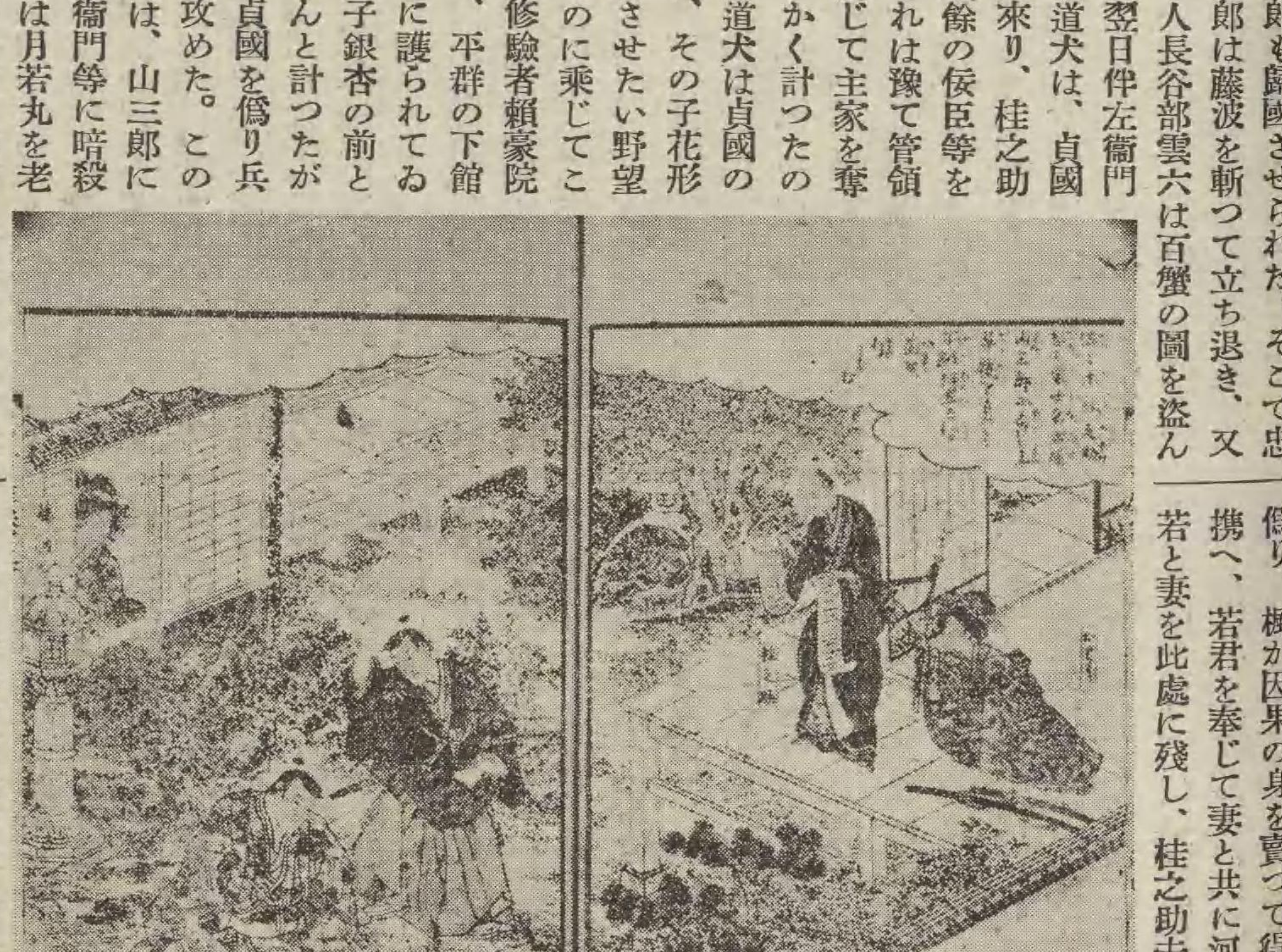
【沿革】〔明治期〕明治二十四年に中西梅花の「浦のとまや」等が「國民之友」に發表された。新體詩人の民謡風の創作は、これ等が最も早いものであらう。しかし「浦のとまや」は純然たる民謡ではなく、小唄（別項）に近いものであつた。その後も民謡調の詩作は可なり見られたが、眞に民謡と稱すべきものは見られなかつた。その間にあつて、明治の三十年代、文庫派（別項）の全盛期に、夜雨の「お才」が著しく鄕土的な民謡調を流露せしめた。これは新民謡發達史の上に極めて注目さるべきものである。その他當時詩作の傍ら、時として民謡の創作に漸次熱意を示して來た人に、高安月郊・平木白星・前田林外・薄田泣菫・岩野泡鳴等があつた。蒐集・研究・評論等も目立つて來た。中にも泣菫の民謡體は特に注意すべきものである。個人の民謡集では、明治三十八年三月に出版された野口雨情の「枯草」を以て嚆矢とするが、彼の民謡は啻にその片鱗を示したにすぎなかつた。北原白秋には、三十七八年の頃、雜誌「文庫」に發表した幾多の詩篇の中に、田園の俳味に傳說・土俗等を交へた、その一派の聲調を遣つたものがある。それ等の詩には今日に於ける民謡詩人としての芽生はあつても、純然たる民謡とは云へなかつた。その後葛飾の紫煙草舍時代に「秋の鄙唄」などを作つた。それと同時期、或はやゝ遲れて民謡の創作を時に公けにした人々に、雨情の外、木下杢太郎・三木露風・川路柳虹・福田夕咲・平井晩村等があつた。詩人の作に成る新民謡（むしろ新俗謡）の流行を來したのは、大正三年頃に飜譯劇トルストイの「復活」中に松井須磨子によつて歌はれた島村抱月・相馬御風合作の「カチユーシャの唄」に因を發した。次いで、同じ藝術座の「生ける屍」の劇中の唄として大正六年北原白秋の作「さすらひの唄」、その他「カルメン」劇中の、色々の俗謡小唄の類が引續いた。低調ではあつたが、詩人の歌謡が民衆の中に傳播し、流行すること著しかつた爲めに、民謡の爾後の勃興に關與したと思はれる。尤もこれは或は又禍したかも知れぬ。後に雨情の船頭唄「枯れ薄」が震災前の世を盛んに騒がせたことは周知の事實である。

【大正期】 大正に入つて新民謡の氣勢が昂つて來た。一つには七年七月童話童謡雜誌「赤い鳥」（別項）の創刊によつて以來、自覺の上に立つた新童謡の作家の簇出雲の如く、その童謡の普及日に盛んで、新時代の民謡も愈々確實性を帶びて來つつ、蒐集・研究・論戰も亦愈々詩壇的となつた。この期には白秋の作が最も多かつた。雨情も民謡童謡に復活した。彼はその鄕土茨城の方言を用ひて固有の野調を成した。最近に至り、各鄕土地方に創作新民謡大に興り、その歌詞・歌曲を詩人に委囑して、眞によき「彼等の民謡」を得て、土地の發展、民心の高揚を期しつつある。〔内藤〕

む

昔話稲妻表紙（むかしがたりいなづまへうし） 讀本 五巻六册 【作者】 山東京傳 【畫工】 歌川豐國 【名稱】 角書に（不破伴左衞門 名護屋山三）とあり、略して「稲妻表紙」といふ。元祖團十郎以來の市川家の「不破」の扮裝に據つてゐる。【刊行】 文化三年 【諸本】 有朋堂文庫・京傳傑作集（帝國文庫）・山東京傳集（近代日本文學大系）・讀本集（日本名著全集）所收。【題材】 例言に近松門左衞門の「傾城反魂香」（別項）に據つて作るとあるが、寧ろ土佐節の「名古屋山三郎」、竹田小出雲・三好松洛合作の「丹州爺打（てうち）栗」等の淨瑠璃、「伽羅（めいぼく）先代萩」（別項）「伊達競（はでくらべ）阿國戲場」等の歌舞伎を多く參照し、又享保十五年の八文字屋本「契情阿國歌舞伎」の趣向をも假りて不破伴左衞門・名古屋山三郎のことを芝居仕立に仕組んだものである。

【梗概】 大和の國主佐々木貞國嫡子桂之助は、足利義政に召されて京に出仕したが、近侍の不破伴左衞門等に薦められて白拍子藤波を愛し、逸樂に身を任せてゐた。偶々佐々木家の重寶百蟹の圖を將軍に披露せんと上京した名古屋三郎左衞門の子山三郎は、これを諫めたが聽かれず、後、伴左衞門は藤波に懸想して追放され、山三郎も歸國させられた。そこで忠臣佐々良三八郎は藤波を斬つて立ち退き、又同夜侫臣の一人長谷部雲六は百蟹の圖を盜んで逐電する。翌日伴左衞門の父執權不破道犬は、貞國の使者として來り、桂之助を勘當し、殘餘の侫臣等を追放した。それは豫て管領濱名入道に通じて主家を奪はんと企み、かく計つたのであつた。又道犬は貞國の妾蜘手の方が、その子花形丸に家督を得させたい野望を抱いてゐるのに乘じてこれと結び、惡修驗者頼豪院の妖術を以て、平群の下館に名古屋父子に護られてゐた桂之助の妻子銀杏の前と月若丸を失はんと計つたが果さず、遂に貞國を僞り兵を以てこれを攻めた。この時三郎左衞門は、山三郎に根を含む伴左衞門等に暗殺され、山三郎は月若丸を老女に託し、銀杏の前を護つて奮戰したが、遂に奥方を奪はれ、忠僕鹿藏と共にその弟猿二郎を頼つて河内に遁れた。一方老女も追手の難に遭つたが、月若丸は佐々良三八郎に救はれて丹波に隠れ、三八郎今の六字南無右衞門は藤波の死靈に崇られ、伜栗太郎は盲目、娵楓は蛇にまつはられる身となつた。しかも豫て道犬を滅さんとの志から、密かに彼等の動靜を探つてゐることが知れて討手が差向けられ、南無右衞門は栗太郎の首を斬つて月若と僞り、楓が因果の身を賣つて得た百蟹の圖を携へ、若君を奉じて妻と共に河内に落ち、月若と妻を此處に殘し、桂之助夫妻を尋ねて旅に上つた。一方道犬の手に捕へられた銀杏の前は、岩倉谷に斬られんとしたが、當時金剛山に隠棲してゐた英傑梅津嘉門によつて救はれた。その後桂之助は虚無僧となつて流浪し、近江石山寺の開帳の當日難に遭ふが、辻談義となつてゐた山三郎の僕猿二郎に救はれ、藤



昔話稲妻表紙（挿畫）

波の兄大津の繪師湯淺又平方に匿まはれた。こゝに圖らずも旅に出てゐた南無右衞門も宿り、又平はその妹藤波の仇なるを知るが、彼の誠忠、且つ妻の再生の恩人なるによつて、その笠を刺して恨を晴らし、桂之助に引合せた。なほその時三八郎は長谷部雲六の來るを捉へて自害させ、又見世物となつてこの地に來てゐた娘楓に會し、携へた百蟹の圖の奇特で、楓の蛇の呪が解かれ、これによつて又平は畫法の祕義を悟つた。翌日桂之助の一行は河內を指して大津を立つたが、その後桂之助は梅津嘉門の藏する兵書を得て、管領由利之助勝基に依らんと志し、金剛山の嘉門の許に到つたが、恰も勝基は嘉門を軍師に迎へんとして來り、且つ嘉門は桂之助の緣者とわかつたので、桂之助は此處に保護されてゐた銀杏の前とも會ひ、勝基・嘉門を後楯として大和に歸參することになつた。京にあつて鹿藏と共に仇を尋ねてゐた名古屋山三郎は、故あつて春雨に燕の飛びかふ模樣を染めた衣裳を着けて五條坂の廓を徘徊し、同じ廓に出沒する村雲に稻妻模樣の裝束を着けた不破伴左衞門一味を狙ひ、遂に遊女葛城の手引と父の知己梅津嘉門に助けられて仇を討つた。やがて嘉門は勝基の名代として大和の佐々木の館に乘り込み、賴豪を證人として蜘手の方・道犬の惡業を發いてこれを滅した。

【構想】 御家騷動を中心とし、正邪善惡を廻つて勸懲を寓する作意に、歌舞伎淨瑠璃から取材し、多く歌舞伎の仕組に據つてゐる。筋の複雜を計つて興味を多くしようとしたのである。卽ち「傾城反魂香」に據つたといふのは、不破名古屋をお家騷動に繋がうとした爲めであつて、その騷動は「伽羅先代萩」とその姉妹關係を有つ「伊達競阿國戲場」に藉りて、絹川谷藏・絹川の與右衞門を佐々良三八郎（六字南無右衞門）とし、高尾を藤波とした。なほ「丹州爺打栗」を參照して、栗太郎の月若丸身代りの條を、狂言「女歌舞伎千代始」を小說化した「契情阿國歌舞伎」から、湯淺又平が南無右衞門の笠を刺して妹藤波の恨を晴らす條を潤色し、殊に土佐節の「名古屋山三郎」に據つて卷末の趣向を構へてゐる。かゝる結構の跡は甚しく傳奇的で場面の變化がめまぐるしく、人物が錯綜して事件を作つてゐるやうな感がする。結合補綴したものが融化してゐない。ただ不破名古屋の話よりは、佐々良三八郎の孤忠が主として描かれ、それに興味が繫つてゐる。

【影響】 かやうに歌舞伎仕立の本篇は、又歌舞伎に轉用されることが多かつた。文化五年、大阪中の芝居に「けいせい品評」、角座に「けいせい輝草紙」、文政六年、江戶市村座に「浮世柄比翼稻妻」として上演された。しかも京傳の新しい工夫になつた山三の濡燕の衣裳は、後の「鞘當」（別項）に定まつた模樣となつた。なほこれにて完結してゐるに拘らず、文化六年、この後編「本朝醉菩提全傳」（別項）が出版された。

【參考】 近代小說史（藤岡作太郎）○山東京傳集解說○讀本集解說○京傳傑作集解說 〔笹野〕

昔語質屋庫（むかしがたりしちやのくら） 讀本 五册

【作者】 曲亭馬琴 **【畫工】** 勝川春亭 **【刊行】** 文化七年、大阪河內屋太助板。**【諸本】** 曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郎編）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】 南都に程遠からぬ六田の鄕の質屋好事屋寶樹は、一夜庫の中に盛んに語り合ふ者のあるに驚いて覗けば、道具類が假の姿を現はしてゐるのであつた。その座に老翁あり、卽ち讀書見臺で頻りに儒道を說き、各人の主張を述べんことを勸めると一人の若者が起つた。古金襴の袋小袖に金覆輪の袴をはき、銅金造り嚴めしい赤銅鈉子に丸鞘の帶を締めて意氣揚々たる有樣は、一見して友切丸と知れたが、彼は曾我五郎に伴はれて工藤祐經を討つた無銘の太刀なりと名乘り、友切丸と誤り稱せられるに至つた由來を詳細に辯じ、五郎の人と爲り、仇討の顚末、北條氏の陰謀にまで說く。次に大磯の虎が曾我十郎の形見として祕藏した蕣に帽額の紋の外に衞の縫紋をつけた今樣小袖八丈絹の縹紲が起ち上つて、衞の縫紋は戲作者の想像に成つたことを語り、五郎の衣裳に蝶をつける謂れ、家傳の鎧、逆澤瀉のこと、虎御前のこと、曾我兄弟の系圖等を語りつゞけた。次いで轉び出でたのは一個の古太鼓、名乘るを聞けば諸葛孔明の陣太鼓であつて、孔明歿後轉々して諸家の手に渡つたが、杜世忠の船に乘つて日本に渡來したものである。漢の正統論、三國志の批判、更に我が南朝の史論にまで及んだが、その論極めて高きために一座の倦怠を招き、拍子拔けして引下つた。次に現はれたのは俵藤太龍宮入の弓袋、承平の頃秀鄕勢田橋上にて大蛇に逢ひ、その懇願により龍宮に到つて大敵百足を退治した物語を述べ、更に龍宮の有無に就いて古今東西の說を引いて考證したので、皆々感嘆せぬはなかつた。次には石堂丸の脚絆が名指されたが、この脚絆は實は大和の五條の丁稚石之助のもので、讃岐の金毘羅に拔け參りせんとて果さず、高野に詣で歸り來つて主人に叱られ、懲しめのため、脚絆に石堂丸の高野詣と誌されたのが、何時しか本物に誤り傳へられたのであると自白して滿座の笑を買つた。そこへ一遍上人の遺物なる水晶の珠數が進み出て、かの苅萱物語は一遍上人悟道の始末と祈親法師の高野詣とを合せて作り出した小說であることを語つた。時に片隅より傲然と立ち出でたのは、平將門の袞龍の裝束である。見臺先生、これに問ふに六項の疑問を以てすれば、裝束一々に返答し、謀叛の始末、貞盛の事蹟等多く「將門記」を引いて說き明かした。次に出たのは眉間尺の髑髏杯と記された唐木の箱である。中から跳り出たのは巴を描いた木彫の杯であつたので、皆々失望すれば杯は眉間尺の不思議なる物語をし、巴の繪と深彫の故にこの忌はしい名をつけられて迷惑すると語つた。見臺先生、徐ろに古書を引き、眉間尺の話の由來を論じて杯を慰めた。そのうしろに橘逸勢の軸があり、軸中の尼は逸勢の一女妙沖で、涕泣して語るには、逸勢の悲運、自らその亡き跡に庵を結んで菩提を弔つた事情、又「文德實錄」を引いて父の罪を雪ぐのであつた。次は仁明帝の頃、帝の戲れに御船氏主に比べられた力士氏長の犢鼻褌が現はれ、世を經るまゝに何時しか紀名虎のものと誤り稱されて、文德帝の御子惟喬・惟仁兩親王の皇位爭奪の時、角力の勝負に依つてこれを決せんとて、孔雀業平と取組んで敗れ、遂に皇位は惟仁親王に定まつたといふ巷談を生じたのを憂へて、「三代實錄」を引いてその事實の無根なるを指摘した。次には袈裟御前の袿被が座に出で、母の命を救はんために盛遠に身を任せ、後恥ぢて夫に代つて盛遠の手に殺された袈裟の苦衷を語り、盛遠の後半生を物語ると共に、三人の態度に就いて是非の判斷を下した。最後に現はれ出たのは、蘭奢の香いみじき五衣で、卽ち金毛玉面九尾の狐の裘であつた。「下

學集」を引いて玉藻前の物語をなし、「保元物語」を引いてその典據を考へ、終りに和漢の書を擧げて九尾の狐の瑞獸なるを證した。折しも遠寺の鐘の聲聞え、早や夜明けも近づいたので、忽ち一同は見えずなつた。

【構想】 質屋の庫にある道具類が、一夜各々その身の上を語る體にして、著名なる歷史上の

白紙に捺す。奉納の陽の劔を血で穢したので、家老廣岡團右衞門の勸めで刀鍛冶赤坂庄內と稱する者に淸めさせた處、庄內實は蟠龍と呼び、廣岡と一味して刀をすりかへる。蟠龍は祕密を湯島宗才に知られ、それを殺害する。受取役秩父重忠は陽の劔が贋であると知り、もとは東之助が勝山に心を奪はれた爲めであ

東之助の詮議する刀の持主も、湯島主水の養父の敵も、幸右衞門であると分る。東之助はこれより關東小六と名乘り、五條坂の揚屋で大友幸右衞門實は入間野大領猛虎を亡す事は續編に述べるとある。

【解說】 「奴勝山愛玉丹前」（文化八年刊、山東京山作）から多くヒントを得てゐるが、背景となる

ない。昔話の要件は寧ろその形式にあつた。古くは「伊勢物語」「今昔物語」「宇治拾遺物語」（各別項）を初めとし、降つて江戶初期の「私可多咄」（別項）等に至るまで、文籍の上にもその形はよく遺つてゐる。最初に「昔々」、又は「今は昔」などと言擧げて、必ずしも現世の常識によつて眞僞を判定せんとする勿れの意味を寓

て五條坂の廓を徘徊し、同じ廓に出沒する村雲に稻妻模樣の裝束を着けた不破伴左衞門一味を狙ひ、遂に遊女葛城の手引と父の知己梅津嘉門に助けられて仇を討つた。やがて嘉門は勝基の名代として大和の佐々木の館に乘り込み、賴豪を證人として蜘手の方・道犬の惡業を發いてこれを滅した。

【構想】 御家騷動を中心とし、正邪善惡を廻つて勸懲を寓する作意に、歌舞伎淨瑠璃から取材し、多く歌舞伎の仕組に據つてゐる。筋の複雜を計つて興味を多くしようとしたのである。即ち「傾城反魂香」に據つたといふのは、不破名古屋をお家騷動に繫がうとした爲めであつて、その騷動は「伽羅先代萩」とその姉妹

「鞘當」（別項）に定まつた模樣となつた。なほこれにて完結してゐるに拘らず、文化六年、この後編「本朝醉菩提全傳」（別項）が出版された。

【參考】 近代小說史（藤岡作太郎）○山東京傳集解說○讀本集解說○京傳傑作集解說 （笹野）

昔語質屋庫（むかしがたりしちやのくら）　讀本　五冊

【作者】 曲亭馬琴 **【畫工】** 勝川春亭 **【刊行】** 文化七年、大阪河內屋太助板。**【諸本】** 曲亭馬琴翁叢書（野村銀次郎編）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）所收。

【梗概】 南都に程遠からぬ六田の鄉の質屋好事屋寶樹は、一夜庫の中に盛んに語り合ふ者のあるに驚いて覗けば、道具類が假の姿を現はしてゐるのであつた。その座に老翁あり、

の史論にまで及んだが、その論極めて高きために一座の倦怠を招き、拍子拔けして引下つた。次に現はれたのは俵藤太龍宮入の弓袋、承平の頃秀鄕勢田橋上にて大蛇に逢ひ、その懇願により龍宮に到つて大敵百足を退治した物語を述べ、更に龍宮の有無に就いて古今東西の說を引いて考證したので、皆々感嘆せぬはなかつた。次には石堂丸の脚絆が名指されたが、この脚絆は實は大和の五條の丁稚石之助のもので、讃岐の金毘羅に拔け參りせんとて果さず、高野に詣で歸り來つて主人に叱られ、懲しめのため、脚絆に石堂丸の高野詣と誌されたのが、何時しか本物に誤り傳へられたのであると自白して滿座の笑を買つた。そ

比べられた力士氏長の犢鼻褌（ふんどし）が現はれ、世を經るまゝに何時しか紀名虎のものと誤り稱されて、文德帝の御子惟喬・惟仁兩親王の皇位爭奪の時、角力の勝負に依つてこれを決せんとて、孔雀業平と取組んで敗れ、遂に皇位は惟仁親王に定まつたといふ巷談を生じたのを憂へて、「三代實錄」を引いてその事實の無根なるを指摘した。次には袈裟御前の桂被（うちかけ）が座に出で、母の命を救はんために盛遠に身を任せ、後恥ぢて夫に代つて盛遠の手に殺された袈裟の苦衷を語り、盛遠の後半生を物語ると共に、三人の態度に就いて是非の判斷を下した。最後に現はれ出たのは、蘭奢の香いみじき五衣で、即ち金毛玉面九尾の狐の姿であつた。「下

學集」を引いて玉藻前の物語をなし、「保元物語」を引いてその典據を考へ、終りに和漢の書を擧げて九尾の狐の瑞獸なるを證した。折しも遠寺の鐘の聲聞え、早や夜明けも近づいたので、忽ち一同は見えずなつた。

【構想】 質屋の庫にある道具類が、一夜各々その身の上を語る體にして、著名なる歷史上の人物を捕へ來り、これに縱横に考證論評を加へたものである。以上十二話の外に、目次には第十三、崇徳院天狗の爪取剪。第十四、鎌倉時代の上下。第十五、米嚢上人の乞食袋とあるが、この初編五卷のうちにはない。「夢想兵衞胡蝶物語」と同樣、馬琴の側面を現はす彼の讀本中の異色あるものである。即ち論證の明快にして作者の思想精神が十分に窺はれ、しかもその間に趣向の變化が巧妙になされて頗る興味がある。「近世物之本江戶作者部類」に、年々摺出すと、その流行を敍してゐる。佳作と言ふべきであらう。

【參考】 曲亭馬琴集解說 （笹野）

昔語丹前風呂（むかしがたりたんぜんぶろ）　合卷　六冊合二冊・前後二編

【作者】 式亭三馬 **【畫工】** 歌川國直 **【名稱】**「關東小六、津國勝山」の角書がある。別名を「丹前風呂昔繪容（たんぜんぶろむかしゑすがた）」といふ。**【刊行】** 文化九年鶴屋板 **【題材】**「奴勝山愛玉丹前（やつこかつやまむすめたんぜん）」（文化八年刊、山東京山作）。「關東小六」「神靈矢口渡」（別項）等に據る。

【梗概】〔前編〕後鳥羽院の御宇、武藏國の住人豐島左衞門は賴朝公の命により、家寶の陰陽二振の劍のうち陽の劍を舍弟東之助をして三田八幡に奉納させる。その際東之助は戀人勝山のたつての願ひで、家の重寶の印判を入れた袋を見せた處、同じ勝山を戀する荏原判官の息子司馬太郎は、勝山を欺いてその印を白紙に捺す。奉納の陽の劍を血で穢したので、家老廣岡團右衞門の勸めで刀鍛冶赤坂庄内と稱する者に淸めさせた處、庄内實は蟠龍と呼び、廣岡と一味して刀をすりかへる。蟠龍は祕密を湯島宗才に知られ、それを殺害する。受取役秩父重忠は陽の劍が贋であると知り、もとは東之助が勝山に心を奪はれた爲めであるからとて、百日の期間で詮議させ、一方、東之助の失敗を喜ぶ司馬太郎も不品行のために追放される。重忠の駕籠に鐵砲を擊ち込んだのは蟠龍で、重忠に捕へられた處、伜の幸右衞門が父の首を斬つて立ち去る。蟠龍の懷中から豐島左衞門の家印の捺してある一味連判狀が現はれ、疑ひは豐島家にかゝり、忠臣篠輪津左門は色々と苦心する。左門の父池之進は自害し、陰の劍をも奪はんとする廣岡の心を伜左門に見定めさせる。〔後編〕豐島左衞門は供人を從へて立ち退き、矢口の渡で、船頭幸右衞門に殺害される。東之助の乳母武藏野は勝山を伴つて逃げたが、途中はぐれて左門と共に殿の御跡をたづね、左門は矢口の渡で幸右衞門の手にかゝる。勝山は眞の鍛冶赤坂庄内方に身を寄せ、戶棚の中へかくまはれる。庄内の娘お六の聟にならうとする幸右衞門と竹芝の網藏の二人は互に聟あらそひをする。庄内の實子は幼少の時に湯島宗才に貰はれ、湯島主水と名乘る。東之助は刀の詮議に出で、主水の風呂敷包を拾ひ、自ら主水と僞つて庄内に對面し、陽の劍の僞物を作らせ、一時事を有利に運ばうとする。庄内は東之助を兄としてお六に引合はせた處、既にお六は東之助と契つてゐたので、怒つて幸右衞門に二人を斬らせ、お六は死し、東之助は無事である。網藏實は湯島主水で、且つ庄内の實子である。東之助の詮議する刀の持主も、湯島主水の養父の敵も、幸右衞門であると分る。東之助はこれより關東小六と名乘り、五條坂の揚屋で大友幸右衞門實は入間野大領猛虎を亡す事は續編に述べるとある。

【解說】「奴勝山愛玉丹前」（文化八年刊、山東京山作）から多くヒントを得てゐるが、背景となる土地や活躍する人物の名には、思ひ切つて江戶市內及びその附近を指示する方法を用ひてゐる。演劇より得た關東小六・勝山・矢口の渡等を加味し、丹前風呂の說明などは、例の細かく仕切つた三馬常套の挿繪の手法で丁寧に行つて居り、今日の雜誌めいた感を持つてゐる。筋は複雜であるが趣向作柄共に平凡で、且つ間に合せであつて言ふに足りない。三馬は本町二丁目に藥店を出して、店の經營に力を注ぎ、この年は創作は本書一部のみで、他はみな前年の創作であると自記してゐる。「其寫繪劇俤（そのうつしゑかぶきのおもかげ）」（文化八年刊、式亭三馬作）は、法界坊を題材にするとはいへ、手法・挿繪その他に於て本書に類似する點が多い。多忙の三馬は、手近の寄せ集めによつて本書を創作したものである。續編の筋を本書の末尾に記してゐるが作品は未見である。 （小池）

昔話（むかしばなし）

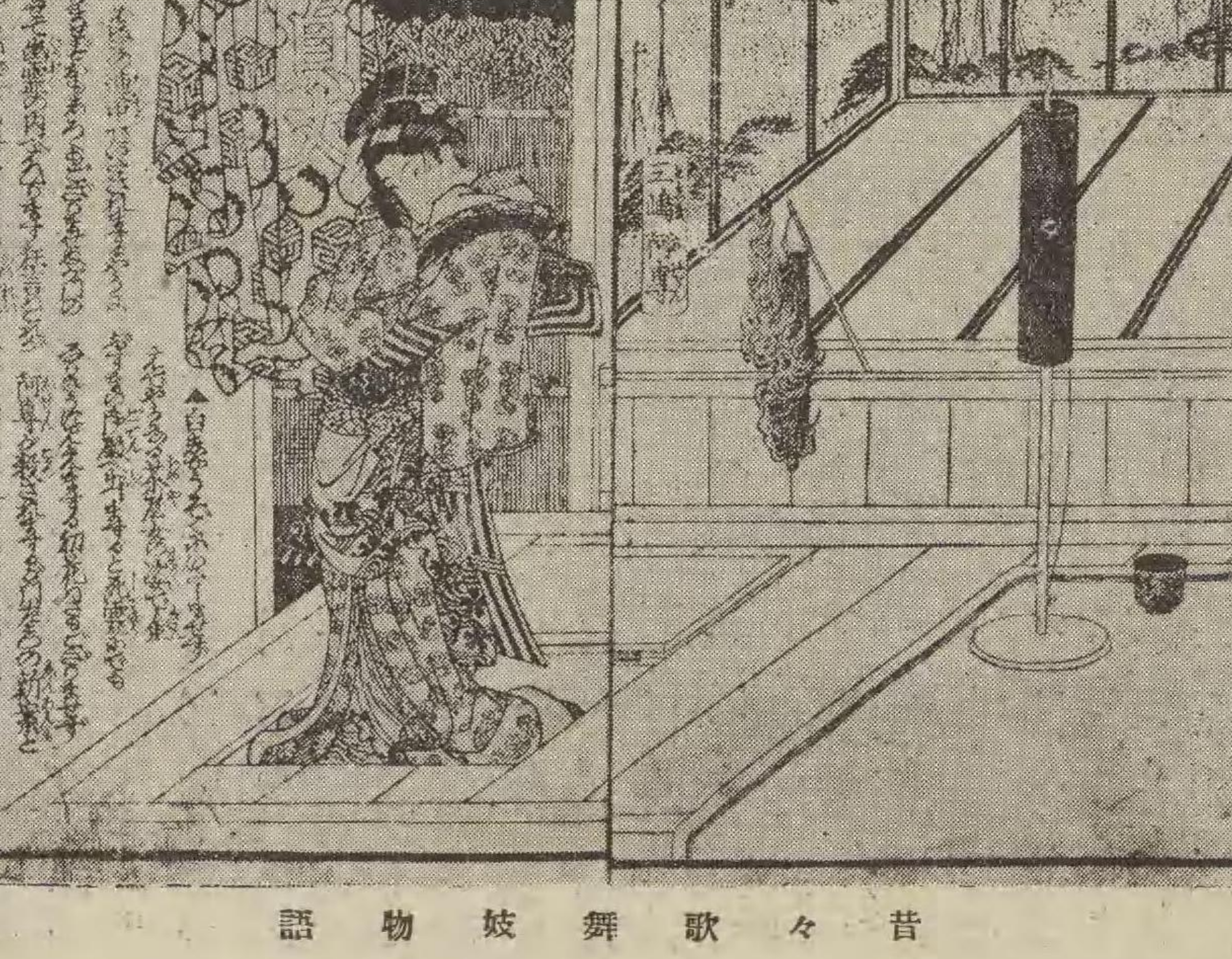
【解說】 ハナシといふ日本語の未だ普及しなかつた時代には、昔物語と云つてゐたのが同じものである。西洋には丁度これに該當する學語はないけれど、なほ我々がこの語を棄て得ないのは、一つにはその範圍の明確なためであつて、必ずしも久しく祖先がこれを使用してゐたといふ物なつかしさだけからではない。今日では多くの人が、昔の話だから昔話といふのだと簡單に解するやうになつたが、實は昔の話の全部が昔話ではない。昔話の要件は寧ろその形式にあつた。古くは「伊勢物語」「今昔物語」「宇治拾遺物語」（各別項）を初めとし、降つて江戶初期の「私可多咄」（別項）等に至るまで、文籍の上にもその形はよく遺つてゐる。最初に「昔々」、又は「今は昔」などと言擧げて、必ずしも現世の常識によつて眞僞を判定せんとする勿れの意味を寓したことが、恐らくはこの名稱の基づく所であつたらう。今日の俗言でも地方に由つては單にこれをムカシと云ひ、ムカシ〳〵と呼んでゐる者が多い。乃ち英語の Once upon a time と同樣に、元は昔話に限つて必ず定まつた文句を以て始まることになつてゐたのである。この頃普通のものは「昔々或所に」であるが、江戶でも或る時代には「昔々あつたとさ」と切り、又は今日の出雲地方の如く、「とんと昔」といふこともあつたと見えて、トントンカチカチといふ小兒語も遺つてゐる。仙臺では「ざつと昔」、越後の蒲原平原には「有つたてんがのに」、信州松本邊では「昔あつたさうな」、奧州津輕には「昔ア有つたずオん」といふ形が行はれてゐた。話の終末にも亦一定の文句があつた。奧州にはドンドンハライ、コレデドンドハレなどと云ふのもあれば、津輕のやうにトツチバレ、ソゴトツテトツチバレといふ例もある。ハラとは多分「是でおしまひ」といふこと、即ち何物をも語り殘さずの意であらう。京都などの古風は「それで市が榮えた」といふのであつたが、それが越後に行くと、「エツチがサツカエ、ボロントモゲタ」といふ面白い口拍子に變つてゐる土地もあつた。五十嵐力氏の「趣味の傳說」には、國はどこか知らぬが話の終りにドウビンと云ひ、或はそれを長めて「ドウビン三助、三助アうちに火ア附い

て、權助ア屁で吹つ消した」と唱へる地方があつたといふ。越中では、「語つても語らいでも候」、これも「今昔物語」などの「語り傳へたると也」から、段々に變化したもので、同じ書物には又銀細工延正といふ者が、花山天皇の御戯れを大聲に唱へて、終りに「此事語り保てやおい」と云つたとあるから、舊い形とても始終改まつてゐたのである。話の中程にも色々の形式が元はあつたのであらう。西洋でもよくCriq Craq 話などといふが、これは聽手が睡つたかも知れぬと思ふ時に、話者がクリックといふと、聽手がクラックと應じて決して睡らざることを證する音であつて、我々のフンフンもこれに該當する。奧州では今も話手が童話の一の形として、時々「ムカシこ長くて寢目になつたどす」などといふ文句を入れることもあるさうだ。昔話が尋常の會話と類を同じうせぬことは、この特徵が先づこれを示してゐる。併し本來は、それだから信ぜよといふ趣旨に出たのが、後には次第に滑稽を主とするに至つて、却つて眞面目には受取られざらんことを、目的とするやうになつたのは是非もない。前に引例した終りの文句などは、皆多少の頓狂さがある。或は「昔々のその昔」だの、「ずつと昔の大昔」だのと云つて、最初から遊戲に近い興味を催さうとしたのも、單なる話術の變遷ではなくして、同時に內容の徐々の推移をも暗示してゐると言へるであらう。民譚（別項）即ち民間說話といふ語が、昔話と範疇を一にするか否かは問題である。現時の民譚にはわざと昔々の形式を避けんとするものもあることは事實だが、これとても種々なる變化を試みた上で、到達した所の一境地であるから、なほ昔話の種類の一つに算へてもよい。若しそれが許されるならば、昔話は民譚の日本古名であると言ひ得べく、それが許されなくとも、なほ民間說話の主要なる大部分とは言ひ得る。童話を昔話と對立せしめた一類に立てることは、少くともこの意味に於て誤りである。何となれば、童話ほど嚴重に、この昔々の形式を守つてゐるものはないからである。　〔柳田（國）〕

昔々歌舞妓物語（むかしむかしかぶきものがたり）　合卷二編　各編四冊合二冊　【作者】柳亭種彥　【畫工】歌川國丸（初編）・歌川國貞（二編）　【名稱】初編には「夕霧ふぢのうら葉」、二編には「怪談三島阿專」の副外題が見える。【刊行】天保元年（初編）、天保二年（二編）、西村屋刊。【題材】近松作の脚本「夕霧七年忌」や「水木辰之助餞振舞」（別項）等に據る。

【梗概】〔初編〕夕霧の死後、それに生寫しの島原大阪屋の難波に溺れて勘當された藤屋伊左衞門は、夕霧の七年忌に、二人の間に生れた娘おせきを連れて大阪に來る。おせきは父が島原での借錢を濟ますために、身賣りしたいとて新町へ行く。沙汰無しに大阪へ住み替へた難波津（難波）の不誠實を、伊左衞門は怨み罵るが、それも實は彼の借錢を濟ますためである事がわかる。客と僞つてゐた藤屋の番頭江七は、難波津の心底を見屆け、身請けして目出度く伊左衞門の妻にする。〔二編〕鎌倉扇ケ谷足立家の當主辰馬は箱根へ湯治に行き、その留守に繼母の承知院が家老の轉物や兵藤等と謀つて實の娘夕月を我が甥の兵藤に添はせ、家督を相續させようとし、却つて夕月にその奸計をあばかれ、夕月は遂に兵藤の手にかゝる。紛失した劍小櫻丸の詮議のために、下人伴作となつて住み込んでゐた夕月の許嫁浦波光右衞門は、兵藤から小櫻丸を取戻す。兵藤・轉物は箱根に來り、辰馬の寵愛する湯女のお專を殺して金を奪ふ。お專の怨念は駿州の兄の許に身を寄せた辰馬を夜每に苦しめるが、辰馬に殺害の意志がなかつた事が分り、辰馬を兵藤・轉物の隱家に導き、遂に惡人を亡し、お專の幽靈は解脫する。

【解說】「正本製」（別項）に正本の體裁を眞似て、舞臺の道具立や樂屋の內部、役者の樣を、さながらに描いて甚だしく當てた種彥は、更にこの趣向を延ばし、當時正本物語・芝居ばなし・三座穴探しなどと名づけて落語家が身振を加へ、道具立鳴物入りで歌舞伎狂言その儘を見るやうに語るのを、そのまゝ合卷の世界に導き入れたのが本作品である。從つてその形態に於ても初編上と言ふべきを、「初日前座」と記し、文章も當時の嘶家の「ござります」調を以てし、嘶を寫實する態度である。挿繪もこれに伴つて聽衆を前にした高座の樣を寫してゐる。而も種彥の甘味は、嘶家の似顏を當然用ひる筈の處にも、俳優の似顏をもつてし、芝居ばなしに捕はれないと共に、芝居好の機微に觸れてゐる。挿繪は普通の合卷とは異り、必ずしも每丁挿入せず、文字は大きく嘶本（別項）めかしてゐる。種彥の好古癖は本書にも現はれ、他作品の如くに近松の狂言を語らせてゐ、その元祿歌舞伎劇への傾倒の深さを示して居り、時には例の考證的な記事も挿入される。說話の筋は大體に原作に依據するが、初編には淨瑠璃夕霧物の吉田屋の段を取入れ、二編では人名・場所を改め、各編何れも元祿狂言本の晦澁な筋を平明に說き、構想も多少當時の合卷としての常套的の物に改めてゐる。併しながら古風な題材が餘りに露骨に現はれ、挿繪の變化、文章の綾も乏しく、作品全體が淡く、且つさびれてゐ、讀者にさして喜ばれなかつた。最初の計畫では、七日目即ち七編まで續ける豫定だつたが、僅かに二編で止めてゐる。　〔小池〕



昔々歌舞妓物語

昔々物語（むかしむかしものがたり）　昔話集　寫本一冊　【編者】不詳　【解說】「古今くらべ」の肩書があつて、兒童の喜ぶ古い說話、舌切雀、兎大手柄、獼猴の生膽、浦島が子、桃太郎等の事を斷片的に記載し、又えびす、てんぐ、後妻打等の目を擧げ、その後には極めて雜駁なる覺書やうのものを收めた未完成の書で、新見正朝の「昔物語」（一名八十翁昔語）とは全く別の

つて蘇生させる。「かすみ」は帶屋長右衞門の娘吉やの婿となり、二代目長右衞門となる。伊勢參宮の歸途、お半を助けたのが緣となり、遂に懷姙させ、養家を追はれてお半と桂川で情死しようとする所に、嘗て繼母を殺した下僕けむ四郎に出會つて、敵を討ち、歸參してお半を迎へる。〔四編〕櫻井家の小姓千鳥之介は、お染からの艷書で山中猿二郎に讒言され、

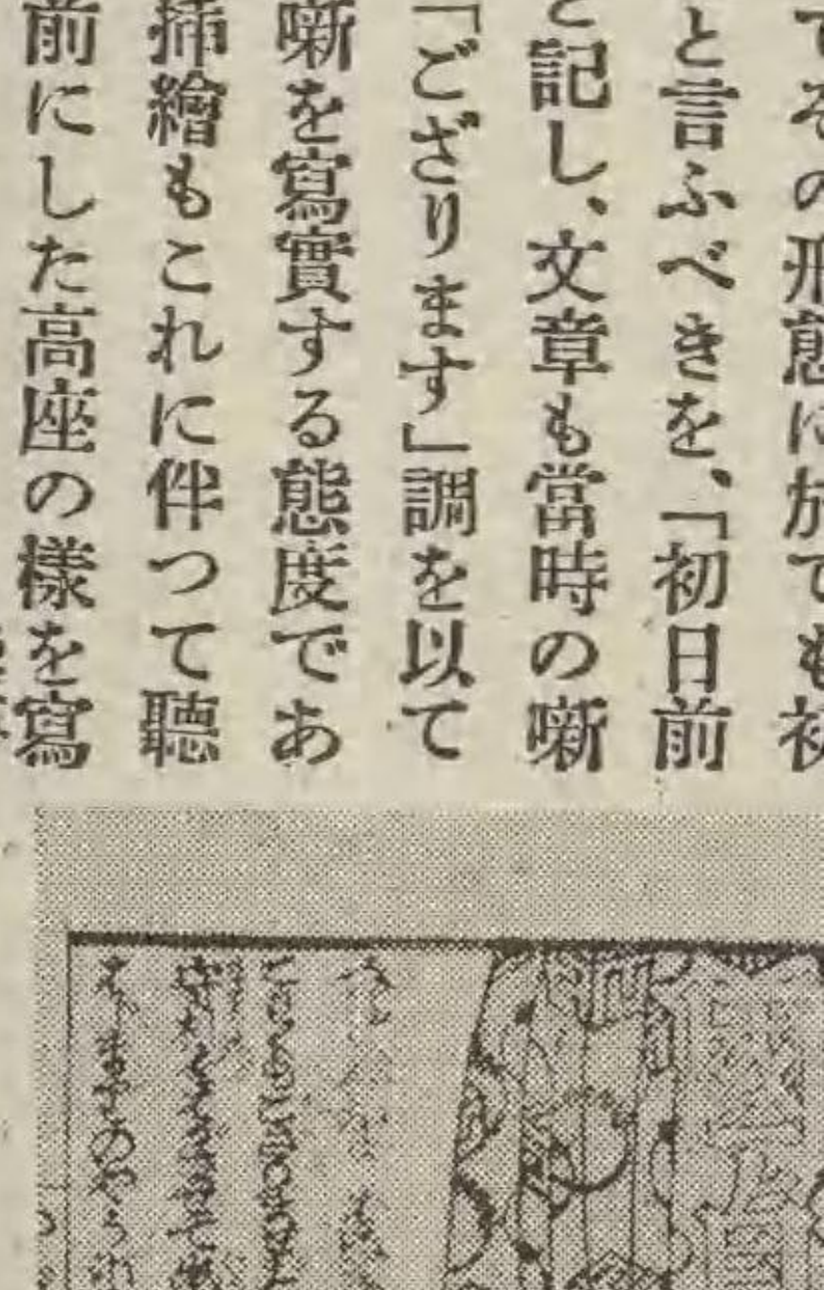
介の持つて出た主用の金を奪はうとして、却つて殺される。心中を決心し、蟹八の刀で幸介がお菊の喉を貫くと、雷鳴が起つたので、調べて見るとそれは尋ぬる寶刀であつた。幸介の兄幸二郎は寶刀を得て歸參し、觀音の身代りで無事でゐたお菊と幸介とは結婚する。【解說】昔模樣と冠らせる題名の如く、お七吉三・お駒才三・お半長右衞門・小金彥惣・お菊幸

も情慾の一面を制し切れぬ半生が偶然ながらやゝ面白く描かれてゐる。題名の關係で三編迄卷頭に頭取・惡口・贔屓・見功者等を設けて評判記の體裁を移し、七問舍自肯及び八文舍似笑の名を署し、自作自評をなして珍奇な趣向の得意さを誇つてゐる。例へば初編に吉三の袖の綻びを縫うてお七が不義の疑ひを受ける所など、その儘第六編にも出してゐる。又本

らんことを、目的とするやうになつたのは是非もない。前に引例した終りの文句などは、皆多少の頓狂さがある。或は「昔々のその昔」だの、「ずつと昔の大昔」だのと云つて、最初から遊戲に近い興味を催さうとしたのも、單なる話術の變遷ではなくして、同時に內容の徐々の推移をも暗示してゐると言へるであらう。民譚（みんだん）（別項）即ち民間說話といふ語が、昔話と範疇を一にするか否かは問題である。現時の民譚にはわざと昔々の形式を避けんとするものもあることは事實だが、これとても種々なる變化を試みた上で、到達した所の一境地であるから、なほ昔話の種類の一つに算へて

とて新町へ行く。沙汰無しに大阪へ住み替へた難波津（難波）の不誠實を、伊左衞門は怨み罵るが、それも實は彼の借錢を濟ますためである事がわかる。客と僞つてゐた藤屋の番頭江七は、難波津の心底を見屆け、身請けして目出度く伊左衞門の妻にする。〔二編〕鎌倉扇ケ谷足立家の當主辰馬は箱根へ湯治に行き、その留守に繼母の承知院が家老の轉物や兵藤等と謀つて實の娘夕月を我が甥の兵藤に添はせ、家督を相續させようとし、却つて夕月にその奸計をあばかれ、夕月は遂に兵藤の手にかゝる。紛失した劍小櫻丸の詮議のために、下人伴作となつて住み込んでゐた夕月の許嫁浦波

編上と言ふべきを、「初日前座」と記し、文章も當時の噺家の「ございます」調を以て、噺を寫實する態度である。挿繪もこれに伴つて聽衆を前にした高座の樣を寫してゐる。而も種彥の甘味（うまみ）は、噺家の似顏を當然用ひる筈の處にも、俳優の似顏をもつてし、芝居ばなしに捕はれないと共に、芝居好の機微に觸れてゐる。挿繪は普通の合卷とは異り、必ずしも每丁挿入せず、文字は大きく噺本（別項）めかしてゐる。種彥の好古癖は本書にも現はれ、他作品の如くに近松の狂言を



語

も多少當時の合卷としての常套的の物に改めてゐる。併しながら古風な題材が餘りに露骨に現はれ、挿繪の變化、文章の綾も乏しく、作品全體が淡く、且つさびれてゐ、讀者にさして喜ばれなかつた。最初の計畫では、七日目即ち七編まで續ける豫定だつたが、僅かに二編で止めてゐる。〔小池〕

昔々物語（むかしむかしものがたり）　昔話集　寫本一冊　【編者】不詳【解説】「古今くらべ」の肩書があつて、兒童の喜ぶ古い說話、舌切雀、兎大手柄、獼猴の生膽、浦島が子、桃太郎等の事を斷片的に記載し、又えびす、てんぐ、後妻打等の目を擧げ、その後には極めて雜駁なる覺書やうのものを收めた未完成の書で、新見正朝の「昔物語」（一名八十翁昔語）とは全く別の書である。〔和田〕

昔模樣娘評判記（むかしもやうむすめひやうばんき）　合卷　六編　各編六册合三册　【作者】山東京山【畫工】歌川國貞【名稱】第二・三編には「今昔娘評判記（いまはむかしむすめひやうばんき）」と記す。【刊行】天保六年より同十三年まで、和泉屋刊。【梗概】〔初編〕失戀の遺恨で、橫島胸藏は星の井家の小姓吉三郎とお七とを謀り、二人が死刑になる所を一乘寺の住職が救ふ。お七は實家の八百屋へ連れ戾され、吉三郎は奧方の命令で紛失の印子の鷄を搜す。偶々貪欲者の釜屋武平の甥直介を殺し、八百屋半兵衞方へ身を隱す。土左衞門傳吉が武平を斬つて胸藏が盜んで預けて置いた鷄を取戾す。惡人共の舊惡が露顯し、吉三郎は歸參してお七を妻とする。〔二編〕月輪家の臣尾花秋之進は、預りの勝閧の刀を盜まれ、伜采女は髮結の才三郎と身を窶す。白五屋の娘お駒は父正兵衞の借金のために、腹黑い番頭丈八の肝入で浪人橫島非藏を婿に强ひられる。才三郎は刀詮議の爲めお駒と駈落して夫婦になる。盜賊だと知られ行方を晦ましてゐた非藏を才三郎は討ち勝閧を取戾して歸參する。〔三編〕今出川の家中、花守かすみは五條坂雁金屋の半太夫に馴染み、駈落の途中、半太夫は流產して死んだが、その魂魄は病死した信濃屋の娘お半に宿つて蘇生させる。「かすみ」は帶屋長右衞門の娘吉やの婿となり、二代目長右衞門となる。伊勢參宮の歸途、お半を助けたのが緣となり、遂に懷姙させ、養家を追はれてお半と桂川で情死しようとする所に、嘗て繼母を殺した下僕けむ四郎に出會つて、敵を討ち、歸參してお半を迎へる。〔四編〕櫻井家の小姓千鳥之介は、お染からの艷書で山中猿二郎に讒言され、奧方の內意で、獅子王丸の刀を探すべく野崎村の實家に行く。油屋時二郎方へ奉公してゐる双生兒の弟久松を娘お染が戀する。時二郎は遊女浦里に馴染み、その金策のため久松は無實の罪を受け土藏に入れられる。時二郎は浦里を土藏に隱したところ、猿二郎が藏を破り、浦里と金とを奪ひ去る。久松も遁れ出てお染と情死せんとする所を捕へられる。時二郎の叔父は久松にお染を添はせ、身請けした浦里を時二郎に與へる。獅子王丸の刀も千鳥之介の手に戾る。〔五編〕下總の與右衞門が鎌で殺した介坊主の怨念で、娘累は醜貌に變り、親子三人巡禮に出る。鎌倉の宿屋で生れた男子を何者かに奪はれたが、それより商賣を始めて富み榮える。松戶竹之進の息彥惣は遊女きぬ川に馴染んで勘當され、累の店の手代となる。彥惣を主の威光で意に從はせた累は、彼がきぬ川のために我が金を消費したのを憤る。きぬ川・彥惣は、心中せんとして竹之進の弟龜藏（祐念上人）に救はれ、彥惣は龜藏がさらつた累の實弟、きぬ川は竹之進の實子なる事が分る。累は懺悔して剃髮し、怨念も去り、彥惣きぬ川は夫婦になる。〔六編〕里見家の浪人繼橋幸介は寶刀雷鳴丸詮議のため、福祿屋壽助方へ手代奉公をする。この家の娘お菊は幸介を戀して屋敷から暇を取る。番頭蟹八は幸介の持つて出た主用の金を奪はうとして、却つて殺される。心中を決心し、蟹八の刀で幸介がお菊の喉を貫くと、雷鳴が起つたので、調べて見るとそれは尋ぬる寶刀であつた。幸介の兄幸二郎は寶刀を得て歸參し、觀音の身代りで無事であつたお菊と幸介とは結婚する。【解説】昔模樣と冠らせる題名の如く、お七吉三・お駒才三・お半長右衞門・小金彥惣・お菊幸助等を主人公にし、累與右衞門・お花半七・お初德兵衞・尾上岩藤・お千代半兵衞等、人口に膾炙した人物の名を借り、古い淨瑠璃歌舞伎の綯交ぜや織込みの部分的趣向の新味を誇るのが作者の意圖であつた。併しその構想手法は各編千篇一律に流れてゐて說話の興味は少い。京山の娘が屋敷奉公をしてゐるのを、本作の娘は殆ど總て屋敷勤めの者で、暇を取つた後、以前同家中にゐたが今は町人になつてゐる美男との關係を描くのに終始してゐる。かゝる女性が當時の讀者の中心であり、京山の理想であつた。固より戀愛には多分の同情を寄せてはゐるが、第三編の帶屋の娘吉やには男女間の關係もなく、冷靜に男を眺め勤めに精出す理智的な屋敷の女を描き、第六編のお菊にその正反對の女の型を描いてゐる。かくの如く多少女性の氣質に留意し、敎訓的に述べる所、後の「敎草女房氣質」（別項）や「敎訓乳母草紙」（自弘化元年初編至嘉永六年十編、山東京山作）等への推移が豫想される。又第五編で累一家の致富の心掛けを描き、第二編に番頭に左右される白五屋の記述などに、「大晦日曙草紙」（別項）などと共通する傾向が窺はれる。京山の描くこれ等の女性は性格的に極めて曖昧で、ただ累に、純情の處女が宿命的な災難から世の中を白眼視し、物質的な滿足に至りつつも情慾の一面を制し切れぬ半生が偶然ながらやゝ面白く描かれてゐる。題名の關係で三編迄卷頭に頭取・惡口・贔屓・見功者等を設けて評判記の體裁を移し、七問舍自肖及び八文舍似笑の名を署し、自作自評をなして珍奇な趣向の得意さを誇つてゐる。例へば初編に吉三の袖の綻びを縫うてお七が不義の疑ひを受ける所など、その儘第六編にも出してゐる。又本作以前にも試みたことであるが、第三編以後は全篇十數段に分ち、院本風な、若しくは浮世草子風の小題目がつけられてゐる。〔小池〕

無關心性（むくわんしんせい）　藝術論　〔獨〕Interesselosigkeit【解説】美的快感は吾々が對象に對して現實的實際的興味を絕つところに成り立つことを指す概念である。カントが實際的快感、或は善から美的快感を區別するために美的快感を「無關心の快適」であるとした後、美の假象性（別項）を重要視する觀念論的美學では一般に重要な概念となつてゐる。近代美學では、寧ろこの概念の重要さは次第に失はれる傾きがある。例へばギュヨーによれば、藝術の目的は社會的感情を生起せしめることにあるとするから、そこに目的的興味の必然的參與を認めねばならない。又創作の意識に於て對象に對する意志的關心の參與、鑑賞意識に於て對象についての知的興味が參與することを說く學者は多い。例へば吾々の文學鑑賞に於て、その內容の「傾向」に關心することは、全く美意識の統一を破壞するものではない。【參考】ギュイヨオ原著　石上是介譯　現代美學の諸問題（美的關心の項參照）〔村田〕

無關心の關心（むくわんしんのくわんしん）　藝術論　〔獨〕Interesse ohne Interesse.【解説】カント美學に於ける無關心性（別項）の概念を受け

ついで、シラアが註解した用語である。對象に對する吾々の實際的利害得失の觀念を離れた無關心な心構へを持することによつて、よりよく對象に關心して行くところの緊張した態度を美的態度の特徴と考へたのである。（美的緊張參照）。〔村田〕

無窮會文庫（むきゆうくわいぶんこ）　文庫【所在】東京市西大久保【沿革】故井上頼圀氏の藏書を收藏したものである。大正十四年井上氏の易簀の後、その藏書約五萬五千册の散佚を恐れ、平沼騏一郎氏發起となり、これを購入した。【藏書】主として國史・國文に關するものが大部分を占め、漢籍の如きは一小部分にすぎない。〔植松〕

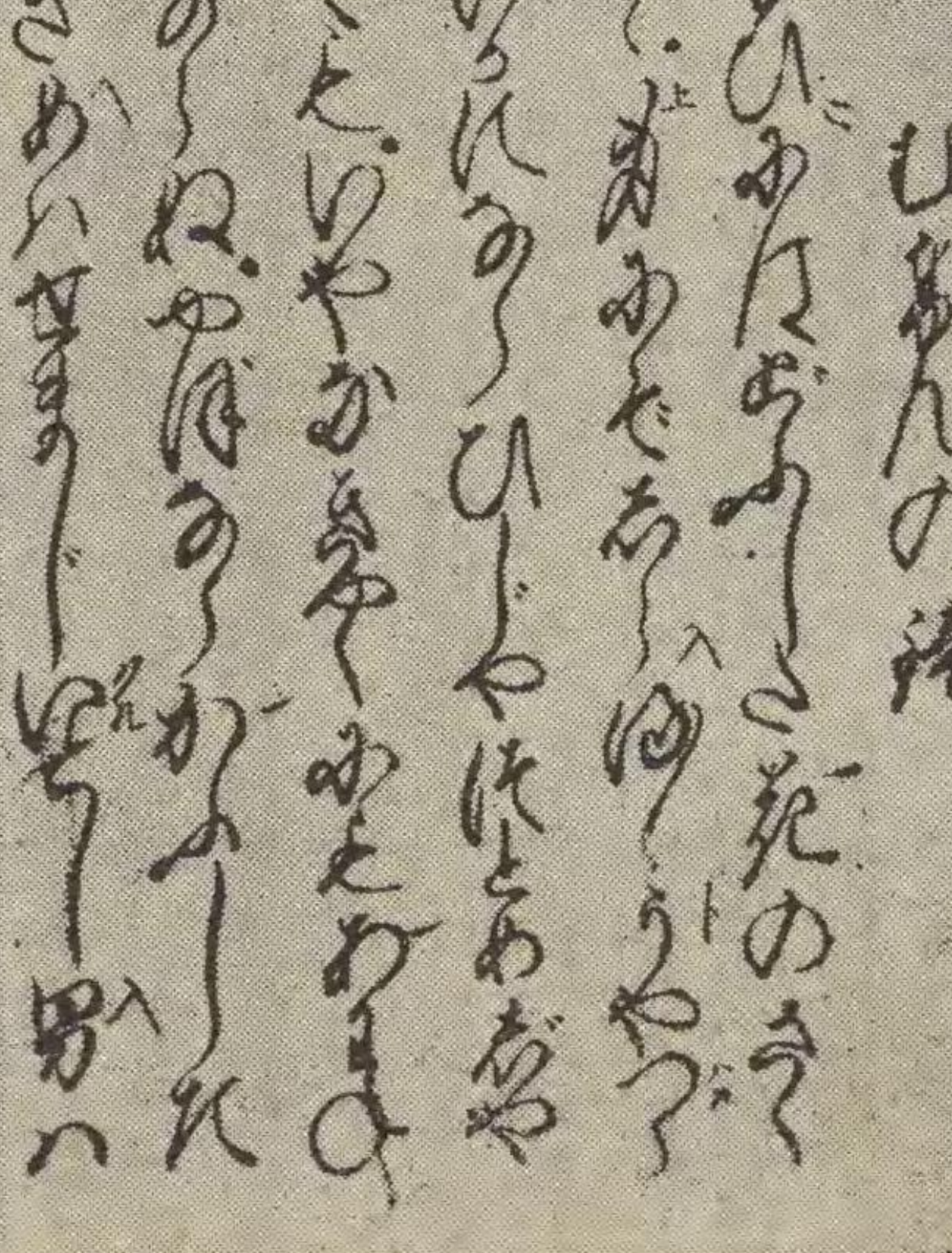
無弦弓（むげんきゆう）　詩集【著者】河井酔茗【刊行】明治三十四年一月、內外出版協會【解說】處女詩集である。その扉に、「吾一張の弦無き弓、放たぬ征矢にも響きなからんや」と述懷してゐる。「希臘半島」の七七調一篇の外はすべて七五調で、中に最後の一句を七七調で止めた長歌體のものを交へてゐる。反歌の如く一首或は數首の短歌を据ゑたり、またはこれを埋草にしたりしてゐる。詩三十三篇、小曲十五篇、他に十數首の短歌を收む。すべて抒情詩の域を出づるものではないが、溫藉にして平明といふ語は、本書の作風を最もよく表はしてゐる〔北原〕

夢現境（むげんきやう）　小說【作者】矢崎嵯峨の屋【發表】明治二十四年一月、「國民之友」。【刊行】國民小說に收めて刊行。【梗概】明治二十三年晚冬或る日の深夜、詩人孤影が上野公園の觀音堂で寒月を仰いで感慨に耽り、人生を悲觀してゐるところへ、一人の美女が現はれて彼を慰める。それは赫奕姬だつた。姬は孤影を雲に乘せて廣寒殿へ導いた。彼は王侯のやうに好遇されて歡を盡したが、或る夜、姬は觀月に案內すると云ひ、深更共に補陀落山へ行き、月界の大王に拜謁した。その際、人界の樣子を問はれて種々物語り、大王の感賞を得たが、當座の興にもと、彼は弓矢を用ひて、空を渡る雁を射落したところ、見る〳〵雁は一丈餘の大きさとなり、彼の罪を罵ると、彼は千丈の谷へ顚落し、身を打碎かれんばかりだつた。もう月宮もない、姬もゐない。怒濤の聲のみ聞えると思ふ刹那、夢は覺めた。彼は叫んだ「自分を救ふものは神より外にない」と。【批評】作者は、抒情詩を散文の形で書いたと言つてゐるだけに、小說としては大分異色あるもの。純情はあるが蕪雜で柔靭性のない技巧では、こんな題材はこなし切れない。それに寓意も奇警とは言はれない。〔高須〕

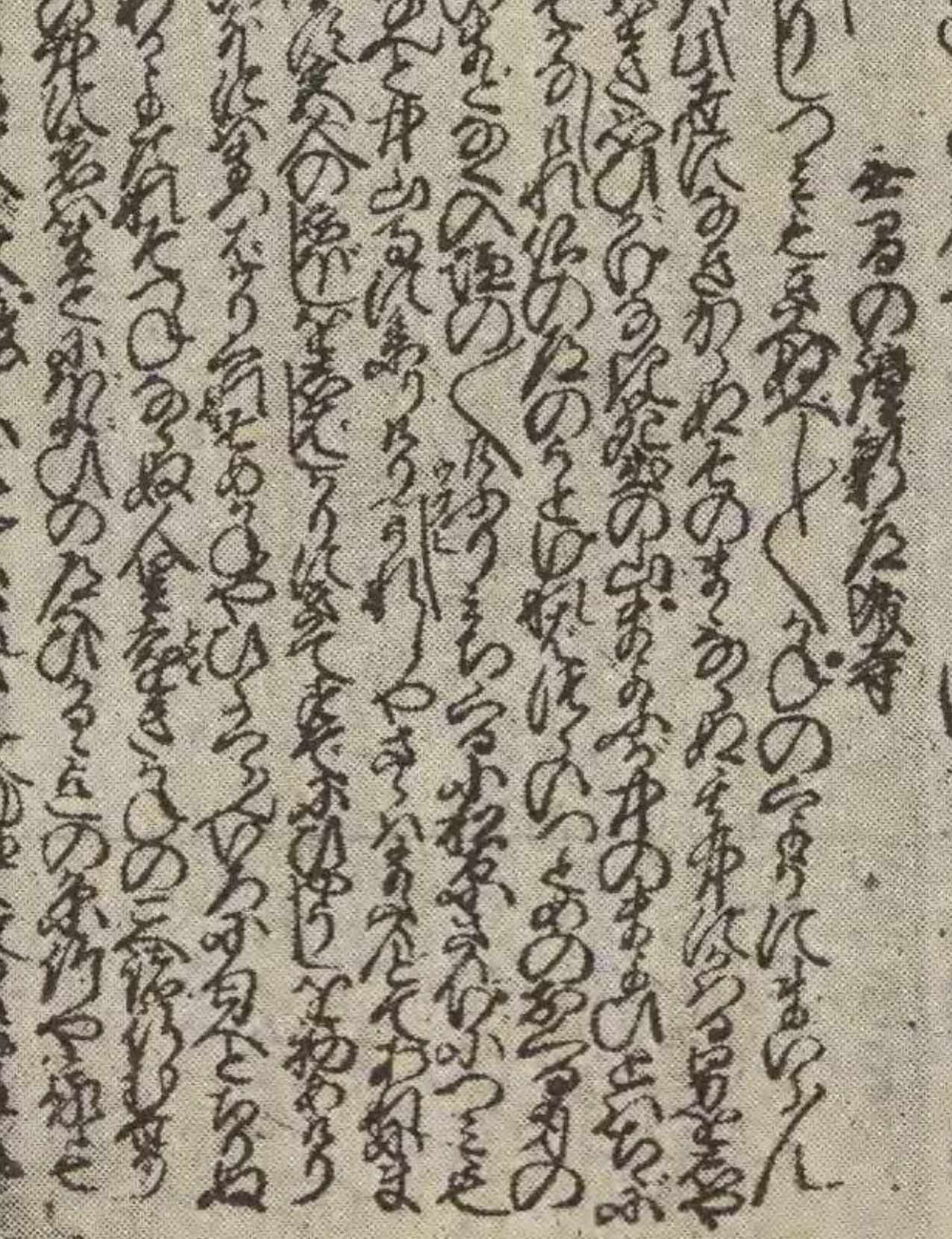
夢幻能（むげんのう）　「謠曲」を見よ。

無間の鐘（むけんのかね）　「ひらがな盛衰記」を見よ。

無間鐘（むげんのかね）　所作事【通稱】無間【題材】遠江國小夜郡西山村にある無間山觀音寺（現光明山）の釣鐘を撞けば、來世は必ず無間地獄に墮ちるといふが、この世では福德を得て富貴の身となるといふ所謂小夜の中山の無間の鐘の傳說を所作化したもの。【沿革】これを歌舞伎に脚色した始めは、元祿二年大阪荒木與次兵衞座の「傾城小夜の中山」で、名女方谷島主水が傾城裏葉の役で無間鐘の所作事を演じて好評を得、次は同十四年京都早雲座で、鐘だけを芳澤あやめが撞き、所作は水木辰之助が演じたのが著名である。その後種々他の俳優によつても行はれ、操淨瑠璃でも享保八年七月豐竹座に、紀海音作の「傾城無間鐘」（別項）が上場せられた。併し後世の「無間鐘」の基準をなした手水鉢を撞く型は、初代瀨川菊之丞に創まる。卽ち享保十三年春京都萬太夫座（座本市山助五郎）の「けいせい滿藏鑑」で、六右衞門娘おすま後に傾城金山といふ役で手水鉢を鐘になぞらへて、手拭掛で打つたのが初めである。これを更に翌同十六年春江戸に下つて中村座で演じた。「傾城無間鐘」（後出）が大喝采を博して、菊之丞の名を不朽ならしめると共に無間物の代表曲ともなつた。さうしてその仕種は、その儘操淨瑠璃の「ひらがな盛衰記」（別項）第四段目に取入れられて益々名高くなり、「梅が枝の手水鉢云々」とまでうたはれるに至つたのである。この菊之丞の無間鐘が非常な大當りを取つたので家藝となつたが、その後明和へかけて流行し、瀨川菊次郎・中村富十郎・中村粂太郎・嵐雛助・二代吾妻藤藏等の女方は勿論、市川海老藏・澤村長十郎（初代訥子）・藤川平九郎・大谷龍左衞門・中村助五郎等の立役もそのやつしを盛んに演じたので幾多の種類が生じた。內容は眼前の難儀を助けたさに無間地獄に墮ちると知りながら、急場の幸福を願つて鐘をつくといふのが骨子をなしてゐる。急を救はれる者は戀人であつたり、夫・親・主人など樣々である。曲節は長唄のメリヤスものが大半であるが豐後節でも演じられた。併し後世には專ら「ひらがな盛衰記」に據る無間鐘が行はれるやうになり、長唄の、殊に菊之丞の無間鐘は漸次顧られなくなつた。



けいせい無間の鐘（めりやす正本）



無間鐘新道成寺（長唄正本）

【主要種目】【長唄】傾城無間鐘（後出）○無間の鐘石の帶（通稱帶無間。元文四年春河原崎座。坂東豐三郎所演）○思の緋櫻（通稱新無間。寬保二年春市村座。初代瀨川菊之丞所演）○鯉無間（寬延二年春中村座。市川海老藏所演）○無間の鐘（梅ケ枝の無間。「盛衰記」に據つたもので、下卷は義太夫節。寶曆三年六月市村座。中村粂太郎所演）○花雲忠義金（通稱鮟鱇無間。寶曆六年春市村座。二代大谷廣次所演）○無間鐘（通稱三千兩の無間。寶曆九年正月市村座。市村龜藏所演）○あけぼの櫻（通稱男無間。寶曆十一年春森田座。中村助五郎所演）○むかし草（明和元年五月市村座。二代瀨川菊之丞所演）○萩の風（明和六年七月中村座。四代市川團十郎所演）等。【常磐津】忠臣無間鐘（長唄との掛合。寶曆

十三年九月市村座。九代市村羽左衞門所演）○正銘無間鐘（明和四年九月中村座。三代芳澤崎之助所演）○廓操無間の鐘優（安政元年三月市村座。二代中村富十郎所演）等。【富士松】無間鐘　思曉（延享三年春中村座。初代瀨川菊之丞所演）。

【傾城無間鐘】【通稱】無間【別名題】廓花葛城鐘【初演】享保十六年三月江戸中村座「傾情禍引名護屋」第二番目【曲節】長唄【作詞】

て武藏國玉川堤防工事巡見の時、川畔の向が岡の邊に旅寓中、土人金澤氏その他から聞いた事や親しく見た物につき、又餘暇に讀んだ古書等からの感想を叙述したもので、自序の終りに「文化五年戊辰季冬小盡、南畝大田覃、題二于多磨郡之是政驛一、時歲六十」とある。【諸本】新百家說林（蜀山人全集）・日本隨筆大成卷七所收。【解說】玉川沿岸の地誌の如き

說いてある。慶長二年の自跋、同三年紹巴の跋、同年の空性親王の奧書、同四年の紹巴の奧書、同八年の應其の奧書がある。本書中の伊呂波詞の如きは、一千四百二十五字の去嫌、一座百韻何句物などの差別、及びその所屬を註し、殆ど一切の詞花言葉を網羅した連歌大字典の如くであり、四季の景物を註した季詞及びこれに紛れ易い非季詞も、三百八十餘に

を迎へ擊ち、義興が矢口で殺されたことを喚き立て、驚く二人を討ち取る。秩父の家では、七日經つても二人の消息が少しもないのみかいろ〳〵不吉な風說が聞えるので、母と娘とが心配してゐる。娘の忍藻は多少武藝の嗜みがあつたので、一夜密かに武裝して夫の後を追ふ。夜明けて母が下人等と大騷ぎをしてゐる最中、民部の知人大内平太が訪れて義興の

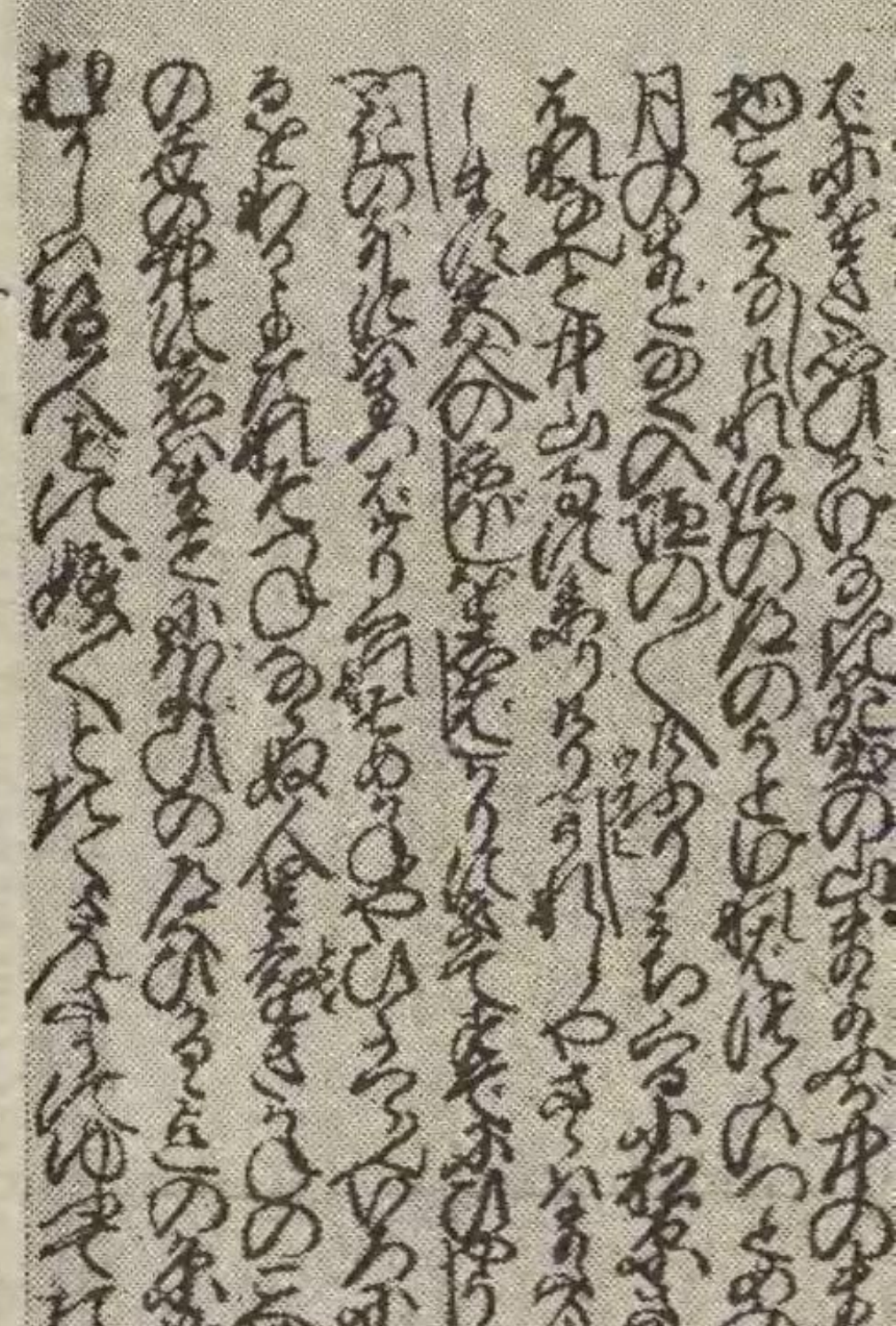
はすべて七五調で中に最後の一句を七七調で止めた長歌體のものを交へてゐる。反歌の如く一首或は數首の短歌を据ゑたり、またはこれを埋草にしたりしてゐる。詩三十三篇、小曲十五篇、他に十數首の短歌を收む。すべて抒情詩の域を出づるものではないが、温藉にして平明といふ語は、本書の作風を最もよく表はしてゐる　〔北原〕

夢現境　小說【作者】矢崎嵯峨の屋【發表】明治二十四年一月、「國民之友」。【刊行】國民小說に收めて刊行。【梗概】明治二十三年晚冬或る日の深夜、詩人孤影が上野公園の觀音堂で寒月を仰いで感慨に耽り、人生を悲觀してゐるところへ、一人の美女が現はれて彼を慰める。それは赫奕姬

無間の鐘　「ひらがな盛衰記」を見よ。

無間鐘　所作事【通稱】無間【題材】遠江國小夜郡西山村にある無間山觀音寺（現光明山）の釣鐘を撞けば、來世は必ず無間地獄に墮ちるといふが、この世では福德を得て富貴の身となるといふ所謂小夜の中山の無間の鐘の傳說を所作化したもの。【沿革】これを歌舞伎に脚色した始めは、元祿二年大阪荒木與次兵衞座の「傾城小夜の中山」で、名女方谷島主水が傾城裏葉の役で無間鐘の所作事を演じて好評を得、次は同十四年京都早雲座で、鐘だけを芳澤あやめが撞き、所作は水木辰之助が演じたのが著名である。その後種々他の俳優によつても行はれ、操淨瑠璃でも享保八年七月豐竹座に、紀海音作の「傾城無間鐘」（別

十郎・中村粂太郎・嵐雛助・二代吾妻藤藏等の女方は勿論、市川海老藏・澤村長十郎（初代訥子）・藤川平九郎・大谷龍左衞門・中村助五郎等の立役もそのやつしを盛んに演じたので幾多の種類が生じた。內容は眼前の難儀を助けたさに無間地獄に墮ちると知りながら、急場の幸福を願つて鐘をつくといふのが骨子をなしてゐる。急を救はれる者は戀人であつたり、夫・親・主人など樣々である。曲節は長唄のメリヤスものが大半であるが豐後節でも演じられた。併し後世には專ら「ひらがな盛衰記」に據る無間鐘が行はれるやうになり、長唄の、殊に菊之丞の無間鐘は漸次顧られなくなつた。



鐘新道成寺（長唄正本）

金（通稱鮟鱇無間。寶曆六年春市村座。二代大谷廣次所演）○無間鐘（通稱三千兩の無間。寶曆九年正月市村座。市村龜藏所演）○あけぼの櫻（通稱男無間。寶曆十一年春森田座。中村助五郎所演）○むかし草（明和元年五月市村座。二代瀨川菊之丞所演）○萩の風（明和六年七月中村座。四代市川團十郎所演）○等。〔常磐津〕忠臣無間鐘（長唄その掛合。寶曆

十三年九月市村座。九代市村羽左衞門所演）○正銘無間鐘（明和四年九月中村座。三代芳澤崎之助所演）○廓操無間の鐘優（安政元年三月市村座。二代中村富十郎所演）等。〔富士松〕無間鐘思曉（延享三年春中村座。初代瀨川菊之丞所演）。

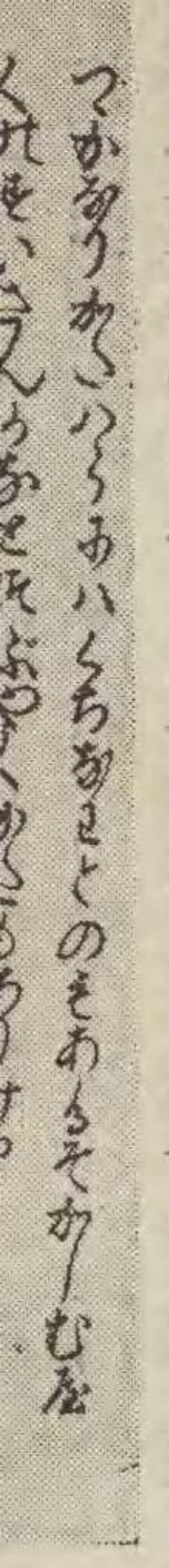
【傾城無間鐘】〔通稱〕無間〔別名題〕廓花葛城鐘〔初演〕享保十六年三月江戶中村座「傾情福引名護屋」第二番目〔曲節〕長唄〔作詞〕村瀨源三郎〔作曲〕杵屋太十郎、但し一說に七代杵屋喜三郎ともいふ。〔琴三絃〕杵屋文次郎〔唄〕坂田兵四郎〔傳來〕曲のみ傳存、但し故老の間に僅に命脈を保つてゐる。〔內容〕傾城葛城（初代瀨川菊之丞）が可愛い夫（名古屋山三）が金に詰まつた難儀を救はんため、手水鉢を鐘になぞらへて杓で打てば、一心通じて小判が降る。葛城は夢ではないかと狂喜して、袖を引きちぎつて金を包む。（初日に舞臺で金を包む物を忘れた爲めに早速に衣裳の袖を引切つて包んだその思入れと仕打とが喝采を得たので、これが型になつたのだといふ）。〔備考〕本曲に連關して、第三番目に「無間鐘新道成寺」（一名中山道成寺とも、傾城道成寺ともいふ）を同じく長唄で演じた（道成寺參照）。また本曲以後菊之丞が演じた別曲に、前出の「無間鐘思曉」と「思の緋櫻」（新無間）とがある。なほ本曲は江戶長唄メリヤス物の嚆矢とされてゐて有名である。【參考】劇代集（二代櫻田治助）○役者全書（歌舞伎叢書、金港堂）○歌舞伎年代記○近世邦樂年表○無間鐘考說　黑木勘藏（近世演劇考說）○無間鐘の沿革と年表　秋葉芳美（しがらみ三ノ七）○日本歌謠集成卷九○歌舞伎圖說　〔秋葉〕

向岡閑話　隨筆　三卷【著者】大田覃【成立】著者が文化五年春、公命を以て武藏國玉川堤防工事巡見の時、川畔の向が岡の邊に旅寓中、土人金澤氏その他から聞いた事や親しく見た物につき、又餘暇に讀んだ古書等からの感想を敘述したもので、自序の終りに「文化五年戊辰季冬小盡、南畝大田覃、題二于多磨郡之是政驛一、時歲六十」とある。【諸本】新百家說林（蜀山人全集）・日本隨筆大成卷七所收。【解說】玉川沿岸の地誌の如きものともいふべく、附近一帶の名勝・社寺・舊家・古蹟等が漏れなく記されてゐる。上卷に、向岡以下四十五則、中卷に泉谷瓦礫集抄以下十九則、下卷に延喜式神名帳抄以下四十九則を收めてある。文化六年眞彥、同年印南野樵の跋がある。眞彥の跋によると、著者のこの時の出張は前後百六日間で、この間に綴つた書は「調布日記」附錄共三冊、「玉川餘波」一冊、「家傳」一冊、「玉川砂利」一冊と、この「向岡閑話」三冊、外に摸圖・緣起・拓本等を輯めて「玉川披砂」と題したもの若干冊がある。〔和田〕

無言抄　連歌書　三卷三冊【著者】木食興山上人應其【成立】天正八年【刊行】慶長八年。自跋及び奧書によれば、天正七年起稿、翌年脫稿し、紹巴の披閱を請ひ、函底に藏して置いたのを再び手を加へ、數次紹巴の校閱を經、慶長二年に開版を企て、同八年刻成つたもので、二品空性法親王の奧書によると、外題は勅賜に係るものである。【解說】連歌の式目書で、式目濫觴より始め、伊呂波詞、四季詞、非レ季詞、神祇、釋敎、述懷、哀傷、山類、水邊、體用之物、可レ隔二三句一物、可レ隔二五句一物、可レ隔二七句一物、一面可レ嫌物、輪廻、嫌詞、可二思惟一事、發句切字の事、句數之事、本歌取樣之事、執筆の事、一度法度の事、會席作法の事、和漢篇に至る二十五項を擧げて說いてある。慶長二年の自跋、同三年紹巴の跋、同年の空性親王の奧書、同四年の紹巴の奧書、同八年の應其の奧書がある。本書中の伊呂波詞の如きは、一千四百二十五字の去嫌、一座百韻何句物などの差別、及びその所屬を註し、殆ど一切の詞花言葉を網羅した連歌大字典の如くであり、四季の景物を註した季詞及びこれに紛れ易い非レ季詞も、三百八十餘に上つてゐる。これ等の記載を通じて、應安の「連歌新式」（別項）以來の制規が多少變更されて來つてゐる跡を見る事が出來る。卽ち本書は校閱者紹巴の說に據ることの多いものである事が推せられる。貞德が「御傘」（別項）に、屢々本書の說を引いて異議を述べてゐるが、併し本書に負ふ所も少くないので、談林派から却つて非難されてゐる。【著者小傳】應其は、木食上人として知られる人で、初名日齋、字は順良、楚仙と號した。初め近江の佐々木氏及び高取の越智氏に仕へてゐたが、天正元年高野山に入つて僧となり、採菓汲水の功を積むこと多年、寺社の修造を勸進すること八十一回、豐公の信賴を受けて大佛建立の事を監し、興山寺を創建した。連歌は紹巴に就いて學び、紹巴の批點を加へた百韻も遺つてゐる。慶長十三年歿す。享年七十二。〔福井〕

武藏野　小說【作者】山田美妙【發表】明治二十年十一月、讀賣新聞附錄【刊行】同二十一年八月刊、短篇集「夏木立」（別項）に收錄。明治大正文學全集所收。【梗概】武藏野の秋の暮れ方を、新田方の與黨たる老若二人の武士（秩父民部とその娘婿世良田三郎）が、大將義興の鎌倉入りに合しようと野道を急いでゐる。それと探り知つた敵は二人を迎へ擊ち、義興が矢口で殺されたことを喚き立て、驚く二人を討ち取る。秩父の家では、七日經つても二人の消息が少しもないのみかいろ〳〵不吉な風說が聞えるので、母と娘とが心配してゐる。娘の忍藻は多少武藝の嗜みがあつたので、一夜密かに武裝して夫の後を追ふ。夜明けて母が下人等と大騷ぎをしてゐる最中、民部の知人大內平太が訪れて義興の橫死と二人の討死を語り、併せて驚くべき報知、野獸に喰はれた女武者の死骸のことを語る。そこへ村人が忍藻が熊に喰はれたことを知らせて來る。【批評】美妙の出世作で、當時の讀書界を文字通りに驚倒させたもの。これといふ山のない淡々とした時代物語だが、その自然さ素直さが却つて好い印象を與へる。全篇感情と空想との所產で、ロマンチックな幾分夢幻的な美しさをもつ、歷史小說といふより寧ろ散文詩に近いものである。出る人物も夢幻的に見える。やゝ現實的な輪廓のあるのは忍藻だけであらう。だが當時の讀書界を第一に魅了したものは新しい言文一致と「おぢやる」詞とを綯ひまぜたその文章の新味であつた。殊に敘景の文に感嘆した。造句や措辭のマンネリズムから來る嫌味はあつても、全體に清新な美しさが溢れた作で、今日讀んでもなほ佳作と感じられる。當時忍月は「厭卷の傑作、其價値を言ひ現はすに苦む」とまで激賞し、不知庵も亦「非常に驚嘆した」と言つてゐるし、嵯峨の屋は「武藏野を見て心の底から動かされ、二葉亭と二人で、かうしてはゐられぬと語合つた」と言つてゐる。【影響】歷史小說に主情的詩美を盛つた點で、特に矢崎嵯峨の屋に著しい影響を與へた。又古俗語復活の點も文壇的に相

落葉の上に座を占めて各々歌を詠み、三十首に及んだ時、藪の下蟇（ひきがへる）の主張で俄に歌合をし、蟇が判者に推されたが、第十五番に蛇（くちなは）と番へられたのを怖れて、判をせずに席を捨てて竹林の落葉の下に逃げ込んだ。【影響】「鳥歌合」以下、異類歌合物の一系統



名は蟲麻呂、姓（かばね）は連（むらじ）【生歿】未詳【閱歷】「萬葉集」卷六天平四年の部の最初に、藤原宇合（うまかひ）が西海道の節度使となつて下る時、蟲麻呂の贈つた長歌と反歌とがある。これが彼の作の明記された唯一の例で、彼の生存年時を知る唯一の資料である。天平四年は聖武帝の御代奈良の朝が、初期から中期

は常陸國、卷九相聞部の「鹿島郡苅野橋別ニ大伴卿ニ歌一首幷短歌」は勿論常陸國で、大伴卿の出發をおくつて自分は殘る意味の歌であるから、彼が常陸に在住してゐた何よりの證歌である。勿論常陸以外の東國地方の歌もあるが、これはその土地々々に旅をしてその折作つたと解し得る作のみである。故に彼の一生

の歌も傳說的土俗的な匂ひの豐かな作であるが、この點で更に注意すべきは、「詠ニ霍公鳥一一首幷短歌」（卷九雜歌部）で、霍公鳥（ほととぎす）が鶯の巢の內に卵を生んで鶯に育てさせると云ふ土俗傳說を詩化したもので、鳥の世界の傳說を材としてゐる。彼には、「千萬（ちよろづ）の軍（いくさ）なりとも言擧（ことあげ）せずとりて來（き）ぬべき男（をのこ）とぞ思ふ」（卷六雜歌）

當大きな影響を與へてゐる。〔柳田（泉）〕

武藏野　むさしの　詩的散文【作者】國木田獨歩【發表・刊行】最初明治三十一年一月「國民之友」へ「今の武藏野」として載せたものを、同三十四年三月「武藏野」と改め單行本として刊行したのである。その時には「武藏野」以外に「置土産」「源をぢ」「たき火」「詩想」「忘れえぬ人々」「鹿狩」など、獨歩初期の諸篇を併せて出版した。【解說】「武藏野」は日記を交へ、感想をこめ、主として武藏野の秋の美を情感に徹して描き出してゐる。獨歩のこの「武藏野」と德富蘆花の「自然と人生」とは、細やかなる情感にうつたふる自然を清新に描き出したる點で、明治文藝の双璧であるが、獨歩のこの作には神經が一層細やかに動き、物の響きに一層聽き入り、林間の空地に坐して四顧し、默想し、遠望するロマンチックな詩人の姿がなつかしきまでに感ぜられる。ワァヅワァスとツルゲーネフとが身近かに呼吸する如く、更に都會人に始めて武藏野の美を知らしめたる點に於て、不朽の記念品と言ひ得る。〔吉江〕

武藏曲　むさしぶり　俳諧集　一册【撰者】大原千春【名義】集中に「山はえむ富士、水は玉川の風流を汲んで」の前書のある千春の「流石におかし櫻折ル下女の武藏ぶり」の句から出てゐる語で、現時の武藏の俳風の義である。【刊行】天和二年【諸本】俳諧七部餘錄・蕉門俳諧前集（俳書大系）に所收。【內容】卷頭に季吟の序があり、春夏秋冬の發句五十九句と藤匂子・千春・其角の三吟歌仙一卷、粟墹・千春・卜尺・曉雲・其角・芭蕉・素堂・似春・昨雲・言水の十吟百韻一卷、千春の獨吟歌仙一卷とから成り、三卷の連句の發句はいづれも春季で、千春の獨吟は上野寛永寺の花見をしてのものである。發句の冬の部には其角の「樽うた」が入つてゐる。千春は京都の貞門俳人で、談林化した人であるが、當時江戸に來つて諸家と風交し、その收穫を撰集したので、作者は芭蕉の周圍の人が主になつてゐる。【史的地位】發句では其角七句、千春自身と芭蕉とが六句で、これ等が句數の最も多い方であるが、芭蕉の六句の中二句には桃青とし、四句には芭蕉とあり、且つ卷頭句が「梅柳さぞ若衆哉女かな」の句で、これには（芭蕉翁桃青）の如く記してあつて、芭蕉を尊崇した樣子と芭蕉が桃青號から芭蕉號に移つて行く樣子が窺はれる。風調は談林調を脫しない前時代の風を踏襲したもので、純化されない字餘り句、佶屈晦澁な漢語調、故事の奇拔な飜案、神仙妖怪の趣味、物附のふざけた洒落等が目につき、正風にはなほ距離のある過渡期のものたることを思はせるのであるが、併しその中にも一脈の閑寂味がないではなく、特に芭蕉の句にそれが感ぜられるので、この點に正風の進みを暗示するものがあると云へる。なほ本集に於て問題になつてゐるもので、季吟の序中に「逍遙遊のおきな」といふのは芭蕉を指したので、季吟さへも芭蕉を翁と呼んだといふ說があつたのであるが、これは誤解で、特にこの說の根據となつてゐる「逍遙遊」といふ文は支考の作であり、季吟は逍遙軒と號した貞德を指したものであることは、その次に「細河のながれ」（細川幽齋師事）と云つてゐる事からも明かなのである。〔志田〕

無產詩派　むさんしは　詩派【名稱】無產詩派と稱してもそれは概括的な稱呼で、かゝる命名の詩派が存するのではない。【解說】文壇のプロレタリア文藝運動の勃起と共に、それが詩壇の中にも一つのプロレタリア詩人なるものを生んだ。即ちプロレタリア文藝といふ無產者の文藝上の解放運動、プロレタリアの生活を基調とし、そのイデオロギーを詩を以て表白する詩派がそれである。但し文壇のプロレタリア文學者はその運動を殆どコンミニズム、ボルセキズムの間にのみ旗幟を鮮明ならしめてゐるが、詩壇のプロレタリア派の中には多分に無政府主義者（アナルキスト）を含んでゐる。即ち共產主義的、無政府主義的及びその一部には、藝術形式上の左翼派がその思想の上に左傾思想を示してゐるものをも包含することが出來る。が、プロレタリア詩派は、文壇のプロレタリア派が「戰旗」「文藝戰線」等に分れてその鮮かな活動を示してゐる如く、一つの團體としての鮮かな表出を示してゐない。ただ「戰旗」「文藝戰線」等の文藝雜誌の中に共產主義の詩人が主として據つてゐること、それ以外には固定した機關をもたず、時々片々たる同人雜誌その他によつて詩作を發表してゐる青年詩人の中にアナルキストの詩人があるに過ぎない。以上の傾向は大正十一二年以後に起つた新しき運動で、また一つの詩派として確乎たる地步を示さず、個人的にも代表的なる詩人を出してゐない。强ひて名を擧ぐるとその共產主義系のものに中野重治・三好十郎、無政府主義系のものに萩原恭次郎・岡本潤等がある。この外松本淳三・新島榮治・索井繁治等もプロレタリア詩人の名稱をうけてゐる。中で萩原恭次郎の詩は、形式上に於て最も左翼的で、ダ、主義的・未來主義的・構成主義的要素を多分に含んでゐる。〔川路〕

無產派文學　むさんはぶんがく　「プロレタリア文學」を見よ。

蟲十五番歌合　むしじふごばんうたあはせ　「蟲歌合」を見よ。

蟲歌合　むしのうたあはせ　御伽草子　一卷【名稱】「蟲十五番歌合」とも云ふ。【成立】室町末或は德川初世か。「近古小說解題」には、「新增書籍目錄」（卷中）に「蟲歌合長嘯四分」とあるから木下長嘯子（勝俊）の作かと言つてある。「こほろぎ草子」及び「玉蟲の草紙」（各別項）より後の作たる事は明かである。【諸本】古板本は寛永頃の丹綠本。續群書類從卷九八四にも收め、近時稀書複製會（第四期）からもこの丹綠本を複製して出してゐる。輪池叢書第三十七册にも收めてあるが、これは玉蟲に失戀したことを詠歌の動機とせず、又終りの蛇を怖れて判者のひきがへるが逃げ入る事を缺いた異本である。【題材】異類歌合物即ち擬人の蟲歌合で、「鳥歌合」「魚歌合」（各別項）「獸歌合」と併せて「四生の歌合」（四生は四姓に通はせ、鳥・蟲・獸・魚を各源・平・藤・橘四氏に配したことが、鳥歌合に見える）中、最も早き作「十二類歌合」（別項）、即ち「十二類繪詞」（別項）の上卷、「調度歌合」（別項）などもこれと同系のもの。「こほろぎ草子」を本とし、「玉蟲の草紙」をも合はせ、更に歌合式（特に十五番歌合の形式）に作つたもので、この點では、「十番の物爭」「四十二の物爭」（各別項）などと同種で、異類物なる點は「魚鳥平家」「鴉鷺合戰物語」（各別項）の類とも共通してゐる。【梗概】神無月の初め寒月の夜、叢に集つた蟲共の中からこほろぎが進み出て、漸く衰へて來た身の賴りなさを歎き、今宵の月に互の心の底を語り明かし、昔玉蟲の君に戀歌を贈つて受け納れられなかつた恨めしさを歌に詠まうと提言し、皆々贊同して蜂・げぢ〳〵・蟻・はたおり・蓑蟲・かまきり・足まとひ・芋蟲・螢等

點に於て、不朽の記念品と言ひ得る。　〔吉江〕

武藏曲（むさしぶり）　俳諧集　一册【撰者】大原千春【名義】集中に「山はえむ富士、水は玉川の風流を汲んで」の前書のある千春の「流石におかし櫻折〃下女の武藏ぶり」の句から出てゐる語で、現時の武藏の俳風の義である。【刊行】天和二年【諸本】俳諧七部餘錄・蕉門俳諧前集（俳書大系）に所收。【內容】卷頭に季吟の序があり、春夏秋冬の發句五十九句と藤匂子・千春・其角の三吟歌仙一卷、麋塒・千春・卜尺・曉雲・其角・芭蕉・素堂・似春・昨雲・言水の十吟百韻一卷、千春の獨吟歌仙一卷とから成り、三卷の連句の發句はいづれも春季で、千春の獨吟は上野寬永寺の花見をしてのもの

を暗示するものがあると云へる。なほ本集に於て問題になつてゐるもので、季吟の序中に「逍遙遊のおきな」といふのは芭蕉を指したので、季吟さへも芭蕉を翁と呼んだといふ說があつたのであるが、これは誤解で、特にこの說の根據となつてゐる「逍遙遊」といふ文は支考の作であり、季吟は逍遙軒と號した貞德を指したものであることは、その次に「細河のながれ」（細川幽齋師事）と云つてゐる事からも明かなのである。　〔志田〕

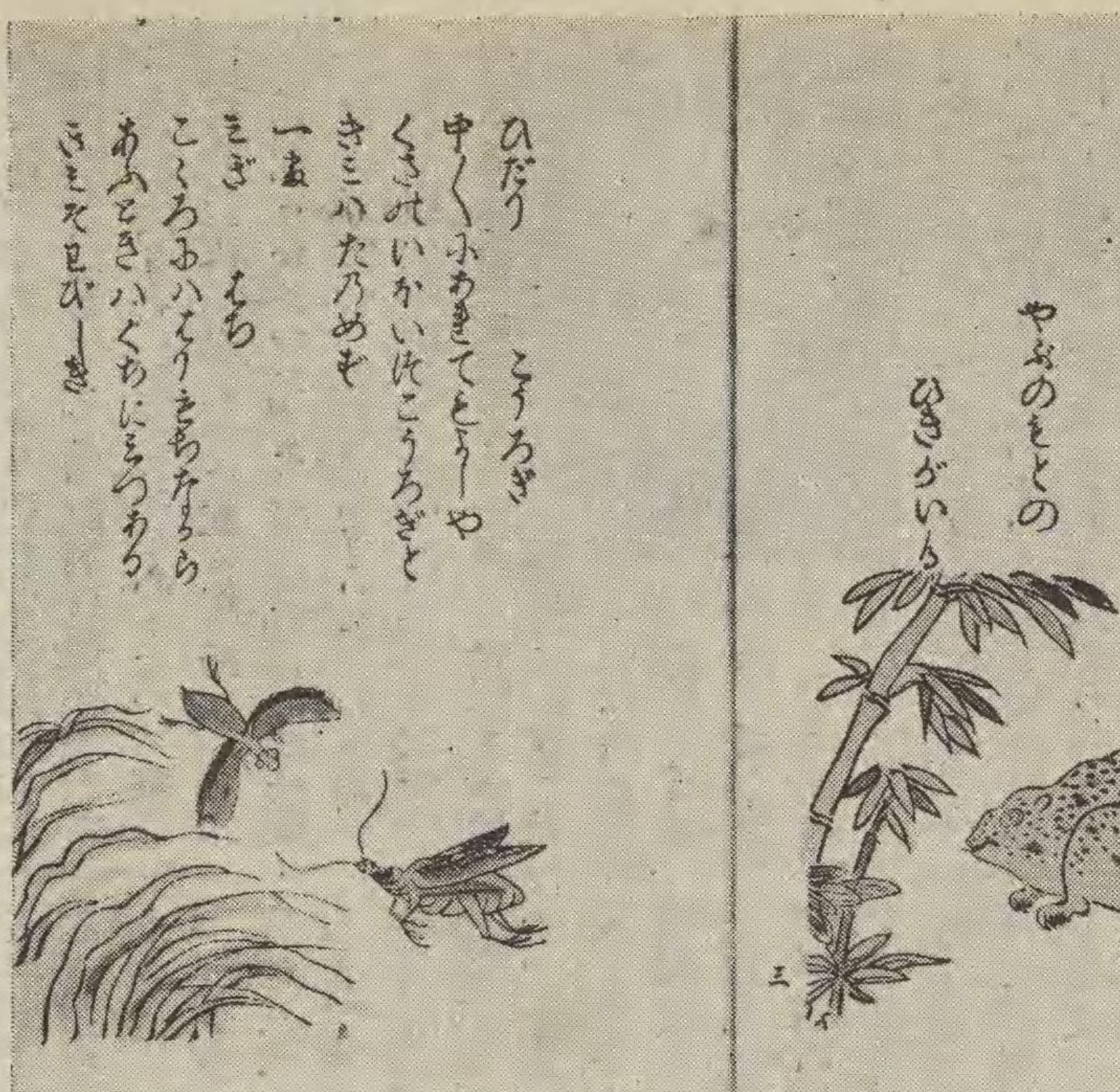
無產詩派（むさんしは）　詩派【名稱】無產詩派と稱してもそれは概括的な稱呼で、かゝる命名の詩派が存するのではない。【解說】文壇のプロレタリア文藝運動の勃起と共に、それ

人の中にアナルキストの詩人があるに過ぎない。以上の傾向は大正十一二年以後に起つた新しき運動で、また一つの詩派として確乎たる地步を示さず、個人的にも代表的なる詩人を出してゐない。强ひて名を擧ぐるとその共產主義系のものに中野重治・三好十郞、無政府主義系のものに萩原恭次郞・岡本潤等がある。この外松本淳三・新島榮治・素井繁治等もプロレタリア詩人の名稱をうけてゐる。中で萩原恭次郞の詩は、形式上に於て最も左翼的で、ダヽ主義的・未來主義的・構成主義的要素を多分に含んでゐる。　〔川路〕

無產派文學（むさんはぶんがく）　「プロレタリア文學」を見よ。

合（別項）などもこれと同系のもの。「こほろぎ草子」を本とし、「玉蟲の草紙」をも合はせ、更に歌合式（特に十五番歌合の形式）に作つたもので、この點では、「十番の物爭」「四十二の物爭」（各別項）などと同種で、異類物なる點は「魚鳥平家」「鴉鷺合戰物語」（各別項）の類とも共通してゐる。

【梗概】神無月の初め寒月の夜、叢に集つた蟲共の中からこほろぎが進み出て、漸く衰へて來た身の賴りなさを歎き、今宵の月に互の心の底を語り明かし、昔玉蟲の君に戀歌を贈つて受け納れられなかつた恨めしさを歌に詠まうと提言し、皆々賛同して蜂・げぢ〳〵・蟻・はたおり・蓑蟲・かまきり・足まとひ・玉蟲・蜈蚣等落葉の上に座を占めて各々歌を詠み、三十首に及んだ時、藪の下蟇（ひきがへる）の主張で俄に歌合をし、蟇が判者に推されたが、第十五番に蛇（くちなは）と番へられたのを怖れて、判をせずに席を捨てて竹林の落葉の下に逃げ込んだ。【影響】「鳥歌合」以下、異類歌合物の一系統を生ぜしめた。「十二類繪詞」は、先後は措くも、形態上では、それと異類合戰物との結合である。上田秋成の「花蟲合」（秋成遺文）なども、この系統を繼ぐものと云つてもよいであらう。　〔島津〕



蟲歌合 （丹綠木活字本）

蟲麻呂（むしまろ）　歌人【氏姓】氏は高橋、名は蟲麻呂、姓（かばね）は連（むらじ）【生歿】未詳【閱歷】「萬葉集」卷六天平四年の部の最初に、藤原宇合（うまかひ）が西海道の節度使となつて下る時、蟲麻呂の贈つた長歌と反歌とがある。これが彼の作の明記された唯一の例で、彼の生存年時を知る唯一の資料である。天平四年は聖武帝の御代奈良の朝が、初期から中期へ移らんとするの頃であつて、この頃彼が奈良の宮廷に仕へ、その壯年時をおくりつつあつた事が分る。また彼の著「高橋連蟲麻呂之歌集」（別項）によつて、彼が東國に居住した事が察せられる。多分官吏となつて赴任してゐたのであらう。その國は常陸であつたらしく筑波山に關する歌が多い。即ち、卷八夏雜歌部中の「惜ム㆑不ル㆑登ラ㆓筑波山㆒歌一首」、卷九雜歌部の「登㆓筑波山㆒歌一首幷短歌」。殊に、卷九雜歌部の「檢稅使ノ大伴卿登㆓筑波山㆒時歌一首幷短歌」（これは、大伴卿の筑波登山の時同行して作つた長歌・反歌の意である）、卷九雜歌部の「登㆓筑波嶺㆒爲㆓嬥歌會㆒日作ル歌一首幷短歌」（これは、筑波山の土俗を歌つた長歌・反歌）の如きは、筑波を偶々過（よぎ）つた旅人の如きには作れない。恐らくそこに定住してゐる人の作である。なほ筑波の歌以外にも、卷九雜歌部の「那賀郡曝井（さらしゐ）歌一首」とある那賀郡の曝井は常陸國、卷九相聞部の「鹿島郡苅野橋別㆓大伴卿㆒歌一首幷短歌」は勿論常陸國で、大伴卿の出發をおくつて自分は殘る意味の歌であるから、彼が常陸に在住してゐた何よりの證歌である。勿論常陸以外の東國地方の歌もあるが、これはその土地々々に旅をしてその折作つたと解し得る作のみである。故に彼の一生中の幾年かは、朝夕筑波を仰ぎつつ常陸の官吏としておくつたと信ぜられる。【作品】すべて「萬葉集」に出づ。彼の名を明記してゐるのは、上記の卷六雜歌部の作のみである。この外に「高橋連蟲麻呂之歌集中ニ出ッ」と記してある作品は、彼の作品と認められる（高橋連蟲麻呂歌集參照）。【作風】彼の作風の何よりの特色は、その歌の材料の珍らしい點に在る。珍らしいとは、彼が傳說を材料とした歌（殊に長歌）を、多數作つて萬葉作家中唯一の傳說歌人たる點にある。美女が傳說の中心になることは屢々ある。これを材料とした作品も集中に數々見える。しかし蟲麻呂の如く一人にして幾人もの美女傳說を歌つてゐる作家は皆無である。上總の末（すゑ）の珠名娘子（たまなをとめ）を詠める長歌・反歌（卷九雜歌部）、勝鹿（かつしか）の眞間（まま）處女（をとめ）を詠める長歌・反歌（卷九挽歌部）、菟原（うなひ）處女を詠める長歌・反歌（卷九挽歌部）、就中最後の菟原處女を爭ふ血沼壯士（ちぬをとこ）と菟原壯士（うなひをとこ）との狂熱の姿は、力を極めて描寫されてゐて「萬葉」中に類のない珍らしい作品である。美女傳說以外では、浦島子（うらしまのこ）を詠める長歌・反歌（卷九雜歌部）が甚だ著名である。浦島の傳說は「日本書紀」雄略天皇の條にも「丹後風土記」にも出てゐて、當時有名な話であつたらしいそれを、歌材として詩の世界に生かしたのは彼一人にすぎない。また上記の筑波山の嬥歌會（かがひ）の歌も傳說的土俗的な匂ひの豐かな作であるが、この點で更に注意すべきは、「詠㆓霍公鳥（ほととぎす）㆒一首幷短歌」（卷九雜歌部）で、霍公鳥が鶯の巢の内に卵を生んで鶯に育てさせると云ふ土俗傳說を詩化したもので、鳥の世界の傳說を以としてゐる。彼には、「千萬（ちよろづ）の軍勢（いくさ）なりとも言擧（あげ）せずとりて來（き）ぬべき男（をのこ）とぞ思ふ」（卷六雜歌）と云ふ雄健豪宕の點で、集中の代表作を以て許されてゐる歌がある。この作を觀ると、若し彼にして傳說歌に力を傾注しなかつたならば、雄渾な作風の點に於て他に優れた多數の作品を殘しはしなかつたかと思はれる。なほ長歌・短歌の外に旋頭歌を作つてゐること（卷九雜歌部）も、彼の歌才の多方面だつたことを想はせるし、作品中長歌が甚だ多くて短歌と匹敵する數を有する事も、他の萬葉作家に見られぬ特色である。

【參考】和歌史の研究 佐佐木信綱○上代國文學の研究 武田祐吉　〔森本〕

武者小路實篤（むしやのこうぢさねあつ）　小說家・劇作家【號】無車【閱歷】明治十八年五月十二日東京市麴町區元園町に生れた。父は子爵武者小路實世、母は秋子（なるこ）、兄に公共がゐる。有名な歌人實蔭（別項）は彼の祖父である。明治二十四年學習院初等科に入學。十六歲頃初戀に破れてから文學に志した。その頃から母方の伯父勘解由小路資承の影響などによつて禪學や王陽明學に親しみ、聖書やトルストイの作品等を讀んだ。後年の思想の基礎はこの頃に築かれたものである。殊にトルストイには深く傾倒し、十九歲の頃にはそのために當時の學習院長乃木希典を怒らせたといふ。明治三十九年學習院高等科を卒業、東京帝國大學社會學科に入學したが、翌年退學。その年正親

武者小路實篤

町公和・志賀直哉・木下利玄等と同人雜誌の發刊を企てたが成功しなかつた。翌四十一年に志賀・木下等と回覽雜誌「荒野」を發行、處女作「芳子」は同誌によつて發表された。この頃から漸次トルストイズムから解放されて獨自の個性主義に轉換して行つた。明治四十三年四月には、前記の人々及び有島兄弟等と共に「白樺」（別項）を創刊した。所謂白樺派（別項）がこゝに結成され、爾來その中心となつて盛んに活躍し、「白樺」廢刊號に至る迄、殆ど毎號執筆を缺かさなかつた。その出發當初には一般からかなり露骨な輕侮を向けられてゐたが、大正三・四・五年頃「その妹」（別項）「彼が三十の時」「ある青年の夢」等の作品を發表した頃には、漸く押しも押されもしない、獨自な存在として注目されるやうになり、それから漸次圓熟期に入つて、新現實主義時代には、文壇一方の重鎭として重んぜられるに至つた。また大正七年には、新しき村の事業を志して同志と共に日向に移り住み、七月には志賀直哉等と共に、雜誌「新しき村」を發行した。「白樺」は大正十二年に廢刊されたが、その後、新現實主義が行き詰つて文藝界に指導理論がなくなつた時、また白樺派の再組織が企てられ、大正十三年四月、長與善郞が雜誌「不二」を發刊した時には、率先してこれを助け、更に昭和二年三月には、自ら主宰して雜誌「大調和」を刊行、又個人雜誌「獨立人」などを出して、その主張の實現に努めたが、餘り反響を喚ぶことが出來なかつた。一方、彼の理想實現の具體的事業である「新しき村」は多少づつ發展して、その出版部より雜誌「新しき村」の外に、「新しき村叢書」「人類の本」などを刊行した。大正十年の創立三周年には、全國に二十六の支部をも有するに至り、翌十一年には村電化の新設備の資にあてるため、文壇關係者より「現代三十三人集」の印稅を贈られ、更に昭和四年秋には、十周年記念出版「十年」（改造社版）を贈られるなど、相當に同情を集めたが、昭和期に入つてからは、村の若い人々の心持は、村創立當初のそれとは大分かけ隔つて漸く時代の傾向に嚮ひつつある。彼は明治四十五年竹尾房子と結婚したが、大正十一年飯河安子との戀愛事件が起つて房子夫人と別居した。又彼は夙くから演劇・美術の興隆に志して泰西美術の紹介に努め、展覽會を開き、或は演劇社を創立したりした。

【著作】【全集・選集】武者小路實篤全集十册（藝術社版）○武者小路實篤集（新潮社版。現代小說全集第十五卷）○同上（改造社版。現代日本文學全集第二十六卷）○明治大正文學全集第三十四卷（長與善郞集と合册）○日本戲曲全集第四十五卷（正宗白鳥集と合册）○新選武者小路實篤集（改造社版）○武者小路實篤選集（藝術社版）○武者小路小說集（曠野社・新しき村出版部版）。その他、多くの小說集・戲曲集・感想集等がある。〔代表作〕芳子○お目出度き人（別項）○世間知らず○彼が三十の時○耶蘇○第三の隱者の運命○幸福者○或る男○彼等と彼女達（以上小說）○その妹（別項）○わしも知らない○二十八歲の耶蘇○罪なき罪○二つの心○母親の心配○ある青年の夢○野島先生の夢○楠正成○日蓮○運命と碁をする男○愛慾（別項）○或貴室の午後○桃源にて○人間萬歲○神と男と女（以上戲曲）。○ある相談○生命の王等。

【作風】その作品には、その何れの傾向のものをも通じて、極端な自由さと率直さと素朴さとが溢れてゐる。表現の形式や文章も自由で素朴なる筋の運びや、場面の設け方も放肆な程に奔放を極めてゐる。又小說だか對話だか戲曲だか判然しないやうな形式のものを平氣で書いてゐる。戲曲など長い長い會話や獨白などをも平氣で取り入れる。小說でも一作中に同じやうなことを幾度繰り返しても一向頓着しない。のみならず、作中に出て來る人物や事件も特殊な階級とか國籍とか場所とかの匂ひや色彩をもつてゐない場合が多い。つまり國境を超越した一種の世界人が書かれてゐる場合が多い。史上の知名な人物などの場合でも、彼等が正しい史的背景の前に點出されるといふやうなことは決してない。楠正成や北畠親房がお互に正成さん親房さんと呼び合つたりする。從つて其處に描かれた事件は多く作爲的であり、人物は多く傀儡的だと云へる。而もその作品の中では、寫實的なものよりも、矢張り主觀的・空想的なものの方にいゝものが多い。しかし、それはこの作者が人間的眞實を知らないと云ふことではない。人間心理の暗側面などをも隨分深く味識してゐたことは、戲曲「二つの心」「愛慾」などがよく證明してゐる。たださうしたものをでも卽實的寫實的に取扱うた場合よりも、空想的な自由な表現形式に從つた場合の方が、そつがなく書き上つてゐることが多い。而してこの作者の場合、空想的といふのは、情緖的とか氣分的とかいふのとは大分異つて、飽くまでも思想的であり、理想的であり、更に夢想的であるといふことを意味する。彼によれば人類は二三千年の後には理想的に明るく朗かな世界に到達することが出來るといふのである。併しこの考へ方を一口に規定すれば、それは確かにブルジョアリベラリズムを母胎とする徹底個性尊重主義であつた。さうしてその自由主義的個性尊重主義が人類の明るい未來に必至的な繫りを有つと考へてゐたところに、この作者の人間と人生とに對する明るい信賴と肯定とがあつた。彼はさうした主張の最も根本的なものを「人類愛」といふ言葉で規定してゐたが、この餘りにも明るくノンキな空想主義者であつたことは、この作者が、時代の空氣に生きながら、矢張り時代の實質に生きない華族階級人であつたことを示してゐる。表現形式の極端な自由さや文章の素朴さなどにも、當然一種の不鍛錬さや出鱈目さが感じられながら、而も一面生れたばかりのものの有つ淸新さと端的さと美しさを有つてゐる。歐文脈的句法の勝つた文章の言ひ廻しは、特に著しい特色の一つだつた。**【史的地位】**自然主義が一時荒蕪に導いた精神界に、自然主義の蹂躙した精神の力をもう一度取り上げて、新しい理想主義に炬火を點じた人として、その明治大正文學史上に於ける位置は、特に重視されなければならないものになつてゐる。併しその徹底自由主義的個性尊重主義はブルジョアリベラリズムの最も必至的な組織化であつたに拘はらず、思想的乃至觀念的にはさまで十分理解されたとは思はれず、却つてこの作者によつては、二義以下の主張に過ぎなかつた人道愛の思想のみが、この作者の全部であるやうに誤解され、且つさうした方向への影響のみが特に顯著に現はれ出して、所謂人道主義末流者流の輩出といふやうな現象などが結果した。故にブルジョアリベラリズムを基調とする主張としては、最も深いところまで行つてゐたかと思はれるこの作者の主張は、直接にはさう大きな影響を後人に及ぼさなかつた。その代りに自然主義が舊き美意識と作

宗一派に偏せず、佛敎の敎理を大衆的に說き一般民衆を敎化した。又「沙石集」「雜談集」の著者として高名である。**【閱歷】**「雜談集」に、「先祖は、鎌倉の右大將家に召仕へて寵臣たりと雖も運盡きて夭亡し了んぬ」とあるが、武家に生れながら十九歲の頃に常陸の山寺に出家したのである。北條氏全盛時代の鎌倉時代に

無心連歌（むしんれんが）「有心無心連歌」を見よ。

令子部屋（むすこべや）洒落本　一册【作者】山東京傳【畫工】北尾政演（自畫）【名稱】好町序には「令子洞房」とあり、自序中には「無粋語歷夜」と當ててある。二十四歲の部屋住であつた作者が、「息子隔室の無多口に女郞の魂膽をはなす」ものである意。【刊行】天明五年

にして、座敷は遊びの花、床は遊びの實、その實をとれば花も自ら得られる所以を說いてある。「後朝の客五ツの見やう」では、朝歸る客の態度で、昨夜の樣子がわかると說明し、これをもてた客、ふられた客、あやなされた客、口舌した客、一通にされた客と五種に分類し、五種各樣の態度を述べてある。「女郞五

獨自な存在として注目されるやうになり、それから漸次圓熟期に入つて、新現實主義時代には、文壇一方の重鎭として重んぜられるに至つた。また大正七年には、新しき村の事業を志して同志と共に日向に移り住み、七月には志賀直哉等と共に、雜誌「新しき村」を發行した。「白樺」は大正十二年に廢刊されたが、その後、新現實主義が行き詰つて文藝界に指導理論がなくなつた時、また白樺派の再組織が企てられ、大正十三年四月、長與善郎が雜誌「不二」を發刊した時には、率先してこれを助け、更に昭和二年三月には、自ら主宰して雜誌「大調和」を刊行、又個人雜誌「獨立人」などを出して、その主張の實現に努めたが、餘

全集第十五卷）○同上（改造社版。現代日本文學全集第二十六卷）○明治大正文學全集第三十四卷（長與善郎集と合册）○日本戲曲全集第四十五卷（正宗白鳥集と合册）○新選武者小路實篤集（改造社版）○武者小路實篤選集（藝術社版）○武者小路小說集（曠野社・新しき村出版部版）。その他、多くの小說集・戲曲集・感想集等がある。【代表作】芳子○お目出度き人（別項）○世間知らず○彼が三十の時○耶蘇○第三の隱者の運命○幸福者○或る男○彼等と彼女達（以上小說）○その妹（別項）○わしも知らない○二十八歲の耶蘇○罪なき罪○二つの心○母親の心配○ある青年の夢○野島先生の夢○楠正成○日蓮○運命と碁をする男○愛慾（別項）○或畫室の午後○

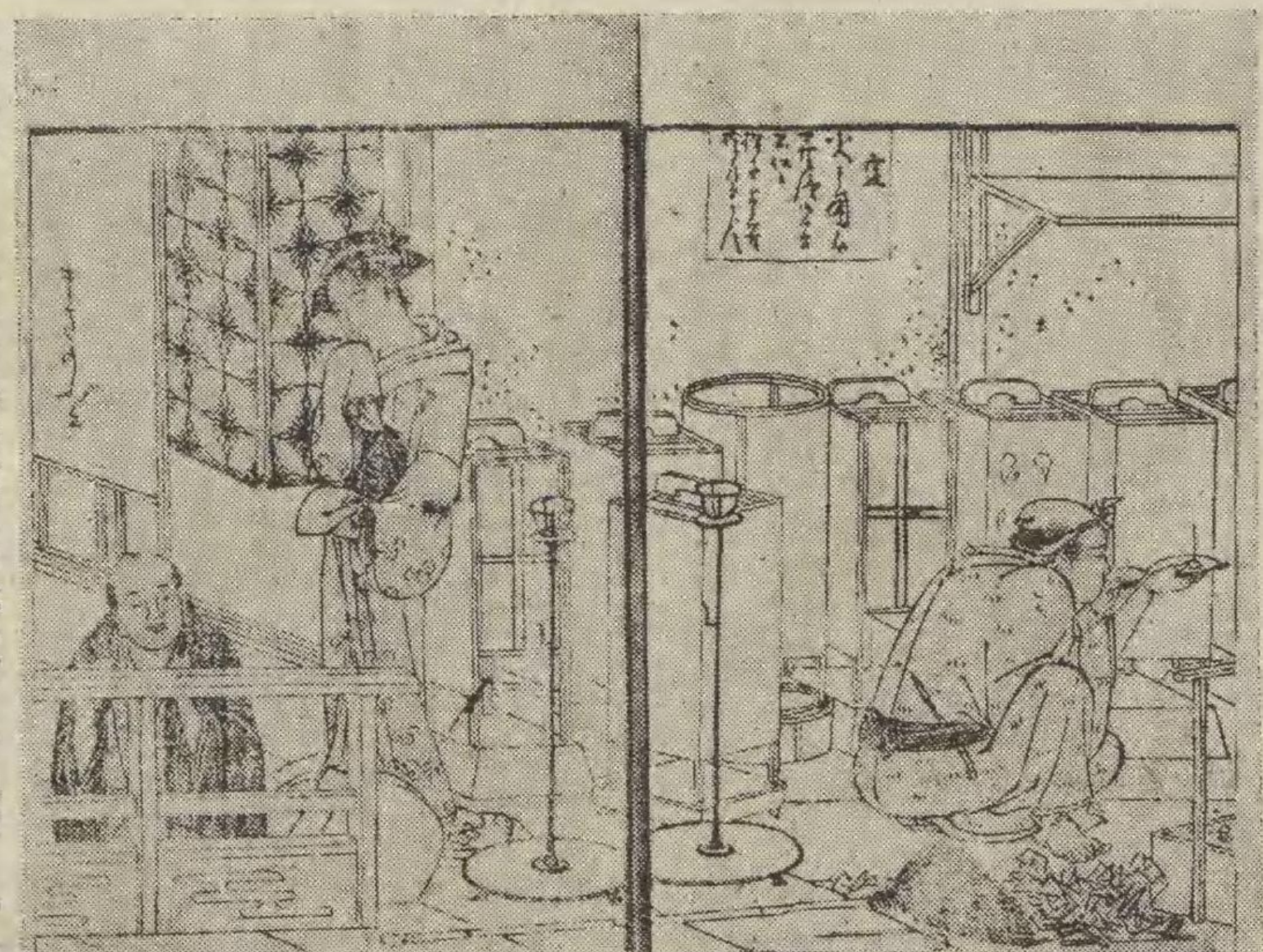
く作爲的であり、人物は多く傀儡的だと云へる。而もその作品の中では、寫實的なものよりも、矢張り主觀的・空想的なものの方にいゝものが多い。しかし、それはこの作者が人間的眞實を知らないと云ふことではない。人間心理の暗側面などをも隨分深く味識してゐたことは、戲曲「二つの心」「愛慾」などがよく證明してゐる。たださうしたものをでも卽實的寫實的に取扱うた場合よりも、空想的な自由な表現形式に從つた場合の方が、そつがなく書き上つてゐることが多い。而してこの作者の場合、空想的といふのは、情緒的とか氣分的とかいふのとは大分異つて、飽くまでも思想的であり、理想的であり、更に夢想的であ

的句法の勝つた文章の言ひ廻しは、特に著しい特色の一つだつた。【史的地位】自然主義が一時荒蕪に導いた精神界に、自然主義の蹂躙した精神の力をもう一度取り上げて、新しい理想主義に炬火を點じた人として、その明治大正文學史上に於ける位置は、特に重視されなければならないものになつてゐる。併しその徹底自由主義的個性尊重主義はブルジョアリベラリズムの最も必至的な組織化であつたに拘はらず、思想的乃至觀念的にはさまで十分理解されたとは思はれず、却つてこの作者によつては、二義以下の主張に過ぎなかつた人道愛の思想のみが、この作者の全部であるやうに諒解され、且つさうした方向への影響のみが特に顯著に現はれ出して、所謂人道主義末流者流の輩出といふやうな現象などが結果した。故にブルジョアリベラリズムを基調とする主張としては、最も深いところまで行つてゐたかと思はれるこの作者の主張は、直接にはさう大きな影響を後人に及ぼさなかつた。その代りに自然主義が舊き美意識と作品技巧とを打ち碎いたあとに、何等の傳統的教養にも縛られず、非常識で、無頓着で、從つて無遠慮で、徹底的に自由人であり得たこの作者が、全然新しく打ち樹てた有産者文學獨特の表現技巧と文章とに至つては、實に大きな影響を後人に及ぼしたものと云ふことが出來る。殊にその文章、所謂言文一致の表現は、この作者によつて始めて確立されたといつてもいゝ。それと同時に彼が主として導いた新理想主義が、自然主義以來既にその方向への傾きを示してゐた有産者文學唯心化への傾向に、特に強い拍車をかけた。〔片岡〕

無住（むぢゆう） 禪僧 【俗姓】梶原氏【諱】道曉【字】無住、一に一圓。【勅諡】大圓國師【生歿】嘉祿二年十二月二十八日生れ、正和元年（一九七二）十月十日伊勢桑名蓮華寺に寂す。享年八十七【學統】初め十九歲で出家して幸圓僧都に「倶舍頌疏」を學んだ。次いで法身大德に就いて「法華玄義」を聽き、更に長樂寺朗譽に師事し、その間に「圓覺經」等を學び、二年程で圓城寺實道法師に就いて「摩訶止觀」を學び、奈良に遊んで戒律を傳へ、菩提山に留まつて眞言を究めた。この頃、無住は病に冒されたが、求道の心止み難く、三十五歲で壽福寺に入つて叢林の作法を行じ、傍ら聖一國師の會下に禪門の語錄等を學び、遂に正宗相續の印記を受けた。無住は禪僧でありながら一宗一派に偏せず、佛教の教理を大衆的に說き一般民衆を教化した。又「沙石集」「雜談集」の著者として高名である。【閱歷】「雜談集」に、「先祖は、鎌倉の右大將家に召仕へて寵臣たりと雖も運盡きて夭亡し了んぬ」とあるが、武家に生れながら十九歲の頃に常陸の山寺に出家したのである。北條氏全盛時代の鎌倉時代に梶原家の生活は安穩なものではなかつたのであらう。無住は十三歲で鎌倉の僧房に住せしめられ、更に十五歲の時下野の伯母の許に養はれ、一年も經ざるに常陸の知人を頼らなければならなかつた。無住の幼年時代は早くから流轉の生活をさせられてゐたのである。無住の禪學は、この流轉時代を終へて山寺に籠つた頃から始められ、而も出家早々は勉學する機會が與へられなかつた。卽ち出家後間もなく、師匠から片山の院主を讓られて、先づ世事を學ばなければならなかつた。この間に律を學び、止觀を學んだのである。中年の頃から病のために幾たびか頓挫したが、病身のまゝ遂に八十七歲の高齡まで勉學を續けた。【著作】沙石集十卷○雜談集五卷（各別項）○聖財集二卷○妻鏡一卷○念佛諸經要集一卷。【人物】無住は磊落で、小節に拘泥しない人であつた。洗ふやうな赤貧を少しも苦とせず、「へつらひて富める人よりへつらはでまづしき身こそ心やすけれ」「世にあるは思へば人の從者かな上に使はれ下につかはる」など詠じて、むしろその清貧を樂しんでゐた。殊に大刹に住むことを好まず、弟子や眷族の多いことは自分の行の妨げになるとて、閑寂な生活の內に專ら勉學にいそしんでゐた。併しよく世俗のことにも通じて、大衆的な教化をした高僧であつた。〔鷲尾〕

無心連歌（むしんれんが） 「有心無心連歌」を見よ。

令子部屋（むすこべや） 洒落本 一册【作者】山東京傳【畫工】北尾政演（自畫）【名稱】好町序には「令子洞房」とあり、自序中には「無粹語歷夜」と當ててある。二十四歲の部屋住であつた作者が、「息子隔室の無多口に女郎の魂膽をはなす」ものである意。【刊行】天明五年【諸本】改題本「廓中奇言根古埜魔起」二册がある。洒落本集（日本名著全集）所收。



令子部屋（挿畫）

【梗概】なじみの辯、後朝の客五ツの見やう、女郎五ツの見やう、初會にもてたる樣子、床と座敷との事、わる遊びの事、思ひ切の事、女郎虛實を知事、つとめの事、いろの事、客女郎愼用心すべき事、女郎身のうへの事の十二條に分つて、遊里に於ける客の心得と併せて遊女の心得、戀の諸分、戀愛合戰の虛實等が精細に說いてある。先づ「なじみの辯」では問答體にして、座敷は遊びの花、床は遊びの實、その實をとれば花も自ら得られる所以を說いてある。「後朝の客五ツの見やう」では、朝歸る客の態度で、昨夜の樣子がわかると說明し、これをもてた客、ふられた客、あやなされた客、口舌した客、一通にされた客と五種に分類し、五種各樣の態度を述べてある。「女郎五ツの見やう」では、遊女の見世にをる態度を五種に分類し、色客有女郎、地色ある女郎、たわいもなきむだ女郎、うわき女郎、手のある女郎を描いてある。「初會にもてたる樣子」は、初會に於ける遊女の微細な心遣ひに依つて、客の心持を看取する注意が述べてある。「床と座敷の事」では、座敷と床に於ける遊女の態度に、いろ〳〵の變化があることを述べてある。「惡遊の事」は、金のない客の淺ましさを罵倒してある。「思ひ切の事」では、問答體で遊女に實があるか、ないものかを論じてある。「女郎の虛實を知る事」は、遊女の自分に對する態度で、その心を鑑定する方法が說いてある。「つとめの事」は、遊女の客に盡す勤め振りを說明してある。「色の事」は、遊女の眞實の戀を描いてゐる。「愼の事」は、客と遊女の愼しむべき條々をあげてある。「女郎身のうへの事」は、遊女の哀れな境遇に就いての作者の同情である。

【構想】洒落本の一方面なる遊女買ひの祕傳、遊女との戀の魂膽を描いたもので、京傳の戀愛觀、遊蕩觀を見るに最も適切な書である。「女郎の虛實にかまはず、我ひとりのあそびに新造をいくらもあげ、藝者をよび、牽頭持をつれ、どつとさはいでずつと歸る、是樂み の花

なり、かやうに花やかならずとも、座敷も靜に遊び、互にかざる心なく、くめん事諸分萬事語り合ひ、共に樂み共に苦勞する實情を樂む。是遊びの實なり」と論じ、この實を得れば花も自ら得る事が出來ると言つて、遊蕩の目的を斷定してゐる。そしてこの實を得るには「客の心許りでゆかぬ」、如何にして遊女の眞實を摑み得べきかが問題であるが、要するにただ客の誠實で遊女の誠實をつかむ外ない。虛僞の上に立つ百の術數、千の權謀も何にもならぬ。併し又誠實の上に立つ懸引はなければならぬとしてゐる。本書に盛られた戀愛觀の底に、彼等の意識せざる遊戲心のひそんでゐる事は否定出來ぬが、遊びの中にも眞實を求めてゐる心理を穿ち、遊女遊びの窮極を示してゐる。京傳が洒落本の初陣は實にすばらしいものである。【史的地位】洒落本の一分類として遊客の心得、通人となる祕傳を說いた書が存する（洒落本參照）。京傳以前既にこの分類に屬する書が數部發表されてゐる。例へば「間似合早粹」（明和六年）、「十八大通百手枕」（安永七年）、「無賴通說法」（安永八年）、「風流仙婦傳」（安永九年）の如きものがこれである。本書もこの系統中に入るべき書で、これ等の多くが滑稽味の多量を含み、描寫が粗雜であるに比し、本書は描寫の巧緻、態度の眞實を多く含んでゐる。京傳は本書だけでは足りぬと感じたのか、更に「吉原楊枝」（天明八年）と云ふ同系統の書を發表した。【價値】山東京傳の洒落本に於ける處女作である。爾來寬政三年迄に十八篇の洒落本を發表してゐる。觀察の精緻、描寫の活躍、筆致の流麗なる點に於て彼は洒落本作者の第一人者と見る事が出來る。この作は彼が洒落本界に踏み入つた第一歩として注目すべきものであり、かなり眞實で、力がこめられてゐる。これを小說として見れば何等の脚色もなく飽き足らぬが、隨筆文學として見れば、人情の機微に徹底せんとした作者の頭の働きがよく現はれてゐる。（山崎）

孃景淸八島日記 むすめかげきよやしまにつき 「鎌倉袖日記」を見よ。

娘消息 むすめせうそく 人情本 二編六册 【作者】三文舍自樂（曲山人）【畫工】柳川重信 【名稱】（欵外俗文）と角書があり、娘消息は、娘用の書簡文例の義。【刊行】天保五年【諸本】人情本代表作集（近代日本文學大系）所收【題材】近松の「曾根崎心中」（別項）のお初德兵衞を主人公・女主人公に假用し、背景を日本橋茅場町附近に採つてゐる。

【梗概】速場町の不動の緣日とて、夜店商人賑ふ中をお初・おべその下町娘二人、通行人を冷かしながら步き廻り、やがてお初は橫町の水茶屋に入り、女房お仲と話しながら情人大工德兵衞の來るのを待つた。間もなく德兵衞が來る。三人樂しく酒を飮み、さて二人は二階に上つた。お初の母親お吞は、お初に旦那をとらせようと、その旦那を家に招き、お初にもてなさせる。隣家の鳶の者市五郎方では女房お磯・あば吉・德兵衞が居合せ、酒を吞んでゐたが、隣のお初が旦那取りするらしい噂に德兵衞ひとり悶え憤る。お吞はお初と德との間を切らせようと、僞手紙を德にやり、愛想づかしをする。德はお初の自筆と思ひ憤慨する。それにお初は家で看守されてゐるので德の許へ逢ひに行けない。兩人の間は漸く溝が出來た。德兵衞の出入の旦那小倉屋惣兵衞、或る日德を連れ料理店菊の井に出かけた。惣兵衞は彼に女房を持つやうに勸め、自分の圍つて置くお房を招いた。これは嘗て德の馴染である吉原姿海老屋の花房である。實は惣兵衞が請出し娘分にして置いたのだ。玆に兩人は昔の契を結び直し、めでたく夫婦になつた。この噂をお初は友だちのおべそから聞き、ひとり癇癪を起した。德兵衞は母お霜、妻お房と睦じく暮してゐる。と或る日針賣りの老婆が來た。お房が廓で知つてゐた針妙のお絲である。昔の事など語るうちに惣兵衞が來て、お絲の不幸な今の身の上を聞き、而も一人の娘を十八九年前に捨子にしたと聞き同情する。お初はお仲に逢ひ、德の薄情を歎く。お仲はお初の方から緣切りの手紙をよこした事を知つてゐるので、それをお初に見せ、始めて僞手紙であることが分り口惜しがる。お仲は手紙で德を招き仔細を語つた。漸く德の怒りも解けたが、今更仕方がない。お初は歸宅し、母にいくら勸められても旦那を取らうと云はぬ。旦那と云ふのは惣兵衞で、實は德兵衞に女房を持たせたのも、お初を自分の手に入れんとする計略であつた。その夜も來て、お初をうるさく口說く。お初は燭臺が消え、闇を幸ひに逃げた。

【解說】曲山人の人情本は本書の外に「假名文章娘節用」（各別項）の二部あり、皆特徵がある。本書の特徵は人情本に附き物の富豪の息子が現はれず、主人公・女主人公共に下級の町人たること、茅場町を中心とした下町が比較的詳細に描いてあることである。春水の人情本と異なり、比較的淡泊な江戸つ子の風格が現はれてゐる。本篇は續編として、三・四編六册が天保十年爲永春水に依つて綴られた。故人三文舍自樂の遺意と稱してある。（山崎）

娘太平記操早引 むすめたいへいきみさをのはやびき 人情本 四編十二册【作者】曲山人（初・二編）但し第二編卷中・下は、曲山人・松亭金水合作。第三・四編は松亭金水。【畫工】無署名であるが、歌川國直（初・二編）・歌川貞秀（三・四編）であらう。【名稱】內題に（盛衰榮枯）と角書がある。太平記とは波瀾の結果、太平に歸すると云ふ戰記物語の「太平記」に採り、操早引とは貞操を敎へる早引（辭書の義）の意で、實は鼻山人作「北里通」（文政十年）の一名「人情早引娘節用」に暗示を得たのであらう。【刊行】初・二編天保八年。第三・四編天保十年。【諸本】人情本傑作集（帝國文庫）・人情本代表作集（近代日本文學大系）所收【題材】近松の「心中宵庚申」、紀海音作「心中二腹帶」（各別項）等より材料を採つたのであるが、單に人物の名を借りただけである。

【梗概】江戸の青物問屋八百半の息子繁兵衞は、妻お千代、父親半六と睦まじく暮してゐた。その近所の新道に今妲妃と諢名される三味線の師匠お玉と云ふ美人が、捨鉢のお熊と呼ばれる母と共に住んでゐた。お玉は十四の時から男を知り初めた女であるが、未だ定まる良人もなく、多くの男弟子を綾なして生活してゐたが、ふと繁兵衞を見染め、艷書などを送るけれど、繁兵衞は相手にしない。或る時髮結の傳吉に媒介を依賴した。傳吉は早速幇間の豆八と繁兵衞の友人貧乏伊勢屋の呑太郎を味方にして一つの計略を考へた。そこで淺草觀音の四萬六千日の日、豆八・呑太郎は何氣のない風で繁兵衞を誘ひ出し、屋根舟で參詣し、歸途又舟に乘らうとする時、一艘の舟が近づいた。それには傳吉が乘つて居りお玉もゐる。そのまゝ繁兵衞の舟に同乘する事に

なつた。そこで酒宴が始まり面白可笑しく談笑しつつ行くうち、お玉は假病をつかつて苦しみ出す。既河岸に舟をつけ、傳吉・呑太郎は醫者を呼びに行くふりして上陸したが歸つて來ない。豆八も催促しに行くふりして上陸して了つた。跡には繁兵衞とお玉だけである。折柄烈しく降り出す雷雨を緣に二人は契を結

は、朝から茶碗酒を飲み、或は友を引き入れて酒宴を開く有樣である。繁兵衞はやゝ後悔の氣味であつた時、傳吉が不意に現はれて、繁兵衞にお玉の奸計を白狀する。彼も漸く目が醒めた。そこでお玉を逐ひ出し、お千代と舊の如く夫婦となつた。繁兵衞の友人磯次郎も唄女上りのお松と夫婦になつた。彼女はお玉

めた。【名義】歐洲の各語は、支配・政府・元首を否認する意味を含んだ αναρχία (αν-, not ; αρχία, rule) なるギリシヤ語から來たもので、無政府主義者といふ語の起原は、フランス革命の時、政治的變革を社會的に徹底せしめようとした當時の過激主義者に與へられた稱呼であるが、當時は別に明確な國家否定の原理

團體を認むるのみで、この主義は、反道德的無政府主義とも呼ばれてゐる。【無政府共産主義】これは自由と共に經濟的平等をも追求する無政府主義であつて、國家を廢すると共に小なる地方團體を以て共産的社會單位となし、各人をしてその能力に應じて勞働せしめ、その欲望に應じて消費せしめんとする主義で

ば「間似合早粋」（明和六年）、「十八大通百手枕」（安永七年）、「無頼通説法」（安永八年）、「風流仙婦傳」（安永九年）の如きものがこれである。本書もこの系統中に入るべき書で、これ等の多くが滑稽味の多量を含み、描寫が粗雜であるに比し、本書は描寫の巧緻、態度の眞實を多く含んでゐる。京傳は本書だけでは足りぬと感じたのか、更に「吉原楊枝」（天明八年）と云ふ同系統の書を發表した。【價値】山東京傳の洒落本に於ける處女作である。爾來寛政三年迄に十八篇の洒落本を發表してゐる。觀察の精緻、描寫の活躍、筆致の流麗なる點に於て彼は洒落本作者の第一人者と見る事が出來る。この作は彼が洒落本界に踏み入つた第一歩と

來る。三人樂しく酒を飲み、さて二人は二階に上つた。お初の母親お呑は、お初に旦那をとらせようと、その旦那を家に招き、お初にもてなさせる。隣家の鳶の者市五郎方では女房お磯・あば吉・德兵衞が居合せ、酒を呑んでゐたが、隣のお初が旦那取りするらしい噂に德兵衞ひとり悶え憤る。お呑はお初と德との間を切らせようと、僞手紙を德にやり、愛想づかしをする。德はお初の自筆と思ひ憤慨する。それにお初は家で看守されてゐるので德の許へ逢ひに行けない。兩人の間は漸く溝が出來た。德兵衞の出入の旦那小倉屋惣兵衞、或る日德を連れ料理店菊の井に出かけた。惣兵衞は彼に女房を持つやうに勸め、自分の圍つて

んとする計略であつた。その夜も來て、お初をうるさく口說く。お初は燭臺が消え、闇を幸ひに逃げた。

【解説】曲山人の人情本は本書の外に「假名文章娘節用」「娘太平記操早引」（各別項）の二部あり、皆特徴がある。本書の特徴は人情本に附き物の富豪の息子が現はれず、主人公・女主人公共に下級の町人たること、茅場町を中心とした下町が比較的詳細に描いてあることである。春水の人情本と異なり、比較的淡泊な江戸つ子の風格が現はれてゐる。本篇は續編として、三・四編六册が天保十年爲永春水に依つて綴られた。故人三文舍自樂の遺意と稱してある。（山崎）

味線の師匠お玉と云ふ美人が、捨鉢のお熊と呼ばれる母と共に住んでゐた。お玉は十四の時から男を知り初めた女であるが、未だ定まる良人もなく、多くの男弟子を綾なして生活してゐたが、ふと繁兵衞を見染め、艷書などを送るけれど、繁兵衞は相手にしない。或る時髪結の傳吉に媒介を依賴した。傳吉は早速幇間の豆八と繁兵衞の友人貧乏伊勢屋の呑太郎を味方にして一つの計略を考へた。そこで淺草觀音の四萬六千日の日、豆八・呑太郎は何氣のない風で繁兵衞を誘ひ出し、屋根舟で參詣し、歸途又舟に乘らうとする時、一艘の舟が近づいた。それには傳吉が乘つて居りお玉もゐる。そのまゝ繁兵衞の舟に同乘する事になつた。そこで酒宴が始まり面白可笑しく談笑しつつ行くうち、お玉は假病をつかつて苦しみ出す。厩河岸に舟をつけ、傳吉・呑太郎は醫者を呼びに行くふりして上陸したが歸つて來ない。豆八も催促しに行くふりして上陸して了つた。跡には繁兵衞とお玉だけである。折柄烈しく降り出す雷雨を緣に二人は契を結んだ。それ以來繁兵衞はお玉に迷ひ、日夜お玉の家に入り浸りである。お千代が色々諫めるが聽き入れない。お玉もこれを耳にし、お千代を逐ひ出し、自分が本妻になりたくなつた。そこで髪結傳吉と相談し、傳吉からお千代宛の艷書を書いて繁兵衞に拾はせ、傳吉の口からお千代と關係ある如く言ひ、いつ盜んだかお千代の玉付きの銀簪を貰つたと稱して見せたので、繁兵衞は烈火の如く憤つた。その時父半六が入つて來て良人は暇をくれたにしろ、自分は未だお千代と親子の緣を切らぬと言ひ、繁兵衞をなだめ、お千代を一先づ長谷觀音地内の妹の許へ預けた。そこでお玉は目的通り繁兵衞方に乘り込むことが出來た。これも全く傳吉の盡力なのであるが、成功したら與へる筈の十兩を三兩しかやらぬので傳吉は時々ゆすりに來る。お玉はこれを面倒に思ひ、男弟子の一人で役人の荒砥某に密告し、傳吉の舊惡を知らせたので、傳吉は危く捕へられんとした。彼は剃髪して僧にばけて田舍へ逃げて了つた。お千代は八百屋半六の妹沖瀨の許に厄介になつてゐるうち、氣鬱から病氣になり、遂に空しくなつたので、下女お兼の菩提寺寶玉寺へ棺を送つた。これを取扱ふのは傳吉の僧となつた鈍空である。茶毘に附するため桶の箍を切るはずみに、脇腹に當りお千代は蘇生した。さて繁兵衞の家に來たお玉は、朝から茶碗酒を飲み、或は友を引き入れて酒宴を開く有樣である。繁兵衞はやゝ後悔の氣味であつた時、傳吉が不意に現はれて、繁兵衞にお玉の奸計を白狀する。彼も漸く目が醒めた。そこでお玉を逐ひ出し、お千代と舊の如く夫婦となつた。繁兵衞の友人磯次郎も唄女上りのお松と夫婦になつた。彼女はお玉と違つて貞淑な女であつたからである。お玉は遂に零落してしまつた。

【構想】淫奔なお玉と貞淑なお千代とを對照せしめ、一方では玄人ながら貞淑なお松を點出して、お玉と比較せしめてゐるが、本文だけではお玉はさ程の惡人でもなく、過去では浮氣であつたと說明してあるが、この時には繁兵衞一人を守つてゐる。寧ろお千代よりは快活な陽氣な、魅力をもつ女となつてゐる。お千代は、當時の讀本・合卷本に出て來る善人の典型で、無實の罪を被せられても說破する勇氣もなく、めそ〱と泣く意氣地のない弱い女性である。一體に構想の淺薄な作品で、强ひて勸善懲惡を標榜してゐるに過ぎない。お玉がまだ二十歲を過ぎぬ美貌の婦人で、蓄もありながら直ぐ乞食となつたと書いてあるのも、如何に惡を懲らす手段としても肯定しかねる。本篇の特徴は肉慾の描寫が思ひ切つてしてある事と、野卑な調子の低い點とである。放屁を描いてあるところが三ヶ所あるのはその一例である。（山崎）

娘道成寺　むすめだうじやうじ　「道成寺」を見よ。

無聲音　むせいおん　「子音」を見よ。

無政府主義　むせいふしゆぎ　【名稱】〔英〕Anarchism.〔獨〕Anarchismus.〔佛〕Anarchisme. 我が國では明治十五年前後、英語の Anarchism の譯語としてこの語が用ひられ始めた。【名義】歐洲の各語は、支配・政府・元首を否認する意味を含んだ αναρχία (αν-, not ; αρχία, rule) なるギリシャ語から來たもので、無政府主義者といふ語の起原は、フランス革命の時、政治的變革を社會的に徹底せしめようとした當時の過激主義者に與へられた稱呼であるが、當時は別に明確な國家否定の原理に對して與へられた稱呼とはなつてゐなかつた。これが明白に國家否定の原理に對する稱呼となつたのはプルードンがその著「財產論」に於て、自らを無政府主義者と呼んでからである。但しこの語が通俗化されたのは、西紀一八六〇年代の初め頃、國際勞働協會に於て、バクーニン一派が自らをかく呼んでからである。【特徵】同じく無政府主義といつても、その內容や種類が多樣で、一概に說明し去ることは出來ないが、その共通的な中心點を抽出すれば、個人の自由自律を第一に置いてゐることである。卽ち國家はその權力によつて必然的に個人の自由を束縛するものなるが故に、これをなくする必要があると說く點は、無政府主義共通の思想的根柢である。【種類】無政府主義の主張は複雜多岐に亙り、分類も亦甚だ困難であるが、大體に於て個人主義的無政府主義(Individualistic Anarchism)と、無政府共產主義(Anarchist Communism)の二つに分類することが出來る。〔個人主義的無政府主義〕スペンサーの唱へた個人主義の如きは、その說を推しつめて行けば、結局は無政府主義に到達すべきものであるが故に、この種類に繰り入れらるべきであるが、最も代表的なものは、マクス・スティルネルの說であつて、彼は經驗的自我の絕對的價値を主張し、ただ自律的自我の集團たる利己主義者の團體を認むるのみで、この主義は、反道德的無政府主義とも呼ばれてゐる。〔無政府共產主義〕これは自由と共に經濟的平等をも追求する無政府主義であつて、國家を廢すると共に小なる地方團體を以て共產的社會單位となし、各人をしてその能力に應じて勞働せしめ、その欲望に應じて消費せしめんとする主義である。故にこの主義は大體に於て、政治的自由と經濟的平等とを調和せんとする主義と見られてゐるが、この觀方は必然的なものではない。例へばプルードンの無政府主義は、經濟的平等といふことを主張しながら、共產主義を含んでゐないし、サンディカリズムの說をなす者の中には、消費財の私有を認めながら地方團體を重要視せず、勞働組合を社會の單位としてゐる者がある。

【日本に於ける無政府主義】無政府主義が日本に於て何時頃から起つたか、それを明確に規定することは困難であるが、明治十年代に佛國の自由思想、革命思想と共に、露國の無政府主義者を主題とした作品などが飜案されたのが、尠くとも思想としての最初の兆候であらう。運動としての無政府主義單獨の行動は素より許される筈なく、完全にもつと廣い意味の社會主義運動と結びついて、一進一退の歷史を形成して來たのである。自由黨の存續の間に、政府の干涉壓迫は露骨となり、集會條例・新聞紙條例等を發布し、極力言論と運動の自由を拘束した。それに抗する意味で、加波山事件・信州飯田事件・秩父一揆・名古屋事件・靜岡事件・大阪事件等が頻々として現はれ、テロリズムが發揮された。無政府主義的行動の最初の發現と見てよからう。明治四十年、日本社會黨なるものが樹立されたが、その

黨員の中には明かに無政府主義者も加はつてゐた。明治四十三年夏突如として一世を震駭せしめた「大逆事件」が起つた。大正十年、「日本社會主義同盟」が結成された。この頃から運動の方向はボルシェヴィズムと無政府主義との二つに分れた。大杉榮・岩佐作太郎等は、無政府主義の立場をとつた。だが、大杉は大正十二年關東大震災の際に殺害され、無政府主義系の鬪士高尾平兵衞は、赤化防止團のために殺され、無政府主義運動は一時屛息した。

【文學上の無政府主義】 レオ・トルストイの如きは、自らは無政府主義者とは名乘つてゐないが、國家及び財産權に關しては無政府主義者の立場をとつてゐる。彼はその觀點から、「神の王國は爾の中にあり」の中で、敎會・國家及び法律に對して特に現行財産法について嚴密な批評を加へた。なほ無政府主義思想の近代文學への浸潤及び優れた近代文學者の自由思想が、無政府主義の發達に及ぼした影響は、實に多樣で、多面的であり、玆に詳細に記述し得べくもない。例へば小說・戲曲・詩歌の方面だけを見ても、イブセンの劇、ホイットマンの詩、トルストイの「戰爭と平和」、ゾラの「パリ」「勞働」、メレヂコフスキイの諸作等には、何れも無政府主義の思想が濃厚に織り込まれてゐる。ミルやギョーやニーチェやトローやカアペンター、ワグナー、ヘルツェン等の思想的所産に至つては枚擧に遑がない。〔宮島〕

夢窓（むさう）

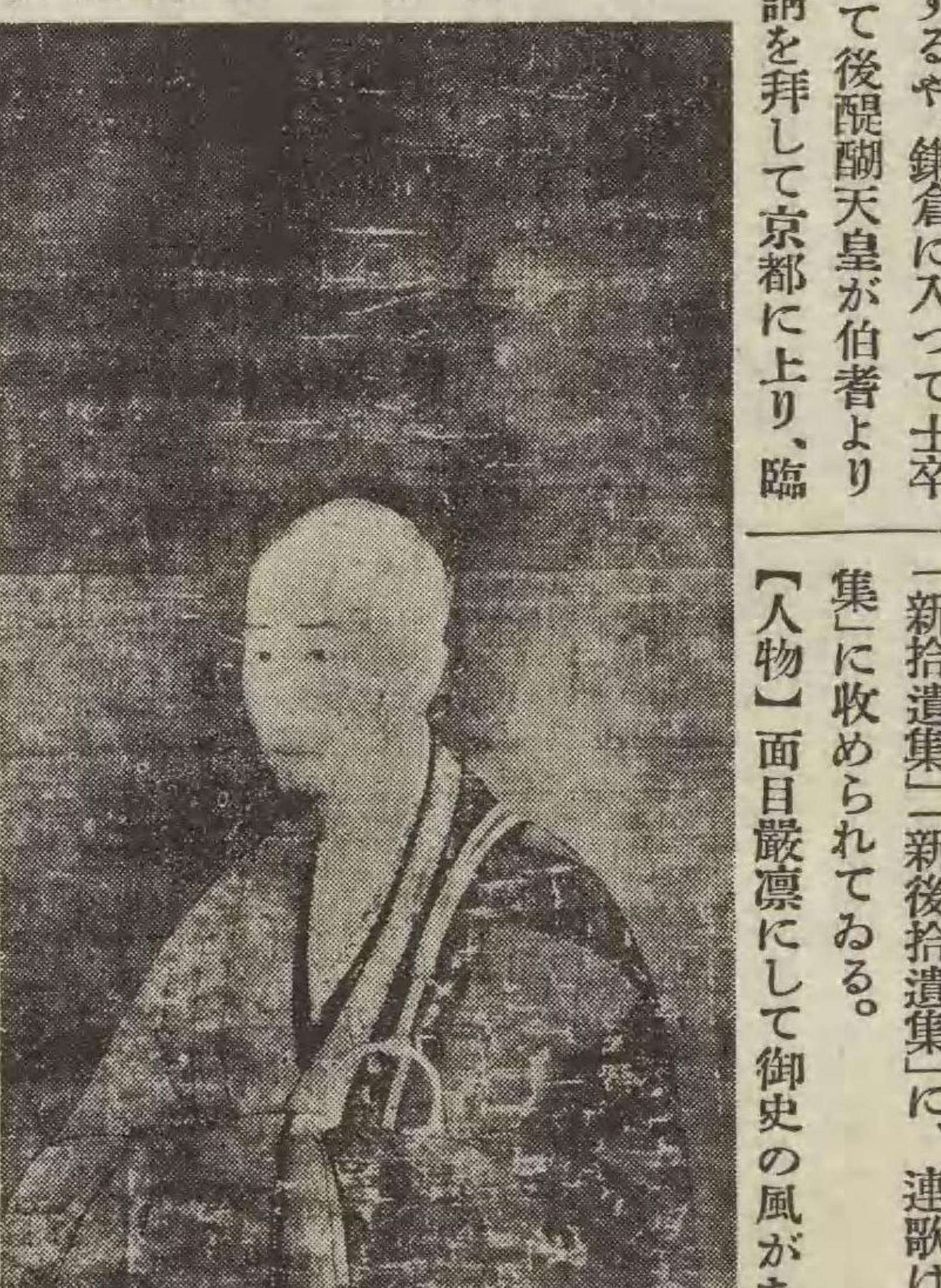
禪僧　臨濟宗天龍寺派開祖

【俗姓】 源氏 **【諱】** 疎石 **【賜號】** 夢窓正覺國師・心宗國師・普濟國師・玄猷國師・佛統國師

【生歿】 建治元年生れ、觀應（正平六年）二年（二〇一一）九月三十日京都に歿す。享年七十七。

【閲歷】 伊勢に生れたが、弘安元年父に伴はれて甲斐に移つた。同六年九歳で、平鹽山空阿と云ふ學僧の弟子となつた。正應五年十八歳で得度し、奈良に遊び、叔父內山の明眞を訪ひ、戒壇院慈觀に就いて具足戒を受けた。後甲斐に還りて研學修行し、遙かに紀伊由良の心地覺心の門風を聞いて參問せんとし、途中京都に入り、建仁寺無隱圓範に禮參し、こゝに留まつた。後、東遊して鎌倉に遊び、東勝寺無及德詮、建長寺葦航道然、圓覺寺桃谿德悟、癡絶空性等に參問し、永仁五年に再び京都に上つて無隱圓範に歸し、元僧一山一寧が京都に上るや、就いて參問し、尋いで再び鎌倉に下つたが、この時、一山一寧が建長寺に住せるに依り、乃ち參問して親しく箇事を實究した。正安二年出羽地方に歷遊し、奧州の松島に到る。後、下野那須の雲巖寺に到つて高峯顯日の嗣太平妙準の下に留まつた。尋いで鎌倉に還つて一山一寧に隨侍し、後、高峯顯日に隨侍し、參究して大に發悟し、遂に無學祖元の法衣を附屬せられた。甲斐に歸隱し、龍山庵を剏し、後に淨居寺を開く。幾ばくもなく世俗の煩累を避けて遠江に入り、美濃に往きて長瀨山の勝境を探り、古谿菴を營みて幽棲したが、四來の學徒漸く多く、乃ち京都に上り、北山に寓居した。文保二年に土佐に遊びて五臺山に入り、汲江菴を營んだ。元應元年、北條高時の母が高峯顯日の遺囑を受けて懇請したので、鎌倉に赴いて勝榮寺に寓止し、後、三浦に往き、泊船菴を營みて閑居し、堅く門を鎖して訪客を避けてゐた。後、上總に往きて退耕菴を營んだ。正中二年五十一歳、後醍醐天皇の勅請を拜して京都に上り、南禪寺住持となり、勅問により禪法を說く。翌嘉曆元年、高時、使を送つて壽福寺に請じたけれども固く辭して赴かず。伊勢に往いて善應寺を開き、紀伊地方を歷遊し、後、鎌倉に入つて永福寺の傍に南芳菴を營み、尋いで淨智寺に住し、同二年八月瑞泉寺を開き、一亭を構へて遍界一覽亭と云ふ。元德元年高時の懇請に依り圓覺寺に入つて住し、一山の禪風を興した。幾ばくもなく瑞泉寺に退隱し、後、甲斐の慧林寺に往きて閑居した。高時、建長寺に請ずれども赴かず。諸國騷亂あり、鎌倉兵火に圍まれ、高時等一族滅亡するや、鎌倉に入つて士卒等を救助した。かくて後醍醐天皇が伯耆より京都に還幸あり、勅請を拜して京都に上り、臨川寺に入つて住し、建武元年後醍醐天皇に衣鉢を授け奉り、南禪寺に住して寺領を拜受した。間もなく京都兵亂のため、南禪寺を辭して臨川寺に移り、諸人の歸依を受けた。殊に足利尊氏より師弟の禮を以て優遇された。尋いで西芳寺の住持となりて同寺を修營し、阿波の補陀寺の開山に請ぜられた。當時尊氏の本願に依り、天龍寺の造營漸く成つて供養の盛儀があり、開山に請ぜられて同寺の住持となり、光嚴上皇の臨幸を仰ぎ衣鉢を授け奉る。後、屢々宮中に參候して禪法を說き、又足利直義・同義詮の歸依を受けて敎化した。かくて隆々たる一門の宗風一世を蓋ふの概があつた。觀應二年八月、三會院に退隱して微恙あり。光嚴上皇・光明上皇、親臨して慰問し給うた。九月二十九日諸弟子を誡めて偈を書し、翌三十日晏然として寂した。享年七十七。遺偈に曰く「轉身一路、橫該豎抹、畢竟如何、彭八剌札」と。嗣法の弟子甚だ多く、義堂周信・絶海中津（各別項）等主なる僧四十九人、京都・鎌倉の五山の住持となり、皆學問文章等を以て世に知られた。

【著作】 夢中問答一巻○臨川寺家訓一巻○西山夜話一巻○夢窓法語一巻○正覺國師語錄二巻○正覺國師和歌集一巻○夢窓明極唱和編一巻。なほ夢窓の和歌は、「風雅集」「新千載集」「新拾遺集」「新後拾遺集」に、連歌は「菟玖波集」に收められてゐる。



夢窓（京都妙智院藏）

【人物】 面目嚴凜にして御史の風があり、近く相接すれば、柔順溫和にして慈雲法雨、時々流澍すと云はれてゐるが、その行狀を考へ、その頂相を見ても、寬容平和の風がある。また一門の弟子極めて多く、親附したことに依つても察せらるゝのである。それは決して天龍寺の寺產が豐富であつて、弟子を養育するに便宜があつたと云ふに止まらず、何人も心から感動歸服したものであらう。夢窓の人格が夢窓の禪風をなし、それが又五山の禪風をなした。實際夢窓の一門の繁榮が、即ち五山の興隆であつた。夢窓は敎化人であつた。その柔順溫和の資性は、自ら一門の禪風をなし、大に時代人を敎化したのである。「夢中問答」は、足利直義に附したもので、これに依つてもその敎化した狀況が見らるゝのである。而しかしその實、夢窓は自ら一門の禪風を成したものである。且つ詩偈歌文にも通達したので、その一門から大に文藝が興つた。謂ゆる五山文學（別項）がそれである。

【參考】 園太曆○黃梅院文書○天龍寺文書○夢窓國師語錄○夢窓國師年譜○夢窓國師塔銘○夢窓國師碑銘○天龍雜志○花園天皇宸

神であるといふ。夢想兵衞は水子島の嬰兒や童男女の生活を見聞し、父母の恩の洪大なるを今更に思つた。次いで不敎島を見た。此處は七八歳から十五六歳の少年少女の世界で、兩親尊者が管理する處であるが、盲愛的保護があるばかりで、住民は總て放縱無賴を極めてゐた。夢想兵衞は此處で痛切に敎育の必要

を唱へるが、誰も耳を藉す者はなかつた。或る日彼は一人の翁に茶と僞られて酒を飮まされ、翁と酒茶論の大論戰を鬪はした。この國を去らんとして道に迷ひ、圖らずも醉醒山に到つて樵夫からその偏見を戒しめられ、漸く無明の醉を醒ましたが、折柄一羽の熊鷹が彼を摑んで飛び去つた。貪欲國は四十歳から七

得べくもない。例へば小說・戲曲・詩歌の方面だけを見ても、イブセンの劇、ホイットマンの詩、トルストイの「戰爭と平和」、ゾラの「パリ」「勞働」、メレヂコフスキイの諸作等には、何れも無政府主義の思想が濃厚に織り込まれてゐる。ミルやギョーやニーチェやトローやカアペンター、ワグナー、ヘルツェン等の思想的所產に至つては枚擧に遑がない。（宮島）

夢窓（むさう）

禪僧　臨濟宗天龍寺派開祖

【俗姓】源氏【諱】疎石【賜號】夢窓正覺國師・心宗國師・普濟國師・玄猷國師・佛統國師

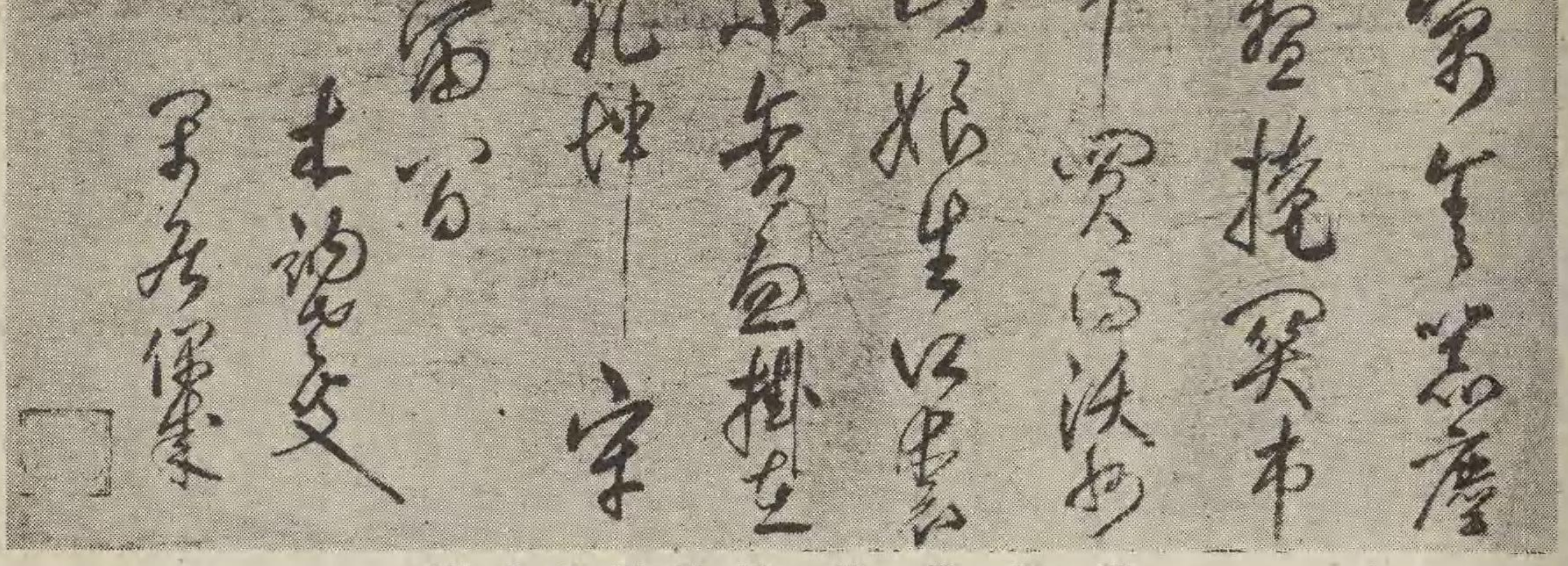
【生歿】建治元年生れ、觀應（正平六年）二年（二〇一一）九月三十日京都に歿す。享年七十七。

【閱歷】伊勢に生れたが、弘安元年父に伴はれ

を剏し、後に淨居寺を開く。幾ばくもなく世俗の煩累を避けて遠江に入り、美濃に往きて長瀨山の勝境を探り、古谿菴を營みて幽棲したが、四來の學徒漸く多く、乃ち京都に上り、北山に寓居した。文保二年に土佐に遊びて五臺山に入り、汲江菴を營んだ。元應元年、北條高時の母が高峯顯日の遺囑を受けて懇請したので、鎌倉に赴いて勝榮寺に寓止し、後、三浦に往き、泊船菴を營みて閑居し、堅く門を鎖して訪客を避けてゐた。後、上總に往きて退耕菴を營んだ。正中二年五十一歲、後醍醐天皇の勅請を拜して京都に上り、南禪寺住持となり、勅問により禪法を說く。翌嘉曆元年、高時、使を送つて壽福寺に請じたけれど

依を受けた。殊に足利尊氏より師弟の禮を以て優遇された。尋いで西芳寺の住持となりて同寺を修營し、阿波の補陀寺の開山に請ぜられた。當時尊氏の本願に依り、天龍寺の造營漸く成つて供養の盛儀があり、開山に請ぜられて同寺の住持となり、光嚴上皇の臨幸を仰ぎ衣鉢を授け奉る。後、屢々宮中に參候して禪法を說き、又足利直義・同義詮の歸依を受けて敎化した。かくて隆々たる一門の宗風一世を蓋ふの概があつた。觀應二年八月、三會院に退隱して微恙あり。光嚴上皇・光明上皇、親臨して慰問し給うた。九月二十九日諸弟子を誡めて偈を書し、翌三十日晏然として

相接すれば、柔順溫和にして慈雲法雨、時々流澍すと云はれてゐるが、その行狀を考へ、その頂相を見ても、寬容平和の風がある。また一門の弟子極めて多く、親附したことに依つても察せらるゝのである。それは決して天龍寺の寺產が豐富であつて、弟子を養育するに便宜があつたと云ふに止まらず、何人も心から感動歸服したものであらう。夢窓の人格が夢窓の禪風をなし、それが又五山の禪風をなした。實際夢窓の一門の繁榮が、即ち五山の興隆であつた。夢窓は敎化人であつた。その柔順溫和の資性は、自ら一門の禪風をなし、大に時代人を敎化したのである。「夢中問答」は、足利直義に附したもので、これに依つてもその敎化した狀況が見らるゝのである。而して當時宗峯妙超の一門の禪風に似ないところがあつたので、彼一門からは、夢窓は敎門の人であつて禪門の人でないと云ふに至つた。しかしその實、夢窓は自ら一門の禪風を成したものである。且つ詩偈歌文にも通達したので、その一門から大に文藝が興つた。謂ゆる五山文學（別項）がそれである。



夢窓筆蹟（山城天龍寺藏）

【參考】園太曆○黃梅院文書○天龍寺文書○夢窓國師語錄○夢窓國師年譜○夢窓國師塔銘○夢窓國師碑銘○天龍雜志○花園天皇宸記○梅松論○空華日工集○蔭凉軒日錄○鹿苑日錄○碧山日錄○扶桑五山記○五山記考異○天龍寺紀年考略○禪林僧傳○佛祖宗派圖○莵玖波集○倭歌作者部類○續和歌作者部類○日本禪林書目（鷲尾）

夢想兵衞胡蝶物語（むさうびやうゑこてふものがたり）

讀本　九册【作者】曲亭馬琴【畫工】歌川豐廣【名稱】夢想兵衞の夢物語で、莊子の夢に胡蝶を見たるを附會す。【刊行】前編五卷文化六年、後編四卷文化七年。【諸本】曲亭馬琴翁叢書（銀花堂）・四大奇書（帝國文庫）・滑稽文學全集（文藝書院）・曲亭馬琴集（近代日本文學大系）・名著文庫（富山房）・岩波文庫等所收。【題材】發端に遊谷子の「和莊兵衞」（別項）を粉本としたことを言つてゐる。又前編の酒茶論は蘭叔が述作した「酒茶論」を飜案し、なほ「莊子」の逍遙遊に擬せるもの、莊子の考證をしてゐる等、莊子の影響も見られる。

【梗概】（前編）假名川の浦島塚に夢想兵衞といふ世に拗ねた漁夫があつた。一日本牧の沖に舟を浮べ楫を枕に眠ると、仙人となつた浦島太郎が現はれ、彼の好奇心を滿足させようと釣竿を與へた。夢想兵衞はこれを骨にして大紙鳶を作り、それに乘つて折柄の東風に先づ少年國の上空に到つた。少年國は、水子島・不敎島・孝行島の三島に分れ、當歲より十五歲位までの男女が住む國、開闢は恩愛の二柱の神であるといふ。夢想兵衞は水子島の嬰兒や童男女の生活を見聞し、父母の恩の洪大なるを今更に思つた。次いで不敎島を見た。此處は七八歲から十五六歲の少年少女の世界で、兩親尊者が管理する處であるが、盲愛的保護があるばかりで、住民は總て放縱無賴を極めてゐた。夢想兵衞は此處で痛切に敎育の必要を感じた。併し此處の支島の孝行島だけは、僅か四五軒から成つてゐたが、養育の眞正と孝行の美德がよく保たれてゐた。ついで彼は色慾國の上空に來た。色慾國は結ぶの神の開く處、十五六から二十四五迄の若者の世界で、上中下品の三領に分れてゐるが、色事より外に生活がないのがこゝの住民である。夢想兵衞は上品領の樣をまのあたりに見て、淫樂の惡むべきことを悟るが、俄に常ならぬ芳香と喚聲がするので振り返ると、華美壯麗の館に淫酒兼美の若武者が數十人の美女を相手に今しも花軍の駈引、大亂痴氣の體に、思はず身を乘り出す途端に、紙鳶の骨が折れて忽ち下界に墜落した。氣がついて見ると其處は小松原で、浦島仙人はこれを豫期して玆に庵を結んで彼を待つて居り、その言行不一致と心の修養を敎誡されて、夢想兵衞はこゝから陸路色慾國の中品下品の領に到つたが、此處は中流下流の者の色慾界で、猥雜醜陋、その極に達してゐた。彼はそこで一計を案じ、戀病治療所を設け、早野勘平の妻お輕や大石力彌の妻小浪の煩悶を解決してやつた。ところが人々の中から飛出した人情屋利口藏は、彼の辯論を難じ、今にも打ちかゝらんとするので、夢想兵衞は群衆と共に這々の態で遁れ、海路强飮國に向つた。こゝは酒を飯の代りとする呑んだくれの國である。夢想兵衞は盛んに禁酒論を唱へるが、誰も耳を藉す者はなかつた。或る日彼は一人の翁に茶と僞られて酒を飮まされ、翁と酒茶論の大論戰を鬪はした。この國を去らんとして道に迷ひ、圖らずも醉醒山に到つて樵夫からその偏見を戒しめられ、漸く無明の醉を醒ましたが、折柄一羽の熊鷹が彼を摑んで飛び去つた。貪慾國は四十歲から七十歲位迄の人間が住む處で、一名爪長島といふ。夢想兵衞は吝嗇と呼ぶ怪鳥に攫はれ、吝嗇郡守錢城のほとりで爪長寺の慾海和尙に救はれたが、和尙は救助料を請求し、兩者の爭論となり、和尙に打擲されて衣類まで剝がれてしまひ、漸くにして守錢城に到つて人情を請うたが相手にされない。その時銅臭といふ者が來て彼を家に伴ひ、饗應を盡し、且つ彼が奪はれた衣類を返した上、當國の人は利に敏い點で他國より勝れてゐるので、敢て貪る事のみが此處の生活でないと述べたが、夢想兵衞は直ちにこの說を難じ、守錢の非を說いて反駁したので喧嘩となり、終に此處を追ひ出されて行くと、道に現はれた怨靈共と守錢に鬪してなほ爭論し、又怨靈等に亂打されて氣絕した。すると浦島仙人が福の神となつて現はれ、彼の非を諭し、且つ色慾國で失つた紙鳶を與へて去つた。

〔後編〕夢想兵衞は再び神通自在の紙鳶に乘つて今度は食言鄕に來たが、此處の老幼男女は詐欺を事としてゐた。煩惱鄕では思ひ川のほとりに老夫婦の心中を救つて却つて恨まれた。哀傷鄕の人は凡て無常觀に捉はれて哀傷を事とし、病身で短命なので夢想兵衞はこれを說き諭さうとしたが、泣くばかりで取り合ふ者もない。觸るゝ所みな哀傷の物のみで更に變らないのに堪へ兼ね、遁れて歡樂鄕に到

客にふられる。（16）親仁が道樂を盡し、若い者が却つて行儀正しく、臺の物は目錄となり、紙花は二季決算の通帳となる。（17）息子は夜あるきをせず、佛いぢりをなし、早起きで朝茶を飲むが、茶に醉はぬ用心と、見德太子謹んで申す。穴賢。【解說】當時に於て、最も思ひ切つた空想であ

認むべきである。列擧する未來の事項は、三未來記中「無益委記」が最も多く、說明の書入れは最も尠い。その文は簡潔素朴で、かゝる點が却つて聯想を多からしむる効果があり、繪は又古拙大まかで愛玩すべきである。地震が空で搖つて雷が地の底で鳴る趣向は、式亭三馬がとつて「四十八癖」の初編（文化八年刊）中

人大川へ出る。錦洲は近頃人心が輕薄で、古い物は輕視され新しい物が愛せられると歎ずる。秀我續いて大川の兩岸の建物を眺めて通を竝べ、轉じて北廓の噂になり、遊女の藝を披露に及ぶ。濃紫が墨繪、夕ばへが琴、瀧川が占卜、誰袖が狂歌、牛太夫の火いぢり、更に今度は役者の隱藝、女の美しいは誰、男の

○靑梅擬留など名物豆藏に隙をとり、上野淺草を見ずのみ百姓多し。○芝居へはひり、小遣錢さがしてもなし。役者の名をさへば山下巾着切。○南の方にみやけ村あり。氏屋煎餅。○茶袋坂のつゞきに、只今かへりまし田あり。その次に、けふはどこへいつ田あり。穗にあらはれ顏は赤米のよし。○小錢で五百羅漢は、さんだ邪魔になりひら橋見ゆる。（下略）

つた。此處は山紫水明、人は五常を旨とし、禽獸・魚類・草木に至るまで善美を盡して、萬物化育の歡樂鄕であつた。夢想兵衞はこゝにその理想の實現されてゐるのを見て、己の今迄の行狀を愧ぢ感慨に耽つてゐると、使者が來て王宮に請ぜられ、この國の王に謁した。彼が恐懼身の非行を謝すと、國王はこの鄕の歡樂鄕たる所以を詳しく說き、彼の妄言輕擧を誡め、老莊の學んで行じ難きと、儒教の學んで行ふべきを敎へ、此處からは紙鳶に依らず舟に乘つて日本に歸れと告げた。然るに夢想兵衞は舟に依るを危險としてこの命を拒み、國王が浦島仙人らしく見えたのを確める暇もなく、濱に出て紙鳶を招いたが、無駄であつた。折柄ふと見ると二人の童子が紙鳶を奪ひ合つてゐるので、驚いてこれを取返さんと爭ふ拍子に紙鳶を破り、己は海中に墜落したと思へば、夢が醒めて身は本牧の沖に舟を浮べ、楫を枕として眠つてゐた。夢想兵衞はこゝに自分が雜學に意を用ひ、辯論を好み、聖賢の道を學ばざるの非を誡められたことを悟り、後、これを綴り、胡蝶物語九卷を編して筐底に藏した。本篇がその世に出たものである。

【構想】理論にのみ走つて實行に乏しく、而もその理論は確かな據り所なく、ただ妄想を追ふ人物夢想兵衞を作り上げ、少年國・色欲國・强飮國・貪婪國、並に食言鄕・煩惱鄕・哀傷鄕の諸國遊歷に託し、夢想兵衞をして或は悟らしめ、或は歎ぜしめ、或は辯說を揮はしめ、その間超人間的人物を配して、彼の言行一致を諭さしめてゐる。又各卷末に總評をなして、非儒教的精神と儒教的精神との對立を讀者の前に展開し、最後の歡樂鄕に至り、國王の言に託してこれを嚴正批判する等、實に馬琴の側面を明かに示してゐる。かゝる作意のものに「昔語質屋庫」（別項）がある。その筆力縱橫で、興趣があり、佳作といふべきである。〔笹野〕

夢想開連歌（むさうびらきれんが）　【名義】夢中に神佛の示現があつて歌又は句を感得した時、奉謝のためこれを人に披露し、これを本として賦する連歌の義。【性質】夢想が一句なる時は九十九句を賦し、一首の歌なる時は百句を賦するのが定法となつてゐる。夢想の句に季が詠み入れてなくても、その時節を季と見做すべきであるとか、百韻中に夢の字を賦し入れないなどの制が起つた。後世、禁句の制も起つた。「端作（はしづくり）」には夢想之連歌と記す。その作法としては、天神の御影を掛け、三臭の供物及び燈明を供へ、懷紙は薄墨で記し、上包は紙一重とし、四筋の水引で綴る。又夢想を與へられた神佛を「御」として現はすことも起つてゐる。

【起原・沿革】夢想といふ事は、文獻上古くから見えるが、連歌に於ける夢想の事實は、延德二年九月、宗祇が住吉明神の御夢想があつたので、「住吉の松こそ道のしるべなれ」以下の百韻を賦したのがその古いものであらう。併しこれは夢想に句を得たのではないらしいが、延德三年六月二十二日、後土御門院が夢想に、「うちとくる氷のひまの朝霞」の發句・脇二句を得られ、後柏原院と兩吟の百韻を張行あらせられたのが、まさしく夢想の連歌である。天文十七年六月八日、後奈良天皇は廣明和尙と法語の問答をなされた夢を御覽になり、「なにはまで淸く凉しき夢路かな」の句を得させられ、これを稱名院右府（公條）に物語られ、右府の奏によつて、淨土の要文を冠字として右府と兩吟百韻を張行遊ばされた。出雲の尼子晴久は天文二十一年十一月二十日、「千代かけて神代いはふや御代の晴」の夢想の句を得、連歌師宗牧、その他一族郞黨十餘人と百韻を興行し、これを杵築社に奉納した。晴久は翌年、又「孔子も今の此文字は跡へ歸りてある物かな。昔も今もこの錢を寶珠の玉といふなり」の二句の夢想を得、この二句に、久丸・與一その他と第三以下八句を附け、その後の九十句を連歌師宗養に繼がしめた。弘治元年十一月二日には公條・周桂・宗養等十三人によつて夢想千句が興行されて居り、天正十年六月二十四日には、秀次が得た夢想の句「よるひると祝言多きこれの家」によつて百韻が興行され、また同十二年八月十八日、同じく秀次の得た「しほよりも山の面はこなたにて。いくへと重なる雨に雨はれて」の夢想の二句によつて百韻が興行されてゐる。然るにこれ等二種の百韻には夢想の句に「御」とある。「御」は元來天皇の御作なることを意味するものとして用ひられた文字であるのを、夢想開の連歌では夢想を與へられた神佛を意味するものとして用ひることが、遲くもこの頃から起つてゐることが知られる譯である。この後も夢想開の百韻が少からず見られ、特に慶長年間には頗る多く、その後も引續き見られることは云ふまでもない。然るに俳諧にはないではないが頗る稀れで、それも後には全く見られなくなつてゐる。ただ俳諧では、天滿宮の祭日の前夜（二十四日）、菅公の軸を掛けて催す俳諧の會を夢想の會（むさうゑ）といふ事が起つてゐる。〔福井・志田〕

無益委記（むだゐき）　黃表紙　三册　十五丁十七圖　【作者】戀川春町【畫工】自畫【名稱】普通に「楠無益委記」と呼ばれる。「夫は楠木、これは嘘木」と角書があり、稱德太子御作の未來記と稱する物の語呂である。【刊行】安永八年刊【諸本】黃表紙百種（續帝國文庫）・黃表紙集（近代日本文學大系）・黃表紙傑作集（三星社編）・黃表紙名作集（關根默庵編）等には、所々省略された本文を收め、「大通世界」（幸堂得知編）卷三には挿繪を多少變更して十四圖出し、本文を添へてゐる。【題材】「太平記」卷第六「正成天王寺の未來記披見の事」に據り、また當時の世相を取入れて作を成した。

【梗概】〔上册〕楠多門兵衞賴政が宇治の正燈寺に籠つて世間の有樣を見、見德太子の書き置き給へる無益委記を開くと、その文には次の如き事が記されてゐると叙して、（1）人皇三萬三千三百三十三代に當り、初鰹が極月二十日頃から出て、價高きこと八百八十兩位であるのに、五百兩に値をつけたので返事もしない。この時に大通の羽織の丈は三尺八寸五六分となり、男の髮の刷毛先は釣竿の如くに長く、帶は据風呂の箍のやうになる。（2）色々の鼠色が流行し、（3）四つ手車が新たに出來て急ぐ時には油代をはずみ、細見の繪圖が高札になつて辻に立てられる。（4）六月に大寒が入り、〔中册〕（5）坊主が天下晴れて遊女買をする。（6）吉原の大門口に松を植ゑ、（7）盆と正月とが一緒に來て、三河からは齋萬歲（ときまんざい）と言ふ者が出て家々を廻る。（8）遊女が客を見立て、（9）流行の江戸節を低しとして神樂・催馬樂を語り、又諸事「萬葉集」の時代をしたふ。（10）遊藝を悉くかじり散して武藝が傾斜の巷に行はれ、（11）猫も杓子も藝者となる。〔下册〕（12）陰間のきり見世が出來る。（13）地震が空で搖り、雷が地の底で鳴る。（14）新惡原を開いて男郞を出し、（15）遊女は却つて

道を學ばざるの非を誡められたことを悟り、後、これを綴り、胡蝶物語九卷を編して筐底に藏した。本篇がその世に出たものである。【構想】理論にのみ走つて實行に乏しく、而もその理論は確かな據り所なく、ただ妄想を追ふ人物夢想兵衞を作り上げ、少年國・色欲國・强飲國・貪婪國、並に食言鄕・煩惱鄕・哀傷鄕の諸國遊歷に託し、夢想兵衞をして或は悟らしめ、或は歎ぜしめ、或は辯說を揮はしめ、その間超人間的人物を配して、彼の言行一致を諭さしめてゐる。又各卷末に總評をなして、非儒教的精神と儒教的精神との對立を讀者の前に展開し、最後の歡樂鄕に至り、國王の言に託してこれを嚴正批判する等、實に馬琴の側

德二年九月、宗祇が住吉明神の御夢想があつたので、「住吉の松こそ道のしるべなれ」以下の百韻を賦したのがその古いものであらう。併しこれは夢想に句を得たのではないらしいが、延德三年六月二十二日、後土御門院が夢想に、「うちとくる氷のひまの朝霞のどかなる宿」の發句・脇二句を得られ、後柏原院と兩吟の百韻を張行あらせられたのが、まさしく夢想の連歌である。天文十七年六月八日、後奈良天皇は廣明和尙と法語の問答をなされた夢を御覽になり、「なにはまで淸く凉しき夢路かな」の句を得させられ、これを稱名院右府（公條）に物語られ、右府の奏によつて、淨土の要文を冠字として右府と兩吟百韻を張

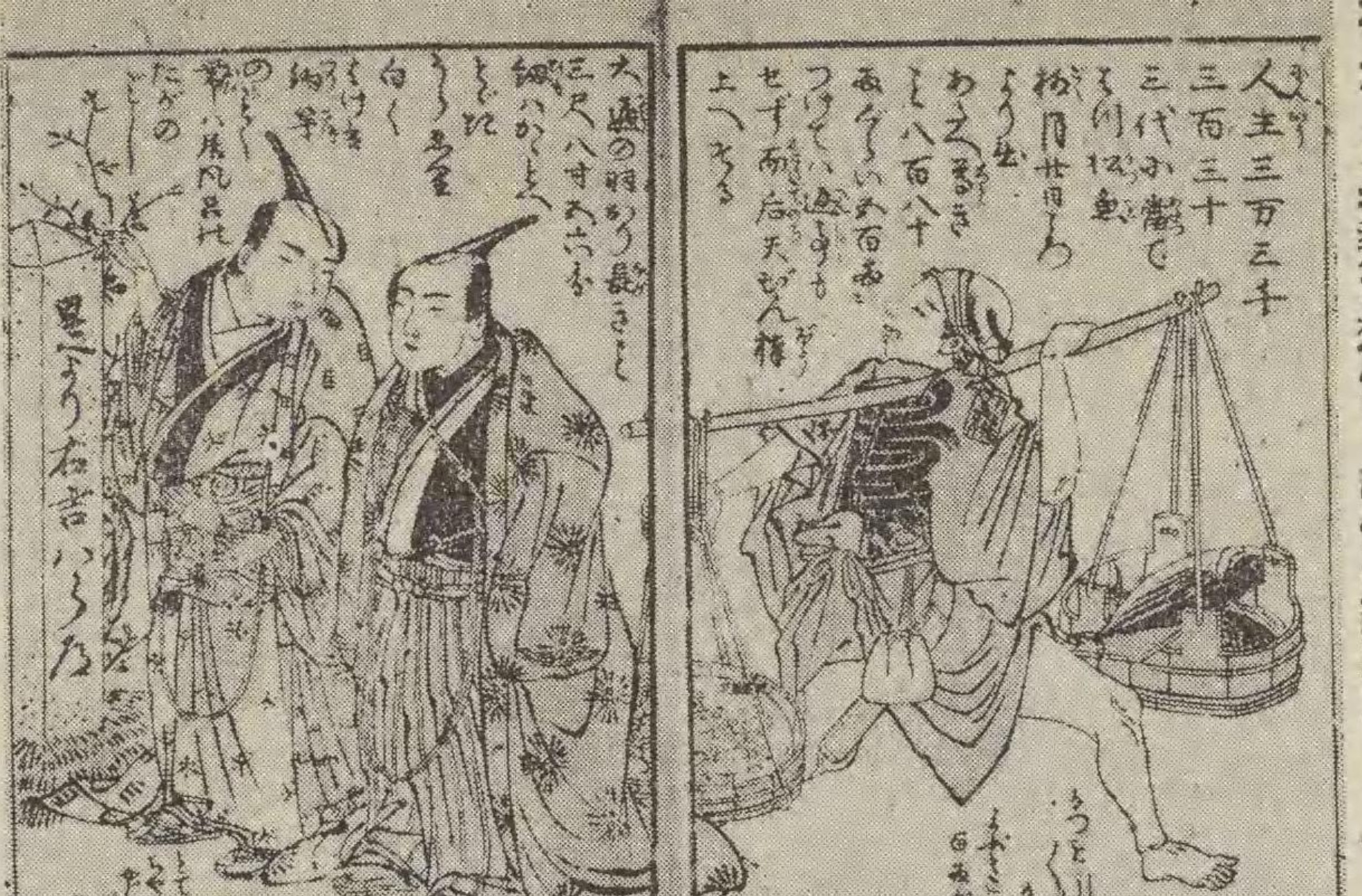
夢想開の連歌では夢想を與へられた神佛を意味するものとして用ひることが、遲くもこの頃から起つてゐることが知られる譯である。この後も夢想開の百韻が少からず見られ、特に慶長年間には頗る多く、その後も引續き見られることは云ふまでもない。然るに俳諧にはないではないが頗る稀れで、それも後には全く見られなくなつてゐる。ただ俳諧では、天滿宮の祭日の前夜（二十四日）、菅公の軸を掛けて催す俳諧の會を夢想（むさう）の會（ゑ）といふ事が起つてゐる。　　　　（福井・志田）

無益委記（むだゐき）

黃表紙　三册　十五丁十七圖　【作者】戀川春町　【畫工】自畫　【名稱】普通に「楠無益委記」と呼ばれる。「夫は楠木、

の鼠色が流行し、(3)四つ手車が新たに出來て急ぐ時には油代をはずみ、細見の繪圖が高札になつて辻に立てられる。(4)六月に大寒が入り、【中册】(5)坊主が天下晴れて遊女買をする。(6)吉原の大門口に松を植ゑ、(7)盆と正月とが一緒に來て、三河からは齋萬歲と言ふ者が出て家々を廻る。(8)遊女が客を見立て、(9)流行の江戸節を低しとして神樂・催馬樂を語り、又諸事「萬葉集」の時代をしたふ。(10)遊藝を悉くかじり散して武藝が傾斜の巷に行はれ、(11)猫も杓子も藝者となる。【下册】(12)陰間のきり見世が出來る。(13)地震が空で搖り、雷が地の底で鳴る。(14)新惡原を開いて男郎を出し、(15)遊女は却つて客にふられる。(16)親仁が道樂を盡し、若い者が却つて行儀正しく、臺の物は目錄となり、紙花は二季決算の通帳となる。(17)息子は夜あるきをせず、佛いぢりをなし、早起きで朝茶を飲むが、茶に醉はぬ用心と、見德太子謹んで申す。穴賢。

【解說】當時に於て、最も思ひ切つた空想であるが、かゝる突飛な想像も、時代の經過によつて相當に實現されて今日に及んでゐる。現代に於ても、3・5・9・10・15等の如きはかなりに當つてゐる。喜三二の「長生見度記」（別項）、爲輕の「從夫以來記」（別項）等は、全く本書の後塵を拜するもので、併せて三未來記と呼ばれる。本書は實にかゝる趣向の濫觴であつて、かゝる方面に黃表紙の世界を打開した功績は認むべきである。列擧する未來の事項は、三未來記中「無益委記」が最も多く、說明の書入れは最も尠い。その文は簡潔素朴で、かゝる點が却つて聯想を多からしむる效果があり、繪は又古拙大まかで愛玩すべきである。地震が空で搖つて雷が地の底で鳴る趣向は、式亭三馬がとつて「四十八癖」の初編（文化八年刊）中に「つまらぬ事を苦にする人の癖」としてゐるらしい。本書は非常に歡迎された。黃表紙名作二十三部の內に入つてゐる。　　　　（小池）


人生三万三千
三百三十
三代…
黒より右吉…

無　益　委　記　（帝國圖書館藏）

無駄辛酸甘（むだしんさんかん）

洒落本　一册　【作者】千差萬別　【畫工】白壁　【名稱】辛酸甘は苦鹹と合して五味で、當時醫家の術語、「役者酸辛甘」（安永四年）に眞似て、無駄と冠した。【刊行】天明五年　【諸本】德川文藝類聚第五所收　【題材】當時有名であつた文人・俳優・遊女等の消息を記し、所謂消息通を誇つた作である。例へば四代松本幸四郎が五代市川團十郎と不和となり、天明四年下阪して中村粂太郎座に出た。その上阪を十八大通の大口屋文魚が留めた事、京傳の妹黑鳶式部の噂、天明の飢饉で狂歌が一時衰微した事、二世加保茶元成（大文字樓主）の噂等である。

【梗概】年三十四五、突込み本田髷に縮緬の袷、黑繻子の幅廣帶、黑紗綾の袷羽織と云ふ通人秀我、田舍侍の錦洲に出逢つて舟に乘る。折柄づぶ六先生加保茶元成の許へ狂歌の會に行かうとするを見つけて同じく舟に乘せ、三人大川へ出る。錦洲は近頃人心が輕薄で、古い物は輕視され新しい物が愛せられると歎ずる。秀我續いて大川の兩岸の建物を眺めて通を竝べ、轉じて北廓の噂になり、遊女の藝を披露に及ぶ。濃紫が墨繪、夕ばへが琴、瀧川が占卜、誰袖が狂歌、半太夫の火いぢり、更に今度は役者の隱藝、女の美しいは誰、男のきれいなのは誰、食べ物屋の噂、彼の通は盡きる所なく、滔々とまくしたてる折柄、舟はいつか山谷堀に着く。

【構想】本格の洒落本の前半だけ切つたやうな作品である。作者の興味の中心は或は田舍武士の不平にあつたのではないかと推定されるが、併し作の大半は所謂通をひけらかす事で充たされてゐるから、それを不平を蔽ふ保護色としたのであらうと考へられる。それ等に依つて作者千差萬別が武士階級で、飽くまで文壇に本名を現はさなかつた理由がわかるやうな氣がする。　　　　（山崎）

無彈砂子（むだすなご）

滑稽本　一册　【作者】多羅福左衞門と署名がある。【名稱】享保十七年刊菊岡沾凉の著「江戸砂子」をもぢつたもの。【刊行】天明六年　【諸本】滑稽本集（日本名著全集）所收。【解說】地誌の形式に擬し、名所舊跡に當てて、人事の百般を滑稽化したものである。その目錄に從へば、正月の里、稻荷の山、雛村が崎、松魚が浦、かぶと塚、祭澤木、眞菰が崎、燈籠村、月見が崎、菊見村、惠比須が浦、角力川、棧敷が嶽、師走川、橋村、地獄谷、羽織が嶽、毛古路橋、鳥の町、奧山村、洒醉た市、會闘、德平村、おぢいが雨、狂歌山、盤鐘、誹諧村、兼房櫻、しやれ村、赤藏山、ひつぺ河岸、藪入村、日町の里等がある。そして例へば、藪入村の項の說明を見れば、

○菅楠棧留など名物京藏に際をとり、上野淸墓を見ずのみ百姓多し。○芝居へはひり、小遣錢きがしてもなし。役者の名をこへは山下曹切。○南の方にみやげ村あり。庄屋煎餅。○茶婆坂のつゞきに、只今かへりまし田あり。その次に、けふほどこへいつ田あり。穂にあらはれ顏は赤米のよし。○小錢で五百羅漢は、さんだ邪魔になりひら橋見ゆる。（下略）

人生の行路を道中に見たてて、それに附會した繪圖を描くことは、既にこの作者以前にあつた。古くは寶曆六年に、「人間一生善惡道中獨案內」や「新板繪入迷處邪正案內」などがあり、天明二年には、萬象亭の「當世導通記」（別項）がある。洒落本の「娼妃地理記」は、吉原を國郡に宛てて穿ちを書いてゐる。卽ち本書の生れるまでに、この趣向は幾度か繰返されてゐる。本書の作者は、この轍を踏んだものである。　　　　（小柴）

陸奥鵆（むつちどり）

俳諧集　五卷五册　【編者】天野桃隣　【名義】自序に「其形の跡をふんでむつちどりと名付るものならし」と云つてゐるやうに、芭蕉の行脚の跡を踏む意味で名づけたものである事が知られるが、語としては、集中に六玉川の歌を擧げて「右六首つかねて」と云つて、「むつ千鳥むさし調布近江萩山やまぶきにきどく津は卯の花」と詠んでゐる歌の語を用ひたのであらう。【成立】元祿九年　【刊行】元祿十年　【諸本】俳諧名著文庫・蕉門俳諧後集（俳書大系）に所收。俳諧紀行全集（俳諧文庫）には卷五だけを前文を省いて載せてゐる。【內容】元祿九年芭蕉の三回忌に當り、師恩を感じて芭蕉の「奧の細道」の跡を踏むべく、奧羽行脚をなした旅行記を本として、これに他の諸種のものを併せて一集